—茨城県土浦市—

八幡脇遺跡

—田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第8集

2009

田村・沖宿土地区画整理組合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

—茨城県土浦市—

八幡脇遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第8集

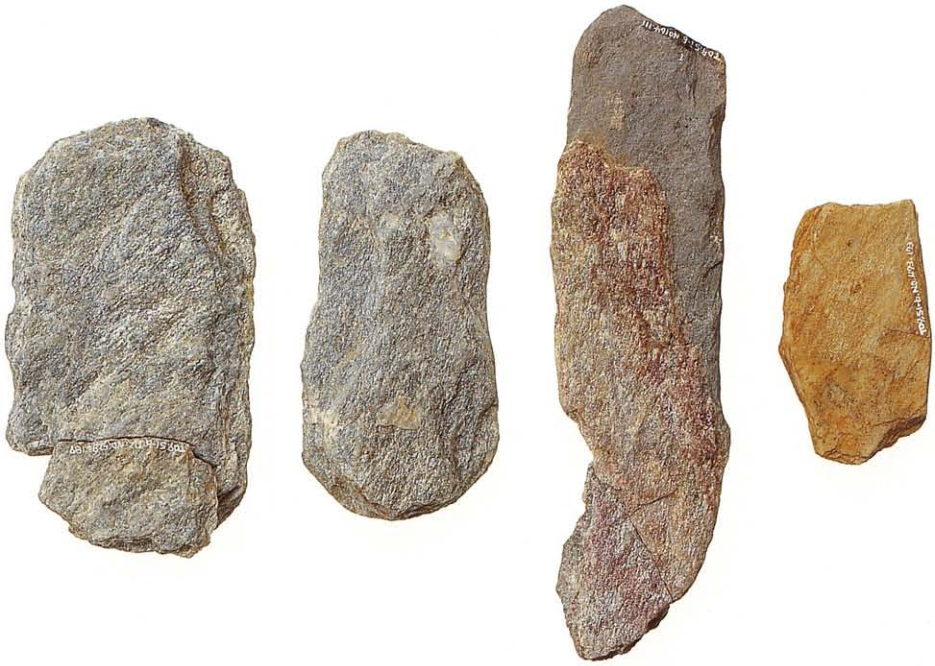
2009

田村・沖宿土地区画整理組合
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

第６号住居跡（玉作工房跡）

第６号住居跡出土玉作関連遺物（勾玉未製品）

第８号住居跡出土玉作関連遺物（管玉未製品等）



第６号住居跡出土玉作関連遺物（砥石）

第１号住居跡鍛冶炉

第７号火葬墓出土遺物

例　　言

1　本書は、土浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市沖宿町に所在する八幡脇遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は沖宿町字八幡脇2696外である。

2　調査は田村・沖宿土地区画整理組合の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。

3　本遺跡の調査期間は1991（平成３）年10月21日～1992（平成４）年２月12日で、調査面積は約8,700㎡である。

4　発掘調査は関口　満が担当し、調査員として吉澤　悟、駒沢悦郎、調査補助員として星野保則、香取　渉、松下謙一があたった。

5　本書の編集は関口が担当した。

6　本書第３章の執筆は、縄文時代の遺構・土器を吉田　匠・福田礼子、古墳時代の遺構・遺物を関口、火葬墓を吉澤、第１章・第２章及び全体の補訂を関口が行なった。そして、第４章については、「２古墳時代」の「B玉作工房跡と出土遺物」を塩谷　修（土浦市立博物館学芸員）が担当し、その他は関口が執筆した。

7　整理の分担は下記のとおりで、全体の統括を関口が行った。
実側　雨宮瑞生（石器･石製品）、吉田（縄文時代の遺構と土器）、吉澤（火葬墓）、黒澤春彦･小松葉子（古墳･平安時代の遺構と遺物）。遺構図版作成　小松　遺物図版作成　雨宮（石器･石製品）、関口（縄文土器）、黒澤・小松（古墳時代の遺物）、吉澤（火葬墓）。写真　現地調査写真を関口、遺物写真については古墳・平安時代の土器を黒澤、縄文時代の遺物及び玉作関連遺物などを嶋田圭吾氏に御協力頂いた。

8　玉作工房跡の調査方法や玉作関連遺物の取り扱い、玉作工程などについては寺村光晴氏（当時和洋女子大学文学部教授）にご指導・ご教示頂いた。

9　鍛冶工房跡の調査方法や鍛冶関連遺物の取り扱い、科学分析方法については穴澤義功氏（当時たたら研究会委員）にご指導・ご教示頂いた。

10　上記のほか、本調査報告書の作成には下記の方々よりご協力・ご助言を賜りました。記して感謝の意を表したい。茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　田村沖宿土地区画整理組合　（株）川鉄商事　（株）清水建設　沼津工業高等専門学校　赤熊浩一　浅田員由　穴澤義功　飯塚守人　稲田健一　上野真由美　大久保隆史　岡田勇介　大澤正巳　小川和博　瓦吹　堅　窪田恵一　駒見和夫　木﨑　悠　木下　亘　酒井広子　佐々木義則　嶋田圭吾　鈴木素行　寺村光晴　仲野泰裕　仲山英樹　楢崎彰一　長谷川福次　服部文孝　平井昭司　松本貴子　茂木雅博　望月明彦　本橋弘美　森本岩太郎　矢野徳也

11　本遺跡の出土資料や図面などの記録資料は土浦市教育委員会が保管する。本遺跡出土遺物には遺跡の略称としてＴＯ９を記してある。

12　本遺跡の遺構・遺物に関わり以下の科学分析を実施している。火葬墓内人骨の鑑定、鍛冶関連遺物の金属学的分析及び放射化分析、黒曜石の蛍光Ｘ線分析。

13　本遺跡の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や考察、科学分析は第11集の総集編に掲載予定である。

凡　　例

1　八幡脇遺跡の遺構番号は報告書刊行にあたっても基本的に現地調査時に付けたものを踏襲している。一部整理作業の過程で遺構名称を変更したものもある。

2　遺跡内の遺構の表記は次のものを用いた。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＫ…土坑　ＳＸ…竪穴遺構　ＳＤ…溝跡　ＳＳ…集石

ＳＦ…焼土址　ＭＹ…土器埋設遺構　ＣＴ…火葬墓　Ｐ…ピット

3　土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を用いた。

4　各遺構の実測図は原図（20分の１）を使用し、縮尺３分の１を基本としたが、大きさによって２分の１、４分の１を用いた。

5　遺構実測図中の標高はすべてｍ単位で示している。

6　遺構実測図（土層）中の表記は次のものを用いた。

Ｋ…撹乱　ＬＢ…ロームブロック　ＨＬ…ハードローム

7　遺構実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また、接合関係にある遺物は、各々実線で結んだ。

8　遺構実測図中の破線は推定線を示す。又、遺構図中床面の一点鎖線は硬化面を示す。

9　遺構及び遺物実測図中の網掛けの指示は下記のとおりである。

遺構：焼土

遺物：繊維を含む土器　土師器の赤色塗彩　黒色処理

須恵器　炭化物・煤の付着　灰釉陶磁器の釉薬

砥石の砥面

10　遺物実測図の縮尺は３分の１を基本としたが、材質や遺物の大きさなどにより縮尺を変えたものがあり、それらについてはスケールを変えてある。

11　遺物実測図中心線の一点鎖線は回転（復元）実測を示す。

12　土器観察表について、図版番号は実測図中の番号である。表中のＡは口径、Ｂは器高、Ｃは底径を示す。（　）の数値は現存値であり、［　］は回転復元径である。胎土中の半透明・透明の鉱物は石英、不透明・白色の鉱物を長石とした。焼成は良好・普通・不良の３段階に分けた。

13　色調は原則として外面、内面の順で記してある。

14　土器観察表中の備考の№は実測台帳の通し№である。

調 査 者 名 簿

試掘調査	石川　功	土浦市教育委員会社会教育課
	中澤達也	土浦市教育委員会社会教育課
調査主任	関口　満	土浦市教育委員会社会教育課
調査員	黒澤春彦	土浦市教育委員会社会教育課
	井上敏昭	土浦市教育委員会臨時職員
	小松葉子	
	福田礼子	土浦市教育委員会臨時職員
	雨宮瑞生	筑波大学大学院
	吉澤　悟	筑波大学大学院
	駒沢悦郎	東洋大学大学院
	吉田　匠	国学院大学大学院
調査補助員	星野保則	専修大学
	香取　渉	東洋大学
	松下謙一	東洋大学
事務担当	秋元照子（～H5.3.31）中村博子（H5.4.1～）	
事務局	土浦市教育委員会社会教育課（H5.4.1から文化課）	

発掘調査参加者（10日以上）

浅川和代　安達浩二　伊勢山こう　岩瀬いま　岩本よし子　大久保さだ江　大槻陽子
大竹きみ子　岡村美樹　小倉はる　貝塚雪枝　加藤博司　川島敏子　川又茂子　倉田俊夫
郡司征子　坂本たえ　坂本みつい　桜井久代　清水せつ子　清水たまの　鈴木きみ　鈴木秀雄
鈴木みね　土肥すえ　細野重雄　野口八重子　安田トミエ　山口仁一　横浜長一郎

整理作業参加者（10日以上）

青木光恵　阿部秀子　天谷瑛子　石浜敏子　石山春美　五十嵐耀子　遠藤成江　大坪美知子
大野美津子　川田光子　小松崎廣子　佐久間郁子　椎名まさ子　島津恵美子　須貝和子
田辺利子　富田シズエ　長嶺道子　中村節子　浜田久美子　松川綾野　松川さち子
村井律子

土浦市遺跡調査会組織（平成５年度まで）

会　長	永山　正	土浦市文化財保護審議会長
	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長
理　事	茂木雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚　博	土浦市文化財保護審議会委員
	雨貝　宏	土浦市建築指導課長
	横田紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	土浦市耕地課長
	野口幹雄	土浦市区画整理課長
	小川和博	日本考古学研究所
監　事	藤枝　正	土浦市教育委員会教育次長
	二野屏昌男	土浦市教育委員会教育次長
	鶴町喜美雄	土浦市教育委員会教育次長
	滝ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田宣治	土浦市企画課長
幹事長	田中紀夫	土浦市教育委員会教社会教育課長
	福田統太	土浦市教育委員会教社会教育課長
	竹本喜一郎	土浦市教育委員会教社会教育課長
	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　事	久松一夫	土浦市教育委員会教社会教育課副参事
	岩沢　茂	土浦市教育委員会教社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課主査
	石山淳一	土浦市教育委員会教社会教育課担当係長
	飯村　甚	土浦市教育委員会教社会教育課主幹
	石川　功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口　満	土浦市教育委員会文化課主事
	塩谷　修	土浦市立博物館学芸員

目　　次

口絵１　第６号住居跡（玉作工房跡）
第６号住居跡出土玉作関連遺物
（勾玉未製品）
口絵２　第８号住居跡出土玉作関連遺物
（管玉未製品等）
第６号住居跡出土玉作関連遺物（砥石）
口絵３　第１号住居跡鍛冶炉
第７号火葬墓出土遺物
例言
凡例
調査者名簿
土浦市遺跡調査会組織
目次
第１章　経過…… 1
第２章　調査…… 4
第１節　地区設定…… 4
第２節　基本層序…… 4
第３節　遺構確認…… 4
１．試掘調査及び表土除去…… 4
２．遺構調査…… 4
第３章　遺構と遺物…… 9
第１節　縄文時代…… 9
１．竪穴住居跡（SI）…… 9
２．竪穴遺構（SX）…… 60
３．土坑（SK）…… 64
４．土器埋設遺構（MY）…… 78
５．集石（SS）…… 81
６．焼土址（FP）…… 82
７．遺構外出土遺物…… 84
第２節　古墳時代…… 99
１．竪穴住居跡（SI）…… 99
２．竪穴遺構（SX）…… 188
第３節　平安時代…… 189
１．竪穴住居跡（SI）…… 189
２．火葬墓（CT）…… 195
３．溝跡（SD）…… 210
第４節　古墳時代以降の遺構外出土遺物 … 212
第４章　総括…… 213
写真図版
抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……　2
第２図　遺跡周辺地形図……　3
第３図　遺構配置図……　5
第４図　調査エリア図……　6
第５図　第７号住居跡……　10
第６図　第７号住居跡遺物出土状況……　12
第７図　第７号住居跡出土遺物（１）……　13
第８図　第７号住居跡出土遺物（２）……　14
第９図　第７号住居跡出土遺物（３）……　15
第10図　第７号住居跡出土遺物（４）……　16
第11図　第７号住居跡出土遺物（５）……　17
第12図　第７号住居跡出土遺物（６）……　18
第13図　第７号住居跡出土遺物（７）……　19
第14図　第９号住居跡……　23
第15図　第９号住居跡遺物出土状況……　24
第16図　第９号住居跡出土遺物（１）……　25
第17図　第９号住居跡出土遺物（２）……　26
第18図　第９号住居跡出土遺物（３）……　27
第19図　第９号住居跡出土遺物（４）……　28
第20図　第９号住居跡出土遺物（５）……　29
第21図　第12号住居跡……　32
第22図　第12号住居跡出土遺物（１）……　34
第23図　第12号住居跡出土遺物（２）……　35
第24図　第12号住居跡出土遺物（３）……　36
第25図　第13号住居跡炉……　38
第26図　第13号住居跡……　39
第27図　第13号住居跡出土遺物（１）……　41
第28図　第13号住居跡出土遺物（２）……　42
第29図　第15号住居跡・炉……　44
第30図　第15号住居跡遺物出土状況……　45
第31図　第15号住居跡出土遺物……　46
第32図　第16号住居跡……　47
第33図　第16号住居跡遺物出土状況……　50
第34図　第16号住居跡出土遺物（１）……　52
第35図　第16号住居跡出土遺物（２）……　53
第36図　第16号住居跡出土遺物（３）……　54
第37図　第16号住居跡出土遺物（４）……　55
第38図　第16号住居跡出土遺物（５）……　56
第39図　第16号住居跡出土遺物（６）……　57
第40図　第16号住居跡出土遺物（７）……　58
第41図　第１号竪穴遺構遺物出土状況……　60
第42図　第１号竪穴遺構出土遺物（１）……　62
第43図　第１号竪穴遺構出土遺物（２）……　63
第44図　第１号竪穴遺構出土遺物（３）……　64
第45図　第１・２・６・８～11・13・14・19～22・24・30号土坑 ……　65
第46図　第25～28・45・47号土坑 ……　66
第47図　第31・32・34号土坑……　67
第48図　第33・35・36号土坑……　68
第49図　第16・40～44号土坑 ……　69
第50図　第16号土坑出土遺物（１）……　71
第51図　第16（２）・33・44号土坑出土遺物……　72
第52図　第37・48～51号土坑 ……　74
第53図　第50号土坑出土遺物（１）……　75
第54図　第50号土坑出土遺物（２）……　76
第55図　第51号土坑出土遺物……　77
第56図　第２～４号土器埋設遺構……　79
第57図　第２～４号土器埋設遺構出土遺物……　80
第58図　第１・２号集石・遺物出土状況……　81
第59図　第１～４・６号焼土址・出土遺物……　83
第60図　遺構外出土遺物（１）……　85
第61図　遺構外出土遺物（２）……　86
第62図　遺構外出土遺物（３）……　88
第63図　遺構外出土遺物（４）……　89
第64図　遺構外出土遺物（５）……　91
第65図　遺構外出土遺物（６）……　92
第66図　遺構外出土遺物（７）……　94
第67図　遺構外出土遺物（８）……　95
第68図　第１号住居跡・鍛冶炉・掘り方……　100
第69図　第１号住居跡遺物出土状況（１）……　101
第70図　第１号住居跡遺物出土状況（２）……　102
第71図　第１号住居跡出土遺物（１）……　104
第72図　第１号住居跡出土遺物（２）……　105
第73図　第１号住居跡出土遺物（３）……　106
第74図　第２号住居跡・遺物出土状況……　108
第75図　第２号住居跡出土遺物……　109
第76図　第３号住居跡……　112
第77図　第３号住居跡遺物出土状況・炉・貯蔵穴…　113
第78図　第３号住居跡出土遺物……　114
第79図　第４号住居跡……　116
第80図　第４号住居跡・炉・貯蔵穴……　117
第81図　第４号住居跡炭化材等出土状況……　117
第82図　第４号住居跡遺物出土状況（１）……　118
第83図　第４号住居跡遺物出土状況（２）……　118
第84図　第４号住居跡遺物出土状況（３）……　119
第85図　第４号住居跡出土遺物（１）……　120
第86図　第４号住居跡出土遺物（２）……　121
第87図　第４号住居跡出土遺物（３）……　122
第88図　第４号住居跡出土遺物（４）……　123
第89図　第４号住居跡出土遺物（５）……　124
第90図　第４号住居跡ほか接合資料……　125
第91図　第５号住居跡・掘り方……　127
第92図　第５号住居跡遺物出土状況……　128
第93図　第５号住居跡出土遺物（１）……　129

第94図　第５号住居跡出土遺物（２）…… 130
第95図　第６号住居跡…… 133
第96図　第６号住居跡柱穴等土層…… 135
第97図　第６号住居跡遺物出土状況（１）…… 137
第98図　第６号住居跡遺物出土状況（２）…… 139
第99図　第６号住居跡遺物出土状況（３）…… 140
第100図　第６号住居跡遺物出土状況（４）…… 141
第101図　第６号住居跡遺物出土状況（５）…… 142
第102図　第６号住居跡遺物出土状況（６）…… 143
第103図　第６号住居跡遺物出土状況（７）…… 144
第104図　第６号住居跡遺物出土状況（８）…… 145
第105図　第６号住居跡遺物出土状況（９）…… 146
第106図　第６号住居跡出土遺物（１）…… 148
第107図　第６号住居跡出土遺物（２）…… 149
第108図　第６号住居跡出土遺物（３）…… 150
第109図　第６号住居跡出土遺物（４）…… 151
第110図　第６号住居跡出土遺物（５）…… 152
第111図　第６号住居跡出土遺物（６）…… 155
第112図　第６号住居跡出土遺物（７）…… 156
第113図　第６号住居跡出土遺物（８）…… 157
第114図　第６号住居跡出土遺物（９）…… 158
第115図　第６号住居跡出土遺物(10)…… 159
第116図　第６号住居跡出土遺物(11)…… 160
第117図　第６号住居跡出土遺物(12)…… 161
第118図　第８号住居跡…… 164
第119図　第８号住居跡炭化材出土状況…… 165
第120図　第８号住居跡遺物出土状況(1)・貯蔵穴… 166
第121図　第８号住居跡遺物出土状況（２）…… 167
第122図　第８号住居跡出土遺物（１）…… 168
第123図　第８号住居跡出土遺物（２）…… 169
第124図　第８号住居跡出土遺物（３）…… 170
第125図　第８号住居跡出土遺物（４）…… 171
第126図　第８号住居跡出土遺物（５）…… 174
第127図　第８号住居跡出土遺物（６）…… 175
第128図　第８号住居跡出土遺物（７）…… 176
第129図　第８号住居跡出土遺物（８）…… 177
第130図　第８号住居跡出土遺物（９）…… 178
第131図　第８号住居跡出土遺物(10)…… 179
第132図　第８号住居跡出土遺物(11)…… 180
第133図　第８号住居跡出土遺物(12)…… 181
第134図　第８号住居跡出土遺物(13)…… 182
第135図　第17号住居跡・出土遺物…… 184
第136図　第18号住居跡・遺物出土状況…… 186
第137図　第18号住居跡出土遺物…… 187
第138図　第２号竪穴遺構…… 188
第139図　第19号住居跡・遺物出土状況…… 190
第140図　第19号住居跡カマド・遺物出土状況… 191
第141図　第19号住居跡出土遺物（１）…… 192
第142図　第19号住居跡出土遺物（２）…… 193
第143図　第１号火葬墓…… 195
第144図　第１号火葬墓出土遺物…… 196
第145図　第２号火葬墓…… 197
第146図　第２号火葬墓出土遺物…… 198
第147図　第３号火葬墓…… 199
第148図　第３号火葬墓出土遺物…… 200
第149図　第４号火葬墓…… 201
第150図　第４号火葬墓出土遺物…… 202
第151図　第５号火葬墓・出土遺物…… 203
第152図　第６号火葬墓出土遺物…… 204
第153図　第７号火葬墓…… 205
第154図　第７号火葬墓出土遺物（１）…… 207
第155図　第７号火葬墓出土遺物（２）…… 208
第156図　調査区外火葬墓出土遺物…… 209
第157図　第１号溝跡・出土遺物…… 211
第158図　古墳時代以降の遺構外出土遺物…… 212

写　真　図　版

口絵１　第６号住居跡（玉作工房跡）、第６号住居跡出土玉作関連遺物（勾玉未製品）
口絵２　第８号住居跡出土玉作関連遺物（管玉未製品）、第６号住居跡出土玉作関連遺物（砥石）
口絵３　第1号住居跡鍛冶炉、第7号火葬墓出土遺物
ＰＬ１　八幡脇遺跡航空写真（１）
ＰＬ２　八幡脇遺跡航空写真（２）
ＰＬ３　試掘調査状況（８Ｔｒ）・試掘調査状況（33Ｔｒ）
ＰＬ４　第７号住居跡、第７号住居跡遺物出土状況
ＰＬ５　第９号住居跡、第９号住居跡遺物出土状況
ＰＬ６　第12号住居跡、第13号住居跡
ＰＬ７　第15号住居跡、第15号住居跡遺物出土状況
ＰＬ８　第16号住居跡、第16号住居跡炉１、第16号住居跡炉２
ＰＬ９　第16号住居跡遺物出土状況、第１号竪穴遺構遺物出土状況
ＰＬ10　第28号土坑、第31号土坑、第32号土坑
ＰＬ11　第33号土坑、第33号土坑土層、第36号土坑
ＰＬ12　第16号土坑、第16号土坑遺物出土状況、第40号土坑
ＰＬ13　第44号土坑遺物出土状況、第50号土坑、第50号土坑遺物出土状況
ＰＬ14　第51号土坑遺物出土状況、第２号土器埋設遺構、第３号土器埋設遺構
ＰＬ15　第４号土器埋設遺構、第１号集石、第１号焼土址
ＰＬ16　第１号住居跡、第１号住居跡床下溝等完掘状況
ＰＬ17　第１号住居跡鍛冶炉、第１号住居跡遺物出土状況

ＰＬ18　第２号住居跡、第２号住居跡遺物出土状況
ＰＬ19　第３号住居跡、第３号住居跡遺物出土状況
ＰＬ20　第４号住居跡、第４号住居跡遺物出土状況
ＰＬ21　第４号住居跡貯蔵穴遺物出土状況、第４号住居跡遺物出土状況、第４号住居跡炉２上遺物出土状況
ＰＬ22　第５号住居跡、第５号住居跡遺物出土状況
ＰＬ23　第６号住居跡、第６号住居跡遺物出土状況
ＰＬ24　第６号住居跡貯蔵穴、第６号住居跡炉、第６号住居跡入口ピット
ＰＬ25　第６号住居跡玉作関連遺物出土状況（１）、第６号住居跡玉作関連遺物出土状況（２）、第６号住居跡床面土層サンプリング状況
ＰＬ26　第８号住居跡、第８号住居跡炭化材出土状況
ＰＬ27　第８号住居跡貯蔵穴、第８号住居跡遺物出土状況（１）、第８号住居跡炭化材出土状況
ＰＬ28　第８号住居跡遺物出土状況（２）、第８号住居跡遺物出土状況（３）、第８号住居跡玉作関連遺物出土状況
ＰＬ29　第18号住居跡、第２号竪穴遺構
ＰＬ30　第19号住居跡、第19号住居跡カマド内遺物出土状況
ＰＬ31　第１号火葬墓（１）、第１号火葬墓（２）、第２号火葬墓
ＰＬ32　第３号火葬墓、第４号火葬墓（１）、第４号火葬墓（２）
ＰＬ33　第５号火葬墓（１）、第５号火葬墓（２）、調査区外火葬墓
ＰＬ34　第７号火葬墓（１）、第７号火葬墓（２）
ＰＬ35　第７号火葬墓（３）、第７号火葬墓（４）、第７号火葬墓（５）
ＰＬ36　第１号溝跡、作業風景（１）、作業風景（２）
ＰＬ37　第７号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ38　第７号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ39　第７号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ40　第７号住居跡出土遺物（４）
ＰＬ41　第９号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ42　第９号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ43　第９号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ44　第12号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ45　第12号住居跡出土遺物（２）、第13号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ46　第13号住居跡出土遺物（２）、第15号住居跡出土遺物
ＰＬ47　第16号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ48　第16号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ49　第16号住居跡出土遺物（３）、第１号竪穴遺構出土遺物（１）
ＰＬ50　第１号竪穴遺構出土遺物（２）、第16号土坑出土遺物、第16・51号土坑出土遺物、第16号土坑出土遺物、第44号土坑出土遺物
ＰＬ51　第50号土坑出土遺物
ＰＬ52　第７号住居跡出土遺物、第９号住居跡出土遺物、第12・13号住居跡出土遺物
ＰＬ53　第15・16住居跡出土遺物、第１号竪穴遺構・第16・33・44・51号土坑、第３・６号焼土址出土遺物、第13・16号住居跡出土遺物
ＰＬ54　第７号住居跡・遺構外出土遺物、第12・13・16号住居跡・遺構外出土遺物、遺構外出土遺物
ＰＬ55　第１号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ56　第１号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ57　第２号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ58　第２号住居跡出土遺物（２）、第３号住居跡出土遺物
ＰＬ59　第４号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ60　第４号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ61　第４号住居跡出土遺物（３）、第４・８号住居跡接合資料、第４・６号住居跡接合資料
ＰＬ62　第５号住居跡出土遺物、第６号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ63　第６号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ64　第６号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ65　第６号住居跡出土遺物（４）
ＰＬ66　第６号住居跡出土遺物（５）
ＰＬ67　第６号住居跡出土遺物（６）
ＰＬ68　第６号住居跡出土遺物（７）
ＰＬ69　第６号住居跡出土遺物（８）
ＰＬ70　第６号住居跡出土遺物（９）、第８号住居跡出土遺物（１）
ＰＬ71　第８号住居跡出土遺物（２）
ＰＬ72　第８号住居跡出土遺物（３）
ＰＬ73　第８号住居跡出土遺物（４）
ＰＬ74　第８号住居跡出土遺物（５）
ＰＬ75　第８号住居跡出土遺物（６）、第17号住居跡出土遺物、第18号住居跡出土遺物
ＰＬ76　第19号住居跡出土遺物
ＰＬ77　第１号火葬墓出土遺物、第２号火葬墓出土遺物、第３号火葬墓出土遺物、第４号火葬墓出土遺物
ＰＬ78　第５号火葬墓出土遺物、第６号火葬墓出土遺物、第７号火葬墓出土遺物、調査区外火葬墓出土遺物、第１号溝跡出土遺物

表　目次

表１　竪穴住居跡・竪穴遺構等一覧……　96
表２　土坑一覧……　96
表３　焼土址一覧……　97
表４　土器埋設遺構一覧……　98

第1章　経過

1988（昭和63）年

12月から1989（平成元）年４月にかけ本事業に関わる試掘確認調査を実施。八幡脇遺跡部分については1988（昭和63）年12月１日と1989（平成元）年４月14日に調査を行なった。前者は台地基部から先端に向け第８トレンチを設定し調査を行ない、後者は台地基部に北東－南西方向で第33トレンチを設定した。調査の結果、前者では溝状遺構や土坑、そしてピット群が確認された。後者では焼土址が確認された。

1991（平成３）年

10月21日　テントの設営、プレハブの移動を行ない、調査を開始する。切り株の土を排除する。

10月24～31日　方眼測量・水準測量を実施し、基準杭と標高杭の設置。駐車場の砂利敷き。

10月24～11月11日　調査区内の遺構確認を行なう。台地東側に縄文土器の散布が多い。

11月10日　平安時代の火葬墓の調査にあたりお祓いを行なう。

11月12日　遺構調査は土坑・火葬墓・溝・不明遺構から開始する。

11月20日　不明遺構は灰釉陶器壺を用いた火葬墓（第７号火葬墓）であった。第２～４号住居跡調査開始。

12月６日　第１号住居跡で鍛冶関連遺物が出土、第4号住居跡で玉作関連遺物が出土。

12月９日　穴沢義功氏が来訪し、第１号住居跡で確認された鍛冶関連遺物・遺構の調査方法について指導を受ける。

12月10日　第１号住居跡床面に方眼を組んで、鍛冶関連遺物の検出のため土層採集を行なう。

12月11日　第４号住居跡が玉作工房跡であるかの判断をするために数地点の覆土採集・水洗い選別を行う。第６号住居跡の覆土中からもメノウの玉作関連遺物出土。

12月12～17日　第６号住居跡が玉作工房跡であるかの判断をするために覆土採集・水洗い選別を行う。玉作に関わるメノウや片岩の微細な剥片が採集された。

1992（平成４）年

１月６日　第６号住居跡床面に方眼を組んで床近くの土を採集し、玉作関連遺物の検出とその出土状況の検討のために備える。

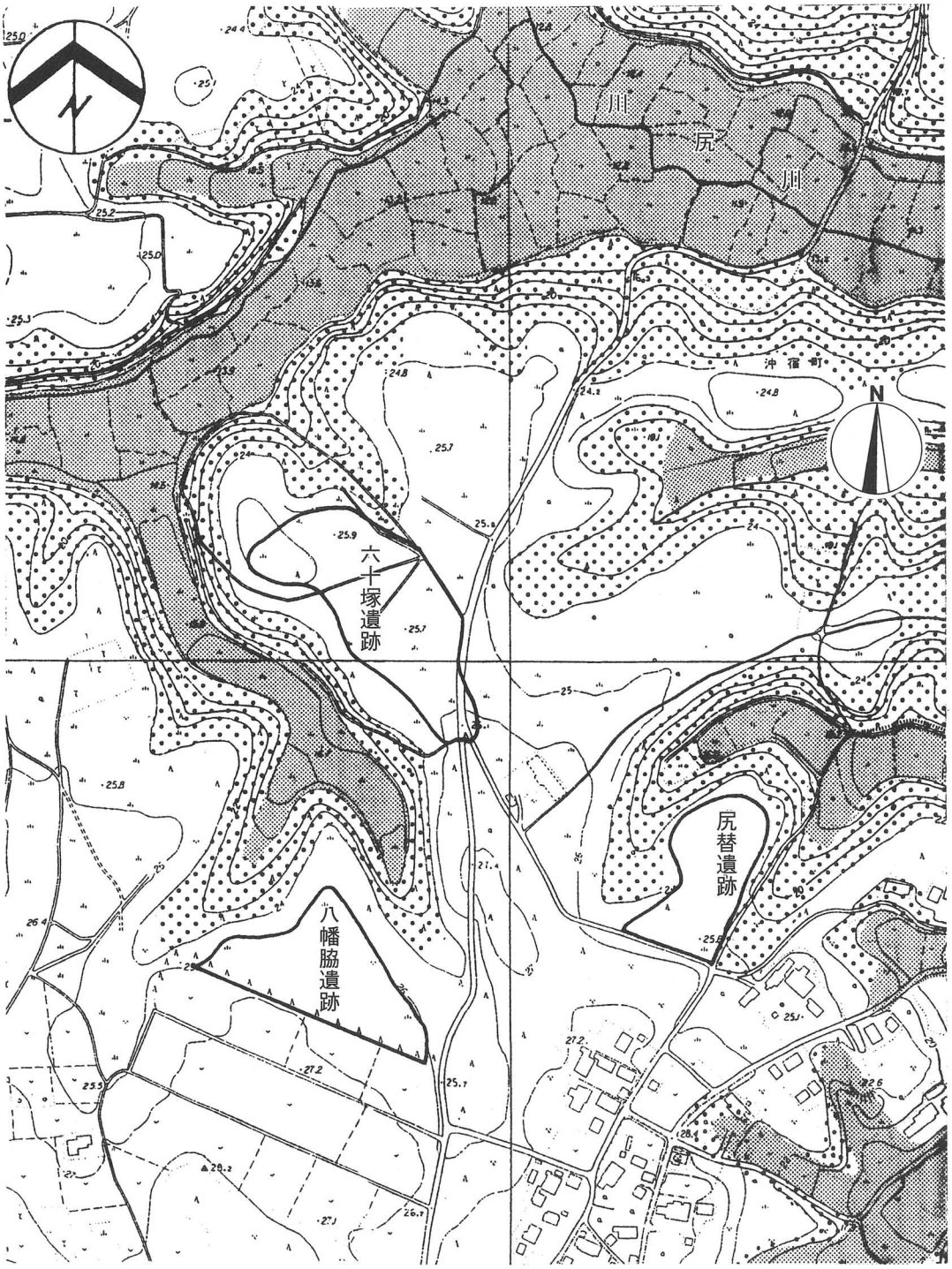
１月13日　和洋女子大学寺村光晴教授が来訪し玉作関連遺構・遺物調査の指導を受ける。

１月14日　鍛冶関連遺構及び玉作関連遺構床面土層の水洗い選別開始。

１月23日　航空写真撮影

２月12日　調査終了

第１図　遺跡位置図（国土地理院発行 1/50,000 に加筆）



第２図　遺跡周辺地形図（1/5,000）

第２章　調 査

第１節　地区設定

発掘調査では日本平面直角座標を用い調査地区を設定した。基準杭は調査開始時に20m間隔で設定し、この大グリッドを４m間隔の小グリッドに分割して用いた。先の大グリッドについては特に名称を付してはいない。小グリッドの名称はアルファベットと算用数字を用い、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・・・、北から南へ１・２・３・・・とし、各方眼の北西角を「Ａ－１区」のように呼称した。そして、調査区内の「Ｚ－10区」は日本平面直角座標第Ⅳ座標系、Ｘ＝8,800m軸、Ｙ＝38,360m軸である。

第２節　基本層序

当遺跡は舌状の台地に占地しており、台地上の平坦部からなる。そのため、台地上の基本的な層位は、上層に黒褐色から暗褐色の表土（耕作土）が約30～40cm程堆積し、その下に関東ローム層が見られる。当遺跡では、表土下の関東ローム層上面が遺構確認面となった。

第３節　遺構確認

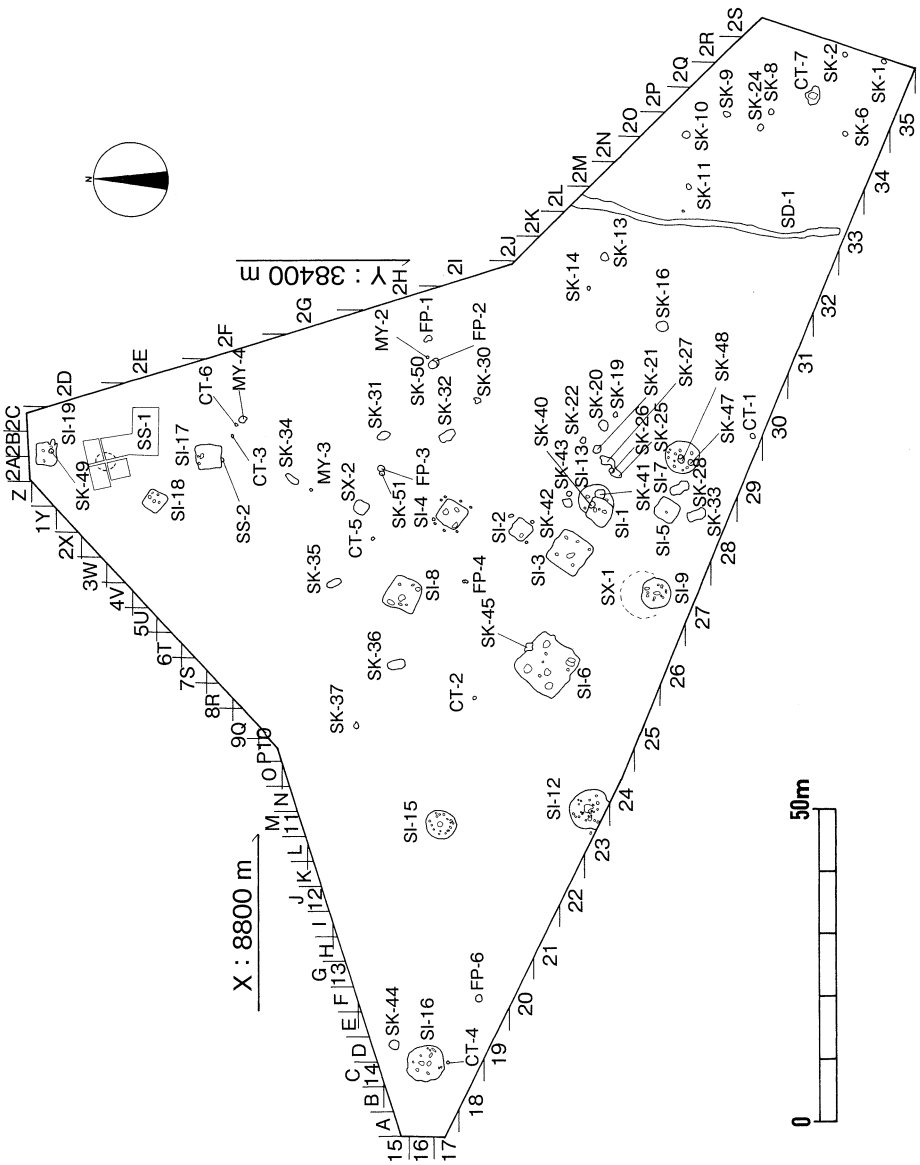
１．試掘調査及び表土除去（ＰＬ３）

1988（昭和63）年12月１日と1989（平成元）年４月14日に重機による試掘調査を実施した。調査トレンチは、舌状台地中央部に東西方向で第33トレンチを設定し、台地基部に北東―南西方向で第８トレンチを設定し遺構確認を行なった。トレンチの規模は、前者が幅は1.5m、長さ58m、深さ30cm程度で、後者が幅2.0m、長さ85m、深さ30cm程度であった。遺構の確認面は関東ローム層上面を基本とした。調査結果、第８トレンチの東半で溝跡（本調査第１号溝跡）やピット群と思われるものが確認され、第33トレンチの西端で焼土址が確認された。

本調査にあたって表土除去は重機を用いて行なった。調査区南側境界近くに列になって残る切り株については、遺構にかかるものについて人力で排除した。

２．遺構調査

遺跡内の住居跡の調査は、主軸方向を勘案して土層観察用ベルトを十字に設定して、遺物や床


X : 8800 m
Y : 38400 m
N
0
50m
SK-1
SK-2
SK-6
CT-7
SK-8
SK-24
SK-9
SK-10
SK-11
SD-1
SK-13
SK-14
SK-16
SK-21
SK-27
SK-48
SK-47
CT-1
SK-28
SK-33
SK-25
SK-26
SK-41
SI-7
SI-5
SK-22
SK-20
SK-19
SK-40
SK-43
SI-13
SI-1
SK-42
SI-2
SI-3
SX-1
SI-9
SK-45
FP-4
SI-6
SK-30
FP-2
FP-1
SK-50
SK-32
SK-31
MY-2
SK-51
FP-3
SI-4
SI-8
CT-5
SX-2
MY-3
SK-34
CT-3
MY-4
CT-6
SS-1
SS-2
SI-17
SI-18
SK-49
SI-19
SK-35
SK-36
SK-37
CT-2
SI-15
SI-12
SK-44
SI-16
CT-4
FP-6

第３図　遺構配置図

面を検出する方法を原則とした。住居跡内の地区設定は十字のベルトを基に４分割し、時計回りに１～４区とした。土坑などについては長軸方向で半截することを基本とした。床面や底面などの検出作業は覆土の変化や遺物の出土状況に注意して掘り下げを行なった。土層観察は色調、含有物の種類と量、締り・粘性などを観察し記録した。土層観察ベルトを除去した後、遺物の出土状況を写真や図面で記録し、遺物の取り上げを行なった。その後、カマド、柱穴、貯蔵穴などの付属施設を調査して完掘し、写真や図面などで記録した。写真撮影は、ローリングタワーや脚立を用いて35㎜カメラを基本として撮影し、補助的に120㎜カメラも用いた。カメラのフィルムは

第４図　調査エリア図

35㎜モノクロ・リバーサル、120㎜モノクロを使用した。

なお、本遺跡では特徴的な遺構として第1号住居跡の鍛冶工房跡や第４・６・８号住居跡の玉作工房跡が確認された。これらの遺構については、微細な鍛冶関連遺物や玉作関連遺物の出土状況や分布状況を把握するため、床面近くに調査区座標軸に沿った25㎝又は50㎝の方眼を設定し、その床面上の厚さ３～５㎝程の土層を採集・水洗い選別を行った。これらの遺構の調査方法の詳細については以下で述べる。

※鍛冶工房跡の調査方法

鍛冶工房跡と考えられる第１号住居跡では、鍛冶関連遺物の検出にあたって、床面近くに25㎝方眼の試料採集区（第1～96区）を設定し、方眼ごとの床面上３㎝程度の覆土を採取して水洗い・遺物の選別を行なった。水洗いは採集試料を洗面器に入れ、水によって余分な土壌を洗い流し、残った砂鉄・鍛造剥片・粒状滓などの鍛冶関連遺物を乾燥させ、磁石を用いて砂・小石などと分別・採集した。鍛冶関連遺物の選別にあたっては、６種類の網目（①0.4㎜、②0.8㎜、③1.5㎜、④2.0㎜、⑤4.0㎜、⑥7.0㎜）のふるいを用いて種別・大きさごとの選別を行なった。一応の区分としては、①のふるいを通過したものは砂鉄として扱った(その中には微細な鍛造剥片も含まれる)。そして、鍛造剥片・粒状滓・鉄滓については、先の②～⑥の５種類のふるいがけで区別された資料をそれぞれ採集区ごとに集計した。鍛造剥片や鉄滓は重量によって、粒状滓は個数で集計したうえ、それを便宜上の数段階の区分を用いて第70図の鍛冶関連遺物の出土状況図を作成した。また、鍛冶炉や鍛冶関連ピットの覆土の水洗い選別によって得られて微細な鍛冶関連遺物の数量や重量については先の採集区ごとの数量に加えて集計した。

※玉作り工房跡の調査方法

玉作工房跡の中でも第４号住居跡や第６号住居跡では、微細な玉作関連遺物の検出のため、床面近くに50㎝方眼（第４号住居跡）・25㎝方眼（第６号住居跡）の試料採集区を設定し、方眼ごとの床面上３㎝程度の覆土を採集して水洗い・遺物の選別を行なった。水洗いは採集試料を目の細かいふるいに入れ、水によって余分な土壌を洗い流し、砥石破片や玉作の材料であるメノウ・緑色凝灰岩・琥珀などの微細破片を分別・採集し、それぞれ採集区ごとに集計し、重量によって示した。そして、それらを便宜上の数段階の区分を用いて玉作関連遺物の出土状況図を作成した。また、第６号住居跡については柱穴・貯蔵穴などの覆土についても上記同様の水洗い・選別を行い、玉作関連遺物を採集し、住居跡内の施設ごとに集計し重量によって図化した。

ちなみに、第８号住居跡でも玉作関連遺物が数多く出土したが、時間的な制約から第４・６号住居跡同様の床面全面の土層の水洗選別は行えず、一部の土層の水洗選別を行った。しかしながら、同住居跡の床面の中でも入り口部から貯蔵穴周辺で微細な玉作関連遺物が目立って出土したので、できるだけ出土位置を図化し、出土状況が理解できるようにした。

第3章　遺構と遺物

遺跡内から検出された遺構は竪穴住居跡・土坑・焼土址・屋外埋設土器・火葬墓などが確認された。これらの遺構は縄文時代・古墳時代そして平安時代にわたるものである。各時代の遺構として、縄文時代では竪穴住居跡６軒や土坑38基、土器埋設遺構３基などが検出されている。古墳時代では竪穴住居跡が９軒、竪穴遺構１基が確認されている。竪穴住居跡のうち玉作工房跡として利用されたものが３軒と鍛冶工房跡として利用されたものが１軒検出され、専門的技術を持った工人集団が手工業生産を営んだ集落跡であることが窺われる。平安時代の遺構としては竪穴住居跡１軒と７基の火葬墓などが検出され、調査エリア一体は墓域として利用されていた様子が窺われる。

第１節　縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡は、第７・９・12・13・15・16号住居跡の６軒が検出された。土坑も数多く確認されたが、定形的なものは陥穴のみであった。調査区の南側から西側に沿って分布しており、調査区の北側と東側には見られない。調査区の南側には台地が広がることから住居跡群はエリア外にも展開しているものと推測される。これらの遺構の多くは中期後半期のものである。

１．竪穴住居跡（SI）

第７号住居跡〔SI－７〕（第５～13図　ＰＬ４・37～40・52・54）

位　置　調査区中央南側の2B－26区付近に位置する。

重複関係　第47号土坑、第48号土坑と重複しており、本遺構が新しい。

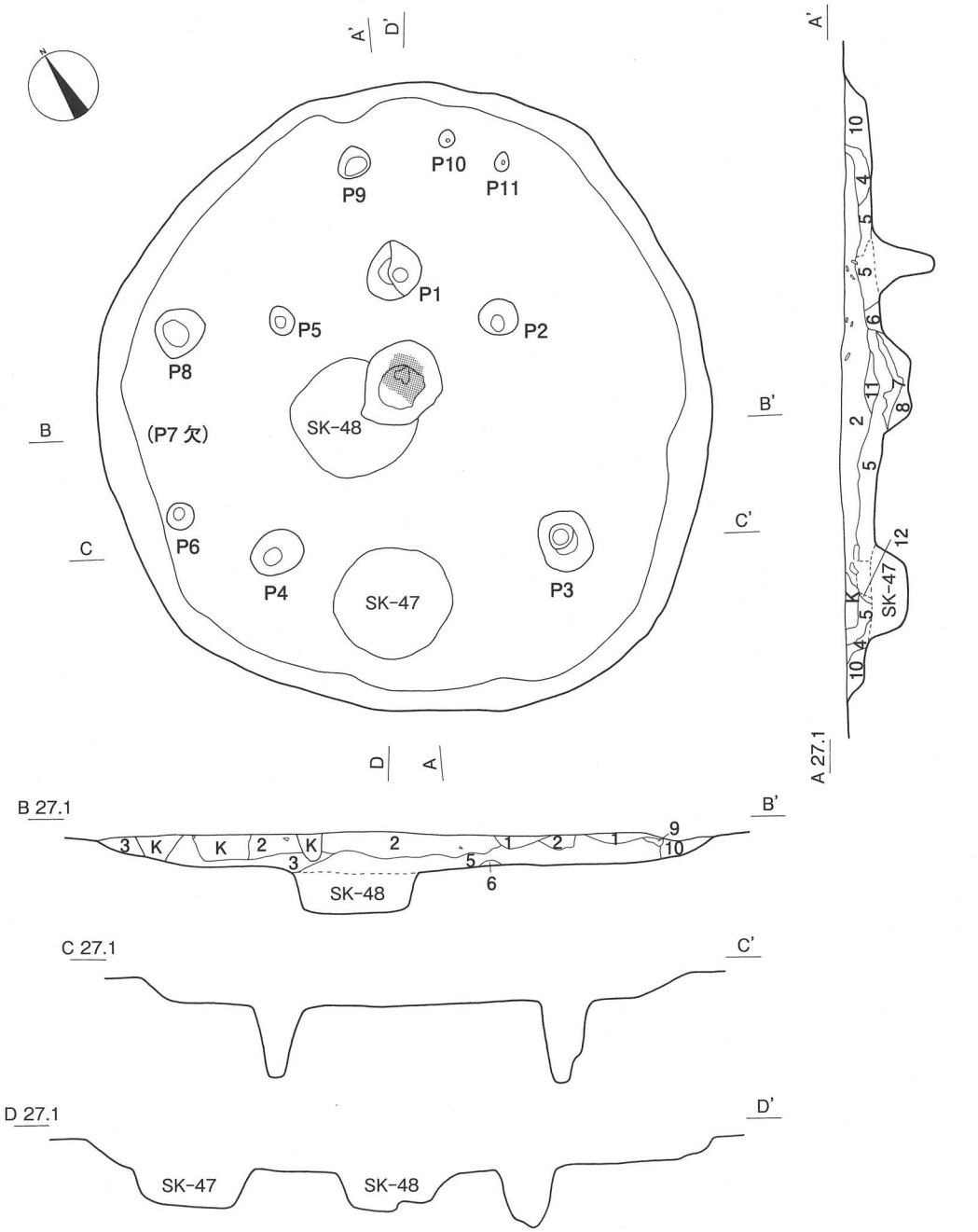
規　模　長径5.40ｍ×短径5.20ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは22～28cmを測る。

壁　外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦。特に踏み固められたところはない。中央に向かって緩やかに傾斜している。

炉　長径80cm×短径68cmの楕円形の地床炉。深さ24cm。住居の中央に位置する。炉床は焼けて赤変しており、底面は多少凸凹がみられる。第48号土坑を掘り込んで作られている。

柱　穴　全部で10ヵ所検出された。この内、主柱穴は住居内中央のＰ１・Ｐ３・Ｐ４の３本と考えられ、径46～52cmで、深さは54～70cmである。支柱穴はＰ２・Ｐ５と考えられ、径26～36cmで、深さは23～41cmである。これらの柱穴によって五角形の柱組の構造が想定される。このほか、壁際にＰ６～Ｐ11（Ｐ７は欠）の５本の柱穴が確認されているが、性格は不明である。



1　7.5YR4/4　褐色
2　7.5YR4/4　褐色　焼土小少、炭化粒少
3　7.5YR4/6　褐色　ローム大～小少
4　7.5YR4/4　褐色
5　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、炭化粒少
6　7.5YR4/6　褐色　ローム大微、ローム中少、ローム粒中
7　7.5YR4/4　褐色　焼土大微、焼土小少、焼土粒中、ローム中少
8　5YR4/6　赤褐色　焼土大微、焼土中少、焼土小・粒多、ローム中
9　7.5YR4/6　褐色
10　壁崩落土
11　7.5YR4/4　褐色　焼土小微、炭化粒微
12　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒中

0　2m

第５図　第７号住居跡

第７号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
径（cm）	52	36	52	46	26	24	欠	44	30	16	18
深さ（cm）	54	23	70	60	41	19	欠	23	16	5	8

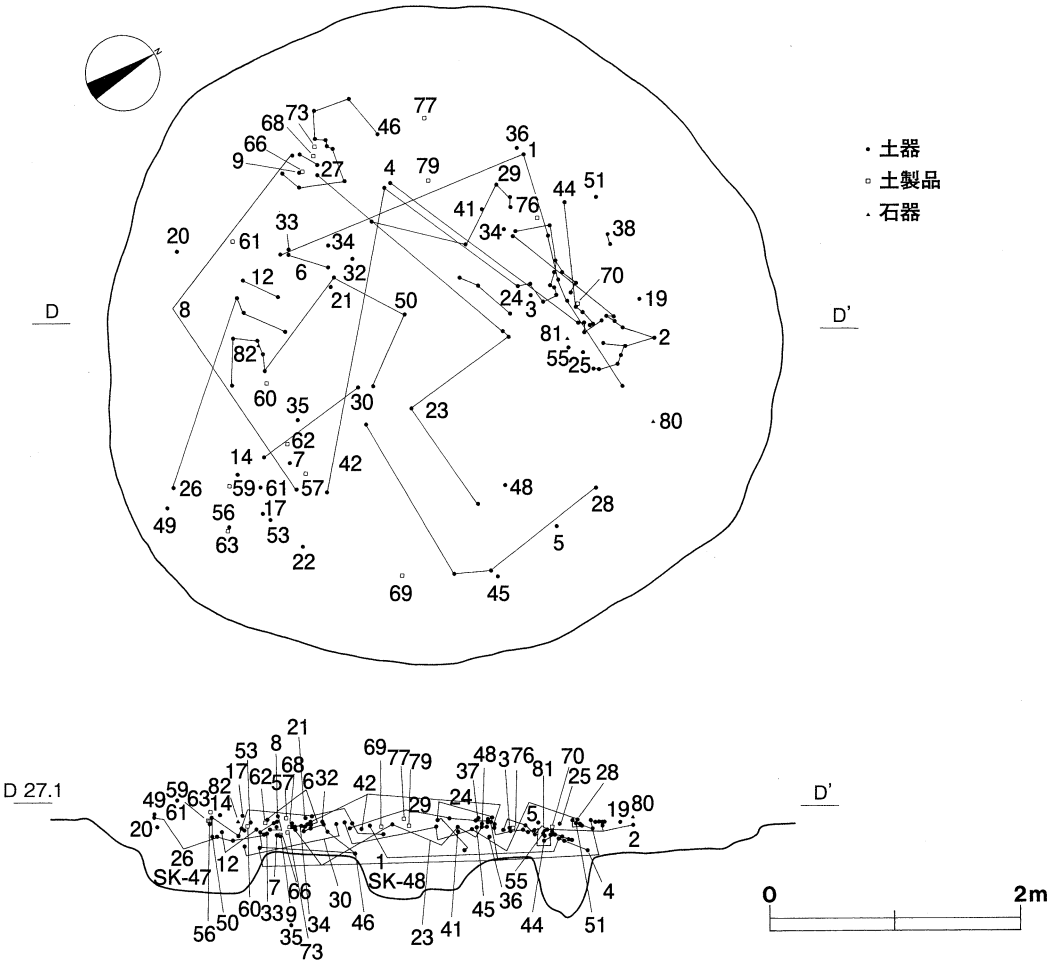
覆　土　覆土は12層から構成され、第２層には焼土･炭化粒が含まれ、土層の多くを占めている。第３層にはロームブロックやローム粒が含まれる。

遺物出土状況　多量の遺物がほぼ第２層中から出土している。これらの遺物は住居廃絶後の凹地に投棄されたものと考えられる。完形品は１点も出土せず、口径が復元できたものが８点みられた。土器の接合関係も見られ､第９･13号住居跡出土土器と接合したものがある。ごく小片であったため図示はしなかったが、第９号住居跡出土土器とは３点接合し、第13号住居跡出土土器とは１点接合した。この接合関係のある第13号住居跡出土土器は、同住居跡の炉内から小破片が出土したが、焼けてはいない。本住居の使用時に直接伴う遺物は認められない。

出土遺物　出土遺物は深鉢形土器がほとんどで、そのほかは６・11・41の鉢形土器が若干みられる程度である。深鉢形土器は器形がキャリパー形を呈するものが大半で、26～28のようなキャリパー形の退化したものや、２のような口縁が直立して立ち上がるものも小数みられる。文様の特徴は、大多数のものが口唇部に幅の狭い無文帯を持つ。そして、１・６・７・９・11～14・26～28・42・44・50のように断面三角形の微隆起線によって円形・Ｕ字・逆Ｕ字状などの区画文が描かれるものや、10・30などの隆起線による区画文が描かれるものがある。また、４・19～22・31～35のように沈線によって区画文が描かれるものが見られる。胴部から底部の器形は特徴的で、42・44のように胴部下位で急激にすぼまるものが見られ、底部は42・44・46のように突出するものがみられ、胴径に比べかなり底径が小さい。

１は胴上半が大きく膨らみ、中位がすぼまる器形を呈している。文様帯も器形に呼応するように二分され上半には抱球文が描かれる。４は４単位の小波状縁で沈線によって区画されたＳ字状の渦巻文が横位に展開している。22は口縁部無文帯が波頂部に向かい狭くなり、円形区画文が波頂部下で展開しその末端は閉じている。12～18は口唇部に無文帯を持つものである。４・19～22・32は縄文地文の上に沈線により区画文を描き、その中を磨り消す。31・33～35は区画内に縄文が施文され、31・33・34は沈線による区画文施文後に縄文を充填している。26～28は同一個体と考えられる。10・30には２本組の隆起線が見られる。19には赤色顔料が塗られている。24には炭化物が著しく付着する。40は突起であり、口縁部に付いていたものと思われる。41は両耳鉢形土器の把手である。42～56は底部である。

土製品として土器片錘が17点（57～73)、有孔円盤が２点（74・75)、土製円盤が４点（76～79）出土している。土器片錘のほとんどのものは長軸方向の両端に切れ目が一対施されるが、72は平行して２ヵ所施されている。大きさは57～65などの小型のものから、66～73などの大型のも

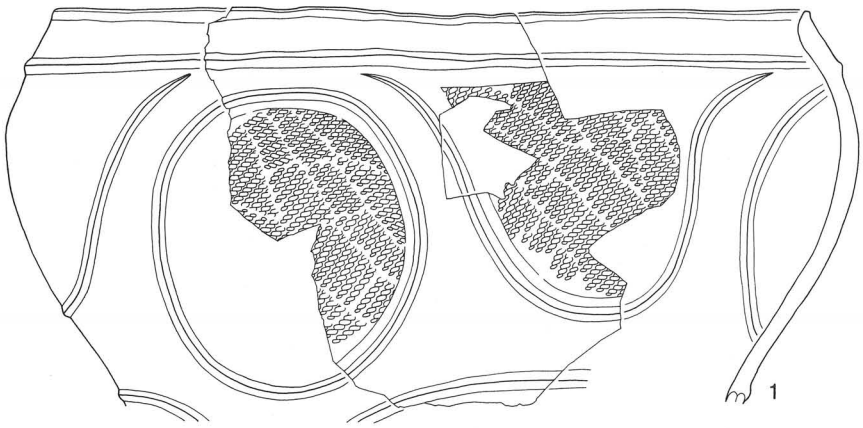


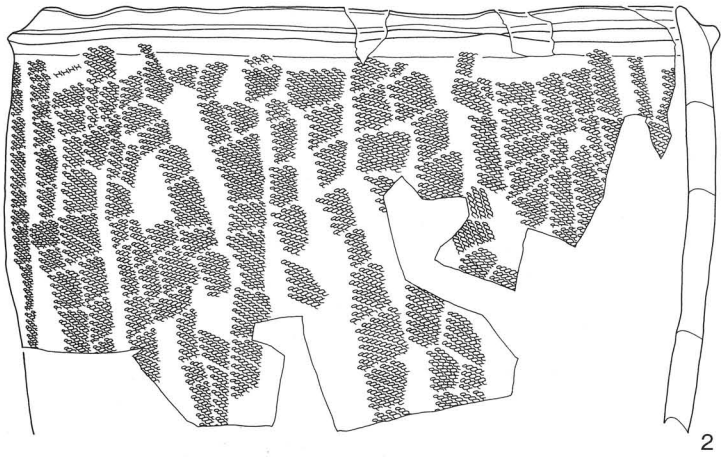
第６図　第７号住居跡遺物出土状況

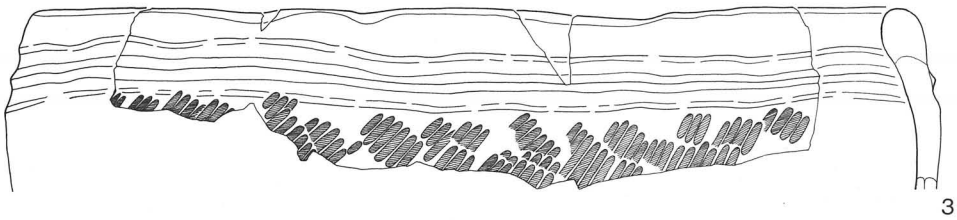
のが見られる。特に68などは大きく、長軸の長さが10cmを越える。74・75は有孔円盤の破片で内外の縁辺が擦られている。

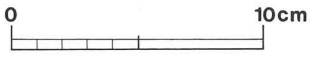
石器は80が敲き石、81は磨石類。82は磨製石斧である。82は定角式であり、刃部を欠損している。柄の部分が残存する。83は縦長剥片の腹面の片方の側縁に２次調整が加えられる。また、背面の先端にも調整が加えられ刃部を作り出している。このほかに、質の悪いチャート剥片が２点出土している。

所　見　本住居跡出土土器には、第９・13号住居跡出土土器と接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期については、出土遺物に中期後半の加曽利Ｅ３式や加曽利Ｅ４式土器が混在して見られるが、後者が主体となることから加曽利Ｅ４式期の所産と考えられる。

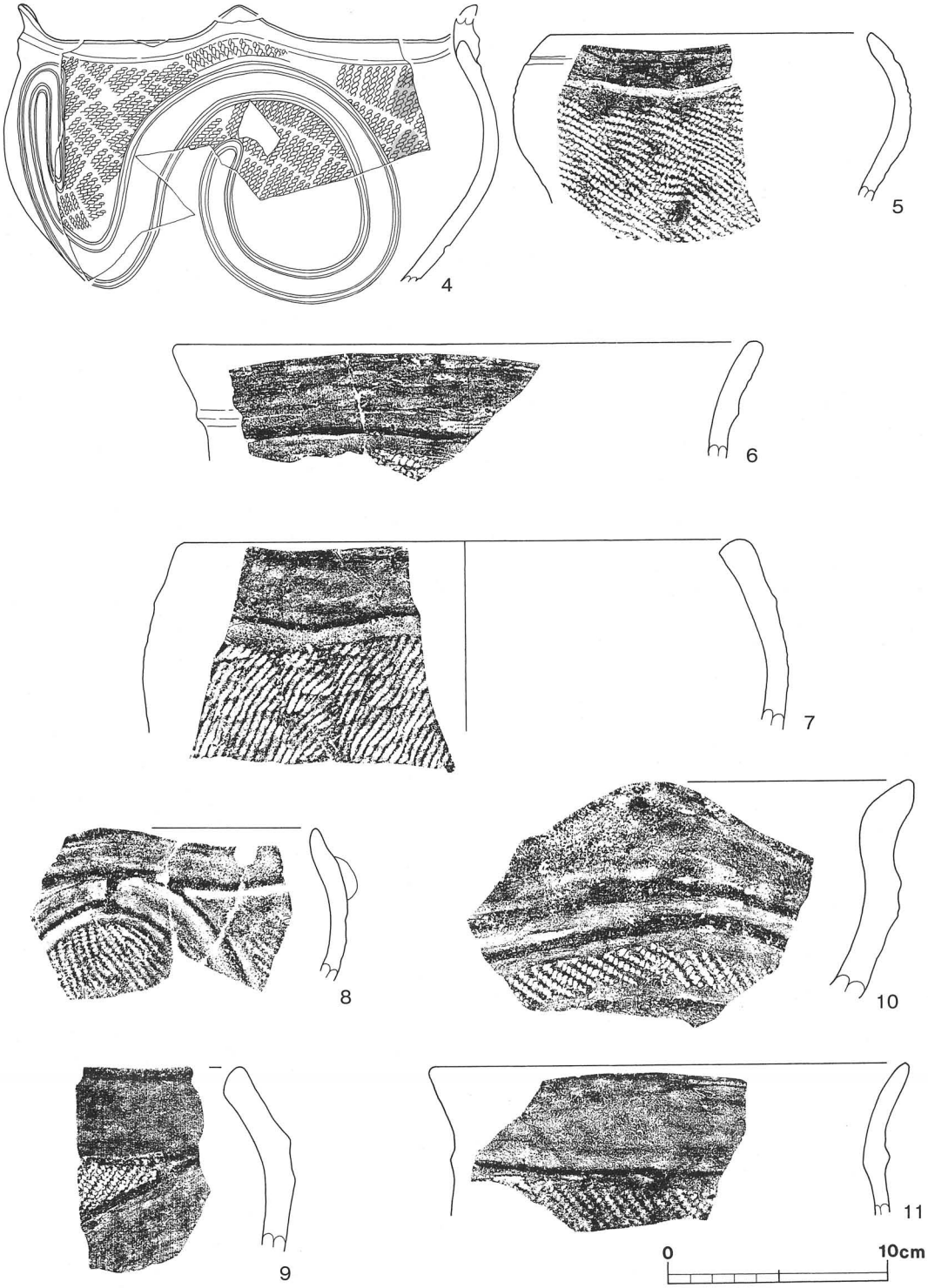




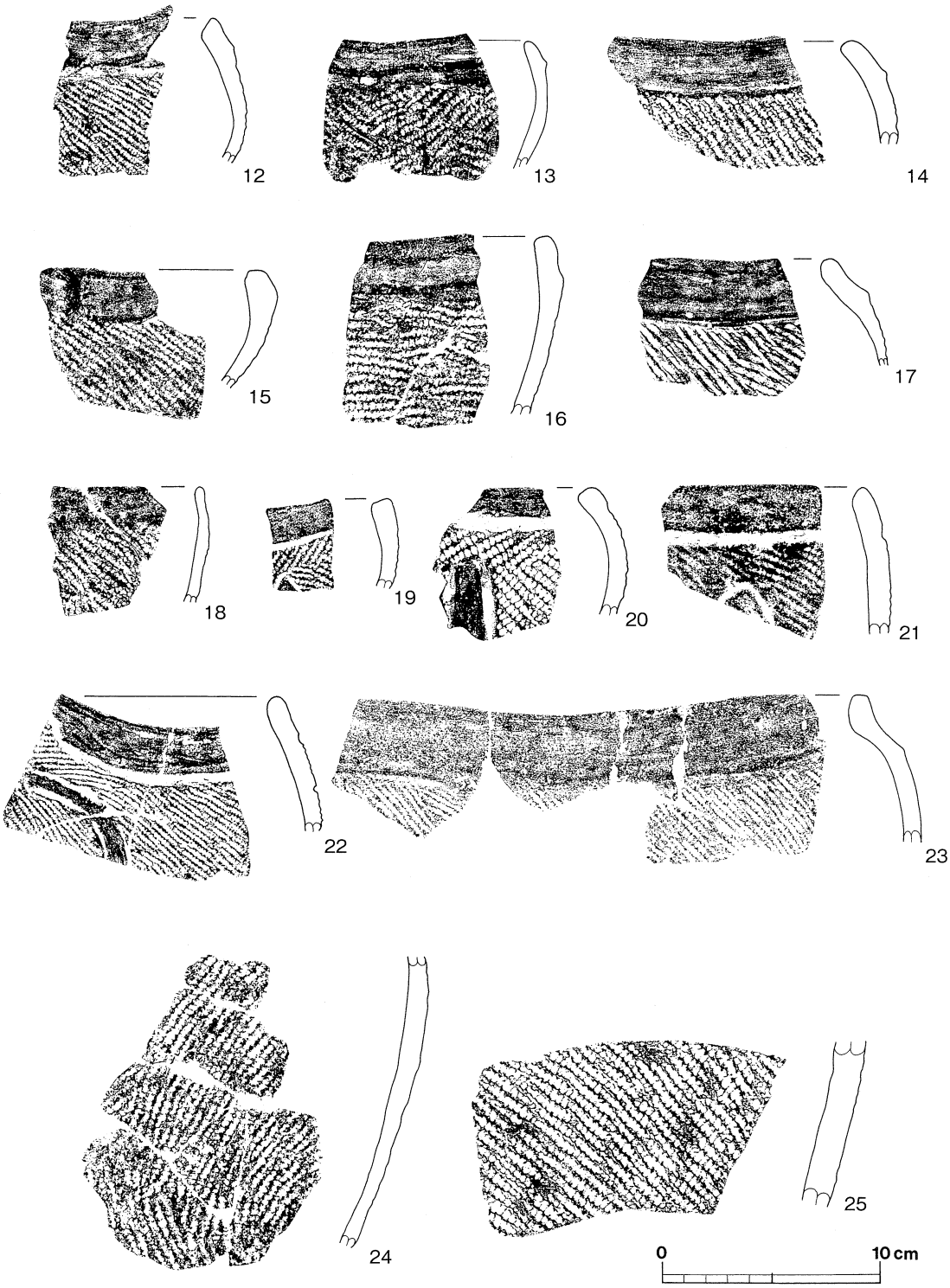




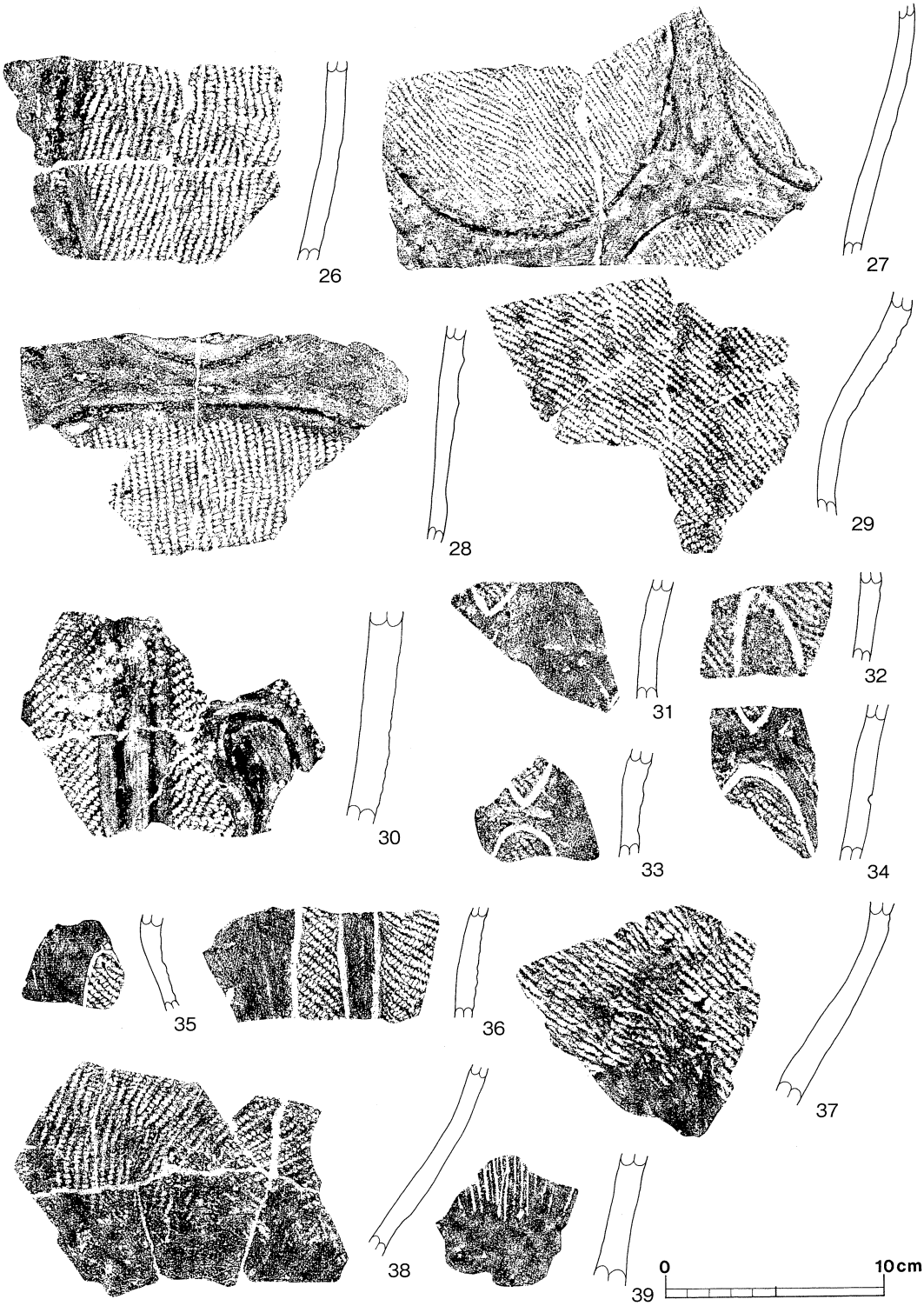
第７図　第７号住居跡出土遺物（１）



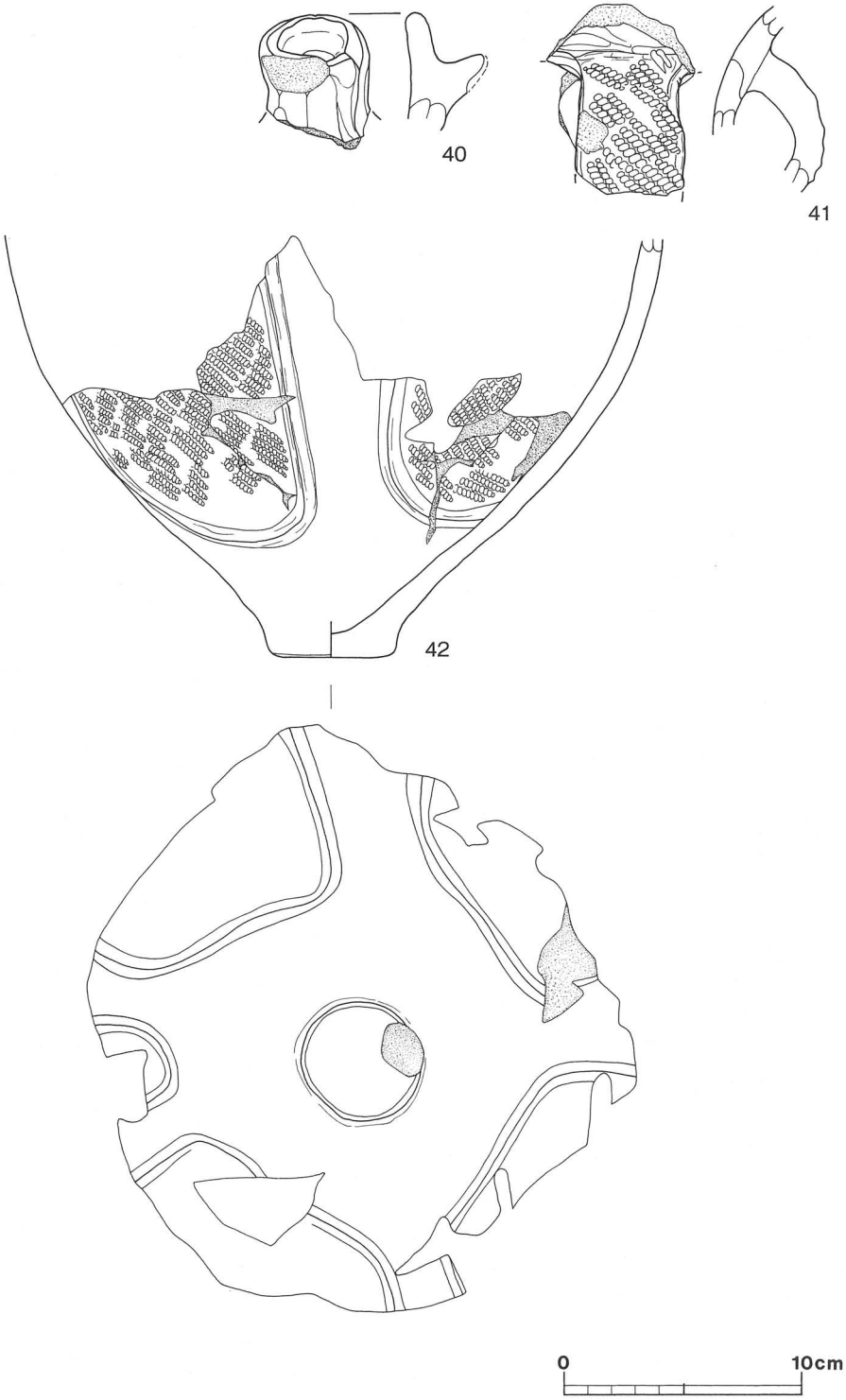
第８図　第７号住居跡出土遺物（２）



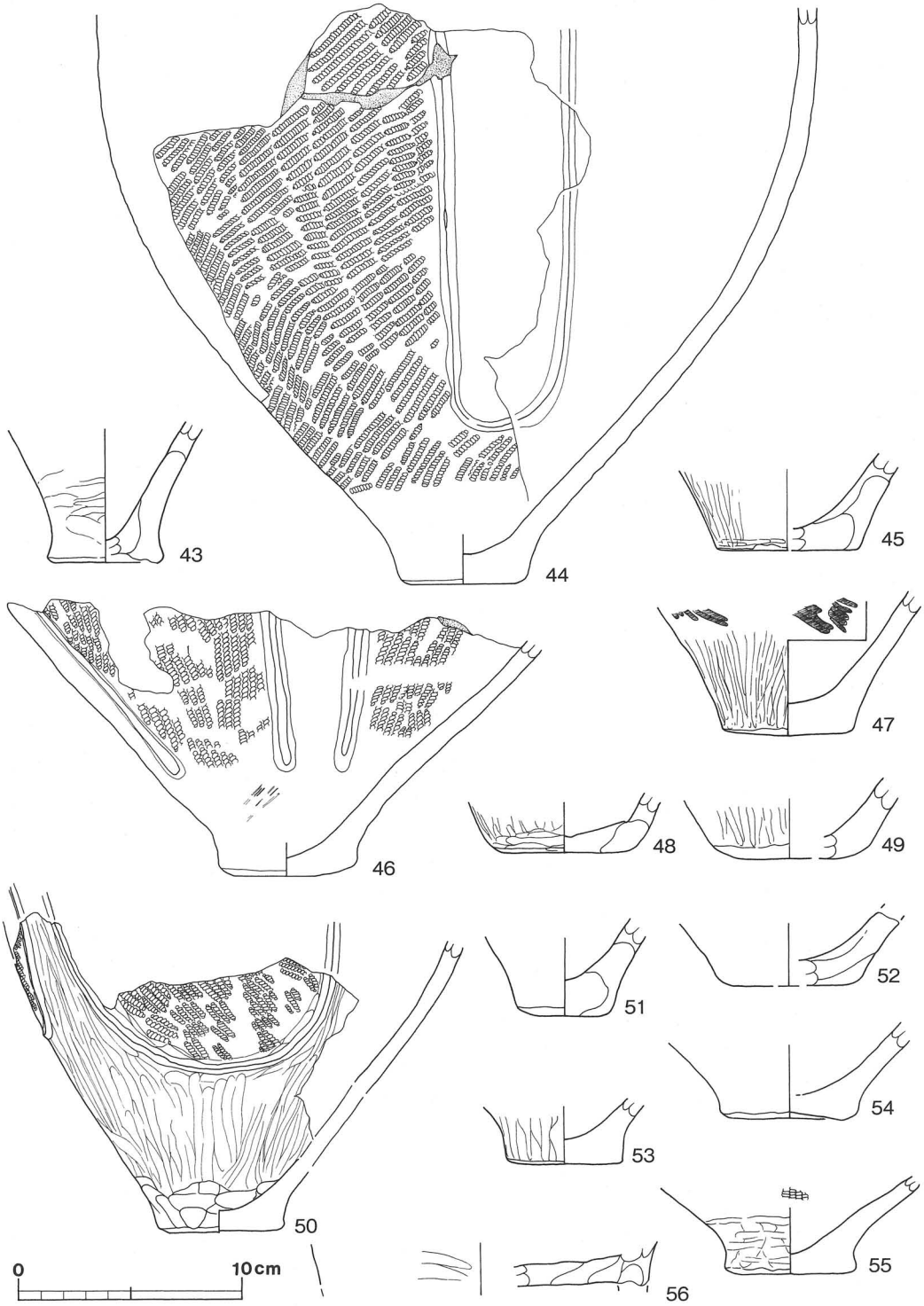
第９図　第７号住居跡出土遺物（３）



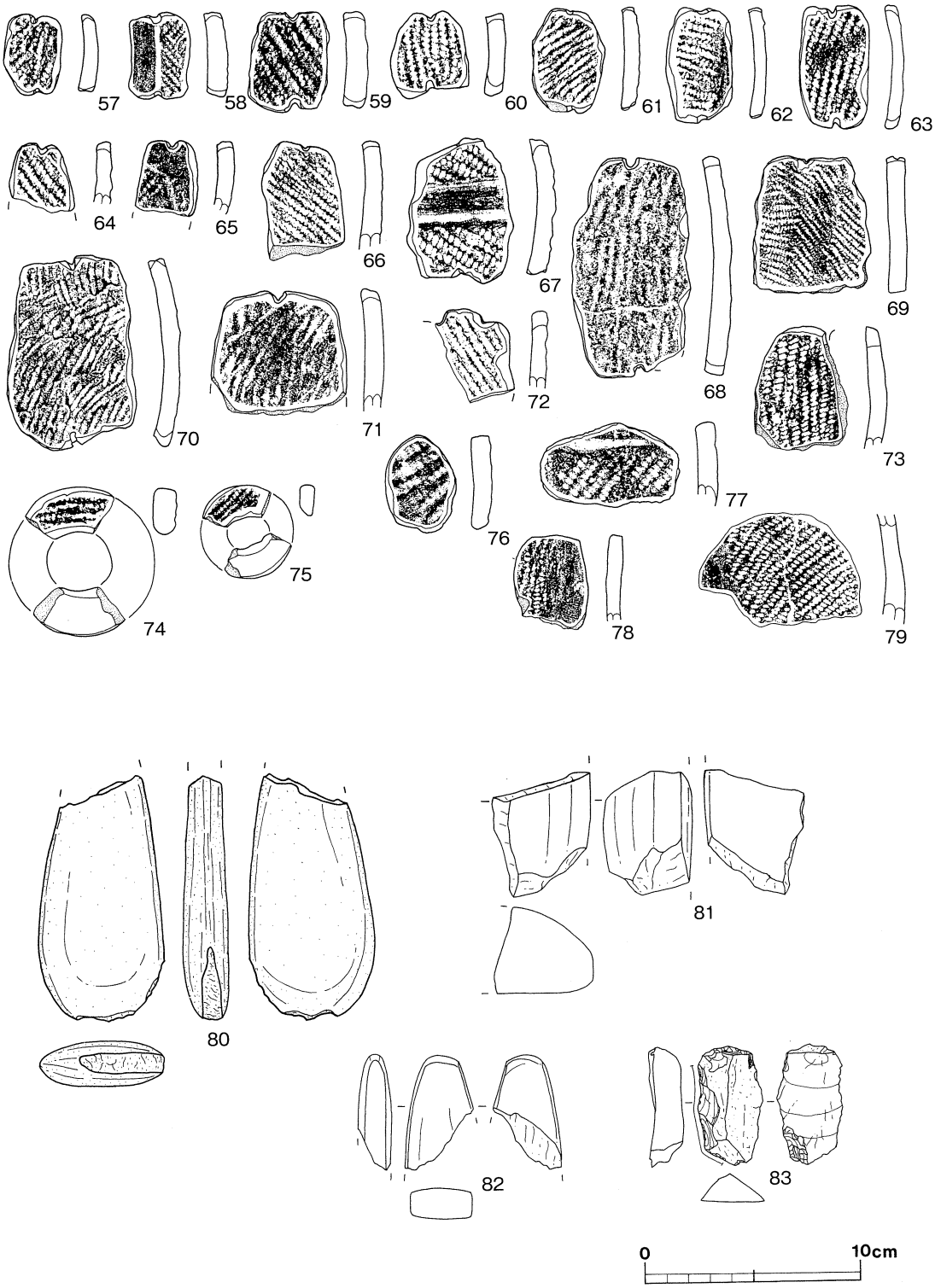
第10図　第７号住居跡出土遺物（４）



第11図　第７号住居跡出土遺物（５）



第12図　第７号住居跡出土遺物（６）



第13図　第７号住居跡出土遺物（７）

第７号住居跡出土土器

図版No.	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A：〔29.8〕 C：(15.9)	にぶい橙	石英･長石･金雲母◎	平縁。キャリパー形を呈する。口縁部に微隆起線により無文帯や円形・「U」字状区画文が描かれる。区画内にRL縄文が施文。	№118
2	深鉢	口縁～胴	A：〔26.0〕 C：(20.0)	にぶい橙	石英･長石･砂粒◎、赤色粒△	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。口唇下に１条の隆起線が巡り受け口状を呈する。胴部には細かなLR縄文が縦回転施文。	№113
3	深鉢	口縁	A：〔34.6〕 C：(7.3)	橙	石英・長石◎、雲母△	平縁。寸胴の器形か。口唇下に上下がなぞられる1条の微隆起線が巡り、以下はＲ１縄文が全面に縦回転施文される。	№124
4	深鉢	口縁	A：〔21.0〕 C：(12.6)	にぶい橙	長石・石英◎、金雲母△	４単位の波状縁でキャリパー形を呈する。口唇部に無文帯を設け、地文RL縄文。沈線で「Ｓ」字状区画文を描き、区画内は磨り消す。	№119 炭化物付着
5	深鉢	口縁	A：〔14.7〕 C：(7.7)	淡黄	石英･長石･赤色粒△	平縁。キャリパー形を呈する。口唇下に１条の沈線が巡り無文帯を作出。以下はLR縄文が縦回転施文。	№120 炭化物付着
6	鉢	口縁	A：〔27.0〕 C：(5.4)	にぶい橙	石英・長石○	やや外傾する平縁の口縁部。１条の微隆起線が巡り無文帯を作出し、以下にはLR縄文が施文される。無文部は磨かれている。	№121
7	深鉢	口縁	A：〔25.5〕 C：(8.7)	にぶい褐	石英・長石◎、赤色粒△	平縁。キャリパー形を呈する。口唇部は肥厚し、１条の微隆起線が巡り無文帯を作出する。胴部はＲ１縄文の縦回転施文。	№なし
11	鉢	口縁	A：〔22.0〕 C：(6.9)	にぶい黄橙	石英･長石･雲母・赤色粒△	やや外傾する平縁の口縁部。１条の微隆起線が巡り幅の広い無文帯を作出し、以下にはLR縄文が施文される。	№122 炭化物付着
42	深鉢	胴～底	B：5.2 C：(17.7)	橙	長石･石英･雲母◎	底部が小さく、胴部が大きく開く不安定な器形。微隆起線による「U」状区画文が５単位施文される。区画内のみにＲＬ縄文が施文。	№116 内面に黒色の帯巡る
44	深鉢	胴～底	B：5.7 C：(25.7)	明赤褐	石英･長石･金雲母◎	底部が小さく、胴部が大きく開く不安定な器形。微隆起線による「U」字状区画文が施され、区画外は無文で区画内はＲＬ縄文施文。	№112
46	深鉢	胴～底	B：6.1 C：(10.1)	明赤褐	石英・長石◎、雲母・赤色粒△	底部が小さく、胴部が大きく開く不安定な器形。平行する隆起線文が４単位垂下。隆起線内は無文となるほか、RL縄文施文。	№117
50	深鉢	胴～底	B：5.6 C：(12.5)	橙	石英・長石△	底部から胴部への開きは弱い。微隆起線による「U」字状区画文が４単位施文され、区画内に。単節LR縄文が施文。ヘラミガキ。	№114 炭化物付着 内面煤付着

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
43	深鉢	底	B：〔5.2〕 C：(6.3)	明赤褐	石英・長石◎	無文。底面剥離。外面ナデ。	№135
45	深鉢	底	B：〔6.3〕 C：(4.4)	橙	石英・長石△	無文。外面丁寧なミガキ。	№136
47	深鉢	底	B：5.8 C：(5.8)	橙	石英・長石○	単節Lr。底面凸レンズ状。外面丁寧なミガキ。	№128
48	深鉢	底	B：〔6.2〕 C：(2.7)	橙	石英・砂粒△	無文。外面丁寧なミガキ。	№131
49	深鉢	底	B：〔7.1〕 C：(2.7)	橙	石英・長石◎、金雲母○	無文。底部側縁擦れる。	№133
51	深鉢	底	B：〔4.4〕 C：(3.6)	明褐	石英・長石◎	無文。器面荒れる。	№137
52	深鉢	底	B：〔5.4〕 C：(5.2)	明赤褐	石英･長石･雲母◎	無文。内面に赤色顔料残る。	№134
53	深鉢	底	B：5.3 C：(3.1)	橙	石英・長石◎、砂粒○、赤色粒△	無文。外面ミガキ。	№130
54	深鉢	底	B：(6.3) C：(3.5)	にぶい褐	石英･長石･砂粒○	無文。やや上げ底。黒斑。	№138
55	深鉢	底	B：5.9 C：(4.0)	にぶい橙	石英・長石◎、赤色粒△	単節RL。大きく開く。	№127
56	深鉢	底	B：(14.2) C：(2.0)	にぶい黄橙	石英･長石･雲母◎	無文。底径が大きい。上下に剥離痕あり。	№132

第７号住居跡出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
57	土器片錘	SI-7	完形	3.8×2.65	0.75	9.0	全周磨り	切り目１対
58	土器片錘	SI-7	完形	4.05× 2.8	0.95	15.0	全周磨り	切り目１対
59	土器片錘	SI-7	完形	4.65× 3.6	0.95	23.0	全周磨り	切り目１対
60	土器片錘	SI-7	完形	3.95×3.65	0.85	15.0	一部磨り	切り目１対
61	土器片錘	SI-7	完形	4.85× 3.4	1.6	7.5	全周磨り	切り目１対
62	土器片錘	SI-7	完形	5.4× 3.1	0.65	14.0	全周磨り	切り目１対
63	土器片錘	SI-7	完形	5.75×3.25	0.6	17.0	全周磨り	切り目１対
64	土器片錘	SI-7	2/3	3.15×2.95	0.8	9.0	全周磨り	切り目１ヶ
65	土器片錘	SI-7	2/3	3.45× 2.8	0.8	9.0	全周磨り	切り目１ヶ
66	土器片錘	SI-7	一部欠	5.3×3.65	0.95	26.0	一部磨り	切り目１ヶ
67	土器片錘	SI-7	完形	6.7×4.85	0.9	38.0	一部磨り	切り目上端１ヶ下端２ヶ
68	土器片錘	SI-7	完形	10.2× 5.6	0.95	64.0	一部磨り	切り目１対
69	土器片錘	SI-7	3/4	6.4×5.45	0.85	42.0	一部磨り	切り目１ヶ
70	土器片錘	SI-7	完形	8.8× 6.0	0.85	69.0	一部磨り	切り目１対
71	土器片錘	SI-7	1/2	5.8× 6.3	0.85	39.0	全周磨り	切り目１ヶ
72	土器片錘	SI-7	1/2	4.25× 3.3	0.75	20.0	全周磨り	切り目上端２ヶ
73	土器片錘	SI-7	1/4	5.8× 4.4	0.8	24.9	全周磨り	切り目１ヶ
74	有孔円盤	SI-7	一部	2.75×3.05	1.1	10.0	全周磨り	表裏より穿孔→磨り
75	有孔円盤	SI-7	1/4	1.8× 2.8	0.65	4.0	全周磨り	裏面より穿孔→磨り
76	円盤	SI-7	完形	4.5× 3.3	0.85	13.0	全周磨り	楕円形
77	円盤	SI-7	1/2	3.3× 6.5	0.95	24.0	打割	円形
78	円盤	SI-7	一部欠	4.3× 3.5	0.7	13.1	全周磨り	楕円形
79	円盤	SI-7	1/2	5.2× 7.6	0.9	40.1	打割	円形

第７号住居跡出土石器

図版No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
80	覆土	敲き石	(11.4)	5.8	2.1	(200.4)	砂岩	石17　端部折損
81	覆土	磨石類	(4.8)	(4.6)	4.0	(117.6)	砂岩	石18　破損後も使用
82	覆土	磨製石斧	(5.4)	(2.9)	1.5	(31.5)	斑レイ岩	石19　定角式　端部破片
83	覆土	剥片	5.6	3.0	1.3	25.6	チャート	石20　質の悪い素材

第９号住居跡〔SI－９〕（第14～20図　ＰＬ５・41～43・52）

位　置　調査区中央南側のＶ－25・26付近に位置する。

重複関係　本住居跡の北側に展開する第１号竪穴遺構と重複し、出土遺物から本遺構が新しい可能性がある。

規　模　長径4.94ｍ×短径4.56ｍの不整円形を呈し、確認面からの深さは８～28cmを測る。

壁　外傾して立ち上がる。

床　やや凸凹があるが全体的に平坦である。特に踏み固められたところはない。

炉　２ヵ所確認され、炉１は長径64cm×短径40cmの楕円形で、住居跡のほぼ中央に位置する。深さ20cm。炉床は焼けて赤変し凸凹がみられる。炉２は長径56cm×短径28cmで一部括れた楕円形を呈する。深さは６～10cmで、炉床は一部焼けて赤変している。位置は住居跡の北方壁際にある。

柱　穴　全部で10ヵ所確認される。これらの柱穴の中で比較的深く、主柱穴に相当するものはＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７の５本であり、径28～48cm、深さ40～62cmである。支柱穴はＰ３・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10の５本で径22～36cm、深さ10～26cmを測る。

第９号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径（cm）	42	28	30	48	28	30	38	36	34	22
深さ（cm）	56	62	18	58	25	42	40	16	26	10

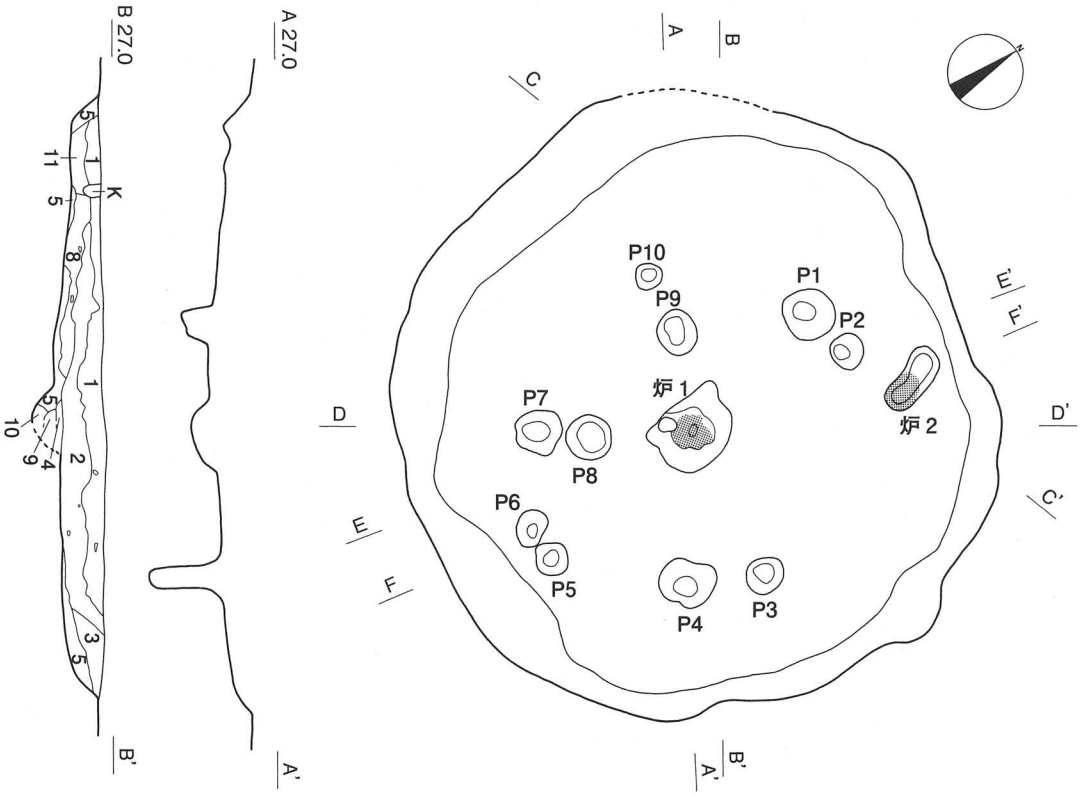
覆　土　覆土は12層から構成されている。遺物は覆土上層からのものが多い。

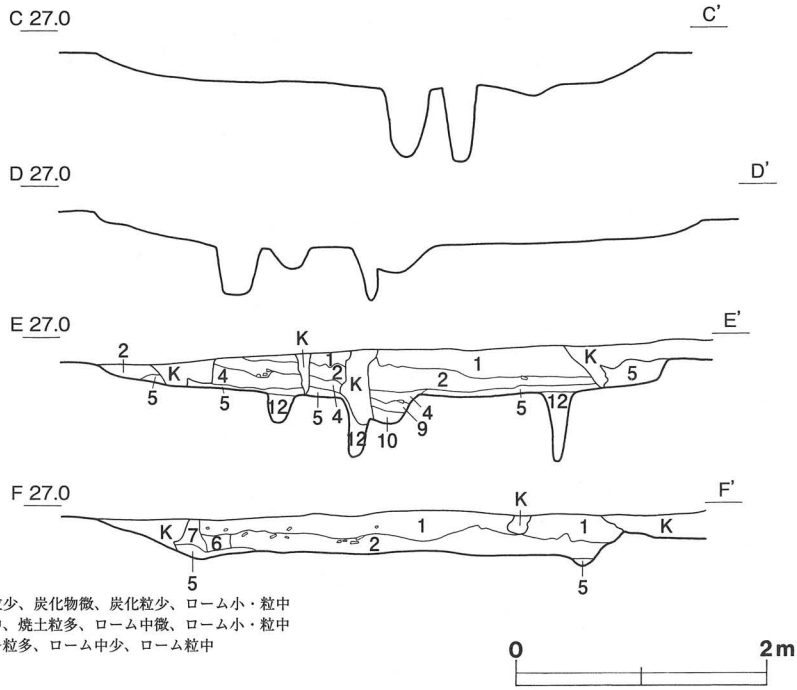
遺物出土状況　多量の遺物が出土した。ほとんどが床面から若干浮いた状態で出土し、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。完形品は小型深鉢１点のみで、他は破片で口径を復元できたものが10点みられた。１の土器は住居跡内南側の狭い範囲で複数個体が接合している。７・27は住居跡内北側を中心に南北方向で接合している。39は第１号竪穴遺構出土土器と接合関係を持つが、本住居跡出土土器片が大半を占めている。住居の使用時に直接伴う遺物はみられない。第７号住居跡・第１号竪穴遺構出土土器と接合関係にある。

出土遺物　出土土器の大半は深鉢形土器が占め、４のような小型のものもみられる。その特徴は、１のようにキャリパー形の退化したような器形を呈するものも見られるが、３・４などのように頸部の括れが見られないものも存在する。底部は44～49などのように小さく突出したものが目立ち、外面が磨かれるものが多い。文様の特徴は、大多数が口唇部に幅の狭い無文帯を持つ。また、1・26のように断面三角形の微隆起線により円形・U字・逆U字状の区画文が描かれるものや、37のように沈線によって区画文が描かれるもの、27のように隆帯が貼付されるものも見られる。このほか、24のように特殊な器形を呈するものも見られる。

１は第７号住居跡１と同様の抱球文である。２の口縁部文様帯中、単位文となる「X」字状に盛り上がる突起は、１の口縁部文様帯と胴部文様帯を繋ぐ突起に類似する。12・13にも突起が付き、口縁部が緩い波状縁となる。15・16は沈線や凹線により、口縁部の無文帯が作出される。18の口縁部には円形・楕円形の区画文による文様帯がみられる。21～23・28は２本組の隆起線で区画文を描き、20・26は微隆起線で区画文を描く。25の隆起線は断面半円形である。27は口縁部下に隆帯文が意匠的に貼り付けられ、大木式的な要素が窺える。39は垂下する条線文間に縄文が施文される例である。21・23・26・28～30・34の胎土には石英・長石とともに金雲母が含まれる。

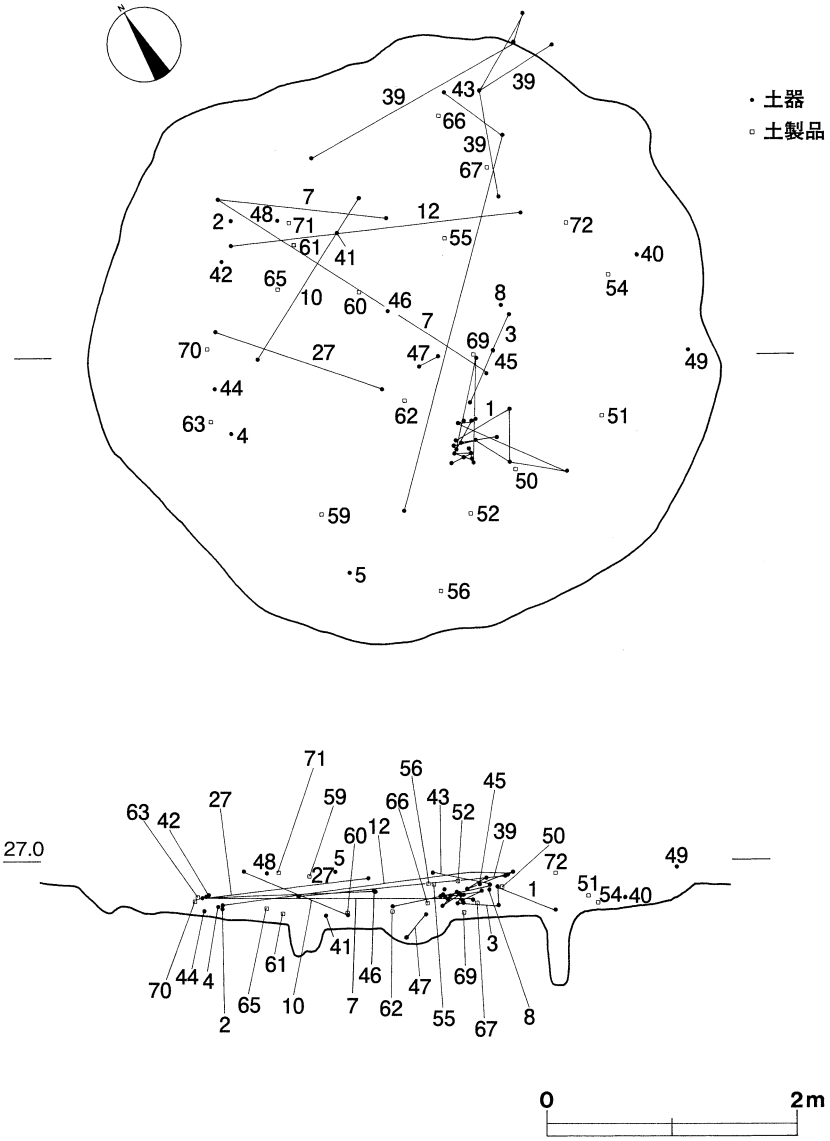
土製品として土器片錘が20点（50～70）、有孔円盤が１点（72）、土製円盤が２点（71・73）出土している。土器片錘は50～62の小型のものと、63～70の大型のものがある。68は長軸9.65cmで最も大きい。67は土器の口縁部を利用している。本遺構で出土した土器片錘は縦長のものがほとんどであるが、53のみ横長のものとなる。有孔円盤とした72は、周縁は磨られており、裏面の中心に回転運動により磨られた凹みが見られる。土製円盤とした71は、周縁は磨られていないが、





1　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム中少
2　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム大微、ローム中～粒少
3　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム大～粒少
4　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒中
5　7.5YR4/6　褐色　焼土粒微、炭化物・粒微、ローム大微、ローム中～粒中
6　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム小・粒中
7　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム小・粒少
8　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム小・粒中
9　5YR4/8　赤褐色　焼土小中、焼土粒多、ローム中微、ローム小・粒中
10　5YR4/8　赤褐色　焼土中～粒多、ローム中少、ローム粒中
11　7.5YR4/6　褐色
12　柱穴覆土

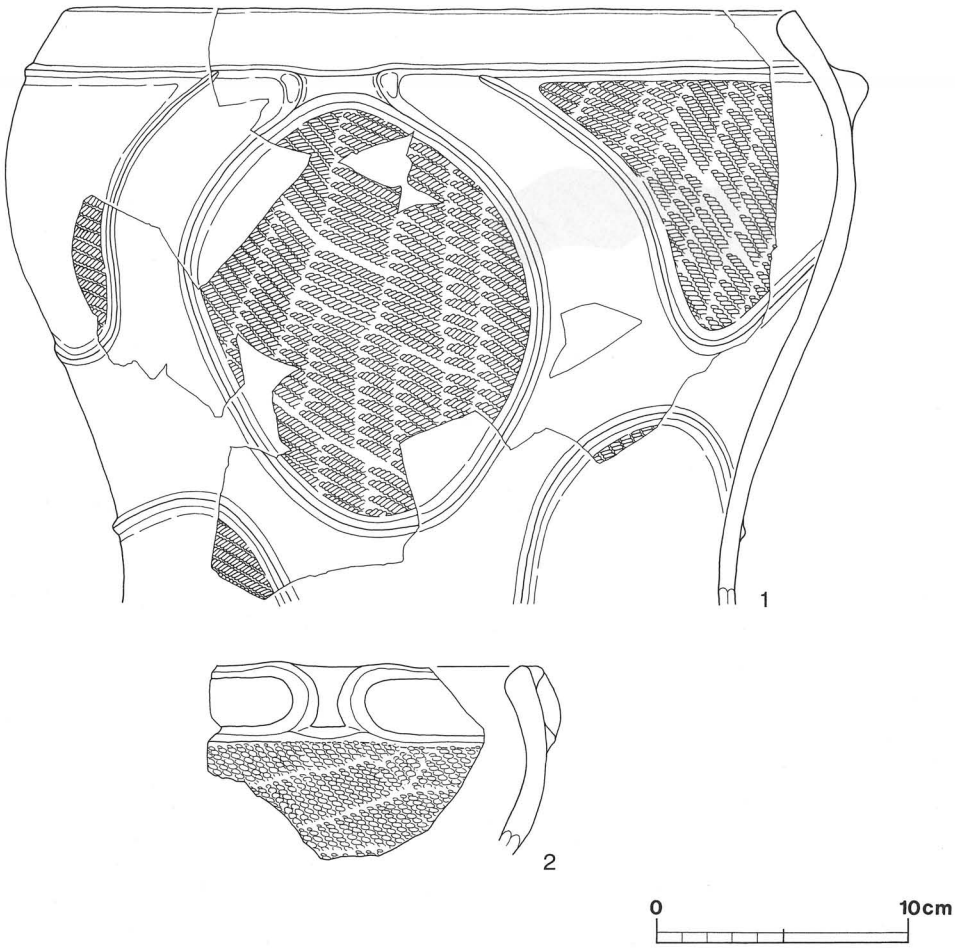
第14図　第９号住居跡



第15図　第９号住居跡遺物出土状況

73は周縁が磨られている。

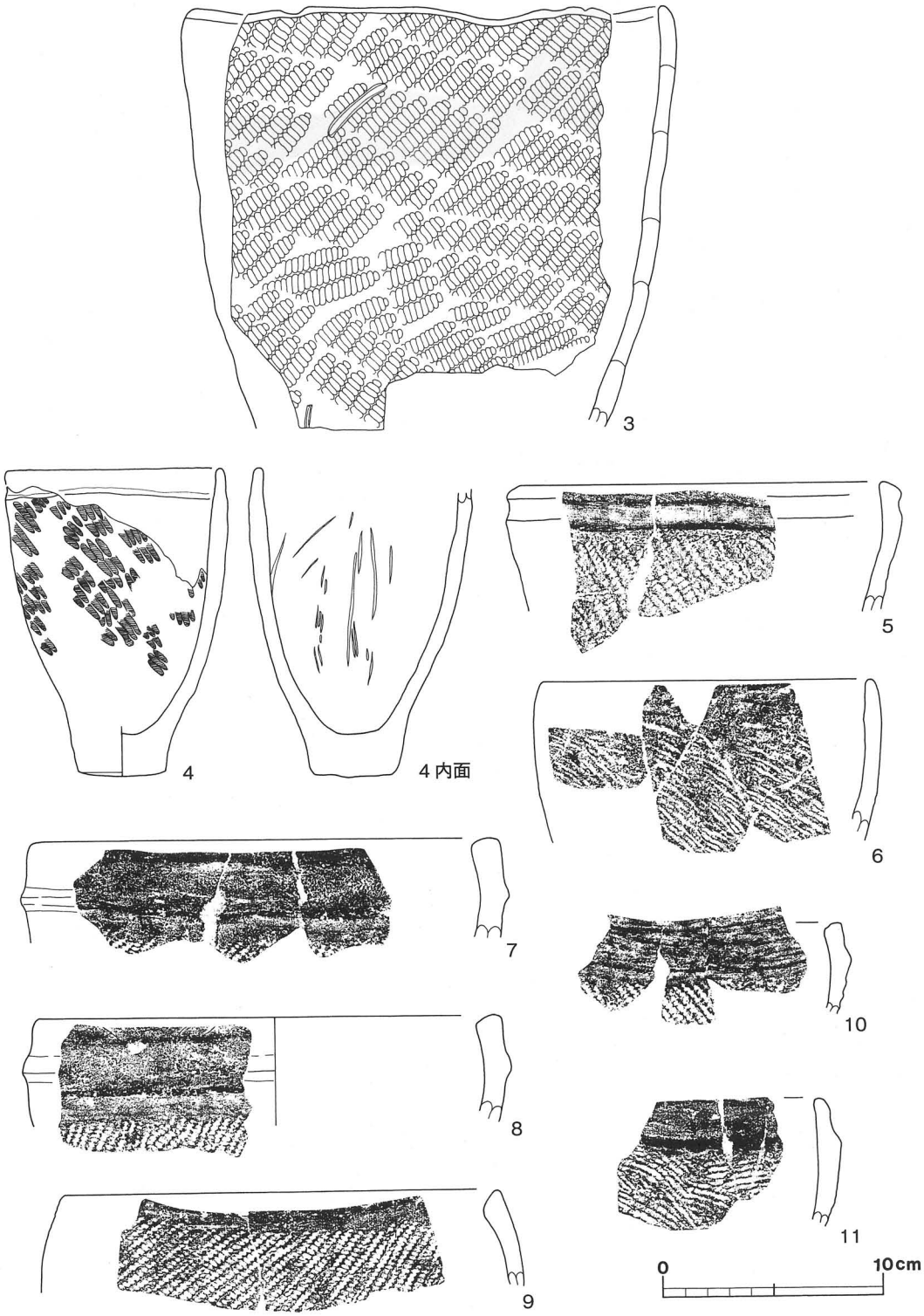
所　見　本住居跡の柱穴は２個一対になっており、住居の建て替えがあったものと考えられる。炉２についてはその確認された位置から、第１号竪穴遺構にかかわる可能性が考えられる。また、本住居跡出土土器には、第７号住居跡及び第１号竪穴遺構と接合したものがあり、前者の状況は遺構間の関連が窺われ、後者の状況は混入の可能性が考えられる。本住居跡の時期については、出土遺物に中期後半の加曽利Ｅ３式や加曽利Ｅ４式土器が混在して見られるが、後者が主体を占めることから、加曽利Ｅ４式期の所産と考えられる。



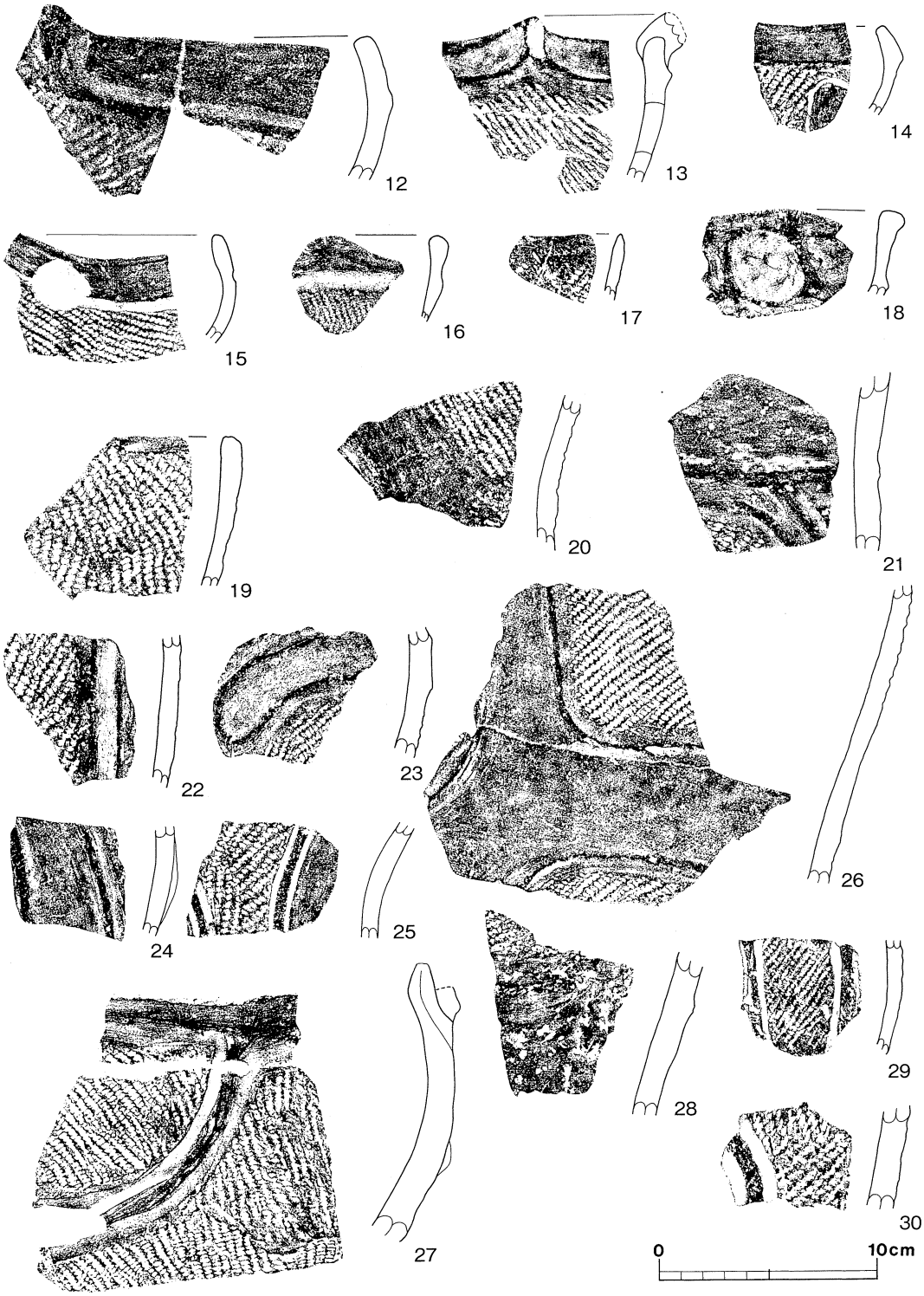
第16図　第９号住居跡出土遺物（１）

第９号住居跡出土土器

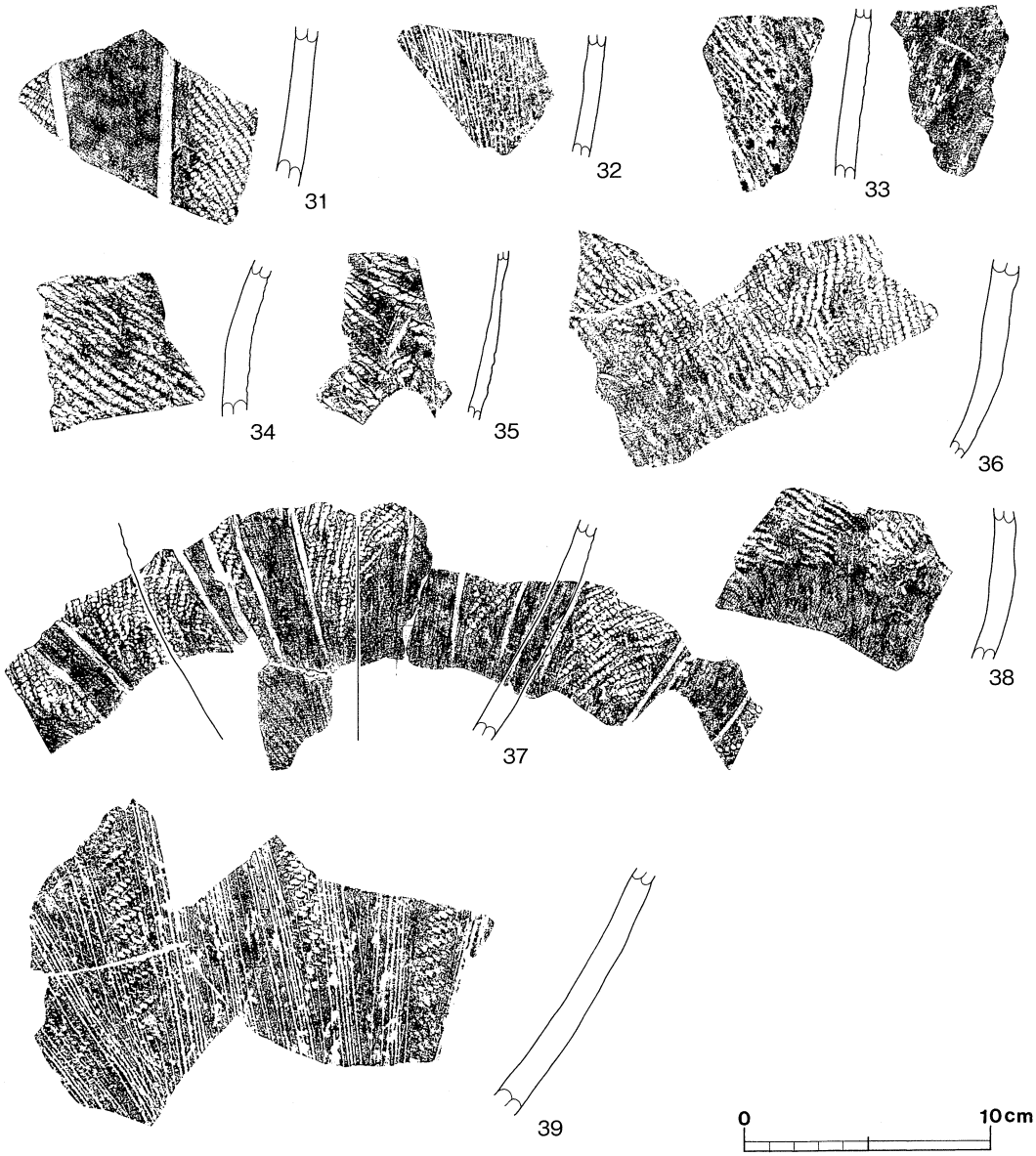
図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁～胴	A：〔28.8〕 C：(23.5)	浅黄橙	石英・長石◎、金雲母△	平縁。緩いキャリパー形を呈する。微隆起線により口縁部に無文帯や円形・「U」状区画文を描く。同区画文内にはLR縄文を施文。	No.318 炭化物付着
2	深鉢	口縁	A：〔29.0〕 C：(7.5)	橙	石英・長石・金雲母○	平縁の口縁部で口唇部に隆起線による楕円区画文が作出される。以下はRL縄文が施文される。	No.320
3	深鉢	口縁～胴	A：〔21.2〕 C：(19.2)	橙	石英・長石・雲母○	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。全面に太めのLR縄文を施文。内面は丁寧にナデられる。土器断面に輪積痕が観察される。	No.319 炭化物付着
4	深鉢	口縁～底	A：〔9.8〕 B：4.0 C：13.9	にぶい橙	石英・長石◎、雲母△、赤色粒	平縁の小型土器。胴部から口縁部にかけ直立する。口唇部下に沈線状の段差が巡り、無文帯作出。以下にはLr縄文を縦回転施文。底部厚手。	No.147 擬口縁の可能性もあり
5	深鉢	口縁	A：〔16.5〕 C：(5.8)	にぶい黄橙	石英・長石△	やや外傾する平縁の口縁部。口唇部下に凹線が１条めぐる。以下にはＬＲ縄文が縦回転施文される。	No.164
6	深鉢	口縁	A：〔15.0〕 C：(7.3)	黄灰	石英・長石◎、砂粒○	平縁。胴部から口縁部にかけ直立する。全面にＬ１縄文を縦回転施文する。口唇部下は無文帯となる。内面は荒い調整がなされる。	No.なし 炭化物付着



第17図　第９号住居跡出土遺物（２）

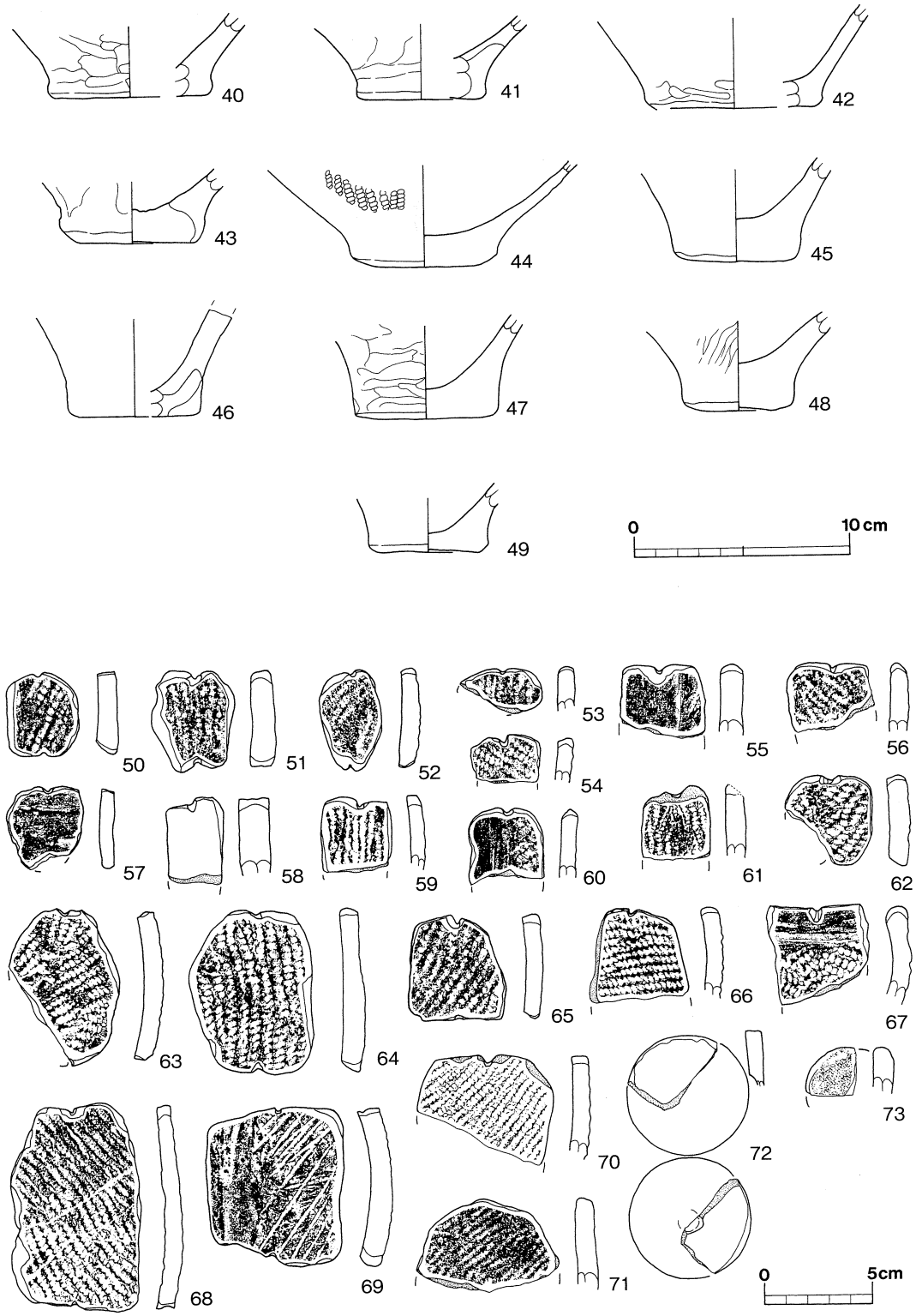


第18図　第９号住居跡出土遺物（３）



第19図　第９号住居跡出土遺物（４）

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
7	深鉢	口縁	A：〔21.4〕 C：(4.9)	淡黄	石英・長石○、金雲母△	平縁。やや内湾する口縁部を持つ。口唇部下に微隆起線により無文帯を作出し、以下はRL縄文が縦回転施文。	№165 炭化物付着
8	深鉢	口縁	A：〔21.3〕 C：(4.8)	淡黄	石英・長石○、金雲母△	平縁。やや内湾する口縁部を持つ。口唇部下に微隆起線により無文帯を作出し、以下はRL縄文が縦回転施文。	№171 №165と同一個体
9	深鉢	口縁	A：〔19.7〕 C：(4.4)	橙	石英･長石･金雲母◎	平縁。やや内湾する口縁部を持つ。口唇部下に狭い無文帯を作出。以下はRL縄文縦回転施文。口唇部は肥厚する。	№169



第20図　第９号住居跡出土遺物（５）

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
40	深鉢	底	B：〔7.0〕 C：(3.3)	にぶい黄橙	白色粒◎、赤色粒△	無文。外面ナデ。	№183
41	深鉢	底	B：〔6.0〕 C：(3.4)	橙	石英・長石△	無文。外面・底面削りの後ミガキ。	№181
42	深鉢	底	B：〔7.3〕 C：(4.2)	にぶい赤褐	石英・長石・黄色粒△	無文。底面に筋状の圧痕。	№184 赤色顔料付着
43	深鉢	底	B：〔5.5〕 C：(2.85)	明赤褐	石英・長石◎	無文。	№180 被熱赤化
44	鉢?	底	B：6.8 C：(4.6)	黒褐	石英・長石・雲母◎	単節RL。底面凸レンズ状。SI-7-24と同一個体か。底部から大きく外傾する。	№175 炭化物付着。
45	深鉢	底	B：5.9 C：(4.2)	浅黄橙	石英・長石・砂粒◎、黒色片△	無文。内外面荒れる。	№177
46	深鉢	底	B：〔6.2〕 C：(4.6)	にぶい橙	石英・長石・金雲母◎	無文。底面擦れる。	№182
47	深鉢	底	B：4.3 C：(4.2)	橙	石英・長石○	無文。底面凸レンズ状。外面・底面は磨かれる。	№176 炭化物付着
48	深鉢	底	B：5.2 C：(3.7)	にぶい橙	石英・長石◎	無文。やや上げ底。底面に灰付着。	№178
49	深鉢	底	B：5.5 C：(2.5)	橙	石英・長石◎、黒色片△	無文。上げ底。器面剥離。	№179

9号住居跡出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
50	土器片錘	SI-9	完形	3.9× 3.4	1.0	18.0	全周磨り	切り目1対
51	土器片錘	SI-9	完形	4.7×3.75	1.15	24.0	一部磨り	切り目1対
52	土器片錘	SI-9	完形	4.7×2.75	0.9	13.0	全周磨り	切り目1対
53	土器片錘	SI-9	一部欠	2.1× 3.7	0.8	5.0	全周磨り	切り目1ヶ
54	土器片錘	SI-9	1/2	2.2×3.25	0.75	8.0	全周磨り	切り目1ヶ
55	土器片錘	SI-9	2/3	3.4×3.95	1.1	16.0	全周磨り	切り目1ヶ
56	土器片錘	SI-9	2/3	3.15× 4.0	0.8	12.0	一部磨り	切り目1ヶ
57	土器片錘	SI-9	一部欠	3.75× 3.6	0.7	12.0	一部磨り	切り目1ヶ
58	土器片錘	SI-9	一部欠	4.0× 2.7	1.45	22.0	全周磨り	切り目1ヶ
59	土器片錘	SI-9	一部欠	3.5× 3.3	0.7	12.0	全周磨り	切り目1ヶ
60	土器片錘	SI-9	2/3	3.2× 3.5	0.75	12.0	全周磨り	切り目1ヶ
61	土器片錘	SI-9	2/3	3.4× 3.2	0.95	12.0	全周磨り	切り目1ヶ
62	土器片錘	SI-9	3/4	4.15×4.05	1.0	17.0	全周磨り	切り目1ヶ
63	土器片錘	SI-9	3/4	7.3×4.95	0.9	39.0	全周磨り	切り目1ヶ
64	土器片錘	SI-9	完形	7.6× 5.7	1.05	54.0	全周磨り	切り目1対
65	土器片錘	SI-9	完形	4.85× 4.5	0.85	24.0	一部磨り	切り目1対
66	土器片錘	SI-9	2/3	4.2× 4.6	0.8	18.0	全周磨り	切り目上端3ヶ
67	土器片錘	SI-9	2/3	4.5×4.65	1.0	25.0	無調整	切り目1ヶ
68	土器片錘	SI-9	完形	9.65× 6.0	0.85	72.0	一部磨り	切り目1対
69	土器片錘	SI-9	完形	7.45×6.45	1.05	72.0	全周磨り	切り目1対
70	土器片錘	SI-9	1/2	4.75× 6.3	0.85	30.0	全周磨り	切り目1ヶ
71	円盤	SI-9	1/2	4.3×6.55	0.9	25.0	打割	円形
72	有孔円盤	SI-9	1/4	3.2× 3.7	0.75	10.0	全周磨り	裏面より穿孔　未貫通
73	円盤	SI-9	1/4	2.25× 2.3	0.9	5.0	全周磨り	円形

第12号住居跡〔SI－12〕（第21～24図　ＰＬ６・44・45・52・54）

位　置　Ｎ－23区付近に位置し、一部調査区外にかかる。

重複関係　なし。

規　模　長径6.6m×短径6.24mの不整円形で、確認面からの深さは10～26cmである。現状で西側の壁はエリア外に張り出しているが、本来は円形に巡るものと考えられる。南北方向に長軸が存在するものと思われる。

壁　残りのよい所では外傾ぎみに立ち上がる。

床　特に踏み固められたところはなく、若干凸凹が見られるが全体的に平坦である。

炉　長軸1.22m×短軸0.8mの不整形で、深さ36cmを測る。炉床は焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。位置は住居のほぼ中央に位置する。

柱　穴　全部で24ヵ所確認された。主柱穴と思われるものは10ヵ所を数え、この内Ｐ１・Ｐ６・Ｐ８は壁に沿っている。径は32～42cm、深さは31～48cmを測る。Ｐ９・Ｐ11・Ｐ12・Ｐ19・Ｐ20は炉の周囲を巡る。径は30～48cm、深さ34～58cmを測る。Ｐ23とＰ５は炉を挟んで対称の位置にあり、径32～38cm、深さ32～38cmを測る。支柱穴と考えられるものはＰ４・Ｐ10・Ｐ18・Ｐ22で、径22～38cm、深さ17.2～23.3cmを測り、その他のピットは性格不明である（木の根の撹乱がひどい）。主柱穴はおよそ五角形に配されており、一部２重になる所が見られる。

第12号住居跡ピット

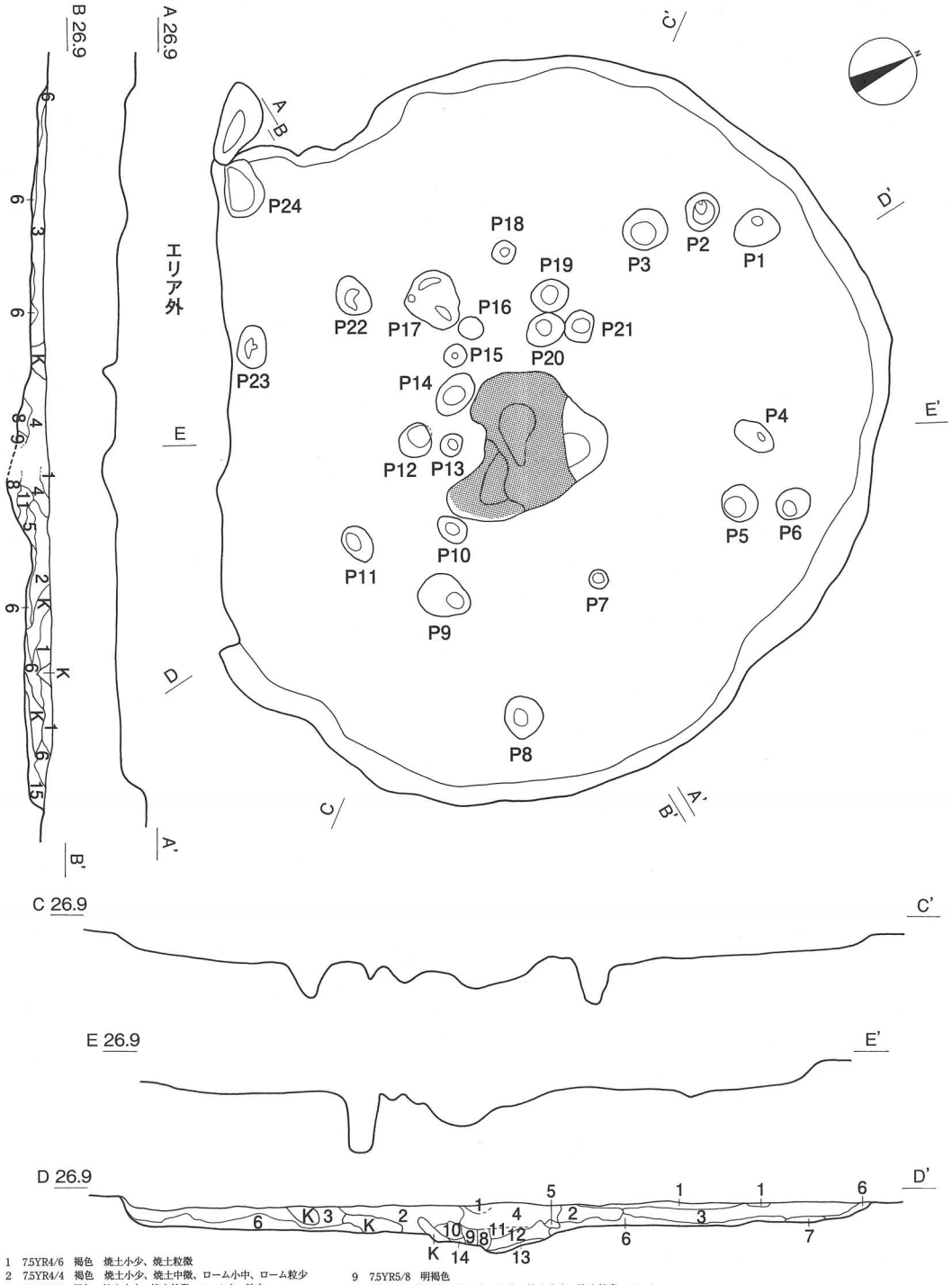
番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
径（cm）	42	36	40	38	32	32	16	38	48	28	34	30
深さ（cm）	48	15	13	20	35	36	12	31	34	23	30	58

番号	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24
径（cm）	20	42	20	20	44	22	36	36	30	36	38	50
深さ（cm）	10	15	14	－	17	17	38	43	14	19	34	12

覆　土　覆土は15層から構成される。全体に褐色土の土層で、木の根による撹乱が多く入り込んでいる。炉上の４層にも大型の焼土ブロックも見られ、先の状況を反映している。覆土の下層にはローム粒が多く含まれている。

遺物出土状況　多くの遺物が出土した。ほとんど床面から浮いた状態で出土し、住居廃絶後、自然堆積の過程で投棄されたものと考えられる。完形品は１点もなく、口径が復元できたものが４点、胴径が復元できたものが１点みられる。第15号住居跡出土遺物と接合関係にある遺物が１点出土した。

出土遺物　出土遺物は深鉢形土器が大半を占めるが、３の胴部が強く張り出し特殊な器形を呈するものや５・11・13などの鉢と考えられる器種もみられる。文様の特徴は、１・２のように沈線が両側に沿う隆起線により区画文が描かれるものや、４・８・14～17・26などの沈線によって区画文が描かれ区画内が磨り消されるものも見られる。底部は26のみで、不安定な小さな底部から直線的に外傾して立ち上がる特徴が見られる。



1　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒微
2　7.5YR4/4　褐色　焼土小少、焼土中微、ローム小中、ローム粒少
3　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒微、ローム中・粒少
4　7.5YR4/6　褐色　焼土大・中微、焼土小・粒少、ローム中少、ローム小微、ローム粒中
5　7.5YR4/6　褐色　焼土粒中、ローム粒中
6　10YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒微、ローム中・小少、ローム粒多
7　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒中、炭化粒少、ローム中・小少、ローム粒中
8　7.5YR5/8　明褐色　焼土粒極多、ローム粒中
9　7.5YR5/8　明褐色
10　5YR4/6　赤褐色　焼土大・中少、焼土中中、焼土粒多、ローム粒中
11　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒多
12　5YR5/6　明赤褐色　焼土小・粒極めて多
13　5YR5/6　明赤褐色　焼土層
14　7.5YR5/8　明褐色　焼土中・小中　焼土粒極めて多
15　壁崩落土

第21図　第12号住居跡

1は平縁の深鉢形土器で頸部の括れは緩い。口唇部に幅の狭い無文帯が設けられ、頸部までの間は沈線が両側に沿った隆起線によって帯状・渦巻き状の区画文が横位に展開する。区画内には縄文が施文される。2も平縁の深鉢形土器と思われ、口縁部が直立する。沈線が両側に沿った隆起線によって帯状の区画文が横位に展開し、区画内に節の細かな縄文が施文される。3は球形の器形で、器面は破熱のためか著しく剥離し文様は不鮮明であるが、およそ縄文を地文に上下方向に連繋する2本組の隆起線が見られる。4は平縁の深鉢形土器で、沈線によって区画された逆「U」字状の文様が横位に展開し、区画内は磨り消されている。4・8は接合しないが同一個体である。地文の縄文は口縁部近くが横回転施文であるが、ほかは縦回転施文も併用され、羽状構成を見せる部位もある。6は波状口縁の深鉢形土器で、口唇部に沿って太い沈線が引かれ、その中に連続刺突文がなされる。地文にはＬｒ＋１の附加条縄文が施文され、施文方向の変化により羽状構成をとる。6・14は緻密な胎土や地文の状況から同一個体と考えられる。13は頸部が括れる鉢形土器と考えられ、無文の口縁部が若干立ち上がると思われる。7・11・22・23は条線文の施文されるものである。7は楕円形の区画内に条線が充填される。25は縄文と条線文の併用例であり、内面に赤色顔料が残る。24・25は同一個体である。26は大型の深鉢形土器の底部である。26と15・16は同一個体であり、LRL複節縄文が縦回転施文される。

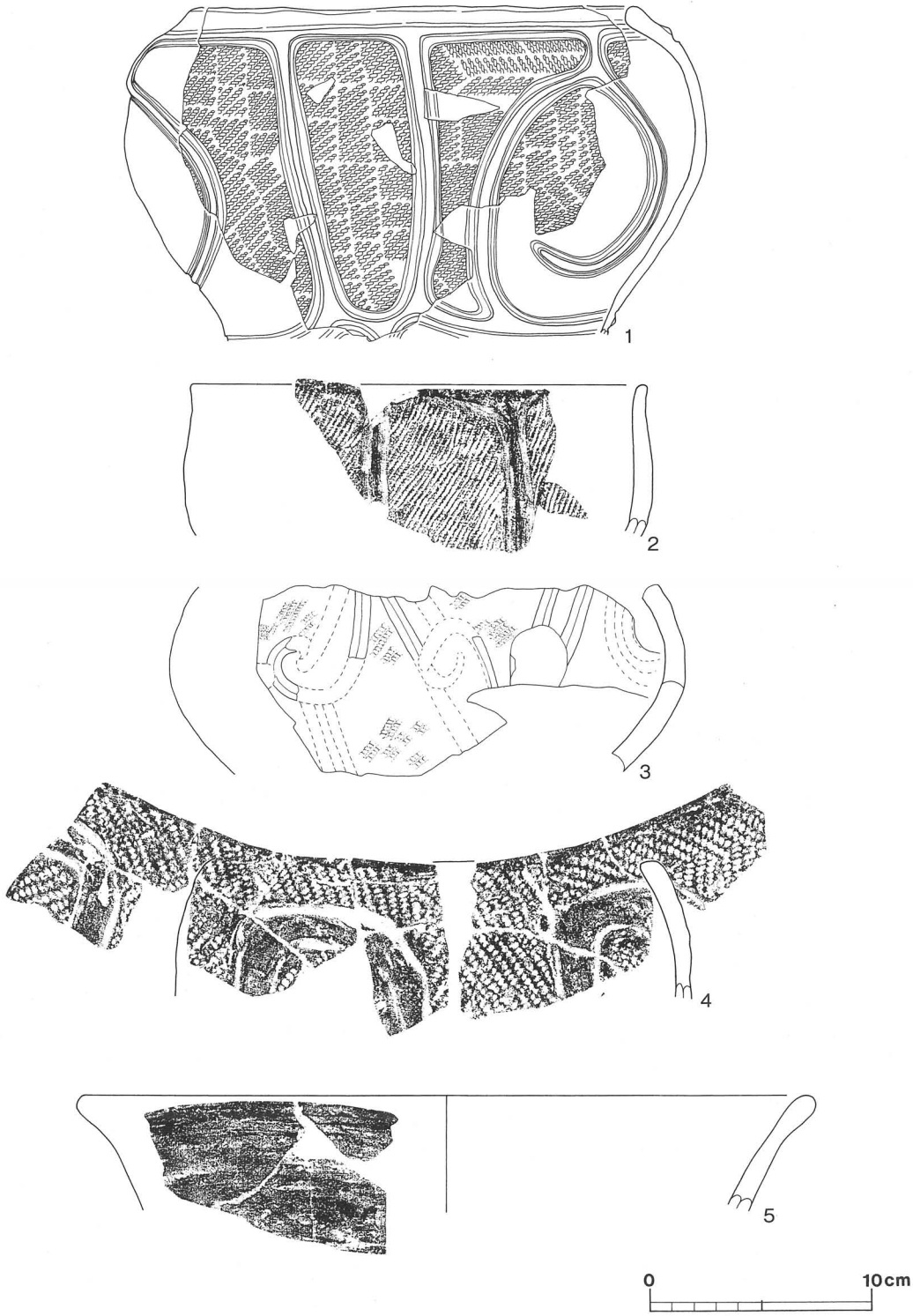
土製品として土器片錘が12点（27～38）出土している。小型のものが多く、37・38のみやや大きい。多くが長軸方向に一対の切れ目を施しているが、36のみ短軸方向に切れ目を施している。

石器は1点で、39の石鏃である。基部が破損している。腹面に2次調整が細かく施され、背面は先端と側縁にのみ行われる。本資料は蛍光X線分析の結果、神津島恩馳島群産と比定された。

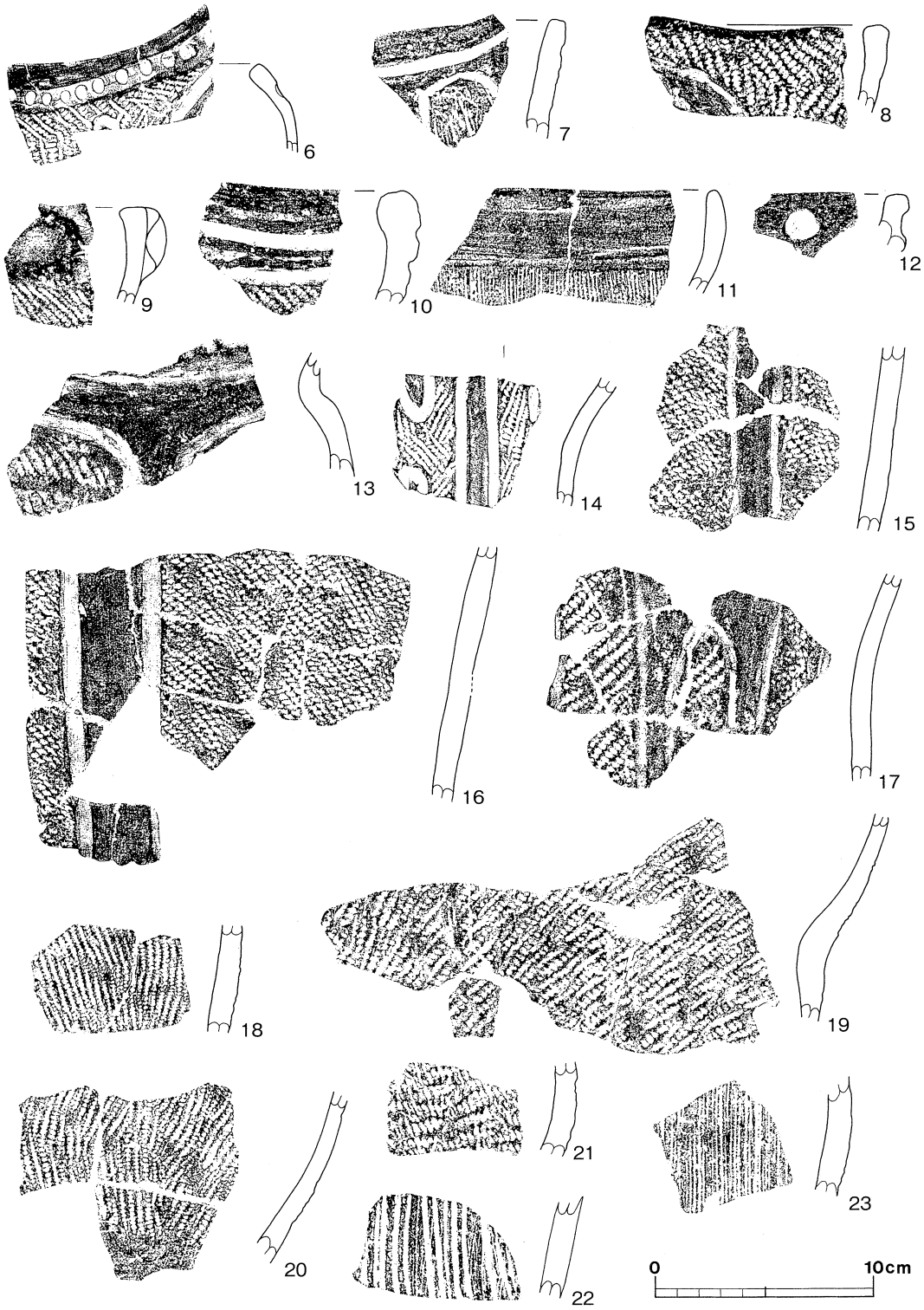
所　見　本住居跡は、今回の調査エリア内で確認された竪穴住居跡内で最も規模の大きなものといえる。また、本住居跡出土土器には、第15号住居跡出土のものと接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曽利Ｅ３式土器が見られることから同期の所産と考えられる。

第12号住居跡出土土器

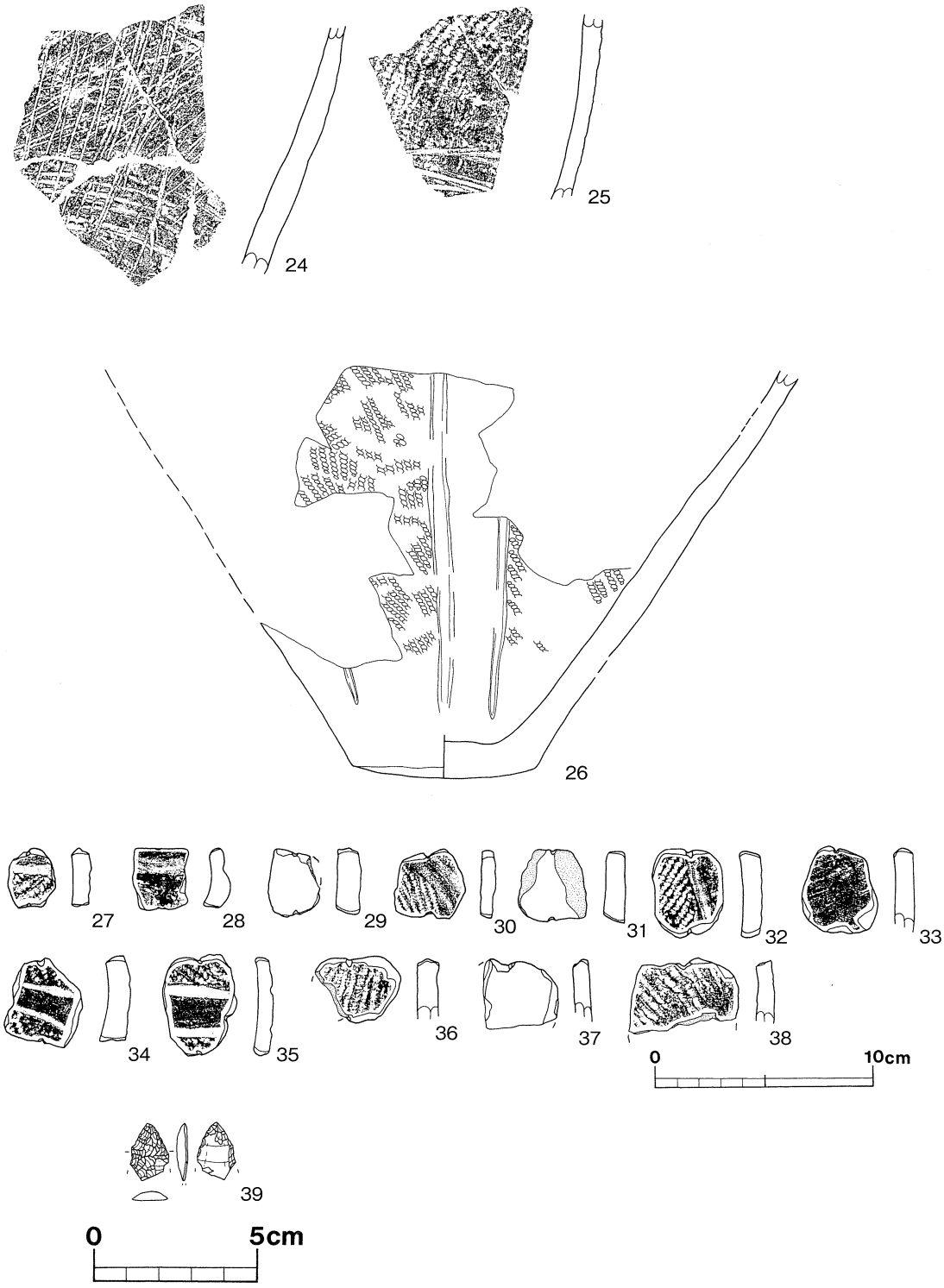
図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A：〔19.8〕 C：（15.1）	にぶい橙	長石・石英◎、黒色片○	平縁。キャリパー形を呈する。隆起線により口縁部に無文帯を設け、渦巻き状などの区画文を描く。地文にはRL縄文を施文。	No.192
2	深鉢	口縁	A：〔20.4〕 C：（6.8）	にぶい黄橙	長石・石英◎	平縁。口縁部が直立し、口唇部がやや外反する。隆起線による「∩」字状区画文が描かれ、区画内にはLR縄文が施文される。	No.なし
3	深鉢	口縁	C：（8.6）	灰黄	長石・石英△、黄色粒・赤色粒○	キャリパー形を呈する土器の口縁部と思われる。口唇部欠損。２本組の隆起線による渦巻状文が描かれる。地文に縄文施文。	No.195 器面剥落
4	深鉢	口縁	A：〔20.1〕 C：（6.2）	橙	長石・石英○	平縁。緩く内湾する口縁部。凹線による「∩」字状区画文が配され、区画内は磨り消され無文。区画文外は単節RL縦・横回転施文。	No.342
5	鉢	口縁	A：〔33.2〕 C：（5.2）	橙	長石・石英△	平縁。外傾する口縁部。口唇部は肥厚し丸味を持つ。内外面が無文である。内外面ともにナデ・ミガキが施される。	No.197 赤色顔料付着か
26	深鉢	底	B：8.4 C：（13.6）	にぶい黄橙	石英・長石◎	底面凸レンズ状で不安定。胴部へ大きく開く器形。平行する垂下沈線間は無文となり、そのほかはLRL縄文が施文される。	No.191 15・16と同一個体



第22図　第12号住居跡出土遺物（1）



第23図　第12号住居跡出土遺物（2）



第24図　第12号住居跡出土遺物（3）

第12号住居跡出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
27	土器片錘	SI-12	完形	2.7×2.2	0.85	6.0	一部磨り	切り目１対
28	土器片錘	SI-12	完形	2.8×2.5	0.95	8.0	無調整	切り目１対
29	土器片錘	SI-12	一部欠	3.05×2.35	1.1	8.0	一部磨り	切り目１対
30	土器片錘	SI-12	完形	3.2×3.2	0.7	8.0	一部磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
31	土器片錘	SI-12	完形	3.3×3.2	0.95	11.0	一部磨り	切り目１対
32	土器片錘	SI-12	完形	4.15×3.3	0.95	17.0	全周磨り	切り目１対
33	土器片錘	SI-12	完形	3.95×3.5	0.9	16.0	全周磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
34	土器片錘	SI-12	完形	3.95×3.4	1.1	17.0	一部磨り	切り目１対
35	土器片錘	SI-12	完形	4.45×3.25	0.7	31.0	全周磨り	切り目３ヶ
36	土器片錘	SI-12	一部欠	3.0×3.95	1.0	13.0	全周磨り	切り目１対
37	土器片錘	SI-12	1/3	3.2×3.45	0.75	10.0	全周整形	切り目１ヶ
38	土器片錘	SI-12	1/2	3.1×5.0	0.85	16.0	打割	切り目１ヶ

第12号住居跡出土石器

図版No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
39	炉上	石鏃	(1.9)	(1.2)	3.0	(0.5)	黒曜石	石21　脚部折損　神津島恩馳島群産

第13号住居跡〔SI－13〕（第25～28図　ＰＬ６・45・46・52～54）

位　置　調査区中央南側のＺ－23区付近に位置する。

重複関係　第40・41号土坑及び第１号住居跡（古墳時代）と重複している。

規　模　長径5.84m×短径5.1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10～30cmの深さを測る。

壁　遺存状況の良い所では外傾ぎみに立ち上がる。

床　全体的に平坦であり、特に踏み固められた所は見られない。

炉　２基確認されている。炉１は、住居跡のほぼ中心にあり、長径80cm×短径70cmの不整な円形を呈し、深さ32cmである。炉床は焼けて赤変硬化し、やや凸凹がみられる。炉２は長径（64）cm×短径54cmの不整な円形を呈し、深さ22cmを測る。炉床は焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。位置は、住居中央から南東にずれた所にある。炉が２基近接して検出されているが、炉２は第41号土坑中に掘り込まれたものである。炉２の覆土上層にはハードロームブロック混じりの土層が覆っており、焼土の出土が散漫で炉１よりも先に造られたものと思われ、２基の炉は同時存在したものではないと考えられる。

柱　穴　主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ９と考えられ、住居の中央に五角形状に配される。これらピットの径は30～60cm、深さは24～90cmである。支柱穴と考えられるものは、Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10であり、Ｐ10が壁際にある。径は20～30cm、深さ12～19cmを測る。Ｐ４については、底面が二段になり柱穴の重複状況が確認され、深い方が古く浅い方が新しい。

第13号住居跡ピット

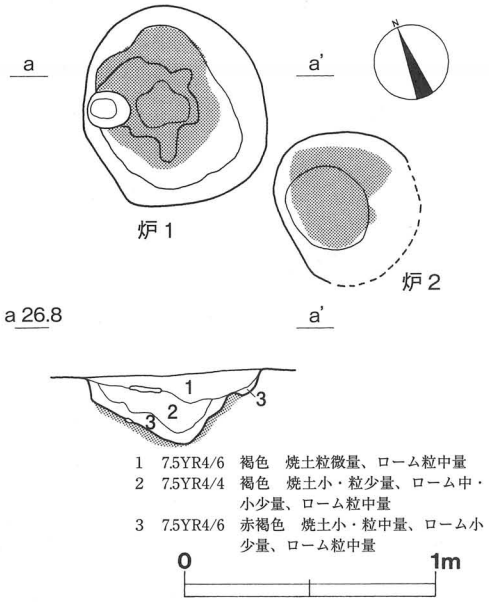
番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径（cm）	50	54	40	60	20	28	24	30	30	28
深さ（cm）	36	74	24	90	16	12	－	15	50	19

覆　土　覆土は９層から構成される。

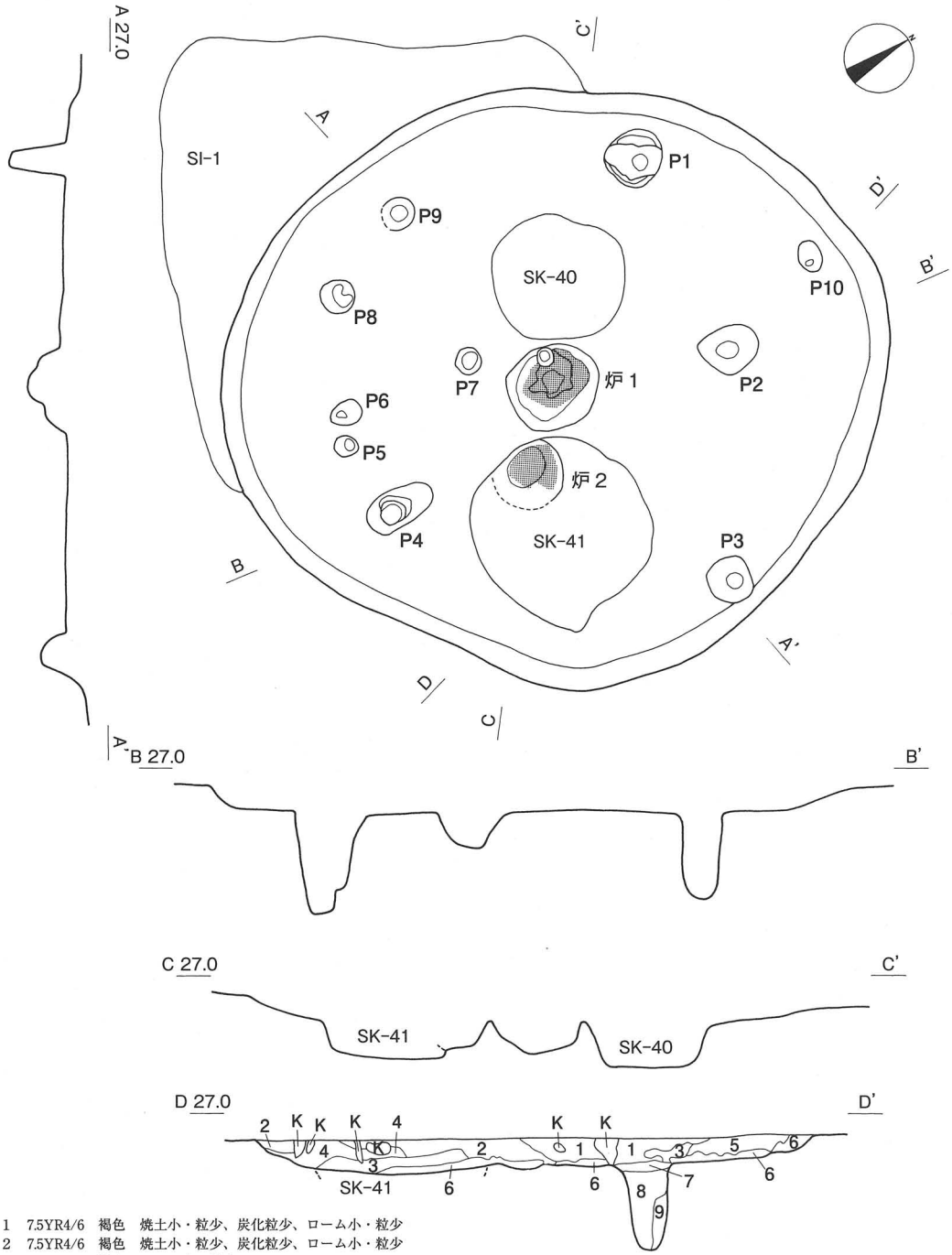
遺物出土状況　本住居跡及び第７号住居跡出土土器とは接合関係にある。遺物はほとんどが、住居廃絶後の過程で投棄されたものと考えられる。完形品は１点も出土せず、口径が復元できたものは１点見られる程度である。

出土遺物　出土遺物は全体的に少なく小片が多い。出土した土器のほとんどは深鉢形土器と思われる。底部は小さく不安定なものが出土している。

１～３・５・６は口唇部に無文帯を持ち、１～３には突起が付く。３は寸胴となる器形が考えられる。２は小型の土器で、口縁部に巡る１条の隆起線上に刺突文が施され、赤色顔料が付着してい



第25図　第13号住居跡炉



1　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒少、炭化粒少、ローム小・粒少
2　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒少、炭化粒少、ローム小・粒少
3　7.5YR4/6　褐色　ローム中～粒少
4　7.5YR4/6　褐色
5　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒微、炭化粒微、ローム小・粒少
6　10YR4/6　褐色　ローム粒極めて多
7　7.5YR4/6　褐色　ローム粒多
8　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中中、ローム粒多
9　7.5YR4/4　褐色　ローム大・粒中

第26図　第13号住居跡

る。４は口縁部が頸部から大きく開く器形の深鉢形土器で、太目の隆起線による円形区画文などが口縁部文様帯として展開する。口唇部下にも縄文が施文される少ない例である。３・５・９・13は微隆起線によって区画文が描かれる。２・６・10～12は沈線によって区画文が描かれ、６・10・11は区画内が磨り消され、２・12は縄文が施文されている。底部は17・19などの底径の小さなものが目立つ。６・９・14の器面や15の内面には炭化物が付着している。

土製品として土器片錘が６点（20～25）、土製円盤が１点（26）出土している。

石器は３点出土している。27は凹み石、29は砥石、28は石鏃で先端を欠損する。基部は浅い抉りが入る。両面とも細かく２次調整が施される。

所　見　本住居跡出土土器には、第７号住居跡出土のものと接合するものがあり遺構間の関連が疑われる。本住居跡の時期は、出土遺物が中期後半の加曽利Ｅ３式や加曽利Ｅ４式土器が混在することから同期の所産と考えられる。

第13号住居跡出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
2	深鉢	口縁	A：〔12.7〕 C：(3.9)	にぶい赤褐	石英・長石◎、雲母△	平縁であるが一部に突起が付く。口唇下に連続刺突の施された隆起線が巡る。以下には沈線による区画文が描かれ、区画内はLR縄文施文。	№203 赤色顔料付着

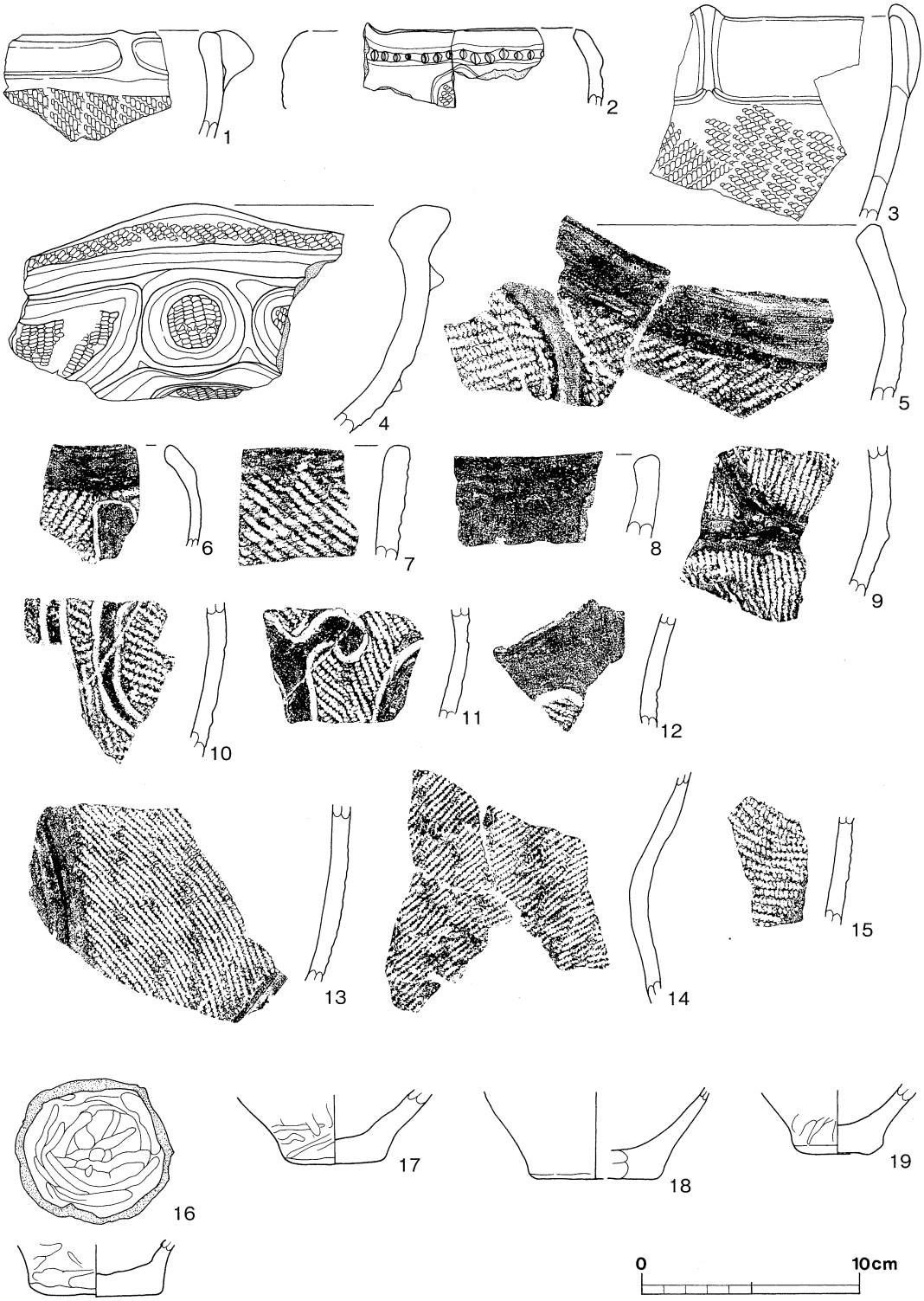
図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
16	深鉢	底	B：6.0 C：(2.6)	にぶい橙	石英・長石◎、赤色粒△	無文。底部の縁はやや丸みを持ち、内外面はナデられている。	№204
17	深鉢	底	B：4.6 C：(3.2)	にぶい橙	石英・長石◎、金雲母△	無文。外面ミガキがなされる。	№205
18	深鉢	底	B：6.0 C：(4.0)	にぶい黄橙	石英・長石○	無文。器面荒れる。	№207
19	深鉢	底	B：4.2 C：(2.8)	にぶい黄褐	石英・長石◎	無文。側縁が擦れる。	№206

第13号住居跡出土土製品

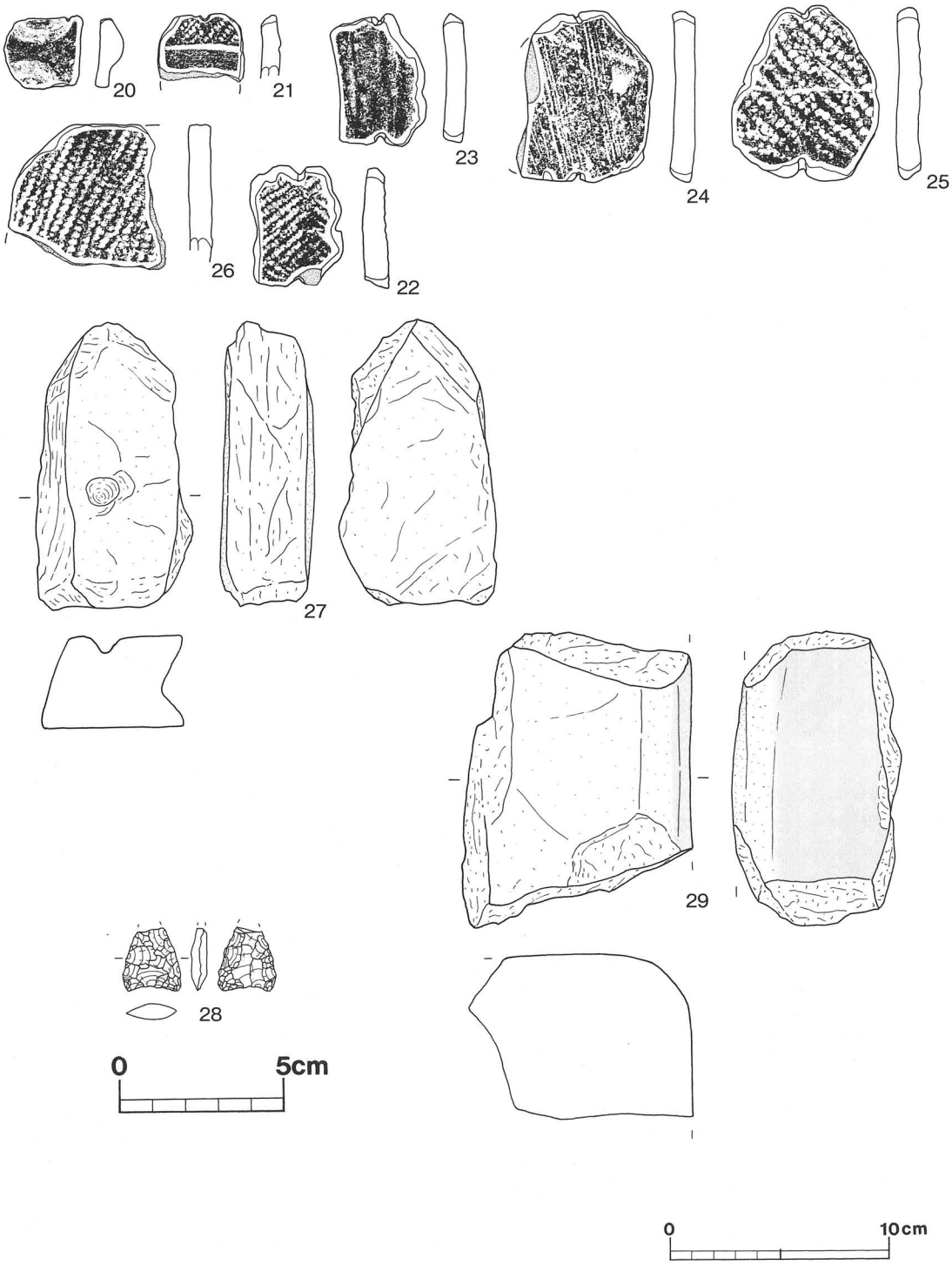
図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
20	土器片錘	SI-13	完形	3.25×3.45	1.1	12.0	全周磨り	切り目１ヶ
21	土器片錘	SI-13	2/3	2.85×4.0	0.8	13.0	全周磨り	切り目１ヶ
22	土器片錘	SI-13	完形	5.5×4.2	1.15	84.0	一部磨り	切り目３ヶ
23	土器片錘	SI-13	完形	5.9×4.0	0.95	32.0	一部磨り	切り目１対
24	土器片錘	SI-13	一部欠	7.85×5.85	1.0	54.0	一部磨り	切り目１ヶ
25	土器片錘	SI-13	完形	7.8×6.65	1.0	60.0	全周磨り	切り目１対
26	円盤	SI-13	1/4	6.5×6.9	1.0	56.0	一部磨り	円形

第13号住居跡出土石器

図版No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
27	床上	凹み石	(13.0)	(5.2)	4.2	(540.1)	雲母片岩	石22　表面に凹みあり
28	覆土下位	石鏃	(2.9)	1.7	1.7	(14.0)	チャート	石24　衝撃剥離で先端折損
29	ピット５	砥石	13.5	10.6	10.6	1409.0	花崗岩	石23　側面に砥面あり



第27図　第13号住居跡出土遺物（1）



第28図　第13号住居跡出土遺物（2）

第15号住居跡〔SI－15〕（第29～31図　ＰＬ７・46・53・54）

位　置　調査区西側のＬ・Ｍ－16・17区に位置する。

重複関係　なし。

規　模　長径4.9m×短径4.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは14～16cmを測る。

壁　遺存状況の良い所では外傾ぎみに立ち上がる。

床　全体的に平坦で、特に踏み固められた所は見られない。

炉　１基確認されているが、一度、途中まで埋まった後再び利用している（下方火床面を①、上方火床面を②とする）。長径80cm×短径68cmの不整楕円形を呈し、住居の長径上、中央からやや北側に寄る。深さは①が30cm、②が12cmである。炉床は①が焼けて赤変しており、やや凸凹がみられる。②は焼けて赤変が著しくハード化しており凸凹が著しい。

柱　穴　柱穴は全部で17本確認され、径20～40cmのものが見られ、20cm代のものが多い。これらの柱穴の深さは11～39cmである、Ｐ１～Ｐ10・Ｐ12～Ｐ16の15本が径３ｍの円形に配され主柱穴と考えられる。Ｐ11･17は壁際で確認されたが、入り口に関わるものかどうかは不明である。Ｐ４・Ｐ５とＰ１・Ｐ15の間に1.5mの等間隔のすき間が見られる。Ｐ１・Ｐ２は斜めに穿たれている。

第15号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
径（cm）	30	24	26	32	30	24	24	22	20	30	26	34
深さ（cm）	39	30	22	18	29	17	36	11	35	30	27	30

番号	P13	P14	P15	P16	P17
径（cm）	24	24	24	28	40
深さ（cm）	18	20	19	35	18

そして、Ｐ16とＰ17を接続する溝（幅10～22cm、深さ5.5～11.1cm）が見られるが性格不明である。

覆　土　覆土は18層から構成される。遺物は上・下層を問わず出土している。

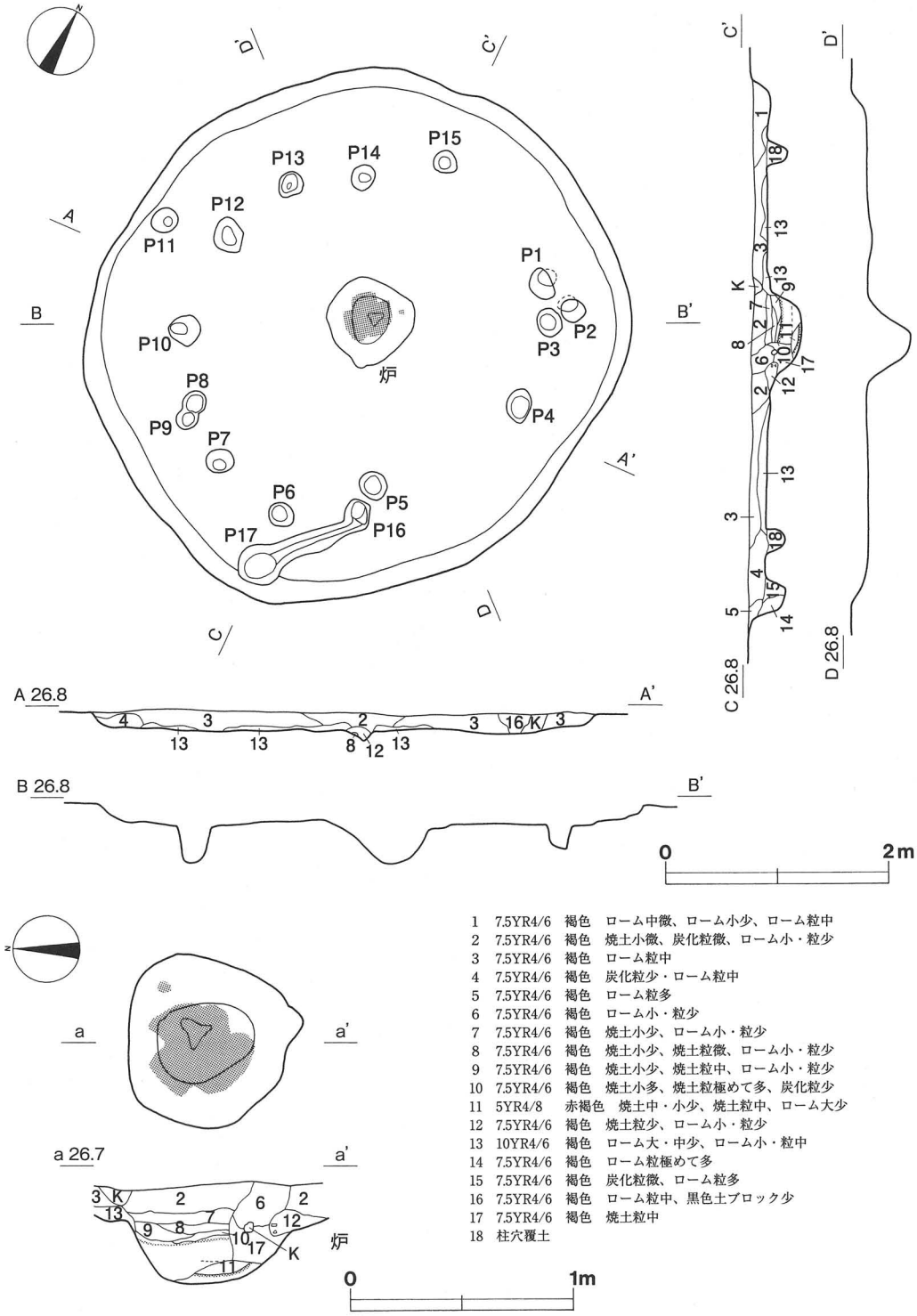
遺物出土状況　少量の遺物が出土した。床面から若干出土したほかは、大部分が床面から浮いた状態で出土した。炉内からも出土している。完形品は１点も出土せず、小破片ばかりで図示できたものはわずかである。このため出土遺物が住居の使用時に直接伴うかは不明である。

出土遺物　出土遺物は全体的に少ない。１は口唇部下に沈線を１条巡らせ無文帯を作出し、口唇部が肥厚する。２は無文で鉢形土器の口縁部であろうか。３・４は２本組の隆起線が引かれ、区画文を描く。５は１条の隆起線が引かれる。６・７は沈線により無文帯と縄文帯を描く。８は条線文が施文される。９は無節Ｌｒが縦回転施文される。

土製品として土器片錘が６点（11～16）出土している。

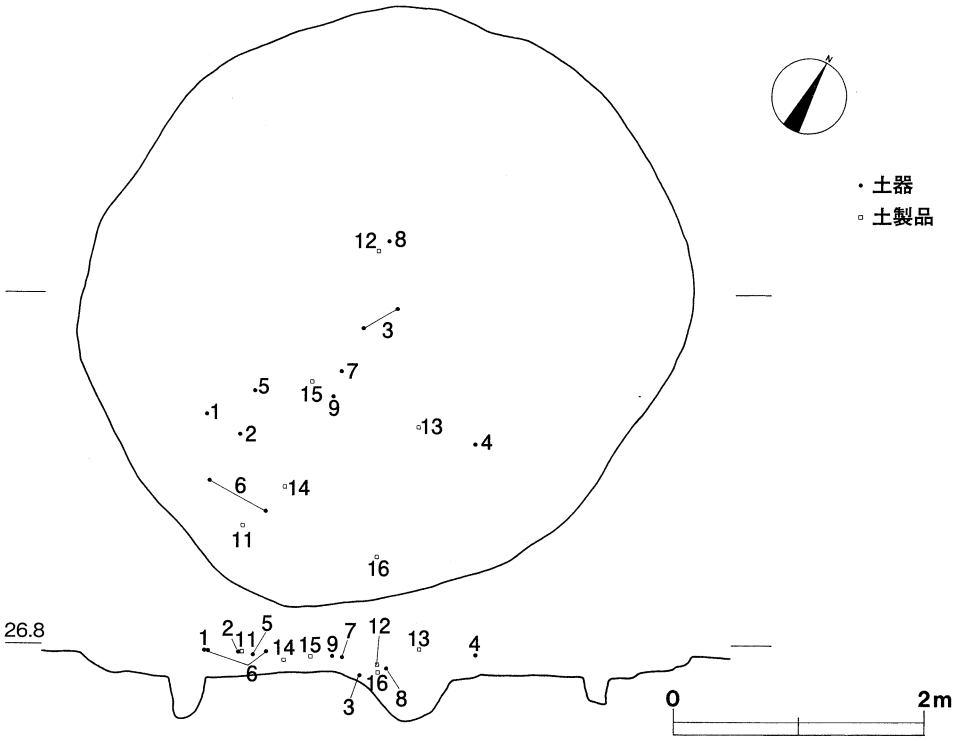
このほかに、黒曜石の剝片及び砕片が19点出土している。

所　見　本住居跡出土土器には、第12号住居跡出土のものと接合するものがあり遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曽利Ｅ３式土器が見られることから同期の所産と考えられる。



1 7.5YR4/6 褐色 ローム中微、ローム小少、ローム粒中
2 7.5YR4/6 褐色 焼土小微、炭化粒微、ローム小・粒少
3 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中
4 7.5YR4/6 褐色 炭化粒少・ローム粒中
5 7.5YR4/6 褐色 ローム粒多
6 7.5YR4/6 褐色 ローム小・粒少
7 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、ローム小・粒少
8 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒微、ローム小・粒少
9 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒中、ローム小・粒少
10 7.5YR4/6 褐色 焼土小多、焼土粒極めて多、炭化粒少
11 5YR4/8 赤褐色 焼土中・小少、焼土粒中、ローム大少
12 7.5YR4/6 褐色 焼土粒少、ローム小・粒少
13 10YR4/6 褐色 ローム大・中少、ローム小・粒中
14 7.5YR4/6 褐色 ローム粒極めて多
15 7.5YR4/6 褐色 炭化粒微、ローム粒多
16 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中、黒色土ブロック少
17 7.5YR4/6 褐色 焼土粒中
18 柱穴覆土

第29図 第15号住居跡・炉



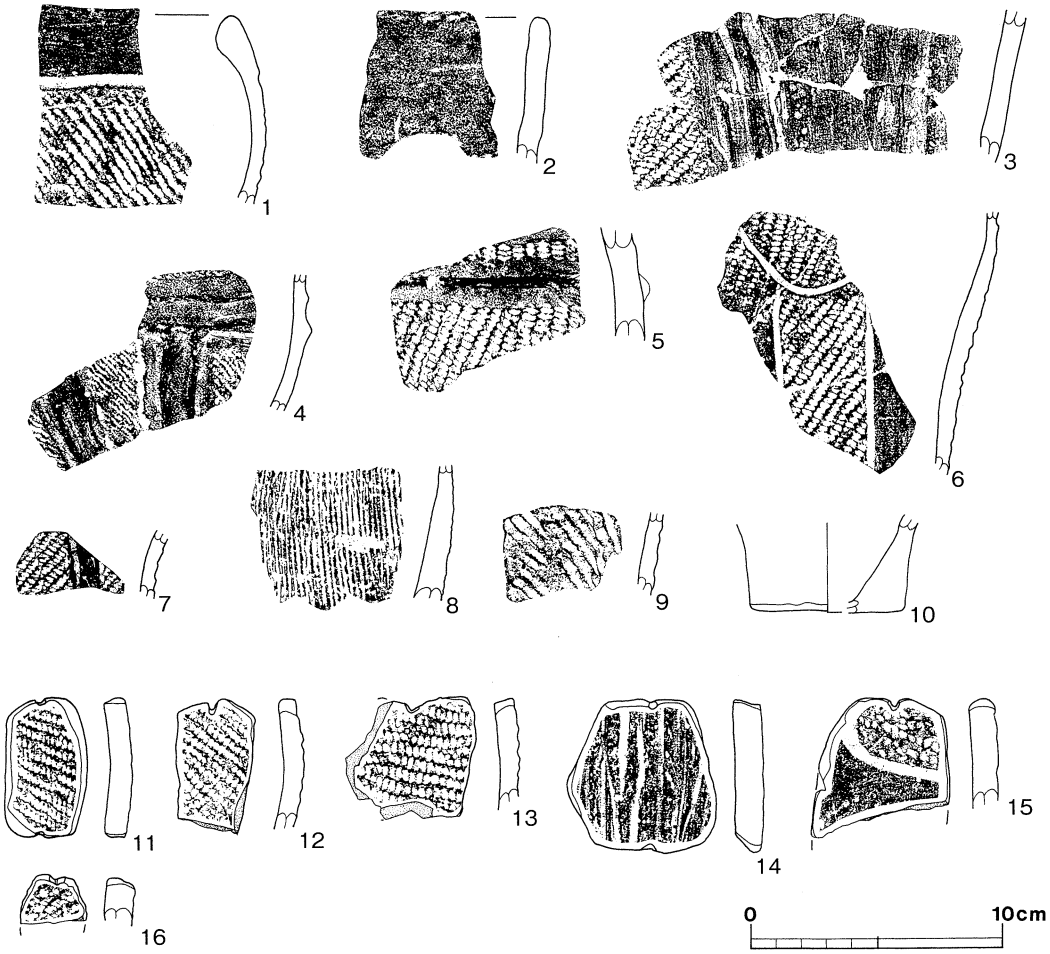
第30図　第15号住居跡遺物出土状況

第15号住居跡出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
10	深鉢	底	B：〔6.2〕 C：(3.6)	橙	石英・長石 ○	無文。器面荒れる。	№208

第15号住居跡出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
11	土器片錘	SI-15	完形	5.55×3.25	0.9	24.0	全周磨り	切り目１対
12	土器片錘	SI-15	一部欠	5.2×3.05	0.8	16.0	一部磨り	切り目１ヶ
13	土器片錘	SI-15	一部欠	5.2×4.9	0.85	24.0	打割	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
14	土器片錘	SI-15	完形	6.1×5.8	1.1	50.0	全周磨り	切り目１対
15	土器片錘	SI-15	2/3	4.85×5.4	1.0	35.0	全周磨り	切り目１ヶ
16	土器片錘	SI-15	1/2	1.9×2.6	1.2	6.0	全周磨り	切り目１ヶ



第31図　第15号住居跡出土遺物

第16号住居跡〔SI－16〕（第32～40図　ＰＬ８・９・47～49・53・54）

位　置　調査区西端Ｅ・Ｄ－15～17区に位置する。

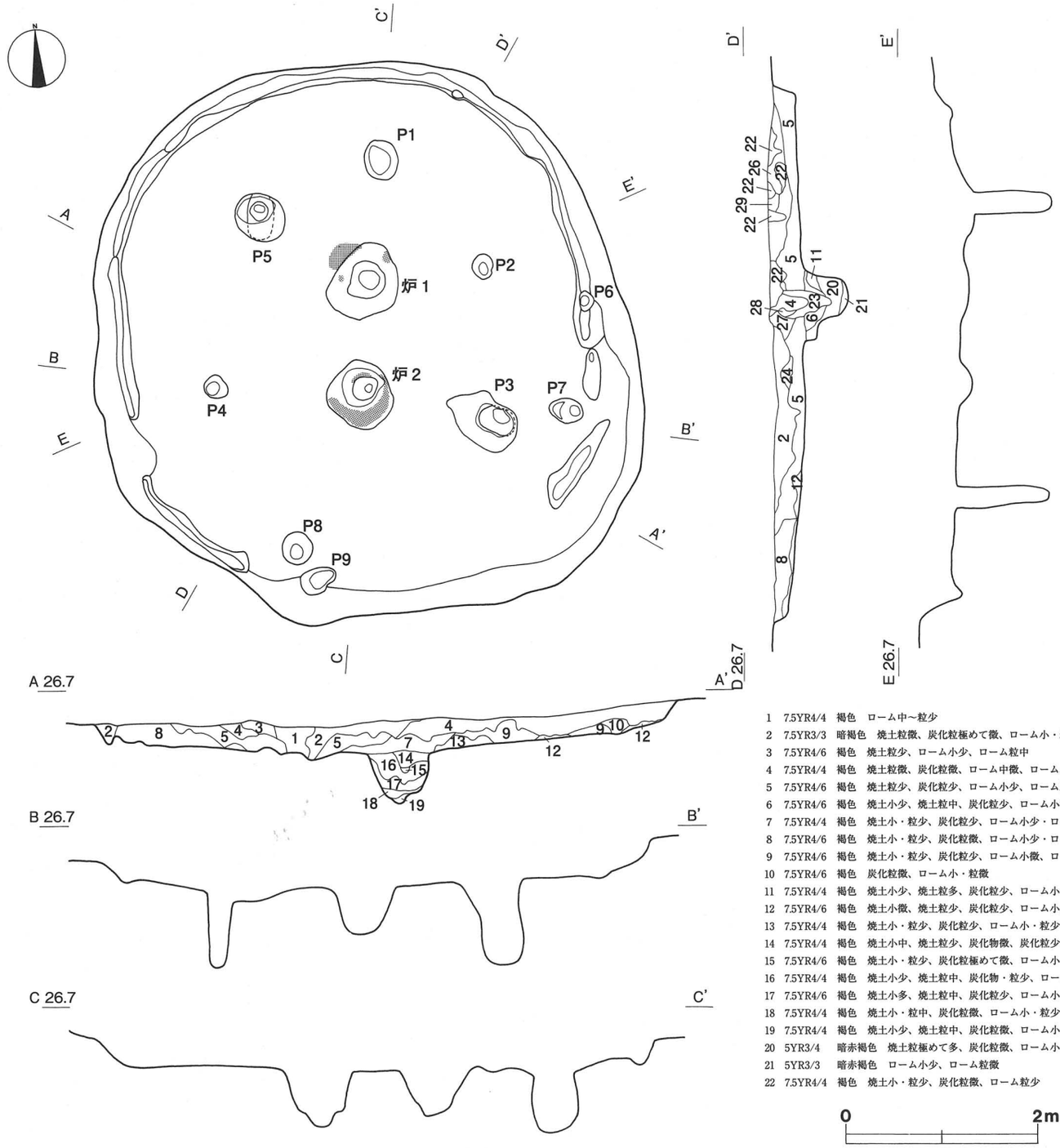
重複関係　なし。

規　模　長径（炉1・2上を通るライン）６m×短径（長径と直交し、炉1・2の中間を通るライン）5.64mの楕円形で、南東側がやや張り出している。確認面からの深さは18～42cmを測る。

壁　遺存状況の良い所では外傾ぎみに立ち上がる。

床　ほぼ平坦であるが、住居中央に向かって全体的に緩やかにくぼむ。特に踏み固められた所は見られない。南東側の床面には壁から離れて壁溝が確認され、住居空間の拡張を行った様な状況が窺われえる。全体の形状からしても南東部壁が歪んでいる。

炉　炉１は長径80cm×短径66cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。炉の壁は一部のみが焼けて赤



1 7.5YR4/4 褐色 ローム中～粒少
2 7.5YR3/3 暗褐色 焼土粒微、炭化粒極めて微、ローム小・粒少
3 7.5YR4/6 褐色 焼土粒少、ローム小少、ローム粒中
4 7.5YR4/4 褐色 焼土粒微、炭化粒微、ローム中微、ローム小少、ローム粒中
5 7.5YR4/6 褐色 焼土粒少、炭化粒少、ローム小少、ローム粒中
6 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒中、炭化粒少、ローム小微、ローム粒中
7 7.5YR4/4 褐色 焼土小・粒少、炭化粒少、ローム小少・ローム粒中
8 7.5YR4/6 褐色 焼土小・粒少、炭化粒微、ローム小少・ローム粒中
9 7.5YR4/6 褐色 焼土小・粒少、炭化粒少、ローム小微、ローム粒少
10 7.5YR4/6 褐色 炭化粒微、ローム小・粒微
11 7.5YR4/4 褐色 焼土小少、焼土粒多、炭化粒少、ローム小少、ローム粒中
12 7.5YR4/6 褐色 焼土小微、焼土粒少、炭化粒少、ローム小少、ローム粒中
13 7.5YR4/4 褐色 焼土小・粒少、炭化粒少、ローム小・粒少
14 7.5YR4/4 褐色 焼土小中、焼土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム小・粒中
15 7.5YR4/6 褐色 焼土小・粒少、炭化粒極めて微、ローム小・粒中
16 7.5YR4/4 褐色 焼土小少、焼土粒中、炭化物・粒少、ローム小少、ローム粒中
17 7.5YR4/6 褐色 焼土小多、焼土粒中、炭化粒少、ローム小少、ローム粒中
18 7.5YR4/4 褐色 焼土小・粒中、炭化粒微、ローム小・粒少
19 7.5YR4/4 褐色 焼土小少、焼土粒中、炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
20 5YR3/4 暗赤褐色 焼土粒極めて多、炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
21 5YR3/3 暗赤褐色 ローム小少、ローム粒微
22 7.5YR4/4 褐色 焼土小・粒少、炭化粒微、ローム粒少
23 7.5YR4/4 褐色 焼土粒微、炭化粒少、ローム小少、ローム粒中
24 7.5YR4/6 褐色 焼土粒少、炭化物少、炭化粒中、ローム小・粒中
25 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒微、炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
26 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒微、炭化粒極めて微、ローム小少、ローム粒中
27 7.5YR4/4 褐色 焼土粒微、炭化粒極めて微、ローム小・粒少
28 7.5YR4/4 褐色 焼土粒極めて微、ローム小少、ローム粒中
29 7.5YR4/4 褐色 焼土粒極めて微、炭化粒微、ローム小微、ローム粒少

第32図　第16号住居跡

変している。炉底面は平坦で焼けた様子がほとんどない。断面形態はバケツ形（炉壁が外傾ぎみに立ち上がる）を呈する。炉２は長径72cm×短径62cmの不整円形を呈し、深さは58cmを測る。底面に径30cm、深さ16cmの小ピットが中央からやや北東寄りに設けられている。断面形態はバケツ形（炉１によく似ている）を呈する。炉壁の南東側と中段のテラス部分の一部は焼土化し、赤変している。

本住居跡では炉が２基検出されており、ほかの住居の炉に比べ深く、円筒状を呈する。深鉢形土器が設置されていたことが想定される。炉１は焼けた面が散漫で、２基の炉が同時存在したとは思われず、時間差が感じられる。いずれの炉の覆土も焼土粒が多量に入るわけではなく、土器埋設炉の可能性の傍証となろう。

柱　穴　主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ８の６本からなり、径26～52cm、深さ61～118cmを測る。これらは六角形に配される。Ｐ６は周溝、Ｐ７は周溝の途切れ目、Ｐ９は壁際に配されるが性格不明である。

第16号住居跡ピット

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
径（cm）	42	28	40	26	52	20	40	34	40
深さ（cm）	65	99	91	80	118	30	－	61	16

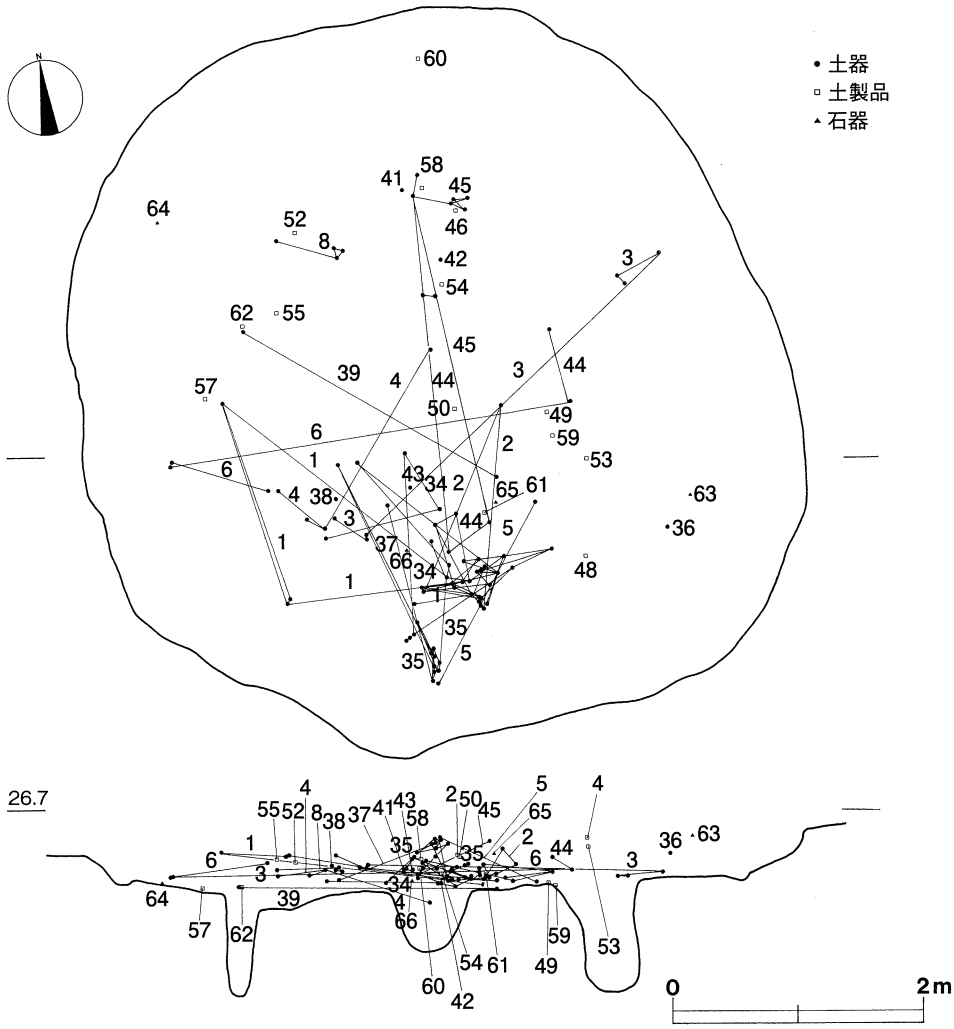
壁　溝　住居の北側２/３を巡り、幅10～26cm、深さ4.5～15cmを測る。南東と南西側で４ヵ所切れ目があり、南東側は特に大きく途切れている。入り口でもあったのだろうか。また、若干ずれるがＰ７－Ｐ９を結ぶラインで壁溝が途切れていることも指摘できる。

覆　土　覆土は29層で構成されている。遺物は上・下層を問わず出土している。

遺物出土状況　多量の遺物が出土し、ほとんどが床面から浮いた状態であり、堆積過程中に投棄されたものと思われる。完形品は１点もなく、底部を欠いた深鉢が１点、口径の復元できるものが10点みられる。

出土遺物　出土遺物は深鉢形土器がほとんどで24・25の特殊な器形を呈するものが若干みられる。深鉢形土器には１のように器形がキャリパー形を呈するものや、６のようにその退化した器形が窺えるもののほか、２・３・４のように口縁が短く内湾し胴部にかけて自然にすぼまるものもある。また、５・11のように口縁部が緩やかに内湾し胴部にかけてすぼまるものや、９のような口縁部が外傾するものもみられる。底部は概して小さいものが多く、37・41・45のような底部側縁が張り出すものもみられる。

１は胴部上半部分で、断面三角形の微隆起線によって渦巻文を隙間なく描き、下半に幅の狭い無文帯を垂下させる。頸部以下の無文部以外には区画内外に縄文が施文される。２・３～７・９は口縁部に沈線や凹線が１条巡り無文帯を形成し、地文には比較的多様な縄文が施文される。２



第33図　第16号住居跡遺物出土状況

は単節縄文の施文方向を変え部分的に羽状構成をとる。３には複節縄文と無節縄文が施文されている。16の地文も複節ＲＬＲである。12・13・15は口縁部に隆起線による区画文が横位に展開し、区画内に縄文が施文されている。18～25は微隆起線によって区画文が描かれており、18～20などの区画の幅の狭いものと、22～25の幅広のものが見られる。18・21には胎土に金雲母片が多く含まれる。このほか、26～29のような沈線によって区画文が描かれるものが存在する。14は口唇端部をつまみ上げ、これに沿いなでて無文帯を作り出し、波頂部から無文帯下まで微隆起線文を垂下させる土器で、あまり類例を見ないものである。また、30のように縄文と条線文の併用例も見られる。31は条線文のみが施文されるが、胎土の特徴から前期後半の土器の可能性が考えられる。30・33の器面には炭化物が付着している。34～45は底部で、底面近くに弱い括れが見られ、外面はなでや磨きのなされるものが多い。

土製品として土器片錘が10点（46～55）、有孔円盤が２点（56・57）、土製円盤が５点（58～62）出土している。

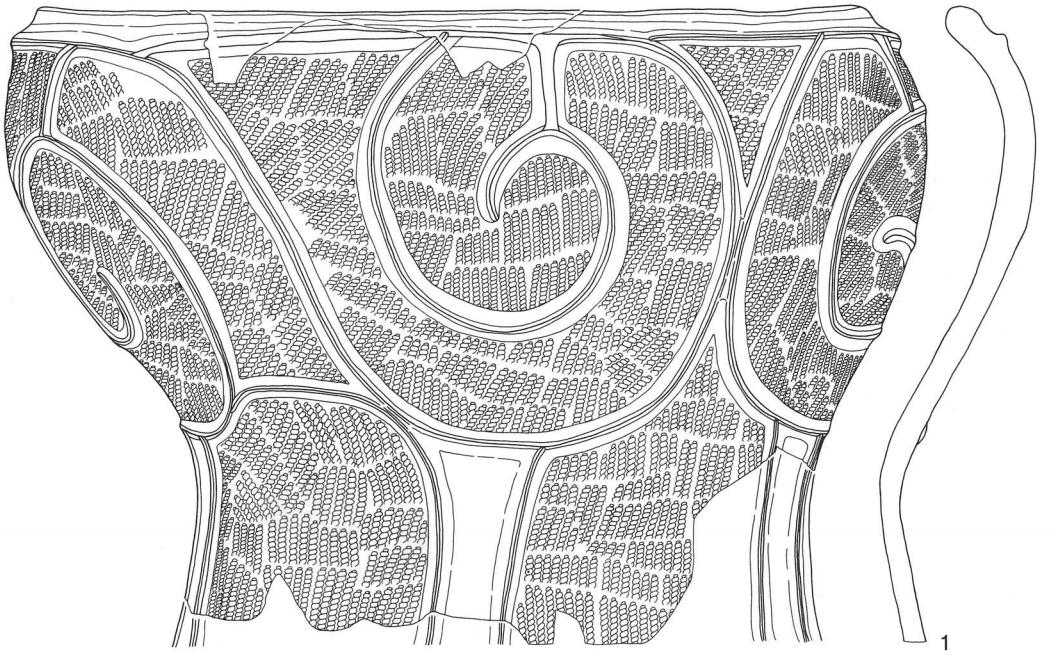
石器は５点である。63は両刃礫、64は敲き石、65は凹み石、66は石錐の完存品である。縦長剥片を用いて、両面に細かく２次調整を施している。つまみは三角形を呈する。67はスクレイパーで、剥片の２側縁に両面から２次調整を施し刃部をつけている。このほかに、黒曜石剥片２点、質の悪いチャート剥片２点等が出土している。

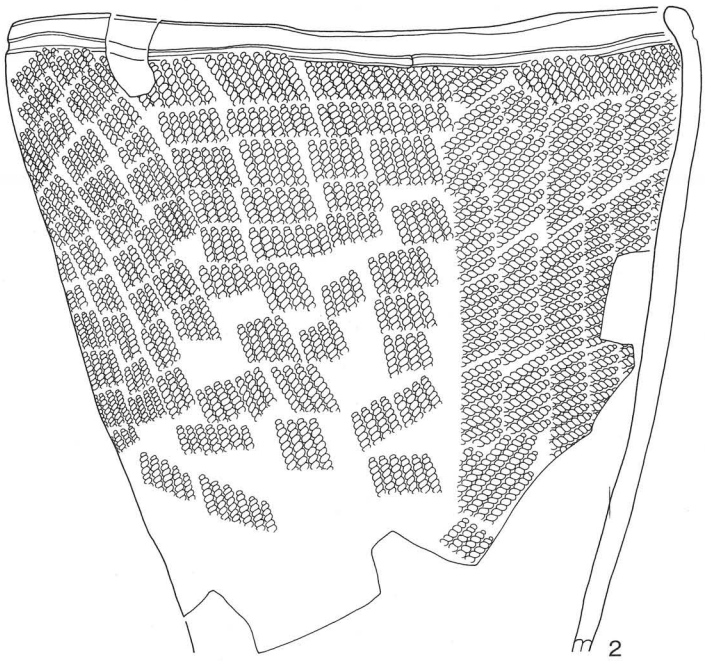
所　見　本住居跡の炉はほかの住居跡とは異なり、断面形態が特異であり、状況的にもいずれも土器埋設炉であった可能性が考えられる。しかしながら、埋設したと考えられる土器は確認されず、住居廃棄時に排除されてしまったものと思われる。また床面に住居拡張の痕跡が確認されている。これらのことから、本住居跡は住居内の設備や構造を変えながら使用された可能性が考えられる。しかしながら、柱構造は変化の様子が見られないことから、屋根構造などは同様であった可能性が指摘できる。

また、本住居跡出土土器には、第１号竪穴遺構出土のものと接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本住居跡の時期は、出土遺物に中期後半の加曽利Ｅ３式土器が見られることから、同期の所産と考えられる。

第16号住居跡出土土器

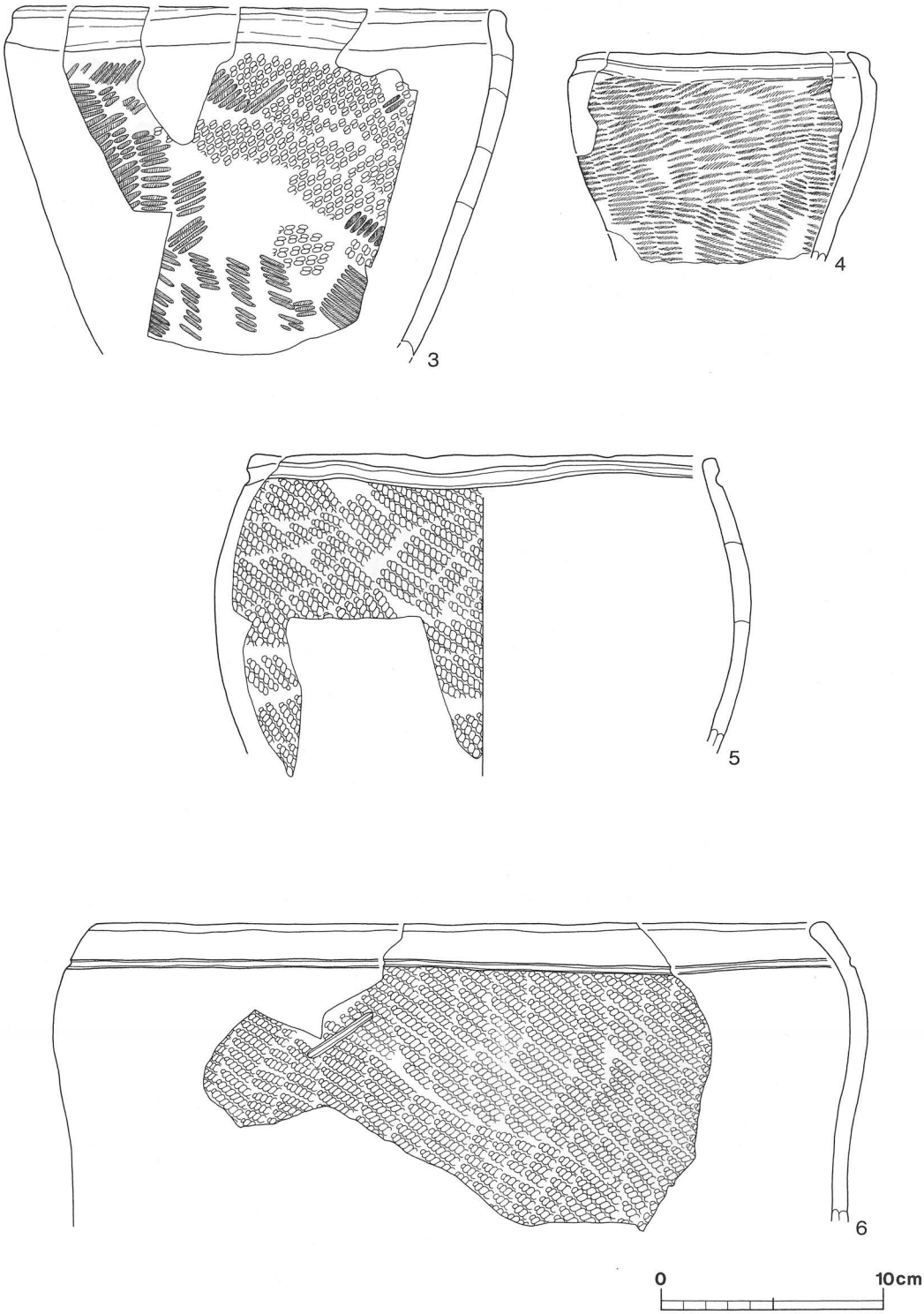
図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A：〔32.8〕 C：(25.3)	にぶい黄橙	石英・長石◎、赤色粒△	平縁。キャリパー形を呈する。微隆起線による渦巻文が口縁部に展開し、頸部以下は区画文が垂下し、区画内は無文となる。	№335 炭化物付着
2	深鉢	口縁	A：26.4 C：(25.7)	明黄褐	石英・長石◎	平縁。胴部から外傾する器形。口唇部はやや内湾し、沈線が巡り無文帯作出。以下はRL縄文が施文され、一部羽状を呈する。	№228
3	深鉢	口縁	A：〔22.0〕 C：(15.7)	橙	石英・長石・砂粒○、金雲母△	平縁。胴部から外傾する器形。口唇部はやや内湾し、凹線が巡る。以下にはLRL複節縄文及びLr無節縄文が施文される。	№211 炭化物付着
4	深鉢	口縁	A：〔11.6〕 C：(9.3)	灰褐	石英・長石○	平縁で小型の土器。胴部から外傾する器形。口唇部はやや内湾し、凹線が巡る。以下にはLr縄文が施文される。	№214 炭化物付着
5	深鉢	口縁	A：〔21.9〕 C：(13.5)	にぶい黄橙	石英・長石△	平縁。胴部が内湾する器形。口唇部には凹線が巡る。以下にはRL縄文が施文される。	№209 炭化物付着
6	深鉢	口縁	A：〔32.8〕 C：(8.7)	にぶい褐	石英・長石・赤色粒△	平縁。緩いキャリパー形となる。口唇部下には沈線が巡り、無文帯が作出される。以下にはLR縄文が施文される。	№210 炭化物付着
7	深鉢	口縁	A：〔26.8〕 C：(6.4)	にぶい黄橙	石英・長石・黒色片◎	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部には浅い凹線が巡る。以下はRL縄文が施文される。	№なし
8	深鉢	口縁	A：〔25.5〕 C：(7.3)	浅黄	石英・長石○、砂粒・赤色粒△	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇下よりLR縄文が施文される。口縁内面の一部が沈線状に凹む。内面磨かれる。	№213 炭化物付着
9	鉢	口縁	A：〔32.5〕 C：(7.6)	橙	石英・長石○、黒色粒・赤色粒△	平縁。口縁部が直立する鉢と考えられる。口縁部に幅の広い無文帯が作出され、凹線が巡る。以下にはLr縄文が施文される。	№232
10	深鉢	口縁	A：〔28.3〕 C：(5.7)	にぶい黄橙	石英・長石◎	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部下に隆起線が巡る。以下はRL縄文を地文に、凹線による「∩」状文が描かれる。	№なし
11	深鉢	口縁	A：〔19.2〕 C：(7.7)	にぶい黄橙	石英・長石○	平縁。口縁部が緩く内傾する器形。口唇部下になでによる狭い無文帯を作出。以下はRL縄文を施文する。	№なし 炭化物付着
34	深鉢	底	B：5.8 C：(11.2)	橙	石英・長石◎、雲母△	底部から外傾して立上がる。上位には単節LR縄文が施文される。下位は無文でナデられる。底部の器厚は薄手。	№215
35	深鉢	底	B：6.5 C：(10.0)	明赤褐	石英・長石◎	底部から外傾して立上がる。上位にはRL縄文が施文され、下位は無文である。下半浅い沈線状の痕跡。やや上げ底で、側縁はヘラ削り。	№216 内面に炭化物付着



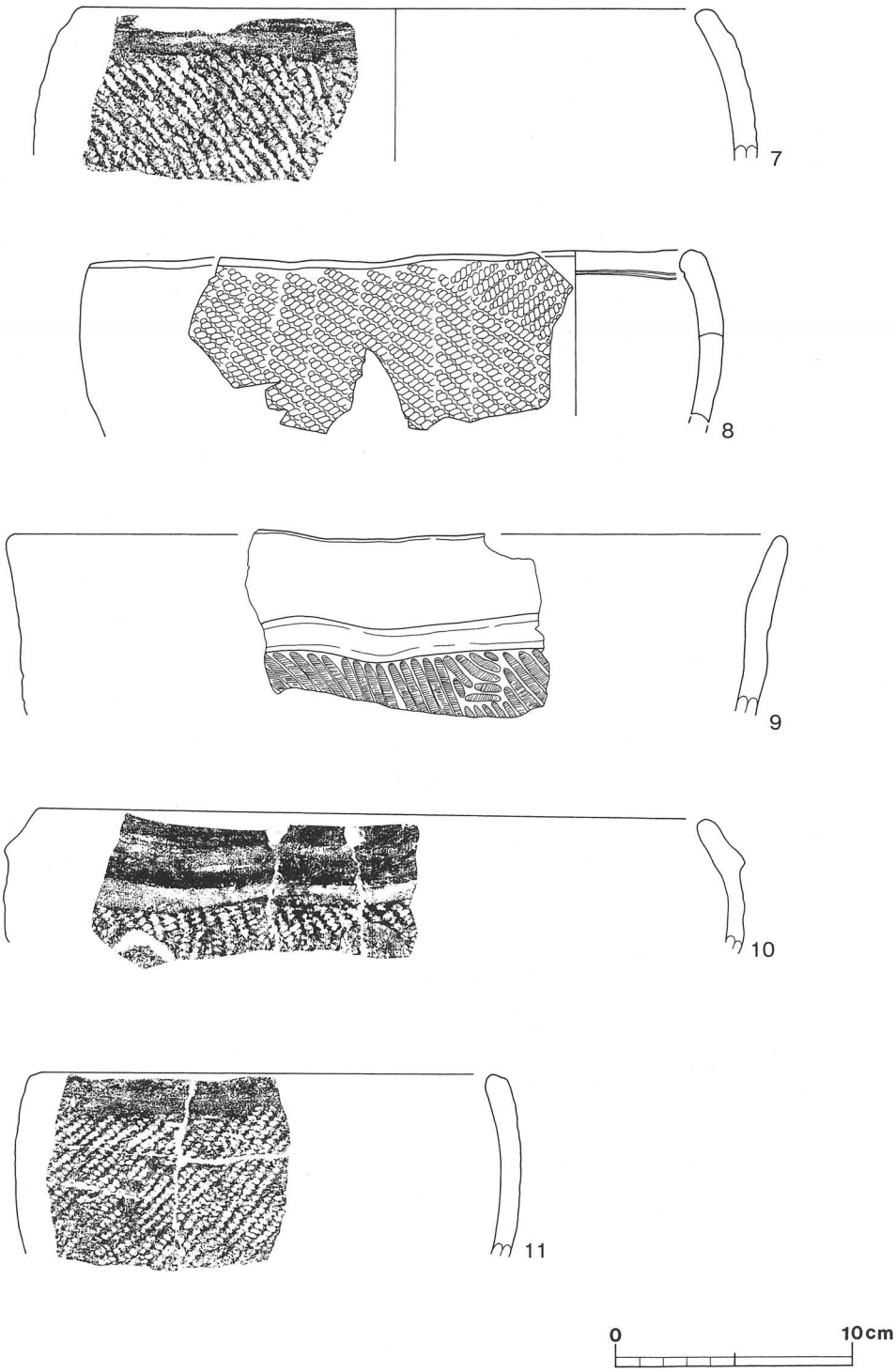


0　10cm

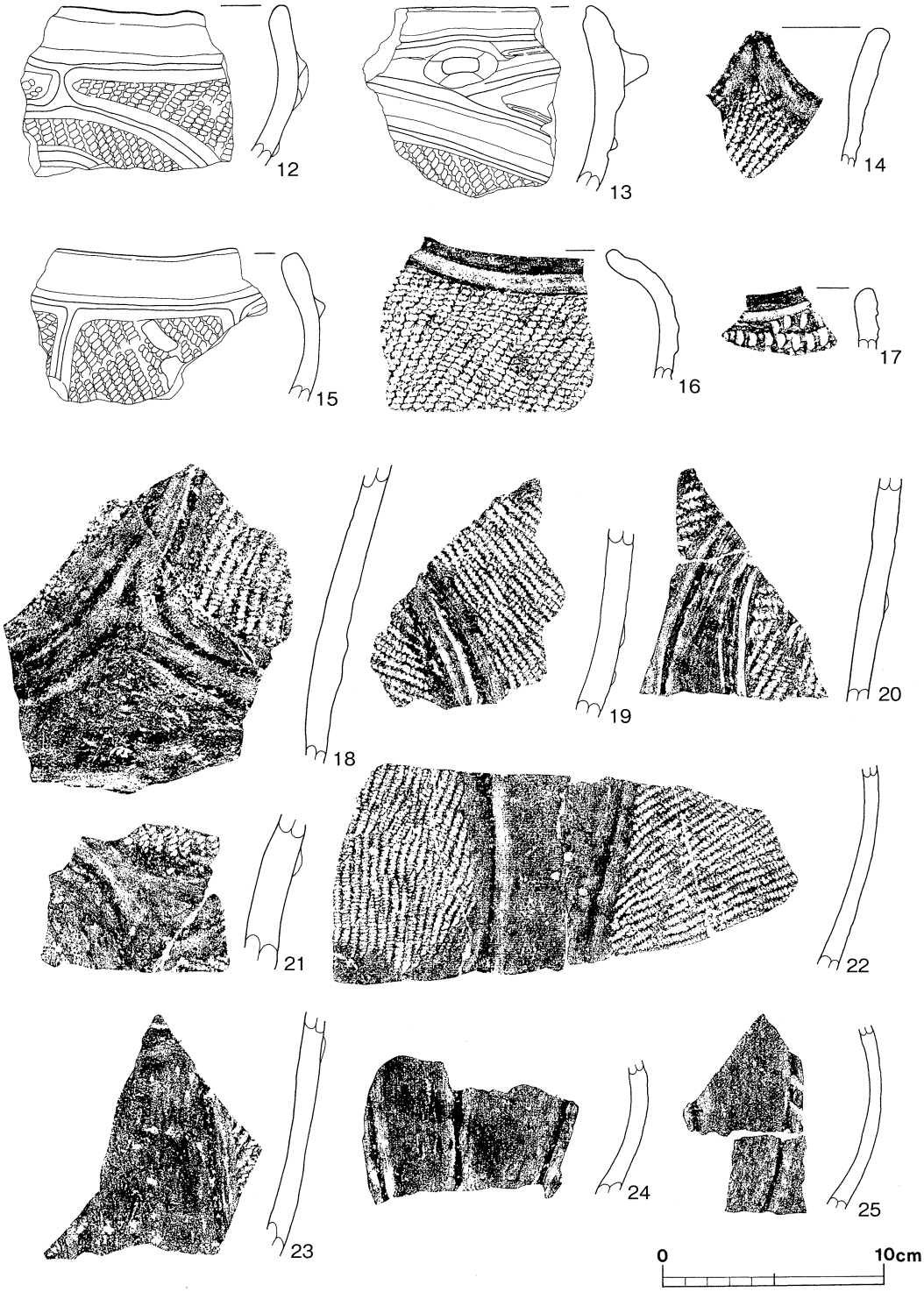
第34図　第16号住居跡出土遺物（1）



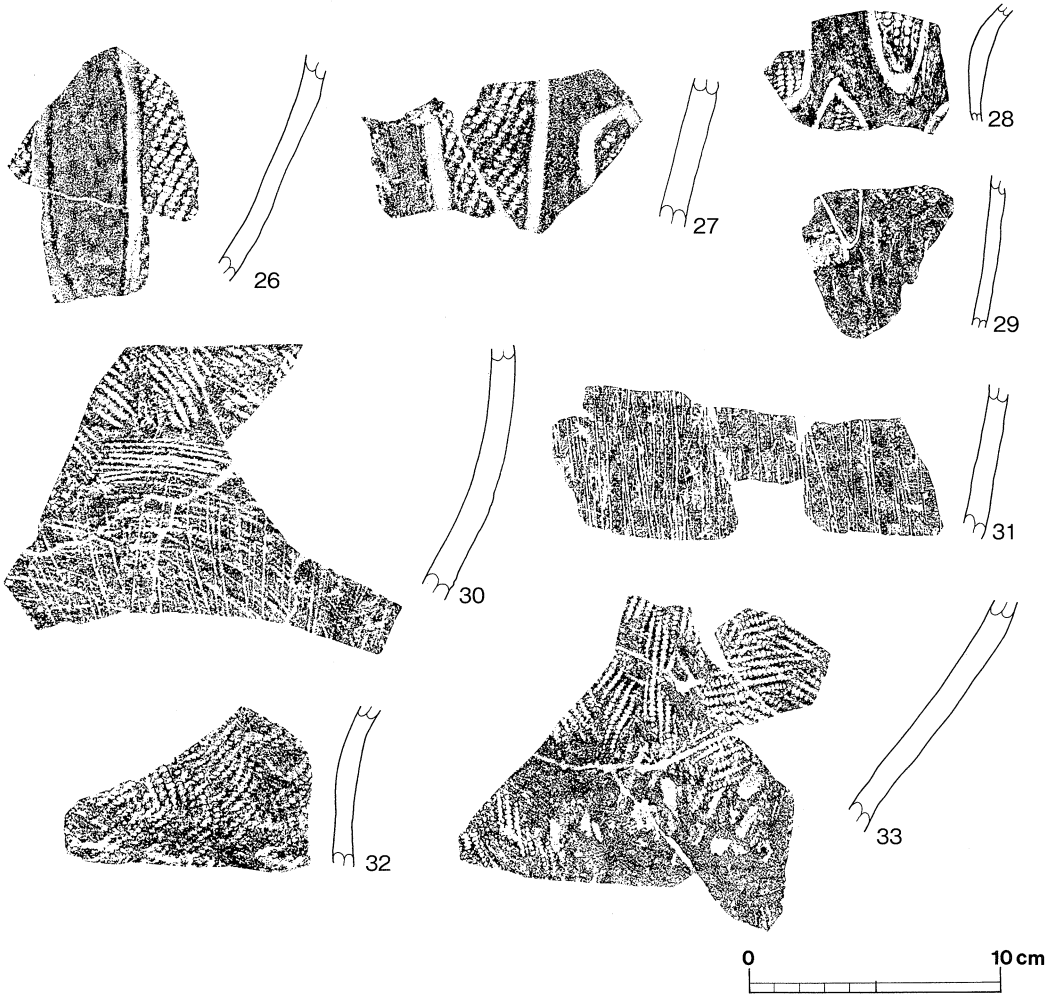
第35図　第16号住居跡出土遺物（2）



第36図　第16号住居跡出土遺物（3）

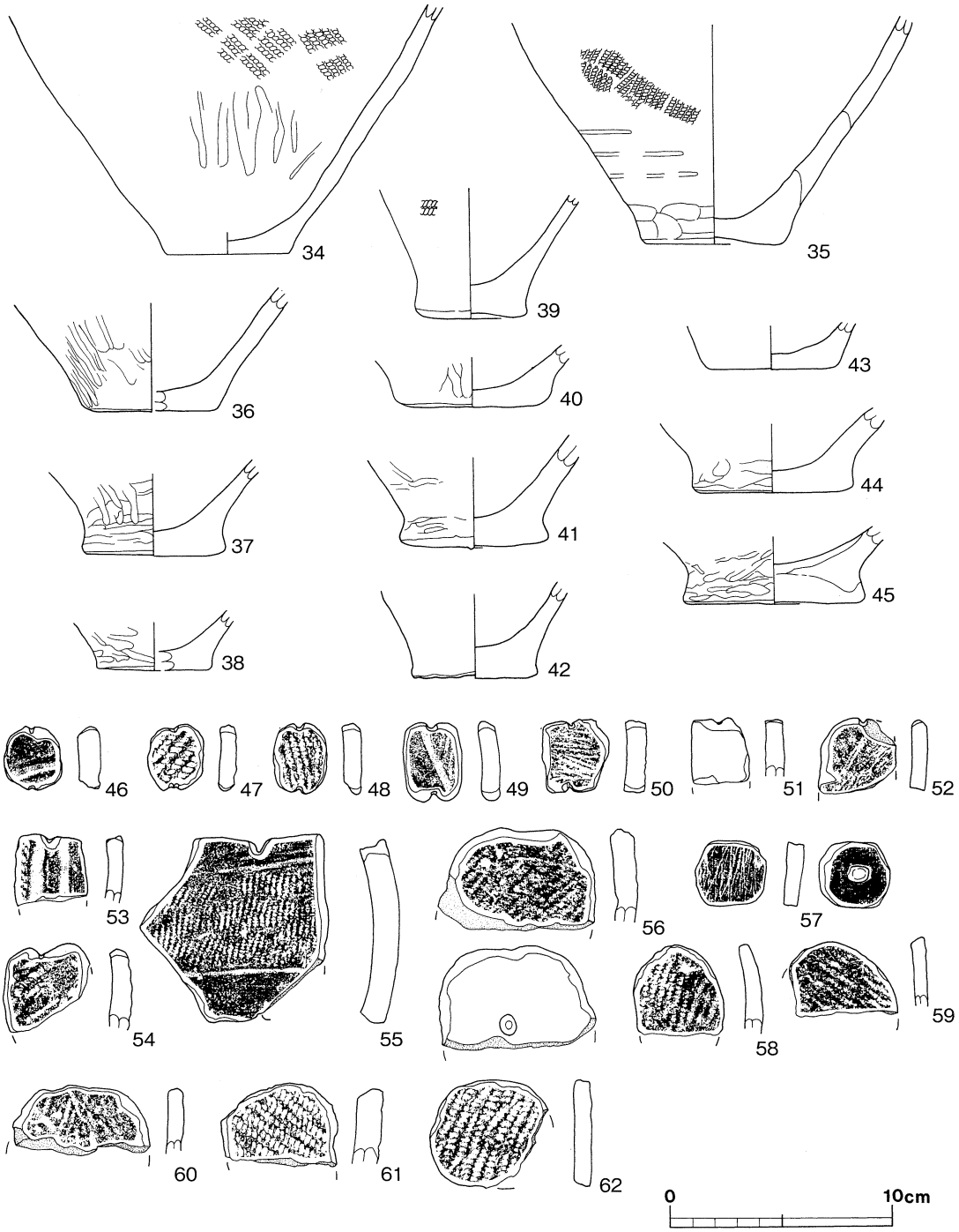


第37図　第16号住居跡出土遺物（4）

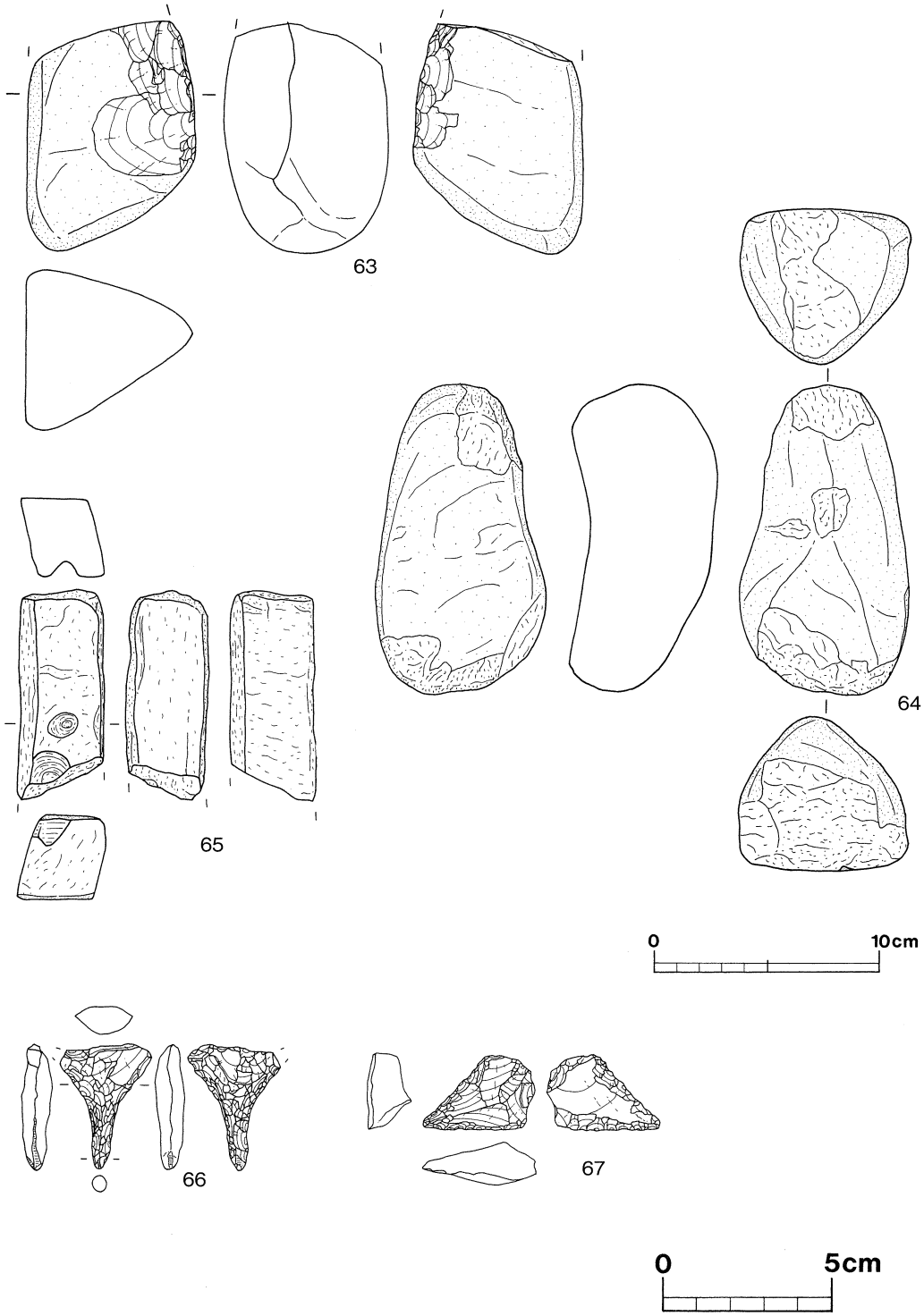


第38図　第16号住居跡出土遺物（5）

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
36	深鉢	底	B：〔6.1〕 C：(4.9)	橙	石英・長石 ○	無文。外面ヘラミガキ。	№225
37	深鉢	底	B：〔6.6〕 C：(3.8)	にぶい橙	砂粒○	無文。外面ヘラミガキ。底面ヘラ削りの後ナデ。側縁端部張る。内面丁寧なナデ。	№223
38	深鉢	底	B：〔5.2〕 C：(2.3)	橙	石英・長石 ○	無文。外面・底面ヘラナデ。	№226
39	深鉢	底	B：5.5 C：(5.8)	橙	石英・長石 ○	器面の一部に単節LR。下半無文。やや上げ底。外面ヘラナデ。	№227
40	深鉢	底	B：7.1 C：(2.2)	にぶい橙	石英・長石 ○	底面凸レンズ状。無文。底面に製作時の圧痕あり。内外面にヘラナデ。	№219
41	深鉢	底	B：〔6.7〕 C：(4.1)	橙	石英・長石 ○	底面凸レンズ状。無文。外面ナデ。側縁端部張る。	№222
42	深鉢	底	B：5.7 C：(4.0)	橙	石英・長石 △	無文。器面荒れる。底面丁寧なナデ。	№220
43	深鉢	底	B：〔6.0〕 C：(2.1)	にぶい黄橙	石英・長石・ 金雲母◎	無文。底部側縁擦れる。底面丁寧なナデ。	№224
44	深鉢	底	B：7.3 C：(3.2)	橙	石英・長石 ○、赤色粒 △	無文。底面ヘラ削りの後ナデ。	№218



第39図　第16号住居跡出土遺物（6）



第40図　第16号住居跡出土遺物（7）

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
45	深鉢	底	B：〔8.3〕 C：(2.8)	黒	石英・長石 ○	無文。外面・底面丁寧なミガキ。底部側縁張る。	№217 炭化物付着

第16号住居跡出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
46	土器片錘	SI-16	完形	2.8×2.6	1.0	8.0	全周磨り	切り目１対
47	土器片錘	SI-16	完形	3.0×2.5	0.75	6.0	全周磨り	切り目１対
48	土器片錘	SI-16	完形	3.2×2.4	0.8	8.0	全周磨り	切り目１対
49	土器片錘	SI-16	完形	3.55×2.7	0.8	10.0	全周磨り	切り目１対
50	土器片錘	SI-16	一部欠	3.25×3.0	0.95	12.0	一部磨り	切り目１対
51	土器片錘	SI-16	2/3	2.9×2.65	0.85	8.0	打割	切り目１ヶ
52	土器片錘	SI-16	2/3	3.8×3.35	0.75	11.0	全周磨り	切り目１ヶ
53	土器片錘	SI-16	2/3	3.1×3.3	0.7	10.0	一部磨り	切り目１ヶ
54	土器片錘	SI-16	2/3	3.7×3.75	0.95	14.0	全周磨り	切り目１ヶ
55	土器片錘	SI-16	一部欠	8.4×8.5	1.25	99.5	無調整	切り目１対
56	有孔円盤	SI-16	1/2	4.6×7.1	1.05	40.0	全周磨り	裏面より穿孔　未貫通
57	有孔円盤	SI-16	完形	2.95×3.2	0.8	10.0	全周磨り	裏面より穿孔　未貫通
58	円盤	SI-16	2/3	4.1×4.0	0.8	13.0	全周磨り	楕円形
59	円盤	SI-16	1/3	3.25×4.6	0.6	10.0	全周磨り	楕円形
60	円盤	SI-16	1/2	3.1×4.1	0.7	12.0	一部磨り	円形
61	円盤	SI-16	1/2	3.7×5.25	1.15	28.0	一部磨り	楕円形
62	円盤	SI-16	一部欠	4.85×5.0	0.75	22.0	一部磨り	円形

第16号住居跡出土石器

図版No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
63	覆土	両刃礫	(2.9)	7.5	7.1	(680.0)	砂岩	石25　敲打痕と研磨面あり
64	覆土	敲き石	13.6	7.6	6.8	850.0	石英斑岩	石26　被熱
65	覆土	凹み石	(9.4)	(3.0)	3.5	(205.0)	雲母片岩	石27　表面に凹み
66	覆土	石錐	3.7	(2.7)	0.9	(5.0)	チャート	石28　先端に光沢のある使用痕
67	覆土	スクレイパー	3.3	2.2	1.3	7.3	チャート	石29　主要剥離面が残る

2．竪穴遺構（ＳＸ）

第１号竪穴遺構〔SX－１（旧第10・11号住居跡)〕（第41～44図　ＰＬ９・49・50・53）

位　置　調査区中央南側のＶ－25・26付近に所在。

重複関係　第９号住居跡と重複し、新旧関係については明確ではないが、出土土器から本遺構が古いものと考えられる。

規　模　遺物出土位置からおよそ長径８ｍ×短径５ｍの不整な楕円形と推定される。

壁　明確な立ち上がりが確認できなかった。遺物の垂直分布から10cm程度か。

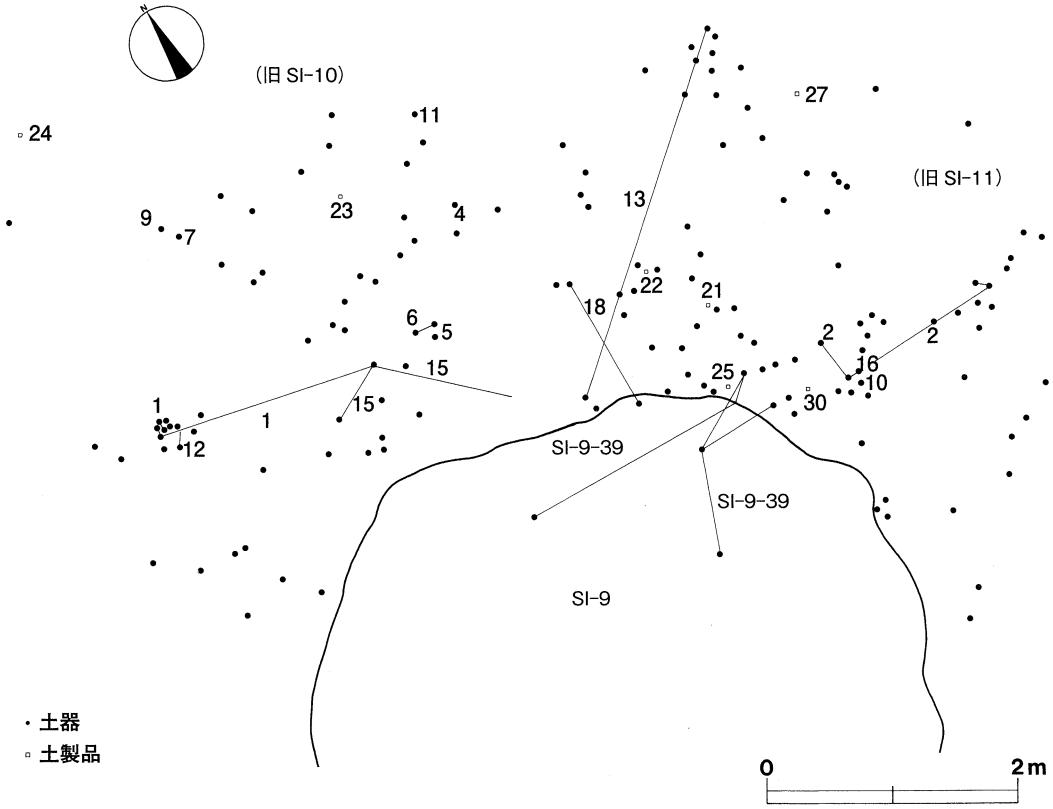
床　平坦であったが床面は明瞭でなく、特に踏み固められたところはない。

炉　明瞭なものは確認できなかったが、小規模な焼土の堆積が見られた。第９号住居跡内の炉２が本遺構にかかわるかも知れない。

柱　穴　確認されていない。

覆　土　覆土は暗褐色土でローム層への変化が漸移的であった。遺物は暗褐色土から出土している。

遺物出土状況　比較的まとまって面的に遺物が出土し、およそ10cm幅の垂直分布を持つ。完形品



第41図　第１号竪穴遺構遺物出土状況

は見られないが１・２の大型土器の破片なども出土している。遺物の出土状況は大きく西側と東側のまとまりが見られる。そして、第16号住居跡出土土器と接合する破片も出土している。

出土遺物　１は口縁部に凹線による無文帯を持ち、胴部に下垂文が10単位描かれ、縄文帯と無文帯が交互施文される。５・６は鉢形土器の口縁部であり、６には粘土板を貼り付けた把手が付く。17は薄手で丁寧な作りの土器で、特殊な器形を呈し、第16号住居跡の24・25とも同一固体と考えられる。

２は大型の深鉢形土器の胴部破片であり、２本組の隆起線によって区画文が描かれ、隆起線間は無文となる。３の内面及び外面には炭化物が付着している。４は口縁部が直立するもので、縄文施文部分に赤色顔料らしいものが付着している。７は口縁部が波状となり、波頂部には穴が開き把手となる。12についても２本組の隆起線による文様が描かれる。

土製品として土器片錘が８点（20～27）出土している。

所　見　本遺構は当初第９号住居跡と重複する別な複数の住居跡（旧SI－10・11）として調査を開始したものである。しかしながら、明確な壁・床・柱穴などは確認できず平面形態が明瞭でなかったことから、現地調査では住居跡から除外され遺構平面図は作成していない。しかしながら、遺物が一定のまとまりで出土している状況があり、単なる包含層として括ることも妥当でないこと考えられることから、ローム層を明瞭に掘り込まない浅い皿状の遺構との解釈で竪穴遺構として扱った。１基の遺構として報告してはいるが、遺物の分布状況や出土土器から２基の遺構の重

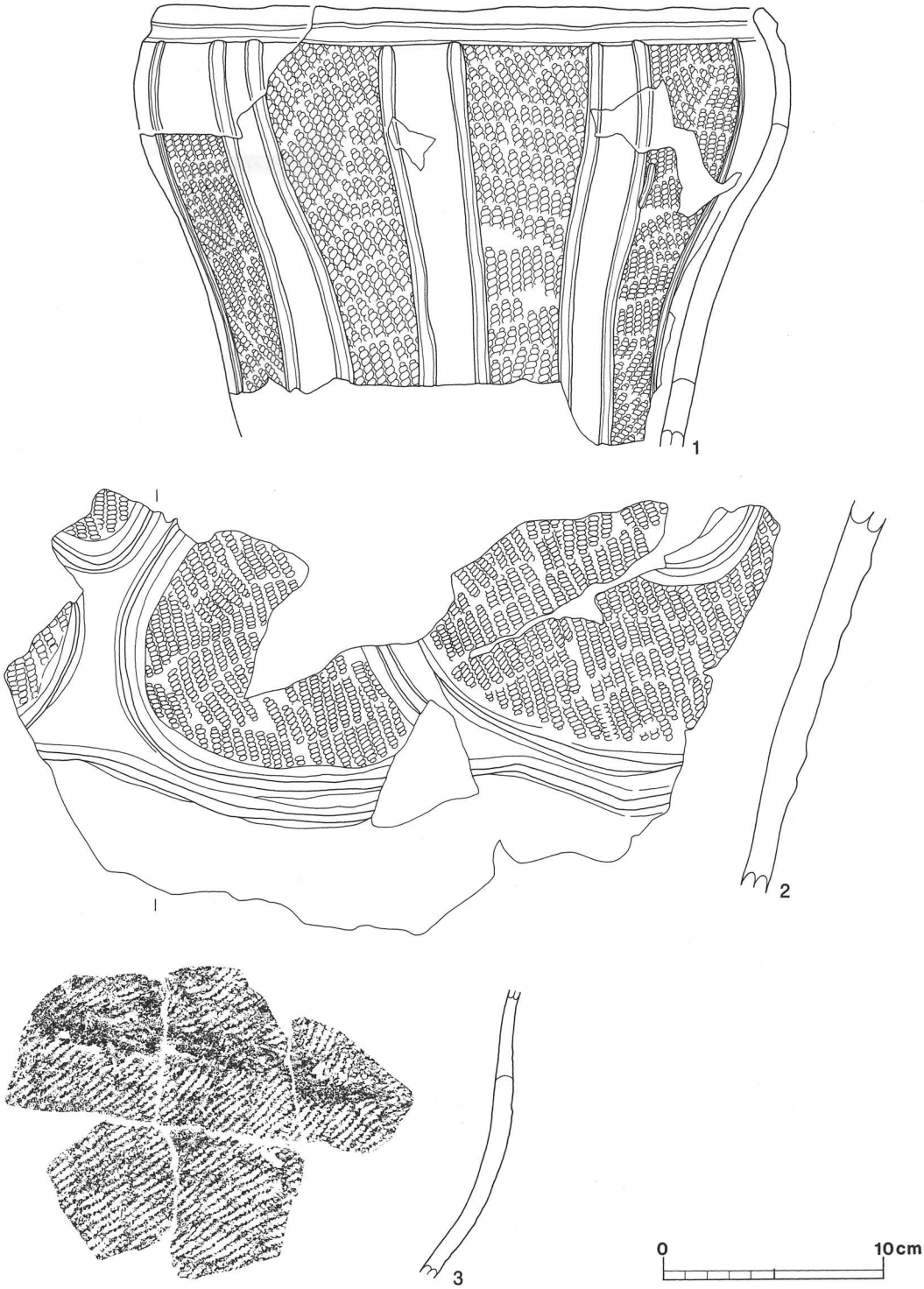
第１号竪穴遺構出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁	A：〔27.3〕 C：(19.9)	にぶい黄橙	石英･長石･赤色粒△、砂粒○	平縁。キャリパー形を呈する。口唇部下に凹線が巡り無文帯が作出さ、以下には凹線が垂下し無文帯と縄文帯の交互施文となる。	№196 炭化物付着
4	深鉢	口縁	A：〔27.8〕 C：(9.0)	にぶい褐	石英･長石･砂粒○	平縁。口縁部が直立する器形。口唇下に幅の広い無文帯が作出され、隆起線が巡る。以下にはRL縄文が施文される。	№187 器面に赤色顔料付着

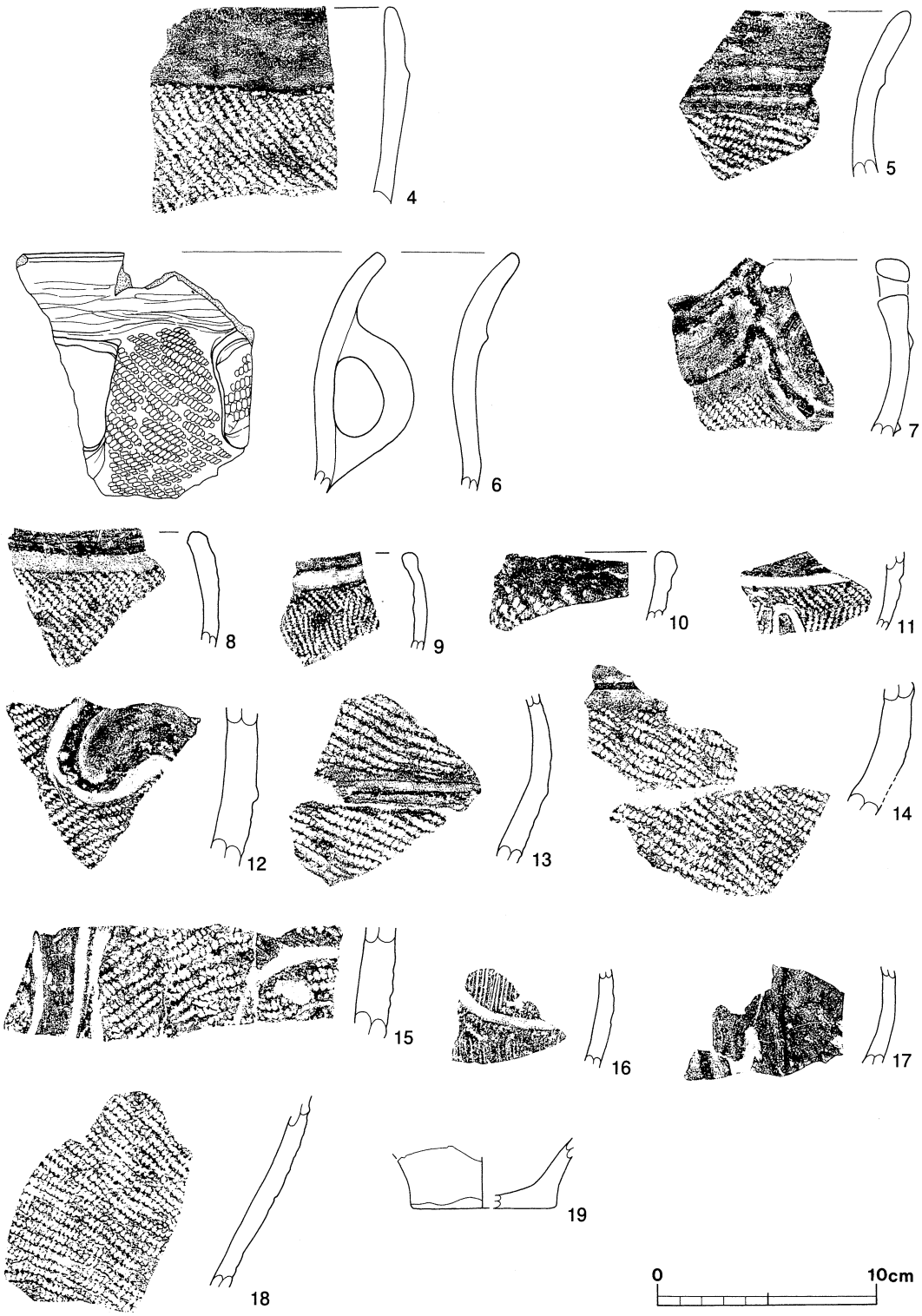
図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
19	深鉢	底	B：〔6.8〕 C：(2.8)	にぶい黄褐	石英・長石△	無文。器面荒れる。	№188

第１号竪穴遺構出土土製品

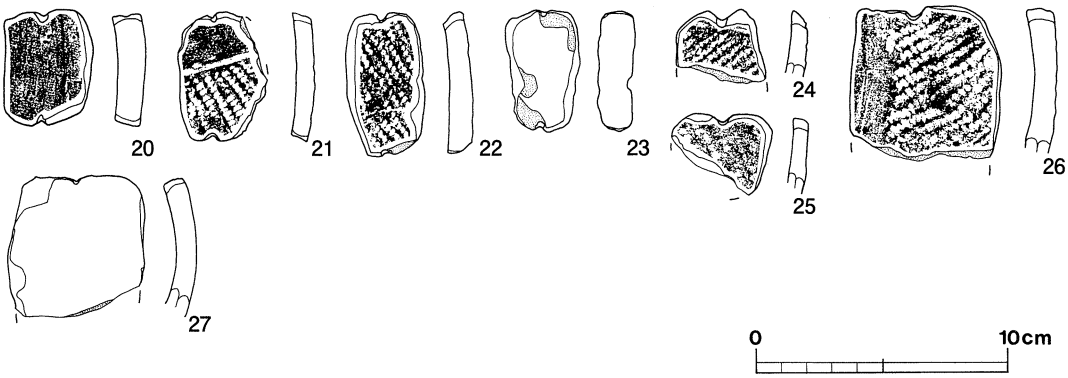
図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
20	土器片錘	SX-1	完形	4.55×3.5	1.1	23.0	全周磨り	切り目１対
21	土器片錘	SX-1	一部欠	5.1×3.45	0.8	17.0	一部磨り	切り目１対
22	土器片錘	SX-1	完形	5.6×3.1	0.95	23.0	全周磨り	切り目１対
23	土器片錘	SX-1	完形	4.8×2.9	1.45	21.0	一部磨り	切り目１対
24	土器片錘	SX-1	1/2	2.9×3.6	0.7	8.0	一部磨り	打ち欠き１ヶ
25	土器片錘	SX-1	1/2	3.2×3.95	0.7	7.0	全周磨り	切り目１ヶ
26	土器片錘	SX-1	一部欠	6.0×5.95	1.1	50.0	一部磨り	切り目１ヶ
27	土器片錘	SX-1	一部欠	5.6×5.4	0.85	36.0	一部磨り	切り目１ヶ



第42図　第１号竪穴遺構出土遺物（１）



第43図　第１号竪穴遺構出土遺物（２）



第44図　第１号竪穴遺構出土遺物（３）

複の可能性がある。本遺構出土土器には第16号住居跡出土のものと接合するものがあり、遺構間の関連が窺われる。本遺構の時期については、出土遺物が中期後半の加曽利Ｅ３式土器が見られることから同期の所産と考えられる。

３．土坑（ＳＫ）

土坑は全部で38基検出された。分布は調査区中央から東側にまとまっている。ほとんどの土坑が詳細な時期が不明で、判明したものは第16・33・44・50・51号土坑の５基のみである。また、第28・31・32・33・34・35・36号土坑の７基は形態から陥し穴と考えられるものである。長軸方向は第34号土坑以外、北から西に15～30°程振れ比較的揃っており、大きな時期差はないものと思われる。これらの土坑の帰属時期については出土遺物が明確でないものが多いが、多くは中期のものと想定される。

第16号土坑〔SK－16〕（第49～51図　ＰＬ12・50・53）

位　置　２Ｇ－25・26区に位置する。

規　模　長径195cm×短径165cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは63cmである。

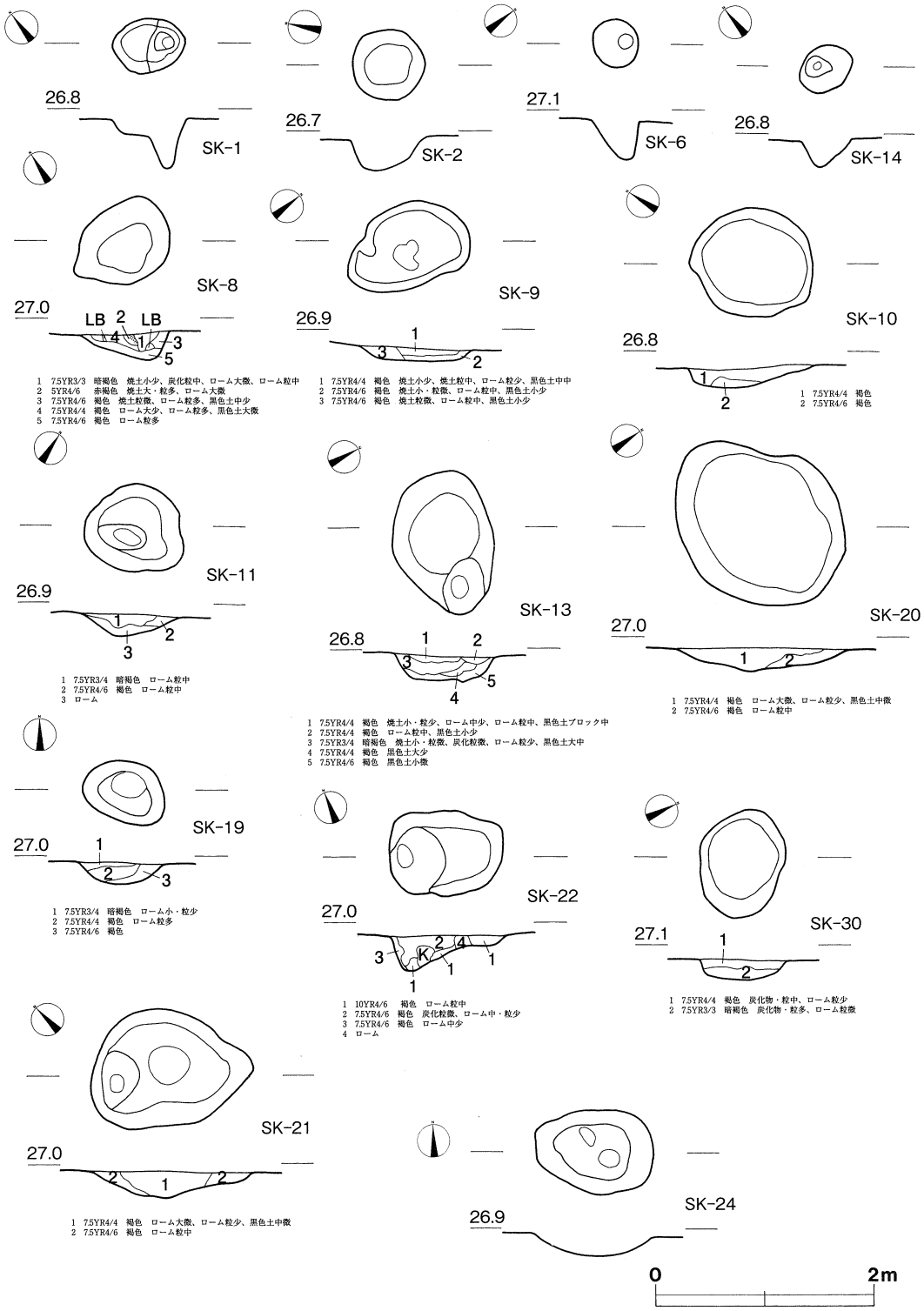
長径方向　Ｎ－３°－Ｗ

断面形態　壁は外傾し、底面は平坦である。

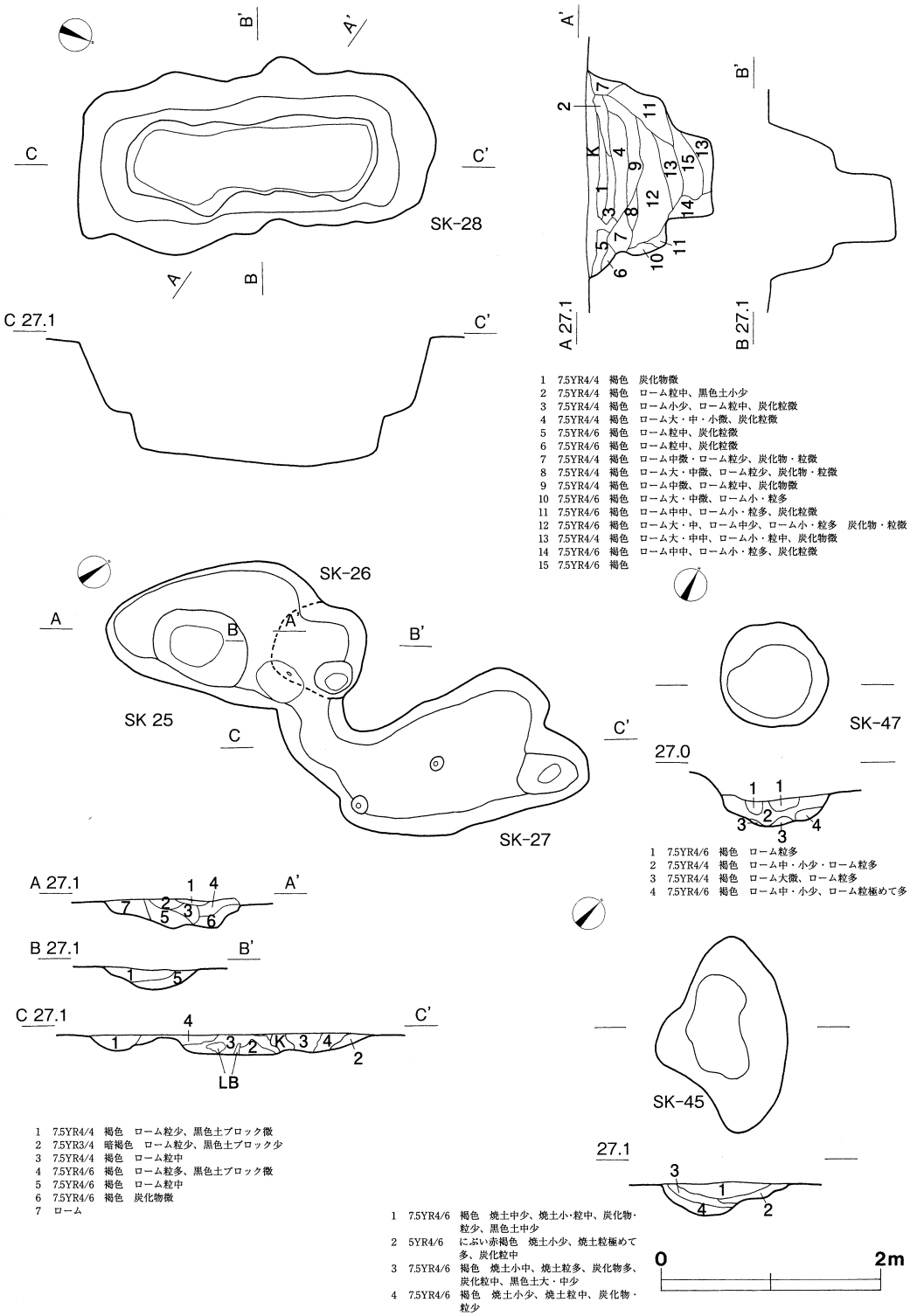
覆　土　自然堆積の状態を示し、遺物は覆土上層から出土している。

出土遺物　１～４は全て深鉢である。１は大型の深鉢形土器で逆U字状区画文を描く。２は口縁部に無文帯が区画されたものである。４は底部である。このほか土製品として土器片錘が１点（５）出土している。また、図化してはいないが軽石片が２点とチャート剥片が１点出土した。

所　見　出土遺物から中期後半の加曽利Ｅ３式期の遺構と考えられる。



第45図　第1・2・6・8～11・13・14・19～22・24・30号土坑



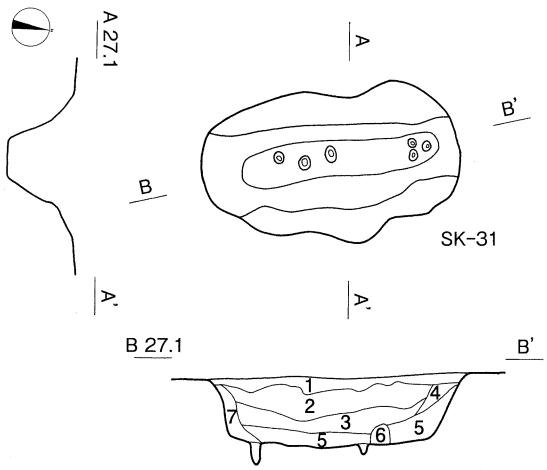
1 7.5YR4/4 褐色 炭化物微
2 7.5YR4/4 褐色 ローム粒中、黒色土小少
3 7.5YR4/4 褐色 ローム小少、ローム粒中、炭化粒微
4 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中・小微、炭化粒微
5 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中、炭化粒微
6 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中、炭化粒微
7 7.5YR4/4 褐色 ローム中微・ローム粒少、炭化物・粒微
8 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中微、ローム粒少、炭化物・粒微
9 7.5YR4/4 褐色 ローム中微、ローム粒中、炭化物微
10 7.5YR4/6 褐色 ローム大・中微、ローム小・粒多
11 7.5YR4/6 褐色 ローム中中、ローム小・粒多、炭化粒微
12 7.5YR4/6 褐色 ローム大・中、ローム中少、ローム小・粒多 炭化物・粒微
13 7.5YR4/4 褐色 ローム大・中中、ローム小・粒中、炭化物微
14 7.5YR4/6 褐色 ローム中中、ローム小・粒多、炭化粒微
15 7.5YR4/6 褐色

1 7.5YR4/6 褐色 ローム粒多
2 7.5YR4/4 褐色 ローム中・小少・ローム粒多
3 7.5YR4/4 褐色 ローム大微、ローム粒多
4 7.5YR4/6 褐色 ローム中・小少、ローム粒極めて多

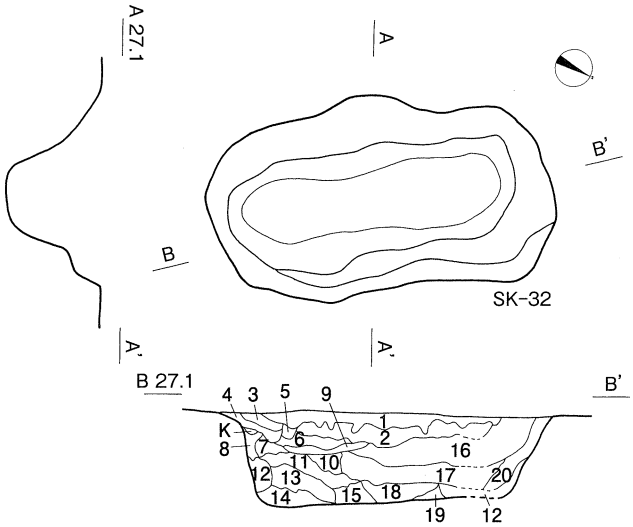
1 7.5YR4/4 褐色 ローム粒少、黒色土ブロック微
2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒少、黒色土ブロック少
3 7.5YR4/4 褐色 ローム粒中
4 7.5YR4/6 褐色 ローム粒多、黒色土ブロック微
5 7.5YR4/6 褐色 ローム粒中
6 7.5YR4/6 褐色 炭化物微
7 ローム

1 7.5YR4/6 褐色 焼土中少、焼土小・粒中、炭化物・粒少、黒色土中少
2 5YR4/6 にぶい赤褐色 焼土小少、焼土粒極めて多、炭化粒中
3 7.5YR4/6 褐色 焼土小中、焼土粒多、炭化物多、炭化粒中、黒色土大・中少
4 7.5YR4/6 褐色 焼土小少、焼土粒中、炭化物・粒少

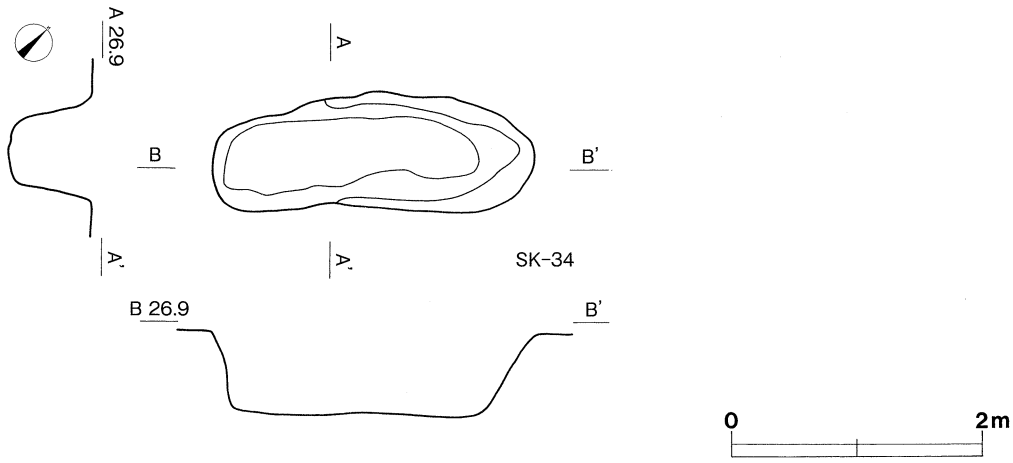
第46図 第25～28・45・47号土坑



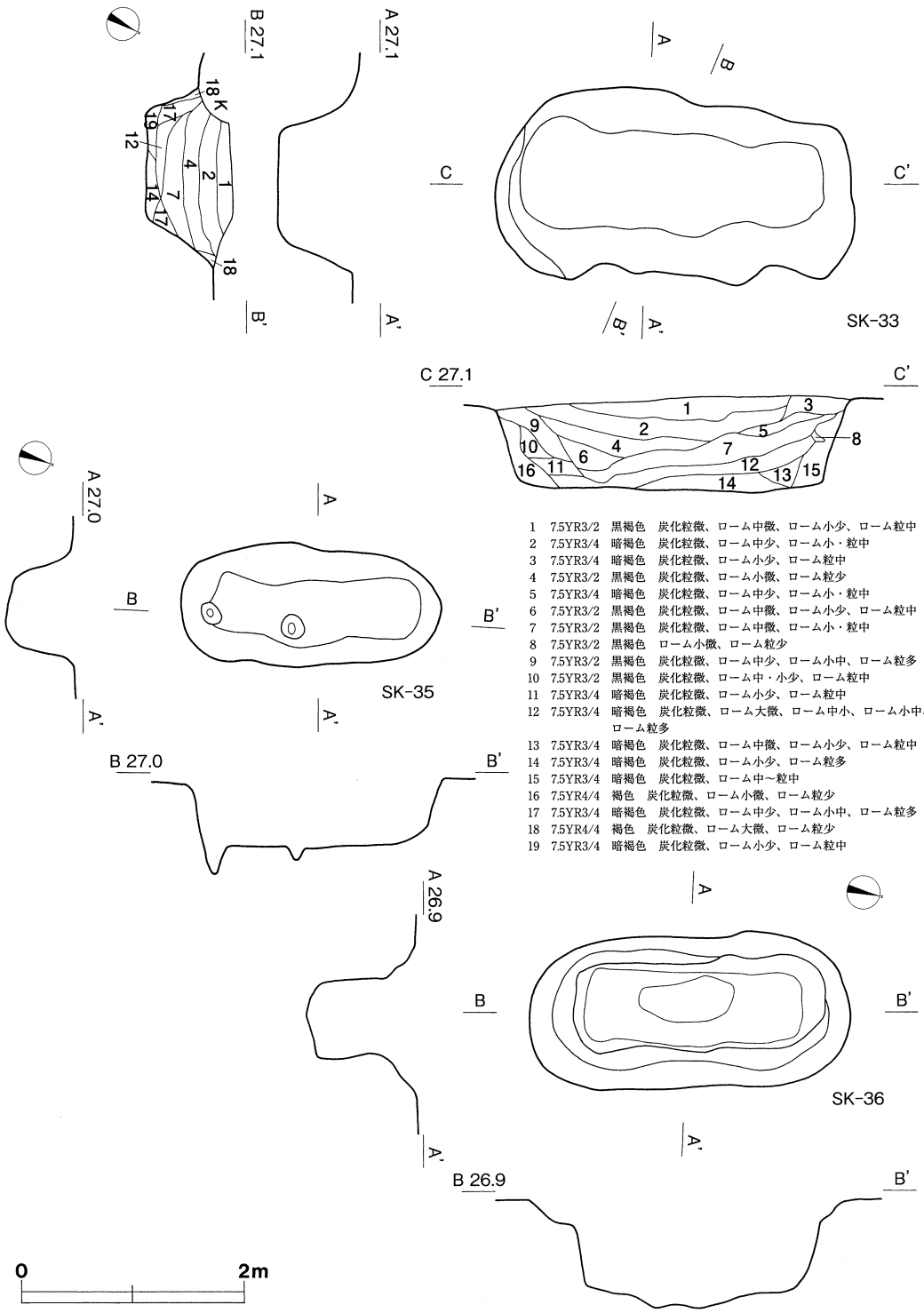
1　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒微、炭化物微、ローム粒少
2　7.5YR3/4　暗褐色　炭化物微、ローム大微、ローム小・粒少
3　7.5YR4/4　褐色　炭化粒微、ローム大・粒少
4　7.5YR4/4　褐色　ローム粒少
5　7.5YR4/4　褐色　ローム小・粒少
6　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中
7　7.5YR4/6　褐色　ローム大微、ローム小少、ローム粒中



1　7.5YR4/3　褐色　炭化粒微、ローム小微、ローム粒少
2　7.5YR3/3　暗褐色　焼土小微、ローム小少、ローム粒微
3　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大・粒微
4　7.5YR4/4　褐色　ローム粒中
5　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒微
6　7.5YR4/4　褐色
7　7.5YR4/6　褐色　焼土粒微、ローム大微、ローム粒中
8　10YR4/6　褐色　ローム大少、ローム粒中
9　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微、ローム粒中
10　7.5YR4/4　褐色　ローム中微、ローム粒中
11　7.5YR4/4　褐色　ローム大少、ローム粒中
12　10YR4/6　褐色　ローム大中、ローム中少、ローム粒多
13　7.5YR4/4　褐色　ローム大小、ローム粒中
14　10YR4/6　褐色　ローム大少、ローム粒中
15　7.5YR4/6　褐色　ローム小少、ローム粒中
16　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒微、ローム小微、ローム粒少
17　7.5YR4/3　暗褐色　ローム中・粒少、ローム小中
18　7.5YR4/4　褐色　ローム中微、ローム小少、ローム粒中
19　10YR4/6　褐色　ローム中微、ローム粒多
20　7.5YR4/4　褐色

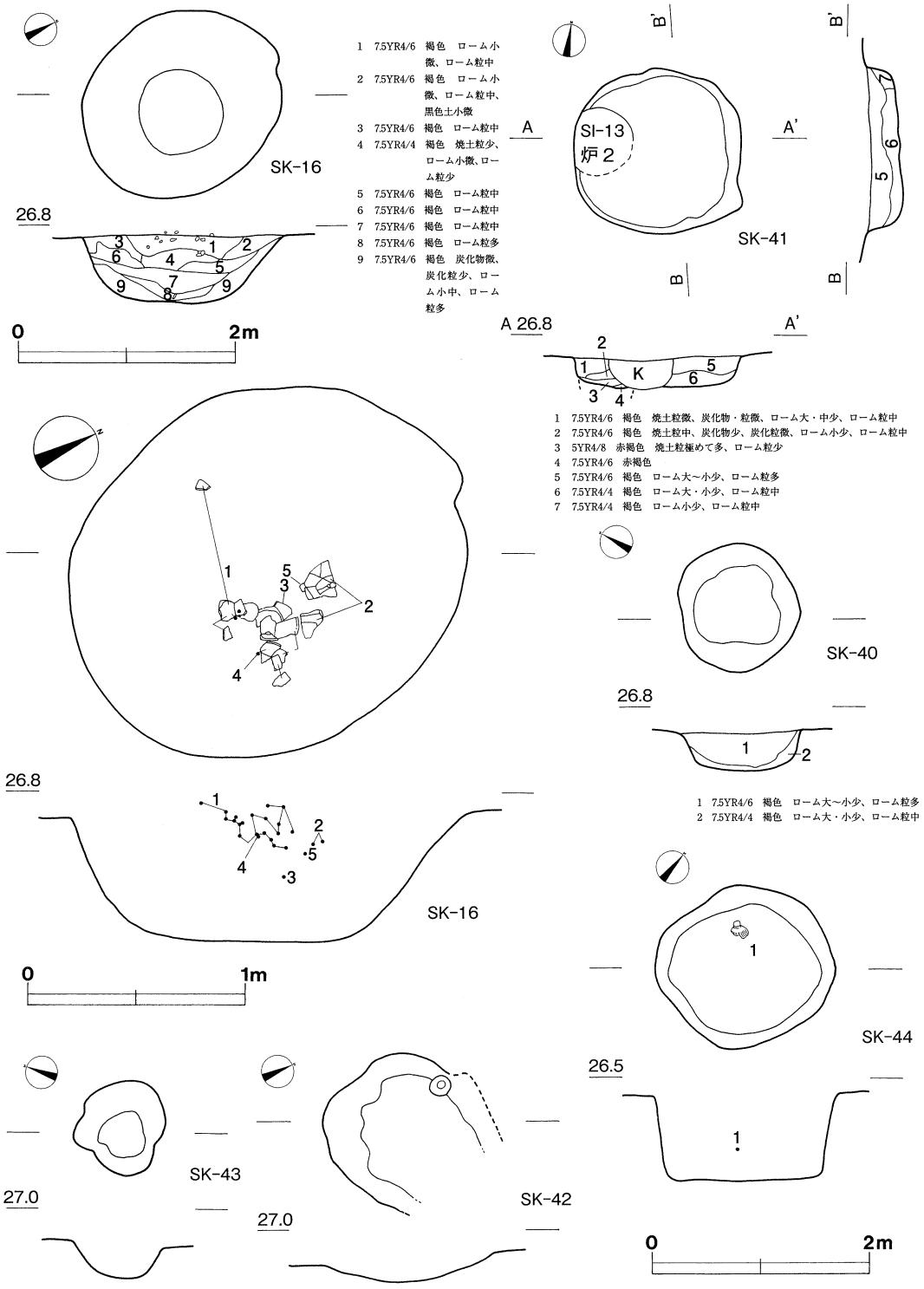


第47図　第31・32・34号土坑



1 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム中微、ローム小少、ローム粒中
2 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム中少、ローム小・粒中
3 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
4 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム小微、ローム粒少
5 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム中少、ローム小・粒中
6 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム中微、ローム小少、ローム粒中
7 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム中微、ローム小・粒中
8 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小微、ローム粒少
9 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム中少、ローム小中、ローム粒多
10 7.5YR3/2 黒褐色 炭化粒微、ローム中・小少、ローム粒中
11 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
12 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム大微、ローム中小、ローム小中、ローム粒多
13 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム中微、ローム小少、ローム粒中
14 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム小少、ローム粒多
15 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム中～粒中
16 7.5YR4/4 褐色 炭化粒微、ローム小微、ローム粒少
17 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム中少、ローム小中、ローム粒多
18 7.5YR4/4 褐色 炭化粒微、ローム大微、ローム粒少
19 7.5YR3/4 暗褐色 炭化粒微、ローム小少、ローム粒中

第48図　第33・35・36号土坑



第49図　第16・40～44号土坑

第16号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴	C：(38.3)	浅黄橙	石英・長石・雲母◎	大型土器の胴部破片。２本組の隆起線による区画文が施され、区画内はRL縄文を施文。区画間は無文帯となるが一部縄文施文。	№270 炭化物付着
2	深鉢	口縁～胴	A：〔37.3〕 C：(21.3)	にぶい黄橙	石英・長石◎、黒色片△	平縁。キャリパー形を呈する。口唇部下に凹線が２条巡り無文帯が作出さ、以下には単節RL縄文施文。口唇部が肥厚する。	№271
4	深鉢	底	B：6.6 C：(4.2)	にぶい黄橙	石英・長石◎、赤色粒△	底面凸レンズ状となる不安定な底部で厚手。無文であるが内外面にミガキが施されている。	№273

第16号土坑出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
5	土器片錘	SK-16	一部欠	4.35×4.12	1.0	22.0	打割	切り目１対

第33号土坑〔SK－33〕（第48・51図　ＰＬ11・53）

位　置　Ｙ・Ｚ－27区に位置する。

規　模　長径3.20cm×短径165cmの長楕円形を呈し、確認面からの深さは83cmを測る。

長径方向　Ｎ－25°－Ｗ

断面形態　壁は外傾し、底面は平坦である。

覆　土　19層からなる。

出土遺物　土製品として土器片錘が１点（１）出土している。

所　見　形態的に陥し穴と考えられ、第32号土坑と形態的に類似し近接して存在する。遺物として中期後半の土器片錘が出土しており、同期の遺構と考えられる。

第33号土坑出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
1	土器片錘	SK-33	2/3	2.65×2.7	1.15	9.0	全周磨り	切り目１ヶ

第44号土坑〔SK－44〕（第49・51図　ＰＬ13・50・53）

位　置　Ｃ・Ｄ－13・14区に位置する。

規　模　長径166cm×短径150cmの円形を呈し、確認面から深さは38cmを測る。

長径方向　Ｎ－125°－Ｗ

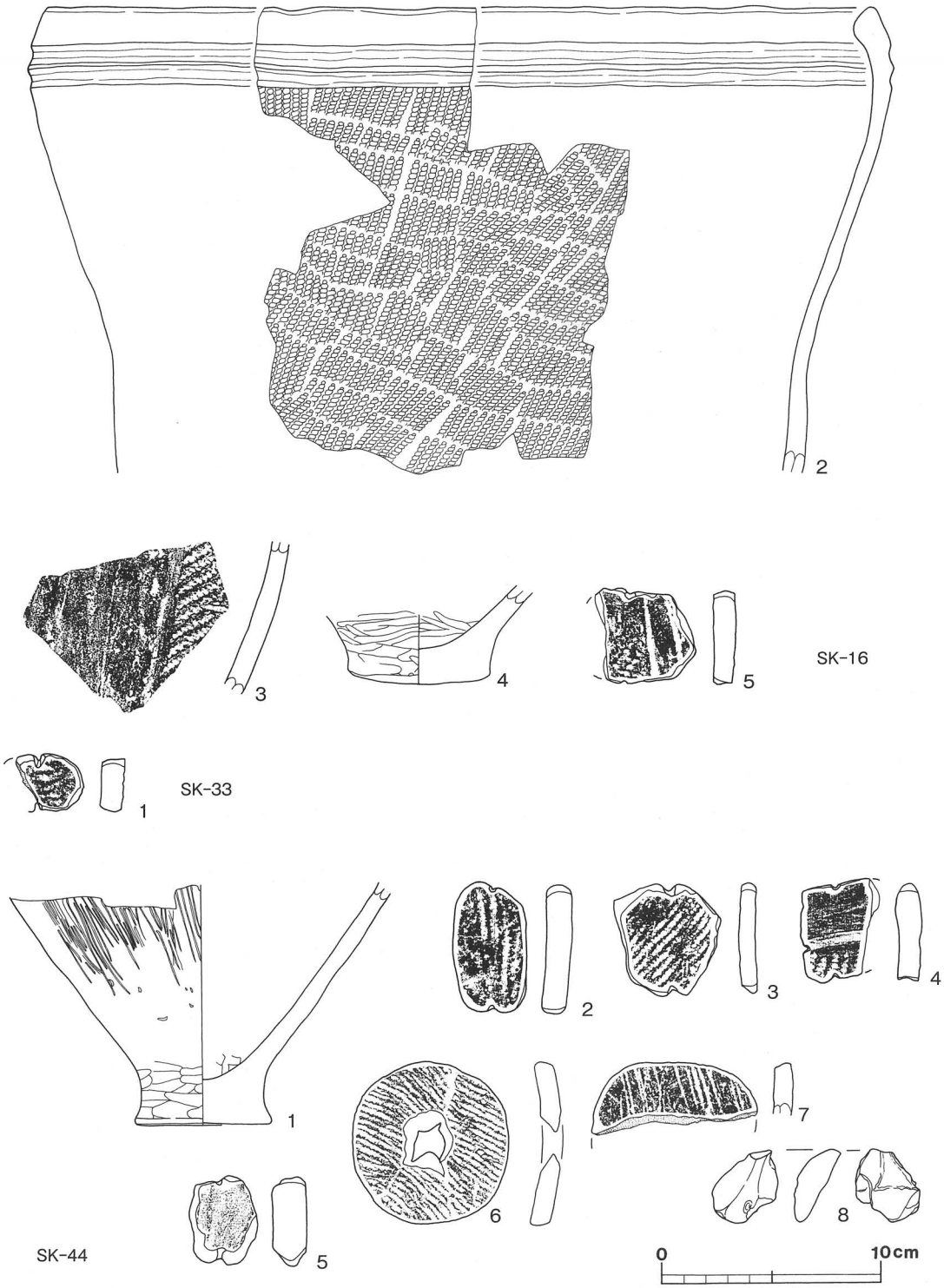
断面形態　壁は外傾し、底面は平坦である。

覆　土　覆土の下層から遺物が出土している。

出土遺物　１は深鉢の底部で、張り出すものである。底面は赤彩されている。このほか土製品として、土器片錘が４点（２～５）、有孔円盤が１点（６）、土製円盤１点（７）、焼成粘土塊（８）が出土している。

所　見　出土遺物から中期後半の加曽利Ｅ３式期の遺構と考えられる。

第50図　第16号土坑出土遺物（1）



第51図　第16（2）・33・44号土坑出土遺物

第44号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴～底	B：6.2 C：(11.0)	橙	石英・長石 ○	底部は厚手で、胴部へ外傾する。胴部には雑な条線文が施文される。底部はナデられ、底面はミガキが施される。	№278

第44号土坑出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
2	土器片錘	SK-44	完形	5.9×3.4	1.2	24.0	全周磨り	切り目１対
3	土器片錘	SK-44	完形	5.1×4.75	0.8	22.0	一部磨り	切り目１対
4	土器片錘	SK-44	一部欠	4.5×3.6	1.15	58.0	一部磨り	切り目３ヶ
5	土器片錘	SK-44	完形	4.1×3.05	1.6	20.0	打割	切り目上端２ヶ下端１ヶ
6	有孔円盤	SK-44	完形	7.5×7.1	0.9	61.2	全周磨り	表裏より穿孔
7	円盤	SK-44	1/3	2.9×7.5	0.8	21.0	全周磨り	楕円形
8	焼成粘土塊	SK-44	完形	3.2×3.0	1.4	8.0	―	№280

第50号土坑〔SK－50〕（第52～54図　ＰＬ13・51）

位　置　２Ｅ・２Ｆ－16・17区に位置する。

規　模　長径180cm×短径157cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは75cmを測る。

長径方向　Ｎ－95°－Ｅ

断面形態　壁は外傾し、底面は平坦である。

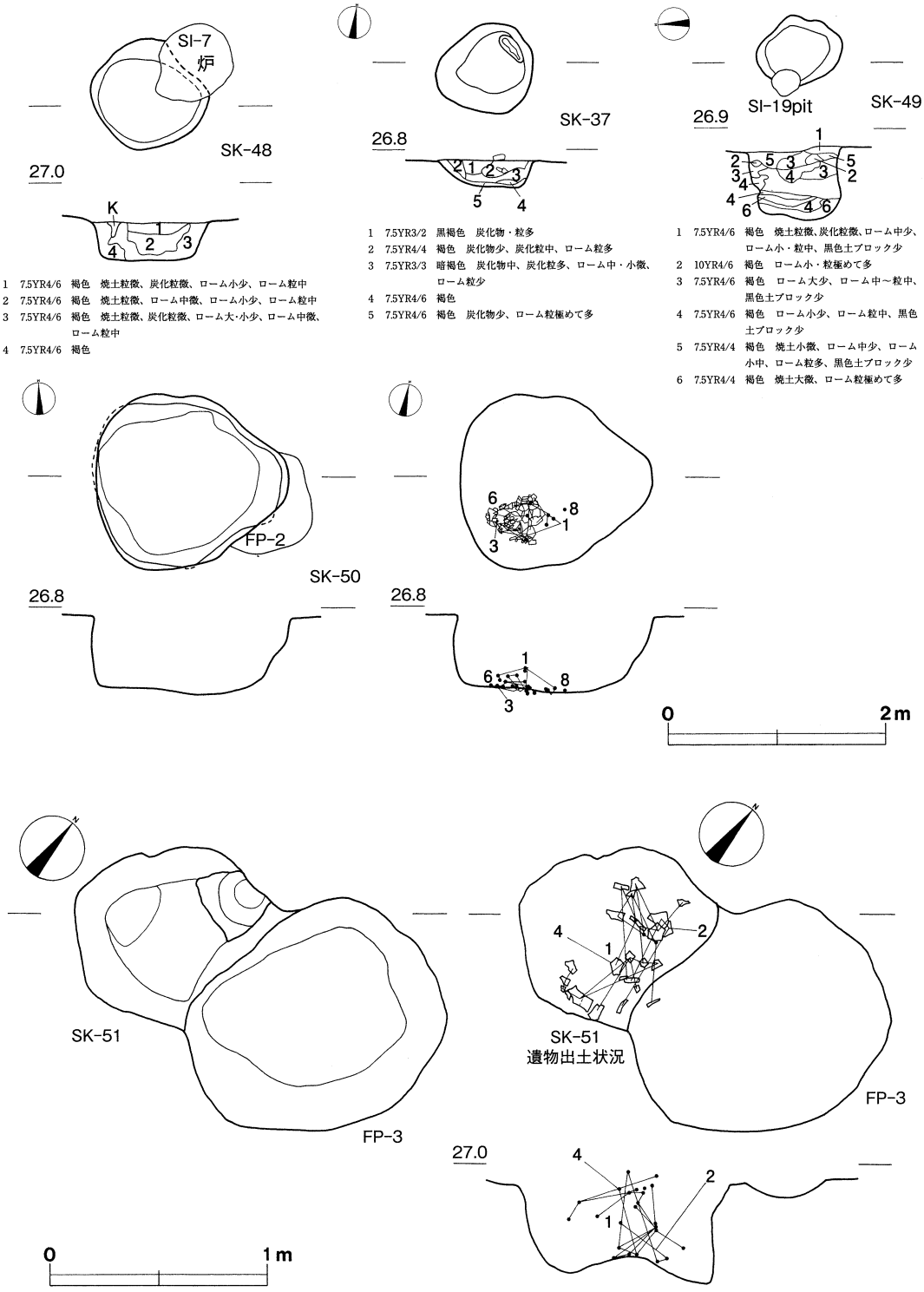
覆　土　遺物は覆土下層・底面から出土している。

出土遺物　前期末葉の土器が出土している。１は図上で口縁から底部にかけての器形が復元できたものでバケツ形を呈し、結節縄文が横位施文される。３は口唇に刻目が施され、いずれも結節縄文が横位施文される。

所　見　本遺構の時期は、出土遺物から前期末葉に属すると判断される。当地域においてこの時期の遺物は出土するものの、明確な遺構としては稀な存在である。遺構の形態としては後の時期に盛行する貯蔵穴を想起させる。

第50号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁～底	A：〔27.1〕 B：〔9.7〕 C：(36.5)	浅黄橙	長石○、石英赤・色粒△	波状縁。器形はやや外傾して開く。RL結節縄文が全面に施文される。波頂部表裏に跨り、縄文原体の側面圧痕あり。口縁に意匠文あり。	№. 255・256・257の合成
2	深鉢	口縁～胴	A：〔22.5〕 C：(12.3)	褐灰	石英・長石 ○	平縁。口辺付近に膨らみを持ち立上がる。口唇部の一部に刻み目を施す。細いLr結束縄文を横位回転で全面に施す。	№251 ５と同一個体
6	深鉢	胴	C：(16.6)	にぶい赤褐	石英・長石 △	やや外傾する胴部破片。ヘラ状工具による調整の後、Lr結節縄文が全面に横位回転施文される。	№254
7	深鉢	底	B：〔10.0〕 C：(4.5)	橙	石英・長石 ○	器面にLr結節縄文施文。底面ミガキ。	№253
8	深鉢	底	B：〔14.9〕 C：(4.6)	にぶい赤褐	石英・長石 ○	器面にLR縄文が横位回転施文される。底面はミガキ。	№252 炭化物付着

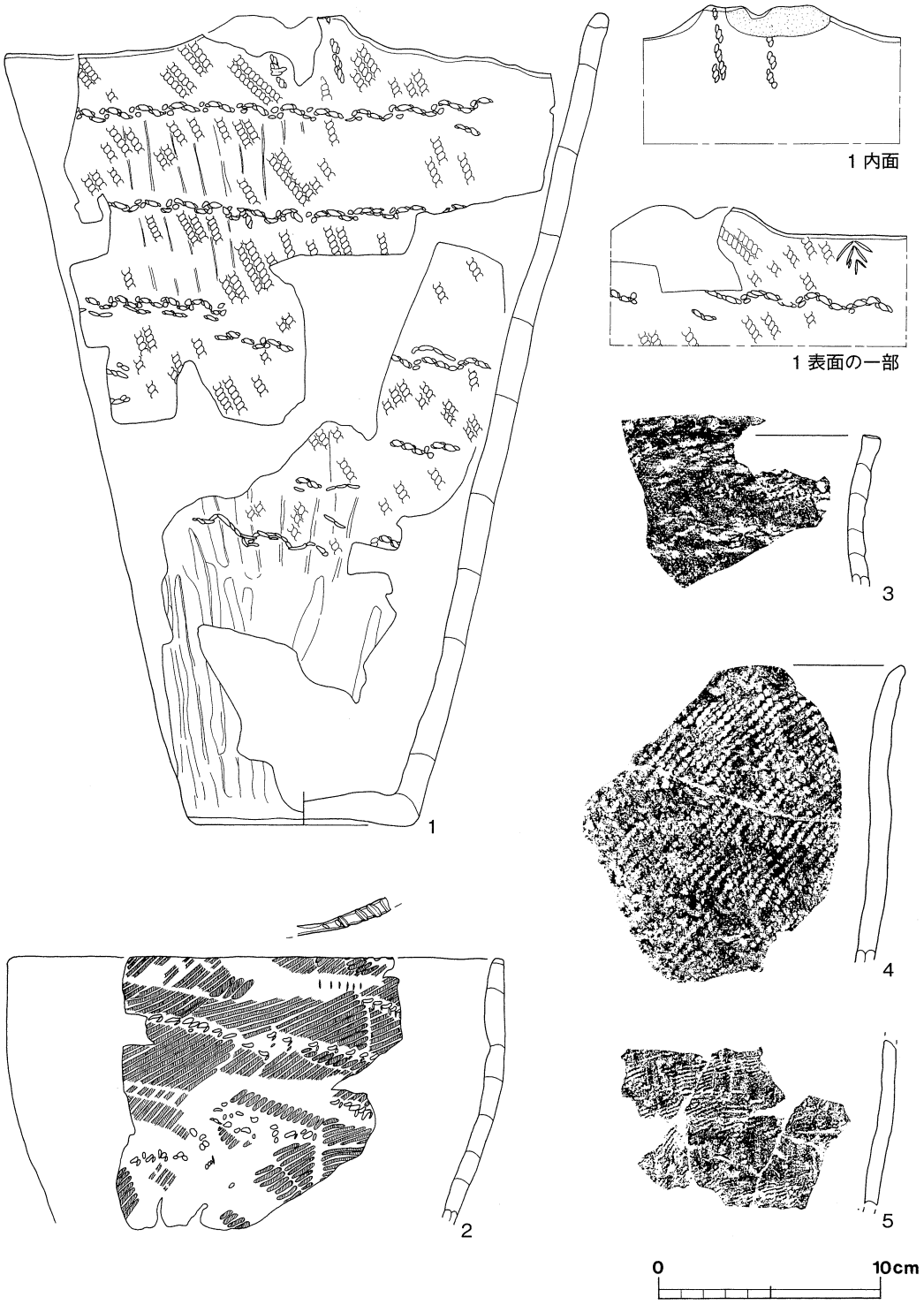


1 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微、炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
2 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微、ローム中微、ローム小少、ローム粒中
3 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微、炭化粒微、ローム大・小少、ローム中微、ローム粒中
4 7.5YR4/6 褐色

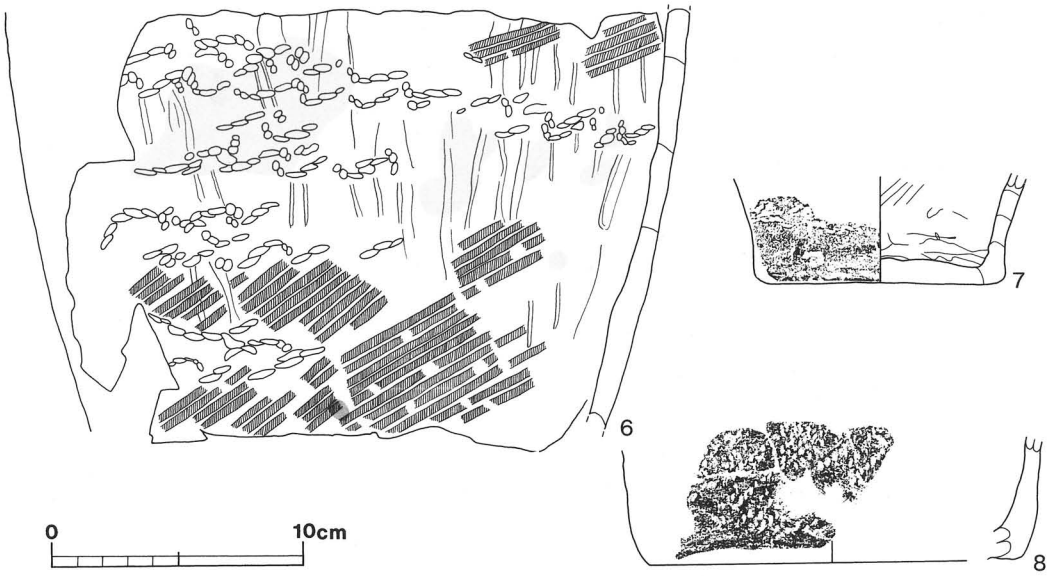
1 7.5YR3/2 黒褐色 炭化物・粒多
2 7.5YR4/4 褐色 炭化物少、炭化粒中、ローム粒多
3 7.5YR3/3 暗褐色 炭化物中、炭化粒多、ローム中・小微、ローム粒少
4 7.5YR4/6 褐色
5 7.5YR4/6 褐色 炭化物少、ローム粒極めて多

1 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微、炭化粒微、ローム中少、ローム小・粒中、黒色土ブロック少
2 10YR4/6 褐色 ローム小・粒極めて多
3 7.5YR4/6 褐色 ローム大少、ローム中～粒中、黒色土ブロック少
4 7.5YR4/6 褐色 ローム小少、ローム粒中、黒色土ブロック少
5 7.5YR4/4 褐色 焼土小微、ローム中少、ローム小中、ローム粒多、黒色土ブロック少
6 7.5YR4/4 褐色 焼土大微、ローム粒極めて多

第52図 第37・48～51号土坑



第53図　第50号土坑出土遺物（1）



第54図　第50号土坑出土遺物（２）

第51号土坑〔SK－51〕（第52・55図　ＰＬ14・50）

位　置　２Ａ－15区に位置する。

規　模　長径90cm×短径70cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは45cmを測る。

長径方向　Ｎ－15°－Ｅ

断面形態　壁は外傾し、底面は凸凹である。

覆　土　遺物は覆土・底面から出土している。

出土遺物　大型の深鉢で、キャリパー形を呈すると思われる。口縁部に微隆起線が巡り無文帯が区画される。土製品として土器片錘が２点（３・４）出土している

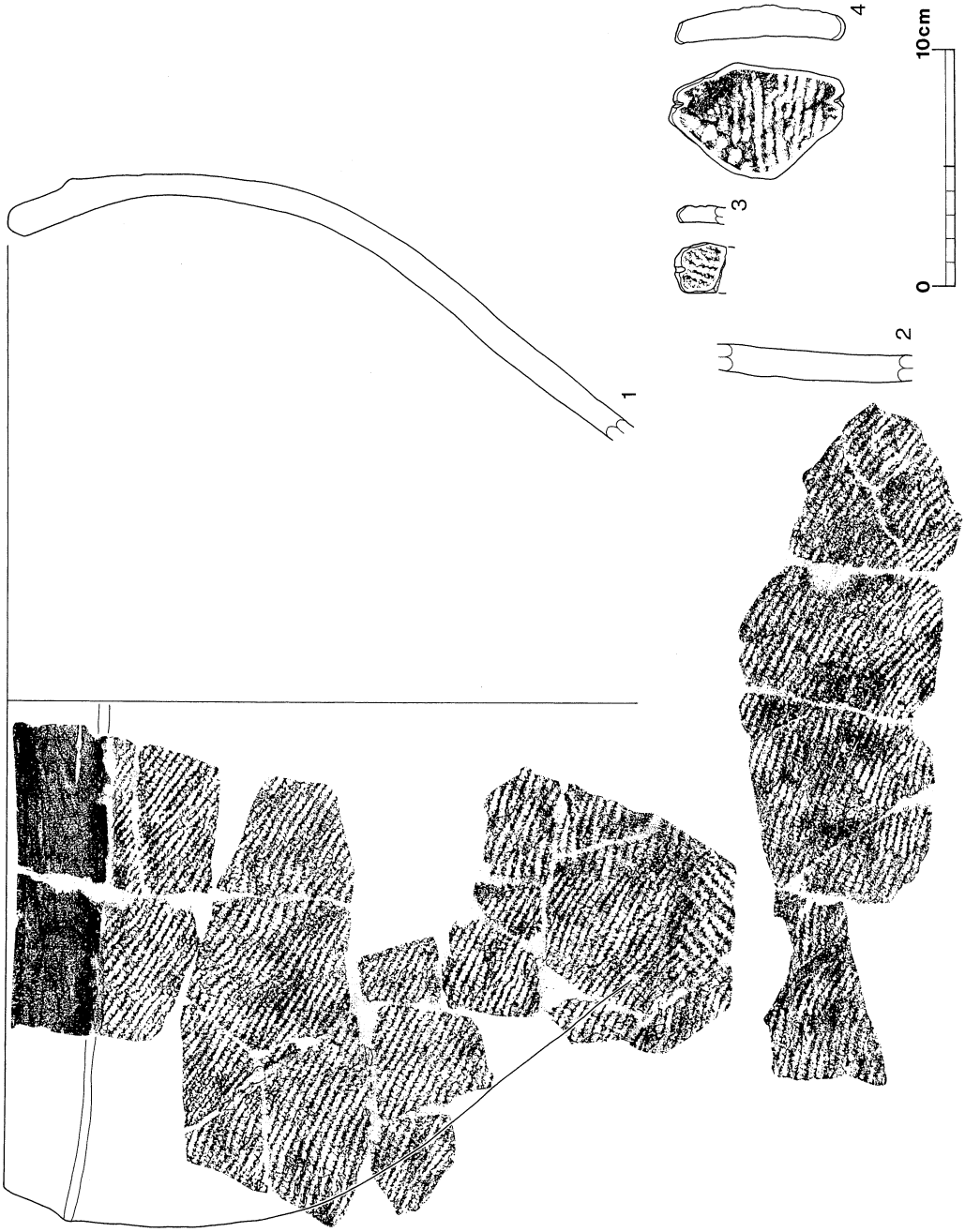
所　見　当初は土器埋設遺構として調査したが、遺物出土状況から土坑として扱った。出土遺物から中期後半の加曽利Ｅ３式～Ｅ４式期の遺構と考えられる。

第51号土坑出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	鉢	口縁～胴	A：〔41.8〕 C：（26.8）	灰褐	石英・長石・金雲母◎	底部から大きく開き、口縁部がやや肥厚し内湾する。口唇部下に隆起線が巡り無文帯となる。以下にはＬＲ縄文が施文される。	№なし

第51号土坑出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
3	土器片錘	MY-5	1/2	2.15×2.1	0.7	4.0	全周磨り	切り目１ヶ
4	土器片錘	MY-5	完形	7.3×4.7	1.3	46.0	一部磨り	切り目１対



第55図　第51号土坑出土遺物

４．土器埋設遺構（ＭＹ）

調査エリア内からは３基の土器埋設遺構が確認されている。これらの遺構はいずれも掘り込み内に土器を埋設したものである。そして、これらの遺構は今回の調査エリア内の北側に寄って確認された。遺存状況はいずれも良好ではない。

第２号土器埋設遺構〔ＭＹ－２〕（第56・57図　ＰＬ14）

位　置　２Ｇ－17区に位置する。

規　模　長径50cm×短径45cmの円形を呈し、確認面からの深さは10cmを測る。

長径方向　Ｎ－30°－Ｗ

断面形態　壁は外傾し、底面は平坦である。

出土状況　掘り方を埋め戻した後、掘り方の北西寄りに底面から2.5cm上（２層上面）の位置に、深鉢形土器底部が正位で確認された。本来土器の胴上部も存在したものと思われる。

出土遺物　２は深鉢の底部である。底部が突出した無文の土器で、底面が膨らみをもつ。外面の下部にヘラ削り調整が見られる。

所　見　出土遺物から中期後半の遺構と考えられる。

第３号土器埋設遺構〔ＭＹ－３〕（第56・57図　ＰＬ14）

位　置　Ｚ－12区に位置する。

規　模　長径（50）cm×短径38cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは９cmを測る。

長径方向　Ｎ－45°－Ｅ

断面形態　壁は緩斜し、底面は皿状である。

出土状況　掘り方を埋め戻した後、土器より一回り大きな掘り込みを行い、深鉢形土器が正位の常態で据えられている。確認時では底部のみであったが、本来は一定の大きさのものであった可能性が高い。

出土遺物　１は深鉢形土器の底部で全面に縄文が施される。

所　見　出土遺物から中期後半の遺構と考えられる。

第４号土器埋設遺構〔ＭＹ－４〕（第56・57図　ＰＬ15）

位　置　２Ｃ－９区に位置する。

規　模　長径130cm×短径100cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは５cmを測る。

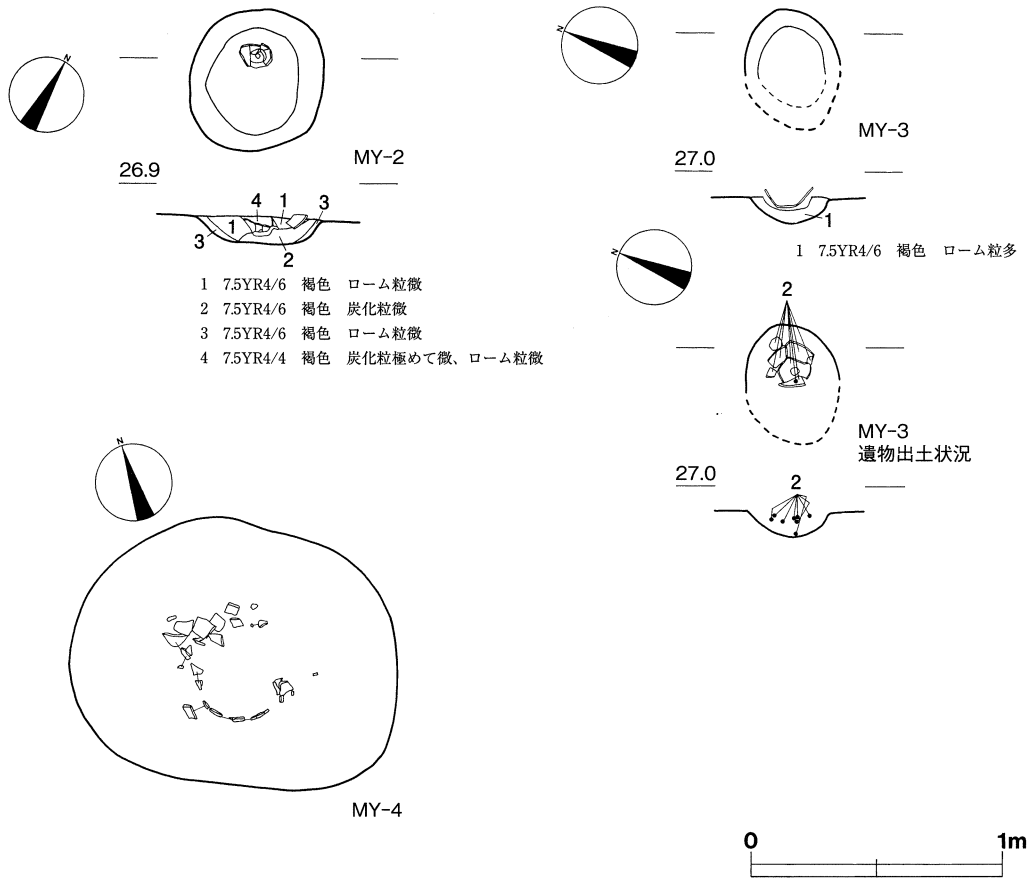
長径方向　Ｎ－62°－Ｗ

断面形態　壁は緩く立ち上がり、底面は皿状である。

出土状況　深鉢形土器が細かく割れながらも、土器埋設の状況が理解できる。掘り方のほぼ中央に埋設されている。

出土遺物　大型土器の底部で無文である。網代痕が底面に認められる。時期は中期前半であると思われ、器種については浅鉢と考えられる。

所　見　出土遺物から中期前半の遺構と考えられる。



第56図　第２～４号土器埋設遺構

第２～４号土器埋設遺構出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴～底	B：5.7 C：(17.5)	にぶい赤褐	石英･長石･金雲母◎	底部から外傾して立上がる。器面にRL縄文を縦回転施文。底部側縁でナデられ無文。底面は荒れる。	№259 MY-3
2	深鉢	胴～底	B：5.4 C：(13.8)	橙	石英・長石◎	底部がやや括れ、胴部は外傾して開く。器面は無文で一部ミガキが施される。	№258 MY-2 炭化物付着
3	浅鉢	胴～底	B：(22.4) C：(16.5)	にぶい黄橙	石英・長石◎	底径が大きく、著しく外傾する。器形はバケツ状を呈する。器面は無文。内面は丁寧にナデられている。底面には網代痕が残る。	№260・262 MY-4 網代痕

第57図　第２～４号土器埋設遺構出土遺物

5．集石（ＳＳ）

集石は石が一定の範囲でまとまって確認されたものである。その遺構を構成する石はほとんどが円礫である。いずれの遺構も調査エリア内の北側で確認された。

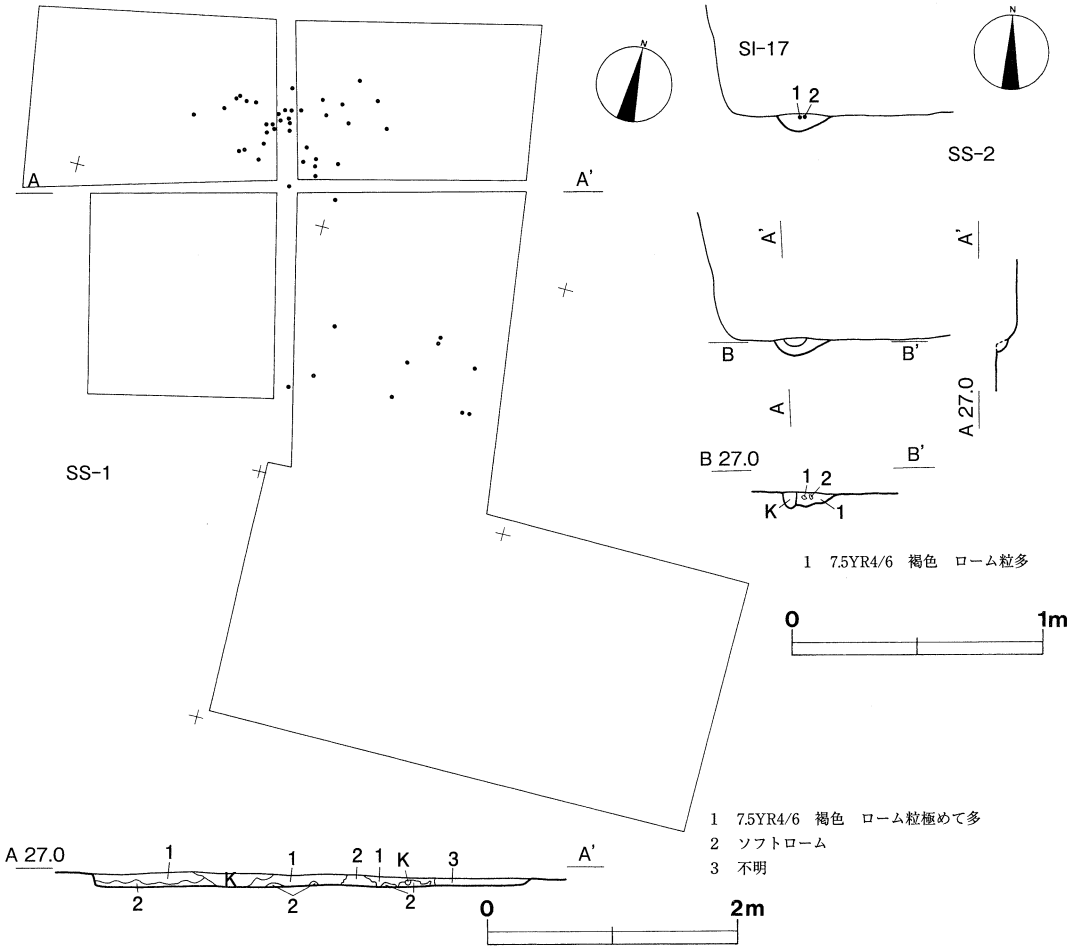
第１号集石〔SS－１〕（第58図　ＰＬ15）

位　置　２Ａ・２Ｂ－３・４区に位置する。

重複関係　ほかの遺構との重複はない。

規　模　およそ長径３ｍ×短径1.5ｍに広がる。細かく見れば南北に2つのまとまりが確認できる。この集石に伴う掘り込みは確認できなかった。

出土遺物　集石は１・２層から出土し、レベル差はほとんどない。集石のまとまってみられる場所は２ヵ所あり、２Ａ・２Ｂ－３区と２Ｂ－４区である。前者の方が分布を密にしまとまっており、後者は粗で数も少ない。



第58図　第１・２号集石・遺物出土状況

所　見　集石の礫はいずれも確認面で検出されたもので、集石下には掘り込みもなく、集石を構成する礫自体に焼けた跡や使用痕跡なども認められないことから。この遺構の性格は不明である。遺構の時期は遺跡の状況より前期から中期と考えられる。

第２号集石〔SS－２〕（第58図）

位　置　２Ａ－８区に位置する。

重複関係　ＳＩ－17と重複している。

規　模　残存径は44cm、深さは13cmである。

出土遺物　覆土中から２点の礫が出土している。

所　見　この遺構は第17号住居跡の南壁で掘り込みの断面が確認されたものである。同住居跡内にも南側に寄って自然礫が数点確認されており、本集石と関連のあるものと考えた。いわゆる集石土坑と呼ばれるものと同じと考えられる。遺構の時期は遺跡の状況より前期から中期と考えられる。

６．焼土址（ＦＰ）（第59図　ＰＬ15・53）

焼土址は５基（FP－１～４・６）検出された。分布状況は第１～３号焼土址が比較的近寄っているが、全体的にまばらである。特に、第１・２号焼土址は第２号土器埋設遺構に近接して確認されている。そして、第２号焼土址は第５０号土坑と重複し、第３号焼土址は第51号土坑と重複している。これらの重複関係は焼土址の方が新しい状況が確認されている。

これらの遺構は、焼土址と命名したものの、硬化した焼け面は確認されておらず焼土が覆土中から出土するだけであり、どちらかというと土坑に焼土が廃棄されたものと捉えた方が良いように思われる。

出土遺物として第３・６号焼土址から土器片錘が１点ずつ出土している。

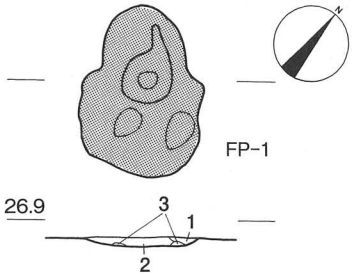
遺構の構築時期については、第３号焼土址が出土遺物から中期後半と考えられるが、他は時期判定となる遺物が見られず明確ではないが、およそ中期後半と想定される。

第３号焼土址出土土製品

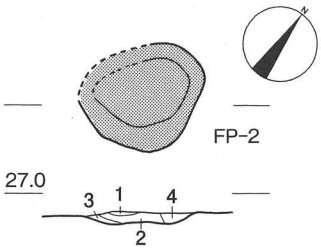
図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
1	土器片錘	FP-3	完形	9.5×6.6	0.9	80.0	全周磨り	切り目１対

第６号焼土跡出土土製品

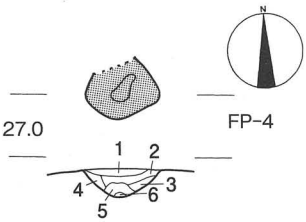
図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
2	土器片錘	FP-6	完形	6.3×5.7	1.15	50.0	打割	打ち欠き１ヶ



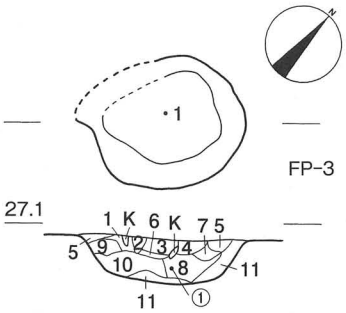
1　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微
2　5YR4/6　赤褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微
3　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微



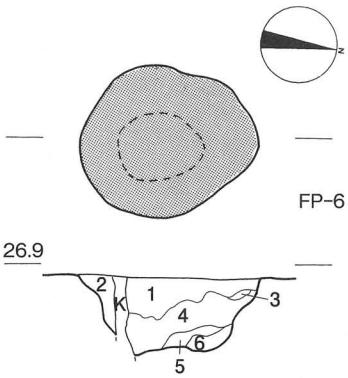
1　7.5YR4/6　褐色　炭化粒・ローム粒微
2　5YR4/6　赤褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微、炭化物少
3　5YR4/6　赤褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微
4　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微



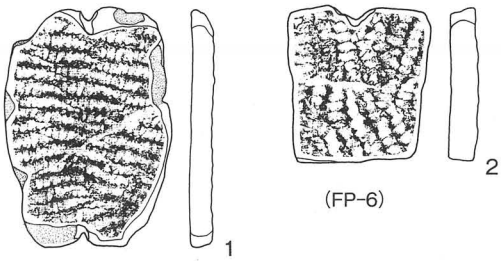
1　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒極めて微
2　5YR4/6　赤褐色　焼土粒少、焼土中・小・炭化粒・ローム粒・黒色粒微
3　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・ローム粒微、黒色粒少
4　7.5YR4/6　褐色　焼土粒・炭化粒極めて微、ローム粒・黒色粒微
5　7.5YR4/4　褐色　炭化粒極めて微、ローム粒微
6　7.5YR4/6　褐色　ローム粒微

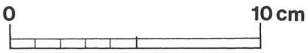


1　7.5YR4/6　褐色　炭化物少、焼土粒・炭化粒・ローム粒微
2　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化物・ローム粒少、焼土小・炭化粒・ローム小少
3　7.5YR4/4　褐色　焼土粒少、焼土小・炭化粒・ローム粒少
4　5YR4/6　赤褐色　焼土大・中・炭化粒・ローム粒少、焼土小・中・ローム小少
5　7.5YR4/3　褐色　焼土小・粒・炭化粒・ローム粒微
6　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微
7　5YR4/4　にぶい赤褐色　焼土小・粒・炭化粒・ローム粒微
8　5YR4/4　にぶい赤褐色　焼土中・炭化物・粒・ローム粒微、焼土小・粒少
9　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒・ローム粒微
10　10YR4/6　褐色　焼土粒極めて微、炭化物・炭化粒微
11　10YR4/6　褐色　焼土粒極めて微、炭化粒・ローム粒微



1　5YR4/8　赤褐色　焼土大・中微、焼土小・ローム粒中、焼土粒極めて多、ローム小少
2　7.5YR4/6　褐色　焼土中微、焼土粒少、黒色土中中
3　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒・ローム大・小少、炭化物微、ローム粒多
4　7.5YR4/6　褐色　炭化物微、ローム小・粒少
5　5YR4/8　赤褐色　焼土小・ローム粒中、焼土粒多、ローム小少
6　5YR4/8　赤褐色　焼土小・ローム小少、焼土粒中、ローム粒多





第59図　第１～４・６号焼土址・出土遺物

7．遺構外出土遺物

以下は遺構外から出土した遺物をａ土器、ｂ土製品、ｃ石器に分けて提示する。

ａ土器（第60～67図）

各グリッドから出土した土器や時代が異なる遺構内から出土したものについて一括して時期ごとに図示した。時期は前期から後期まで及ぶが、主体は前期末葉と中期後半のものである。確認された遺構は中期後半のものがほとんどであるが、遺構外出土土器には前期末葉の土器が目立って出土しており、遺構はほとんど確認できなかったものの、この時期の生活の痕跡であることは明白である。

・前期

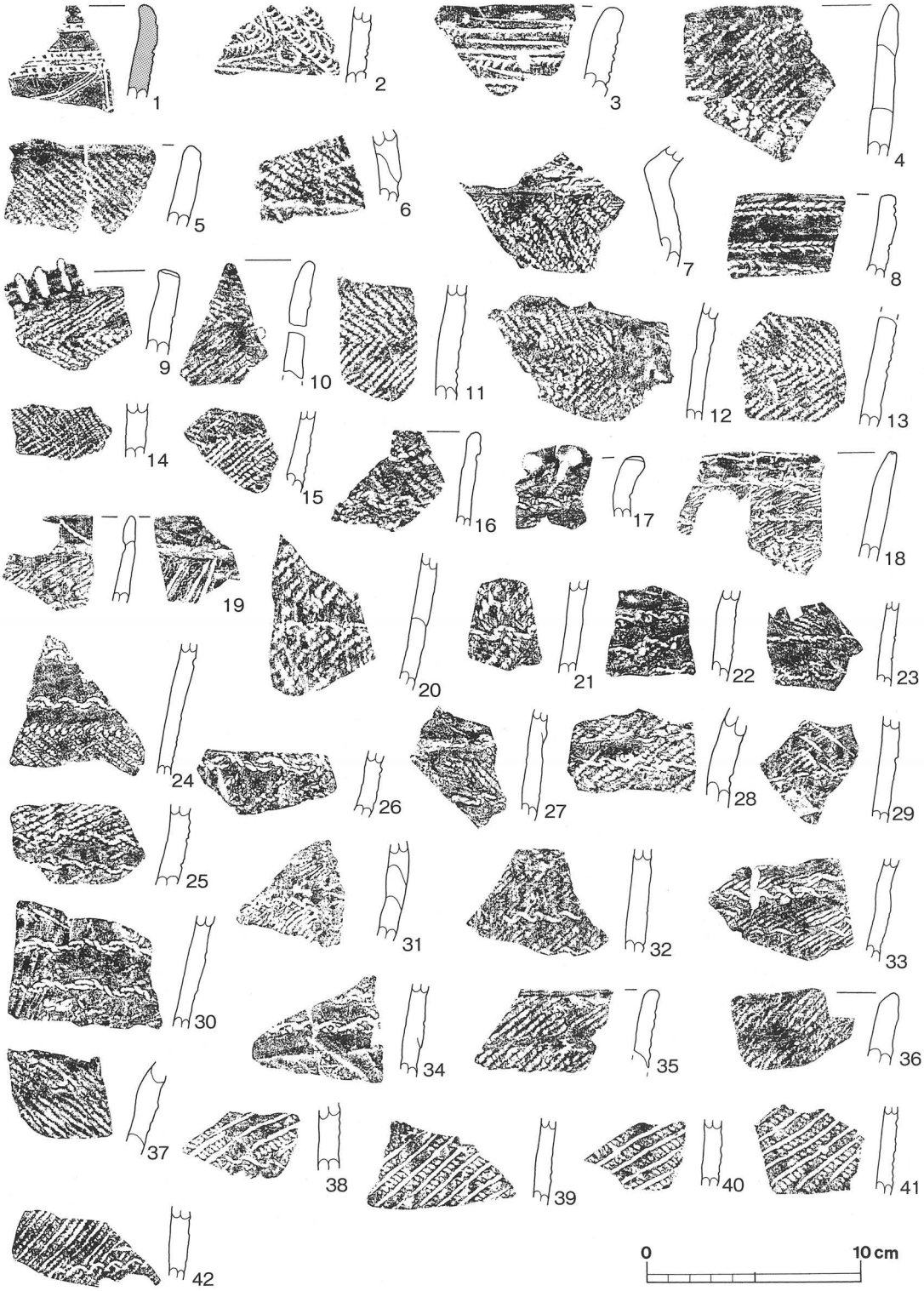
１・72は前期前半の土器でこの２点のみである。１は口縁部で72は底部である。いずれも胎土に繊維が混入する。１は半截竹管状工具による結節沈線や平行沈線で施文される。72はやや上げ底となる底部で、側面に幅広の押し引き文が巡る。

２・３・46～51・57～62・65は前期後半の土器で、浮島式土器や興津式土器の範疇やその影響のものと考えられる。２・３は口縁部または口縁部付近のものと考えられ、いずれにも幅広の半截竹管状工具による結節沈線が施文される。47～51は単沈線によって格子目状の沈線や雑な集合する沈線が描かれる。50・51は地文にＲＬ縄文が施文されている。57～59は地文に貝殻波状文が施文されている。前期末葉段階の土器にも一部この文様が残ると考えられるが、ここで扱う。60は器面に半截竹状工具による変形爪形文が施文されている。61・62には口縁部に輪積痕が残る。65は集合沈線による区画文が描かれる。

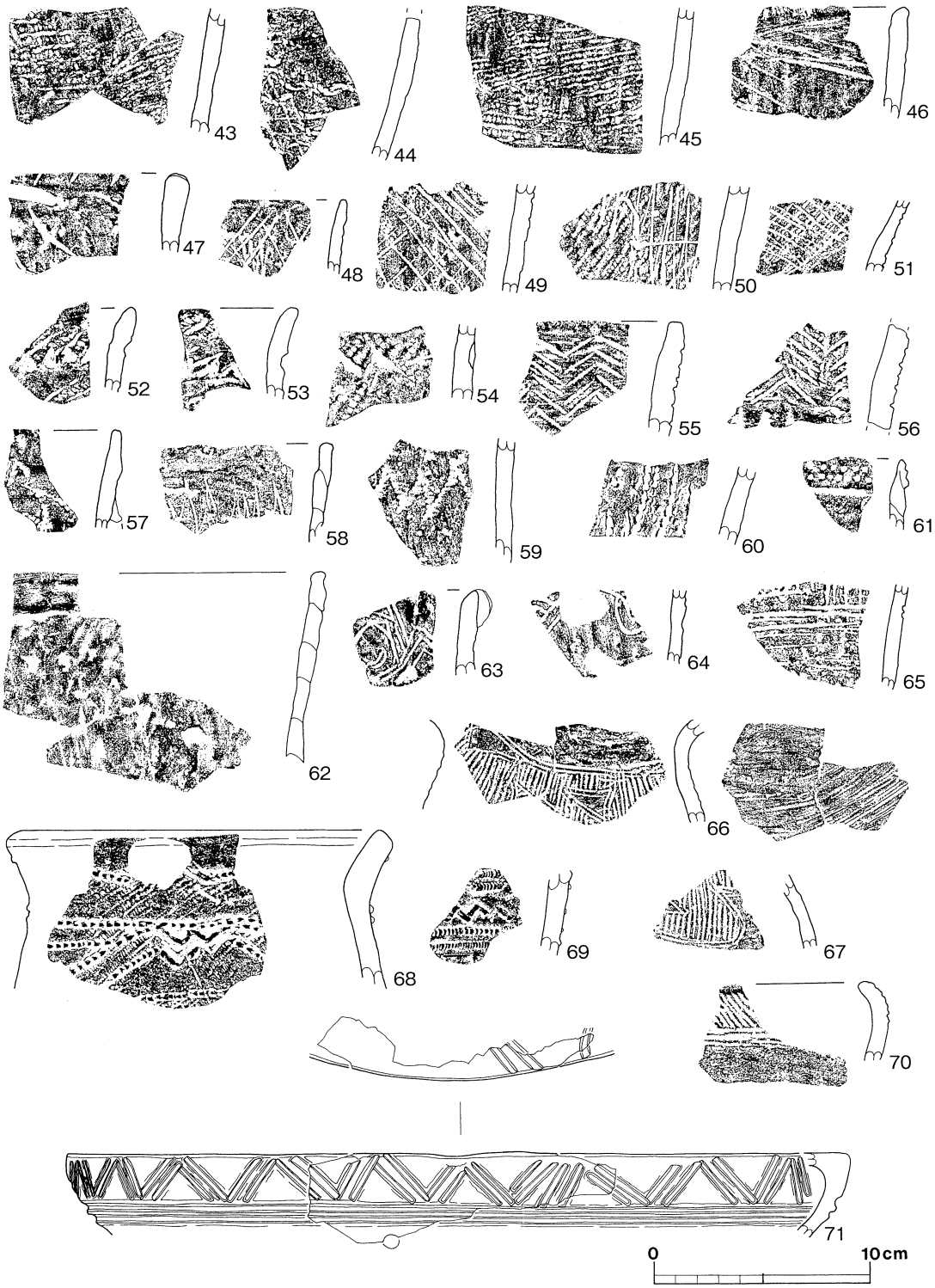
４～45・52～56・63・64・66～71・73～74は前期末葉の範疇の土器群と思われる。この中で主体を占めるのはＳ字状の結節縄文が横位回転施文される土器である。16～45にはＳ字状結節縄文が施文される土器、又は同施文が見られないが先の特徴を持つ土器と同一個体のものも含んでいる。これら以外に４～７のような結節の見られない横位回転縄文や、８の口縁部に縄文原体の側面圧痕が見られるもの、９～15の結束縄文による羽状縄文が施文されるものがある。また、これらの土器は沈線や隆起線などによる文様が描かれないことが特徴の１つとなっている。口縁部の残るものでは、４・19のように器面に輪積痕が残るものや、口唇部に刻み目が残るもの（９・17)、口唇部に結節縄文が施文されるもの（18）が見られる。この時期の土器の底部としては73・74などがあげられ、器面に結節縄文が横位施文されている。

75～79については前期後半から末葉のものとした方が妥当と思われる。

このほかにこの時期の本地域で主体的とならない土器として、十三菩提式や大木６式土器など



第60図　遺構外出土遺物（1）



第61図　遺構外出土遺物（2）

の他地域で盛行する土器文様が施された土器も出土している。52～54・63は口縁部の破片で縄文を地文に三角彫刻文が施文される。55・56は口縁部に連続する鋸歯状の沈線が巡り、頸部に凹凸文が巡る。63は突起の付く口縁部で、64同様に沈線による曲線文が描かれる。66・67は同様な施文の見られる土器で、沈線による幾何学的な区画文が描かれ、条線が充填される。68・69には半截竹管状工具によって押圧した浮線文などが貼付される。70は内湾する口縁部で沈線が巡り区画文となり、区画内に条線文が施文される。71は浅鉢で口縁部が大きく屈曲し口唇部に平端面を持つ。口縁部には２本１単位の鋸歯状文が展開する。一部焼成前の孔が開けられる。

・中期

80・81は中期初頭の五領ヶ台式土器の胴部破片で結節縄文が縦回転される以外は無文である。82～86は中期前半の阿玉台式土器の破片で、口縁部文様帯の間隔が狭く、裏面に文様を持つものも見られることから比較的古手のものといえる。

87・88は中期中葉段階の土器の把手であろう。

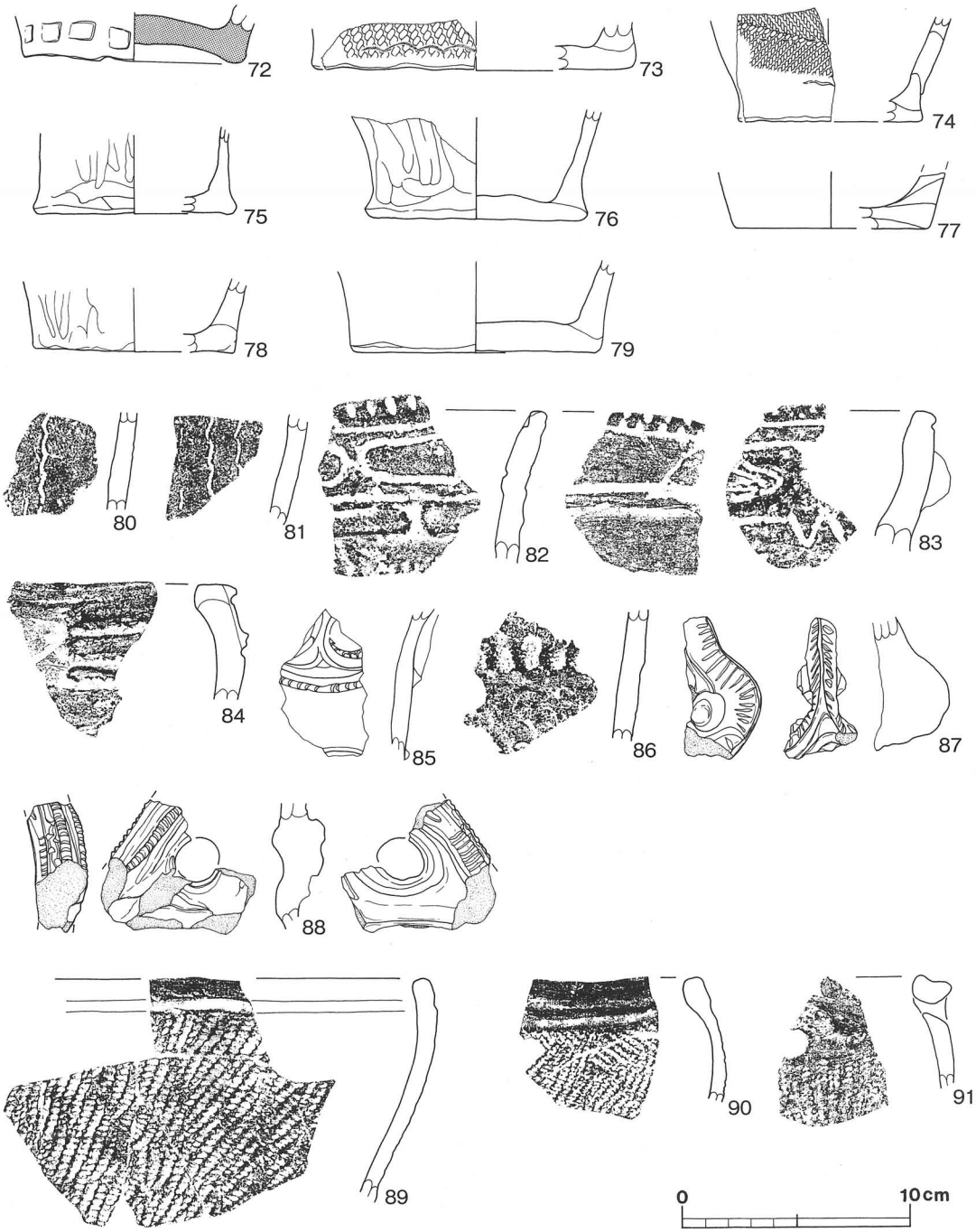
89～109は中期後半の土器で加曽利Ｅ式が主体となる。89・90には口唇部下に沈線などが巡り無文帯が形成され、縄文が地文となる。92は弱い波状縁で、沈線による区画文が見られ縄文が施文され、刺突文も見られる。93・94は縄文の地文のみが施文される。95は胴部破片で沈線による無文帯と縄文帯が交互に区画され、縄文帯部分に蛇行沈線が垂下する。96～98は条線文が施文される。99は無文、100には橋状の把手が付く。101～109は底部であり、101には垂下する沈線によって無文帯と縄文帯が交互に施文される。

・後期

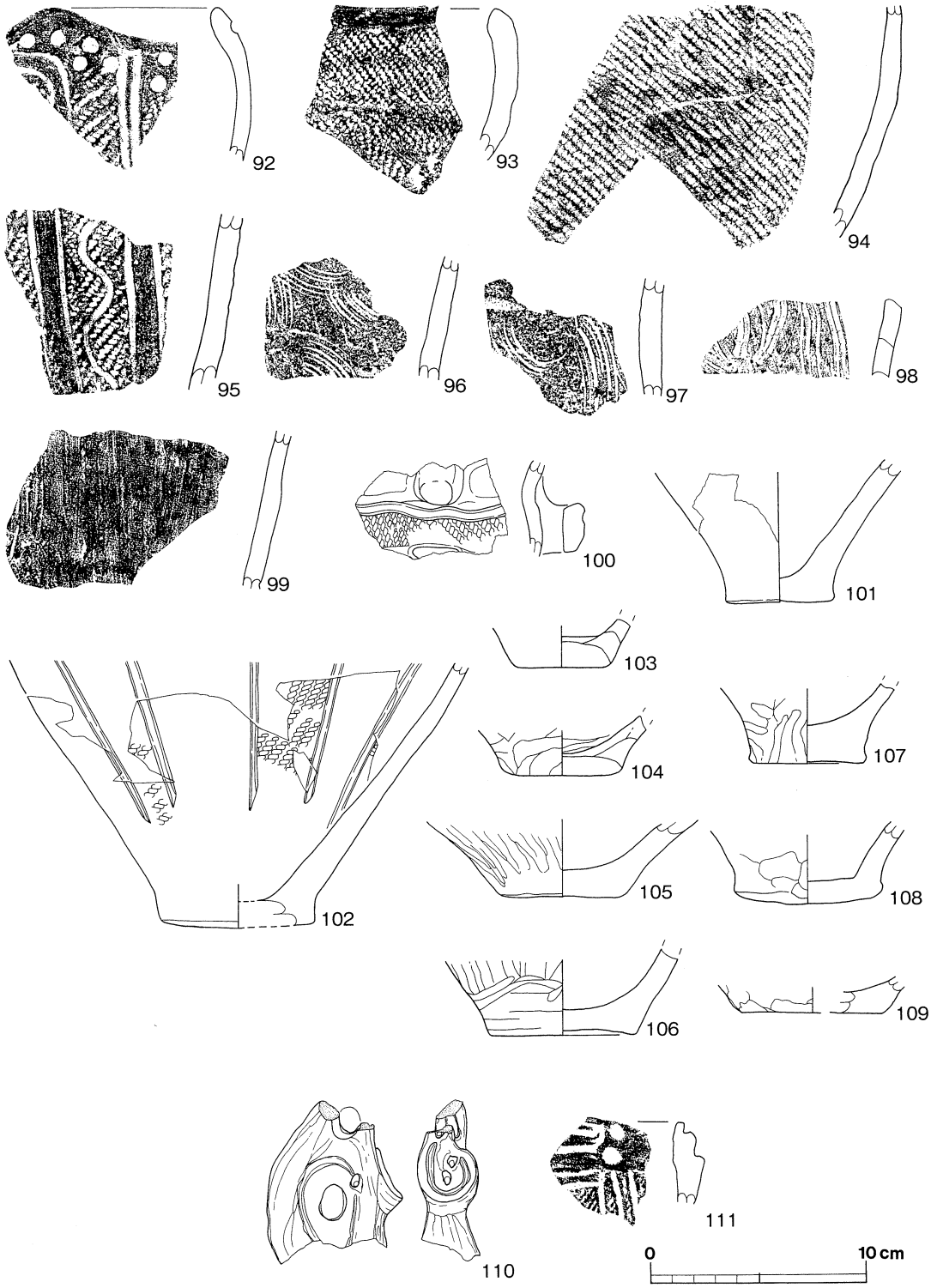
後期の土器は僅か出土しており、いずれも後期前半のものである。110・111がこれにあたる。110が称妙寺式土器の発達した把手、111は堀之内式土器の破片と考えられ、口縁部に盲孔や沈線文が施文される。

遺構外出土土器

図版No	器種	部位	法量（cm）	色調	胎土	器形・文様の特徴	備考
68	深鉢	口縁	A：〔17.8〕 C：(7.3)	にぶい褐	石英・長石◎、金雲母○	平縁。頸部が弱く括れ内面に稜を持ち、口縁部はやや外傾する。異条縄文を地文に、半截竹管状工具で押引きした浮線文が施文される。	№なし
71	浅鉢	口縁	A：(36.2) C：(4.1)	赤褐	石英･長石･黒色粒◎	口縁部が大きく屈曲し、口唇部に平坦面を持つ。口縁部には２本一組の沈線による鋸歯状文・横線文が展開し、口唇部の平坦面も同様。	№226 口縁部に赤褐色顔料付着
102	深鉢	底	B：〔7.2〕 C：(12.1)	橙	石英・長石◎	底部から胴部へ外傾する器形。垂下する沈線により縦位区画文が描かれ、無文帯と縄文帯が交互に展開する。RL縄文が施文される。	№263



第62図　遺構外出土遺物（3）



第63図　遺構外出土遺物（4）

b土製品（第64図）

1～56が土器片錘、57～60が有孔円盤、61～65は土製円盤、66は焼成粘土塊である。

土器片錘は56点出土しており、大きさによっておよそ3段階のものが見られ、1～12は小型であり多くは縦長のもので、11と12のみ横長となる。13～35・56は中型のもので多くが縦長で、56のみが横長となる。36～55はすべて縦長となる。大型のものほど欠損しているものが多くなる。

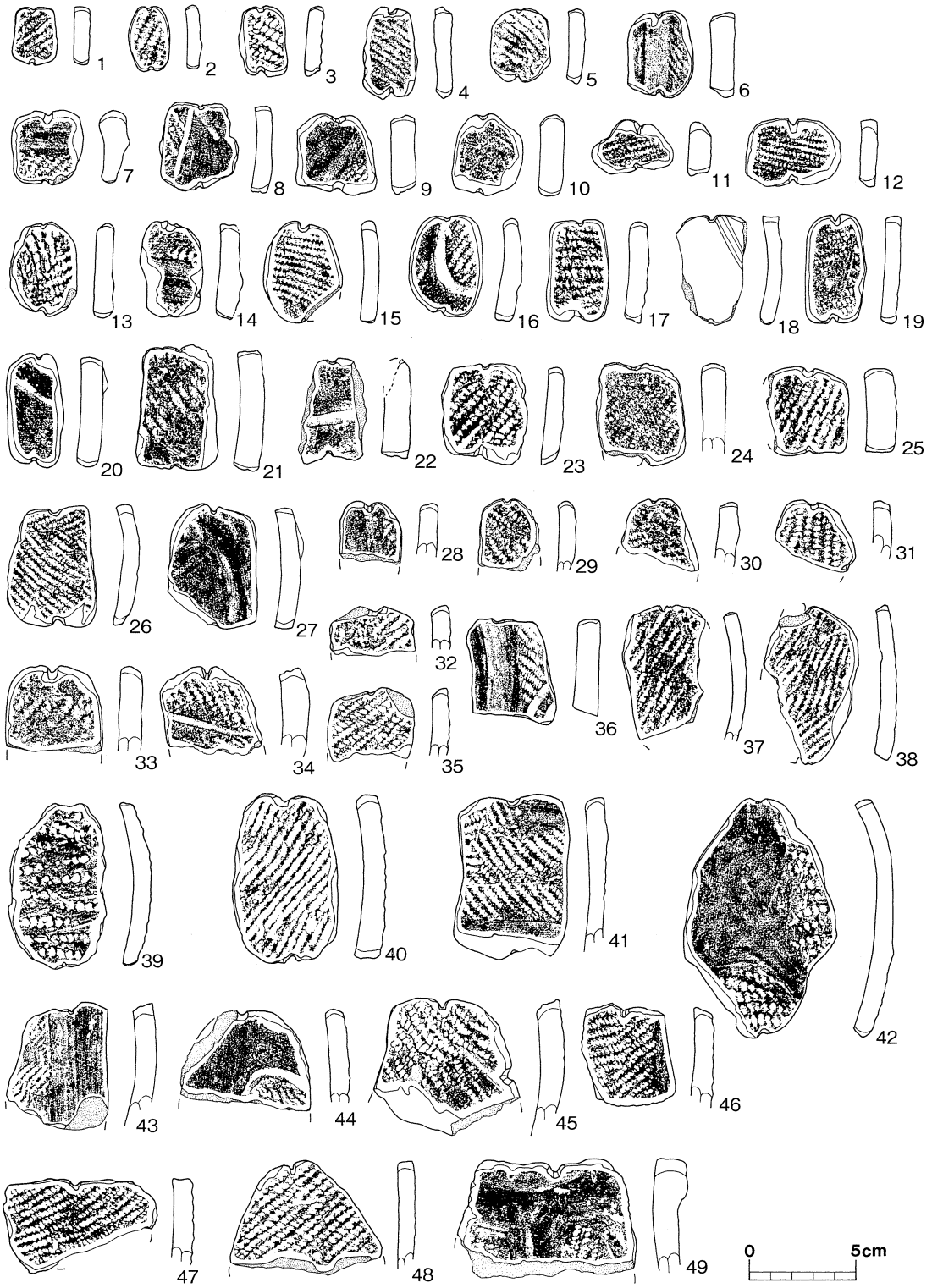
有孔円盤は4点出土している。いずれも中央部分と周辺部が丁寧に擦られており、特に中央部分裏面において継続的な回転運動による擦る行為の結果、孔が開くと考えられる。60は孔が開く前の段階のものと考えられ、貫通しない小さな孔が見られる。

土製円盤は5点出土しており、縁辺が明瞭に擦られたもの（61）や、縁辺が擦られてはいないが全体の形状が円形なものも含んでいる。

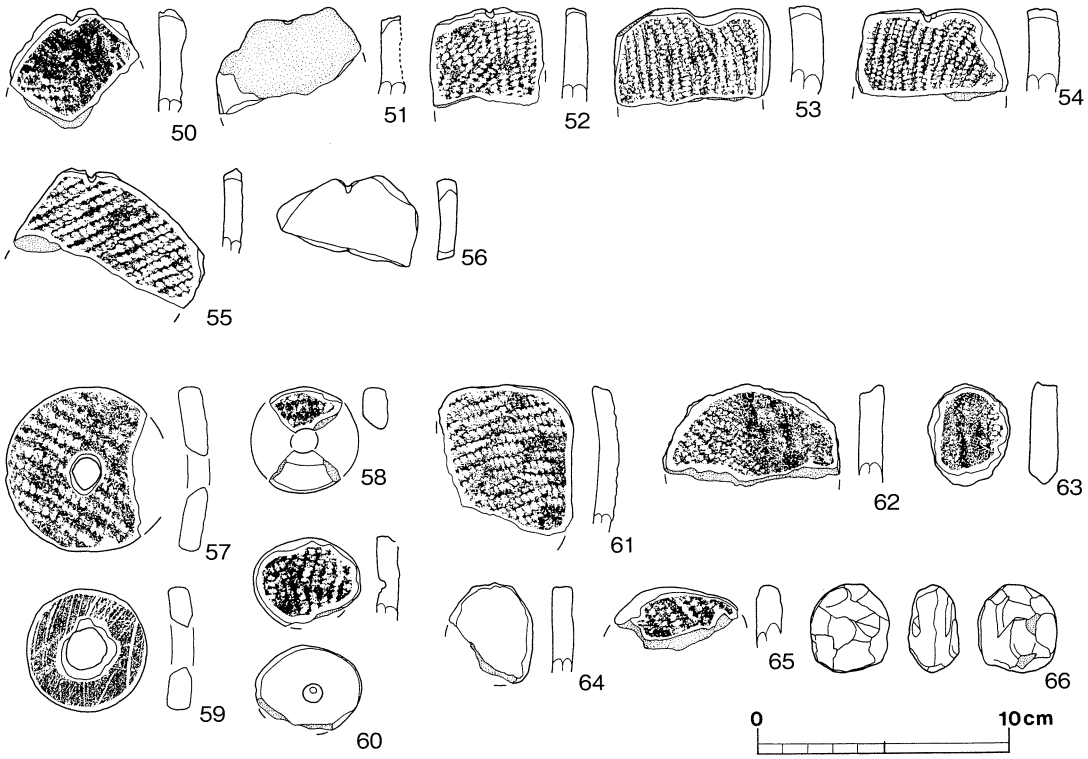
焼成粘土塊は1点（66）のみで、粘土を捏ねて作ったもので表面に指頭痕が残る。

遺構外出土土製品

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
1	土器片錘	SI-1	完形	2.7×2.1	0.75	6.0	全周磨り	切り目1対
2	土器片錘	SD-1	完形	3.05×1.9	0.65	4.0	全周磨り	切り目1対
3	土器片錘	E-15	完形	3.35×2.2	0.8	8.0	全周磨り	切り目1対
4	土器片錘	SI-2	完形	4.3×2.55	0.85	12.0	全周磨り	切り目1対
5	土器片錘	SD-1	完形	3.5×2.8	0.7	10.0	全周磨り	切り目1対
6	土器片錘	SI-4	完形	4.1×3.05	1.2	17.0	全周磨り	切り目1対
7	土器片錘	エリア外	完形	3.5×3.35	1.25	14.0	全周磨り	切り目1対
8	土器片錘	2J-20	完形	4.15×3.7	0.8	16.0	一部磨り	切り目1対
9	土器片錘	SI-4	完形	3.75×3.8	1.15	19.0	一部磨り	切り目1対
10	土器片錘	R-22	完形	3.85×3.2	1.1	16.0	全周磨り	切り目1対
11	土器片錘	一括	完形	2.5×3.8	1.0	10.0	一部磨り	切り目1対
12	土器片錘	SI-6	完形	3.15×4.45	0.8	13.0	全周磨り	切り目1対
13	土器片錘	2C-28	完形	4.5×3.15	0.95	18.0	全周磨り	切り目1対
14	土器片錘	2J-31	完形	4.5×2.95	1.15	17.0	全周磨り	切り目2対（十字）
15	土器片錘	SI-1	一部欠	4.8×3.7	0.7	15.0	全周磨り	切り目1対
16	土器片錘	SI-6	完形	4.8×3.5	1.0	20.0	全周磨り	切り目1対
17	土器片錘	2O-30大	完形	4.75×2.9	0.95	19.0	全周磨り	切り目1対
18	土器片錘	2D-19	完形	5.2×3.3	0.7	15.0	一部磨り	切り目1対
19	土器片錘	SI-6	完形	5.1×2.8	0.75	15.0	全周磨り	切り目1対
20	土器片錘	2J-20	完形	5.3×2.65	1.25	22.0	全周磨り	切り目1対
21	土器片錘	2A-15	完形	5.85×3.8	1.2	32.0	全周磨り	切り目1対
22	土器片錘	2J-20	完形	4.7×3.0	1.3	20.0	無調整	切り目1対
23	土器片錘	SI-1	完形	4.7×4.0	0.85	20.0	一部磨り	切り目1対
24	土器片錘	2H-19	一部欠	4.7×4.1	1.1	27.0	一部磨り	切り目1対
25	土器片錘	一括	一部欠	4.2×3.85	1.4	31.0	全周磨り	切り目1対
26	土器片錘	2B-27	完形	5.7×4.25	0.75	26.0	一部磨り	切り目1対
27	土器片錘	2J-31	一部欠	5.7×4.2	1.1	30.0	全周磨り	切り目1対
28	土器片錘	一括	2/3	2.8×2.9	0.95	10.0	全周磨り	切り目1ヶ



第64図　遺構外出土遺物（5）



第65図　遺構外出土遺物（6）

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
29	土器片錘	SI-6	一部欠	3.4×2.8	0.75	8.0	全周磨り	切り目１ヶ
30	土器片錘	2J-20大	2/3	3.0×3.45	1.0	12.0	全周磨り	切り目１ヶ
31	土器片錘	SI-6	1/2	2.8×3.6	0.9	11.0	全周磨り	切り目２ヶ
32	土器片錘	2J-20大	1/3	2.2×4.0	0.75	10.0	一部磨り	切り目１ヶ
33	土器片錘	SI-12	2/3	4.0×4.6	1.05	24.0	全周磨り	切り目１ヶ
34	土器片錘	2J-20大	2/3	4.1×4.5	1.3	28.0	全周磨り	切り目１ヶ
35	土器片錘	2J-20大	2/3	3.1×4.05	0.8	15.0	全周磨り	切り目１ヶ
36	土器片錘	2C-28	完形	4.6×3.95	1.25	29.0	全周磨り	切り目１対
37	土器片錘	2J-25	3/4	5.95×3.65	0.7	22.0	一部磨り	切り目１対
38	土器片錘	SI-5	3/4	7.35×4.45	0.85	28.0	全周磨り	切り目１ヶ
39	土器片錘	2A-27	完形	7.8×4.6	0.8	38.0	一部磨り	切り目1ヶ、打ち欠き1ヶ
40	土器片錘	2J-20	完形	8.0×5.0	1.2	59.0	全周磨り	切り目１対
41	土器片錘	E-16	一部欠	7.6×5.2	0.95	50.0	全周磨り	切り目１対
42	土器片錘	SI-1	完形	11.3×7.2	1.05	88.0	一部磨り	切り目１対
43	土器片錘	SI-1	一部欠	6.0×4.8	1.0	32.0	一部磨り	切り目１ヶ
44	土器片錘	SI-6	1/2	4.5×6.1	0.95	32.0	一部磨り	切り目１ヶ
45	土器片錘	V-21	2/3	6.4×6.8	1.15	50.0	全周磨り	切り目２ヶ
46	土器片錘	2E-30	完形	4.8×4.15	1.0	25.0	一部磨り	切り目１対
47	土器片錘	2J-31	3/4	4.3×7.2	1.0	31.0	打割	切り目１ヶ
48	土器片錘	SD-1	1/2	5.4×7.2	0.8	33.0	全周磨り	切り目１ヶ
49	土器片錘	2J-31	一部欠	5.55×8.25	1.55	36.0	一部磨り	切り目１ヶ

図版No.	種類	出土位置	残存	大きさ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	周縁整形	備考
50	土器片錘	2J-31	2/3	4.6×4.85	1.05	22.0	一部磨り	切り目１ヶ
51	土器片錘	K-19	1/2	3.1×5.35	1.0	15.0	一部磨り	切り目１ヶ
52	土器片錘	SI-6	2/3	3.8×4.95	1.0	23.0	一部磨り	切り目１ヶ
53	土器片錘	SI-6	1/2	3.85×6.25	1.2	38.0	全周磨り	打ち欠き１ヶ
54	土器片錘	T-20	2/3	3.7×6.0	1.15	32.0	全周磨り	切り目１ヶ
55	土器片錘	2K-32大	1/3	3.95×7.4	0.7	28.0	一部磨り	切り目１ヶ
56	土器片錘	SI-17	完形	3.4×5.7	0.75	16.0	一部磨り	切り目１対
57	有孔円盤	一括	3/4	6.6×5.6	0.9	35.4	全周磨り	裏面より穿孔→磨り
58	有孔円盤	SI-1	一部	1.75×2.85	1.0	5.0	全周磨り	裏面より穿孔→磨り
59	有孔円盤	一括	完形	4.9×4.8	0.9	21.3	全周磨り	表裏より穿孔→磨り
60	有孔円盤	SI-1	一部欠	3.35×4.25	0.85	15.0	全周磨り	裏面より穿孔　未貫通
61	円盤	SI-1	2/3	5.8×5.3	0.8	28.0	全周磨り	隅丸方形
62	円盤	2J-20	1/2	4.1×7.05	0.95	31.0	打割	円形
63	円盤	SD-1	完形	4.1×3.3	1.1	15.0	打割	楕円形
64	円盤	SI-6	3/4	3.8×3.3	0.85	11.0	全周磨り	楕円形
65	円盤	一括	一部	2.5×4.9	1.0	11.0	全周磨り	円形
66	焼成粘土塊	2J-30	完形	3.4×3.1	2.0	13.3	―	No.311　楕円形

c石器（第66・67図　ＰＬ54）

１・２は旧石器時代の出土品で、１は打面が作り出された石核で、一部縦長剥片を剥離した様子が窺える。２は一部欠損するナイフ形石器で基部にブランティングが施される。

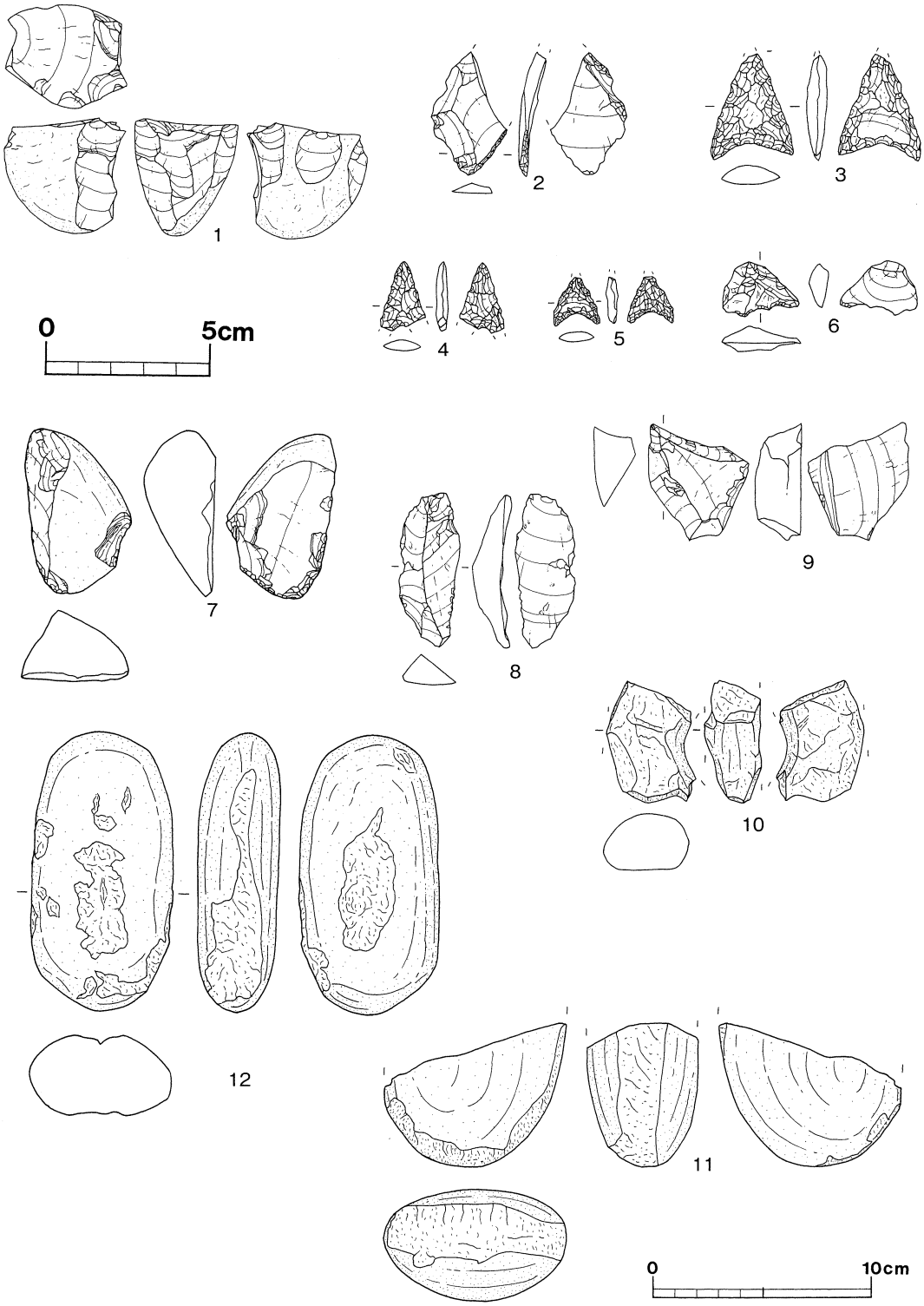
３～16は縄文時代のものと考えられる。３～５は石鏃で、４は基部を欠損しているが、いずれも基部に抉りが入る凹基鏃である。同図６・８・９は剥片、７は礫器、10は打製石斧の破片、11～16は磨石類としたもので、磨る・敲くなどの機能を兼ね備えている。

これらの資料のなかで黒曜石の蛍光Ｘ線分析を行った結果、５・６は諏訪星ヶ台群産に、８・９は神津島恩馳島群産に比定された。このほかに、写真のみ掲載した剥片４点（A～D）の同分析を行い、諏訪星ヶ台群産１点（A）と神津島恩馳島群産３点（B～D）の分析結果を得た。

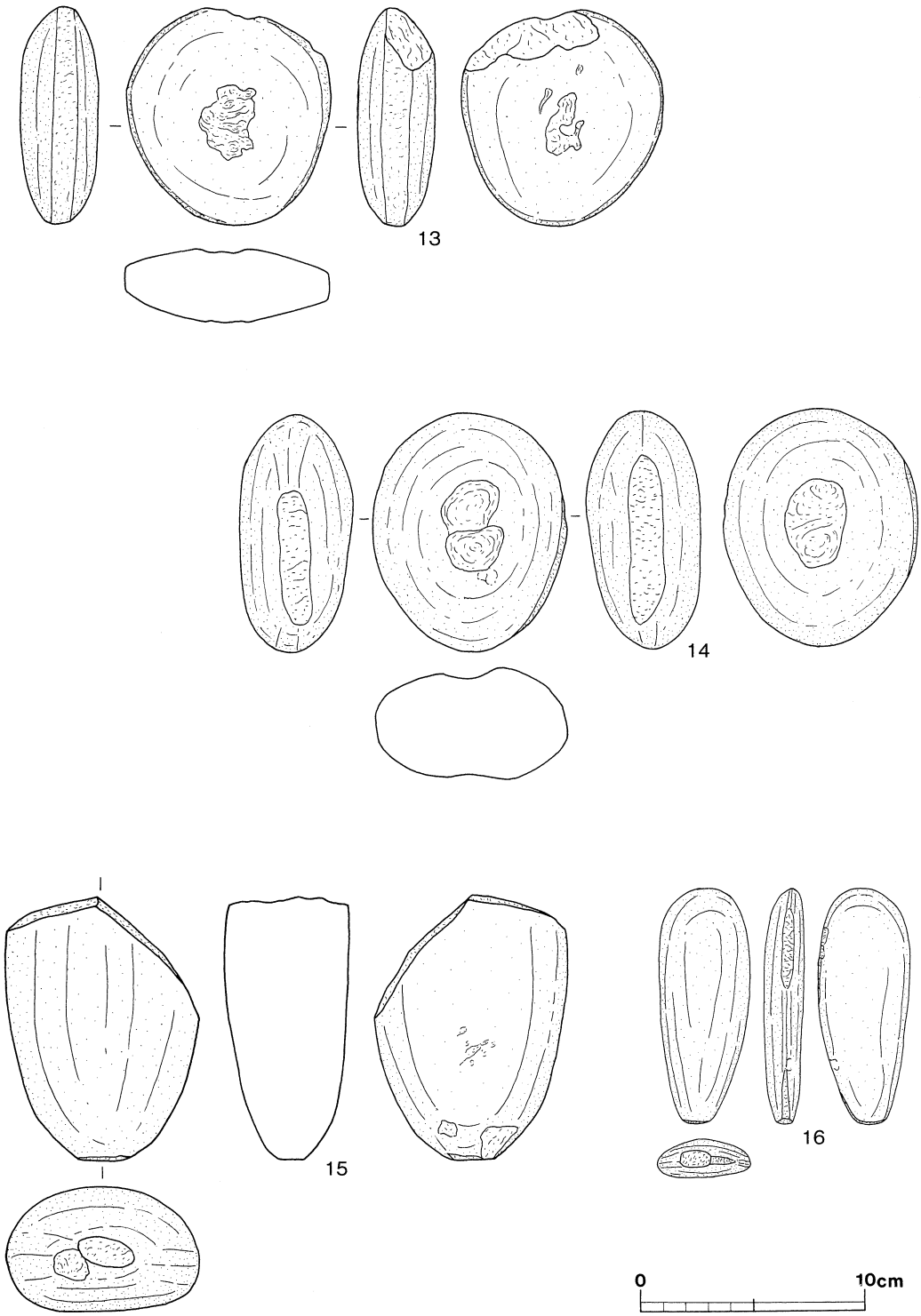
※黒曜石の蛍光Ｘ線分析は沼津工業高等専門学校　望月明彦氏にご協力頂いた。

遺構外出土石器

No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
1	SI-9	石核	5.4	4.7	5.5	134.0	トロトロ石	石16　旧石器
2	SI-15	ナイフ形石器	3.8	2.3	5.0	2.5	頁岩	石15　旧石器
3	X-30区	石鏃	(2.8)	2.5	0.6	(3.5)	安山岩	石３　凹基無茎鏃　先端は使用時の折損
4	Z-５大区	石鏃	(1.9)	(1.3)	0.4	(0.8)	チャート	石2　凹基無茎鏃　脚部欠損
5	R-24区	石鏃	(1.0)	1.4	0.4	(0.5)	黒曜石	石１　凹基無茎鏃　先端は使用時の折損
6	SD-１	剥片	1.6	2.4	0.6	1.7	黒曜石	石4
7	2J-31区	礫器	7.4	4.6	3.2	103.0	流紋岩	石５　礫面を残す　端部に細かな剥離
8	2D-19区	剥片	7.0	2.7	1.4	18.9	黒曜石	石６　縦長の剥片
9	2D-19区	剥片	4.6	4.5	2.1	38.0	黒曜石	石７
10	2J-25大区	打製石斧	(5.2)	(3.7)	2.5	(59.7)	安山岩	石８　括れ部
11	2I-31区	磨石類	(5.4)	(7.8)	5.1	(302.6)	砂岩	石９　側面敲打痕　被熱
12	2J-30大区	磨石類	12.7	6.5	3.7	462.3	安山岩	石10　表裏面に凹みあり



第66図　遺構外出土遺物（7）



第67図　遺構外出土遺物（8）

No.	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
13	2A-21区	磨石類	9.3	9.0	3.4	413.2	安山岩	石11　表裏面に凹みあり
14	2U-33大区	磨石類	10.6	8.8	4.8	610.8	安山岩	石12　表裏面に凹みあり
15	Z-15区	磨石類	11.8	8.4	5.6	827.9	砂岩	石13　端部敲打痕　破損部も使用
16	F-19区	磨石類	10.4	4.1	1.8	111.1	砂岩	石14　端部に研磨面あり

表１　竪穴住居跡・竪穴遺構等一覧

名称	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	炉深さ	備考
第１号住居跡	SI-1	Z-23	390×390、10	方形	N－40°－E	0	古墳
第２号住居跡	SI-2	Y-20・21	310×310、15	方形	N－30°－E	僅か	古墳
第３号住居跡	SI-3	W-21・22他	580×580、32	方形	N－50°－W	3	古墳
第４号住居跡	SI-4	X・Y・Z-17・18他	410×400、25	方形	N－35°－E	5、7	古墳
第５号住居跡	SI-5	Y・Z-25・26	180×170、28	方形	N－25°－E	僅か	古墳
第６号住居跡	SI-6	S・T-20～22	800×800、50	方形	N－52°－W	4	古墳
第７号住居跡	SI-7	2B-26	540×520、28	円形	—	24	縄文
第８号住居跡	SI-8	X-15他	450×510、45	台形	N－70°－E	5	古墳
第９号住居跡	SI-9	V-25・26	494×456、28	不整円形	—	20、10	縄文
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第１号竪穴遺構
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第１号竪穴遺構
第12号住居跡	SI-12	N-23	660×624、26	不整円形	—	36	縄文
第13号住居跡	SI-13	Z-23	584×510、30	楕円形	—	32、22	縄文
欠番	欠番	—	—	—	—	—	第２号竪穴遺構
第15号住居跡	SI-15	L・M-16・17	490×440、16	円形	—	30（12）	縄文
第16号住居跡	SI-16	E・D-15～17	600×564、42	楕円形	—	52、58	縄文
第17号住居跡	SI-17	2A・2B-7・8	400×380、15	方形	N－５°－W	僅か	古墳
第18号住居跡	SI-18	Z-5・6	320×320、35	方形	N－32°－E	炉無	古墳
第19号住居跡	SI-19	3A・3B-1	340×340、50	方形	N－91°－W	炉無、カマド有	平安
第１号竪穴遺構	SX-1	V-25・26	800×500、10	不整形	—	不明	縄文　旧SI-10・11
第２号竪穴遺構	SX-2	Y・Z-13・14	240×220、８	隅丸方形	N－20°－E	僅か	古墳　旧SI-14

表２　土坑一覧

図版No.	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	備考
第45図	SK-1	2R-34	68×50、46	楕円形	N－40°－E	
第45図	SK-2	2R-33	45×45、30	円形	—	
	SK-３～５は欠番					
第45図	SK-6	2O-33	45×42、32	円形	N－65°－W	
	SK-７は欠番					
第45図	SK-8	2O・2P-30	97×70、22	不整円形	N－93°－W	焼土塊出土
第45図	SK-9	2O・2P-28	118×75、21	不整円形	N－25°－E	
第45図	SK-10	2N・2O-26・27	115×98、21	楕円形	N－20°－W	
第45図	SK-11	2L・2M-26・27	95×80、21	不整円形	N－60°－E	

図版No.	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	備考
	SK-12は欠番					
第45図	SK-13	2J-23	134×107、62	不整形	N－67°－W	
第45図	SK-14	2H-23	54×30、30	楕円形	N－75°－W	
	SK-15は欠番					
第49図	SK-16	2G-25・26	195×165、63	楕円形	N－3°－W	PL12・50・53　遺物掲載
	SK-17～18は欠番					
第45図	SK-19	2C-24	80×55、31	楕円形	N－60°－W	
第45図	SK-20	2C-23	175×145、15	不整円形	N－90°－E	
第45図	SK-21	2B-23	150×108、28	楕円形	N－55°－W	
第45図	SK-22	2B-22	105×75、35	楕円形	N－65°－W	
	SK-23は欠番					
第45図	SK-24	2O-29	105×75、18	楕円形	N－75°－W	旧SK-34
第46図	SK-25	2A-24	(190)×130、31	楕円形	N－30°－E	SK-26・27と重複
第46図	SK-26	2A-23・24	(83)×80、34	楕円形	N－30°－E	SK-25・27と重複
第46図	SK-27	2A・2B-23	(270)×135、47	不整形	N－30°－E	SK-25・26と重複
第46図	SK-28	Z・2A-26・27	320×140、118	長楕円形	N－25°－W	PL10　陥し穴
	SK-29は欠番					
第45図	SK-30	2D-18	108×95、23	楕円形	N－30°－E	
第47図	SK-31	2B・2C-14・15	205×125、57	長楕円形	N－20°－W	PL10　陥し穴
第47図	SK-32	2B・2C-17	270×155、74	長楕円形	N－30°－W	PL10　陥し穴
第48図	SK-33	Y・Z-27	320×165、83	長楕円形	N－25°－W	PL11・53　遺物掲載　陥し穴
第47図	SK-34	2A-11	255×100、65	長楕円形	N－40°－E	陥し穴
第48図	SK-35	V・W-12・13	232×105、70	長楕円形	N－15°－W	陥し穴
第48図	SK-36	S-15	285×130、105	長楕円形	N－15°－W	PL11　陥し穴
第52図	SK-37	Q-14・15	110×85、46	不整円形	N－70°－E	
	SK-38～39は欠番					
第49図	SK-40	Z-23	115×115、40	円形	―	PL12　SI-13と重複
第49図	SK-41	Z-23	150×150、36	円形	―	SI-13と重複
第49図	SK-42	Z-22	150×(120)、17	不整円形	N－10°－W	
第49図	SK-43	Z-22	85×75、31	不整円形	―	
第49図	SK-44	C・D-13・14	166×150、38	円形	N－125°－W	PL13・50・53　遺物掲載
第46図	SK-45	T-20	180×120、27	不整円形	N－40°－W	SI-6と重複　古墳時代以降
	SK-46は欠番					
第46図	SK-47	2B・2C-27	103×105、30	円形	―	SI-7と重複
第52図	SK-48	2B-26	110×105、39	円形	―	SI-7と重複
第52図	SK-49	2B-1	70×65、65	不整円形	N－20°－W	SI-19と重複　平安時代以降
第52図	SK-50	2E・2F-16・17	180×157、75	不整円形	N－95°－E	PL13・51　旧MY-1　遺物掲載
第52図	SK-51	2A-15	90×70、45	不整円形	N－15°－E	PL14・50　旧MY-5　遺物掲載

表３　焼土址一覧

図版No.	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	備考
第59図	FP-1	2F-16	135×100、18	不整円形	N－45°－W	
第59図	FP-2	2E・2F-16	130×90、6	楕円形	N－65°－E	SK-50と重複
第59図	FP-3	2A-14	115×100、30	不整円形	N－0°－W	SK-51と重複　遺物掲載
第59図	FP-4	W-18	50×40、14	楕円形	N－20°－E	
	FP-5は欠番					

図版No.	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	備考
第59図	FP-6	F・G-18	140×120、100	楕円形	N－10°　－W	遺物掲載

表４　土器埋設遺構一覧

図版No.	記号	位置（区）	長×短、深さ（cm）	平面形	主軸	備考
	MY-1はSK-50に変更で欠番					
第56図	MY-2	2G-17	50×45、10	円形	N－30°　－W	PL14　遺物掲載
第56図	MY-3	Z-12	(50)×38、9	楕円形	N－45°　－E	PL14　遺物掲載
第56図	MY-4	2C-9	130×100、5	楕円形	N－62°　－W	PL15　遺物掲載
	MY-5はSK-51に変更で欠番					

第２節　古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡が９軒と竪穴遺構が１軒確認されている。いずれも古墳時代前期のものである。これらの中には鍛冶工房跡１軒と玉作工房跡が３軒含まれる。

１．竪穴住居跡（SI）

古墳時代の竪穴住居跡は、第１・２・３・４・５・６・８・17・18号住居跡であり合計９軒検出されている。調査エリア内の中央付近に南北方向に展開している。時期的にはいずれも古墳時代前期のものである。これらの住居跡の広がりは、本来調査エリアの南端よりも南方へ広がりを見せるものと考えられる。これらの内、第１号住居跡は鍛冶工房として利用され、第４・６・８号住居跡は玉作工房として利用されている。

第１号住居跡〔SI－１〕（第68～73図　ＰＬ16・17・55・56）

位　置　調査区中央南側Ｚ－23区に位置する。

重複関係　第13号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

主　軸　Ｎ－40°－Ｅ。

規　模　3.9×3.9ｍの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ10cmを測る。

床　床面の硬化した範囲は見られず、軟弱な感触を受ける。床面から鍛造剥片が出土した。

壁　緩く立ち上がる。

炉　住居跡の北北東側に１基確認された。火床面がやや赤変硬化している。

柱　穴　柱穴らしいものはなく、西隅に浅い凹みが見られた。床面中央のピット群は鍛冶作業に関連した施設である。

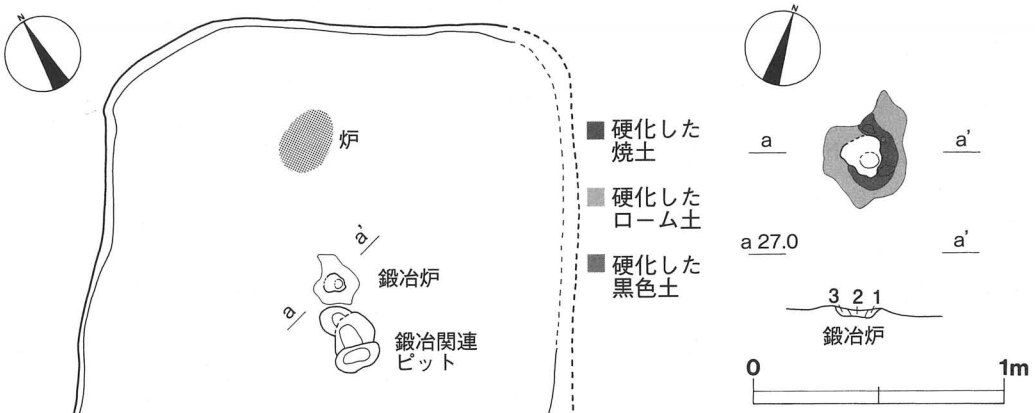
入口施設　およそ炉と対面する南東方向か。

貯蔵穴　構築されていない。

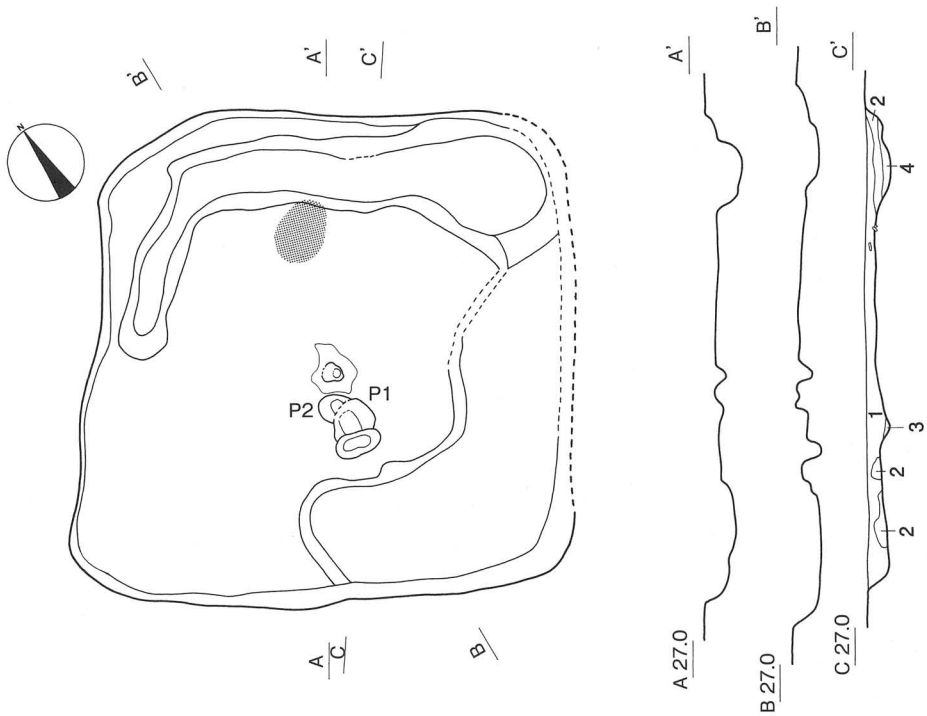
その他の施設　住居内の北隅から、東隅を経て、南隅にかけて床面下に溝状の落ち込みが検出された。この溝は壁溝とは異なる。溝の幅は北側で約45cmと狭く、南側では約100cmと幅が広がっている。深さは北側で約20cm、南側で約15cmを測る。この溝の覆土は褐色土からなり、住居内中央の溝に囲まれた部分はローム層の掘り残しである。床面には北側に炉が検出され、一部この溝上にかかることから、本住居跡使用時には埋められていることが理解できる。

覆　土　覆土は４層からなる。第１層は住居覆土であり、第２・４層は床面下の溝覆土に相当する。第３層はＰ２の覆土の一部である。

遺物出土状況　出土遺物の多くは住居内東半からのものが多い。本住居跡の床面下に確認された

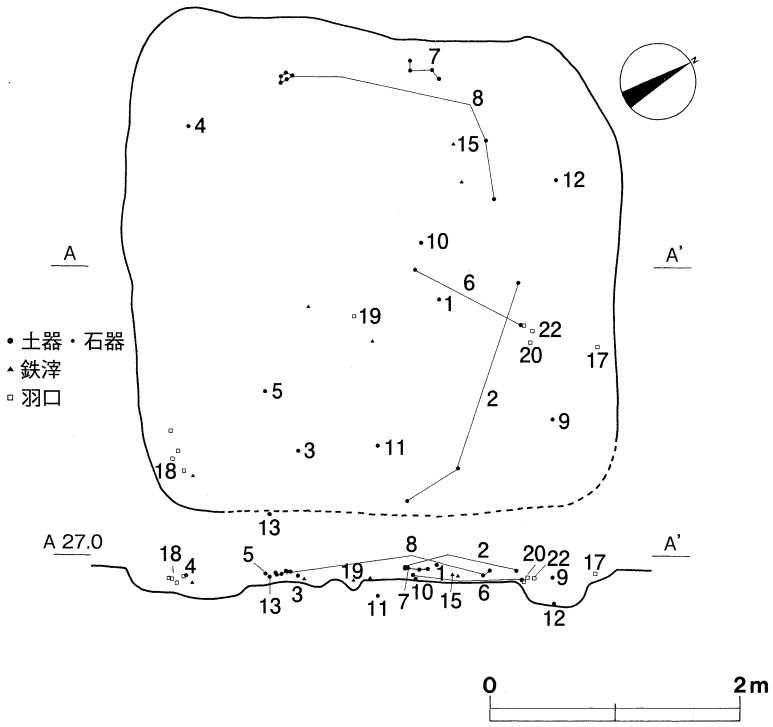


1　5YR3/1　黒褐色　焼土粒微、ローム粒微　金床石破片
2　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒微、ローム粒少
3　7.5YR4/4　褐色　ローム粒少、黒褐色土粒微



1　7.5YR4/4　褐色　炭化物微、ローム小・粒少　床面近くで鍛造剥片含む
2　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中
3　7.5YR4/3　暗褐色　鍛造剥片を多く含む　（鍛冶関連ピット覆土）
4　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微、ローム粒中　（床下溝遺構覆土）

第68図　第１号住居跡・鍛冶炉・掘り方



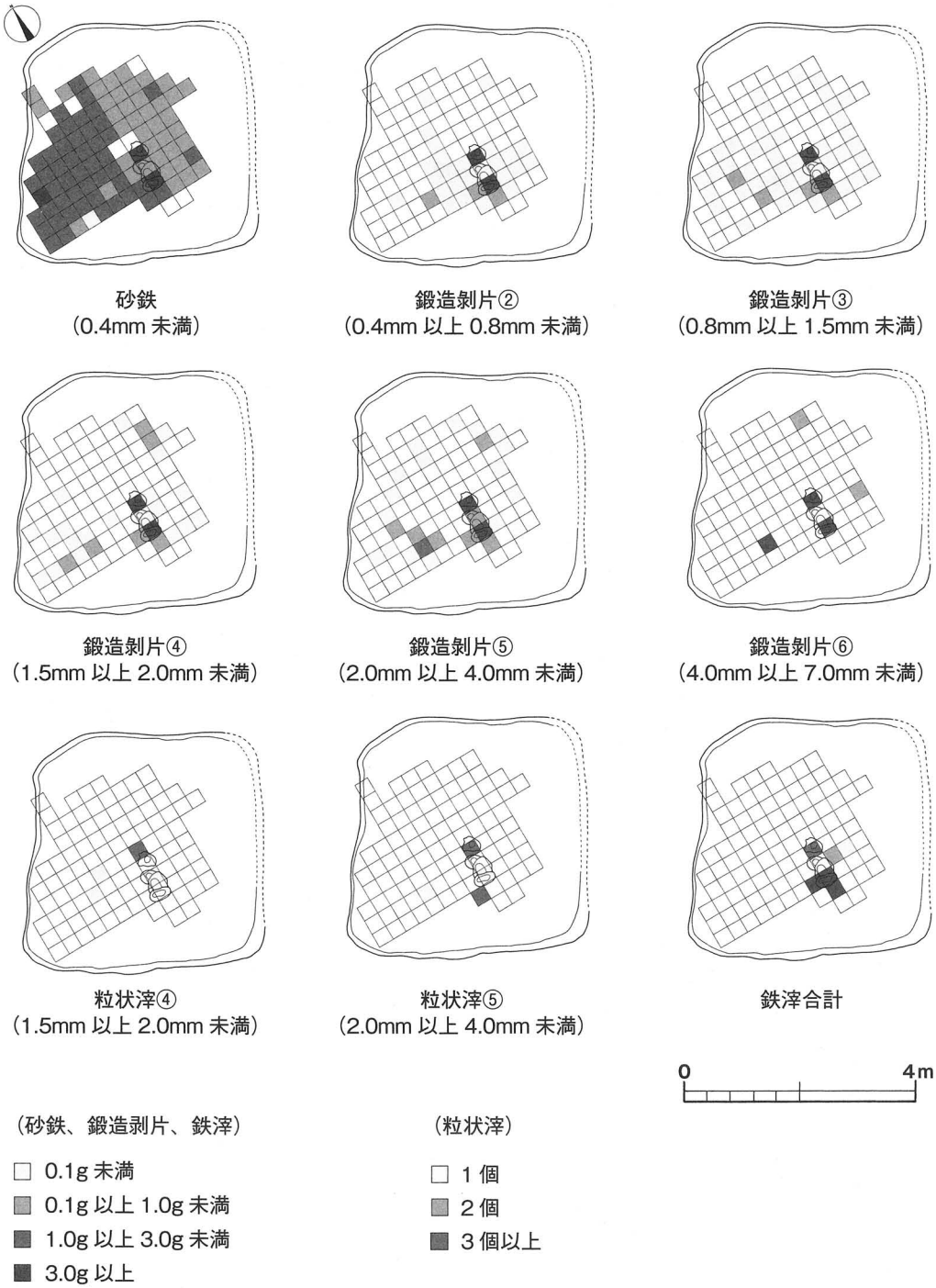
第69図　第１号住居跡遺物出土状況（１）

溝状の落ち込みと関連しているのであろうか。

出土遺物　出土遺物は土師器と石器、そして鍛冶関連遺物が出土している。土師器は１が甕、２～６が壺、７は坩、８は鉢、９は手づくね土器である。１・５は焼成後の穿孔が見られる。３・５・８は赤彩されている。14～22は鍛冶関連遺物である。10～13の石器については鍛冶関連遺物の可能性もあるが、本遺構が縄文時代の遺構と重複していることから、縄文時代の遺物が混入した可能性も考えられる。

鍛冶関連施設　鍛冶炉や複数の小ピットが中央付近の床面から検出された。鍛冶炉は長軸20cm・短軸15cm・深さ５cmの凹みからなる。炉の周囲には西側を除き幅約５cmの粘土が貼られ、この粘土が焼土化している。北側と東側の一部は黄橙色の焼土となっている。その外側は、長軸45cm・短軸35cmの不整楕円形を呈するローム硬化面が巡っている。鍛冶炉内の覆土は、東側に第1層の金床石破片や鍛造剥片を少量含む黒褐色土が見られた。

鍛冶炉の南側には小ピットが２基接するように確認された。Ｐ１は平面形が長径42cm×35cmの楕円形で北側が浅く深さ10cmでテラス状となり、南側は深さ20cmとなる。Ｐ２は平面形が径20cmの円形と考えられ、深さ５cmであり、Ｐ１はＰ２の下を抉り込んでいる。覆土はそれぞれ黒褐色土で、Ｐ１の深い部分には鍛造剥片や金床石破片が多く含まれていた。



第70図　第１号住居跡遺物出土状況（２）

鍛冶関連遺物出土状況　鍛冶に関連した遺物は、鉄滓や鞴の羽口、そして微細な鍛造剥片や粒状滓などがある。これらの遺物の取り上げにあたっては、通常の遺物の取り上げに加え、微細な遺物の取り上げを目的とした調査も行った。

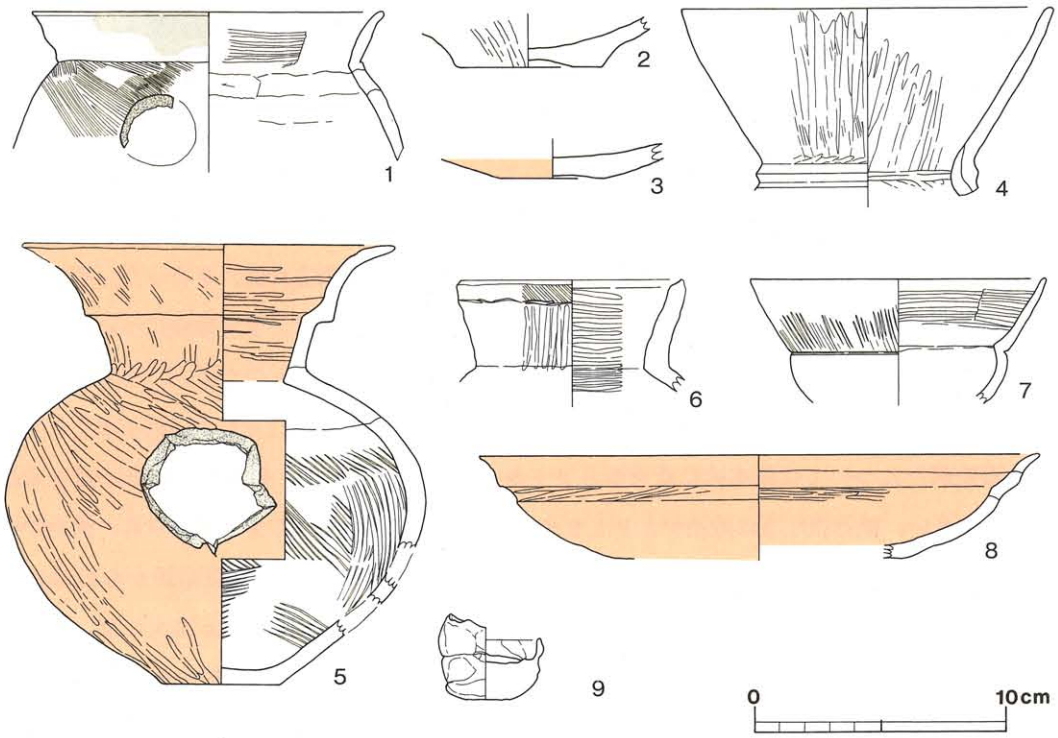
前者の遺物取り上げでは、鞴の羽口片が住居内の南隅から４点まとまって出土している。鉄滓は床面の中央から北側に偏って出土している。

後者の調査では、床面の土を25cmメッシュごとに取り上げ水洗い選別し、一定の区分を用いて砂鉄・鍛造剥片・粒状滓・鉄滓ごとの集計（第２章第３節２遺構調査参照）を行った。それらの出土状況を図化したのが第70図である。それぞれの種別ごとの特徴は、まず砂鉄については、床面の東側で0.1ｇ以上1.0ｇ未満のものが多く、西側で1.0ｇ以上3.0ｇのものが多い。その中でも目立つのは鍛冶炉部分とＰ１付近で、前者からは約48ｇ、後者からは約11ｇもの砂鉄が出土している。鍛造剥片については基本的に鍛冶炉とＰ１からの出土が目立ち、その他の出土は0.1ｇ未満のものが多い。鍛造剥片②は鍛冶炉とＰ１を含む床面南側にまとまって分布が見られ、鍛冶炉中から約8.5ｇ、Ｐ１でも深い部分を中心に10.1ｇが出土した。鍛造剥片③は鍛冶炉から約13.2ｇ、Ｐ１から約11.8ｇ出土した。鍛造剥片④は鍛冶炉から9.2ｇ、Ｐ１から約7.3ｇ出土した。鍛造剥片⑤は鍛冶炉から約15.8ｇ、Ｐ１から約10.3ｇ出土した。鍛造剥片⑥は鍛冶炉から約3.0ｇ、Ｐ１から約2.1ｇ出土した。粒状滓は鍛冶炉とＰ１近辺の狭い範囲で粒状滓③・④・⑤が出土した（粒状滓③については鍛冶炉のみからの出土であり、分布図は作成していない）。いずれも鍛冶炉からの出土が目立ち、各々鍛冶炉から粒状滓③が９個、粒状滓④が３個、粒状滓⑤が５個出土した。鉄滓はＰ１付近からの出土が目立ち、Ｐ１からは鉄滓④が0.5ｇ、鉄滓⑤が1.8ｇ、鉄滓⑥が0.4ｇ出土した。このほか、Ｐ１内からは砂岩製の金床石破片が出土している。

上記状況から、鍛冶炉から約50cm南に離れたＰ１については砂岩製の金床石を据えたピットと考えられる。そして、Ｐ１周辺からも比較的多く鍛造剥片などが出土している状況は、先のＰ１の性格を補完するものと思われる。

鍛冶関連遺物　鍛冶に関連した遺物は15の椀形鉄滓や16の鉄塊系遺物、17～20・22の鞴の羽口、そして21の金床石剥片や、微細な鍛造剥片や粒状滓が出土している。金床石は砂岩製のもので小さな破片しか見つかっておらず、本体はこの工房での鍛冶作業終了後工人によって持ち去られたものと考えられる。この破片には鍛造剥片が付着していた。17の羽口は器厚が厚いもので円柱状となり特徴的である。胎土には籾殻が混入している様子が窺える。

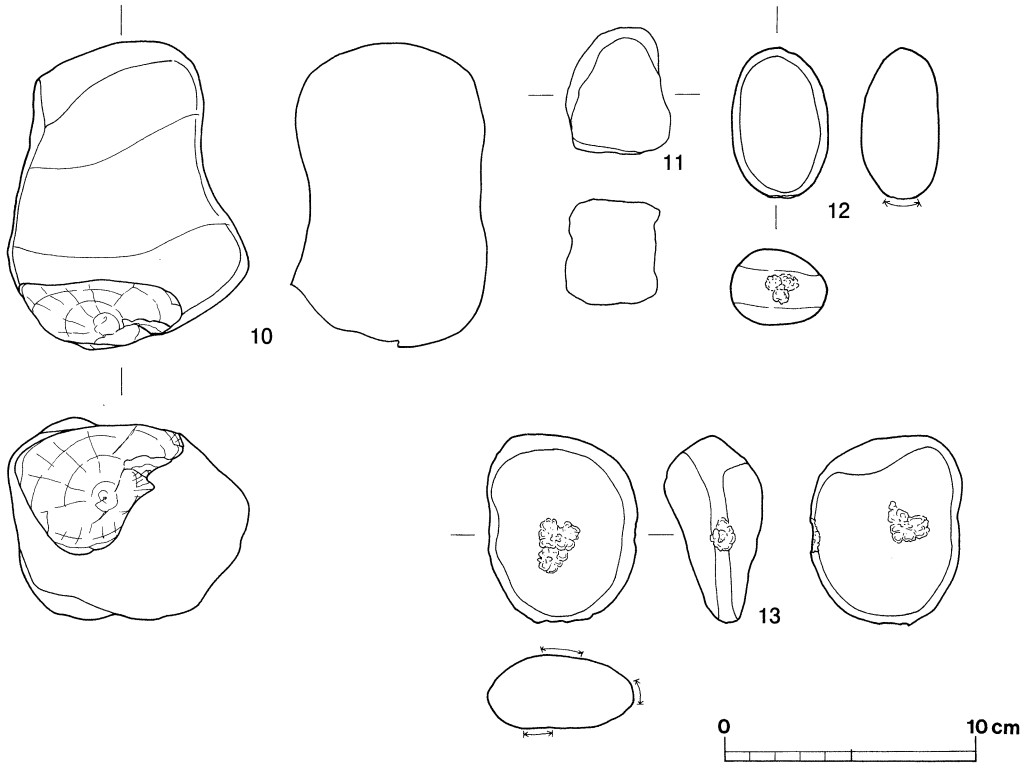
所　見　本住居跡は鍛冶工房として利用されたもので、鍛冶炉や金床石を据えたと考えられる小ピット以外は通常の小規模な竪穴住居跡と同様な構造と考えられる。床面の硬化部は見られず、柱穴もないことから短期間の鍛冶作業を行うために作られた工房跡と考えられる。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと考えられる。



第71図　第１号住居跡出土遺物（１）

第１号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：14.0 C： 5.9	覆土 20% 良好	長石○、石英○、雲母△、砂粒	にぶい橙	胴部外面ハケ調整、内面ヘラナデ。口縁部外面ナデ、内面は輪積痕、ハケ調整。口縁部内外面に煤付着。胴部は焼成後穿孔か。	No.9
2	壺？ 土師器	B：5.8 C：1.5	覆土 100% 普通	長石○、石英○、雲母△	橙 にぶい赤褐	底部。底面は上げ底。外面ヘラミガキ。内面ナデ。	No12
3	壺 土師器	B：4.2 C：0.8	覆土下位 100% 普通	長石◎、石英◎、雲母◎	にぶい赤褐 褐	底部。底面はやや上げ底。内面ヘラナデ。	No.13 赤彩
4	壺 土師器	A：[14.8] C：(7.2)	覆土下位 25% 普通	長石◎、石英◎、雲母◎	橙	頸部にタガ状の粘土紐が貼付され、口縁部が外傾する。内外面は縦方向のヘラミガキ。	No.14
5	壺 土師器	A：14.8 B：4.6 C：17.8	覆土 70% 普通	長石△、石英○	明赤褐 橙	二重口縁壺。口縁部は外反。外面及び口縁部内面はヘラミガキ及びナデ。胴部内面にはハケ調整。胴部には焼成後の穿孔。	No.15 赤彩
6	壺 土師器	C：(3.6)	覆土下位 30% 普通	長石△、石英△	明褐	二重口縁壺の頸部で、やや外傾する。口縁部は接合部で剥離したものと思われる。内外面ヘラミガキ。	No.11
7	坩 土師器	A：[11.8] C：(4.9)	覆土 30% 普通	長石○、石英○、雲母○	明赤褐	湾曲した胴部から頸部が屈曲し、口縁部が外傾して開く。口縁部内外面ハケ調整。頸部外面にヘラで沈線を引く。	No.17
8	鉢 土師器	A：[22.4] C：(4.1)	覆土 30% 普通	長石◎、石英◎、雲母◎	にぶい赤褐	底部から大きく開く鉢で、口縁部は緩く屈曲する。内外面共に部分的なミガキ。内外面赤彩。	No.16 赤彩



第72図　第１号住居跡出土遺物（２）

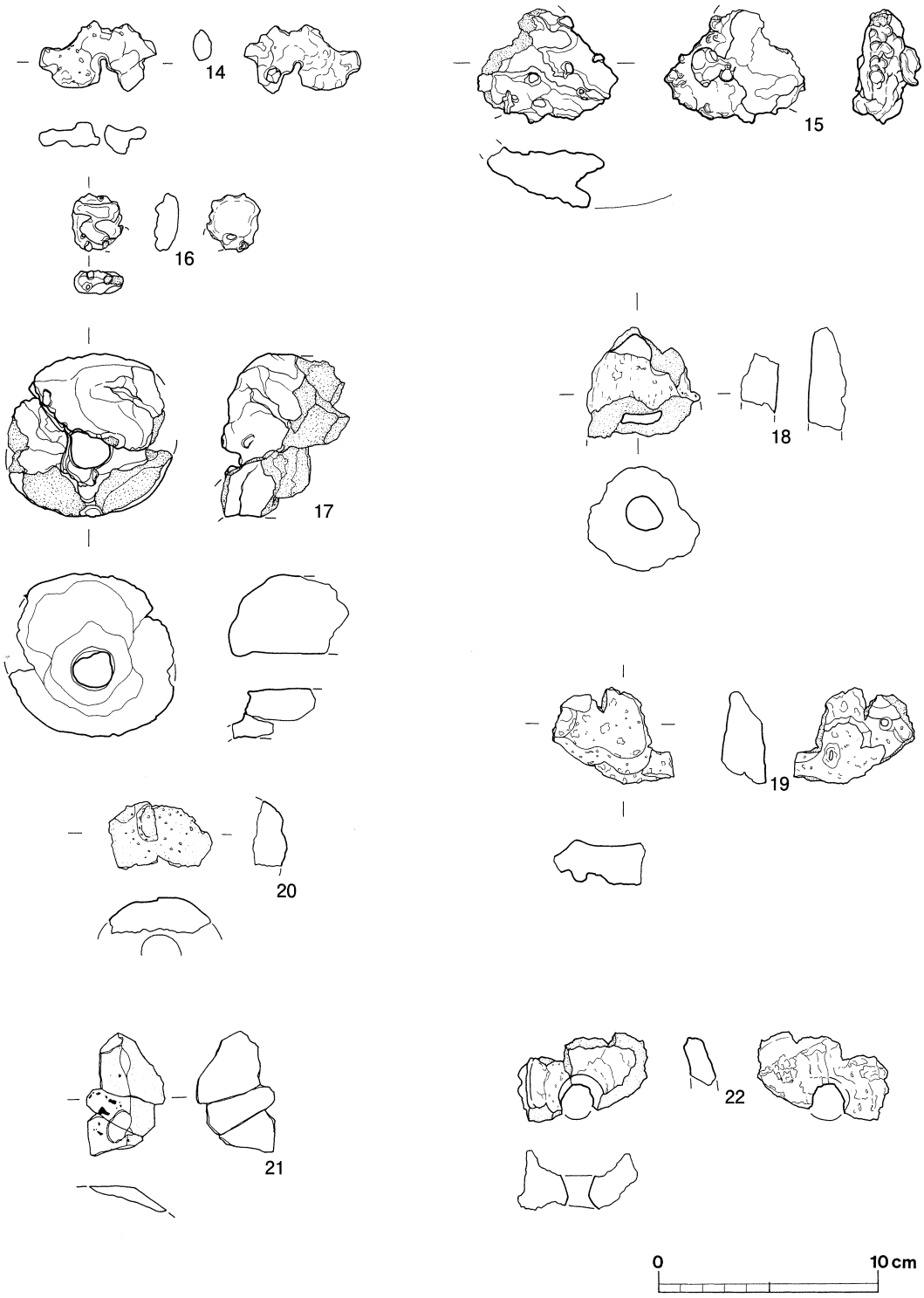
図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
9	手づくね 土師器	A：3.5 B：2.9 C：3.4	覆土下位 90% 普通	石英△	にぶい橙	底面がやや丸底で、胴部に輪積痕を残し、口縁部はいびつ。内面に指頭痕。	№18

第１号住居跡出土石器　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
10	石器	自然礫？	12.2	9.6	8.1	1240.0	砂岩	№358　剥離あり
11	石器	自然礫？	5.0	4.2	4.2	132.5	絹雲母片岩	№359　風化著しい
12	石器	敲き石	6.0	3.8	3.0	96.0	安山岩	№360　床下周溝出土
13	石器	敲き石	7.5	6.0	3.9	211.4	花崗岩	№361　敲打痕４ヶ所

第１号住居跡出土鍛冶関連遺物　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置	備考
14	鍛冶関連遺物	鉄滓	3.2	5.3	1.4	21.1	４区覆土	№362
15	鍛冶関連遺物	碗形鉄滓	6.0	4.5	2.7	76.0	4区覆土下位	№363　分析試料
16	鍛冶関連遺物	鉄塊系遺物	2.5	2.0	1.0	10.0	４区覆土	№364　分析試料
17	鍛冶関連遺物	鞴の羽口	7.5	6.8	5.3	161.0	覆土	№365　分析試料



第73図　第１号住居跡出土遺物（３）

単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	出土位置	備考
18	鍛冶関連遺物	鞴の羽口	5.0	5.2	4.8	50.9	2区覆土下位	№366
19	鍛冶関連遺物	鞴の羽口	4.4	5.6	2.0	30.0	3区床面	№367
20	鍛冶関連遺物	鞴の羽口	3.1	4.7	1.6	10.8	4区床面	№368
21	鍛冶関連遺物	金床石破片	5.3	3.5	0.5	10.0	鍛冶関連ピット内	№369　分析試料　砂岩製
22	鍛冶関連遺物	鞴の羽口	4.0	6.0	2.7	21.0	1区床面	№370

第2号住居跡〔SI－2〕（第74・75図　PL18・57・58）

位　置　調査区中央Y－20・21区に確認された。

重複関係　なし。

主　軸　N－30°－E。

規　模　3.1×3.1mの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ15cmを測る。

床　床面は全体的に平坦で、北西方向壁寄りから南東方向にかけて硬化面が見られる。北西方向壁際には、硬化した床面の高まりが見られ、住居入り口に関わる痕跡と考えられる。床面の東隅付近や西隅付近に焼土が見られた。

壁　外傾して立ち上がる。

炉　住居中央から南に寄って確認され、25×35cmの不整楕円形を呈し、僅かに凹んでいる。焼土は硬化していない。

柱　穴　住居内には柱穴らしきものは検出されていない。しかしながら住居跡の外側に3ヵ所のピットが確認されている。深さはP1が14.8cm、P2が66.7cm、P3が最深で71.3cmを測る。柱穴の可能性があるものかも知れない。

入口施設　西壁際の床面に40×20cmの楕円形の硬化した床面の高まりが見られ、入り口に関わるものと考えられる。

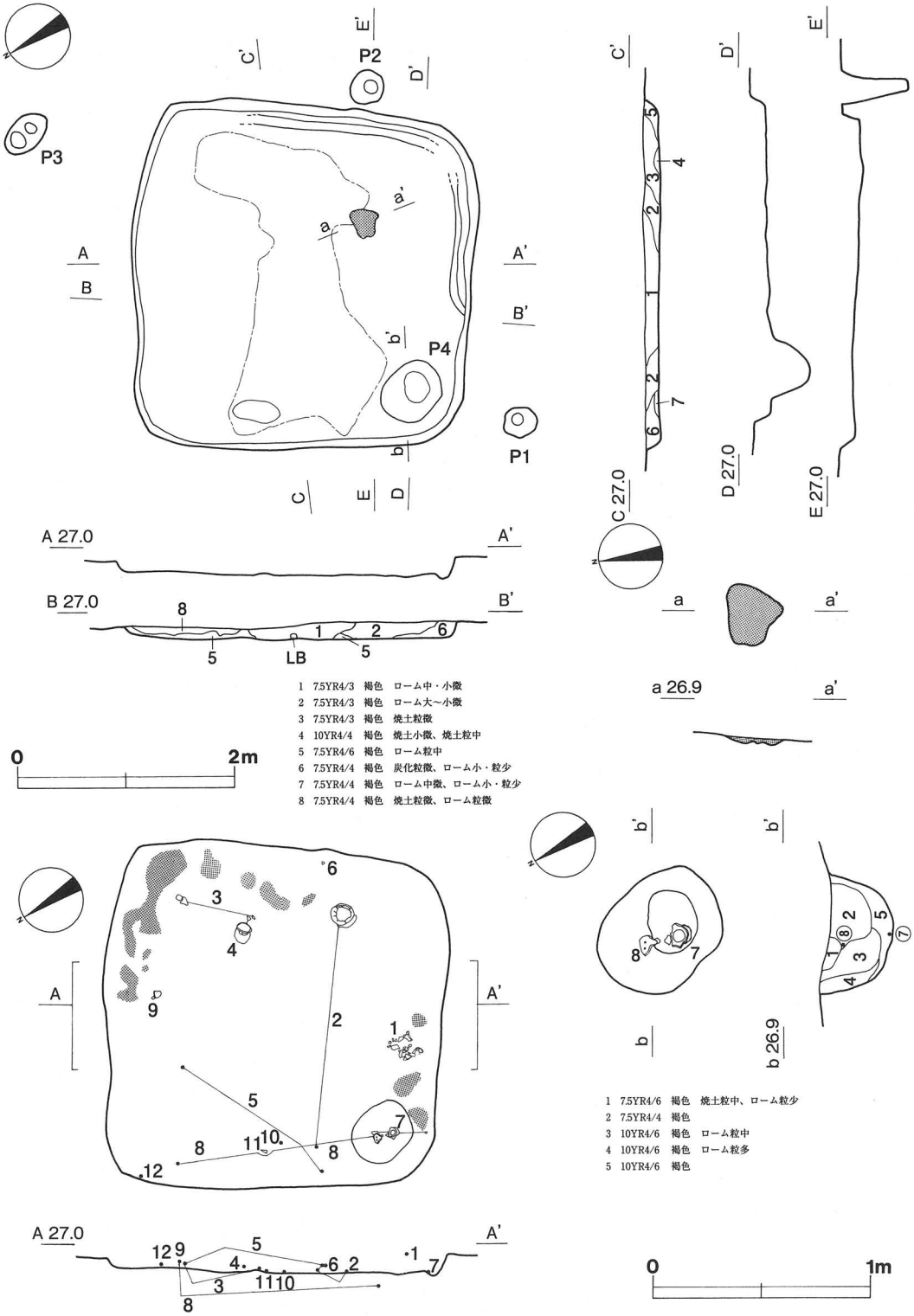
貯蔵穴　住居跡の西隅に構築されている。平面形が長径60×短径48cmの楕円形で、深さが最深部で約35cmを測る。底面は丸みを持つ。貯蔵穴の覆土は5層で構成される。

その他の施設　住居内の南隅付近には、極浅い壁溝が途切れがちながら確認された。深いところで約10cmであった。

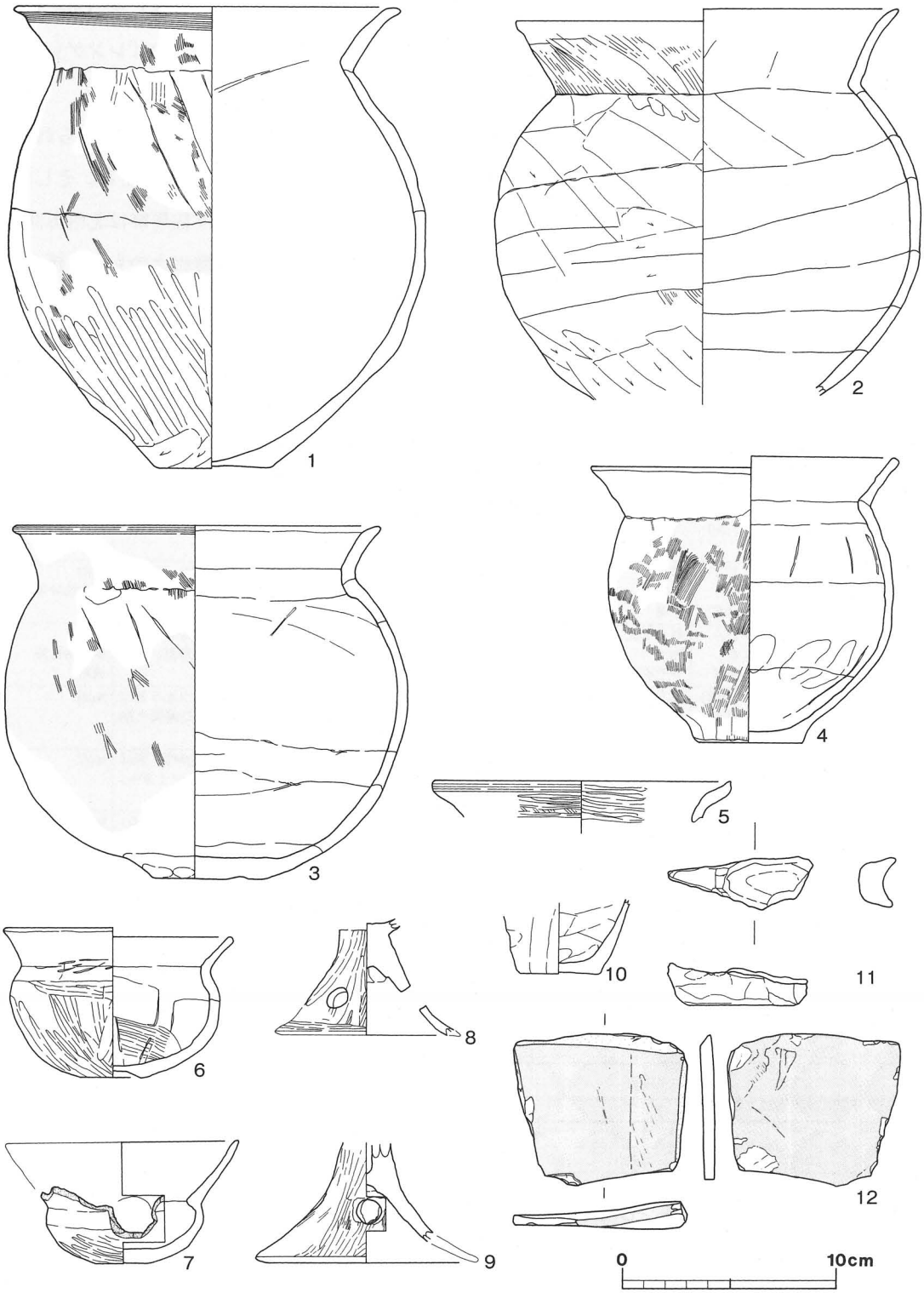
覆　土　覆土は8層で構成されている。

遺物出土状況　1の土師器甕が細かく割れた状態で確認面近くから出土した他は、床面近くから出土している。接合関係にあるものの中には貯蔵穴内外で接合したもの（7・8）がある。このほか第6号住居跡出土土器と接合したものがある。

出土遺物　土師器や土製品、そして石製品が出土している。1～4は土師器甕である。5は端部をつまみ上げたような形態を持ち、内外面にミガキが施されている壺の口縁部か。6は椀である。7は坩で、胴部には丸く打ち欠いた様な痕跡をとどめている。8・9は高坏と思われるものである。



第74図　第２号住居跡・遺物出土状況



第75図　第２号住居跡出土遺物

8は坏部底面から脚部までの貫通痕は見られない。9は坏部底面方向から貫通はしないが孔が開けられている。10はミニチュア土器の底部である。11は土製品で、船形もしくは「レンゲ」の様な形態のものである。12は金属製品を砥いだ扁平な砥石で、使い込んでいる。

所　見　本住居跡は古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。本住居跡は遺跡内で確認された同様な時期の住居跡の中で最小の規模のものと言える。そして、確認された多くの住居跡の入口施設が、南から東方向を向くのに対して、本住居跡は北西方向を向いているのが特徴と言える。また、本住居跡出土土器には、第6号住居跡出土のものと接合するものが見られ関連が窺われる。

第2号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：18.0 B：5.4 C：21.5	覆土 95% 普通	長石△、石英○、雲母△	明赤橙 にぶい赤褐	口縁部内外面ナデ。胴部外面上位ハケ調整・ヘラ削り、下位ヘラミガキ。底部側縁ヘラ削り。口縁部から胴部に炭化物付着。	№19 炭化物付着
2	甕 土師器	A：17.9 C：(18.0)	覆土 70% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい橙	球胴から直線的に外傾する口縁部が付く。口縁部外面ハケ調整。胴部外面荒いかすかなハケ調整。内面に輪積痕残る。	№22
3	甕 土師器	A：17.2 B：5.0 C：16.5	床面 95% 普通	長石○、石英○、雲母○	明赤褐	上下にやや潰れた胴部で、頸部は括れ、口縁部は外反する。胴部外面はハケ調整・ヘラ削りの後ナデ。内面ナデ。	№20 炭化物付着
4	小型甕 土師器	A：14.4 B：4.8 C：13.3	覆土下位 95% やや不良	長石○、石英○、雲母○	にぶい橙	頸部はくの字状、口縁部は外傾。胴部外面細かなハケ調整。胴部内面に輪積痕、指頭痕。口縁部内外面ナデ。底面ヘラ削り。	№21 炭化物付着 被熱
5	壺 土師器	A：[14.0] C：(1.7)	覆土下位 30% 良好	長石△、石英△、雲母△	橙	口縁部破片で頸部から外反し、端部つまみ上げられる。内外面丁寧なヘラミガキ。口縁部下端二重口縁状となる。	№26
6	椀 土師器	A：[10.8] B：2.6 C：7.0	覆土 90% やや不良	長石○、石英○、雲母○、砂粒	にぶい橙	胴部は扁平で、頸部は括れ、口縁部外傾。頸部外面ハケ調整。底部は上げ底。外面ヘラミガキ。内面はハケ調整、ヘラナデ。	№27
7	坩 土師器	A：[10.9] B：2.4 C：5.7	貯蔵穴底 60% やや不良	長石○、石英◎、雲母○	橙	胴部は扁平で頸部は括れ、口縁部は外傾する。底部は平底。外面ヘラミガキ。胴部は焼成後穿孔の痕跡か。	№25
8	高坏 土師器	B：[8.6] C：(5.1)	貯蔵穴 80% 良好	長石△、石英△	橙	高坏の脚部でハの字状に開く。外面はハケ調整の上にヘラミガキ。内面はナデ。透かし孔3ヶ所。	№24
9	高坏 土師器	B：[10.4] C：(5.6)	覆土下位 70% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい赤褐	高坏の脚部でハの字状に開く。外面丁寧なヘラミガキ。透かし孔3ヶ所。上端に未貫通孔あり。被熱。	№23
10	ミニチュア 土師器	B：3.7 C：(3.3)	床面 90% 普通	長石○、石英○、砂粒	にぶい橙	胴部が外傾して立上る底部。底面は平底でヘラ削り。内面ヘラナデ。被熱。	№28

第2号住居跡出土土製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
11	土製品	舟形土製品	6.7	2.3	19.0	床面	部分	№328

第2号住居跡出土石製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
12	石製品	砥石	7.1	8.0	0.55	74.7	凝灰岩	№374

第３号住居跡〔SI－３〕（第76～78図　ＰＬ19・58）

位　置　調査区中央のＷ－21・22、Ｘ－21・22・23、Ｙ－22区に確認された。

重複関係　なし。

主　軸　Ｎ－50°　－Ｗ。

規　模　5.8×5.8mの方形であるが、北西側の一辺は5.5mである。確認面からの深さはおよそ32cmを測る。

床　全体に平坦で、硬化面は見られなかった。Ｐ１とＰ４の内側に地山掘り残しによる扁平な高まりが２ヵ所確認された。

壁　外傾して立ち上がる。

炉　長軸85×短軸80cmの不整楕円形を呈する。最深部で３cmを測る。炉内から小さな円礫（小砂利）が多く出土している。

柱　穴　Ｐ１～Ｐ４が主柱穴である。深さはＰ１が50cm、Ｐ２が８cm、Ｐ３が42cm、Ｐ４は28cmで一定ではない。その他は、Ｐ７・Ｐ８があるが小規模なものである。

入口施設　Ｐ５が入り口ピットであろう。深さは21cmである。

貯蔵穴　住居跡内の南隅に確認される。Ｐ６が位置的に貯蔵穴と考えられる。平面形は長径45×短径35cmである。深さは43cmである。

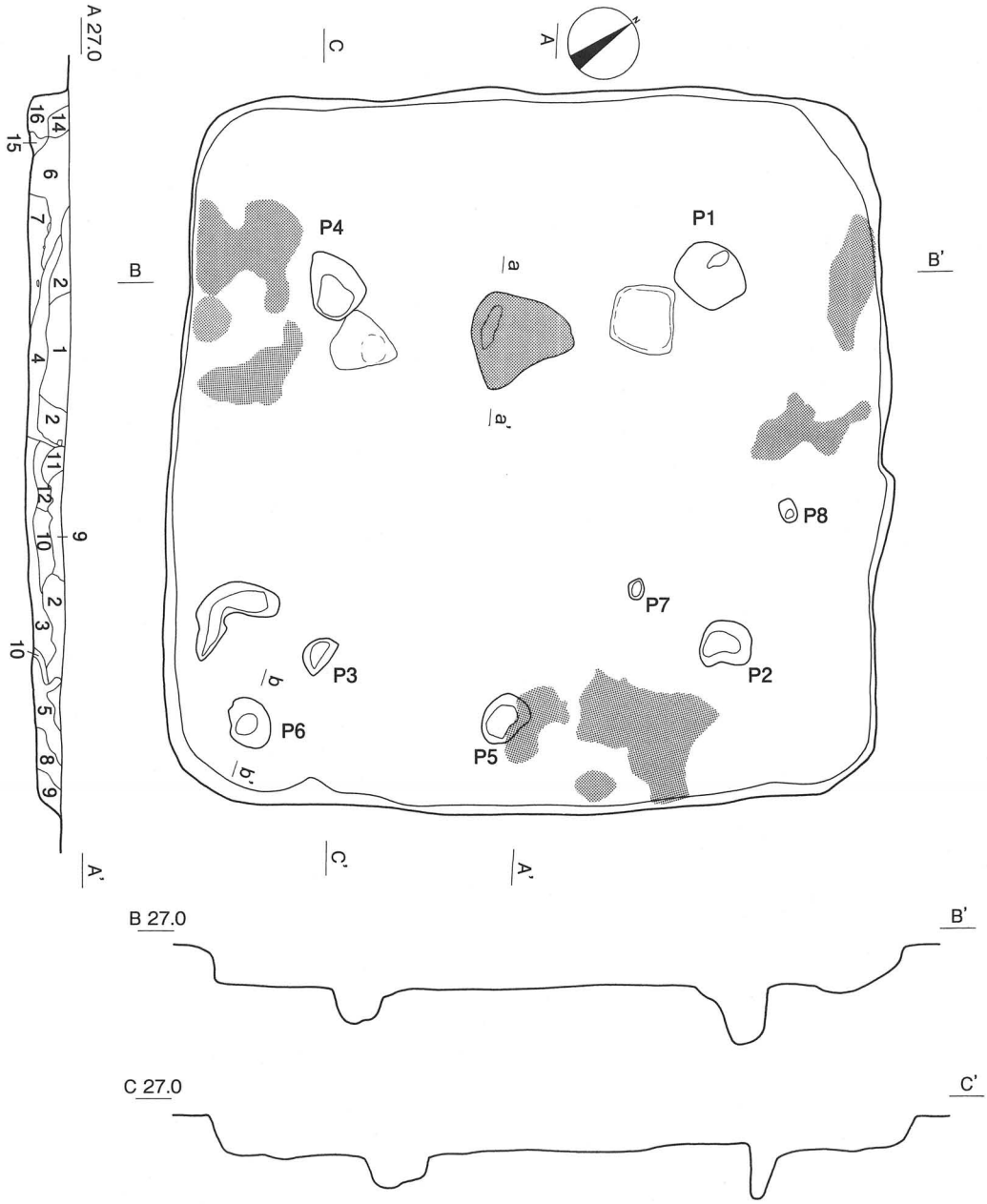
その他の施設　Ｐ１とＰ４の内側に地山掘り残しによる扁平な高まりが２ヵ所確認された。Ｐ１の南側のものが50×50cmの方形のもので、Ｐ４の東側のものは一辺50cmの三角形に近い形状のものである。この高まりは高さ約３cmで、中央部分が一番高くなっている。その他に、貯蔵穴の北側に「く」の字状の落ち込みが確認された。

覆　土　覆土の上層には、壁に沿って面的に焼土の堆積が３ヵ所見られた。この焼土は厚さ５cm程度のもので、非常に硬く焼きしまったものである。

遺物出土状況　全体の傾向として、北隅から南側へ拡散するように出土している。北隅には甕が多く、南側には器台・高坏がまとまって出土している。第５・６号住居跡出土土器と接合しているものがある。14の土器片を転用した砥石は貯蔵穴から出土した。

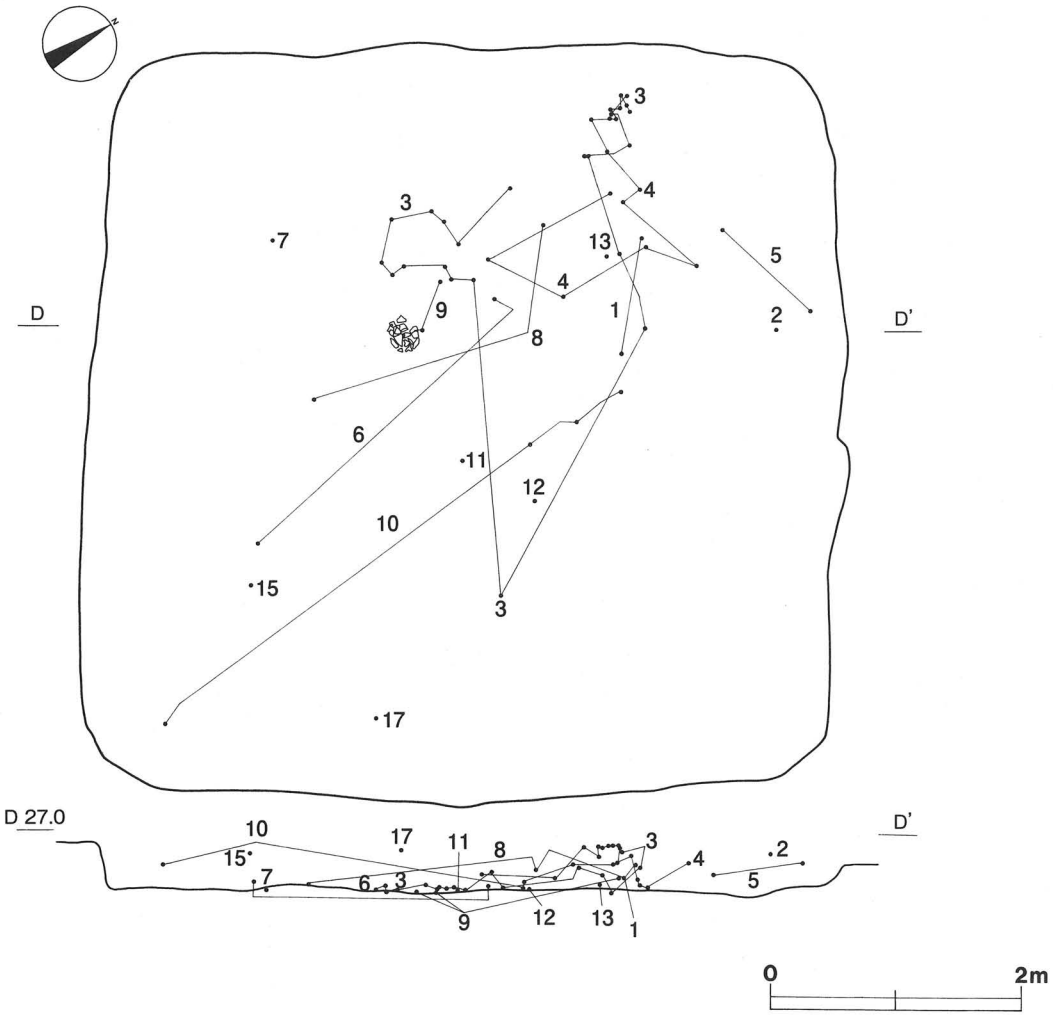
出土遺物　土師器・石製品・鉄製品が出土している。１～８は甕である。９は壺の口縁部である。11は器台、10・12は高坏、13は坩と思われる。14は土師器を転用した砥石、15は砥石である。16は棒状の鉄製品である。断面は方形で、上端はさびが広がっている。

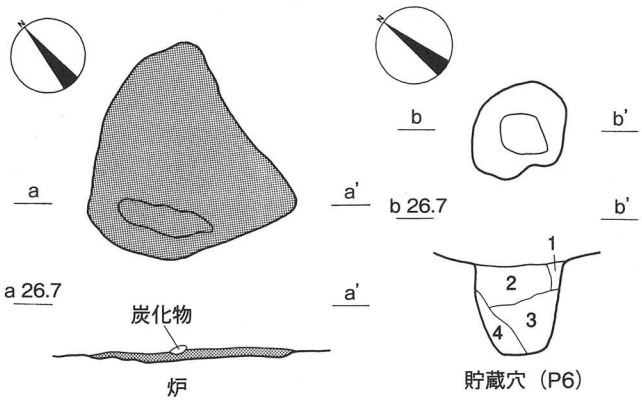
所　見　覆土中から出土した焼土は、他の住居跡から出土した焼土と質的に異なる様子が窺われる。Ｐ１とＰ４の内側に確認された、地山掘り残しによる扁平な高まりは特徴的である。本住居跡出土土器には、第５・６号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。床面より出土した遺物から、古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと考えられる。



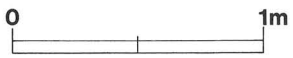
1	7.5YR4/4	褐色	ローム大～小微、ローム粒少撹乱層	9	7.5YR4/4	褐色	焼土粒微、ローム中微、ローム粒中
2	7.5YR4/4	褐色	撹乱層	10	7.5YR4/4	褐色	
3	7.5YR4/4	褐色	ローム中・粒微	11	7.5YR4/4	褐色	
4	7.5YR4/4	褐色	ローム粒少　撹乱層	12	7.5YR4/4	褐色	
5	7.5YR4/4	褐色	焼土小・粒中、ローム中・小少、ローム粒微	13	7.5YR4/4	褐色	ローム大微、ローム粒中
6	7.5YR4/6	褐色	ローム大・中微、ローム小・粒中　撹乱層	14	7.5YR4/4	褐色	ローム小・粒少
7	7.5YR4/6	褐色	焼土小・粒少、炭化粒微、ローム中・小微、ローム粒少	15	7.5YR4/4	褐色	焼土大・中微、焼土小中、焼土粒多、ローム粒少
8	7.5YR4/4	褐色	焼土小微、焼土粒中	16	壁崩れ土		

第76図　第３号住居跡

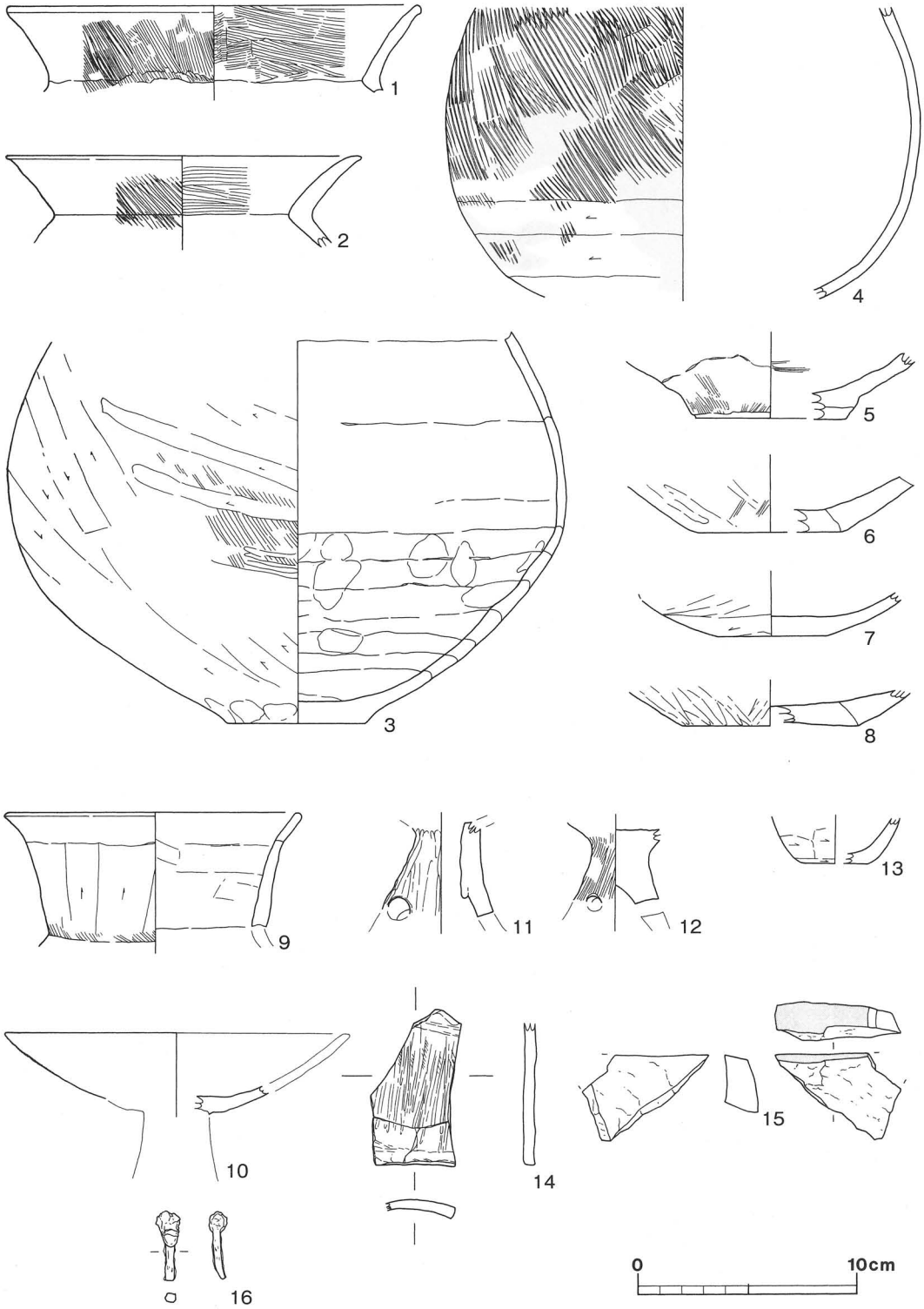




1　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中
2　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒中、ローム中微、ローム小・粒少、黒色土中微
3　7.5YR4/6　褐色　焼土小微、焼土粒少、炭化物中、ローム小・粒少、黒色土中微
4　7.5YR4/6　褐色　焼土粒少、炭化物少、炭化粒中、ローム小微、ローム粒少



第77図　第３号住居跡遺物出土状況・炉・貯蔵穴



第78図　第３号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：[19.0] C：(3.9)	覆土 20% 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい橙	甕の口縁部。頸部は括れ口縁部は外傾する。内外面にハケ調整。	№37
2	甕 土師器	A：16.4 C：(4.0)	覆土 10% 普通	長石○、石英○、雲母○	にぶい橙	甕の口縁部。頸部は括れ口縁部は外傾する。内外面にハケ調整。外面煤付着。	№40
3	甕又は壺 土師器	B：6.3 C：(17.9)	覆土下位 60% 普通	長石◎、石英△、雲母△	にぶい褐 橙	胴部下位に最大径を持ち、底部は平底。外面はハケ調整の上にヘラナデ。内面は輪積痕、指頭痕が残る。外面被熱赤化。	№32
4	甕 土師器	C：(13.2)	覆土下位 40% 普通	長石◎、石英◎、雲母◎	にぶい橙	下膨れの胴部で上位はハケ調整、下位はヘラナデ。底部外面は被熱赤化。胴部に炭化物付着。	№33
5	甕 土師器	B：〔7.0〕 C：(2.6)	P1 50% 普通	長石△、石英△、雲母△、赤色粒○	にぶい赤褐 灰褐	甕底部破片。底部に厚みを持ち、緩く外傾する。内外面ハケ調整の後ナデ。被熱赤化。	№36
6	甕 土師器	B：[6.7] C：(2.1)	覆土下 30% 普通	長石○、石英○、雲母△	にぶい赤褐 にぶい褐	甕底部破片。底面から緩く外傾する。外面はハケ調整の痕跡とヘラミガキが見られる。底面と内面はナデ。被熱赤化。	№38
7	甕 土師器	B：〔4.8〕 C：(1.7)	床面 60% 普通	長石◎、石英◎、砂粒◎	赤褐 にぶい赤褐	甕底部破片。底面から緩く外傾する。器壁は薄い。底部側縁・底面・内面ヘラ削りの後ナデ。外面被熱赤化し一部煤付着。	№39
8	甕 土師器	A：〔8.0〕 C：(1.5)	床面他 30% やや不良	長石◎、石英◎、雲母△	灰褐 にぶい褐	甕底部破片。底面から緩く外傾する。底面はヘラ削り。外面はヘラミガキ。内面はナデられるが剥離し荒れる。	№35
9	壺 土師器	A：〔13.8〕 C：(6.1)	床面 90% 良好	長石◎、石英○、雲母△	にぶい橙	頸部が直立気味で口縁部がやや外傾。口唇端部面取り。外面ハケ調整・ヘラ削りの後ナデ・ヘラミガキ。内面ハケ調整・ヘラ削りの後ナデ。	№34
10	高坏 土師器	A：[15.8] C：(3.7)	床面他 60% やや不良	長石○、石英○、雲母△、砂粒○	橙	高坏の坏部破片で脚部は欠損する。僅かに内湾して立上がる。内外面ともにナデられているが、全体的に荒れている。	№29
11	器台 土師器	C：(4.3)	覆土下位 90% 普通	長石○、石英○、雲母○、砂粒○	にぶい橙	器台脚部破片。ハの字状に開く脚部で、坏部底面に貫通孔が開き、透かし孔が３ヶ所見られる。外面ヘラミガキ。内面ナデ。	№41
12	高坏 土師器	C：(3.5)	床面 90% やや不良	長石○、石英△、雲母○、砂粒○	にぶい橙 橙	高坏脚部片。坏部の底部が僅か残り、脚部は３ヶ所に穿たれた透かし孔部分で破損。外面にハケ調整が見られるが、全体的に荒れている。	№30
13	坩？ 土師器	B：[2.8] C：(2.1)	覆土下位 50% 良好	長石・石英・雲母・砂粒△	にぶい橙 橙	平底の底部から外傾して立上がる。外面はヘラ削りの後、丁寧なナデ・ミガキ。内面はナデ。器壁は薄い	№42

第３号住居跡出土土製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
14	土製品	転用砥石	7	3.7	0.5	18.5	土師器	№43　貯蔵穴出土

第３号住居跡出土石製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
15	石製品	砥石	5.7	4.0	1.5	30.0	石英	№371　２片接合

第３号住居跡出土鉄製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
16	鉄製品	棒状鉄製品	2.5	0.4	1.5	0.6	鉄	№372

第４号住居跡〔SI－４〕（第79～90図　ＰＬ20・21・59～61）

位　置　調査区中央のＸ・Ｙ・Ｚ－17・18、Ｙ－19区に確認された。

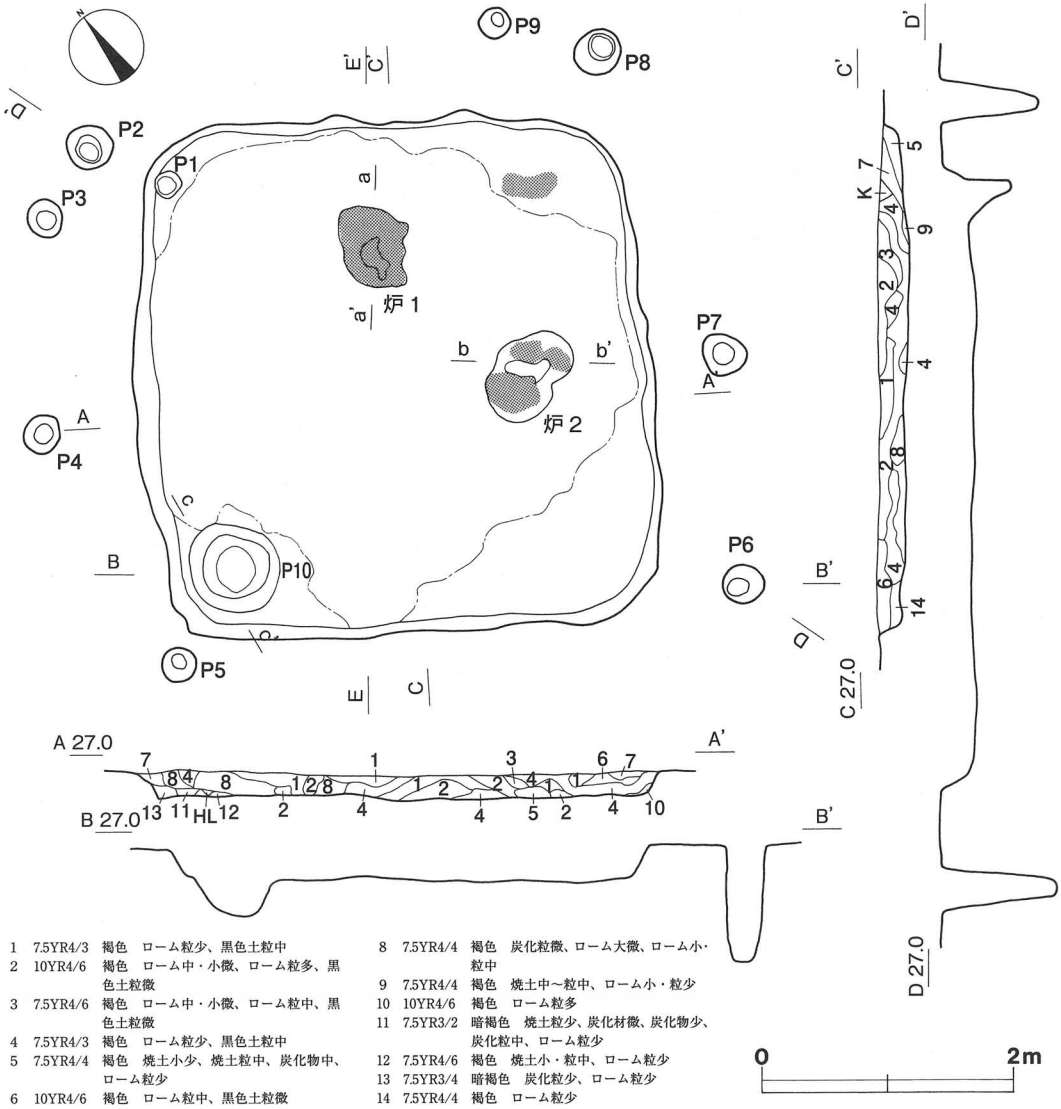
重複関係　なし。

主　軸　Ｎ－35°－Ｅ。

規　模　4.1×4.0mの方形を呈する。確認面からの深さはおよそ25cmを測る。

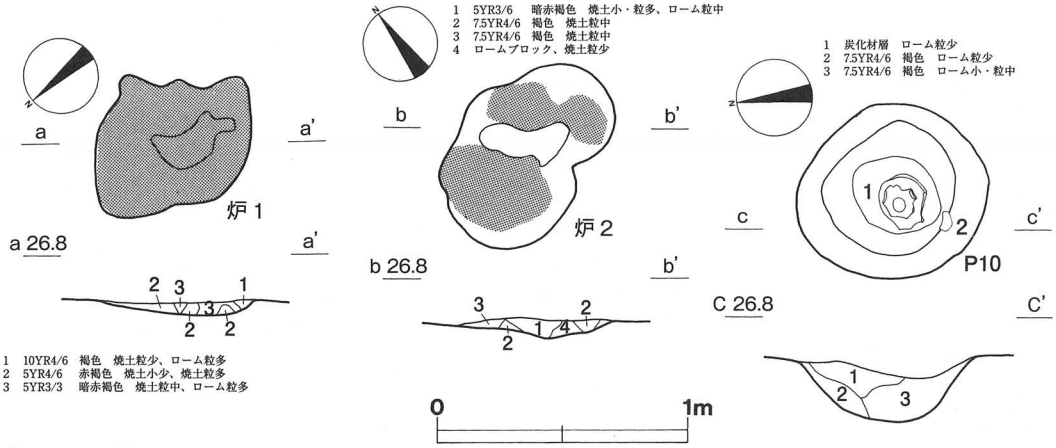
床　平面形と同様な形状を持ち、東西南北の隅付近以外は硬化している。東隅の床面は一部焼け、焼土化していた。床面には炉が２ヵ所確認された。また西隅には貯蔵穴が１ヵ所確認された。

壁　床面から外傾して立ち上がる。北西隅のみ傾斜が緩い。



1　7.5YR4/3　褐色　ローム粒少、黒色土粒中
2　10YR4/6　褐色　ローム中・小微、ローム粒多、黒色土粒微
3　7.5YR4/6　褐色　ローム中・小微、ローム粒中、黒色土粒微
4　7.5YR4/3　褐色　ローム粒少、黒色土粒中
5　7.5YR4/4　褐色　焼土小少、焼土粒中、炭化物中、ローム粒少
6　10YR4/6　褐色　ローム粒中、黒色土粒微
7　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中、黒色土粒中
8　7.5YR4/4　褐色　炭化粒微、ローム大微、ローム小・粒中
9　7.5YR4/4　褐色　焼土中～粒中、ローム小・粒少
10　10YR4/6　褐色　ローム粒多
11　7.5YR3/2　暗褐色　焼土粒少、炭化材微、炭化物少、炭化粒中、ローム粒少
12　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒中、ローム粒少
13　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒少、ローム粒少
14　7.5YR4/4　褐色　ローム粒少

第79図　第４号住居跡

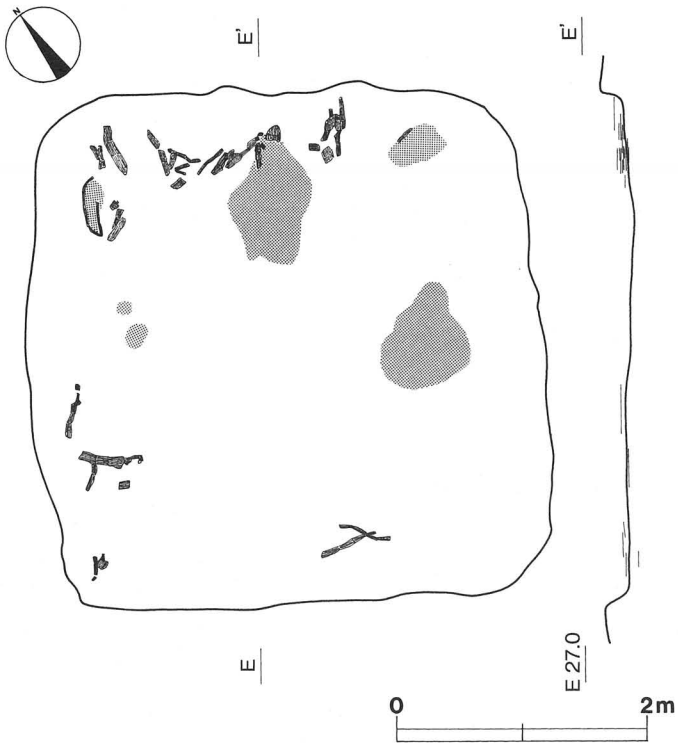


第80図　第４号住居跡・炉・貯蔵穴

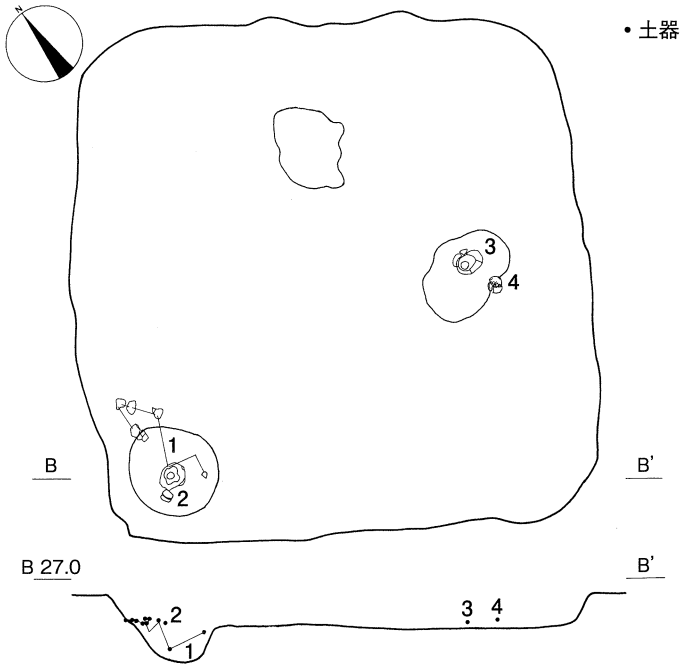
炉　２ヵ所確認された。炉１は住居内の中央から北壁よりに検出され、平面形は不整楕円形（長径72×短径60cm）で、深さは最深部で５cmを測る。底面はわずかに凹み、皿状をなす。炉２は床面中央の南東よりに検出され、長径80×50cmの不整楕円形を呈する。底面は皿状をなし、最深部は約７cmを測る。中央部分には焼土が見られなかった。この２つの炉には時期差が存在するものと考えられる。

柱　穴　住居内にはＰ１の１ヵ所のみが確認された。この他、住居外の周囲にＰ２～Ｐ９が確認された。各ピットの深さはＰ１が33.1cmであった。住居外のピットはＰ２が77.0cm、Ｐ３が23.1cm、Ｐ４が7.9cm、Ｐ５が15.7cm、Ｐ６が92.4cm、Ｐ７が15.1cm、Ｐ８が70.8cm、Ｐ９が14.6cmでありばらつきが見られ、柱穴になるか不明である。

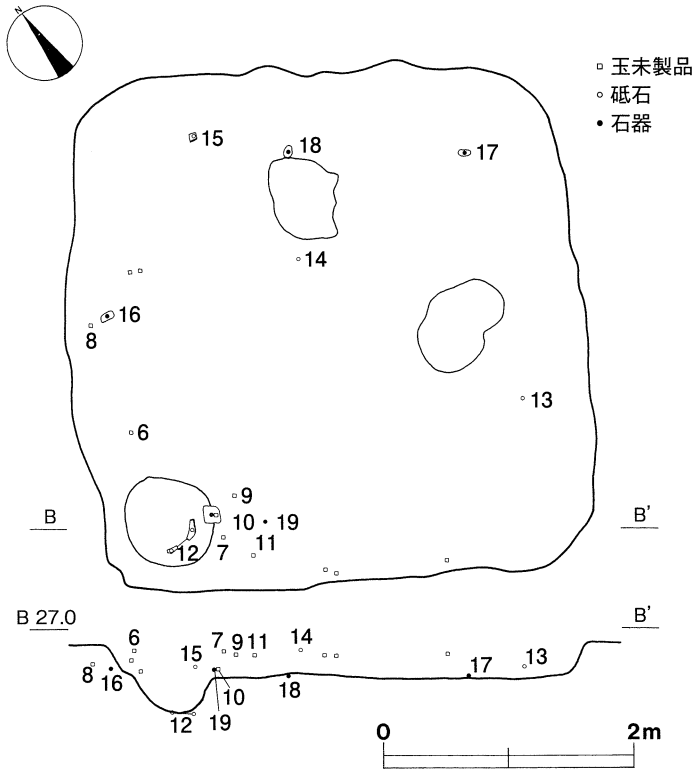
貯蔵穴　貯蔵穴は住居内の西隅にある。形状は円形で、規模は直径約75cmを測り、深さは最深部で約30cmを測る。覆土は３層からなる。貯蔵穴内やその周辺からの玉作関連遺物の出土が目立ち、貯蔵穴が玉作作業と関わる箇所である



第81図　第４号住居跡炭化材等出土状況



第82図　第４号住居跡遺物出土状況（１）



第83図　第４号住居跡遺物出土状況（２）

と考えられる。

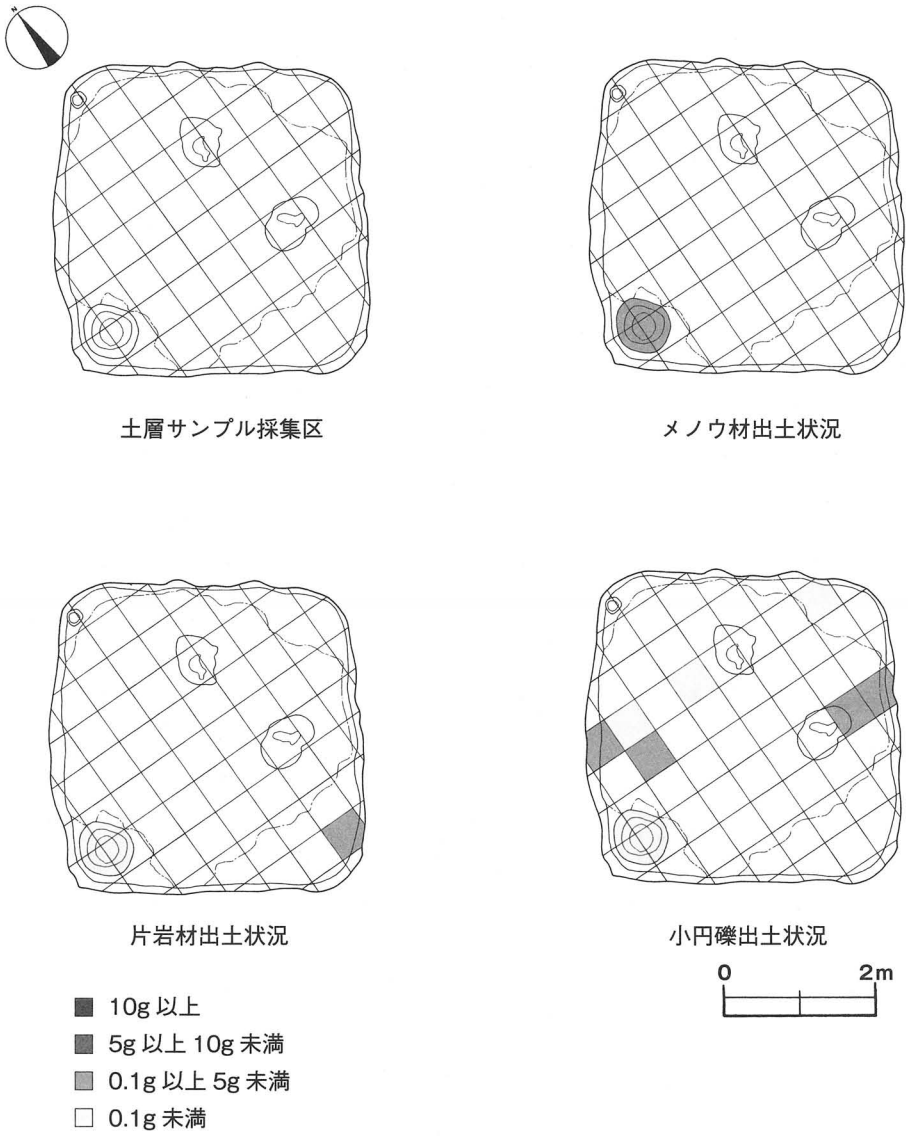
入口施設　床面の硬化面が南南西壁から広がりを見せていること、炉の状況、そしてピットや貯蔵穴の位置から、同所に本住居の入口が想定される。

覆　土　14層の土層からなる。東壁から炉付近にかけ人為的なローム層の堆積が見られた。

遺物出土状況　住居の北北東壁から北西壁にかけて、壁際に炭化物が見られた。土器は貯蔵穴及びその周辺、また炉２の上に３・４が伏せた状況で出土している。

出土遺物　土器や玉作関連遺物が出土している。１～３は壺で、４は器台である。５はその痕跡から鉄製品用の砥石と考えられる。

玉作関連遺物出土状況　メノウ製の玉未製品が貯蔵穴周辺を中心に出土している。貯蔵穴底面から内磨き砥石（12）が出土し、その上縁から台石と考えられるもの（19）が出土している。工具と考えられる敲き石など（16～18）は住居北側の床面近くを中心に出土している。砥石の中には、第90図２・３のように第６号住居跡出土のものと接合しているものがある。また、メノウ製未製品の中には第90図１のような第８号住居跡出土遺物と

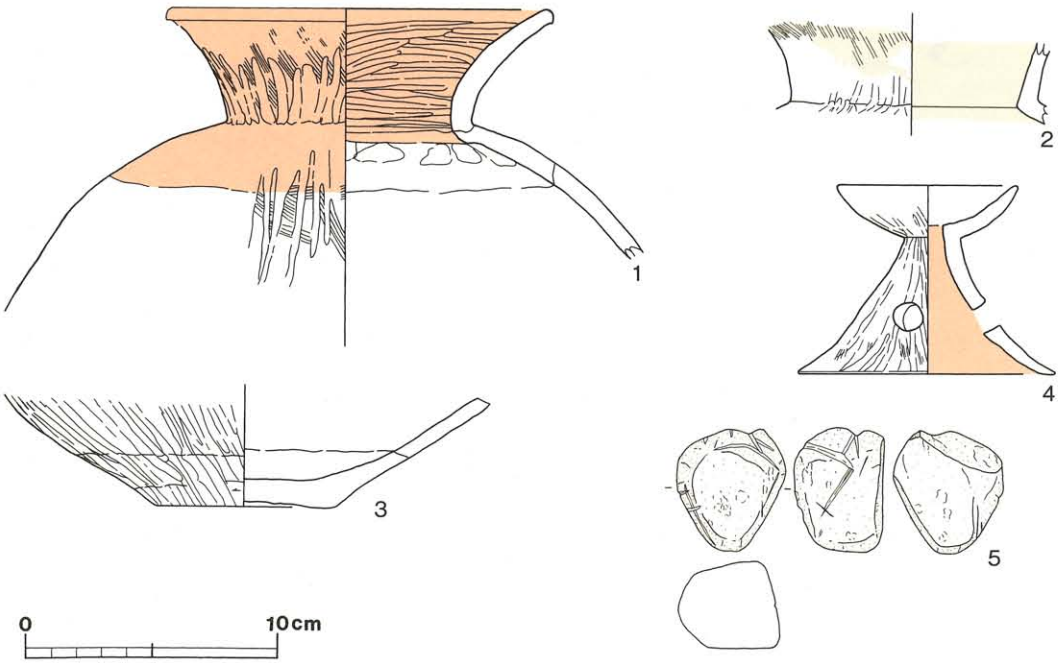


第84図　第４号住居跡遺物出土状況（３）

接合するものがある。このことから、本住居跡と第６・８号住居跡との関連性が窺われ、道具が形を変えて継続的に使用されていることが理解できる。

床面上や貯蔵穴覆土の水洗い選別（第２章第３節２遺構調査参照）の結果では、メノウと片岩の微細剥片などが採集された。メノウ製微細剥片は貯蔵穴のみから0.2ｇ採集され、片岩製微細剥片は貯蔵穴内（1.3ｇ）と壁際（1.5ｇ）に見られた。このほか、小円礫が貯蔵穴内外から採集されている。全体的に見れば、微細な玉作関連遺物の出土は僅かである。

玉作関連遺物　本住居跡からメノウ製勾玉未製品（６～11）や砥石（12～15）、石製の工具（16



第85図　第４号住居跡出土遺物（１）

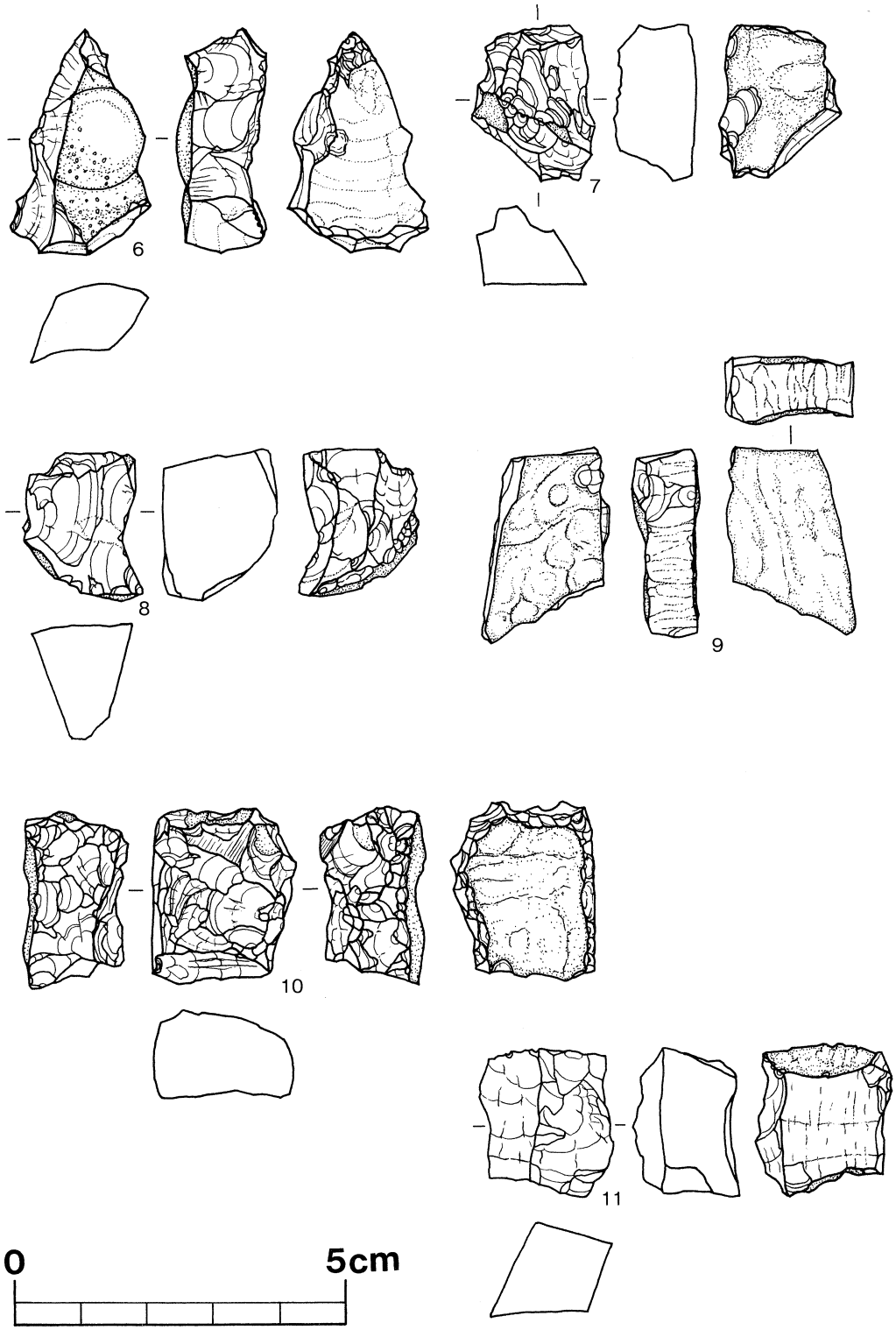
第４号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼　成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	壺 土師器	A：[15.4] C：(9.9)	貯蔵穴内他 80% 普通	雲母△、長石・石英○	にぶい黄橙	壺の胴部上半～口縁部。頸部が屈曲し、口縁部が外反する。外面はハケ調整の後、ナデ・ヘラミガキ。口縁部の破面磨れ、炭化物付着。	№46 赤彩
2	壺 土師器	C：(3.1)	貯蔵穴 100% やや不良	長石○、石英○、雲母○	橙 にぶい黄橙	壺の頸部で意図的に割られ、上下端の破面は全体的に磨れており、転用されたものと思われる。炭化物が内外面や破面にも付着。	№44
3	壺 土師器	B：7.0 C：4.2	炉上 100% 普通	長石△、石英△、雲母△	にぶい橙	壺の底部。輪積部で意図的に割られいる。外面ヘラミガキ。内面は剥離が見られ荒れている。坏状の器形を意識した転用品。	№45
4	器台 土師器	A：7.2 B：9.8 C：7.5	炉上 90% やや不良	長石△、石英△、雲母△	橙	坏部径は脚部径よりも小さく、全体の高さの1/3を占める。外面はヘラミガキがなされるが、全体に被熱赤化し剥離が見られる。	№47 脚部内面に赤彩残存か

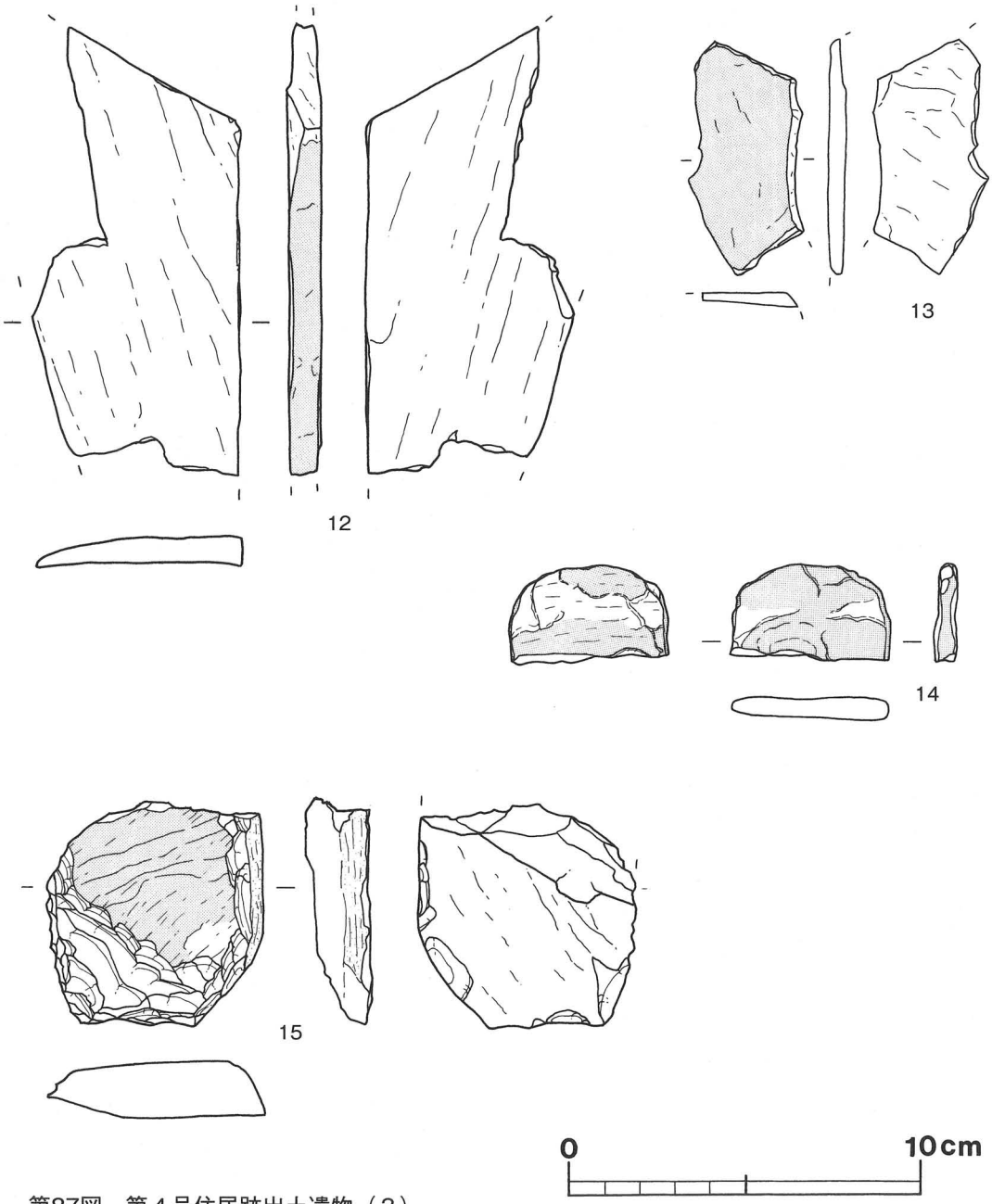
第４号住居跡出土石製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
5	石製品	砥石	4.9	4.1	3.45	11.8	軽石	玉102　床直

～19）が出土している。６～８は荒割工程、９は形割工程、10･11は側面打裂工程と考えられる。６の表裏面と下側面に自然面が見られ、左右の両側面が打割される。７は表面の稜部分には細かな剥離が見られ、一部摂理面が残る。裏面のほとんどと側面の一部は自然面である。８の下側面に自然面が残る。９には左側面のみが打割された明確な剥離面が残る。10の上側面の一部と裏面に自然面が残り、下側面を除き細かな剥離が見られる。下側面は左側面からの力によって破損したものと思われる。表面の上部に研磨面が若干見られる。11の上下側面には自然面が残る。本資



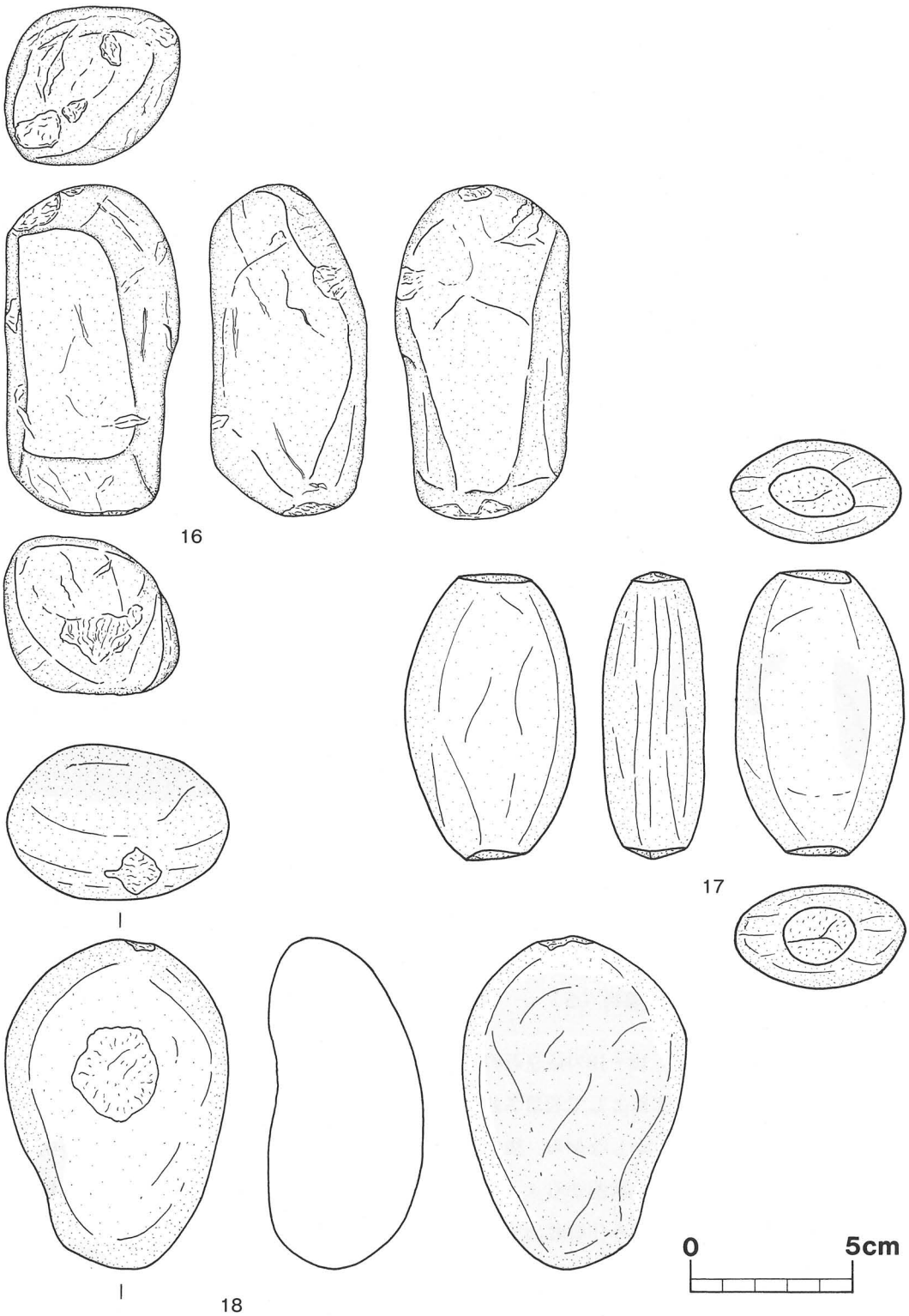
第86図　第４号住居跡出土遺物（２）



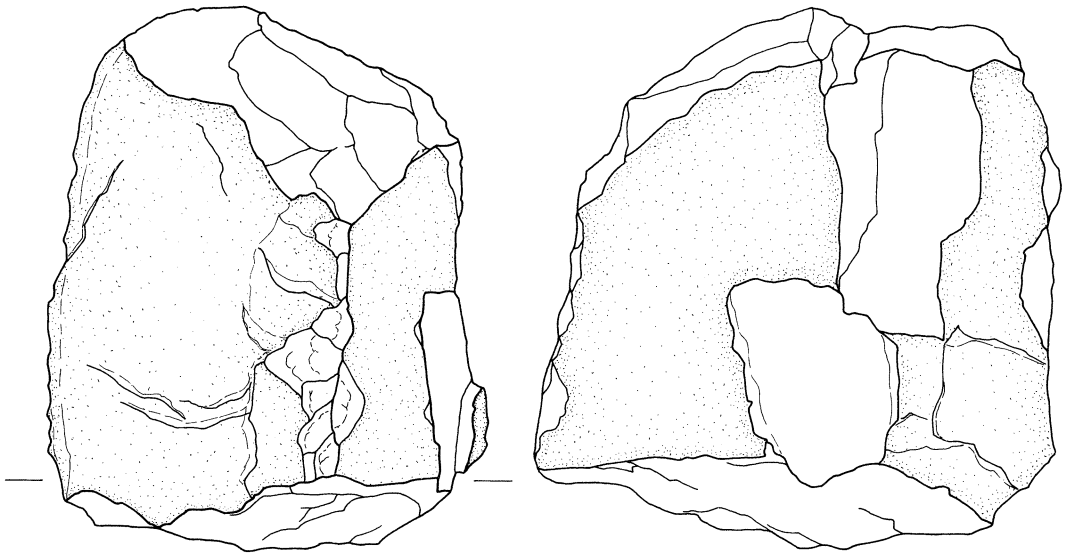
第87図　第４号住居跡出土遺物（３）

料は第８号住居跡出土資料（第126図26）と接合する（第90図１）。本来は直方体の個体が中央で半分に欠損してしまったものである。

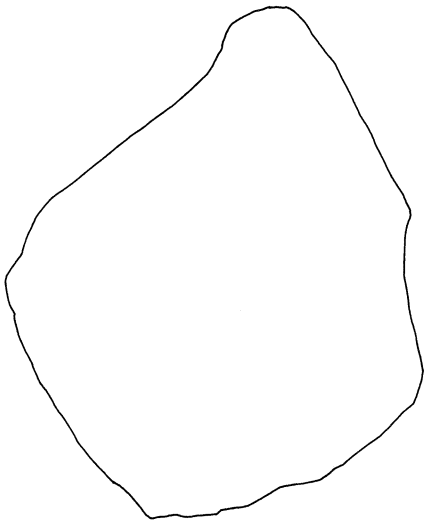
片岩製の砥石には12の内磨き砥石や、13・15のような平砥石、そして内磨き兼平砥石とされる14がある。14は第６号住居跡出土資料（第117図96）と接合する（第90図２）。15についても第６号住居跡出土資料（第116図87・88）と接合する。

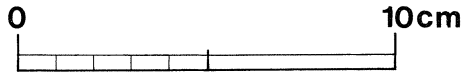


第88図　第４号住居跡出土遺物（４）



19



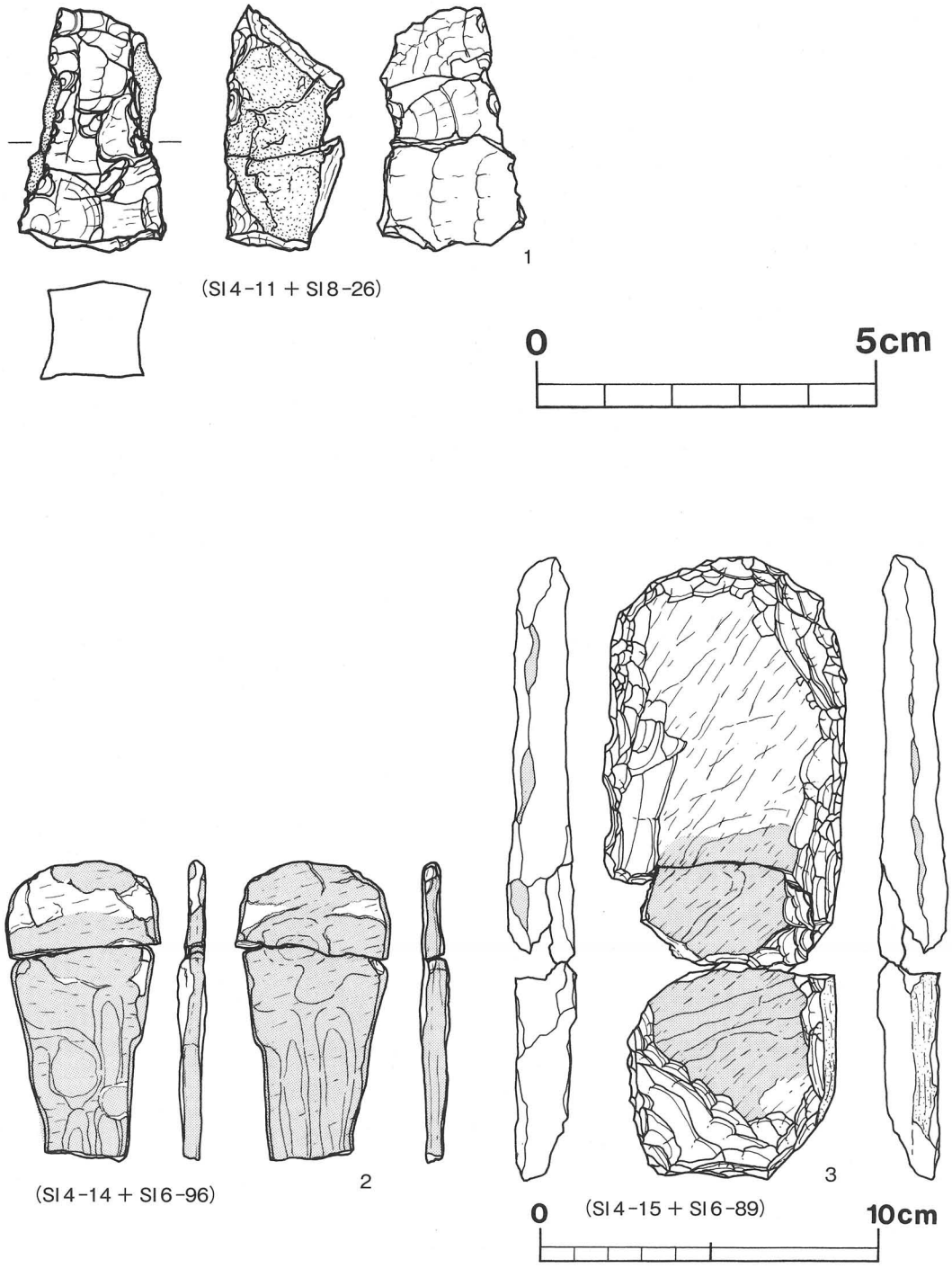


第89図　第４号住居跡出土遺物（５）

その他の工具としては、16～18の敲き石の類や19の台石と考えられるものが出土している。

所　見　本住居跡は玉作工房として利用されたものと考えられ、貯蔵穴を中心に作業が行なわれた可能性が考えられる。しかしながら、微細な玉作関連遺物の出土状況はほかの工房跡の状況と異なる。また、未製品の出土状況からメノウ製勾玉の荒割工程を中心に形割・側面打裂工程の資料が出土している。そして、本住居跡出土の玉作関連遺物の中には第６・８号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。

本住居跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと考えられる。



第90図　第４号住居跡ほか接合資料

第４号住居跡出土玉作関連遺物

図版No.	種 別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
6	勾玉荒割工程	3.50	1.95	1.00	8.38	メノウ	玉３
7	勾玉荒割工程	2.30	1.80	1.10	6.38	メノウ	玉６
8	勾玉荒割工程	2.20	1.65	1.75	7.21	メノウ	玉２
9	勾玉形割工程	2.95	1.80	1.00	6.81	メノウ	玉１
10	勾玉側面打裂工程	2.65	2.10	1.40	12.17	メノウ	玉５
11	勾玉側面打裂工程	2.20	1.90	1.40	7.68	メノウ	玉４　SI-8（26）と接合
12	内磨砥石	12.10	5.90	0.85	82.93	片岩	玉９　貯蔵穴内出土
13	平砥石	6.50	3.10	0.50	12.63	片岩	玉８
14	内磨砥石兼平砥石	2.80	4.45	0.60	12.20	片岩	玉７　SI-6（96）と接合
15	平砥石	6.35	6.10	1.55	84.00	片岩	玉10　SI-6（87）他と接合
16	敲き石	10.40	5.40	4.80	437.47	チャート	玉14　端部敲打　被熱
17	敲き石及び磨石	8.80	5.20	3.10	224.03	砂岩	玉13　両端部敲打痕　炭化物付着
18	凹み石	10.20	6.80	4.70	395.95	石英斑岩	玉12　被熱炭化物付着
19	台石	14.70	12.40	10.90	2,520.23	花崗岩	玉15　貯蔵穴脇出土

第４号住居跡ほか玉作関連遺物接合資料　　単位：cm・g

図版No.	種 別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
1	勾玉側面打裂工程	3.65	2.20	1.45	16.24	メノウ	SI-4（11）＋SI-8（26）
2	内磨兼平砥石	8.70	4.50	0.90	43.00	片岩	SI-4（14）＋SI-6（96）
3	内磨兼平砥石	18.10	7.10	2.00	308.90	片岩	SI-4（15）＋SI-6（89）

第５号住居跡〔SI－５〕（第91～94図　ＰＬ22・62）

位　置　調査区中央南側のＹ・Ｚ－25・26区に確認された。

重複関係　なし。

主　軸　炉が未確認で不明と言わざるを得ないが、およそＮ－25°－Ｅか。

規　模　長軸1.8×1.7ｍの正方形に近い形状。深さは、床面下の溝状の落ち込み底面で確認面からの深さは26～28cmを測る。

床　床面は平坦であったが、床面全体にわたり幅50cm前後の溝状の落ち込みが見られた。また床面の硬化した部分は見られず、南側に深さ４cmの浅いピットがあるのみである。

壁　壁は緩くなだらかに立ち上がる。

炉　住居の覆土中に焼土のまとまった堆積は見られたが、炉らしいものは確認できなかった。

柱　穴　床面には浅いピット１つのみが確認された。柱穴とは見なし難い。

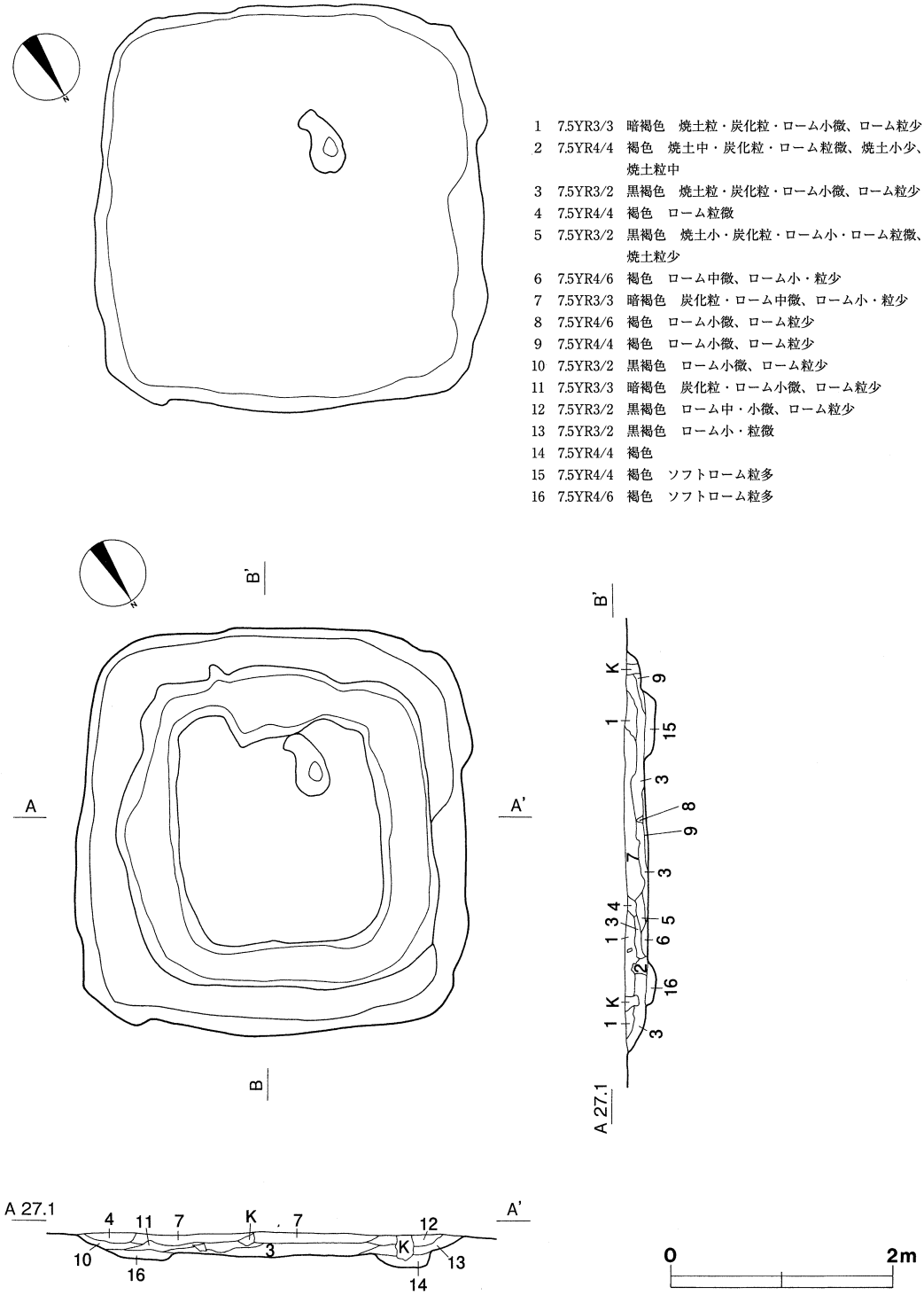
入口施設　入り口ピットや入り口部の床の硬化面などは確認されていない。

貯蔵穴　ない。

その他の施設　床面下に方形に巡る溝状の落ち込みが確認された。第１号住居跡床面下に確認されたものと同様のものといえる。

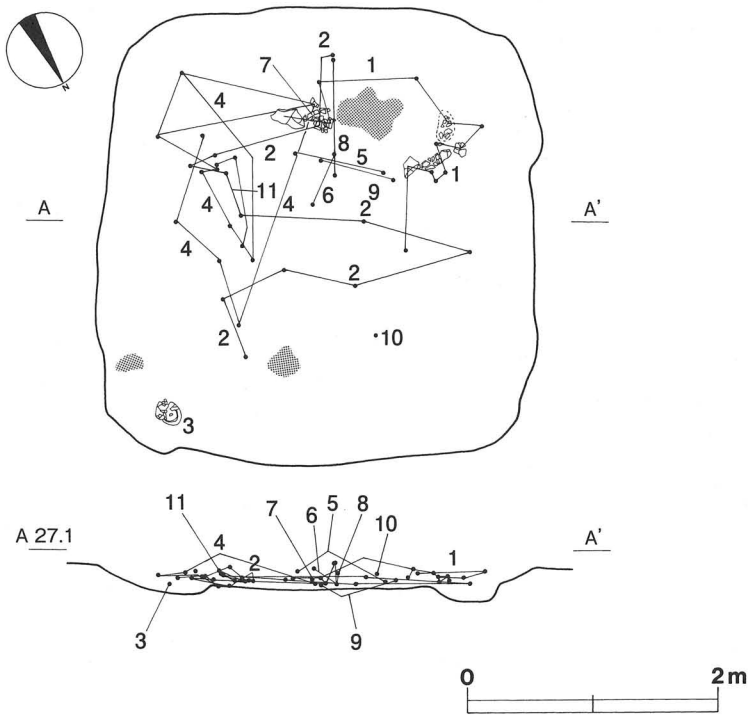
覆　土　本住居跡の覆土は16層からなり、一部に焼土・炭化物が入り込む。

遺物出土状況　出土遺物は、住居跡内南側を中心に出土している。３の土師器甕は正位の状態で



1　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒・炭化粒・ローム小微、ローム粒少
2　7.5YR4/4　褐色　焼土中・炭化粒・ローム粒微、焼土小少、焼土粒中
3　7.5YR3/2　黒褐色　焼土粒・炭化粒・ローム小微、ローム粒少
4　7.5YR4/4　褐色　ローム粒微
5　7.5YR3/2　黒褐色　焼土小・炭化粒・ローム小・ローム粒微、焼土粒少
6　7.5YR4/6　褐色　ローム中微、ローム小・粒少
7　7.5YR3/3　暗褐色　炭化粒・ローム中微、ローム小・粒少
8　7.5YR4/6　褐色　ローム小微、ローム粒少
9　7.5YR4/4　褐色　ローム小微、ローム粒少
10　7.5YR3/2　黒褐色　ローム小微、ローム粒少
11　7.5YR3/3　暗褐色　炭化粒・ローム小微、ローム粒少
12　7.5YR3/2　黒褐色　ローム中・小微、ローム粒少
13　7.5YR3/2　黒褐色　ローム小・粒微
14　7.5YR4/4　褐色
15　7.5YR4/4　褐色　ソフトローム粒多
16　7.5YR4/6　褐色　ソフトローム粒多

第91図　第５号住居跡・掘り方



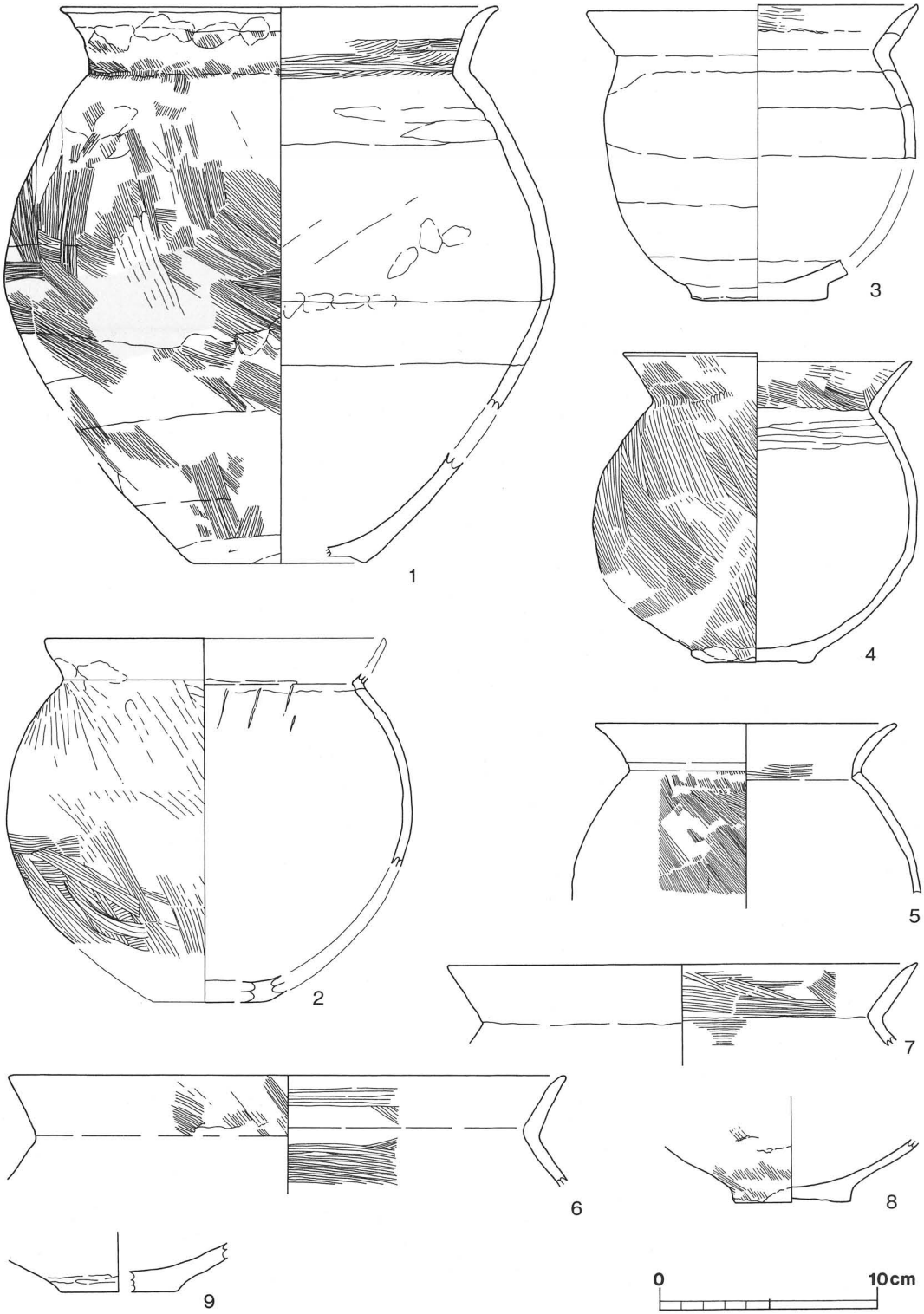
第92図　第５号住居跡遺物出土状況

出土した。床面下の溝状の落ち込みからの遺物の出土はほとんどない。本住居跡出土土器には、第３号住居跡出土のものと接合しているものがある。

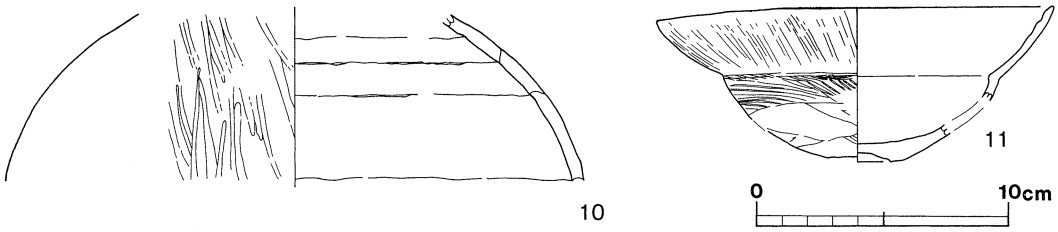
出土遺物　出土遺物は土師器甕がまとまって出土した。１～９は甕であり、10は壺、11は鉢である。甕には１・６・７のような大型のものや、２～５のような小型のものが見られる。３は特徴的な作りの甕で、内外面に輪積痕が残る。また、出土状況も他の土器と異なり、住居跡の東隅で潰れた

第５号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：[20.0] B：[7.8] C：25.5	覆土上位 60% 普通	長石・石英○、雲母◎	明黄褐	頸部が括れ口縁部が外傾し、口唇部が外反。頸部内外面や外面の胴部中央付近にハケ調整が目立つ。胴部中央に最大径を持ち、作りは荒い。	№58 炭化物付着
2	小型甕 土師器	A：[14.4] B：[5.2] C：(16.7)	覆土 40% 普通	長石○、石英○、雲母△	橙	球胴形の甕で、器厚は全体的に薄い。頸部は括れ、口縁部が僅か外傾する。外面の胴上半は丁寧なヘラナデ、胴下半は雑なハケ調整。	№59
3	小型甕 土師器	A：[15.3] B：6.3 C：13.5	覆土下位 50％ やや不良	長石△、石英△、雲母△	橙	口縁部に最大径を持つ小型甕。内外面に輪積痕が残る。器面は内外面共に被熱によって荒れており、調整も不明瞭。底面に木葉痕。	№56
4	小型甕 土師器	A：[13.2] B：4.9 C：14.2	覆土 70% 普通	長石○、石英○、雲母△	明赤褐	球胴形の甕。頸部は括れ、口縁部が外傾する。外面全体や口縁部内面に細かなハケ調整。底面はナデ。	№57 胴部煤付着
5	甕 土師器	A：[13.8] C：(7.8)	覆土下位 10% やや不良	長石○、石英◎、雲母△	にぶい橙	頸部は括れ、口縁部が外反する。器面は荒れている。胴部外面に細かなハケ調整。	№51



第93図　第５号住居跡出土遺物（１）



第94図　第５号住居跡出土遺物（２）

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
6	甕 土師器	A：[25.6] C：(4.8)	覆土下位 10% やや不良	長石○、石英○	橙	頸部が括れ口縁部が外傾する。口縁部内外面にハケ調整。頸部内面に緻密なハケ調整。全体的に被熱により荒れる。	No.55
7	甕 土師器	B：[21.6] C：(3.5)	覆土 30% やや不良	長石△、石英△、雲母△	橙	頸部が括れ、口縁部が外傾する。口縁部内面にハケ調整。全体的に被熱により荒れる。	No.54 炭化物付着
8	甕 土師器	B：5.4 C：(2.6)	覆土下位 80% 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい赤褐 にぶい橙	甕の底部。やや上げ底となる。外面にハケ調整。内面はナデられ煤付着。外面被熱し赤化。	No.52
9	壺 土師器	B：[5.2] C：(2.8)	覆土 30% 普通	長石△、石英△、雲母○	にぶい褐 橙	壺の底部破片。外面・底面ナデ。内面は一部ミガキ。	No.53
10	壺 土師器	C：(6.6)	覆土 30% 良好	長石△、石英△、雲母△　胎土緻密	にぶい橙 橙	胴部破片。外面には丁寧なヘラミガキ。内面には輪積痕が残り、ミガキが施される。	No.50
11	鉢 土師器	A：[16.9] B：2.5 C：6.1	覆土下位 70% やや不良	長石◎、石英○、雲母△	にぶい赤褐	小さな上げ底の底部から胴部が開く。大きな口縁部は内面に陵を持ち外傾する。胴部外面は粗いハケ調整、口縁部は丁寧なヘラナデ。	No.60

状態で出土した。

所　見　本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。住居として基本的な施設である炉が存在せず、小型の住居のためか柱穴も存在しないことが特徴と言える。本住居跡出土土器には、第３号住居跡出土のものと接合するものがあり関連が窺われる。

第６号住居跡〔SI－６〕（第95～117図　ＰＬ23～25・62～70）

位　置　調査区中央南側のＴ・Ｓ－20・21・22から確認された。

重複関係　東側の壁の一部が第45号土坑と重複し、本住居跡が古い。

主　軸　Ｎ－52°－Ｗ。

規　模　およそ8.0×8.0ｍの方形を呈し、調査区内の古墳時代前期の住居跡の中では一番規模の大きなものである。確認面からの深さはおよそ50cmを測る。

床　床面には中央部分と南端の部分を除き、ベッド状遺構が壁から１～２ｍの幅で作られている。この他、壁際には壁溝が巡り、入り口部分からＰ２・Ｐ１に通じて間仕切り溝が確認された。床面の硬化面は入り口部分のＰ５・Ｐ６周辺に見られ、またベッド状遺構の内側にも見られた。特にＰ５の北西側には貼り床が確認された。

壁　部分的に壁の崩落が見られるが、多くは急激に立ち上がっている。壁際には全周して壁溝が確認された。壁溝の幅は約30cmで、深さ約15cmを測る。その土層の状況を見ると一様に、壁際はロームブロックの混入が少量で色調が濃く、住居中央側はロームブロックの混入が多いことが観察された。このことから壁際には板状の壁構築材が巡っていた可能性が想定される。

炉　Ｐ１・Ｐ４を結ぶラインより南東側でややＰ４側に寄っている位置に確認された。規模は長軸90cm・短軸75cm・深さは４cmを測る。炉の覆土には径２～５mm程度の小円礫（砂利）が多量に含まれていた。

柱　穴　Ｐ１～Ｐ４が主柱穴で、それぞれの上面径は1.0～1.3ｍを測る円形である。深さはいずれも90～95cm程度である。いずれも底面の幅は狭く上部ほど広がりを見せることと、土層の堆積状況から、柱の抜き取りが行われた可能性が考えられる。この中でＰ３のみが上面径が小さく、南側にテラス状の部分が見られた。Ｐ４の第６層の下位から第110図45のミニチュア土器が出土した。

貯蔵穴　Ｐ６が貯蔵穴に相当する。住居内の南東隅にＰ３と接して確認された。長軸1.1×0.8ｍ・深さ40cmを測る。覆土は６層（第９・10・21・23～25層）からなり、第24層は埋め戻されたような土層で、第25層は水中で泥が沈殿したようなきめの細かい土層である。

入口施設　Ｐ５が入り口施設に相当し、南東方向に向かって斜めに穿たれている。上面径は30cm・深さ24cm・傾斜角は60°を示す。同ピット周辺に硬化面が見られた。

その他の施設　間仕切り溝が確認され、住居内の南東壁からＰ２・Ｐ１へとクランク状に折れ曲って作られている。Ｐ１側は浅く、南東壁側は深さを増す。入り口ピット周辺に小さなピットが９ヵ所確認された。

覆　土　覆土は22層から構成され、第１層から第４層は暗褐色を呈し、下層の土層とは区別される。

遺物出土状況　多くの遺物は北西壁・南壁際にまとまって出土している。同所の間での遺物の接

合関係が多く見られた。本住居跡出土土器には、第２・３号住居跡出土土器と接合したものがある。また、本住居跡出土玉作関連遺物には、第4号住居跡のものと接合したものがある。

出土遺物　出土遺物には土師器と土玉、そして玉作関連遺物が出土している。土師器には１～18の甕、19～26・28の壺があり、29～32の小型鉢、27・33・35・36の坩、34の椀、37～43の器台、45のミニュチア土器、46～49の手づくね土器が出土している。これらの中で特徴的なものに、甕では５や８があり、「Ｓ」字状口縁甕を意識したような口縁部断面形態を見せる。また、26は大型壺の口縁部であり、断面形も特徴的であるのと同時に側面に棒状浮文が貼付されている。出土土器の全体的な傾向として、甕や器台が比較的まとまって出土している。そして、これらの土師器の中で、21の壺、30・32の小型鉢、33・36の坩、40・42の器台、45のミニチュア土器には赤色顔料が塗布されている。

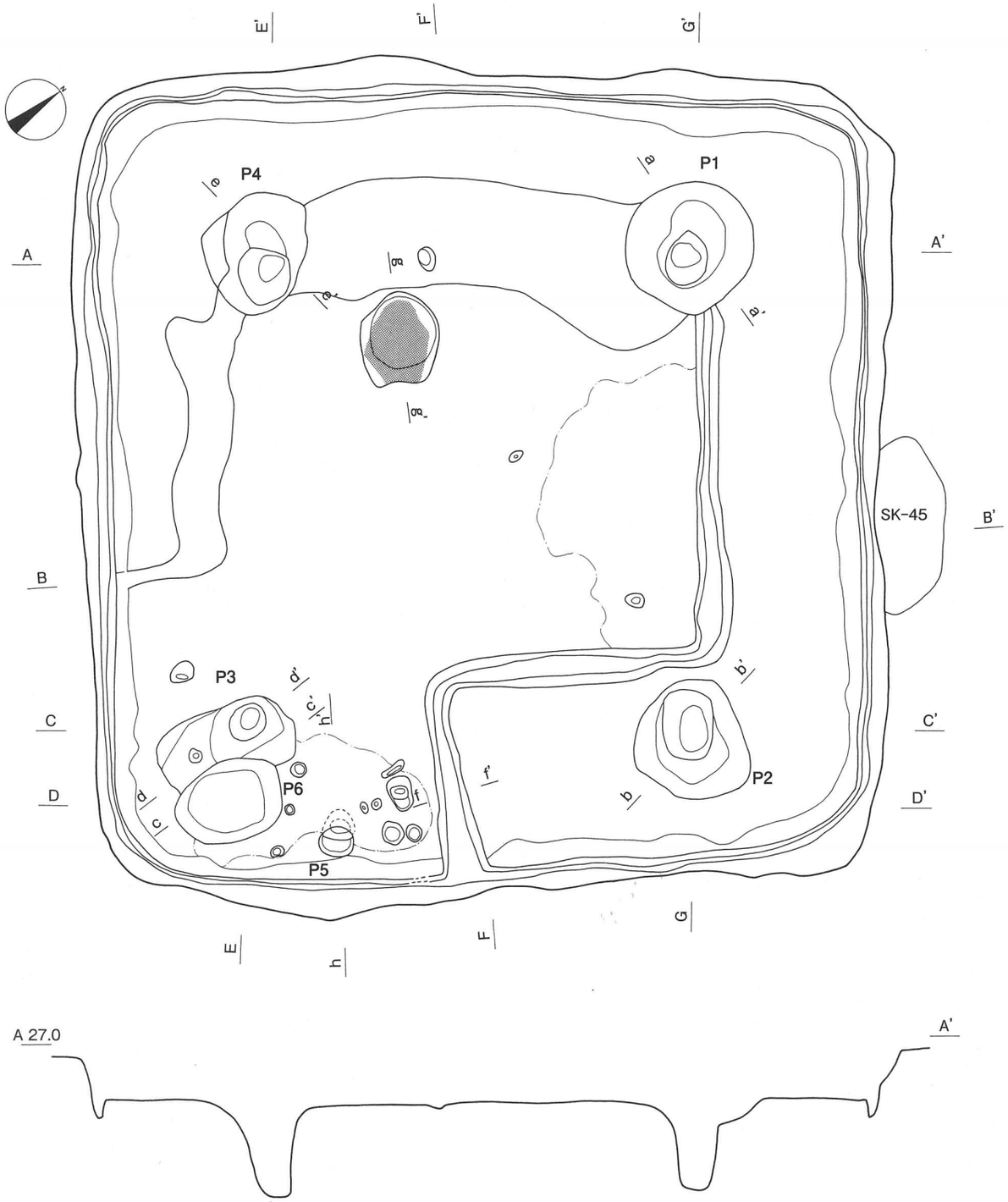
出土した土師器の中には意図的に穿孔されたものがあり、12・13・15の甕や21の壺が該当する。いずれも焼成後の穿孔であり、12は底部に見られ、13・15・21は胴部に穿孔が見られる。12や21の穿孔方法は、断面形が丸い棒状のもので打ち抜いた様な状況である。また、13・15は少しずつ打ち割りながら破砕し、およそ円形の大きめの孔を開けた様に思える。

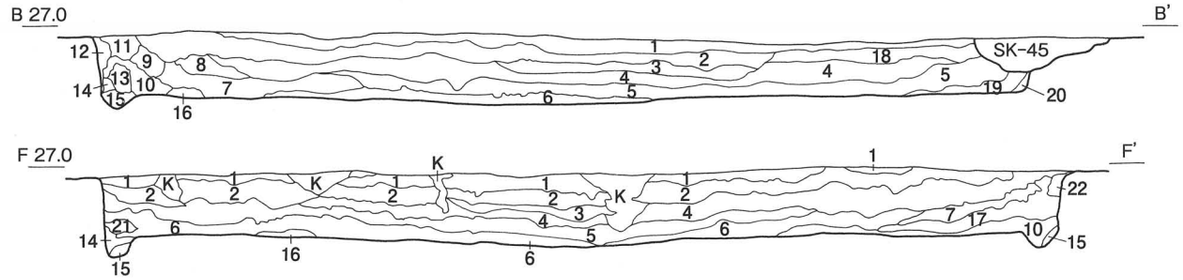
土製品としては50・51の土玉がある。

玉作関連遺物出土状況　玉作関連遺物の出土位置を図化したものが第98図である。住居内の入り口ピットや貯蔵穴が見られる床面南東側を中心に出土していることが分かる。

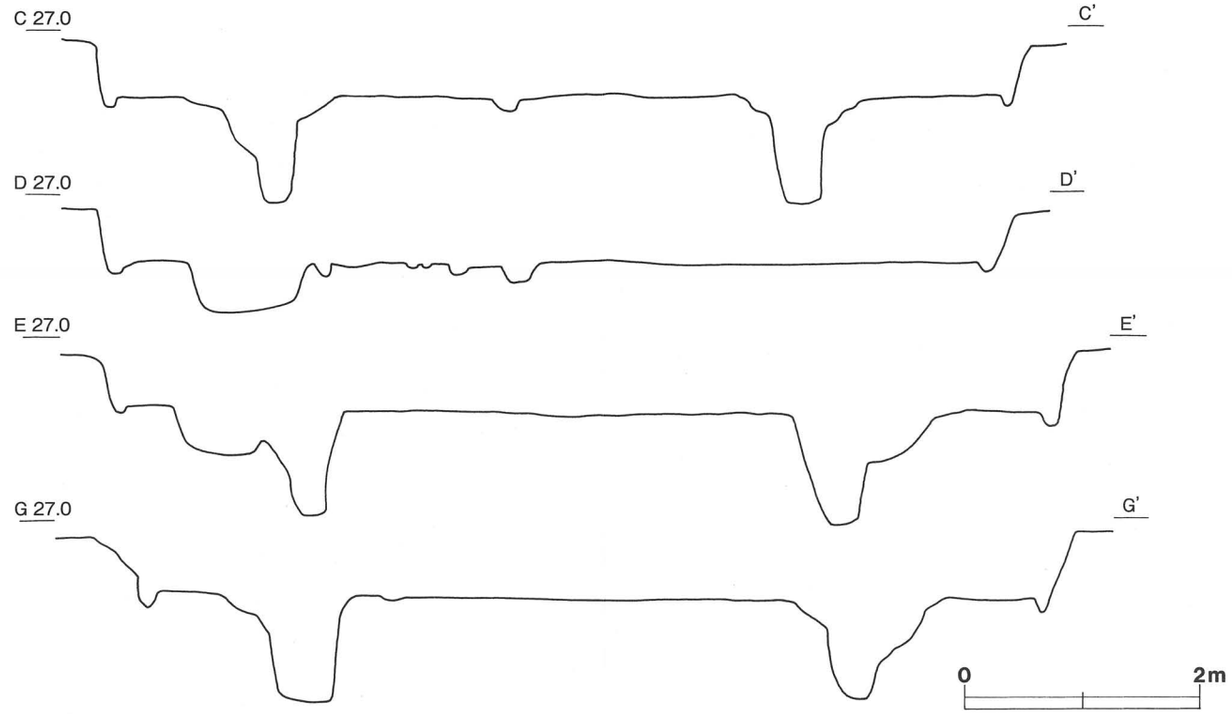
今回の調査に当たっては、床面に25㎝方眼（約1000区画）を設定し、各方眼からサンプルした土を水洗い選別し、玉作関連の微細な遺物の採集に努めた（第２章第３節２遺構調査参照）。その結果は、玉素材としてメノウ・滑石・緑色凝灰岩・琥珀の微細剥片などが出土しており、これらが玉製品の材料として用いられていたことが分かる。以下は微細な玉作関連遺物の種別ごとにその出土状況の特徴について述る。メノウについては、間仕切り溝の西側の入り口ピットから貯蔵穴にかけ濃密に分布が見られる。１区画での最高重量は4.9ｇであり、細かく見れば貯蔵穴周辺よりも入り口ピット周辺の方がやや多い傾向が見られる。その他の床面ではほとんど出土していない。住居内施設ごとのメノウの出土状況は、最も多く出土したのが貯蔵穴で24.7ｇであった。琥珀は間仕切り溝西側と床面東側に散発的に出土している様子が窺え、ほとんどの採集区は0.1ｇ以下であったが北西の採集区のみ0.2ｇ出土した。住居内施設ごとの琥珀の出土状況は、最も多く出土したのはやはり貯蔵穴でおよそ0.2ｇであった。緑色凝灰岩は入り口ピット周辺の限定された区画のみで確認され、最も多い区画で0.3ｇの出土であり、ほかは0.1ｇ未満であった。滑石は２ケ所の採集区のみから出土しており、いずれも0.2ｇであった。住居内施設ごとの滑石の出土状況で、最も多く出土したのはやはり貯蔵穴でおよそ0.2ｇであった。

これらの玉材料と言える微細資料以外に、玉作関連遺物として玉作用砥石の材料である片岩の

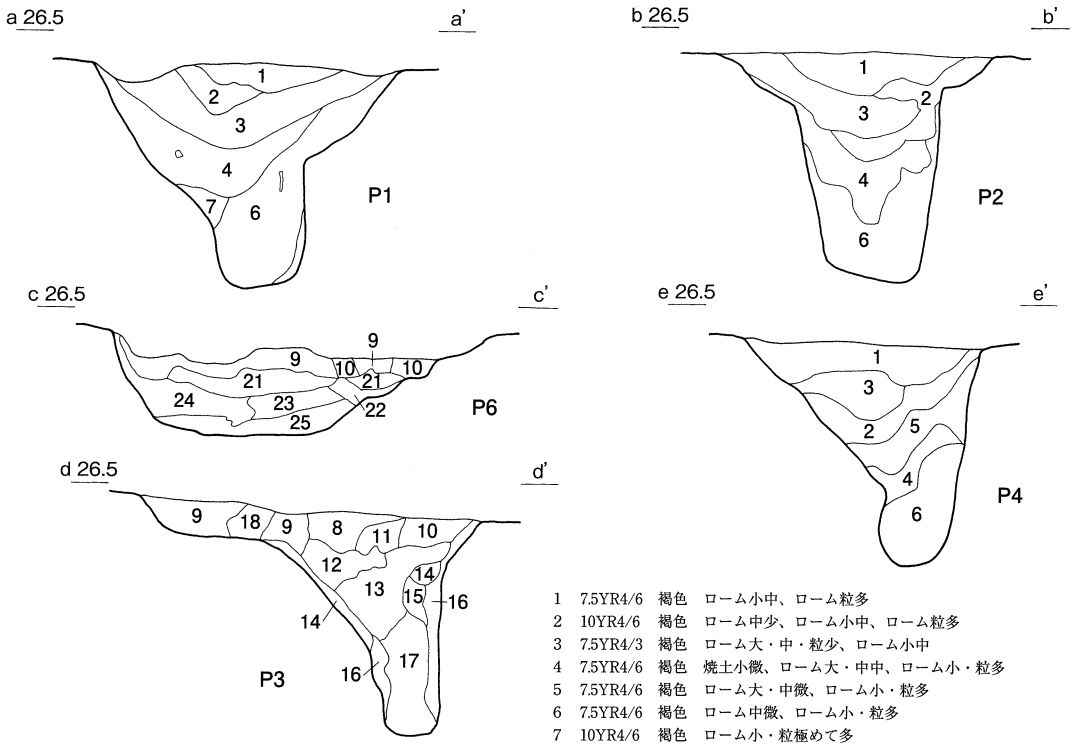




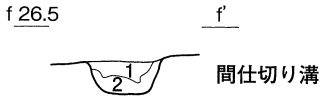
1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中・小・粒少、黒色土ブロック大・中中
2　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒微、ローム中少、ローム小・粒微
3　7.5YR3/3　暗褐色
4　7.5YR3/3　暗褐色　焼土小・粒微、ローム小中、ローム粒少
5　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・ローム大微、ローム小中、ローム粒少
6　7.5YR4/6　褐色　ローム大微、ローム中少、ローム小・粒中
7　7.5YR4/4　褐色　ローム大・中・小・粒少　ロームブロック多
8　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒・ローム中微、ローム小中
9　7.5YR4/4　褐色　ローム中・小微、ローム粒中
10　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒少
11　7.5YR3/3　暗褐色
12　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大・小・粒少
13　7.5YR3/2　暗褐色　ローム中・粒少
14　5YR3/4　暗赤褐色
15　7.5YR4/6　褐色　ローム小少、ローム粒中
16　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中・小少、ローム粒中
17　7.5YR4/4　褐色　ローム中・小少
18　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中少、ローム小中
19　7.5YR4/6　褐色　焼土中・炭化物・炭化粒・ローム小少、焼土小・ローム粒中、焼土粒多
20　7.5YR4/6　褐色　炭化物・ローム小少、ローム粒中
21　7.5YR4/6　褐色　ローム中少、ローム小・粒中
22　7.5YR4/6　褐色　ソフトロームブロック



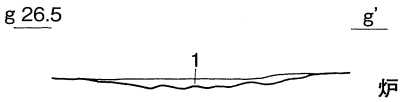
第95図　第６号住居跡



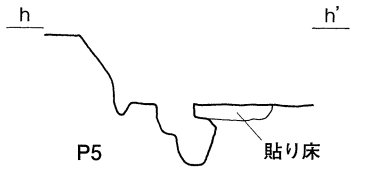
1 7.5YR4/6 褐色 ローム小中、ローム粒多
2 10YR4/6 褐色 ローム中少、ローム小中、ローム粒多
3 7.5YR4/3 褐色 ローム大・中・粒少、ローム小中
4 7.5YR4/6 褐色 焼土小微、ローム大・中中、ローム小・粒多
5 7.5YR4/6 褐色 ローム大・中微、ローム小・粒多
6 7.5YR4/6 褐色 ローム中微、ローム小・粒多
7 10YR4/6 褐色 ローム小・粒極めて多
8 7.5YR4/4 褐色 焼土小・炭化粒・ローム大微、ローム粒多
9 7.5YR4/4 褐色 焼土小・ローム大微、ローム小・粒中
10 7.5YR4/4 褐色 焼土小微、ローム中・粒中
11 7.5YR4/6 褐色 焼土小微、ローム小中、ローム粒極めて多
12 7.5YR4/6 褐色 ローム小多、ローム粒極めて多
13 7.5YR4/4 褐色 ローム小中、ローム粒少
14 7.5YR4/6 褐色 ローム粒極めて多、暗褐色土ブロック
15 7.5YR4/6 褐色 ローム粒極めて多
16 10YR4/6 褐色 ローム大微、ローム中小、ローム小中、ローム極めて多、ソフトローム多
17 7.5YR4/6 褐色 ローム粒極めて多、暗褐色土少
18 7.5YR4/4 褐色 ローム小少、黒色土小少
19 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大・中中、ローム小少
20 7.5YR4/4 褐色
21 7.5YR4/3 褐色 焼土小微、ローム小中、ローム粒多
22 7.5YR4/4 褐色 ローム粒多
23 7.5YR4/6 褐色 ローム大中、中少、粒多
24 7.5YR4/6 褐色 ローム大微、中少、粒中、黒色土ブロック微
25 7.5YR4/6 褐色



1 7.5YR4/4 褐色 ローム中微、ローム小少、ローム粒中
2 7.5YR4/4 褐色 ローム大少、ローム粒中



1 5YR3/6 暗赤褐色 焼土大・中・ローム粒少、焼土小・粒中、炭化粒微、小砂利多



第96図 第6号住居跡柱穴等土層

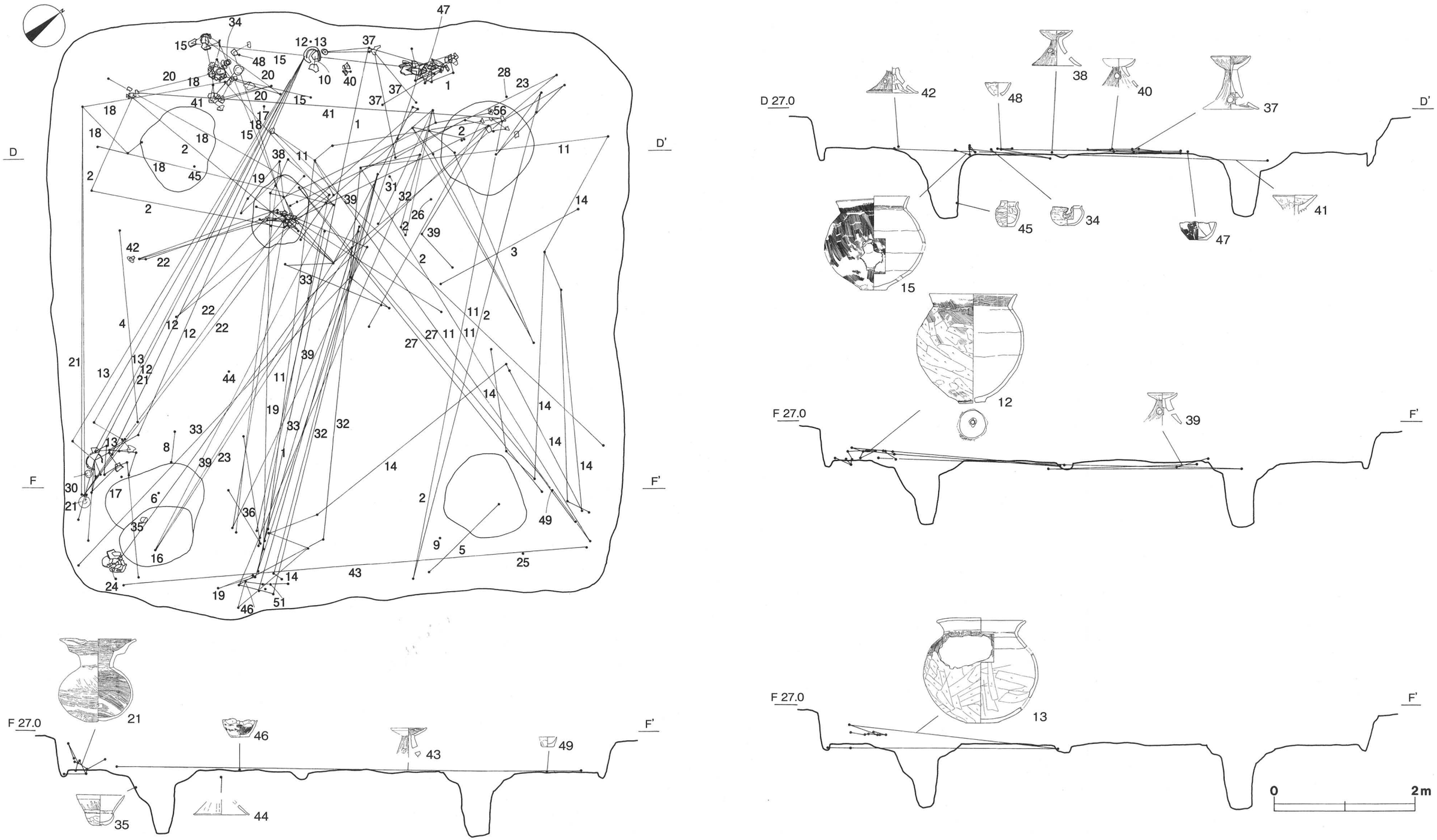
微細剥片が多数出土している。この出土状況はメノウの微細剥片分布状況に類似し、間仕切り溝の西から貯蔵穴の間に集中している。1区画での最高重量は15.1gで入り口ピット周辺部であり、貯蔵穴周辺は比較的少ない。住居跡内施設ごとの出土状況では、貯蔵穴から20.1g出土しているが、その他のピットではほとんどが1.0g未満である。

このほか玉作関連遺物とは言えないが、微細な資料で小円礫や小土器片が出土しており、小円礫（砂利）については炉跡や入り口付近からの出土が目立った。住居跡内施設ごとの出土状況では炉跡から57.9g出土し、意図的に持ち込まれたものと考えられる。小土器片については入り口付近にも多く見られるものの、住居内全体に分布している様子が窺える。

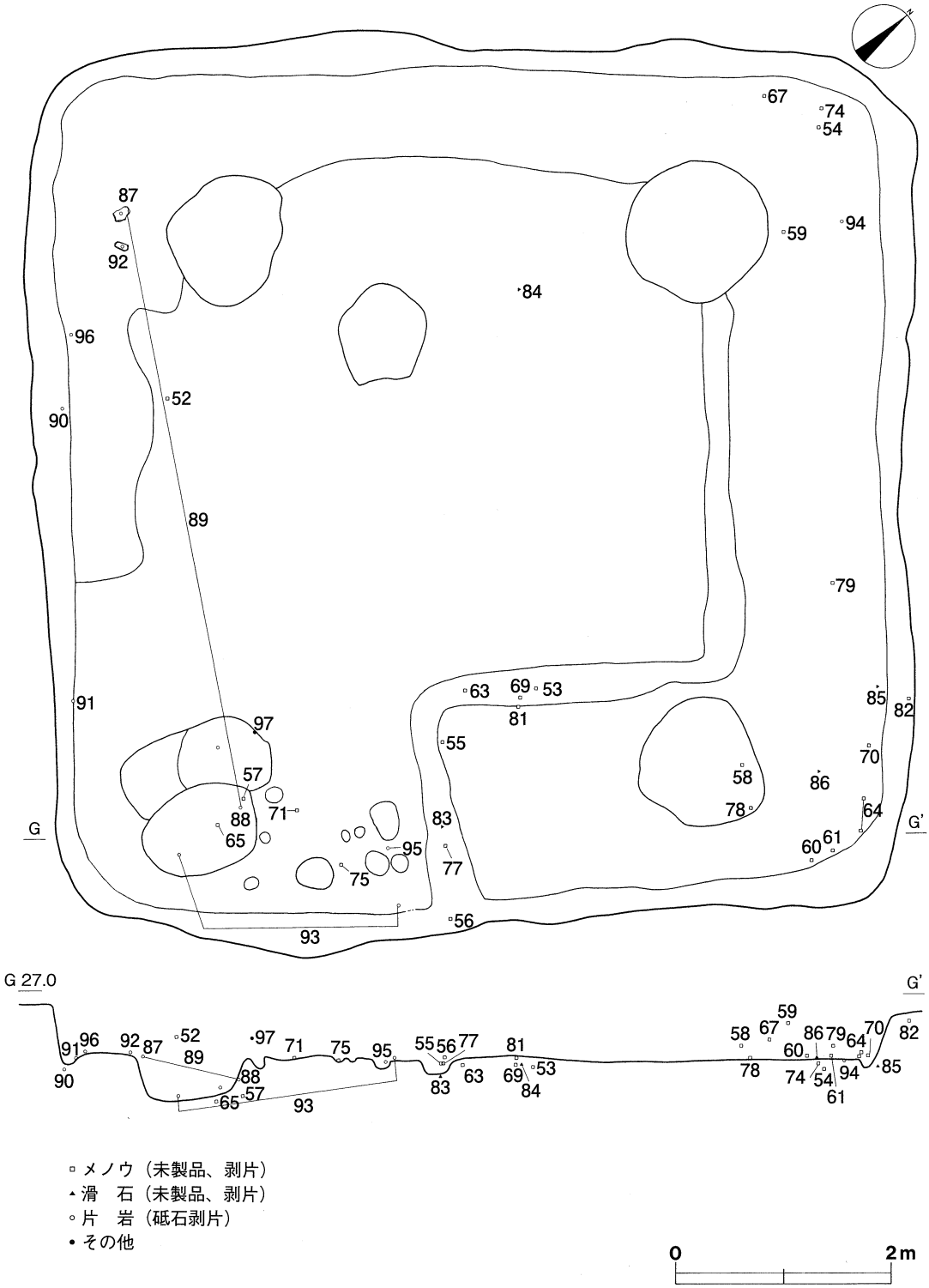
本住居跡での玉作では、特にメノウ材の使用頻度が高く、滑石や緑色凝灰岩、琥珀の出土は極僅かであった。このことから、メノウ製勾玉製作を主に行なっていた様子が窺われる。また、住居内における玉作作業の中心的な場所は、玉作関連遺物の出土状況から入り口部分から貯蔵穴周辺が想定される。また、本住居跡出土の玉作関連の砥石の中には、第4号住居跡出土のものと接合したもの（89・96）があり、同住居跡との関連が窺われる。これらの砥石の接合状況は、砥石が使用時の折損などで形を変えながらも用いられ続けた様子が窺える。

玉作関連遺物　玉作関連遺物には、玉の未製品や材料、そして玉作の道具が出土している。材料として把握されるのはメノウ・滑石・緑色凝灰岩・琥珀である。玉未製品を工程ごとに分類すれば、メノウ製としては、採集原石（52）、荒割工程（53）、形割工程（54～58）、側面打裂工程（59～65）（59・61は形割工程とすることも可能）、研磨工程（66～73・75・76）、穿孔工程（74）のものが出土している。

52の採集原石の形状は一様に厚さ1㎝程度の平たい板状のもので、表面には荒れた自然面が見られる。側面の大部分には剥離面風の自然面が見られ、人為的な剥離面とは異なり滑らかで光沢を持つ。53は板状原石を長方形の形態を意識して打割している。上側面と左側面が明確な剥離面となっている。54～56・58は直方体を意識して打割され、表面－側面の角度が直角に近い。56の上・右側面には明確な剥離面が見られるが、その他は自然面と思われる。54・55・57・58の裏面に自然面が残り、表面は結晶質面となる。55と58は同一母岩と思われる。59～65は側面打裂工程のものと思われ、その多くが半円形やC字状の形態を意識して加工されている。59・61は半円形を意識した形態で、59の右側面は直線的に打割され、表面と側面の角度も直角に近い。60も59同様の直線的な打割が見られ、その他の側面等に細かな押圧剥離が施されている。その結果、表面の自然面が少なくなり、勾玉の腹に相当する分部はより押圧剥離が集中する。製作上の安定性確保のためか裏面は全体が自然面のままである。63はC字状の形態を意識して剥離がなされ、表面には自然面や結晶質面が残らない。上端が欠損したものと思われる。64は扁平なC字状を呈し、勾玉の形態を明瞭に理解することができる。腹部分の抉りを入れる作業で欠損してしまったものであろう。やはり表面には自然面や結晶質面が残らず、裏面には押圧剥離による自然面の切

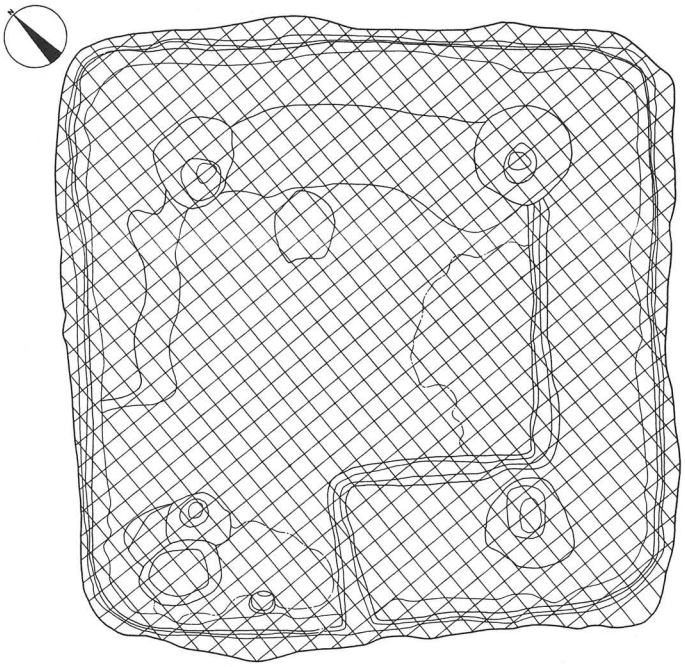


第97図　第６号住居跡遺物出土状況（１）

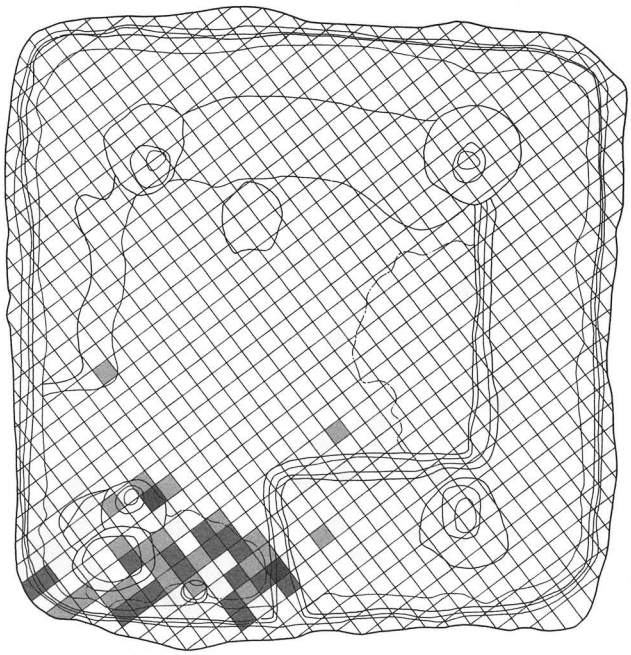


第98図　第６住居跡遺物出土状況（２）

土層サンプル採集区



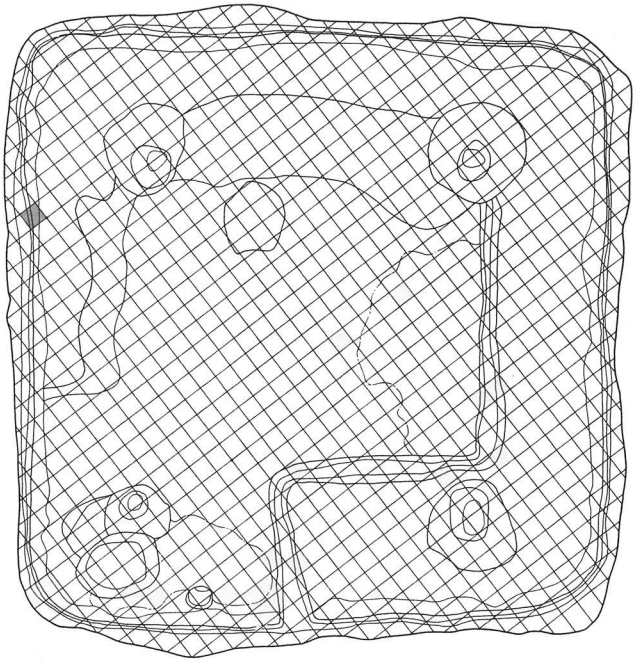
メノウ材出土状況



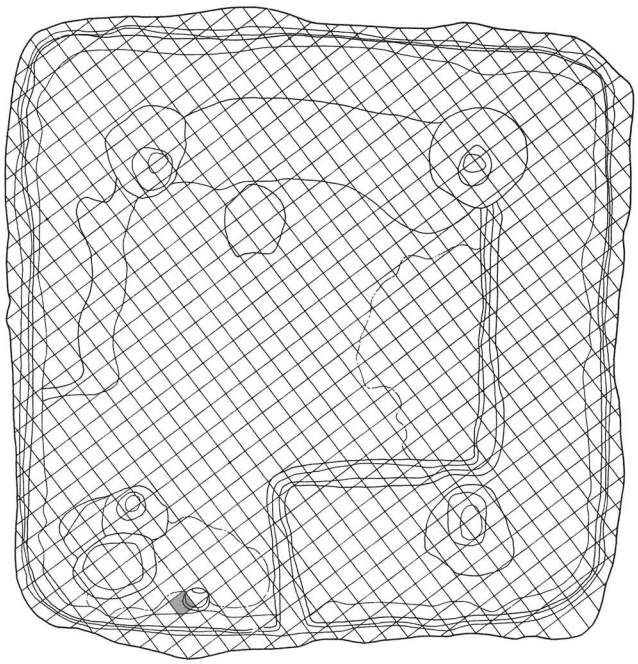
■ 4.0g 以上
■ 1.0g 以上 4.0g 未満
■ 0.2g 以上 1.0g 未満
□ 0.2g 未満

0　2m

第99図　第６号住居跡遺物出土状況（３）



琥珀材出土状況

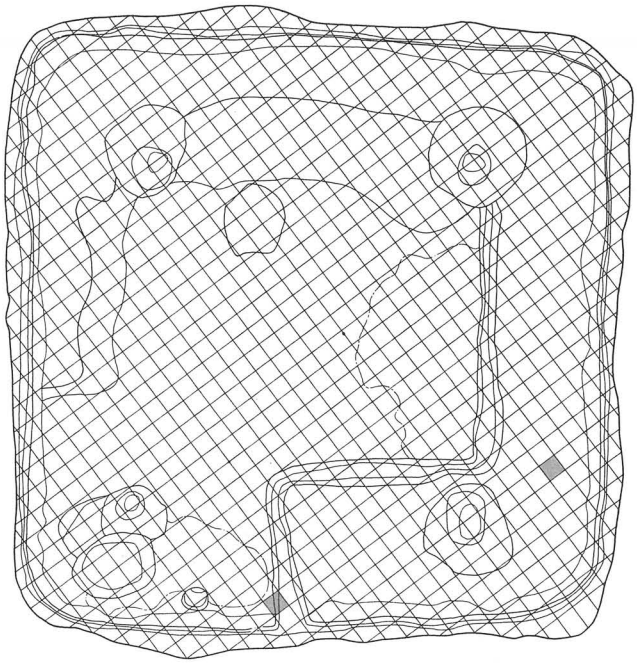


緑色凝灰岩材出土状況

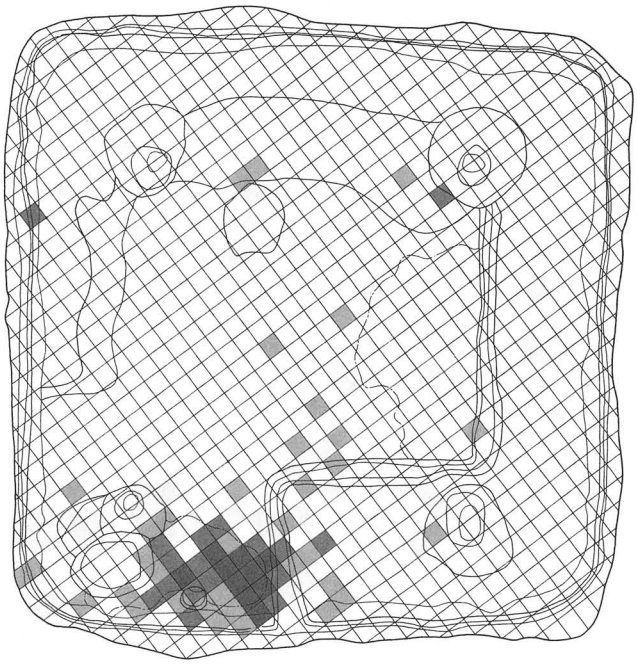
■ 4.0g 以上
■ 1.0g 以上 4.0g 未満
■ 0.2g 以上 1.0g 未満
□ 0.2g 未満

0　2m

第100図　第６号住居跡遺物出土状況（４）



滑石材出土状況

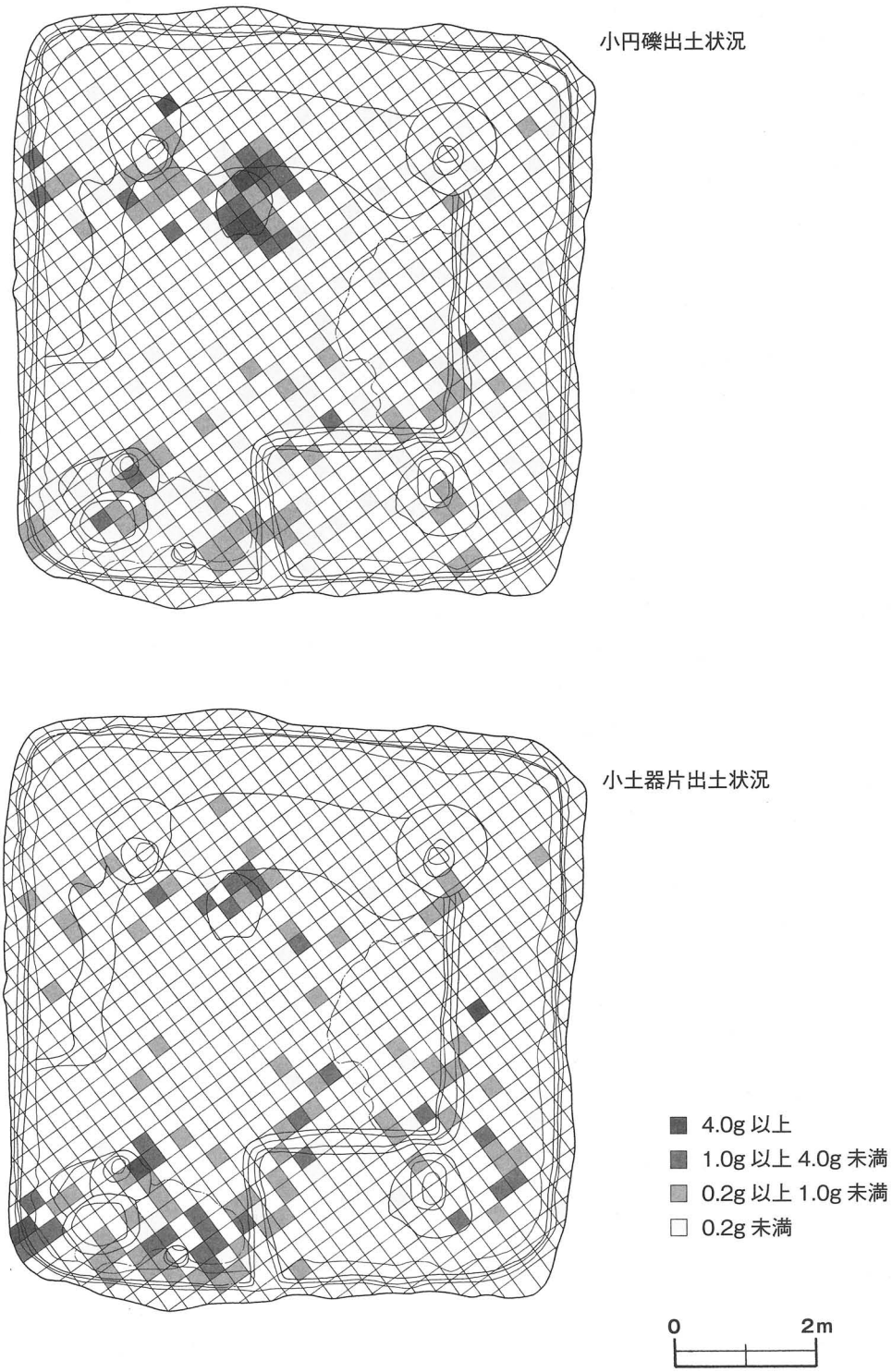


片岩材出土状況

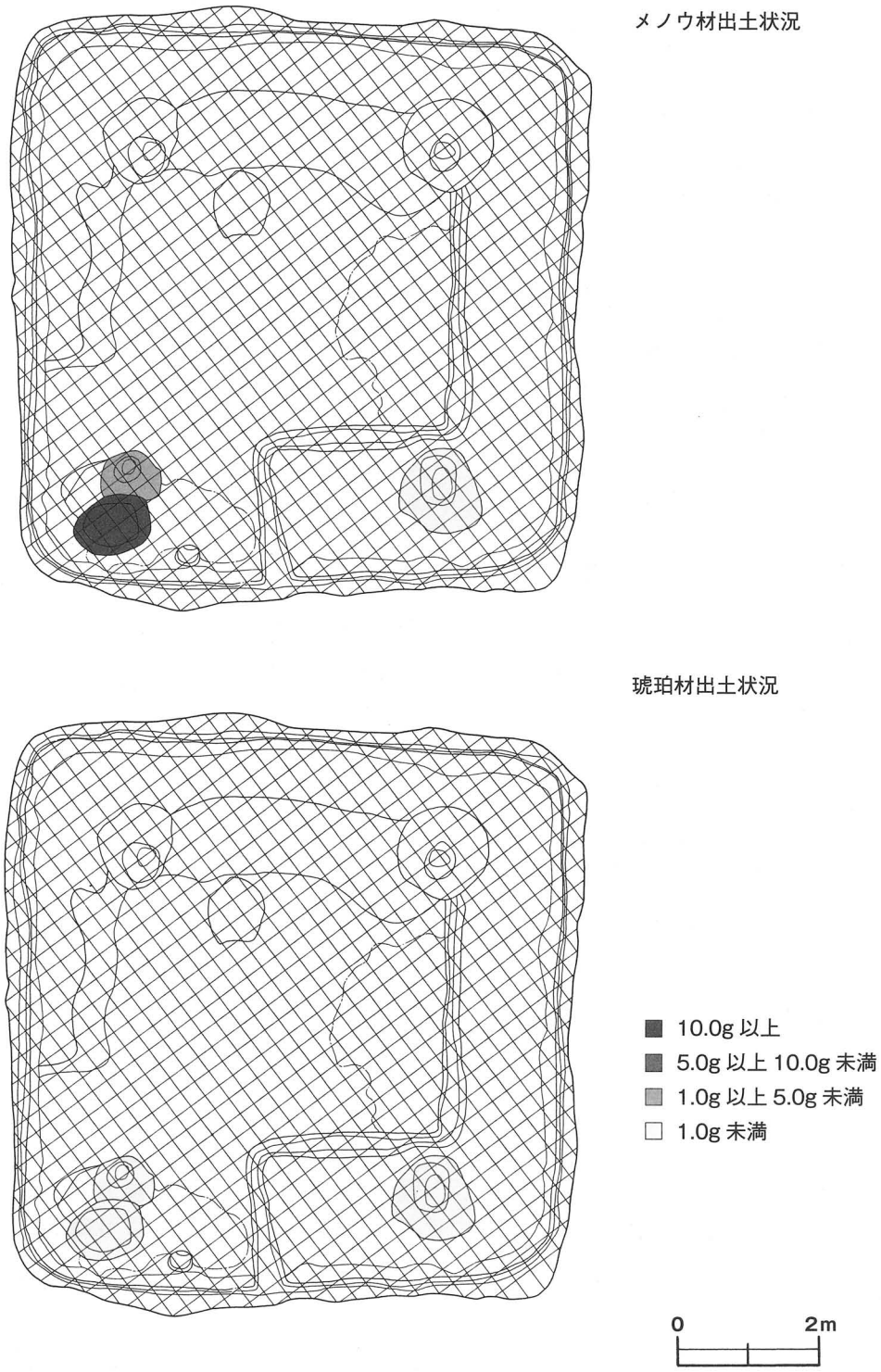
■ 4.0g 以上
■ 1.0g 以上 4.0g 未満
■ 0.2g 以上 1.0g 未満
□ 0.2g 未満

0　2m

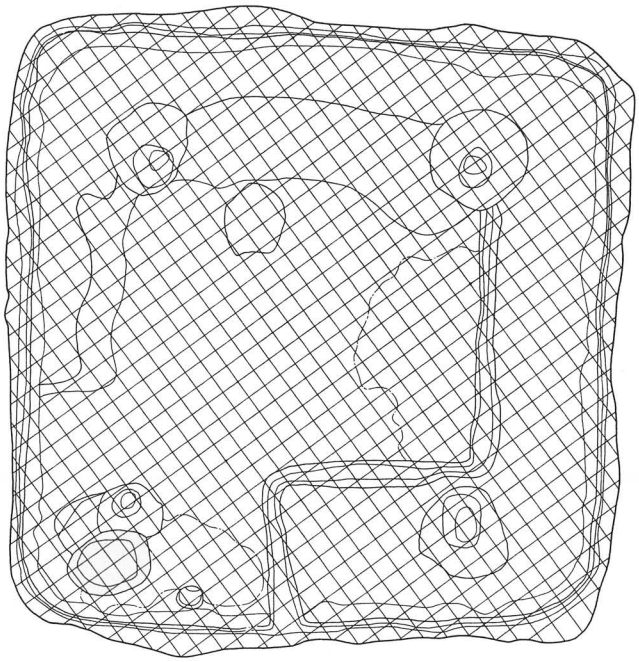
第101図　第６号住居跡遺物出土状況（５）



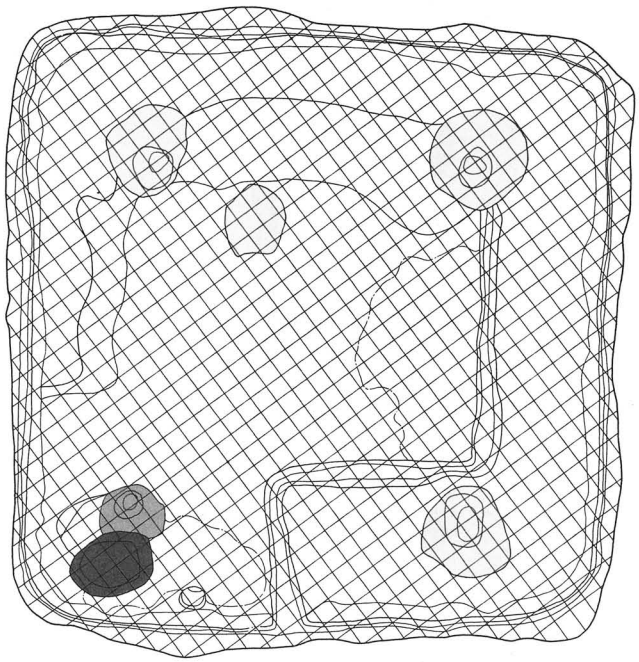
第102図　第６号住居跡遺物出土状況（６）



第103図　第６号住居跡遺物出土状況（７）



滑石材出土状況

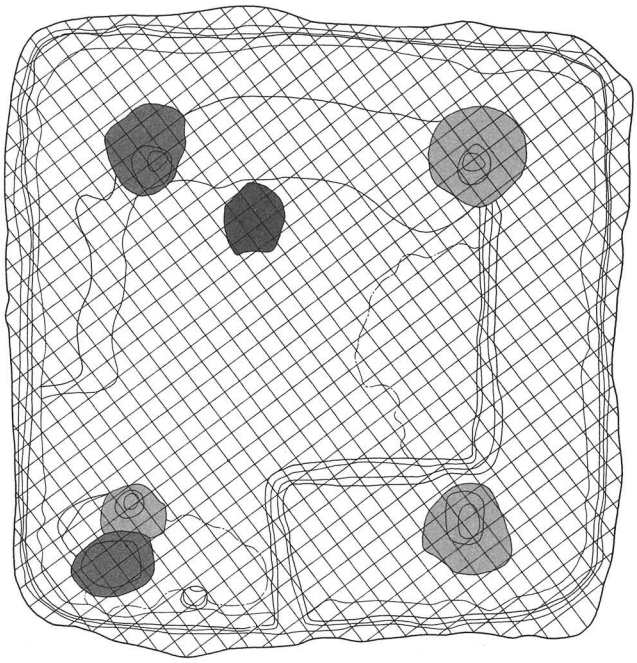


片岩材出土状況

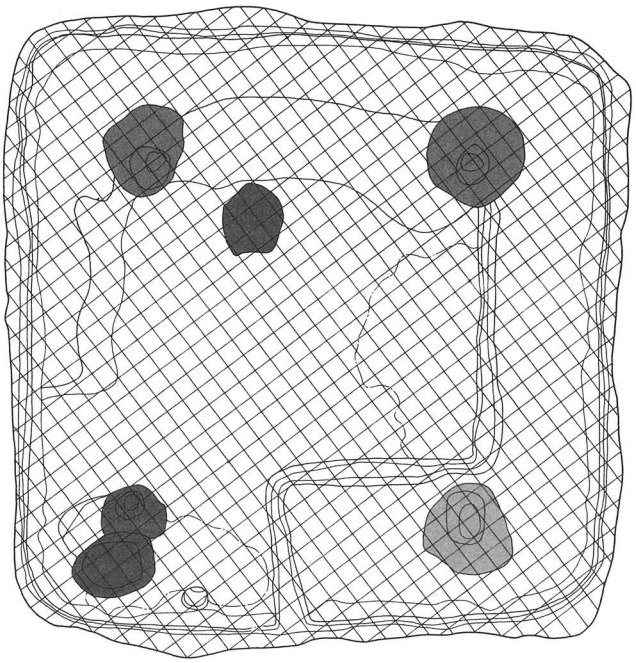
■ 10.0g 以上
■ 5.0g 以上 10.0g 未満
■ 1.0g 以上 5.0g 未満
□ 1.0g 未満

0　2m

第104図　第６号住居跡遺物出土状況（８）



小円礫出土状況



小土器片出土状況

■ 10.0g 以上
■ 5.0g 以上 10.0g 未満
■ 1.0g 以上 5.0g 未満
□ 1.0g 未満

0　2m

第105図　第６号住居跡遺物出土状況（９）

除がなされ始めている。65は裏面に自然面が残り、側面の一方が直線的で他方が曲線的となる。表面には上下端からの大きな剥離や細かな剥離が見られ、前者により破損したものと思われる。曲線的な側面の一部に研磨痕が残る。66～73・75・76は研磨工程のもので、およそ半円形またはC字状の形態のものである。66は表面の押圧剥離がなされた後に研磨を行い、裏面は一部研磨面が見られるが大部分は自然面である。腹部には表裏面方向から抉りを意識した押圧剥離が集中している。67・68は表裏両方又は表裏一方と側面の一部にも研磨痕が残る。67は右側面に剥離が見られ、68は上端の剥離で欠損したものと思われる。69・70には表裏と背部に研磨痕が残り（69の腹部側面の一部も研磨）、70の腹部は押圧剥離による抉りが始められ、69の腹部は抉りが進んでいる。71は表面にのみ研磨痕が残り、右側面で欠損している。72も表裏面と背部に研磨がなされ、腹部の抉り作業途中に折損したものであろう。73は仕上げ研磨工程のもので、穿孔がなされた後の腹部の研磨作業中に折損したものであろう。本資料から窺える勾玉の形態は、「C」字状というより「コ」字状に近い。74は穿孔途上で薄く剥離したものと考えられ、穿孔の口径は73に比べ細くて一定であるのが特徴的である。75・76も仕上げ研磨工程のもので、腹部の研磨がなされた折損品である。76の断面形は角が取れ丸みを持つ。このほか、77～82はメノウ材の剥片である。

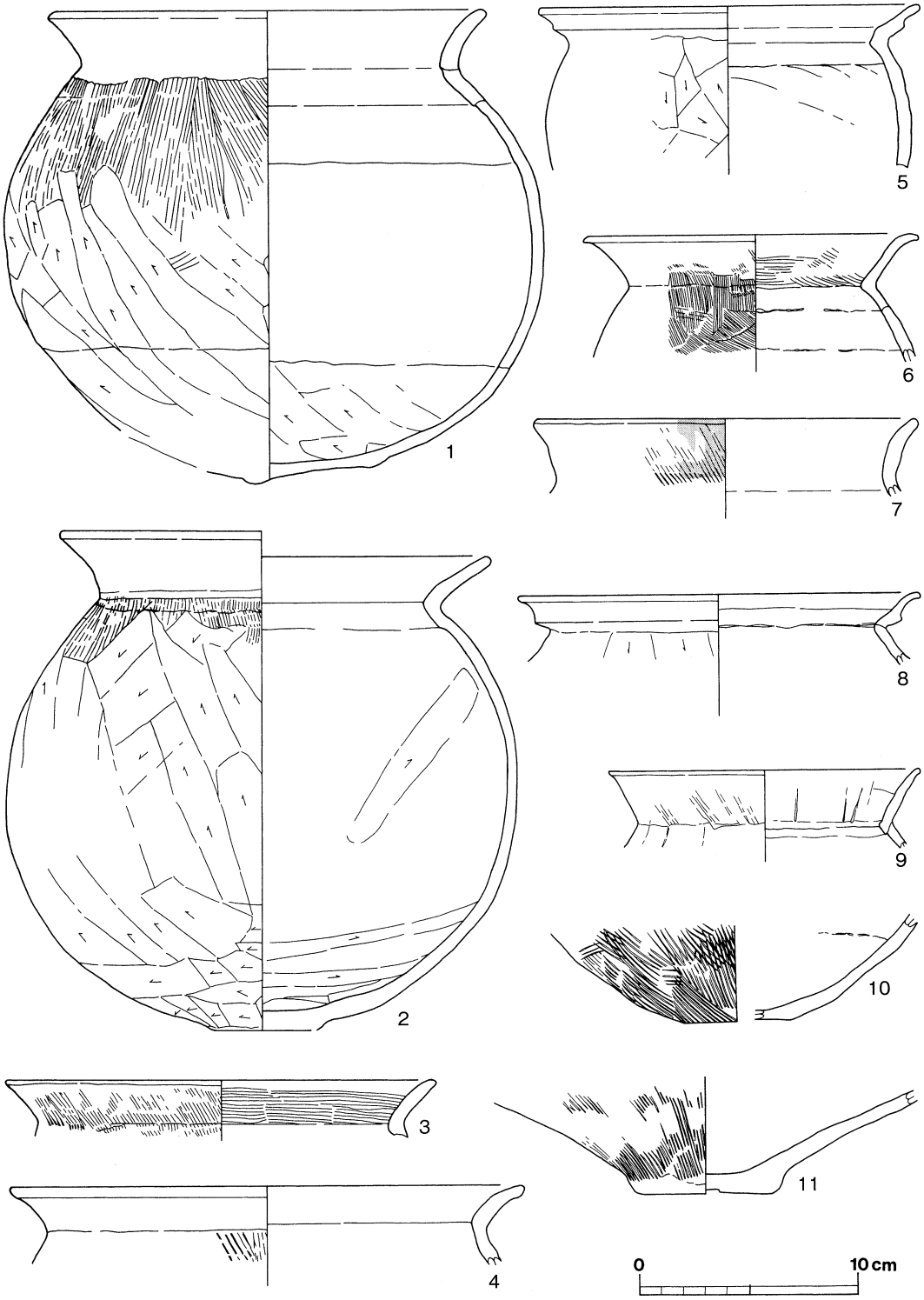
滑石製玉類では研磨工程（83·84）、穿孔工程（85）、完成品（86）が出土している。

83・84が勾玉の研磨工程のもので、小型のものである。欠損品ではないが製作を中止し廃棄されたものである。85は管玉の穿孔工程のもので、穿孔途中で作業をやめてしまったものである。86は管玉の完成品であるが、未製品との形態差が大きく、一連の玉作作業で製作されたものかは不明である。

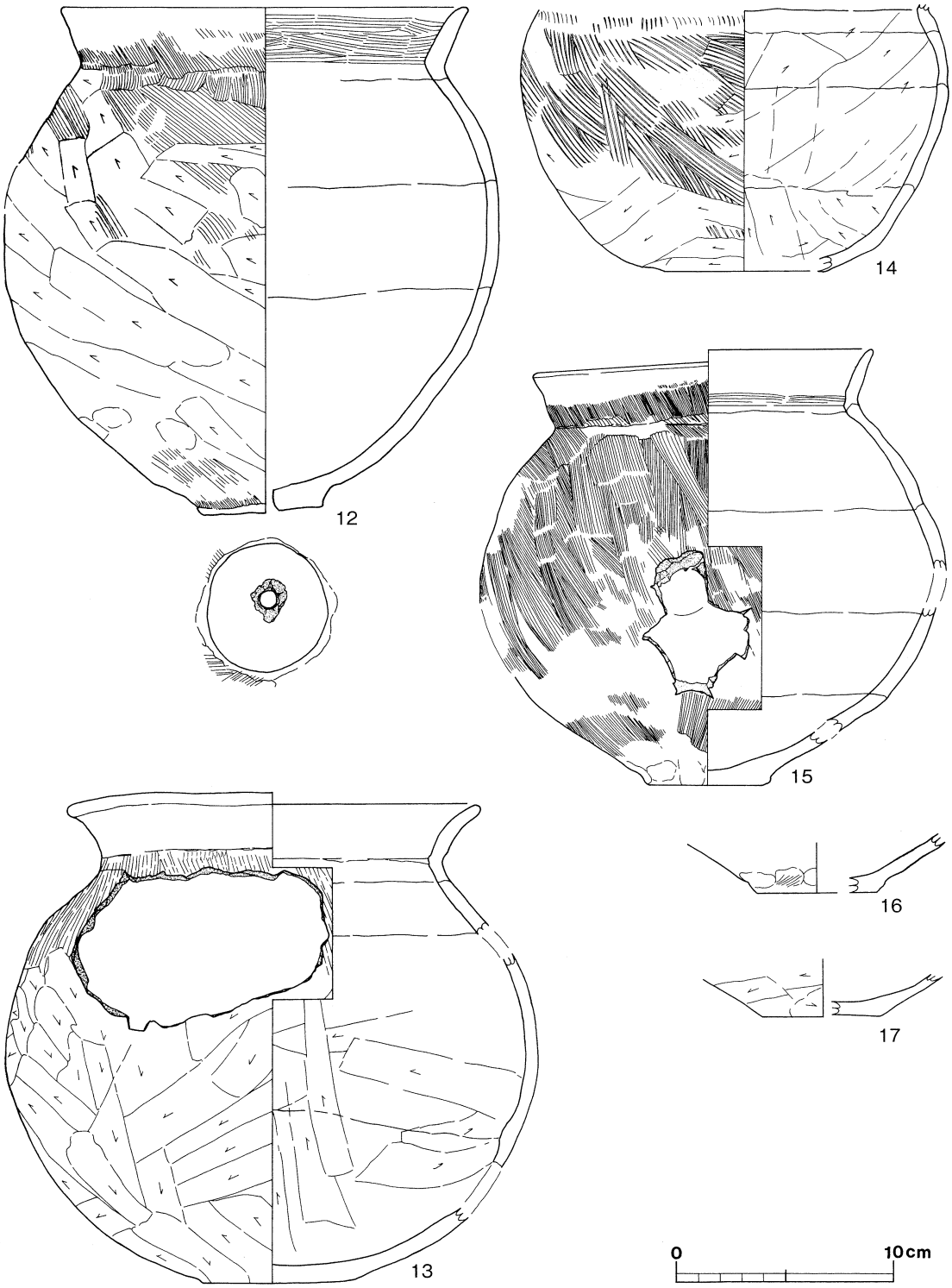
このほか、水洗い選別で緑色凝灰岩や琥珀の微細剥片が採集されている。これらの石材を用いて製作された玉類がいかなるものかは明確にし得ないが、およそ緑色凝灰岩製管玉と琥珀製勾玉が想定される。

玉作関連道具の出土品としては、87～96の片岩製の砥石が出土し、92・93は内磨砥石、95などは平砥石、87・90・91・94・96は内磨兼平砥石といえる。意外と砥石は内磨き・平砥石と用途を限定せず用いている様子が窺える。97は石英製の不明石器である。片岩製の砥石の石材は大きく２種類に分けられ、やや青みがかる色調の87・88・91～93・95・96とやや黄みがかり砂質感のある90・94である。

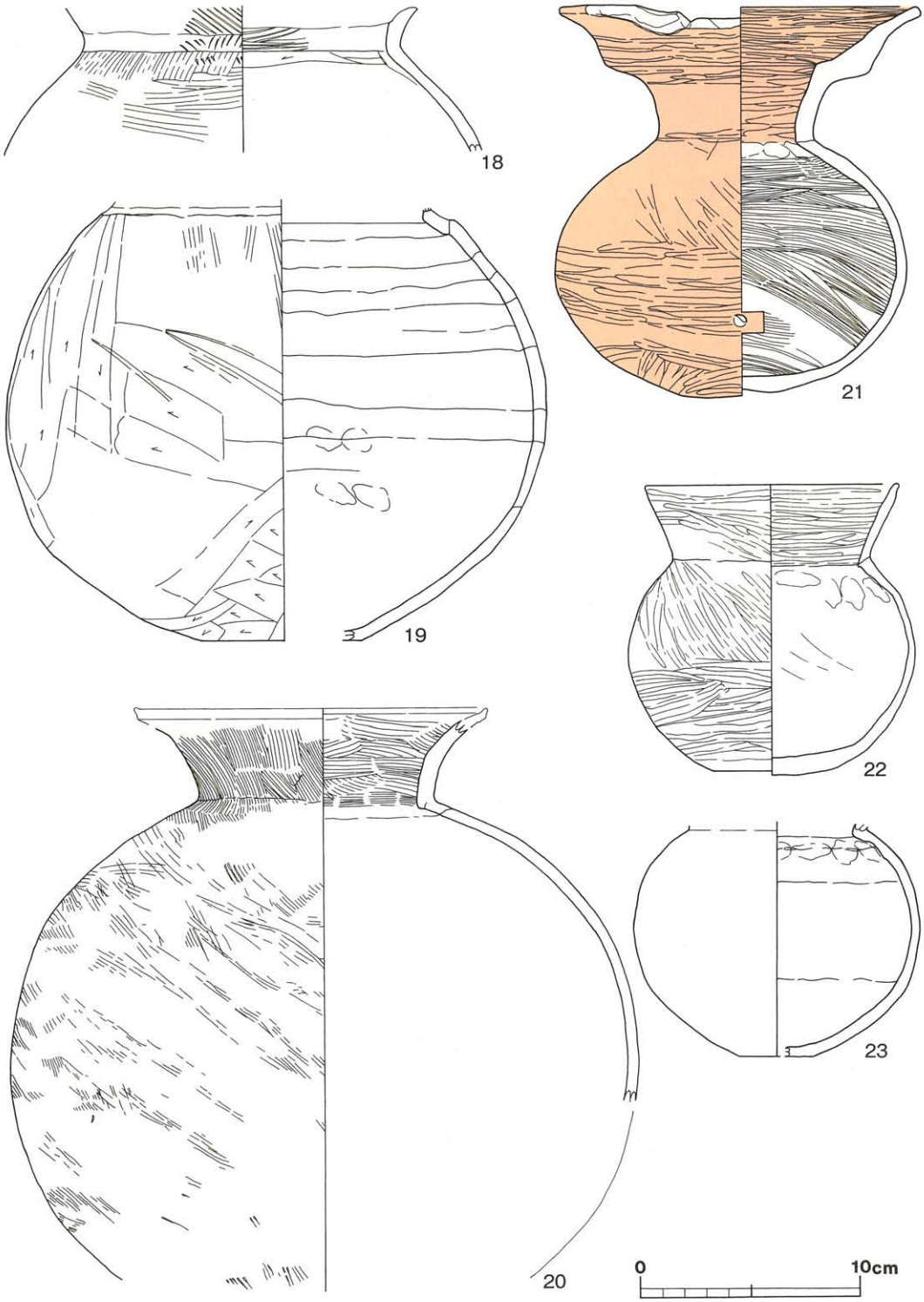
所　見　本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。名称としては住居跡としているが、その中で行われていた行為を考えれば、玉作工房と位置付けられよう。玉の種類としてメノウ製勾玉を中心に滑石製の勾玉・管玉なども製作されたものと考えられる。そして、メノウ製勾玉の製作工程の中でも側面打裂工程や研磨工程の資料が目立って出土し、道具類については敲き石などが見られず、砥石のみの出土であることが



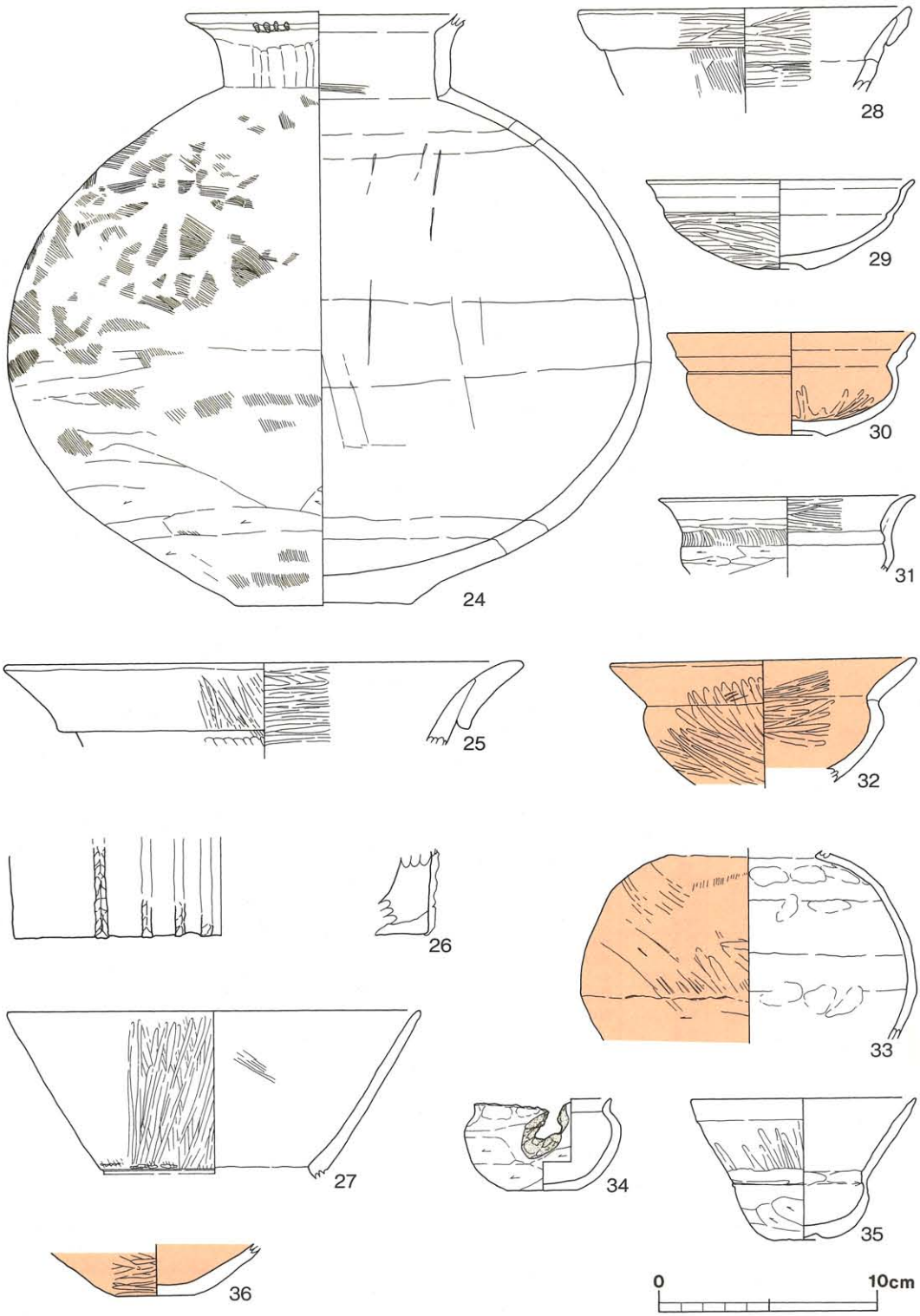
第106図　第６号住居跡出土遺物（１）



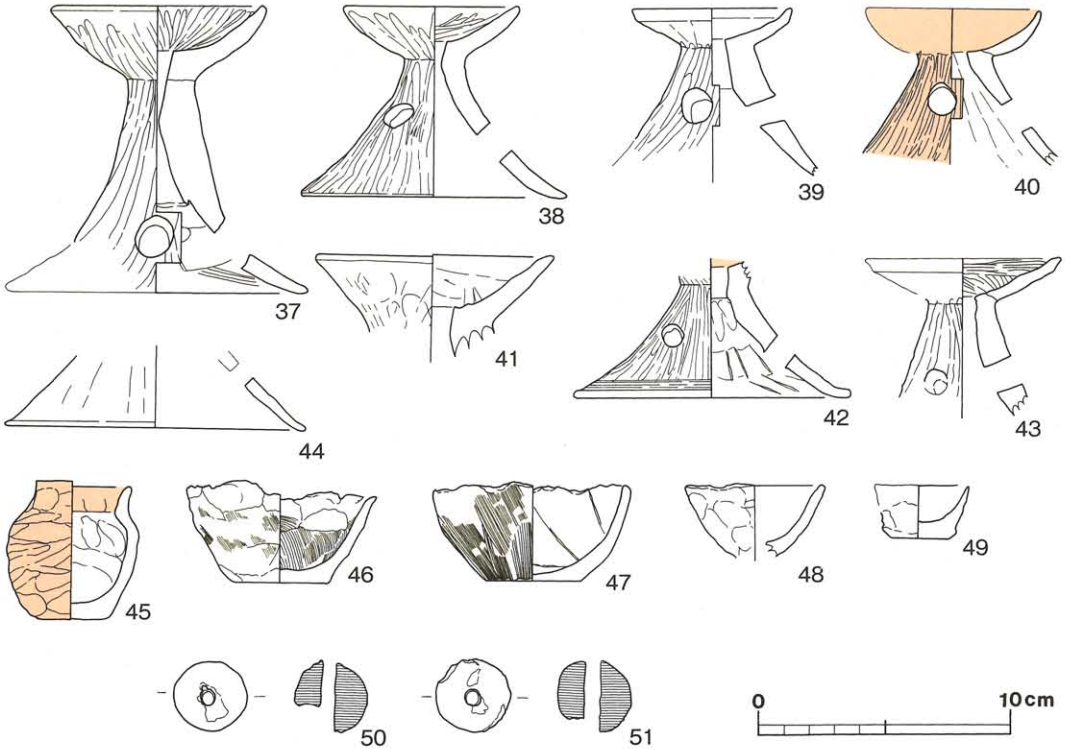
第107図　第６号住居跡出土遺物（２）



第108図　第６号住居跡出土遺物（３）



第109図　第６号住居跡出土遺物（４）



第110図　第６号住居跡出土遺物（５）

第６号住居跡出土遺物

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：20.0 B：[5.0] C：21.6	覆土 90% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙 褐灰	上下にやや潰れた球形の胴部で頸部が緩く括れ、口縁部がやや外反。口唇端部は丸い。胴上位はハケ調整、下位はヘラ削り。口縁部ナデ。	№63 胴部煤付着。
2	甕 土師器	A：[19.7] B：4.8 C：21.8	覆土 70% やや不良	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙	球形の胴部で頸部が括れ、口縁部が外傾する。口唇端部は丸い。胴上位はハケ調整の後ナデ、下位・底面はヘラ削り。口縁部はナデ。	№65 被熱
3	甕 土師器	A：[19.6] C：(2.6)	覆土 30% 普通	長石○、雲母△	褐灰 にぶい赤褐	甕の口縁部破片。括れた頸部から口縁部が外傾し、口唇部がやや外反する。内外面共にハケ調整。	№79
4	甕 土師器	A：[23.6] C：(3.5)	覆土 10% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙 灰褐	頸部が緩く括れ口縁部が外反。口縁端部は丸い。内外面ナデ。	№82 外面煤付着
5	甕 土師器	A：[17.5] C：(7.4)	覆土下位 30% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙	丸い胴部から頸部が括れ、口縁部は中程に段を持って端部が延びる。胴部外面はハケ調整とヘラ削り。	№74
6	甕 土師器	A：[14.8] C：(5.8)	覆土下位 30% 良好	長石○、石英○	にぶい橙	頸部が屈曲し口縁部が外傾する。口唇部はやや外反する。胴部外面ハケ調整。口縁部外面ナデ。胴部内面に輪積み痕あり。	№78
7	甕 土師器	A：[17.6] C：(3.3)	覆土 20% 普通	雲母△、乳白色粒	にぶい橙 橙	やや外反する口縁部破片。頸部にハケ調整、口縁部はナデ。	№81 炭化物付着
8	甕 土師器	A：[18.4] C：(3.0)	覆土 20% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	褐灰 にぶい黄橙	甕の口縁部破片。頸部が屈曲し口縁部は中程に段を持って端部が外反する。Ｓ字状口縁を意識したものか。器厚は薄く、作りはシャープ。	№75
9	甕 土師器	A：[14.2] C：(3.5)	覆土 30% 良好	長石○、石英○、雲母△	褐灰 にぶい赤褐	甕の口縁部破片。頸部で屈曲し、口縁部が外傾する。口唇部はやや外反する。内外面共にナデ。頸部内面に輪積痕あり。被熱を受ける。	№80 SI-3土器と接合

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼　成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
10	甕 土師器	B：[4.8] C：(4.3)	覆土下位 30% 普通	長石○、石英△、雲母△	褐灰 にぶい黄褐	平底の底部から緩く開く。雑なハケ調整が外面と底面に見られ、内面はナデられる。	№77 炭化物付着
11	甕 土師器	B：5.8 C：(4.2)	床面 80 % 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい褐 にぶい黄橙	底部は厚手で中央がやや凹み、胴部へ大きく開く。外面にはハケ調整が見られ、内面は剥離し荒れている。	№72
12	甕 土師器	A：18.8 B：5.7 C：23.5	床面 80% 普通	長石◎、石英◎	にぶい黄橙 にぶい橙	球形の胴部から頸部が緩く括れ、口縁部が外傾し口唇部はやや外反。外面胴部中位を中心にヘラ削り。胴上位及び口縁部内面はハケ調整。	№64 底面に焼成後の穿孔
13	甕 土師器	A：19.1 B：7.0 C：22.1	床面 95 % 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙	上下にやや潰れた球形の胴部で、頸部が緩く括れ口縁部がやや外反。口唇端部は丸い。胴上位はハケ調整、下位はヘラ削り。口縁部ナデ。	№66　胴部焼成後穿孔。外面煤付着。
14	甕 土師器	B：[7.4] C：(12.0)	覆土 50% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい褐	口径が器高より大きな甕で、頸部が括れる。底径もほかの甕に比べ大きい。外面にはハケ調整やヘラ削り。内面にもヘラ削りが目立つ。	№68 SI-3土器と接合 炭化物付着
15	甕 土師器	A：[15.7] B：4.8 C：20.1	覆土下位 70 % 普通	砂粒△、雲母△、白色針状物質	にぶい赤褐	胴部中位に最大径を持つ。頸部は緩く括れ、口縁部は外傾する。胴部下半は被熱赤化し器壁が荒れる。胴部上半から頸部はハケ調整。	№69 胴部焼成後穿孔か
16	甕 土師器	B：[5.5] C：(2.3)	貯蔵穴 40 % 普通	長石△、石英△	灰褐 橙	甕の底部破片。内外面ナデ。	№83
17	甕 土師器	B：[5.6] C：(1.8)	覆土 25% 普通	長石△、石英◎	にぶい赤褐 褐灰	甕の底部破片。ヘラ削りされた平底の底部から胴部が外傾する。胴部もヘラ削り。内面はナデ。	№73
18	甕 土師器	C：(6.6)	覆土 25% 良好	長石△、石英△、雲母△、砂粒	にぶい赤褐	頸部が括れ口縁部が外傾する。頸部は輪積みで剥離する。外面頸部ハケ調整、胴部ヘラナデ。内面頸部ハケ調整。	№76 被熱赤化
19	壺 土師器	B：[7.5] C：(20.0)	炉内ほか 50 % やや不良	長石◎、石英◎	橙 明赤褐	球形の胴部で、頸部から口縁部は欠損。外面には雑なヘラ削りが全体に施され、一部ハケ調整も見られる。	№67 被熱し荒れる
20	壺 土師器	A：[17.2] C：(26.1)	覆土下位 60 % 普通	長石○、石英○、赤色粒	橙	胴部下位に最大径を持つ。頸部が括れ口縁部が外反する。口唇端部は摘み上げられる。胴部はハケ調整の後ナデ。口縁部内外面はハケ調整。	№85
21	壺 土師器	A：[16.4] B：4.4 C：17.4	床面 90 % 普通	石英○、小石、白色針状物質○、緻密	にぶい橙 灰褐	球形で扁平な胴部から頸部が括れ直立し、口縁部は二重口縁。底部はやや上げ底。外面や口縁部の内面はヘラミガキ。胴部内面はハケ調整。	№84　赤彩 胴部下位に焼成後穿孔
22	壺 土師器	A：[11.6] B：[5.2] C：13.0	炉内ほか 60% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい橙	底部は丸底に近く、胴部は球形で頸部が括れ、口縁部が外傾する。外面と口縁部内面は密なヘラミガキななされる。胴部内面には指頭痕。	№71
23	壺 土師器	B：[5.4] C：(10.5)	床面 25% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい赤褐 橙	胴部は球形で、底部は平底。頸部は括れる。外面ナデ、内面ヘラナデ。33坩に類似する。	№70
24	壺 土師器	B：8.0 C：(27.2)	覆土下位 70 % 普通	長石△、石英△、雲母△	にぶい黄橙	上下に潰れた胴部で、頸部は括れ直立し、口縁部が外傾する。口縁部は二重口縁で、下端に刻み目が付く。外面にはハケ調整の後ヘラナデ。	№86
25	壺 土師器	A：[23.8] C：(3.8)	覆土下位 10% 良好	長石△、石英△、赤色粒	にぶい赤褐	折返し口縁壺の口縁部破片。口縁部下端に段を持ち、内外面共に丁寧なヘラミガキが施される。	№89
26	壺 土師器	C：(4.5)	覆土 10% 普通	長石△、石英△、雲母△、灰白色粒	橙	二重口縁壺の口縁部破片。刻みが付く４条の棒状浮文が添付される。非常に厚手の口縁部である。	№88
27	坩 土師器	A：[19.0] C：(7.5)	床面 20 % 普通	長石○、石英○、雲母△、赤色粒	橙 にぶい橙	坩の口縁部破片。外面ハケ調整の後ヘラミガキ。内面ナデ。	№102
28	壺 土師器	A：[15.4] C：(3.8)	覆土 5% 普通	長石◎、石英◎、雲母△、赤色粒	にぶい橙	折返し口縁壺の口縁部破片。外面にハケ調整、内面にはハケ調整の後ヘラミガキ。	№87
29	小型鉢 土師器	A：[12.3] B：2.1 C：(4.1)	覆土下位 80% 普通	長石△、石英○、赤色粒	にぶい黄橙 にぶい橙	底面は上げ底で、胴部が大きく開く。頸部内面に陵を持ち、口縁部は段を持って外傾する。器厚は薄い。坏部外面は丁寧なヘラミガキ。	№100
30	小型鉢 土師器	A：[11.4] B：3.0 C：4.7	覆土 95 % 普通	長石◎、石英◎、雲母○	赤 橙	上下に潰れた胴部から頸部が括れ、内面に陵を持つ。口縁部には段を持つ。外面はナデられ、内面はナデの後底面に放射状のヘラミガキ。	№98 全面に赤彩
31	小型鉢 土師器	A：[11.8] C：(3.5)	覆土下位 20% 普通	長石△、石英△、雲母△	にぶい橙	内湾する胴部から頸部が緩く括れ、口縁部が外反する。頸部外面にハケ調整が残る。口縁部はナデの後ミガキ。胴部はヘラ削り。	№101
32	小型鉢 土師器	A：[14.2] C：(5.6)	覆土下位 30 % 普通	長石△、石英○、雲母△、胎土緻密	赤	頸部で緩く括れ、口縁部は外傾する。内外面共にヘラミガキが密になされる。内外面に剥離見られる。	№103 内外面赤彩

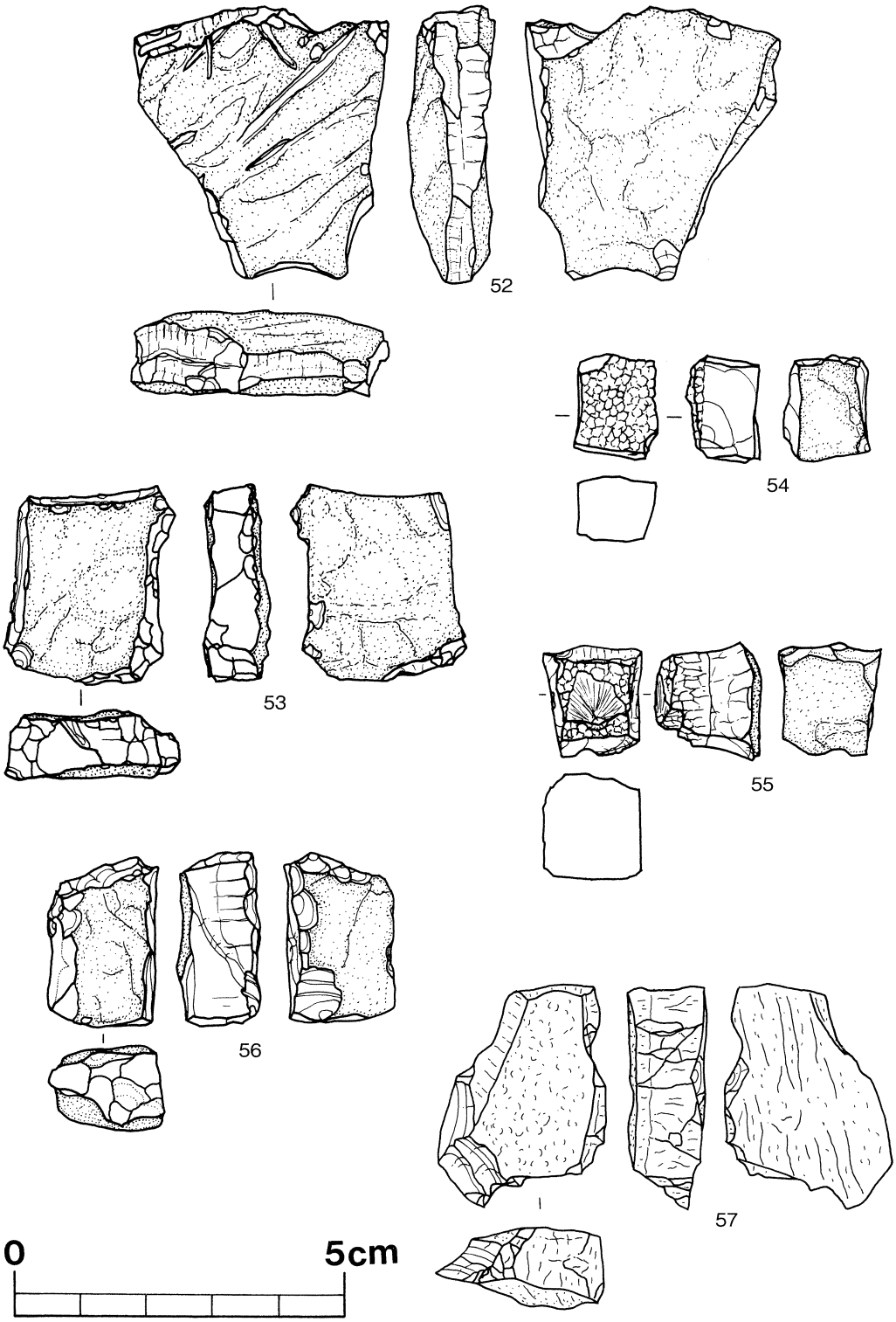
図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
33	坩 土師器	C：(8.5)	覆土下 25% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	明赤橙 橙	やや上下に潰れた胴部で、下位に最大径を持つ。外面ハケ調整の後ヘラミガキ。内面ナデ。	№162 外面赤彩痕残る
34	椀 土師器	A：6.3 B：3.2 C：4.2	覆土下位 95% 普通	長石○、石英○、雲母△	にぶい黄褐 にぶい褐	平底で上下に潰れた胴部に、頸部が括れ、短い口縁部が摘み上げられる。底面と胴部下半はヘラ削り。胴部の一部に焼成後の穿孔か。	№109
35	坩 土師器	A：10.4 B：2.5 C：6.5	P３内 100% 普通	長石△、石英△、雲母△	橙	扁平な胴部に大きな口縁部が外傾する。頸部内面には稜を持つ。底面はやや上げ底。坏部はヘラ削りの後ナデ、口縁部外面にはヘラミガキ。	№99
36	坩 土師器	B：[3.6] C：(2.0)	覆土下位 30 % 普通	長石△、石英△、雲母△、赤色粒、緻密	明赤褐	平底の底部から緩く立上がる。内外面共にヘラミガキが施される。	№105 全面に赤彩
37	器台 土師器	A：[8.6] B：[12.0] C：11.4	覆土下位 90% 良好	長石○、石英○、雲母△、小石	にぶい橙	全形が理解できる器台。裾部に最大径を持ち、脚部が長い。坏部底面に１孔と脚部裾に４孔の透かし孔が開く。全体にヘラミガキ。	№91
38	器台 土師器	A：6.6 B：[10.6] C：7.6	覆土下位 95% 良好	石英△、赤色粒	にぶい赤褐	脚部裾の一部が欠けるのみ。坏部底面に１孔と脚部に３孔透かし孔が開く。坏部内外面と脚部外面は丁寧なヘラミガキ。脚部内面ナデ。	№90
39	器台 土師器	A：[6.4] C：(6.6)	炉内ほか 80 % 普通	長石○、石英○、雲母○、小石	にぶい赤褐	裾部に最大径を持ち、坏部は小さい。細かく破砕さる。坏部底面に１孔、脚部に３孔の透かし孔が開く。外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	№96
40	器台 土師器	A：[6.7] C：(6.2)	覆土下位 70 % 普通	長石△、石英△、雲母△	にぶい赤褐	坏部の口縁部は外反する。脚部の裾は欠損する。坏部底面に透かし孔１孔、脚部に３孔開く。外面は丁寧なヘラミガキ。内面はナデ。	№92 坏部内外面・脚部外面赤彩
41	器台 土師器	A：9.6 C：(4.0)	床面 100 % 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい赤褐	粗製器台の坏部か。全体に荒い作りで、脚部は太く短い。外面にはハケ調整残り、内面はナデ。坏部底面に透かし孔１孔開く。	№93
42	器台 土師器	B：11.0 C：(5.4)	覆土下位 95% 普通	長石◎、石英△、雲母△	明赤褐 橙	器台の脚部。裾の一部が割れ。裾部は緩く広がる。坏部底面に１孔と脚部に３孔の透かし孔が開く。外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	№94 坏部内面赤彩
43	器台 土師器	A：[7.8] C：(6.3)	覆土下位 80% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	橙	坏部の口縁部は外傾し、口唇部が立上がる。脚部の裾は欠損。坏部底面に透かし孔１孔、脚部に３孔開く。外面はヘラミガキ。	№95
44	器台または高坏 土師器	B：[12.0] C：(2.7)	床面 20 % 普通	長石○、石英○、雲母△	にぶい橙	裾部の破片で緩く開く。透かし孔が１孔見られる。外面はヘラミガキ。	№97
45	ミニチュア 土師器	A：3.8 B：2.8 C：5.5	P４内 100% 普通	長石○、石英○、雲母△	赤褐	胴部上位に最大径を持ち、頸部が括れ、口縁部が立ち上がる。胴部には指頭痕が各所に残り、全体にいびつである。	№110 外面と口縁部内面に赤彩
46	手づくね 土師器	A：7.5 B：3.7 C：3.8	床面 100% 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい橙	平底の底部から口縁部へ外傾する。口縁部は摘み上げられる。外面指頭痕や荒いナデ。内面はハケ調整が残る。	№111
47	手づくね 土師器	A：[7.5] B：3.8 C：3.8	底面 95 % 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい黄橙 にぶい橙	平底から口縁部に向かい外傾し、口唇部は摘み上げられる。外面には細かなハケ調整。内面にはヘラナデ。底面ナデ。	№106
48	手づくね 土師器	A：[5.6] C：(2.9)	覆土下位 30 % 普通	長石○、石英△、雲母△	にぶい赤褐	底部の形態は不明。底部付近から外傾して口縁部が立上がる。口唇部は摘み上げられている。外面に指頭痕あり。	№108 黒色の付着物あり
49	手づくね 土師器	A：[3.8] B：2.2 C：(2.1)	覆土下位 60 % 普通	長石△、石英△	にぶい黄橙	底部から外傾して胴部が立上がる。内外面に指頭痕残る。	№107

第６号住居跡出土土製品

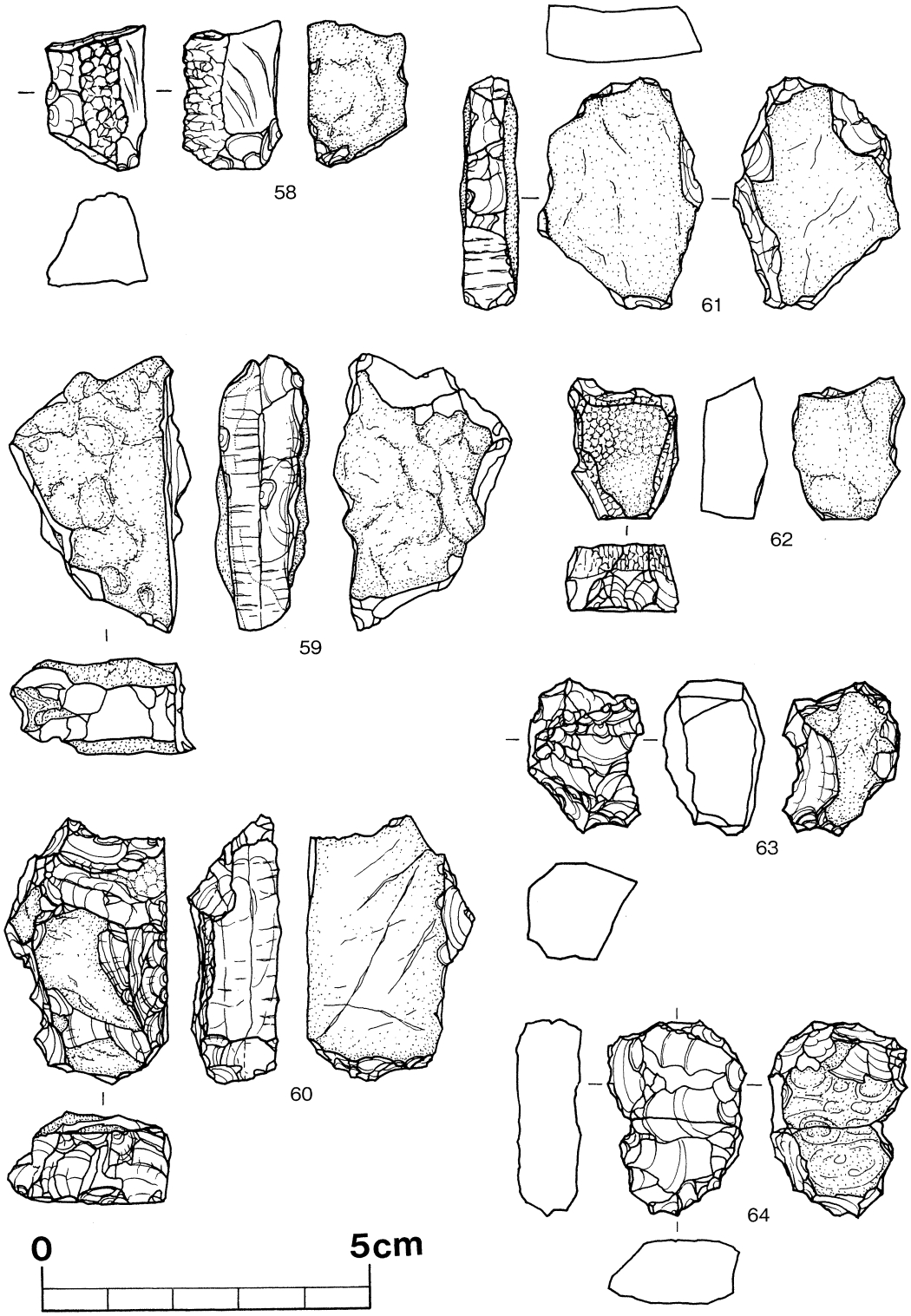
単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
50	土製品	土玉	2.7	2.9	17.9	北隅	90%	№320
51	土製品	土玉	2.7	2.9	19.6	入り口付近	完形	№321

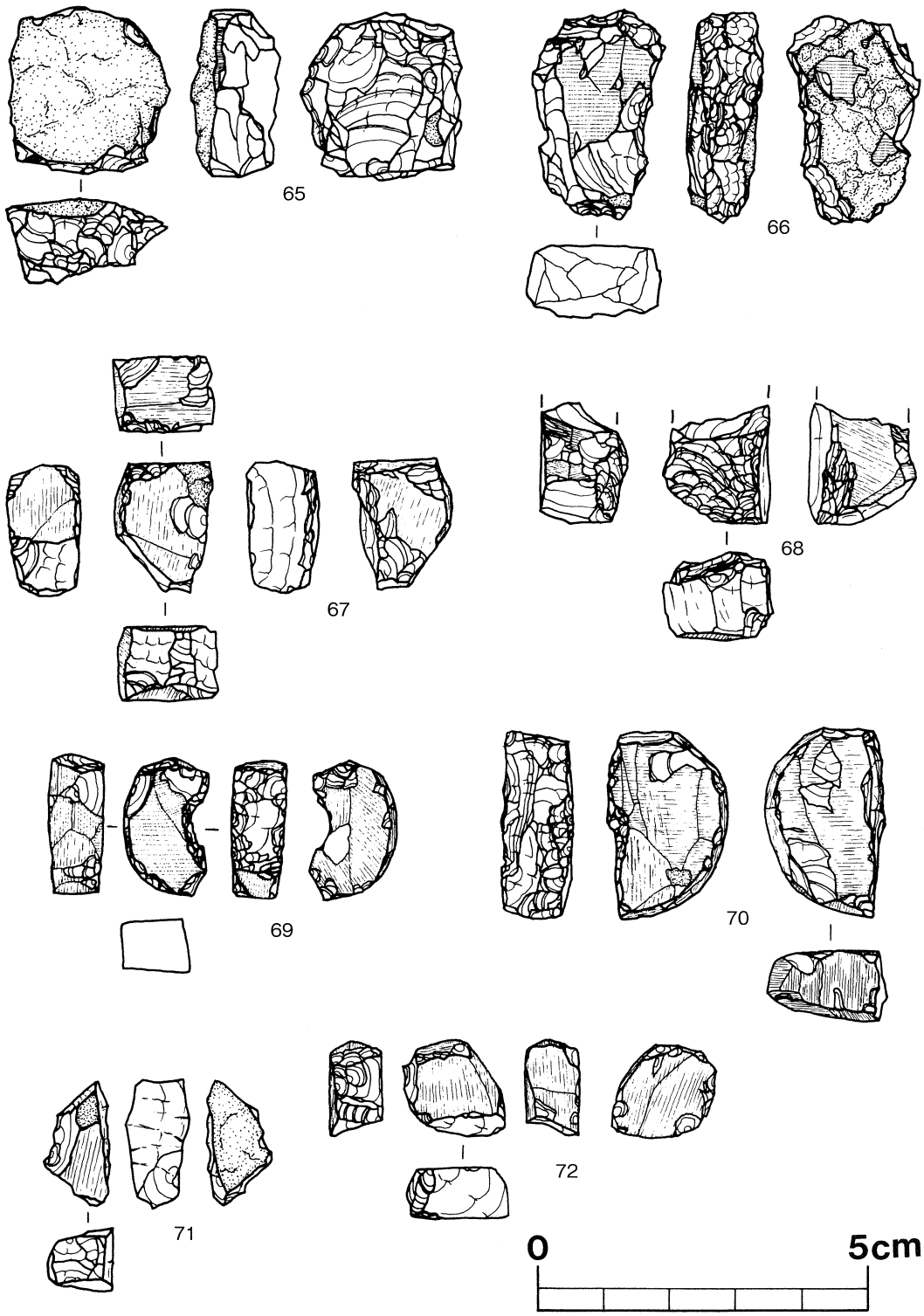
特徴的である。このことは、遺跡内で同時に複数存在する玉作工房で異なる工程の作業を行っていた可能性を示唆するものともいえる。また、特筆すべきは本住居跡出土の砥石が第４号住居跡出土砥石と接合しており、遺構間の関連が窺える。同様に、本住居跡出土土器には第２・３号住居跡のものと接合したものが見られた。そして、出土土器には比較的多くの穿孔されたものが見られ特徴的である。



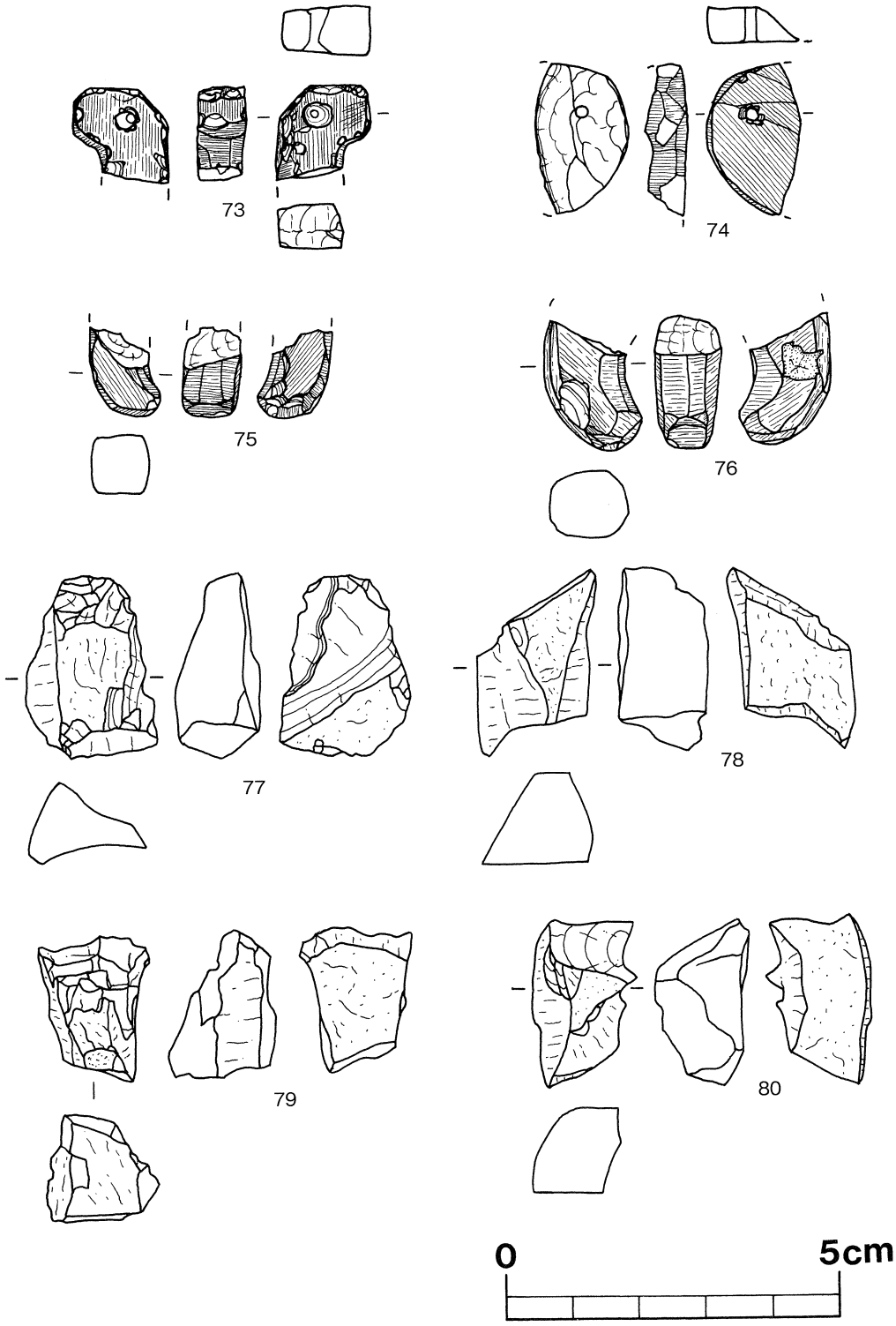
第111図　第６号住居跡出土遺物（６）



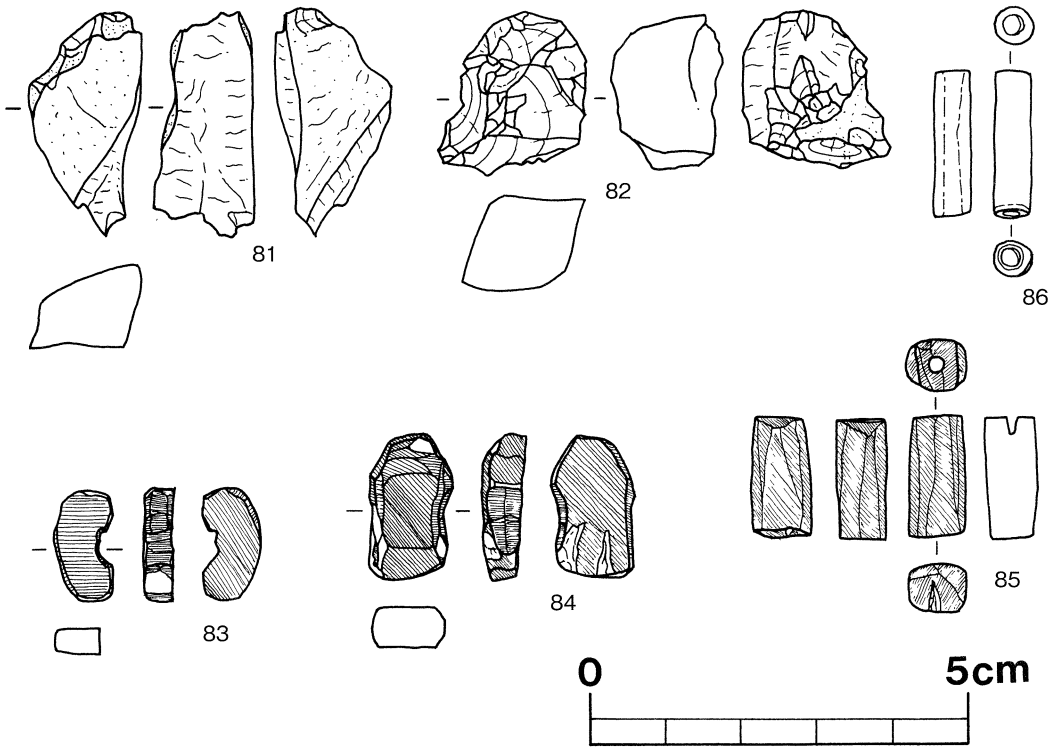
第112図　第６号住居跡出土遺物（７）



第113図　第６号住居跡出土遺物（８）



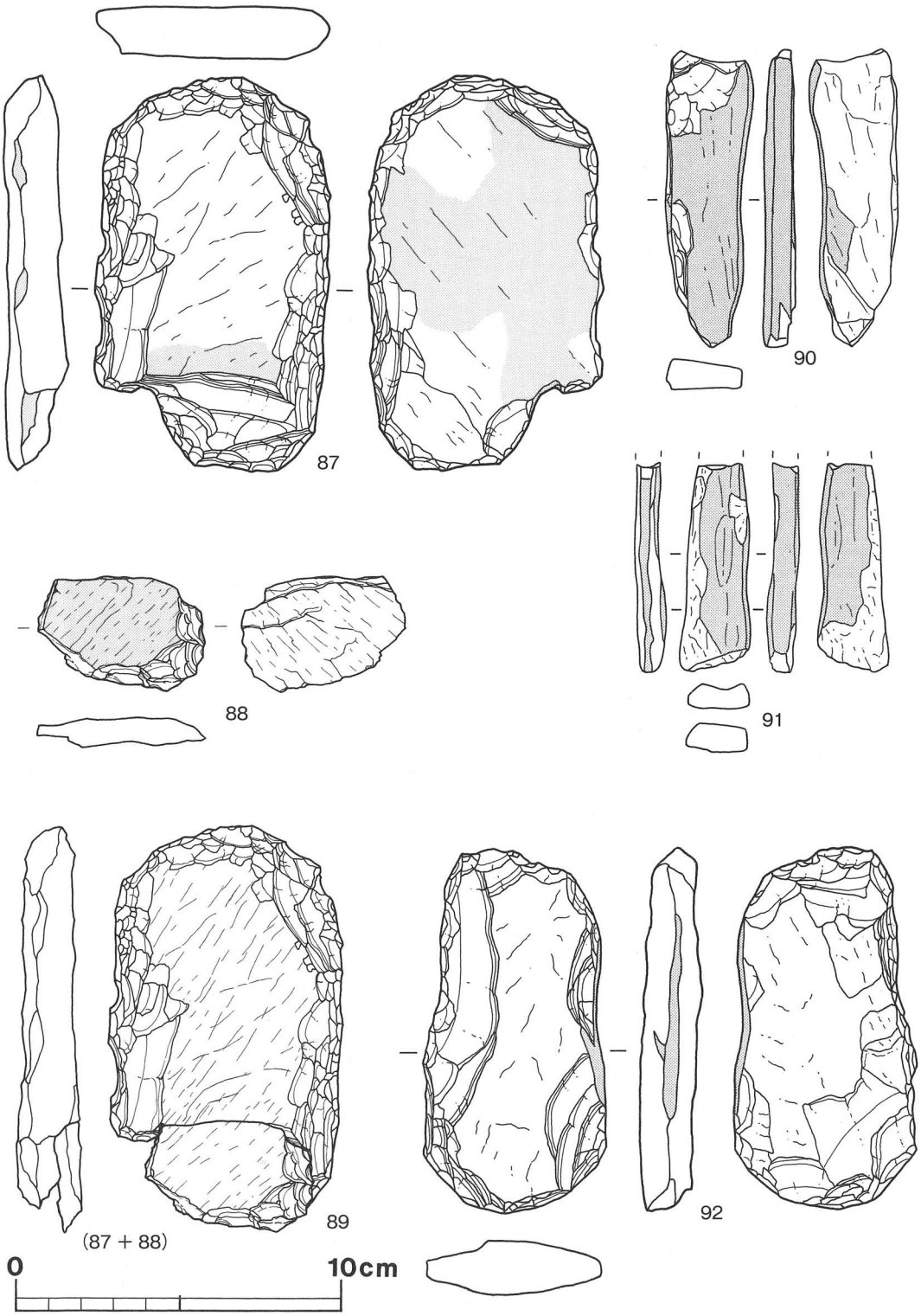
第114図　第６号住居跡出土遺物（９）



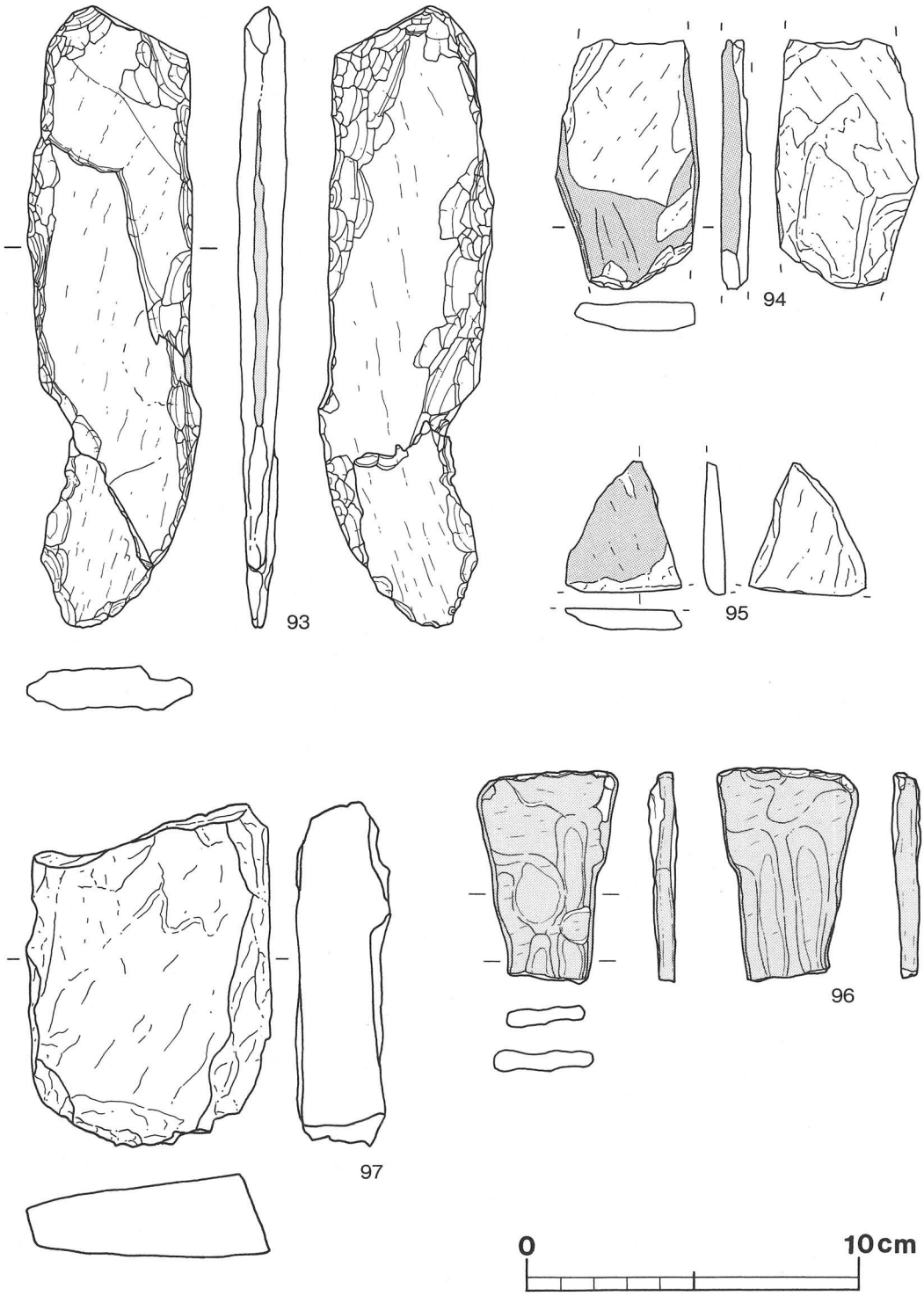
第115図　第６号住居跡出土遺物（10）

第６号住居跡出土玉作関連遺物

図版No.	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
52	勾玉採集原石	4.10	3.90	1.30	22.35	メノウ	玉23
53	勾玉荒割工程	2.90	2.40	1.00	9.51	メノウ	玉21　抉り、打割
54	勾玉形割工程	1.60	1.20	1.10	3.25	メノウ	玉43
55	勾玉形割工程	1.60	1.50	1.60	5.78	メノウ	玉42
56	勾玉形割工程	2.50	1.60	1.30	7.62	メノウ	玉32
57	勾玉形割工程	2.90	2.30	1.20	10.43	メノウ	玉49
58	勾玉形割工程	2.20	1.50	1.50	5.82	メノウ	玉39
59	勾玉側面打裂工程	4.20	2.60	1.45	17.71	メノウ	玉34　形割工程でも可
60	勾玉側面打裂工程	3.75	2.50	1.40	17.29	メノウ	玉24
61	勾玉側面打裂工程	3.50	2.40	0.80	10.06	メノウ	玉35　形割工程でも可
62	勾玉側面打裂工程	2.10	1.60	1.00	5.11	メノウ	玉38
63	勾玉側面打裂工程	2.20	1.70	1.50	7.21	メノウ	玉40
64	勾玉側面打裂工程	3.00	2.10	1.00	5.03	メノウ	玉22
65	勾玉側面打裂工程	2.50	2.50	2.30	8.43	メノウ	玉25　一部研磨
66	勾玉研磨工程	3.20	1.80	1.10	4.66	メノウ	玉45　2面研磨
67	勾玉研磨工程	2.00	1.40	1.10	4.63	メノウ	玉16　打割、抉り
68	勾玉研磨工程	1.60	1.80	1.40	8.43	メノウ	玉46　2面研磨
69	勾玉研磨工程	1.95	1.10	0.70	3.28	メノウ	玉30　打割、抉り
70	勾玉研磨工程	2.70	1.80	1.10	8.94	メノウ	玉37
71	勾玉研磨工程	1.90	1.00	0.95	1.75	メノウ	玉17



第116図　第６号住居跡出土遺物（11）



第117図　第６号住居跡出土遺物（12）

図版No.	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
72	勾玉研磨工程	1.50	1.45	0.80	2.65	メノウ	玉18
73	勾玉仕上げ研磨工程	1.95	1.10	0.70	2.11	メノウ	玉20　穿孔
74	勾玉穿孔工程	2.25	1.40	0.60	2.21	メノウ	玉26　穿孔
75	勾玉仕上げ研磨工程	1.30	0.90	0.90	1.39	メノウ	玉36
76	勾玉仕上げ研磨工程	1.35	1.40	0.70	3.03	メノウ	玉20
77	剥片	2.20	1.90	1.30	6.69	メノウ	玉41
78	剥片	2.10	1.70	1.30	6.23	メノウ	玉31
79	剥片	2.15	1.70	1.60	4.56	メノウ	玉50
80	剥片	2.50	1.50	1.30	5.03	メノウ	玉27
81	剥片	2.00	1.70	1.25	5.78	メノウ	玉33
82	剥片	3.00	1.50	1.30	5.39	メノウ	玉44
83	勾玉研磨工程	1.50	0.75	0.35	0.86	滑石	玉28
84	勾玉研磨工程	1.90	1.10	0.50	2.20	滑石	玉29
85	管玉穿孔工程	1.60	0.75	0.80	1.69	滑石	玉47
86	管玉完成品	1.95	0.50	0.50	0.84	滑石	玉48
87	内磨兼平砥石	12.00	7.20	1.80	208.70	片岩	玉57　SI-4（15）他と接合
88	平砥石	5.10	3.40	0.85	16.40	片岩	玉60　SI-4（15）他と接合
89	内磨兼平砥石	12.50	7.20	1.85	224.90	片岩	玉57+玉60
90	内磨兼平砥石	8.70	2.70	0.90	30.06	片岩	玉52
91	内磨兼平砥石	6.10	2.10	0.90	15.77	片岩	玉54
92	内磨砥石	11.00	5.50	1.80	143.08	片岩	玉58
93	内磨砥石	18.60	4.95	1.40	144.58	片岩	玉56
94	内磨兼平砥石	7.40	4.30	0.90	35.31	片岩	玉55
95	平砥石	3.90	3.40	0.65	8.54	片岩	玉51
96	内磨兼平砥石	6.30	4.20	0.90	30.80	片岩	玉53　SI-4（14）と接合
97	不明石器	9.60	7.20	2.80	238.90	石英	玉59

第８号住居跡〔SI－８〕（第118～134図　ＰＬ26～28・70～75）

位　置　調査区中央のＸ－15区、Ｗ－15・16区から確認された。

重複関係　なし。

主　軸　Ｎ－70°－Ｅ。

規　模　南壁4.5m、東壁4.5m、西壁5.0m、北壁5.1mの台形を呈する。深さは確認面からおよそ45cmを測る。

床　住居の北隅から東隅、そして南隅にかけてベッド状遺構が存在する。幅はおよそ１mを測り、高さは５cm前後である。その末端は北壁で炉に向かってスロープ状に落ち、南側では貯蔵穴に接続している。床面の硬化範囲はＰ５の存在する入り口施設周辺とベッド状遺構北側のスロープ状に落ちる部分に認められ、踏み締められていた。また壁際には壁溝が巡っている。その壁溝と接して炉と対面するように間仕切り溝が設けられている。

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って壁溝が巡り、幅12cm・深さ10cmを測る。

炉　Ｐ１・Ｐ４の中間よりＰ４側に寄って作られている。直径約90cm・深さ５cm。炉覆土上層は炭化物を多量に含む黒褐色土を呈している。

柱　穴　主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本である。上面径は10～25cmと小さい柱穴である。それぞれが直角に配置されておらず、住居平面形に符合して柱穴の配置も崩れている。

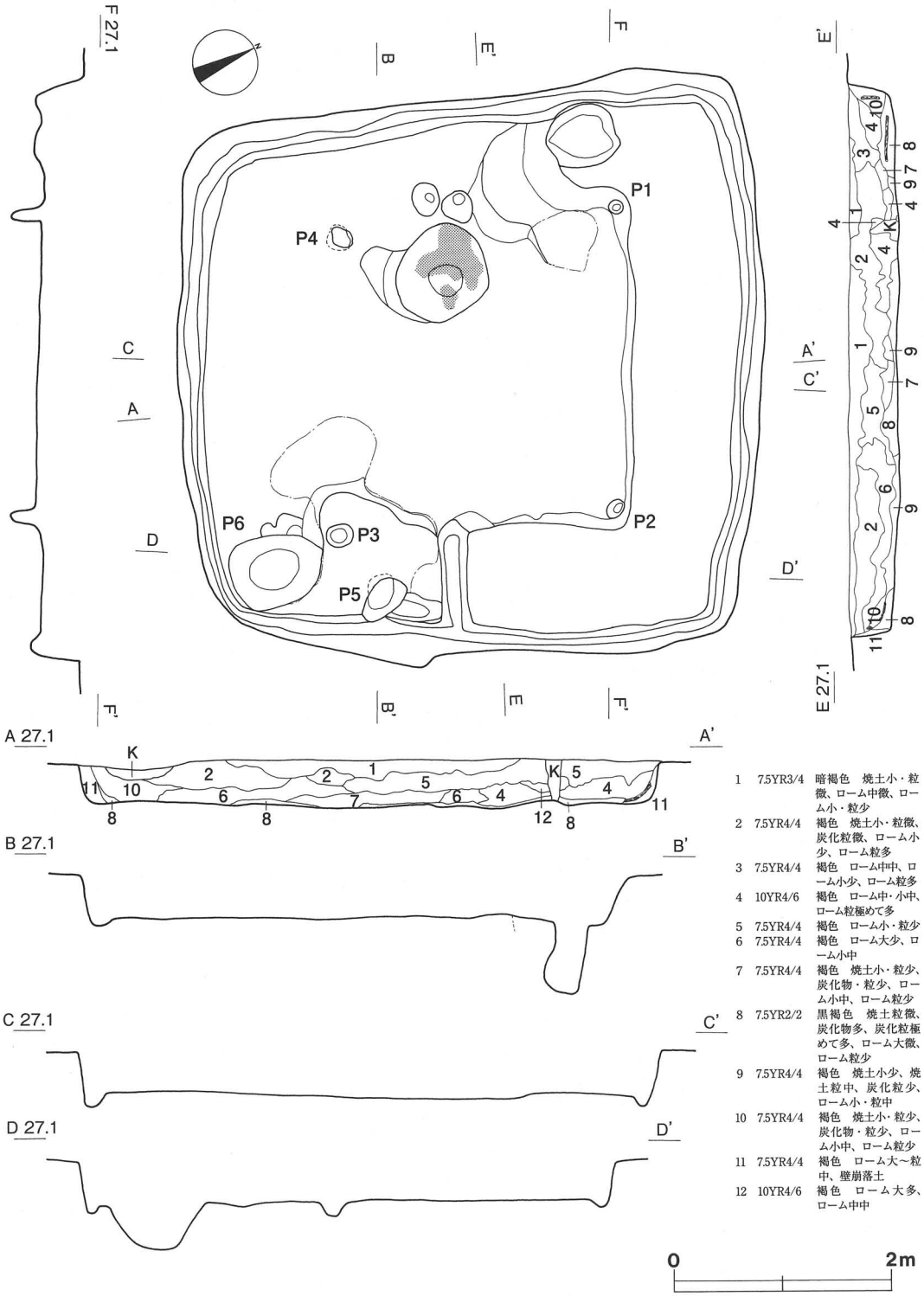
貯蔵穴　住居内の南隅に設けられており、長軸84×短軸62cmの楕円形を呈する。貯蔵穴の外側から落ち込むように焼土の堆積が見られた。覆土は８層に分層され、第４・５・７層に（特に第５層には多量に）焼土や焼土粒が含まれ、赤化した土師器片も混入している。

入口施設　Ｐ５が入り口ピットに相当し、南東側に傾いて穿たれている。平面形は長径45cm×短径25cmの楕円形を呈している。

その他の施設　間仕切り溝は壁溝に接続し長さ１mにわたり確認され、幅20cm・深さ15cmを測る。ベッド状遺構の北端には径60cm・深さ10cmの皿状の土坑が確認された。覆土は非常にしまっていた。底面から風化の激しい板状の軟質砂岩が出土した。

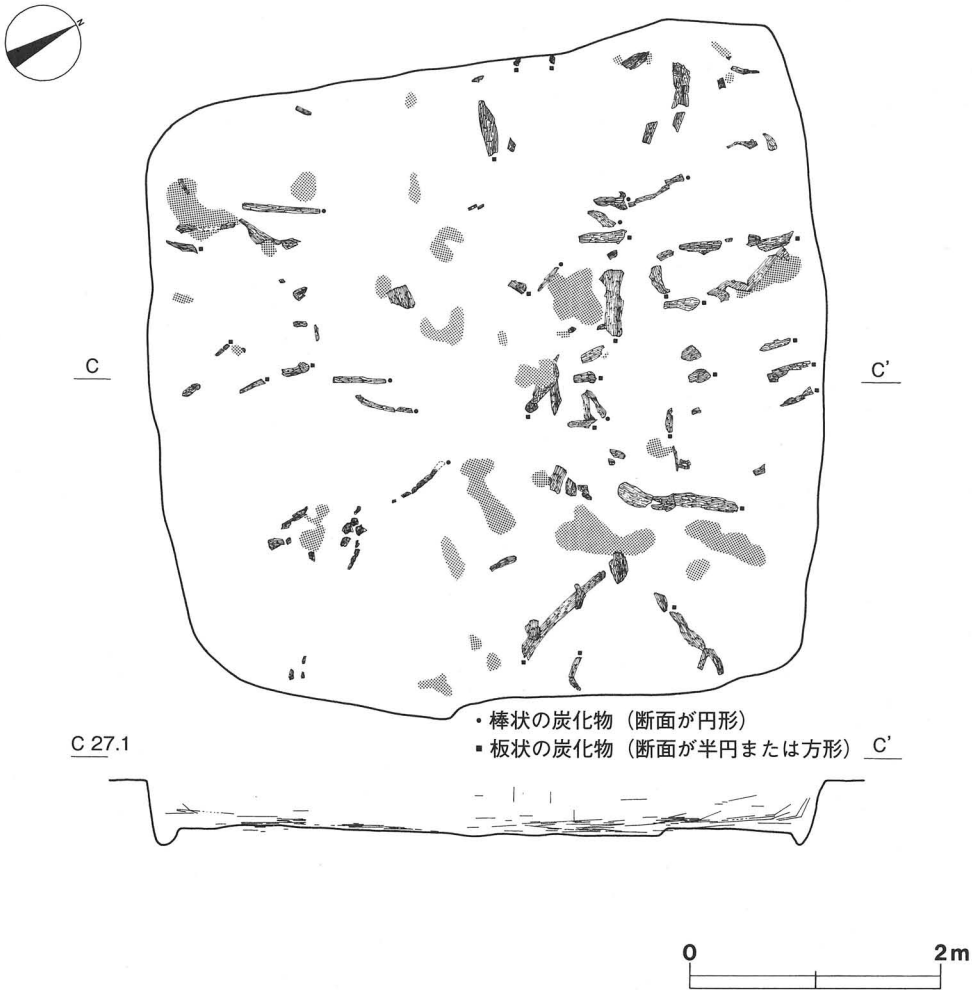
覆　土　覆土は12層からなる。上層の第２～４層はローム粒子を非常に多量に含む。最下層の第８層は黒褐色を呈し、炭化物粒を多量に含む層である。第11層はローム粒が多く含まれ、壁が崩れたものと考えられる。

遺物出土状況　住居内の遺物として土器や多量の炭化材、そして玉作関連遺物がある。出土土器で接合するものは、住居内西側から南側にかけての壁寄りに確認された。完形に近い土器も出土している。住居内の北側から東側にかけては接合関係のみられるものはない。１の土師器甕はその場で細かく割れていた。炭化材の多くはいずれも底面近くから出土しているが、壁近くでは壁に寄りかかるように傾斜して出土している。住居跡中央付近のものは床面との間の間層が薄く、



1　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小・粒微、ローム中微、ローム小・粒少
2　7.5YR4/4　褐色　焼土小・粒微、炭化粒微、ローム小少、ローム粒多
3　7.5YR4/4　褐色　ローム中中、ローム小少、ローム粒多
4　10YR4/6　褐色　ローム中・小中、ローム粒極めて多
5　7.5YR4/4　褐色　ローム小・粒少
6　7.5YR4/4　褐色　ローム大少、ローム小中
7　7.5YR4/4　褐色　焼土小・粒少、炭化物・粒少、ローム小中、ローム粒少
8　7.5YR2/2　黒褐色　焼土粒微、炭化物多、炭化粒極めて多、ローム大微、ローム粒少
9　7.5YR4/4　褐色　焼土小少、焼土粒中、炭化粒少、ローム小・粒中
10　7.5YR4/4　褐色　焼土小・粒少、炭化物・粒少、ローム小中、ローム粒少
11　7.5YR4/4　褐色　ローム大～粒中、壁崩落土
12　10YR4/6　褐色　ローム大多、ローム中中

第118図　第８号住居跡

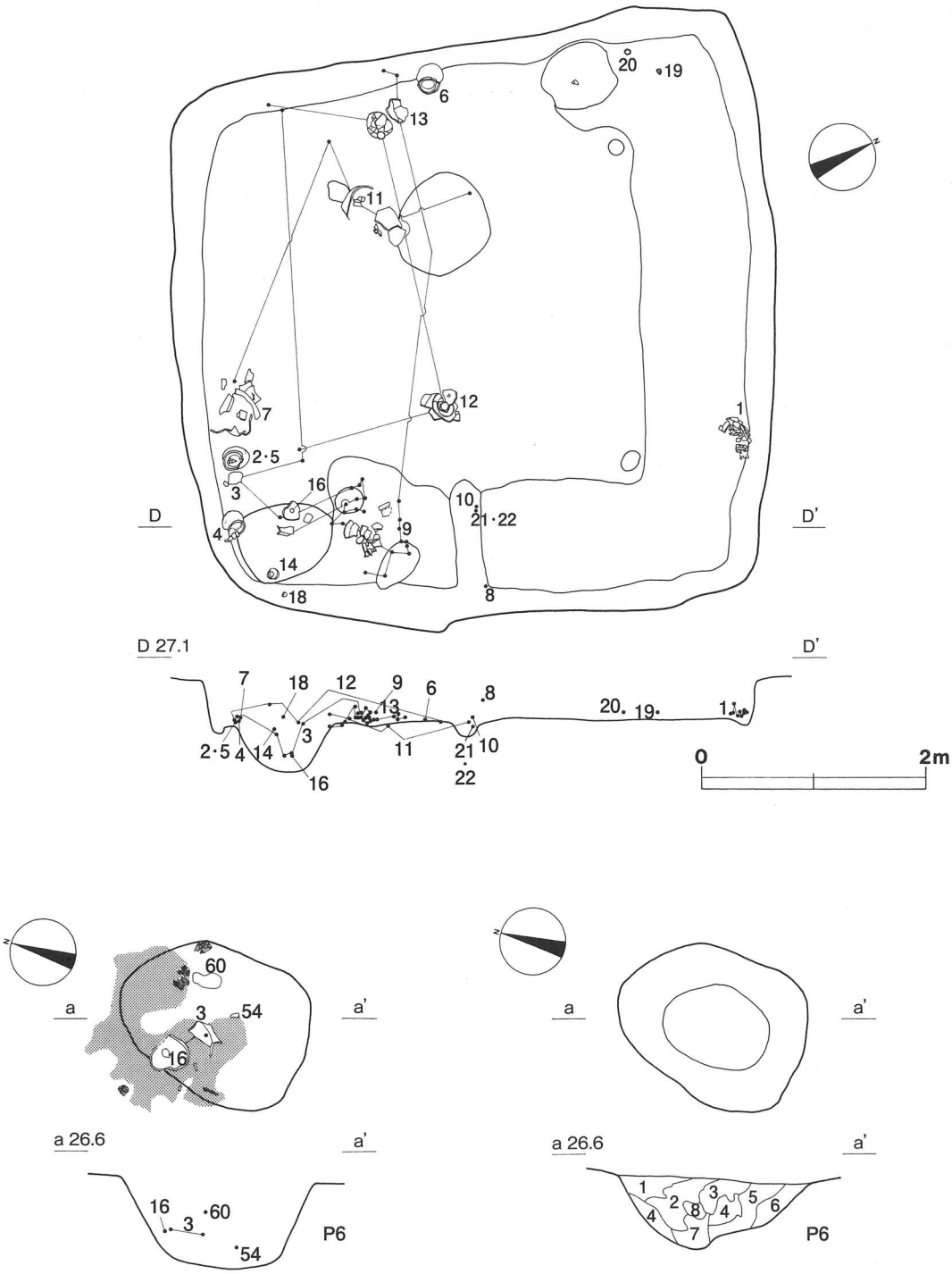


第119図　第８号住居跡炭化材出土状況

壁際では厚い。炭化材の形態は断面形が半円または方形の板状のものと、断面形が円形の棒状のものが見られた。炭化材の出土状況には一定の規則性が窺われ、住居跡内の屋根材などの構造を一定反映した出土状況といえる。

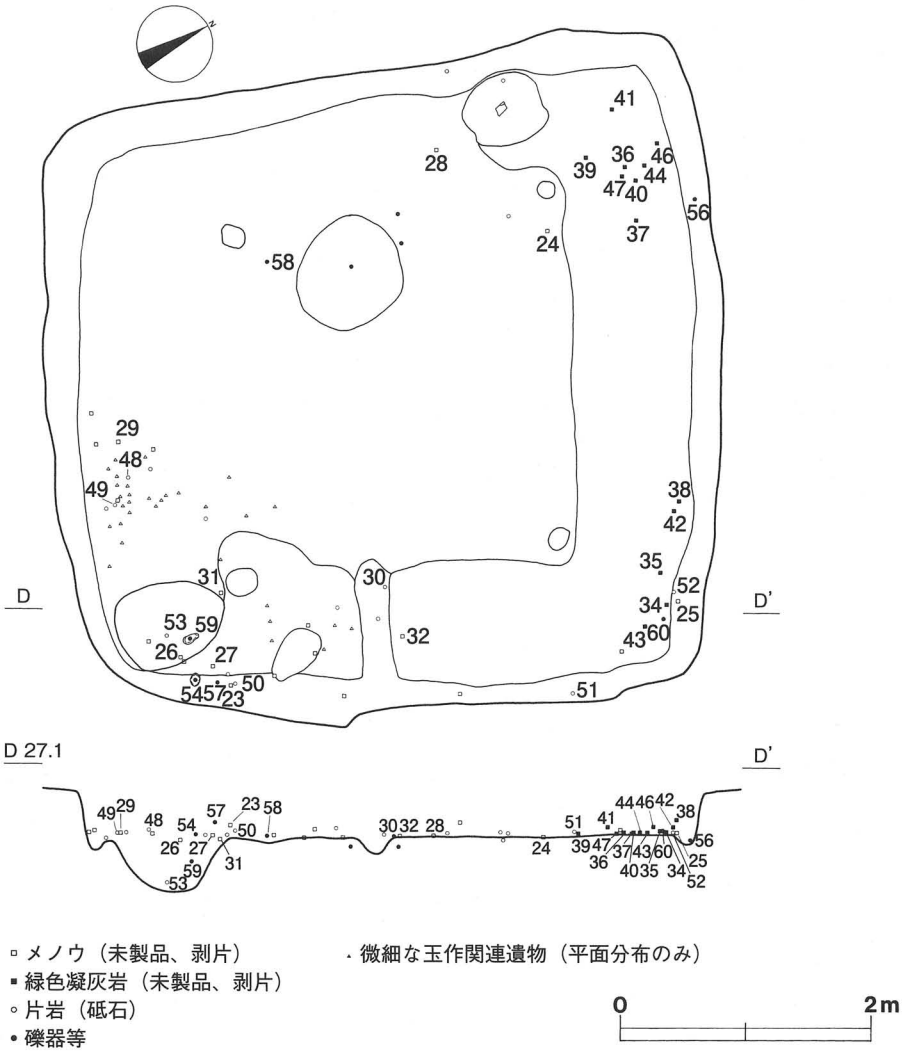
出土遺物　出土遺物は土師器・石製品・玉作関連遺物が出土している。１～９は土師器甕である。３は底部に焼成後の穿孔がなされている。10は大型の口径が広い特徴的な鉢である。11～14は土師器壺で頸部に粘土紐によるタガが巡る、12は赤彩され胴部下位が穿孔されている。15は土師器坩である。16は小型壺である。17～20は手づくね土器である。21・22は砥石で刃物の類を研いだものと思われ、21の縁辺は剥離している。

玉作関連遺物出土状況　玉作関連遺物はメノウ・緑色凝灰岩製未製品・片岩製砥石やメノウ・琥珀・



1　7.5YR4/6　褐色　ローム大～小少、ローム粒中
2　7.5YR4/6　褐色　焼土粒微、ローム小少、ローム粒中
3　7.5YR4/6　褐色　焼土粒微、ローム小・粒少
4　5YR4/8　赤褐色　焼土中微、焼土小･粒多、炭化物･粒少、ローム粒少
5　7.5YR4/4　褐色　焼土粒微、炭化物少、ローム粒少
6　7.5YR4/6　褐色　炭化粒少、ローム粒中
7　7.5YR4/6　褐色　焼土小･粒微、ローム大～小少、ローム粒中
8　7.5YR4/6　褐色

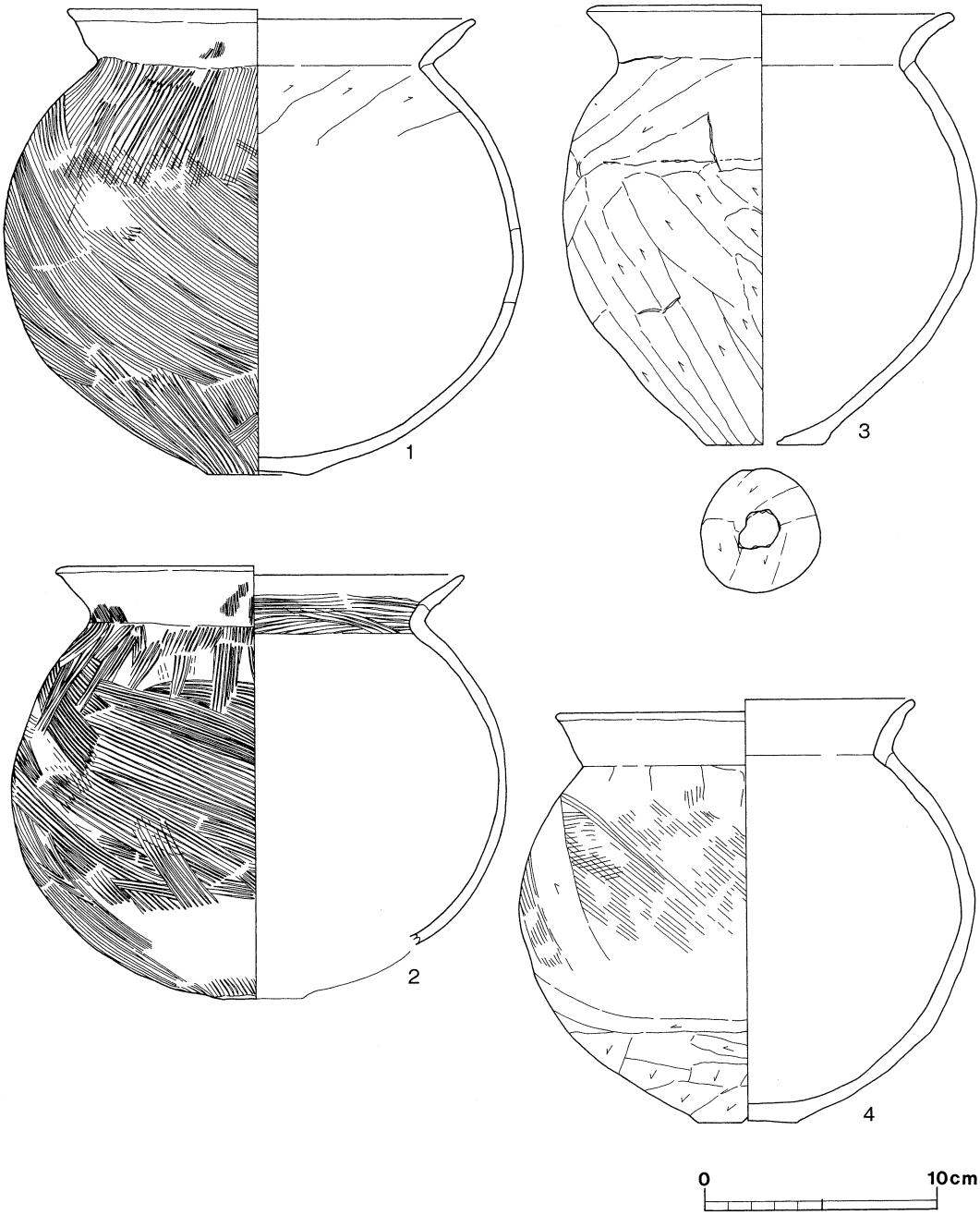
第120図　第８号住居跡遺物出土状況（１）・貯蔵穴



第121図　第８号住居跡遺物出土状況（２）

砥石の微細剥片が出土した。メノウ製未製品や微細剥片及び片岩製砥石微細剥片は間仕切り溝の西端から貯蔵穴の西側にわたり多く見られた。特に貯蔵穴の西側で集中する様子が窺える。そして、緑色凝灰岩（凝灰岩）製の玉未製品や剥片は住居内北側から東側壁寄りのベッド状遺構上でまとまって出土している。これらの緑色凝灰岩の未製品や剥片の中で接合するものは見られない。そして、それに伴って同石材の微細剥片は出土しておらず、メノウ製勾玉の状況とは異なる。また本住居跡出土のメノウ製勾玉の側面打裂工程の資料（26）が第４号住居跡のものと接合しており関連が窺われる。

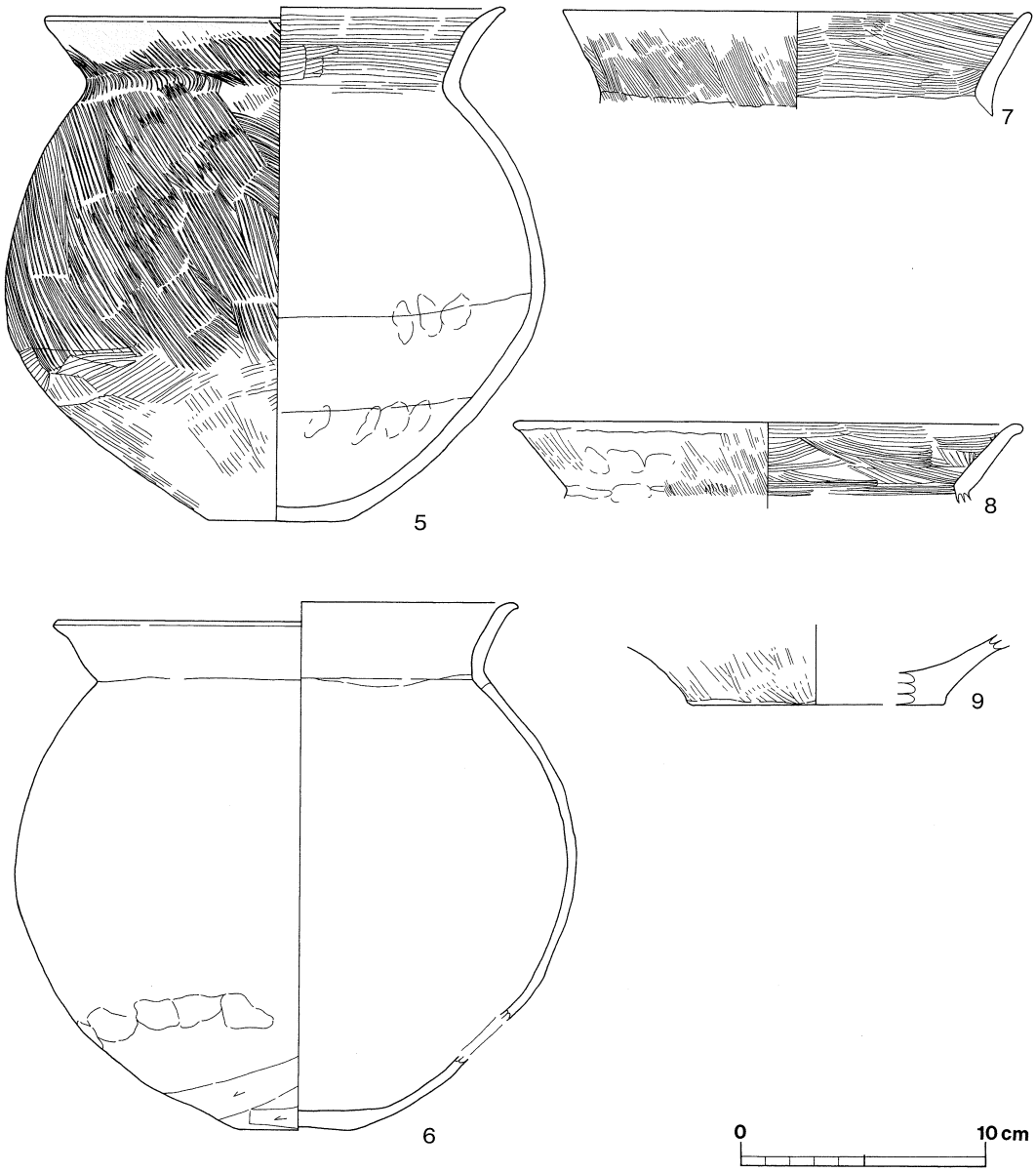
本住居跡については、時間的な制約で床面上覆土の水洗い選別調査を一部しか実施していないが、玉作作業の中枢的な空間は、玉素材及び片岩製砥石の微細剥片の出土状況などから入り口ピット付近から貯蔵穴とその周辺付近と考えられる。



第122図　第８号住居跡出土遺物（１）

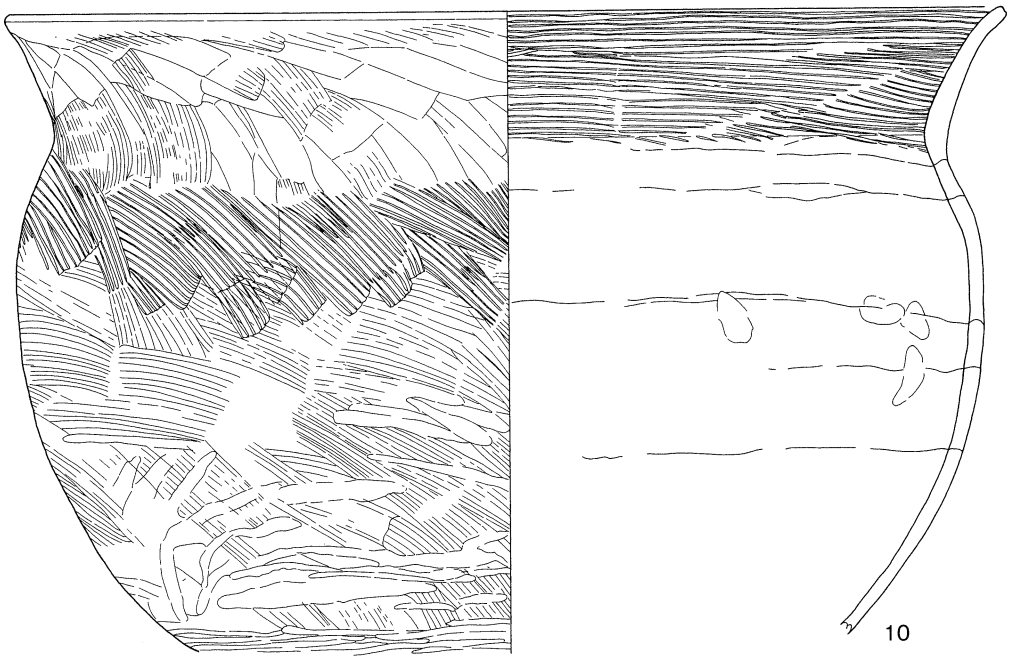
玉作関連遺物　玉類の材料としては、メノウ・緑色凝灰岩・琥珀などが確認できた。メノウは勾玉を製作したものと考えられ、荒割工程（23）、形割工程（24・25・28）、側面打裂工程（26・27・30）、研磨工程（29）のもが出土しており、このほかに剥片が出土している。

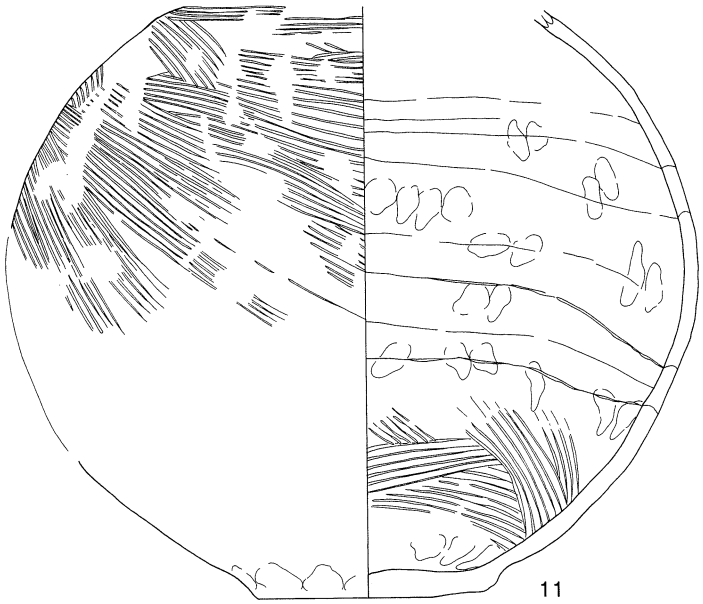
23は荒割工程のもので、腹部側を意識したと考えられる直線的な打割が見られる以外には、表

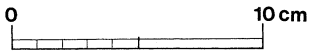


第123図　第８号住居跡出土遺物（２）

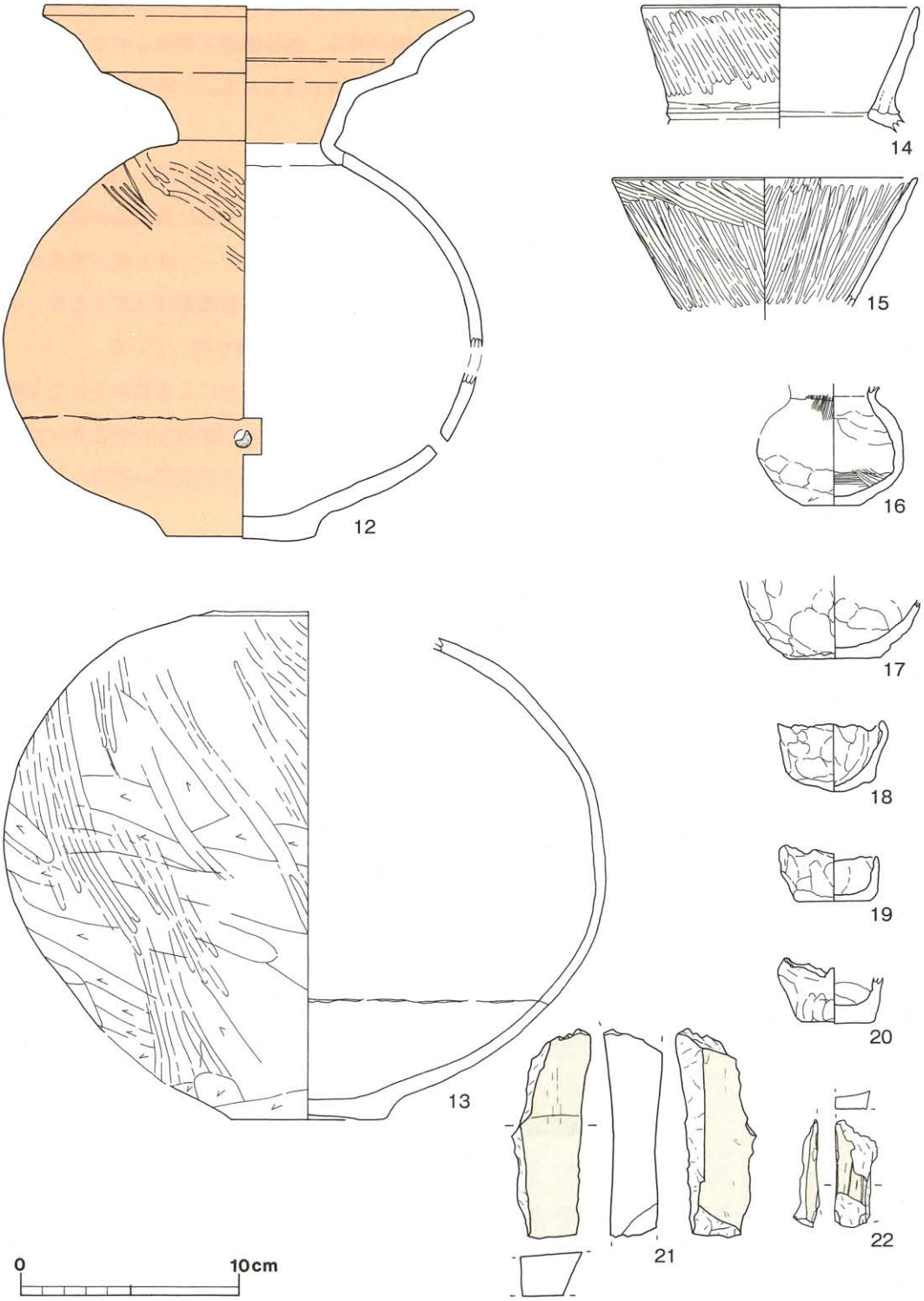
裏の自然面や側面に人為的でない光沢を持つ剥離面が見られる。24は本来自然面の見られる部分が表裏面となるものであり、剥離面の見られる部分が側面となるべきものである。およそ半円形を意識した形態ではあるが厚みがないことから、上端からの力で薄く剥離してしまった資料と考えられる。28は勾玉の腹部に相当する部分に直線的な打割がなされ、背部には丸みが残る。26は第４号住居跡出土資料と接合するもので、側面や表裏縁辺に押圧剥離がなされる。27は裏面にの







第124図　第８号住居跡出土遺物（３）



第125図　第８号住居跡出土遺物（４）

み自然面が残り、本来はC字状を呈するものと思われる。腹部に抉りのための押圧剥離が集中している。30の表面には結晶質面が残り、裏面には自然面が残る。29は研磨工程のもので、表面に結晶質面が残り、裏面には自然面が残る。背部の一部に研磨痕が見られる。このほかの31～33は剥片である。

緑色凝灰岩（凝灰岩）剥片については管玉を製作したものと考えられ、荒割工程（34）、側面打列工程（37・40）のものが出土し、このほかは剥片である。34は側面の一部に自然面が残り、直方体を意識した形態となっている。37は自然面が残っておらず、剥離によって直方体が形成されている。40は押圧剥離が見られ側面打裂工程の資料と考えられ、基部の断面形は方形となる。その他の35・36・38・39・41～47は剥片と考えられ、多くは部分的に自然面を残している。

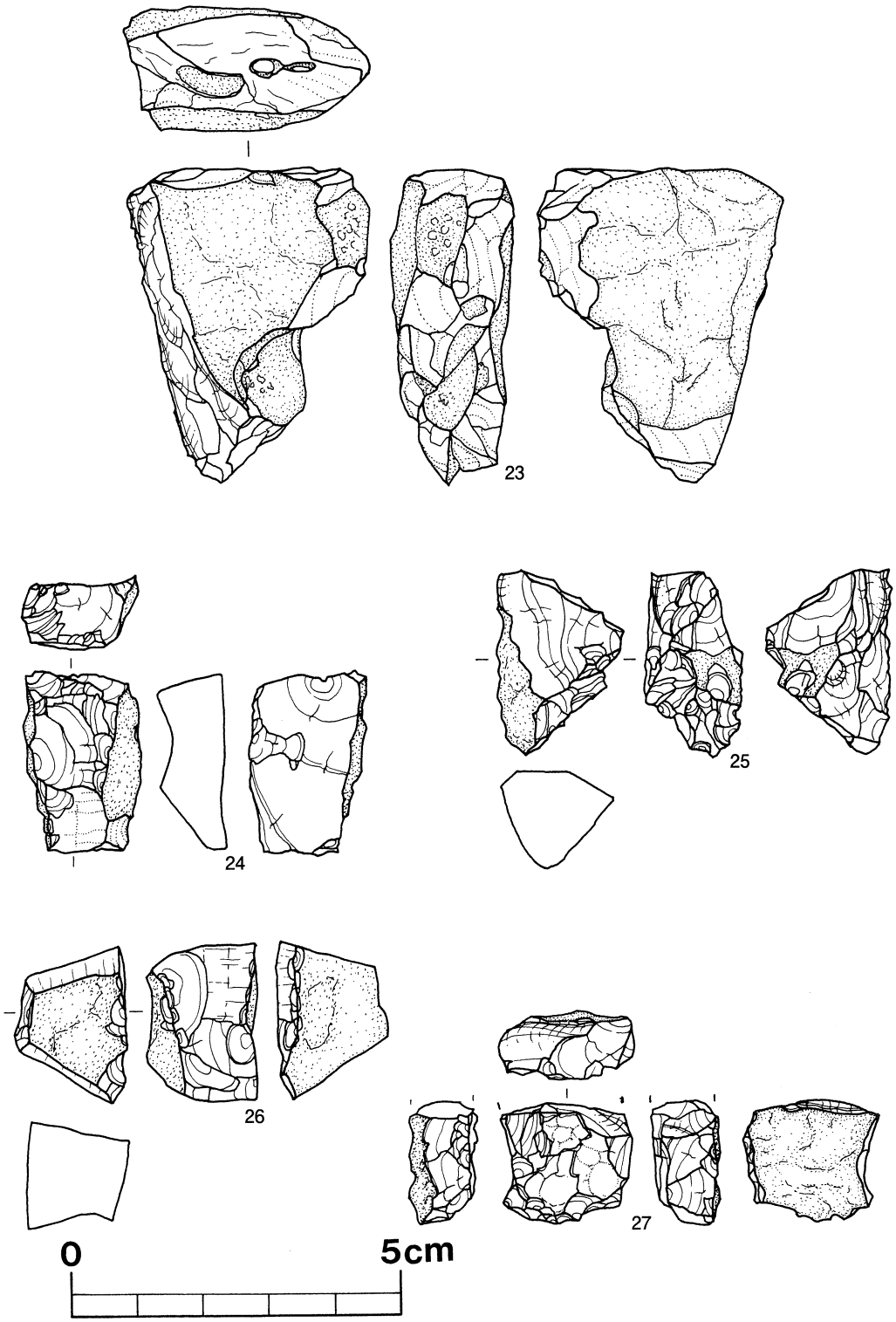
微細な剥片からは、琥珀を材料とした玉類の製作も考えられる。同石材による製作された玉類の種類については勾玉が想定される。そして、微細剥片についてはメノウ製のものが目立って出土したが、緑色凝灰岩（凝灰岩）のものは肉眼では確認できず、一部覆土の水洗い選別の結果でも確認できなかった。

玉作の道具類として片岩製などの砥石や敲き石などが出土している。砥石には51の内磨砥石、48～50の内磨砥石兼平砥石、52の筋砥石、53平砥石兼筋砥石兼敲き石、54の筋砥石兼敲き石、55の平砥石兼敲き石がある。この砥石の石材の大多数は片岩で、青みがかったものである。51は角礫凝灰岩製で、52は非常に軟質の凝灰岩製のものである。53は厚さが一定の平たい礫を用いたもので表裏は平砥石として、側面中央には溝が見られ筋砥石として、上下端部には敲打痕が見られ敲き石として用いられたことが観察される。54はやや軟質の砂岩礫の表面・側面に筋が見られ筋砥石として用いられた後、側面全体を敲くための道具として用いている。55の平砥石兼敲き石は石英製のもので湾曲した平坦な砥面が特徴的であり、玉製品の砥石というよりは鉄製品の砥石かもしれない。縁辺に敲打痕が残る。56は敲き石である。そのほかの57～60は使用痕が明確でない自然礫であり、敲打用の道具として用いるつもりで持ち込んだのかもしれない。この中で59については他の石に比べ大きく、貯蔵穴に落ち込むよう出土しており、貯蔵穴の蓋にかかわる重石の可能性も否定できない。

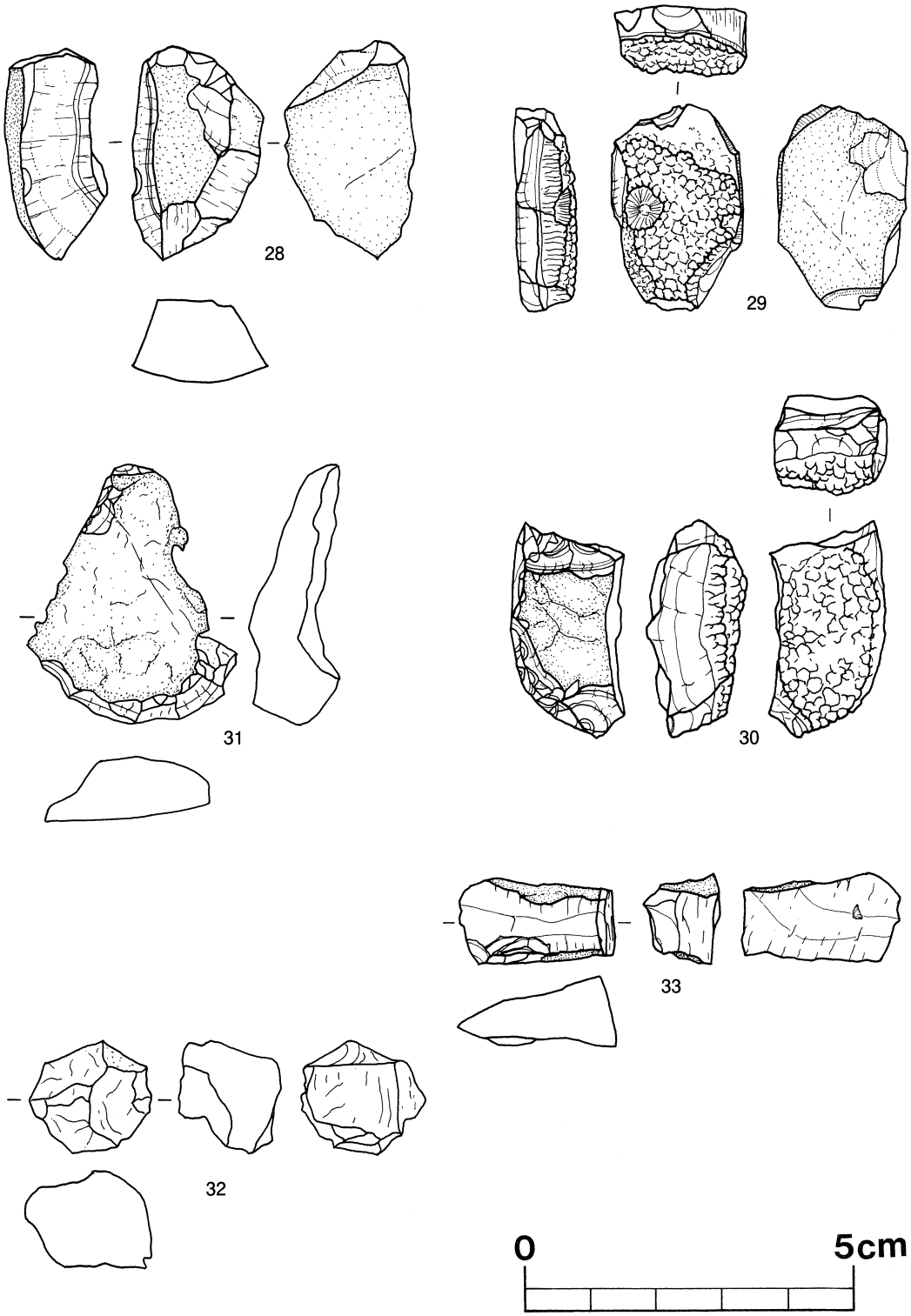
所　見　本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。名称としては住居跡としているが、その中で行われた行為を考えれば、玉作工房と位置付けられよう。玉の種類としてメノウ製勾玉、緑色凝灰岩（凝灰岩）製管玉などを中心に製作したものと考えられるが、緑色凝灰岩の素材についてはその状況から一定割られたものが持ち込まれている可能性がある。本住居跡出土遺物に第４号住居跡出土遺物と接合するものがあり、その関連が窺われる。そして、出土土器には穿孔されたものが見られ特徴的である。また、本住居は焼失住居であり炭化材出土状況から屋根構造が残る状況で焼失し、燃焼途中で土が投入されているようである。

第８号住居跡出土土器

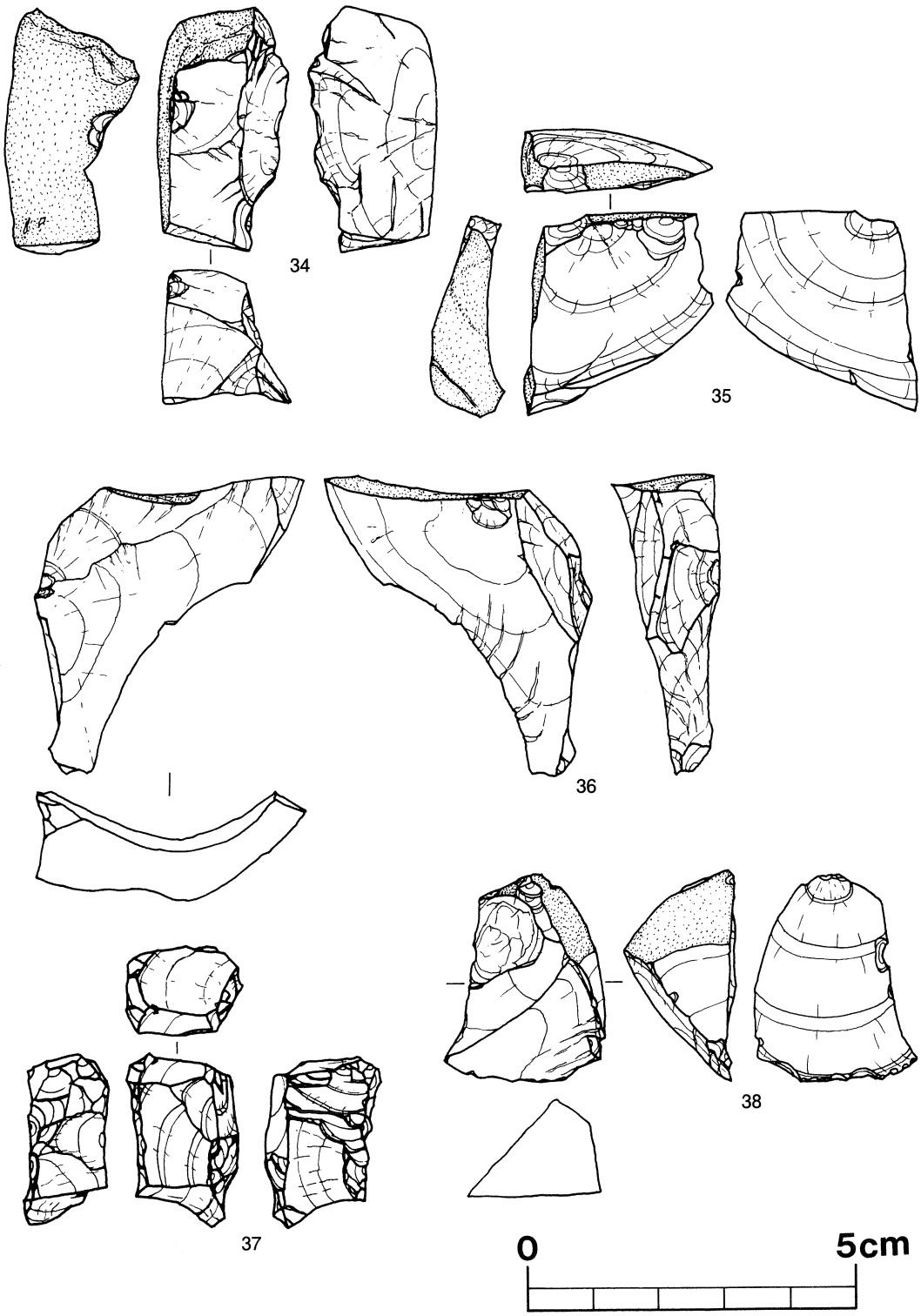
図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：17.6 B：4.4 C：20.0	覆土下位 70% 普通	長石◎、石英◎、雲母○	にぶい橙	球形の胴部で頸部が屈曲し、口縁部が外傾する。胴外面や底面は明瞭なハケ調整がなされる。胴部下半は被熱赤化。煤付着。	№142
2	甕 土師器	A：17.5 B：3.8 C：18.6	覆土下位 90% 普通	長石◎、石英○、雲母○	にぶい褐 褐	球形の胴部で頸部が屈曲し、口縁部が外傾する。胴・頸部外面や底面は明瞭なハケ調整がなされる。頸部内面もハケ調整。全体に被熱。	№144
3	甕 土師器	A：15.9 B：4.9 C：18.9	貯蔵穴他 80% 良好	長石○、石英○、雲母×	明赤褐	頸部は屈曲。口縁部はやや外反。胴下半がすぼまる。胴部外面はヘラ削り、口縁部内外面はナデ。全体に被熱赤化、炭化物付着。底部穿孔。	№145
4	甕 土師器	A：24.4 B：4.2 C：19.6	覆土下位 80% 普通	長石◎、石英◎、雲母○	にぶい赤褐	胴部中位に最大径を持ち、頸部は屈曲し、口縁部は外傾。胴部下位と底面はヘラ削り、胴部上半はハケ調整の後ナデ。口縁部内外面ナデ。	№143 内外面全体に吸炭
5	甕 土師器	A：18.8 B：5.6 C：21.0	覆土下位 95% 普通	長石○、石英○、雲母◎	にぶい褐	球形の胴部で中位に最大径を持つ。頸部は括れ、口縁部は外傾、端部は外反。胴・頸部外面にハケ調整が明瞭、底部付近は不明瞭。	№150 炭化物付着
6	甕 土師器	A：18.9 B：4.6 C：21.5	床面 80% 良好	長石△、石英△、雲母×	にぶい赤褐	球形の胴部で頸部が括れ、口縁部が外傾し、端部が外反。胴部外面ヘラ削りの後ナデ。底部ヘラ削り。口縁部内外面はナデ。被熱赤化。	№141 一部煤付着
7	甕 土師器	A：[19.2] C：(4.2)	覆土下位 40% 良好	長石◎、石英○、雲母◎	にぶい橙	口縁部破片で接合部で剥離。頸部が括れ、口縁部は外傾する。内外面細かなハケ調整。一部輪積痕。	№146
8	甕 土師器	A：[20.8] C：(3.1)	覆土 30 % 普通	長石○、石英○、雲母△　砂粒	橙	口縁部破片で頸部が括れ、口縁部は外傾し端部はやや外反する。内外面ハケ調整。器面被熱し荒れる。	№147
9	甕 土師器	B：[10.6] C：(2.4)	覆土 30% 良好	長石△、石英○、雲母○、赤色粒	にぶい赤褐 黒	底部に厚みを持ち外傾する。外面ハケ調整の後ナデ。内面はヘラナデ。底面には木葉痕が残る。	№148
10	大型鉢 土師器	A：[39.8] C：(25.3)	覆土下位 70 % 普通	長石△、石英△、雲母×、赤色粒	橙 にぶい橙	底部欠損。胴部は丸く、頸部は緩く括れ、口縁部は外傾する。外面と口縁部内面はハケ調整され、胴部下半や口縁部はハケ調整の後ナデ。	№149
11	壺か 土師器	B：9.2 C：(23.3)	覆土下位 70 % やや不良	長石○、石英○、雲母△、砂粒	にぶい黄褐	球形の胴部。外面の胴部上半は粗いハケ調整がなされ、下半はヘラ削りの後ナデ・ミガキがなされる。底面もヘラ削り。内面は剥離著しい。	№153
12	壺 土師器	A：19.6 B：6.8 C：24.5	底面他 80% やや不良	長石△、石英△、雲母△　軟質の胎土	にぶい赤褐 にぶい橙	胴部下位に最大径を持ち、頸部はほぼ直立し、口縁部は二重口縁。内外面ともに剥離が著しい。胴部下位に穿孔。外面と口縁～頸部内面赤彩。	№151
13	壺 土師器	B：7.2 C：(23.2)	覆土下位 70 % 普通	長石△、石英◎、雲母△	にぶい褐	胴部中位に最大径を持ち、球形。頸部は接合部で剥離。胴部と底部外面はヘラ削りの後まだらにヘラミガキを施す。	№154
14	壺 土師器	A：[12.8] C：(5.4)	貯蔵穴 100 % 良好	長石○、石英○、雲母×	にぶい橙 にぶい黄橙	壺の口縁部。頸部から直立気味に外傾する。頸部には粘土帯が巻かれる。外面密なヘラミガキ。内面はナデ。	№152
15	坩 土師器	A：[14.0] C：(5.8)	覆土 40 % 良好	長石◎、石英◎、雲母○	にぶい黄橙	外傾しながら開く坩の口縁部。器壁は一定で薄く、密で丁寧なヘラ磨きが施されている。	№156
16	小型壺 土師器	B：2.4 C：(5.5)	貯蔵穴内 90 % 普通	長石◎、石英○、雲母△	にぶい橙	丸い胴部から頸部が括れる。ややいびつで、胴部下半には指頭痕が多く残る。胴部上半は磨かれる。内面には輪積痕やハケ調整が見られる。	№157
17	手づくね 土師器	B：4.0 C：(3.6)	覆土 100 % 普通	長石◎、石英◎、雲母○	にぶい黄橙 にぶい褐	底部から開く器形で器壁は薄い。底部は平底。外面には指頭痕が多く残り雑な作りである反面、内面はナデられ雑な作りではない。	№158
18	手づくね 土師器	A：4.8 B：3.8 C：3.2	覆土 95 % 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい黄褐	底部は平底ではなく、口縁部もいびつに摘み上げられている。内外面に指頭痕が目立つ。	№161
19	手づくね 土師器	A：4.5 B：3.2 C：2.6	覆土下位 90 % やや不良	長石△、石英△、雲母△	にぶい赤褐	底部は平底。口縁部はいびつに摘み上げられる。内外面に指頭痕が目立つ。胎土が赤・白色粘土によりマーブリング状となり特徴的。	№160
20	手づくね 土師器	B：3.3 C：2.9	覆土下位 80% 普通	長石○、石英○、雲母△	にぶい橙	底部は平底である。口縁部はいびつに摘み上げられる。内外面に指頭痕が目立つ。	№159



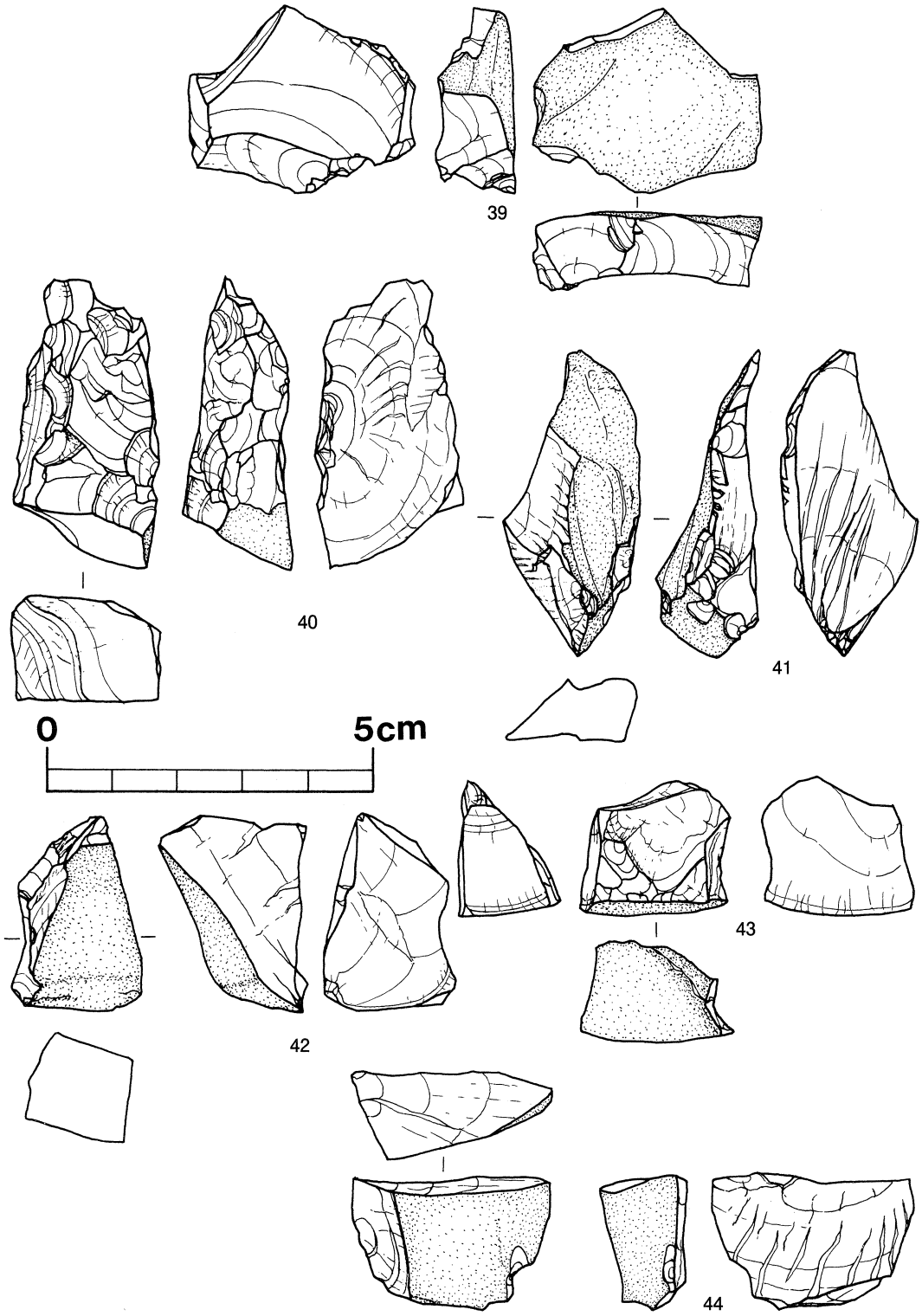
第126図　第８号住居跡出土遺物（５）



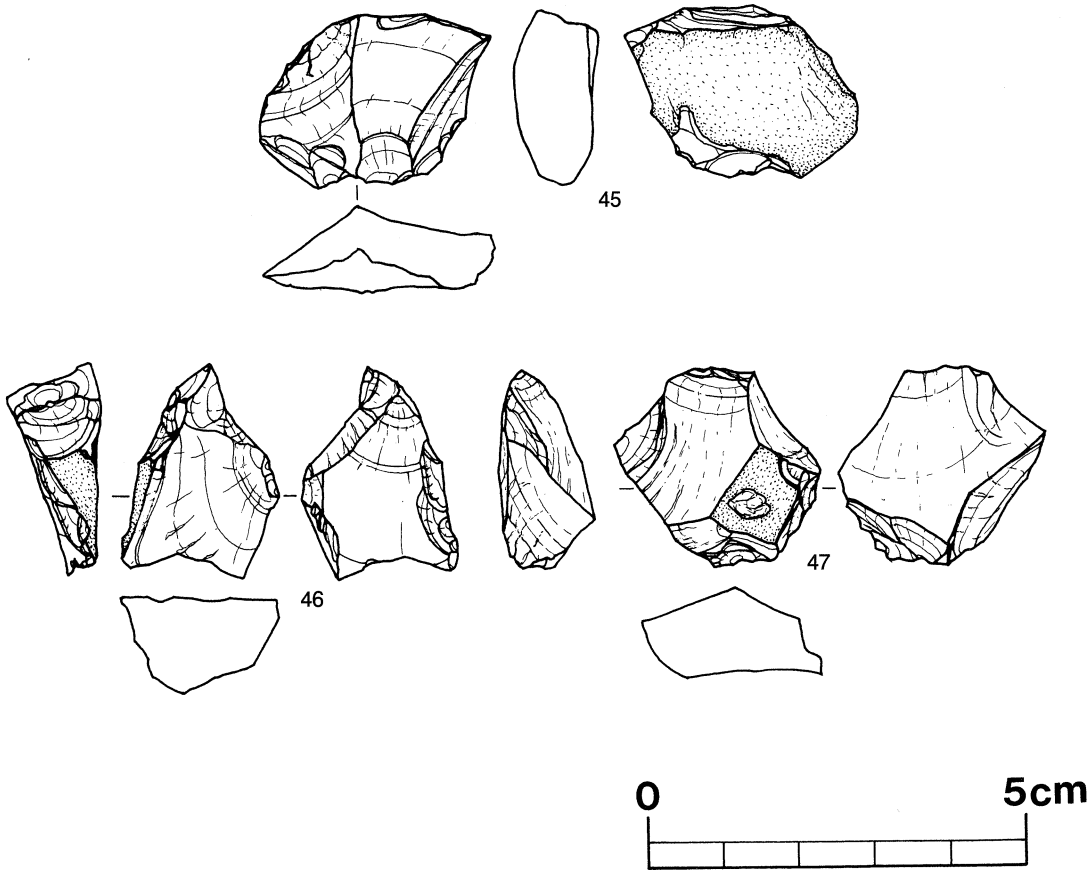
第127図　第８号住居跡出土遺物（６）



第128図　第８号住居跡出土遺物（７）



第129図　第８号住居跡出土遺物（８）



第130図　第８号住居跡出土遺物（９）

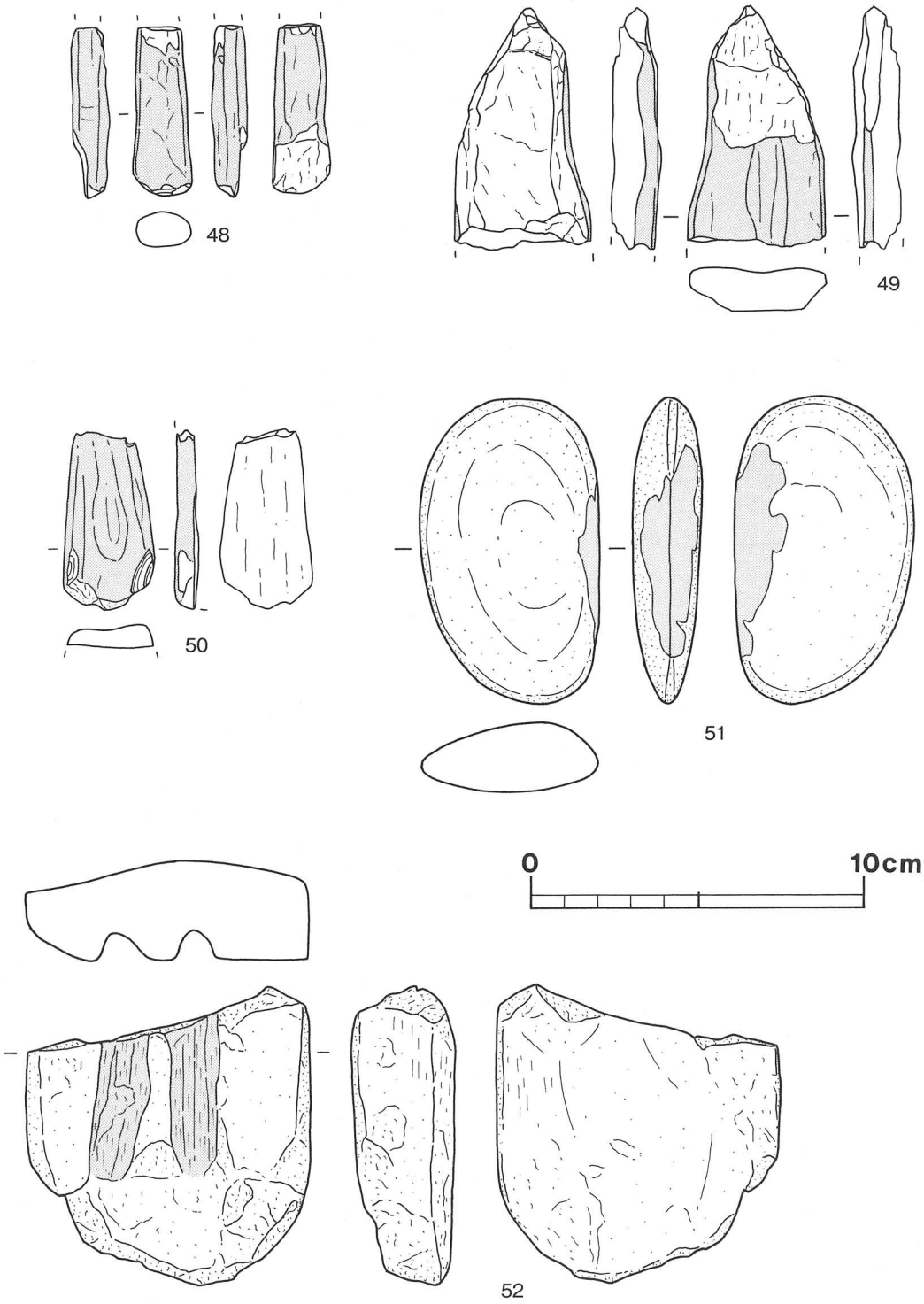
第８号住居跡出土石製品

単位：cm・g

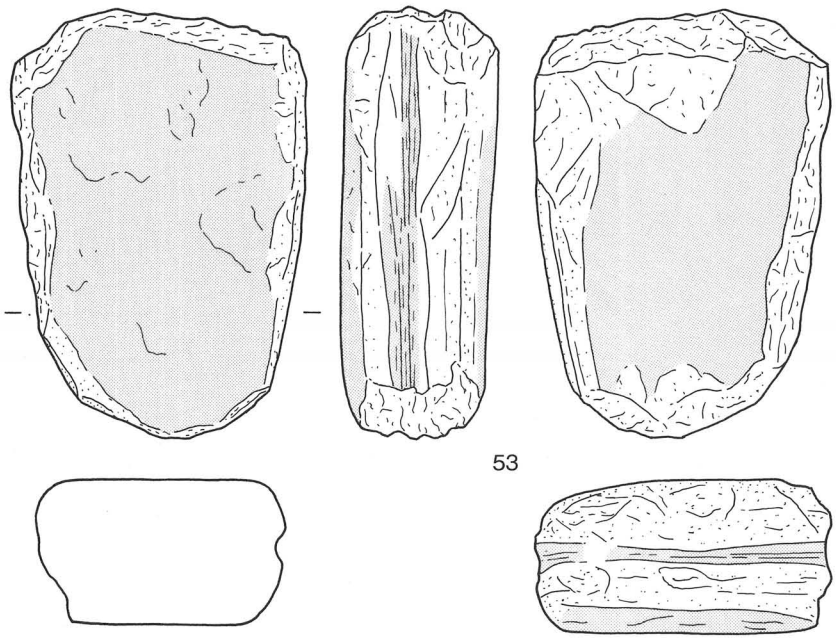
図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
21	石製品	砥石	10.15	3.4	1.95	108.0	凝灰岩	玉94
22	石製品	砥石	18.3	8.9	3.65	680.0	凝灰岩	玉95

第８号住居跡出土玉作関連遺物

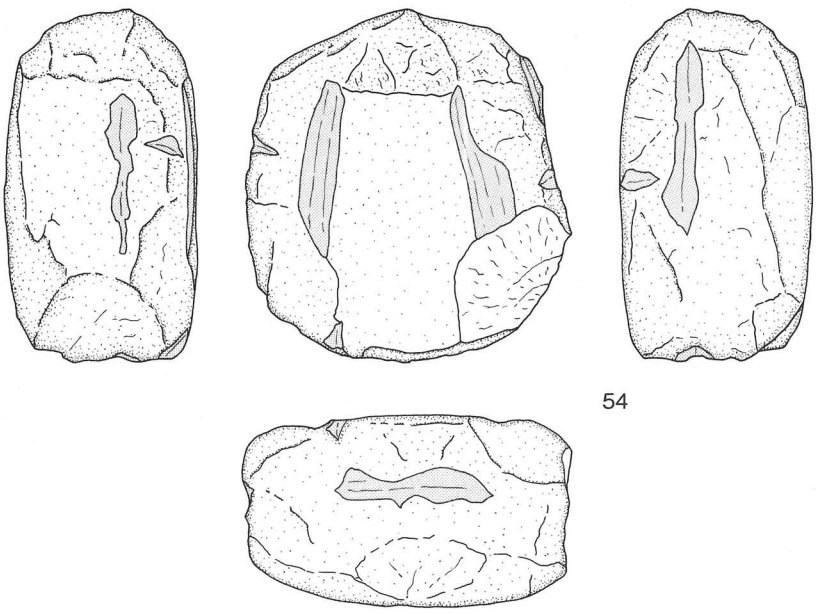
図版No.	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
23	勾玉荒割工程	3.75	4.75	1.90	31.20	メノウ	玉80
24	勾玉形割工程	2.80	1.75	1.10	6.59	メノウ	玉82
25	勾玉形割工程	2.80	1.95	1.50	7.04	メノウ	玉78
26	勾玉側面打裂工程	2.40	1.75	1.65	8.56	メノウ	玉85　SI-4（11）と接合
27	勾玉側面打裂工程	2.05	1.85	1.20	4.79	メノウ	玉65
28	勾玉形割工程	3.30	2.10	1.20	8.96	メノウ	玉79
29	勾玉研磨工程	3.10	2.00	1.00	8.07	メノウ	玉62
30	勾玉側面打裂工程	3.30	1.75	1.50	10.25	メノウ	玉61
31	剥片	3.90	3.20	1.10	11.18	メノウ	玉84
32	剥片	1.75	1.90	1.45	4.60	メノウ	玉83



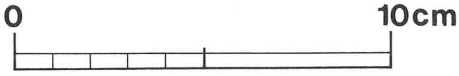
第131図　第８号住居跡出土遺物（10）



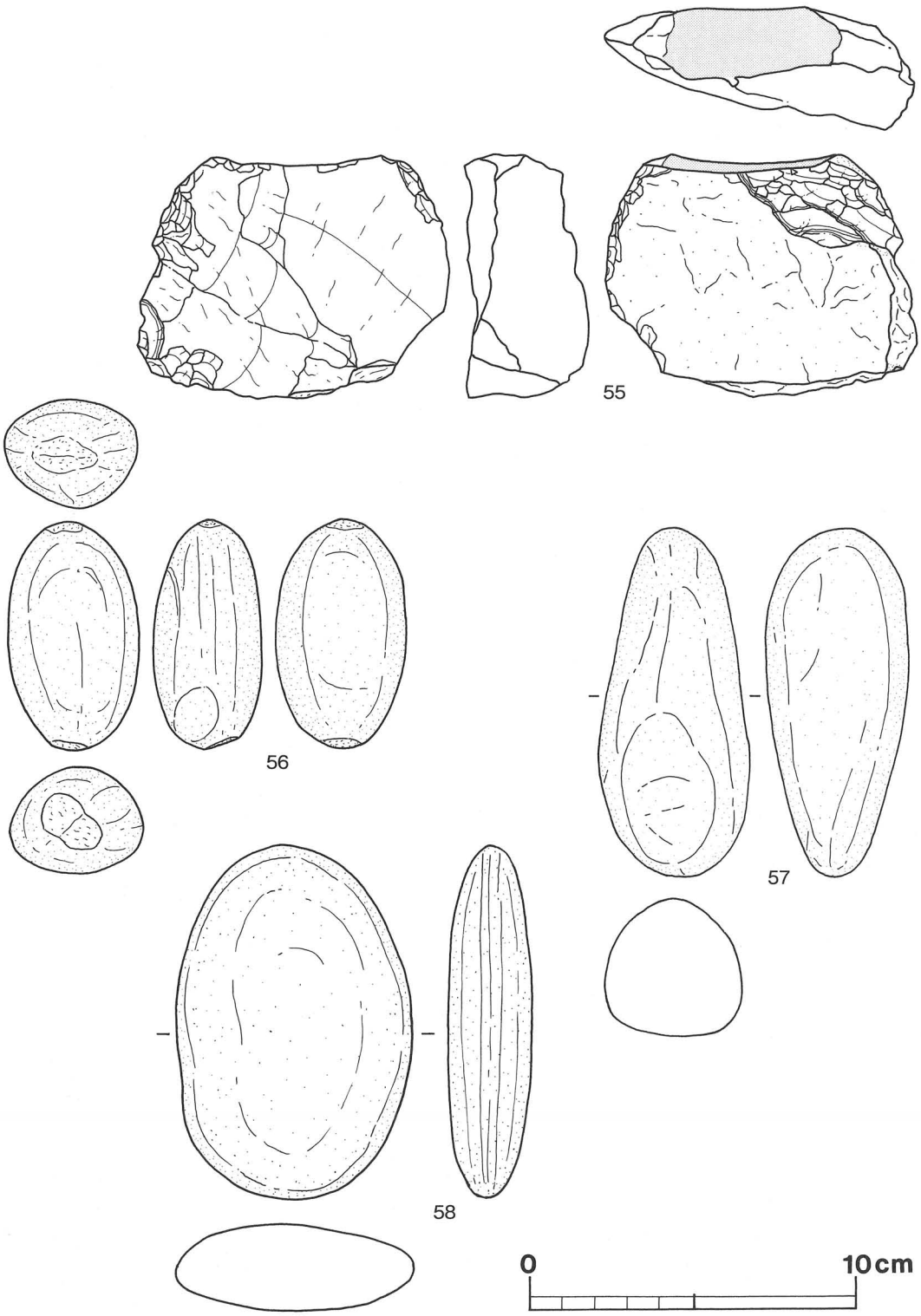
53



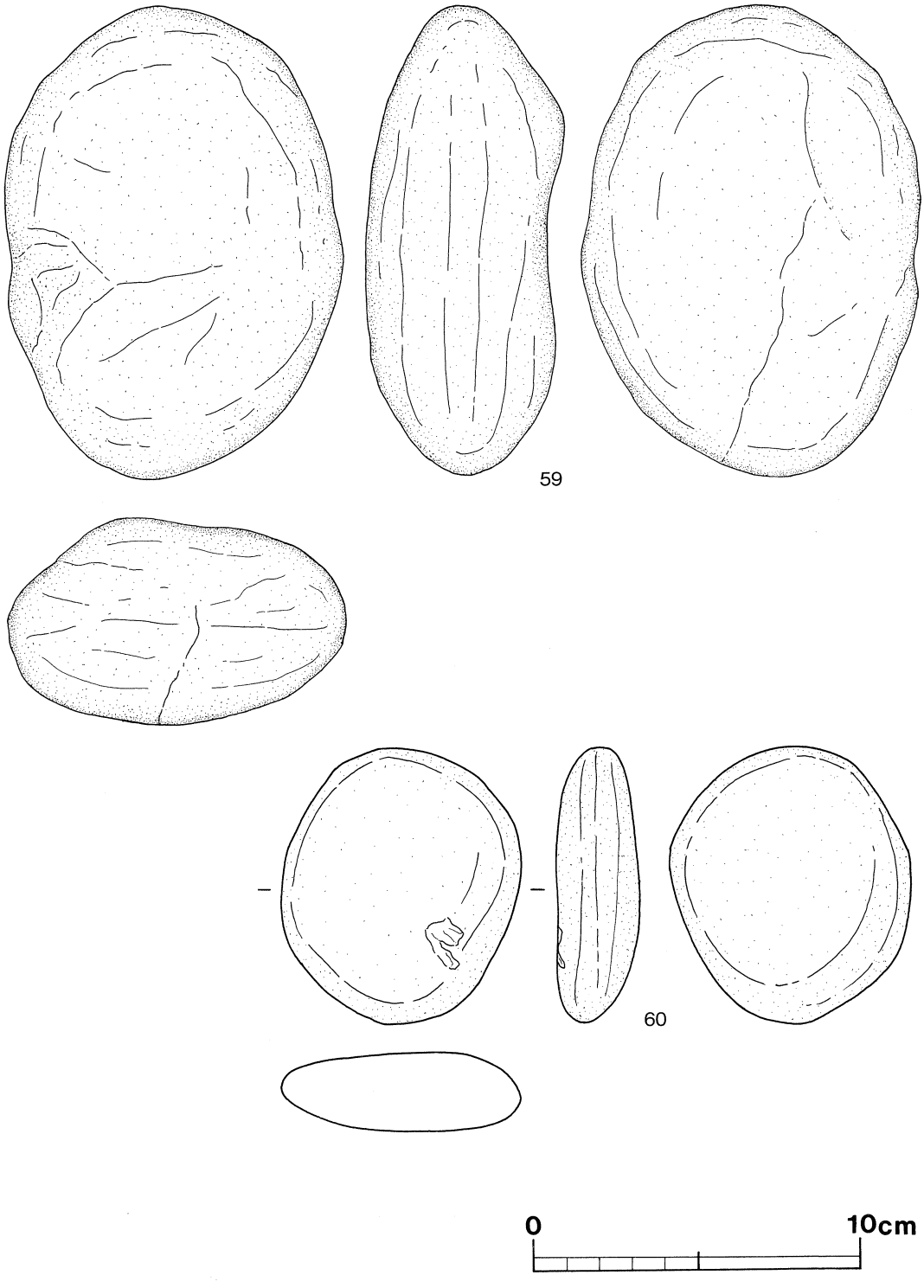
54



第132図　第８号住居跡出土遺物（11）



第133図　第８号住居跡出土遺物（12）



第134図　第８号住居跡出土遺物（13）

図版No.	種　別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
33	剥片	1.40	2.40	1.10	2.93	メノウ	玉81
34	管玉荒割工程	3.75	2.00	2.00	6.92	緑色凝灰岩	玉66
35	剥片	3.10	2.95	1.05	8.50	緑色凝灰岩	玉73
36	剥片	4.50	4.40	1.40	14.45	緑色凝灰岩	玉72
37	管玉側面打裂工程	2.60	1.85	1.35	13.84	緑色凝灰岩	玉67
38	剥片	3.20	2.55	1.50	9.20	凝灰岩	玉69
39	剥片	2.80	3.50	1.20	10.82	緑色凝灰岩	玉76
40	管玉側面打裂工程	4.40	2.30	1.60	7.15	緑色凝灰岩	玉71
41	剥片	4.70	2.10	1.00	9.80	凝灰岩	玉74
42	剥片	3.00	2.00	1.70	11.78	緑色凝灰岩	玉75
43	剥片	2.10	2.35	1.60	7.48	凝灰岩	玉63
44	剥片	5.10	3.05	1.35	7.48	緑色凝灰岩	玉64
45	剥片	2.40	3.15	1.20	8.49	緑色凝灰岩	玉77
46	剥片	2.75	2.10	1.25	4.25	緑色凝灰岩	玉70
47	剥片	2.60	2.75	1.10	7.40	緑色凝灰岩	玉68
48	内磨兼平砥石	5.10	1.70	1.10	13.27	片岩	玉88
49	内磨兼平砥石	6.95	4.10	1.40	49.68	片岩	玉86
50	内磨兼平砥石	5.20	2.70	0.70	12.23	片岩	玉87
51	内磨砥石	9.10	5.30	2.05	147.53	角礫凝灰岩	玉89
52	筋砥石	8.00	8.50	3.10	113.00	凝灰岩	玉90　軟質
53	平砥石兼筋砥石兼敲き石	11.10	7.80	4.10	550.45	凝灰岩	玉91
54	筋砥石兼敲き石	9.30	8.55	5.10	509.07	砂岩	玉92
55	平砥石兼敲き石	9.20	6.90	3.50	310.70	石英	玉96　No.73と接合
56	敲き石	7.00	4.00	3.30	134.25	砂岩	玉97　端部敲打
57	自然礫	10.10	4.60	4.40	277.05	砂岩	玉99　被熱
58	自然礫	10.80	7.20	2.60	302.24	砂岩	玉100
59	自然礫	10.20	6.20	4.50	1,233.34	石英斑岩	玉101　貯蔵穴内　被熱
60	自然礫	8.40	7.30	2.50	206.79	砂岩	玉98　被熱片面

第17号住居跡〔SI－17〕（第135図　ＰＬ75）

位　置　調査区北側の２Ａ・２Ｂ－７・８区に確認される。

重複関係　第２号集石と重複している。本住居跡が新しい。

主　軸　Ｎ－5°　－Ｗ。

規　模　長軸4.0×短軸3.8mのほぼ正方形を呈し、深さは確認面からおよそ15cmを測る。

床　床は全体に平坦であるが、北西隅に床の一部に円形の盛り上がりが見られた。径40cm・高さは５cmである。

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。

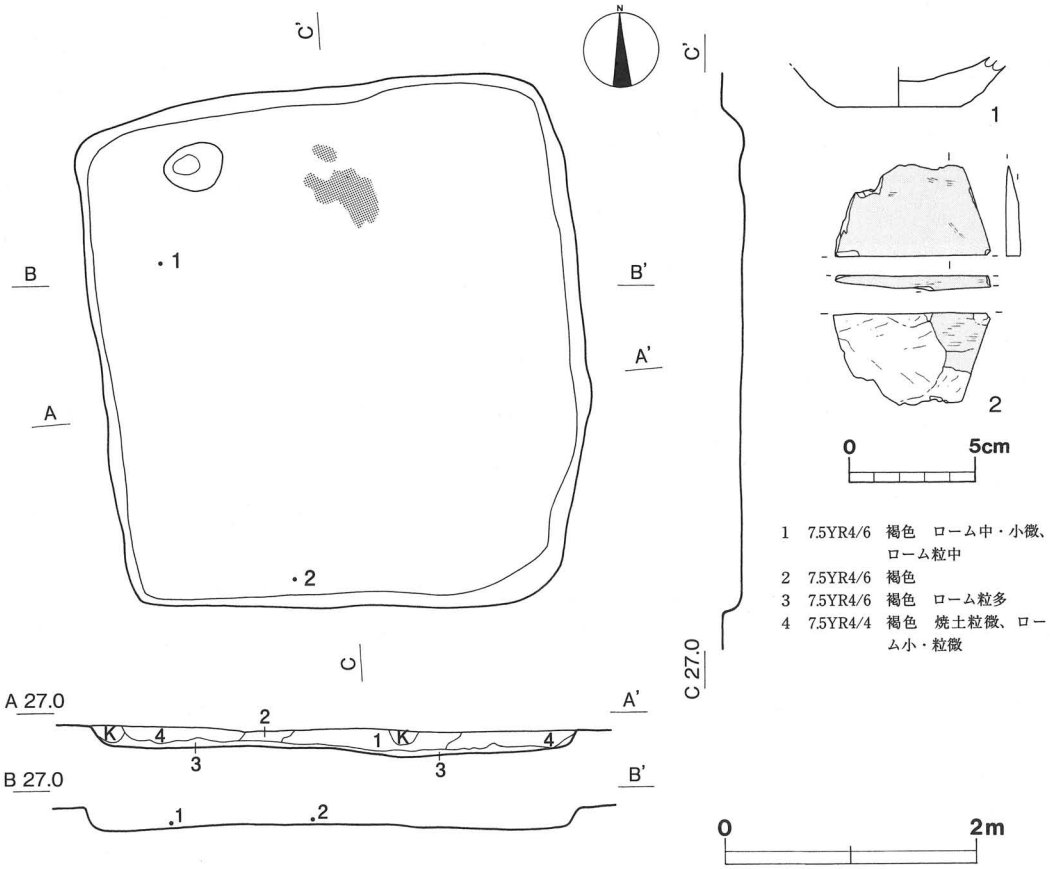
炉　北側に長軸70×短軸50cmの不整形の炉が確認された。掘り込みがほとんどない。

柱　穴　ない。

入口施設　北西壁隅近くの床面に円形の高まりが存在し、入り口に関わる施設とも考えることができる。

貯蔵穴　なし。

覆　土　４層から構成される。



第135図　第17号住居跡・出土遺物

遺物出土状況　小破片が散発的に出土した。第２号集石とかかわると思われる自然礫が数点出土している。

出土遺物　出土遺物は土師器甕小破片が少量出土しているが、微小なためほとんど図化していない。１は甕底部破片である。２は砥石破片で、刃物などの鉄製品を砥ぐためのものと思われる。

所　見　本住居跡は出土遺物や、遺構配置状況から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半)のものと位置付けられる。出土遺物は近接して存在する第18号住居跡同様に非常に少ない。住居内の施設から見て、機能的に住居として使用されたかは疑問なところがある。

第17号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼　成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	B：5.0 C：(1.6)	覆土下位 80% 普通	長石△、石英△、雲母△	にぶい赤褐 明赤褐	甕の底部破片。外面はナデ、内面は剥離している。被熱によって荒れている。	№230

第17号住居跡出土石製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
2	石製品	砥石	2.5	0.4	1.5	0.6	凝灰石	No.43

第18号住居跡〔SI－18〕（第136・137図　ＰＬ29・75）

位　置　調査区北側のＺ－５・６区から確認された。

重複関係　なし。

主　軸　北東壁際の土壇状の高まりを入り口に関係する施設と考え、Ｎ－38°－Ｅと推定。

規　模　一辺がほぼ3.2ｍの正方形を呈し、確認面からの深さはおよそ35cmを測る。

床　住居内の中央に径40cm・深さ５cmの浅いピットが確認され、その周囲のみが硬化している。北東壁に接して土壇状の高まりがあり、高さ９cmを測る。

壁　住居の北隅は緩く立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。

炉　なし。

柱　穴　Ｐ１からＰ５まで確認された。柱穴らしいものはＰ２で深さ107cmを測る。他のピットはいずれも10cm以内の深さのものであり、柱穴と呼ぶには規模が小さい。

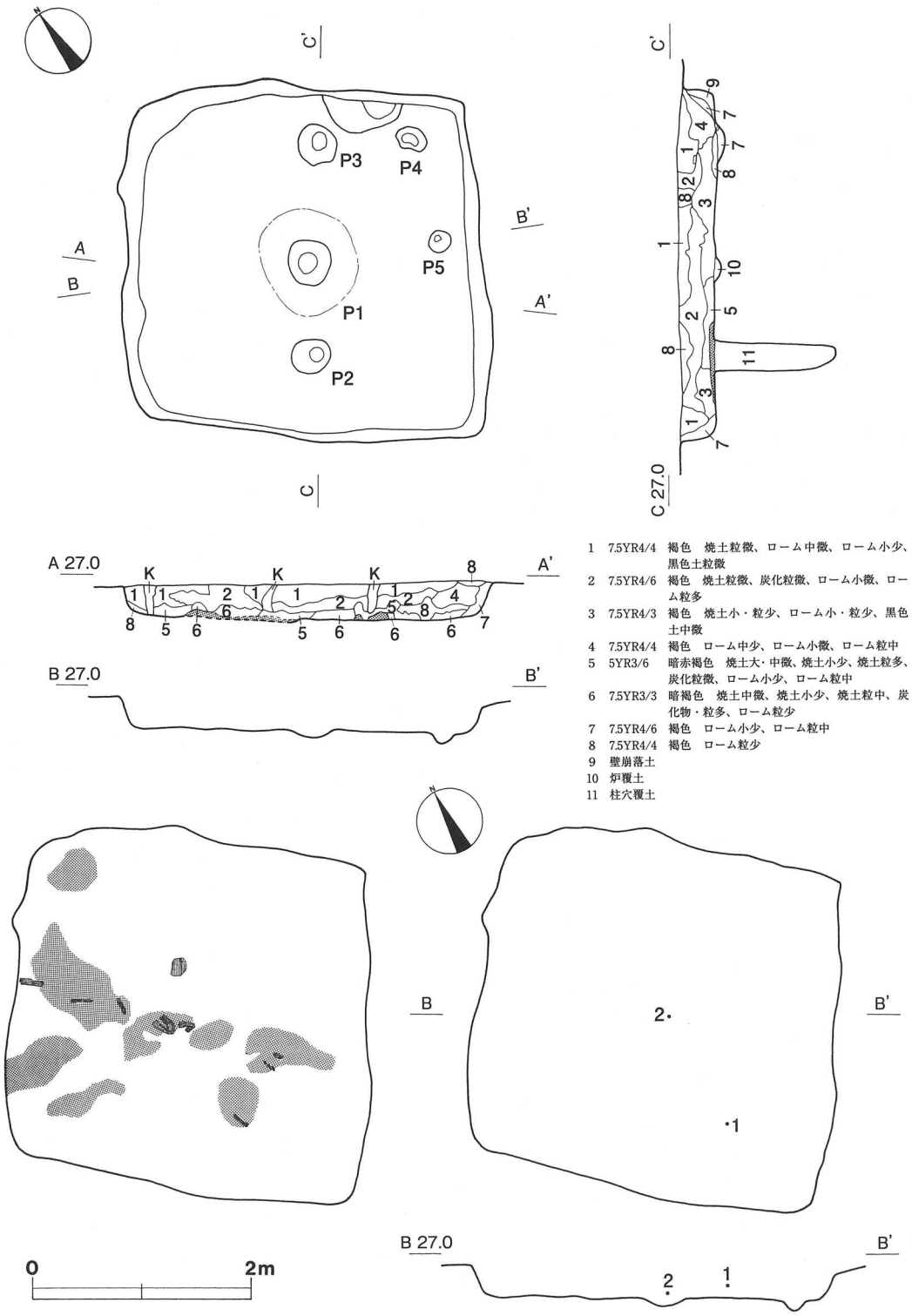
入口施設　北東壁際に半円形の土壇状の高まりが存在し、入り口に関わる施設と考えることもできる。

貯蔵穴　なし。

覆　土　北西壁から南東壁にかけての床面上に焼土の分布が見られる。焼土の分布に伴って炭化物が出土している。覆土上層にはローム粒が多く含まれる傾向が見られた。

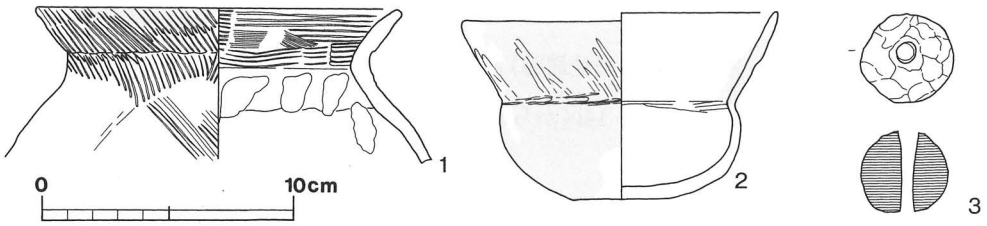
遺物出土状況　少数の土器片が散発的に出土している。

出土遺物　土師器と土製品が出土している。１は土師器甕であり、２は土師器坩である。２は外



1 7.5YR4/4 褐色 焼土粒微、ローム中微、ローム小少、黒色土粒微
2 7.5YR4/6 褐色 焼土粒微、炭化粒微、ローム小微、ローム粒多
3 7.5YR4/3 褐色 焼土小・粒少、ローム小・粒少、黒色土中微
4 7.5YR4/4 褐色 ローム中少、ローム小微、ローム粒中
5 5YR3/6 暗赤褐色 焼土大・中微、焼土小少、焼土粒多、炭化粒微、ローム小少、ローム粒中
6 7.5YR3/3 暗褐色 焼土中微、焼土小少、焼土粒中、炭化物・粒多、ローム粒少
7 7.5YR4/6 褐色 ローム小少、ローム粒中
8 7.5YR4/4 褐色 ローム粒少
9 壁崩落土
10 炉覆土
11 柱穴覆土

第136図　第18号住居跡・遺物出土状況



第137図　第18号住居跡出土遺物

面に炭化物が付着している。3は土玉である。

所　見　本住居跡は出土遺物から古墳時代前期中葉から後半（4世紀中葉から後半）のものと位置付けられる。出土遺物は近接して存在する第17号住居跡同様に非常に少ない。住居内の施設から見て、機能的に住居として使用されたかは疑問なところがある。焼土の分布と炭化物の出土状況から、本住居跡は焼失したものと考えられる。

第18号住居跡出土土器

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼　成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	甕 土師器	A：[14.2] C：(6.0)	覆土下位 50% やや不良	雲母△、砂粒、赤色粒	にぶい橙	頸部は緩く括れ、口縁部は外傾する。外面及び口縁部内面にはハケ調整、胴部内面には指頭痕が残る。	№231
2	坩 土師器	A：[12.6] B：3.6 C：7.4	覆土下位 90% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	にぶい赤褐 にぶい橙	扁平な坏部からやや頸部が括れ、口縁部が外傾して立上がる。頸部内面に稜を持つ。底面平底。外面坏部ナデ、口縁部ナデとヘラミガキ。	№232 炭化物付着

第18号住居跡出土土製品　　単位：cm・g

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	重量	出土位置	残存率	備考
3	土製品	土玉	3.2	3.5	38.3	覆土	完形	№322

2．竪穴遺構（ＳＸ）

第２号竪穴遺構〔SX－２（旧第14号住居跡）〕（第138図　ＰＬ29）

位　置　調査区中央のＹ・Ｚ－13・14区から確認された。

重複関係　なし。

主　軸　Ｎ－20°　－Ｅ。

規　模　長径2.4m×短径2.2mの小型の隅丸方形を呈し、確認面からの深さはおよそ８cmを測る。

床　平坦に構築されており、硬化面は見られない。

壁　わずかに緩く立ち上がる。

炉　長径55cm×短径40cmで床面の北側に１ヶ所確認された。

柱　穴　なし。

入口施設　不明である。

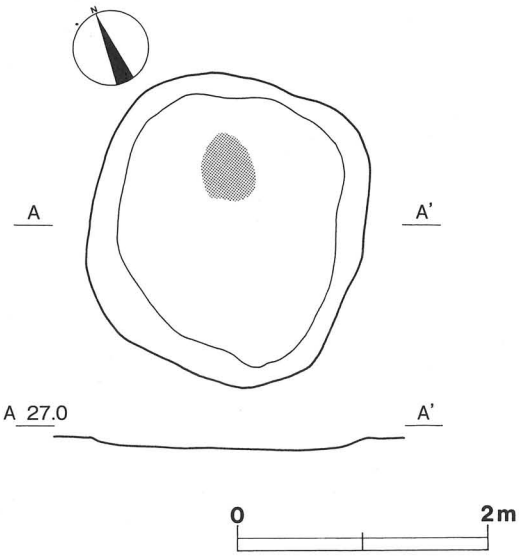
貯蔵穴　なし。

覆　土　焼土粒やローム粒が含まれる暗褐色土で占められていた。

遺物出土状況　土師器小片が出土した。

出土遺物　土師器小破片が出土したが、図化できるものはなかった。

所　見　本遺構はその在り方や覆土の状況から古墳時代前期中葉から後半（４世紀中葉から後半）のものと考えられる。遺構内には狭いながらも床面らしき平坦な部分が見られ、北側によって炉が確認されているが、規模が非常に小さい。通常の竪穴住居跡に見られる柱穴や貯蔵穴などの施設は確認されないことから、竪穴遺構として取り扱った。



第138図　第２号竪穴遺構

第３節　平安時代

平安時代の遺構として竪穴住居跡、火葬墓、溝跡が確認されている。竪穴住居跡は半島状に突き出た台地先端部に１軒確認されたのみである。台地中央部では７基の火葬墓が不規則に散開して存在し、墓域の様相を呈する。これらの遺構以外に調査区内では溝跡が１条確認された。また、調査区の谷を挟んだ西側の台地縁辺付近（周知の遺跡外）からは造成工事中に火葬墓が１基発見されており、出土位置は明確にし得ないが火葬墓の項で合わせて報告することにした。

１．竪穴住居跡（ＳＩ）

平安時代の竪穴住居跡は１軒のみ確認されており、半島状に延びた調査エリア内の先端部分から検出された。

第19号住居跡〔SI-19〕（第139～142図　ＰＬ30・76）

位　置　調査区の北端にあたる３Ａ・３Ｂ－１区から確認された。半島状の台地先端部にあたる。

重複関係　第49号土坑と重複し本遺構が古い。

主　軸　Ｎ－91°－Ｅ。

規　模　一辺がほぼ3.4ｍの方形を呈し、深さ50㎝を測る。東壁の南隅付近にカマドが構築されている。

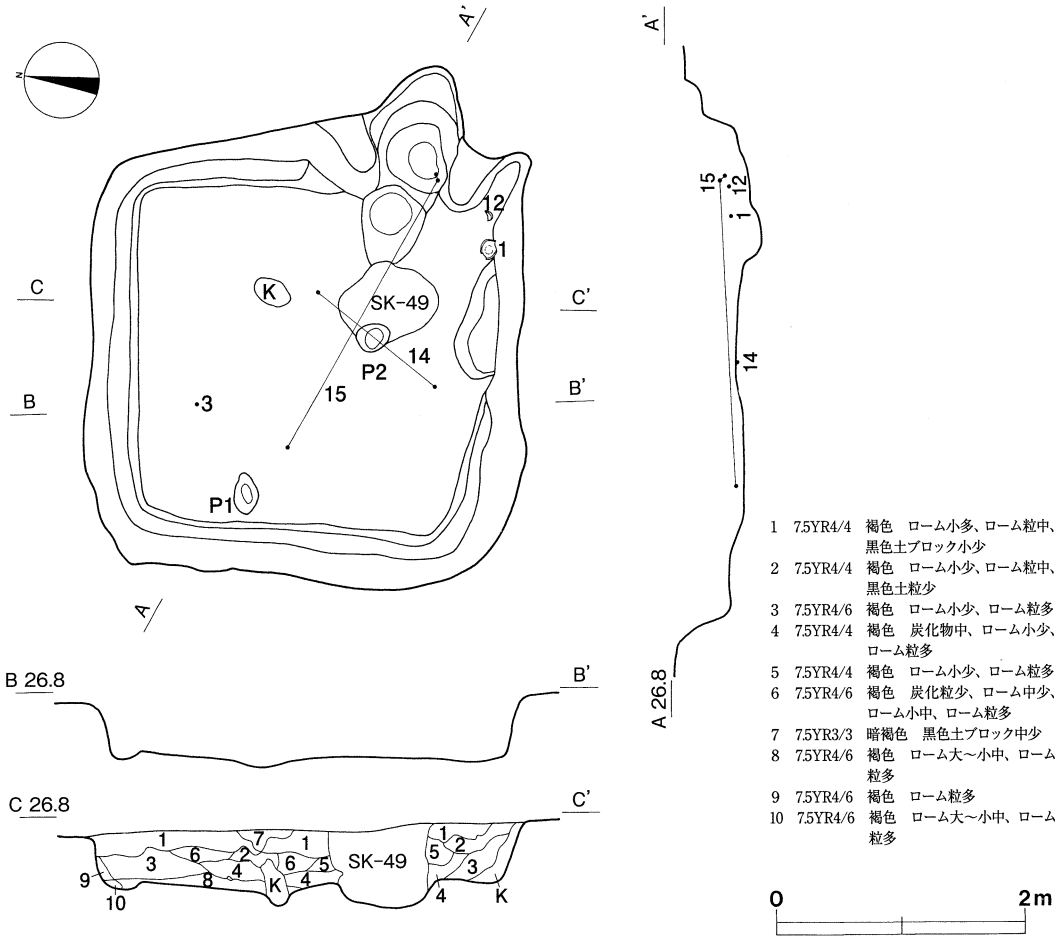
床　住居内のカマド焚き口西方で第49号土坑と重複し掘り込まれている。床面はおよそ平坦で、床面中央部の東西にピットが２基確認された。床はカマド内で見られる焼土や砂質粘土混じりの土層で貼り床されていた。貼り床の厚さは最大で７㎝程であり、土器の混入も見られた。

壁　住居跡の壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドが構築された壁際を除き壁溝がほぼ全周する。壁溝の幅はおよそ25㎝で深さは４～５㎝である。

カマド　東壁の南隅付近に寄ってカマドが構築されている。規模は長軸170㎝・短軸79㎝で、壁外を50㎝程度掘り込んで構築されている。カマド燃焼部は浅く皿状に凹み、その前方の焚き口部は床面から10㎝程窪んでいる。袖は住居跡壁面に接して、左右に砂質白色粘土で構築されていた。土層は11層で構成され、第８・９層に焼土粒が多量に含まれていた。第５層には白色粘土粒が多量に含まれており、粘土で構築された天井部の崩落土の可能性があろう。

その他の施設　床面中央の西側と東側に１基ずつピットが確認され、Ｐ１は長径30㎝×短径20㎝・深さ11.8㎝で、入り口に関わるものかも知れない。Ｐ２は長径30㎝×短径20㎝・深さ46.6㎝であった。

覆　土　遺構覆土は10層で構成され、いずれの土層も褐色を基調とする土層からなる。第４層に

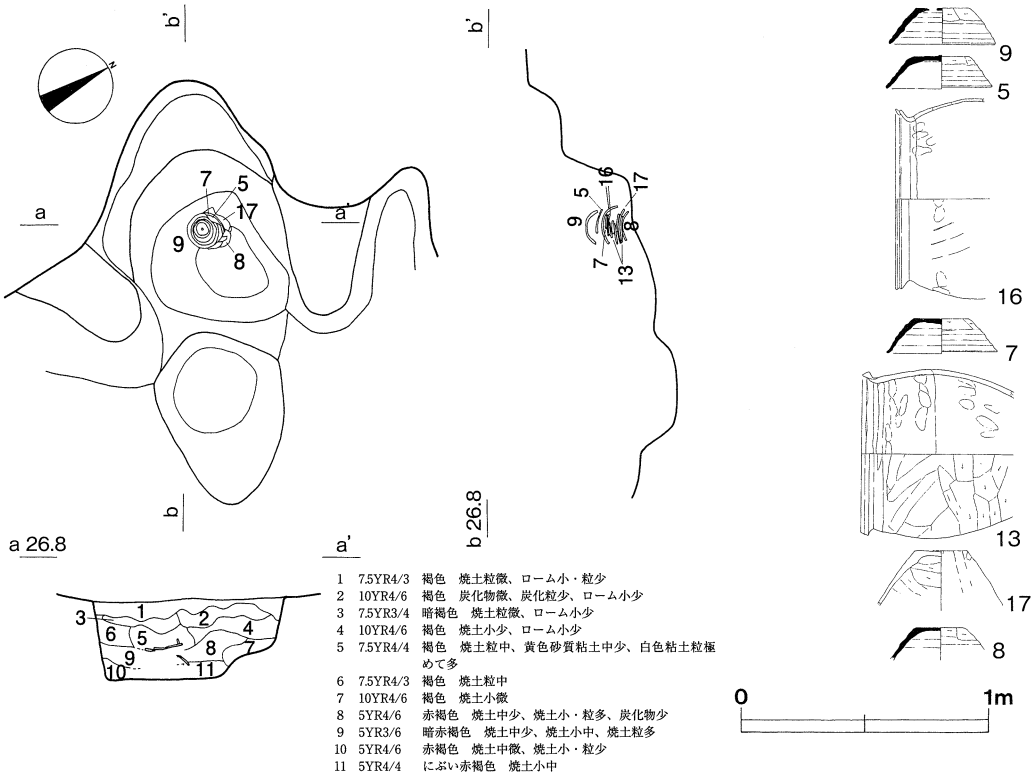


第139図　第19号住居跡・遺物出土状況

は炭化物粒が比較的多く含まれる。第１層下の層界は明瞭で堆積状況が異なることが想定される。

遺物出土状況　カマド燃焼部奥から須恵器坏や土師器甕破片が重なるように出土している。重なり具合は、下から８→17→13→７→16→５→９の順番である。須恵器坏はいずれも底部を上にして重ねられ、土師器甕底部も同様である。土師器甕破片は胴部破片を横に用いている。これらの中には土師器坏は見られない。これらの土器は支脚の転用品としての役割が考えられるが、坏の間に甕破片を挟む重ね具合には不安定さが伴い、機能的とは思われない。このことから、その重なり具合には特別な意味合いを感じさせる。また、３の土師器高台付坏は床下の貼り床土中から出土した。

出土遺物　出土遺物は土師器と須恵器が出土している。１・２は土師器坏でいずれも内面黒色処

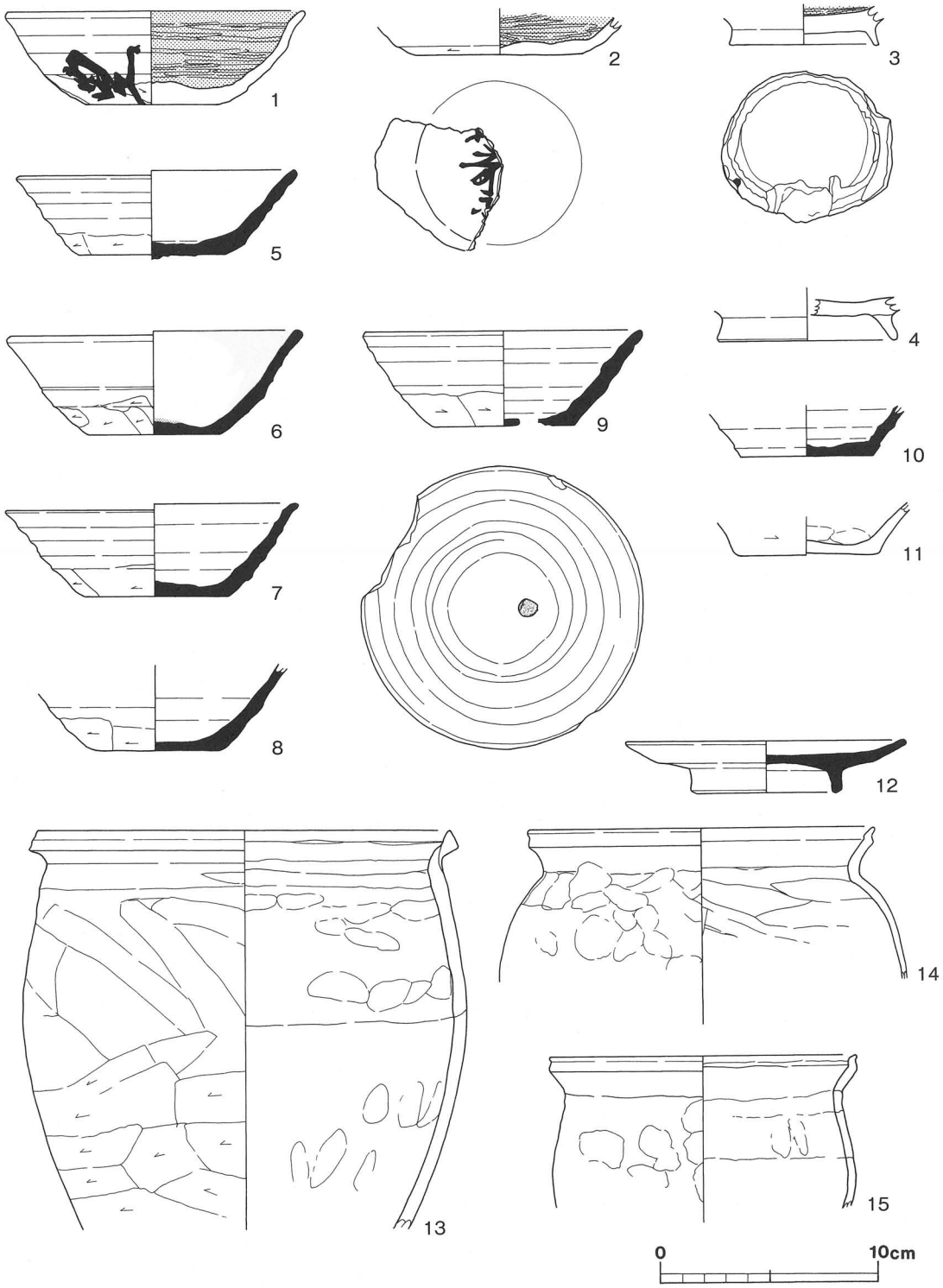


第140図　第19号住居跡カマド・遺物出土状況

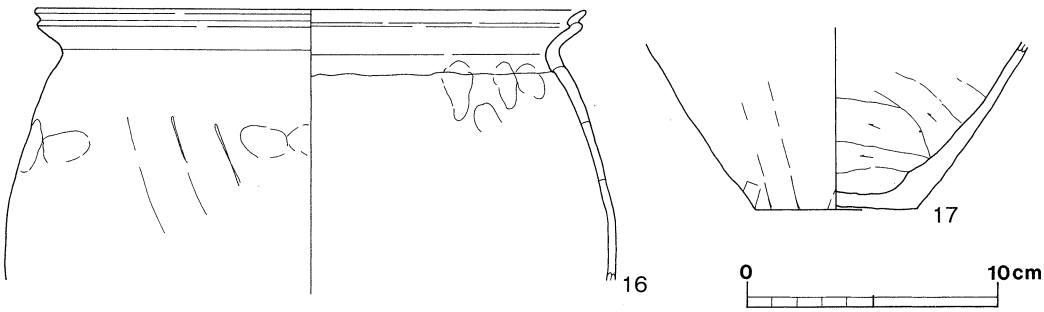
理されたものである。１の側面に「豊」、２の底面には判読不明な文字が３文字程度墨書される。３・４は高台付坏の高台部で、３の側面には墨書の痕跡が残る。５～10は須恵器坏で、５のような底径がやや広めのものも出土している。６の口縁部内面には油煙が付着しており、灯明を点した痕跡と思われる。９の底面には焼成後の意図的な穿孔が内側からなされている。12は須恵器高台付皿である。11・13～17は土師器甕である。14～16の口縁部形態は当地域で一般的なものであるが、13は異質なものである。13の胎土には金雲母が含まれ、ほかの土師器甕の胎土とやや異なる。

所　見　平安時代の竪穴住居跡は本跡の１軒のみである。その確認状況も特徴的で、半島状に張り出した台地先端で見つかり、集落とは隔絶した状況を示してしる。類似した確認状況は同区画整理事業地内の長峯遺跡第10号住居跡や、壱杯清水西遺跡の重複した第７・16号住居跡があげられる。長峯遺跡例は立地やカマド内の遺物出土状況が類似する。また、壱杯清水西遺跡の第７・16号住居跡出土遺物に「案豊」や「□豊」の墨書土器が見られ興味深い。

遺構の時期は出土遺物に須恵器が多く含まれる点や、内面黒色処理された土師器が若干見られるなどの特徴から、９世紀後半のものと考えられる。この時期については火葬墓の作られた時期とも関連する可能性のあることが指摘できる。



第141図　第19号住居跡出土遺物（1）



第142図　第19号住居跡出土遺物（2）

第19号住居跡出土遺物

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	坏 土師器	A：[13.9] B：6.9 C：4.3	覆土下位 80% 良好	長石△、石英△、雲母△、赤色粒	にぶい橙 黒	口縁部一部欠損。ロクロ成形。底面は回転ヘラ切りの後一方向のヘラ削り。底部側縁手持ちヘラ削り。内面はヘラミガキ、黒色処理。	№237 外面に墨書「豊」
2	坏 土師器	B：[7.6] C：(1.6)	覆土 25％ 良好	長石△、石英△、雲母△、赤色粒	にぶい褐 黒	坏の底部破片。底面回転ヘラ削り。底部側縁ヘラ削り。内面ヘラミガキ。黒色処理。	№239 底面に墨書「□□□」
3	高台付坏 土師器	B：[6.8] C：(1.7)	床下 80% 良好	砂粒、雲母 ○	にぶい橙 黒	高台付坏の底部。細くやや開く高台が付く。底面・外面はナデ。内面はヘラミガキで黒色処理される。	№242 外面に墨痕又は墨書か
4	高台付坏 土師器	B：[8.4] C：(2.0)	覆土 40% やや不良	長石△、石英△、雲母△	橙 灰黄褐	高台付坏の底部。やや高い高台が付く。底面は回転ヘラ切り。外面被熱で赤化、内面は本来黒色処理か。	№324
5	坏 須恵器	A：13 B：6.8 C：3.9	竈内 100% やや不良	長石◎、石英◎、雲母 ○	にぶい黄橙 にぶい橙 （一部）	ロクロ成形。底部から外傾して立ち上がる。底部は回転ヘラ切り。底部側縁手持ちヘラ削り。器面がざらつく。	№235 転用支脚
6	坏 須恵器	A：[13.7] B：6.0 C：4.8	竈内ほか 90% やや不良	長石○、石英○、雲母 ○	灰黄 にぶい橙 （被熱部）	口縁部の一部を欠損。ロクロ成形。底部から外傾して立ち上がり、口縁部がやや外反。底部は回転ヘラ切り。底部側縁手持ちヘラ削り。	№238 一部被熱赤化 口縁部内面に油煙付着
7	坏 須恵器	A：13.6 B：6.6 C：4.3.	竈内 100% やや不良	長石○、石英○、雲母 ○	にぶい黄橙	ロクロ成形。底部から外傾して立ち上がる。底部は回転ヘラ切り。底部側縁手持ちヘラ削り。底面に敷物の圧痕。	№233 転用支脚 内外面に黒斑あり
8	坏 須恵器	B：6.6 C：(4.0)	竈内 90% やや不良	長石◎、石英◎、雲母 ○	黄灰	口縁部を欠損。ロクロ成形。底部から外傾して立上がる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。底部側縁手持ちヘラ削り。口縁部は打ち欠きか。	№236 転用支脚 黒斑あり
9	坏 須恵器	A：[13.2] B：6.6 C：4.4	竈内 95% やや不良	長石◎、石英◎、雲母 ○、赤色粒	にぶい橙	口縁部の一部欠損。ロクロ成形。底部から外傾して立上がる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ。底部側縁手持ちヘラ削り。底面に焼成後穿孔。	№234 転用支脚
10	坏 須恵器	B：[6.2] C：(2.0)	覆土 60％ 良好	長石△、石英△、雲母 ○	灰白	坏の底部片。やや薄手。ロクロ成形。ロクロ目良く残る。底部は回転ヘラ切りの後一方向の削り、そしてナデ。底部側縁手持ちヘラ削り。	№240
11	小型甕 土師器	B：[6.8] C：(2.0)	覆土 40% 普通	長石◎、石英◎、雲母 ○	明赤褐	甕の底部破片。底面に木葉痕と敷物の圧痕。外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。外面に白色の付着物あり。	№249 一部被熱赤化
12	高台付皿 須恵器	A：[13.0] B：[7.0] C：2.4	覆土下位 40% やや不良	長石○、石英○、雲母 ◎	灰	ロクロ成形。直立した高台が付く。皿部は水平に伸び、口縁部がやや内傾する。皿部側縁はヘラ削りがかすかに残る。	№241
13	甕 土師器	A：[19.0] C：(18.4)	竈内ほか 30% 普通	長石△、金雲母△、赤色粒	黄橙	胴部肩は張りが見られず頸部へ続き、断面三角形の口縁部が緩く外傾する。胴部下半はヘラ削り、上半はヘラナデ。口縁部はナデ。	№243 被熱 転用支脚
14	甕 土師器	A：[16.1] C：(7.0)	床下 30% 普通	長石○、石英○、雲母 ○	灰褐	胴部から口縁部の破片。頸部が括れ、口縁部がやや外傾し口唇部が摘み上げられる。胴部外面指頭痕、口縁部ナデ。胴部内面ヘラナデ。	№246

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
15	小型甕 土師器	A：[16.0] C：(7.0)	竈内ほか 30% 普通	長石◎、石英◎、雲母△	明赤褐	甕の胴部から口縁部の破片。頸部の括れは緩く、口縁部はやや外傾して端部が摘み上げられる。胴部外面には指頭痕、内面にはヘラナデ。	№247 被熱赤化
16	甕 土師器	A：21.8 C：(10.8)	竈内 40% 良好	長石◎、石英◎、雲母△	明赤褐	胴部から頸部が括れ、口縁部が外傾し口唇部が摘み上げられる。外面はナデ、内面はヘラナデ。17と同一個体か。	№244 被熱赤化 転用支脚
17	甕 土師器	B：6.4 C：(6.5)	竈内 60 % 良好	長石◎、石英◎、雲母△	明赤褐	甕の底部破片。底部から外傾して立上がる。底面には敷物の圧痕。外面はヘラ削りの後ナデ。内面はヘラナデ。白色の付着物あり。	№248 被熱赤化 転用支脚

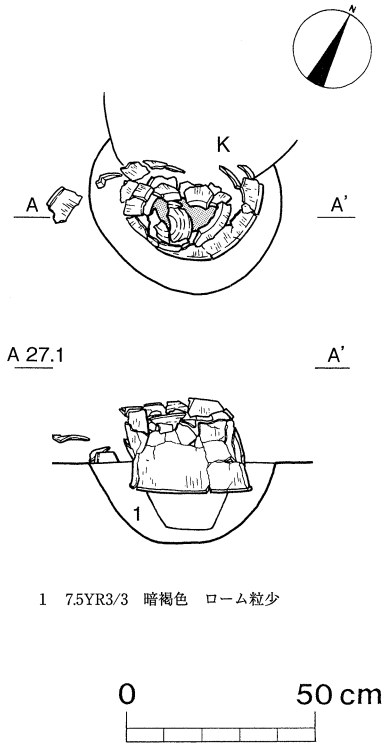
2．火葬墓（ＣＴ）

火葬墓としたものは須恵器や土師器、そして灰釉陶器を骨蔵器として、その中に火葬骨を入れ、地中に埋納したものである。調査エリア内から火葬墓は６基確認され、骨蔵器は須恵器が２点、土師器が３点、灰釉陶器のものが１点である。このほかに、調査エリア外から工事中に出土したものを１点加えて報告することにした。

第1号火葬墓〔CT-1〕（第143・144図　ＰＬ31・77）

遺　構　調査区の南端の２Ｃ－29区から木の根に押し潰された状態で発見された。土坑のプランは細かい根の撹乱によって確認が難しく、骨蔵器の上部を露出する程度まで確認面を下げ、さらに土坑を半截するサブトレンチを設定して土層観察を行った。その結果、確認面において径50cm、深さ22cmの円形土坑を確認した。土坑本来の規模はさらに大きなものを考えて良いであろう。

覆土は暗褐色土の単一層である。骨蔵器は須恵器甕を本体として正位に埋納し、大きな須恵器鉢を被せていた。また、鉢の底部破片の間からは、須恵器坏が底部を上に向けた状態で検出された。この坏は、当初中蓋として鉢の中に置かれたものと考えていたが、口径が小さく甕の口を塞ぐことはできない。したがって鉢の上に載せられていた可能性が高いが、鉢の底部の破壊が著しくこれを確定することはできなかった。

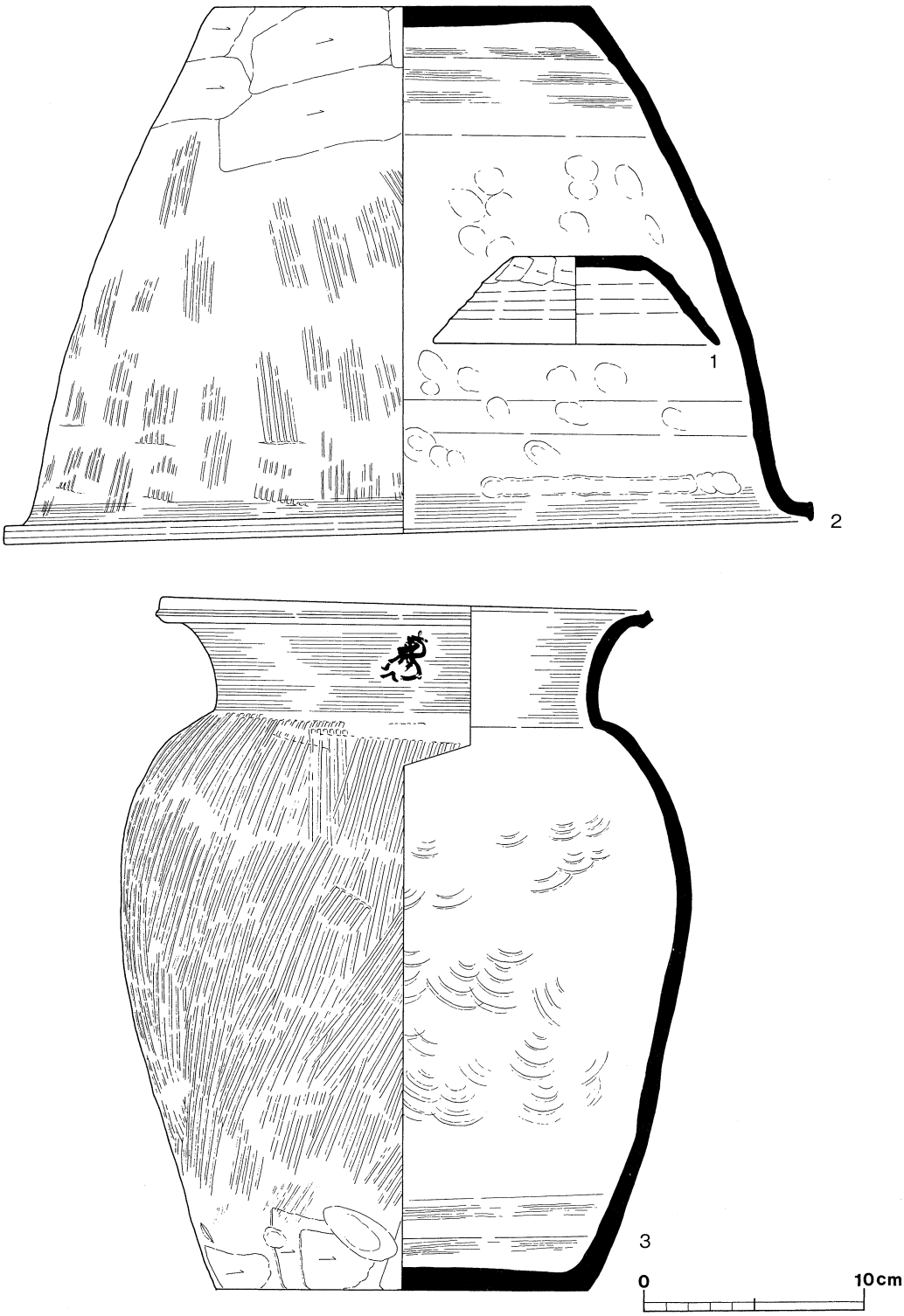


第143図　第１号火葬墓

出土遺物　骨蔵器は須恵器の甕・鉢・坏で構成される。甕は完形で、比較的太い頸と大きく開く口縁部を持ち、やや軟質の焼成を呈する。鉢はほぼ完形で、大きな口径を持つため甕の上半分を覆うことができる。坏は、底部が小さく体部は直線的に大きく開く。約1／2が残存するが、完形であっても甕の口径に対応せず、中に落ち込んでしまう。中蓋としての使用は不可能と思われる。甕の頸部には墨書があり、赤外線写真の撮影を試みた。しかし、墨が滲み字形がはっきりしないため、判読できなかった。

火葬人骨の残存状況は不良である。計105ｇを検出し、鑑定の結果、成人女性と判定された。

なお、甕の中を精査した際、火葬人骨の他にネズミと思われる小動物の骨が検出された。この骨は新しいもので、甕の中に落ち込んだ鉢の破片の下から集中して見つかっている。近年中に甕の割れ口から侵入し、鉢の破片によって圧死したものと思われる。顎の数から少なくとも４匹は



第144図　第１号火葬墓出土遺物

第１号火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	坏 須恵器	A：13.0 B：[5.8] C：(4.4)	1/2	普通	径１㎜の長石・石英粒を多量、雲母片を中量	灰色 灰色	底径が小さく、直線的に大きく開く体部をもつ。体部下位に手持ちヘラ削り、底部は切り離し後一方向からのヘラ削りを施す。体部内面に回転ナデが目立つ。	No.345
2	鉢 須恵器	A：36.8 B：17.0 C：24.5	ほぼ完形	やや不良	径１㎜の長石・石英粒を少量、雲母片を多量	黒褐色 にぶい褐色	比較的大きな径をもつ鉢。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、直角的に屈曲する口縁部がつく。口唇部は小さく垂直方向につまみ上げる程度。体部外面に縦方向の平行線の叩き、下位にヘラ削りを施す。内面はヘラと指による横方向のナデと多数の指頭圧痕がみられる。	No.344 体部内面に豆粒状の剥離が僅かにみられる。焼成が軟質でもろい。
3	甕 須恵器	A：22.2 B：16.8 C：31.6	ほぼ完形	やや不良	径１㎜の長石・石英粒を多量、雲母片を少量	にぶい褐色 にぶい褐色	最大径は体部中位やや上にあり肩が張る。頸部は太く、強い角度で立ち上がる。口縁部付近は強く横方向に張り出し、断面三角形の小さな口唇部がつく。体部外面に縦方向の平行線の叩き、下位にヘラ削りを施す。内面は多数の同心円状の押さえ跡がみられる。	No.343 土師器に近い色調を呈する。頸部に墨書、判読不能。

確認されている。

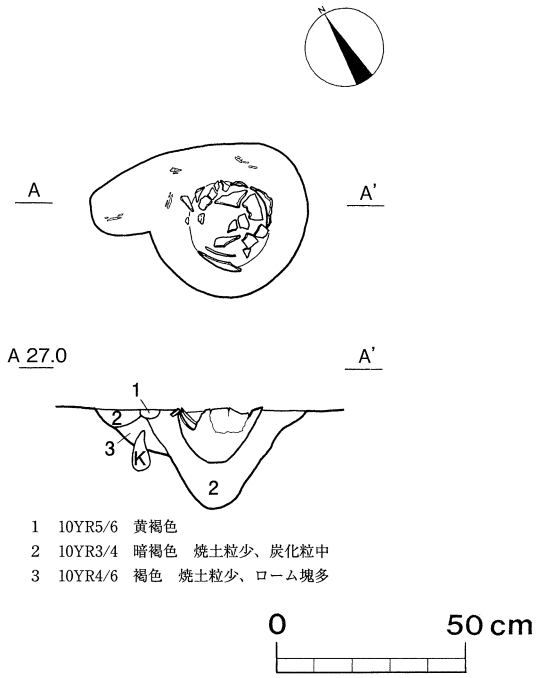
所　見　本遺構は出土遺物から９世紀中頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と判定された。

第２号火葬墓〔CT-２〕（第145・146図　ＰＬ31・77）

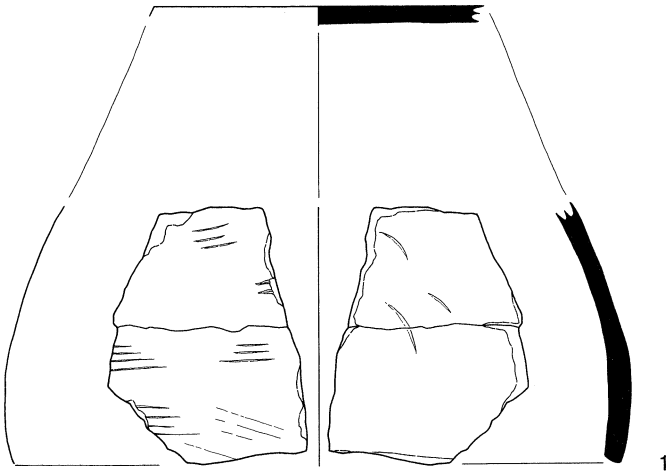
遺　構　調査区の中央やや西よりのＱ－18区に位置し、最も近い第５号火葬墓との距離は約30m程である。確認面では、不整円形の土坑に土師器片が散乱する状態で発見された。遺構の上半分が削平されてしまった状況である。土坑は、径45cmの円形土坑を中心に、その北西側にも若干の掘り込み部分が存在する。深さは円形土坑の中心部が最も深く、確認面から25cmを測る。骨蔵器は土師器甕を用い、この円形土坑の中央に正位に埋納されていた。

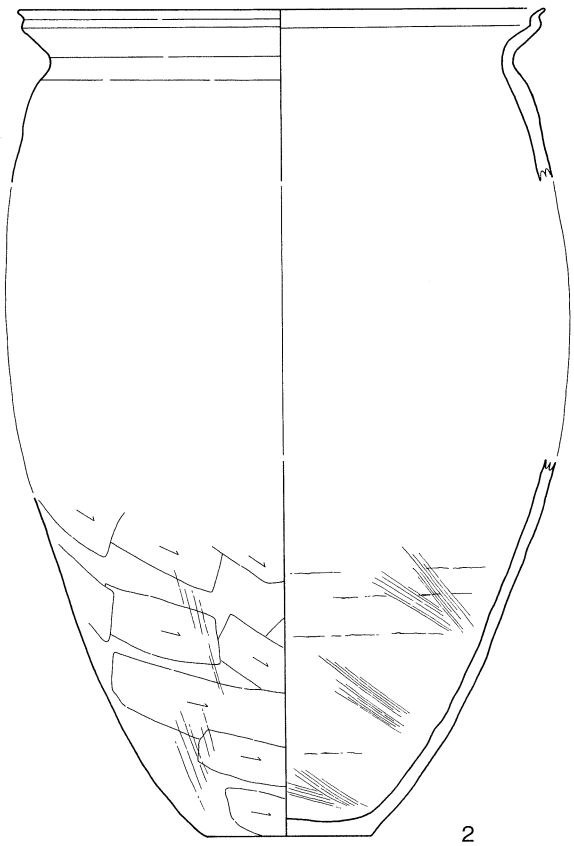
覆土は３層からなり、第２層は５㎜ほどの炭化物粒子を僅かに含んだ暗褐色土である。

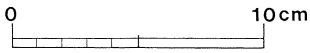
出土遺物　骨蔵器の本体は、２の土師器甕である。甕の下半分、及び口縁部付近の破片が残存している。長胴で体部中位に最大径を持つ一般的な甕であり、比較的粗い作



第145図　第２号火葬墓







第146図　第２号火葬墓出土遺物

りである。また、甕内部に落ち込む形で１の須恵器甕の破片が残存していた。体部中位と底部の破片のみであるが、特に前者には、割れ口を磨いて口縁を再生している様子が観察された。おそらく甕の口縁部や体部上位を割り取り、鉢状の形の器形に再加工したのであろう。蓋として土師器甕に被せていたものと思われる。

火葬人骨は705ｇ残存しており、成人男性と鑑定された。

所　見　本遺構は出土遺物やほかの調査事例から９世紀前半から９世紀中頃のものと考えるのが妥当かと思われる。骨臓器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。

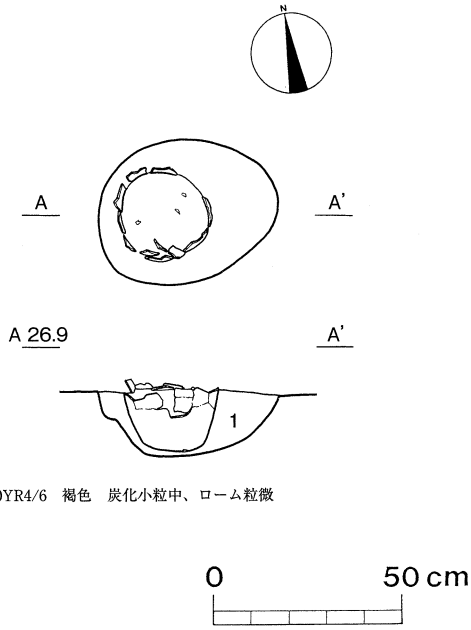
第２号火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調　外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 須恵器	C:(10.1)	細片	不良	微細な長石粒を少量、雲母片を中量	にぶい黄色 にぶい黄橙	須恵器甕の体部中位と底部の破片が残存する。体部中位の破片の上方には割れ口を磨いた痕跡がある。体部上位を割り取って鉢状にした後、口縁部を再生したものと思われる。体部外面に横方向の平行線の叩きを施し、内面には横・斜方向のヘラナデと押さえの跡がみられる。	No.374 焼成は軟質
2	甕 土師器	A:[21.0] B:6.6 C:[33.0]	1/2	普通	径１㎜の長石・石英粒を多量、雲母片を少量	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	体部下位と口縁部付近が残存する。最大径は体部中位にあり、口径より若干大きい程度と思われる。口縁部はハの字に開き、薄い口唇部が強く外反する。外面は体部中位以下に斜方向にヘラ削り、内面は横と斜め方向のヘラナデを施す。	No.346

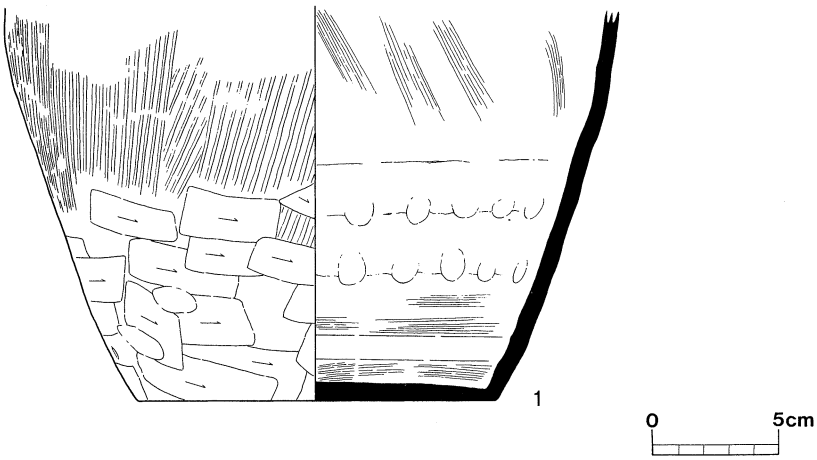
第３号火葬墓〔CT-３〕（第147図　ＰＬ32・77）

遺　構　調査区の北よりの２Ｂ－８区で確認され、第６号火葬墓に隣接する。確認面において甕の上半分が重機によって削平された状態で発見された。土坑は長軸50cm、短軸38cmの楕円形プランで、深さは確認面より18cmである。須恵器甕を用いた骨蔵器はこの土坑の底に正位に埋納されており、第１層の褐色土が周囲に充填されていた。この褐色土の中にはローム粒のほかに、１cmに満たない炭化粒が少量含まれていた。意図的に混入したと考えるには少な過ぎる量である。

出土遺物　骨蔵器は須恵器甕を使用している。体部下位の約15cmが残存している。器



第147図　第３号火葬墓



第148図　第３号火葬墓出土遺物

形や調整は住居跡から検出される一般的な甕と共通するものである。この他に蓋に相当するような土器は検出されていない。

火葬人骨の残存状況は、甕内部への土の流入により不良であった。290ｇが残存し、成人女性の骨と鑑定された。

所　見　本遺構は出土遺物やほかの出土事例からおよそ９世紀前半から９世紀中頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は、成人女性と鑑定された。

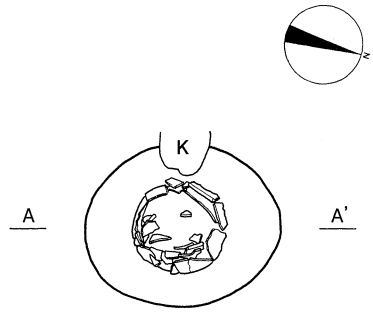
第３号火葬墓出土遺物

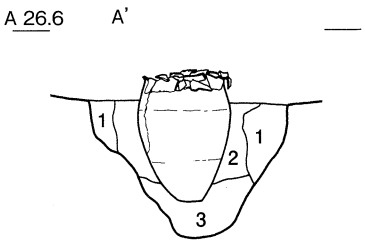
図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 須恵器	B: 14.2 C: (15.6)	1/2	普通	径１㎜の長石・石英粒を中量、雲母片を少量	にぶい黄橙色 にぶい褐色	体部中位以下が残存する。体部はほぼ中位まで直線的に立ち上る。体部外面に縦方向の平行線の叩き、下位にヘラ削りを施す。内面は体部に縦方向、底部付近に横方向のヘラナデを施す。	No.348 土師器に近い色調を呈する。

第４号火葬墓〔CT-４〕（第149・150図　ＰＬ32・77）

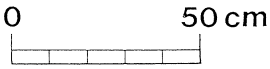
遺　構　調査区の西端であるＣ－17区に立地する。第２号火葬墓からは58m離れる。木の根の抜き取り作業中、土師器甕の口縁部が遺構確認面から露出している状況で発見された。土坑は長軸52cm、短軸43cmの楕円形で、西側には木の根によって若干撹乱された部分がある。深さは、確認面から最も深い中央部分で35cmを測る。骨蔵器は土師器の甕を使用して、土坑中央に正位に埋納していた。埋納にあたっては、土坑の底に暗褐色土を充填し、そこに甕の底部を埋め込むようにして立たせ、その後から褐色土を周囲に充填していった様子をつかむことができた。

覆土は３層から構成され、第２・３層には微細な焼土粒子や炭化粒が認められたが、ごく僅か





1　7.5YR4/6　褐色　炭化粒微　ローム小塊中
2　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒微
3　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小塊少、炭化粒少



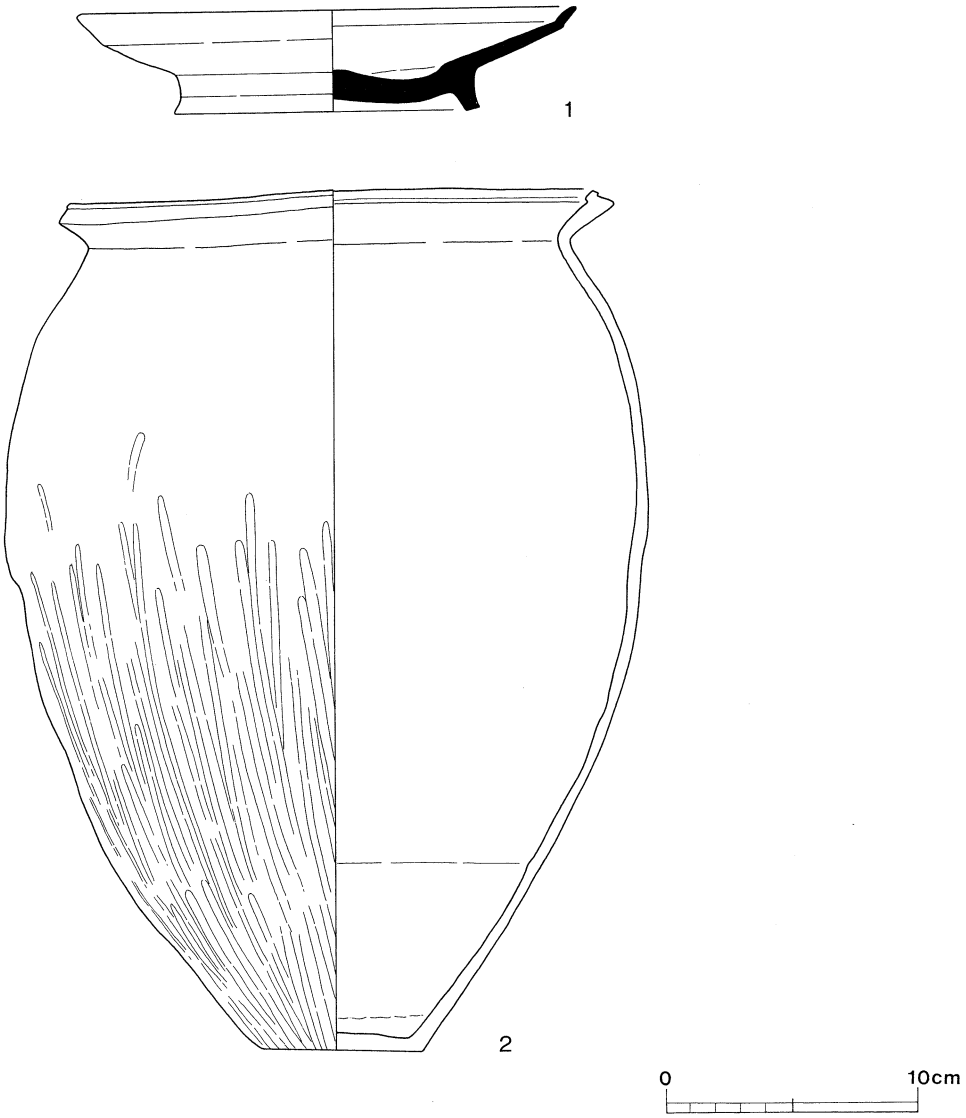
第149図　第４号火葬墓

な量である。また、甕の内部には、須恵器の高合付盤が口縁部を上に向けた状態で落ち込んでいた。蓋として甕の口を塞いでいたものと考えられる。

出土遺物　骨蔵器は、土師器の甕を本体とし、須恵器の高台付盤を蓋としている。盤は口を上に向けて甕を封じていたが、これは甕の口唇部が内傾しているため、口縁部どうしを合わせるよりも高台部を甕の中に向ける方が収まりが良いためであろう。甕も盤も一般的な土器の転用品であるが、その組み合わせには便宜が図られているようである。

第４号火葬墓出土遺物

図版番号	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	高台付盤 須恵器	A: 19.8 C: 4.1 D: 12.1 E: 0.7	完形	良好	径1㎜の長石・石英粒、雲母片を中量	灰色 灰色 口縁部付近は暗青灰色	体部は緩やかな角度で直線的に立上る。口縁部の立ち上がりも緩やかで外反気味である。高台は開きが弱く、端部が若干張り出す部分もある。高台の内側に底部が落ち込むようにな歪みがみられる。底部は切り離し後回転ヘラ削りを行い、高台周辺に回転ナデを施す。	№350
2	甕 土師器	A: 20.8 B: 6.5 C: 34.5	ほぼ完形	普通	径1㎜の長石・石英粒を多量、雲母片を微量	にぶい橙色 にぶい橙色	最大径は、口径よりも大きい。肩部は丸みを帯び、口縁部にかけてはくの字に屈曲する。口唇部は内傾し、粘土紐を端部に貼り付けたような膨らみをもつ。体部中位以下は横方向にヘラ削りを行い、その上から細かな縦方向のミガキを施している。内面に横方向のヘラナデを施す。	№349



第150図　第４号火葬墓出土遺物

甕の中には細かな植物の根が入り込んでおり、火葬人骨の残存状況は不良であった。230gを検出し、成人女性と鑑定されている。

所　見　本遺構は出土遺物から９世紀前半頃のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と鑑定された。

第５号火葬墓〔CT-5〕（第151図　ＰＬ33・78）

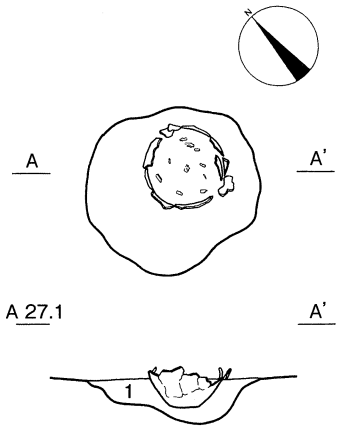
遺　構　調査区のほぼ中央にあたるＸ－14区に位置する。重機による削平が著しく、土師器片と骨片が散乱している状態で発見された。土坑の径46cmの不整円形で、深さは確認面より僅か12cmしか残されていなかった。他の火葬墓に比べ掘り方が大きいのが特徴といえる。骨蔵器は土師器の甕を使用し、土坑の中央や東寄りの位置に正位に埋納していた。

覆土は１層からなり、僅かに焼土粒と炭化粒を含む褐色土である。

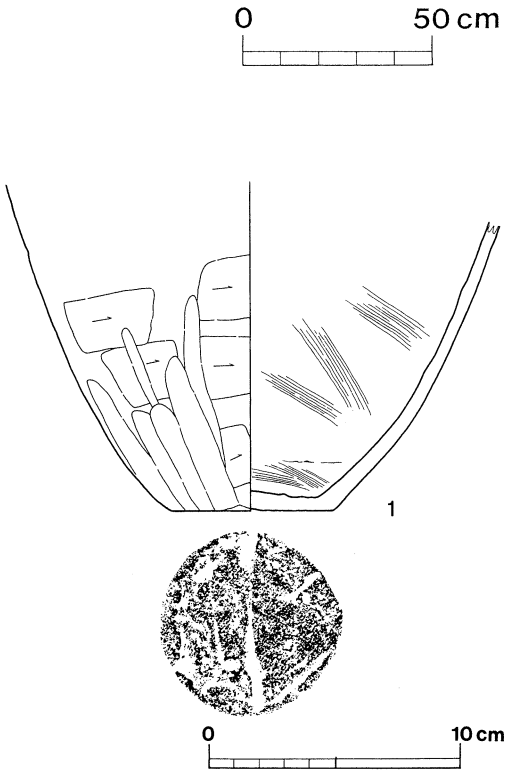
出土遺物　骨蔵器は土師器の甕で、約1/3の体部下位が残存する。蓋に相当するような他の土器は一切検出されていない。

火葬人骨は370g程残存し、成人男性と鑑定されている。

所　見　本遺構は出土遺物やほかの調査事例から９世紀前半から９世紀中頃のものと考えるのが妥当かと思われる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。



1　7.5YR4/4　褐色　焼土粒・炭化粒少、ローム粒中



第151図　第５号火葬墓・出土遺物

第５号火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	B: 6.5 C: (13.0)	1/3	普通	径１mmの石英粒を中量	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	甕の体部以下が残存。細長い体部を持つと思われる。外面は横方向にヘラ削りを行い、その上から縦方向の幅広いミガキを加えている。内面は横・斜方向のヘラと指によるナデを施す。	No.351 底部に木葉痕の痕跡

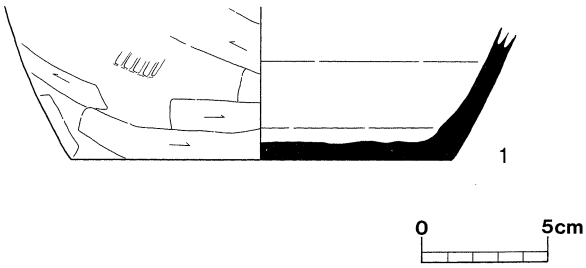
第６号火葬墓〔CT-６〕（第152図　ＰＬ78）

遺　構　調査区の北寄りの２Ｂ－８区で確認され、第３号火葬墓の東に隣接し、第５号火葬墓から約25mの距離に位置する。確認面において既に骨蔵器が露出しており、周囲に火葬人骨が散乱している状態であった。土坑は確認されていない。本来の掘り方が浅く、重機によって削平されてしまったものと思われる。

出土遺物　須恵器の甕を骨蔵器としており、底部付近のみが残存する。内面が褐色を呈するが、非常に焼き締まりの良い甕である。他の部位の破片やこれと組み合う土器については検出されていない。

火葬人骨は、周囲に散乱していたものも採集したが75gしか残っていなかった。鑑定の結果、性別不詳の成人の骨と鑑定された。

所　見　本遺構は出土遺物から９世紀代のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人であることが鑑定された。



第152図　第６号火葬墓出土遺物

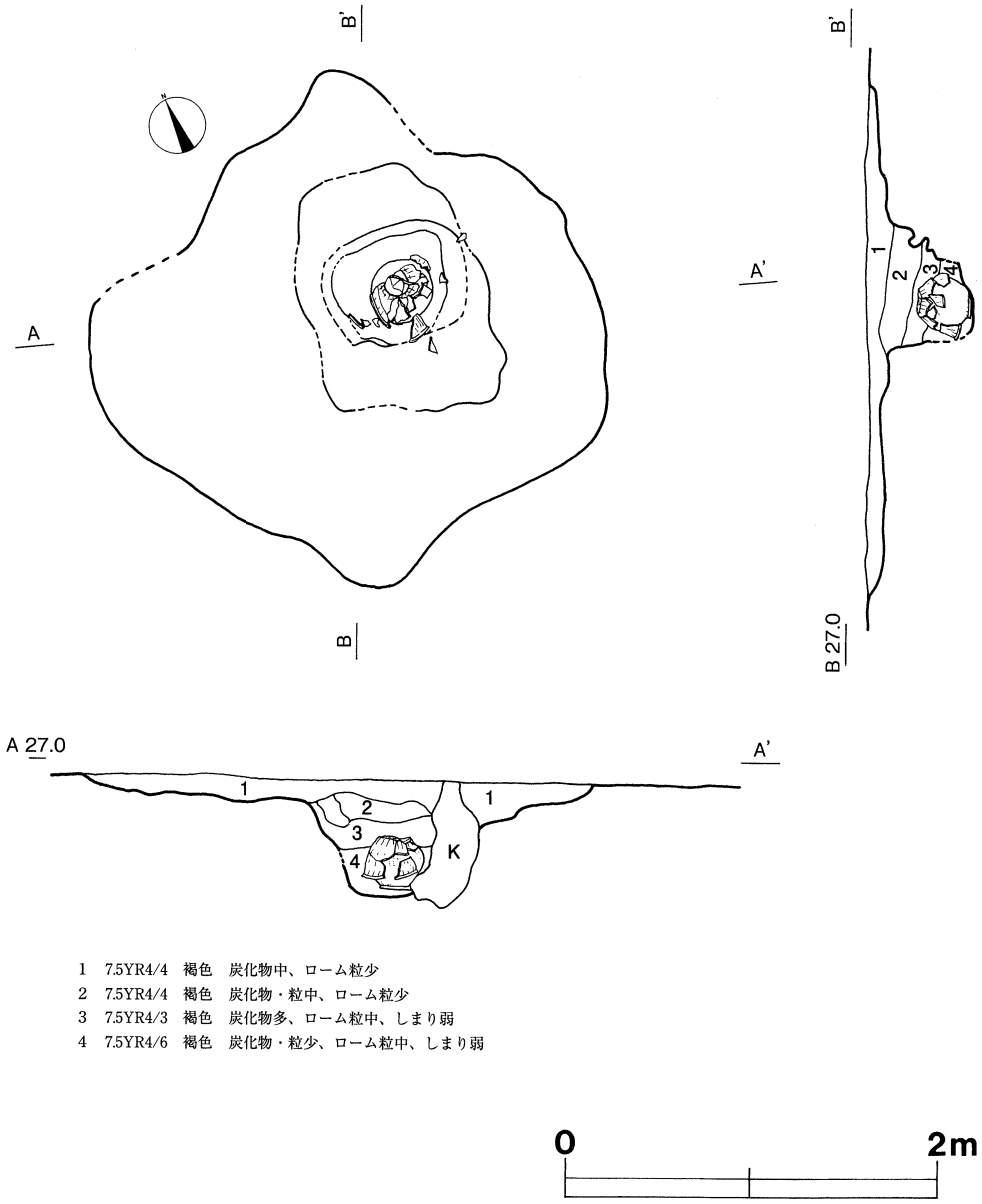
第６号火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調　外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 須恵器	B：15.2 C：(6.1)	細片	堅緻	ごく微細な長石粒を多量	灰褐色 にぶい赤褐色	須恵器甕の底部付近の破片。外面にはヘラ削りを施し、縦方向の平行線の叩きも僅かにみられる。内面は横と斜方向のヘラナデを施している。胎土は比較的緻密で非常に良く焼き締まっている。	No.352 硬質な焼成

第７号火葬墓〔CT-７〕（第153～155図　ＰＬ34・35・78）

遺　構　調査区東側の２Ｑ－32区に立地する。遺構確認時に南北３ｍ×東西2.5ｍの炭化物の混入する褐色土の不整楕円形プランが確認され、同所から土師器小片も出土した。このことから、十字に幅25cmの土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行った。土層の堆積状況は判然とせず撹乱も見られためサブトレンチを設定して部分的な深掘りを行った。結果的には、およそ中央部分が深く周辺部分が浅い掘り込みが確認された。そして、土層ベルトの交点で土師器鉢の一部が口縁部を下にして見られ、同ベルトを排除すると、先の土師器鉢は灰釉陶器の短頸壺に被せてある

ことが確認され、火葬墓であると判断した。掘り方はおよそ南北軸270cm、東西軸270cm、深さ10～15cmの浅い不整楕円形の掘り込みと、中央の長軸80cm、短軸60cm、深さ45cmの深い不整方形の掘り込みからなり、この後者の掘り込み内に骨蔵器が埋納されていた。これらの掘り込み内は全体的に木の根による撹乱が著しく見られ、壁面のローム層中にも及んでいた。調査途中では浅い不整円形の掘り込みの底面については、明瞭に把握することができずローム層中まで掘り進めて



1　7.5YR4/4　褐色　炭化物中、ローム粒少
2　7.5YR4/4　褐色　炭化物・粒中、ローム粒少
3　7.5YR4/3　褐色　炭化物多、ローム粒中、しまり弱
4　7.5YR4/6　褐色　炭化物・粒少、ローム粒中、しまり弱

第153図　第７号火葬墓

しまった。

覆土は４層に分けられた。図面上は両者の掘り込みを描いているが、本来の火葬墓掘り方は中央部分の不整方形掘り込みのみと考えた方が妥当と思われる。周辺の浅い掘り込みや遺構覆土内の著しい撹乱状況については、火葬墓埋納後に遺構上に樹木が生育し根をはびこらせ、その根が不朽した痕跡と考えることが可能かも知れない。

骨蔵器は灰釉陶器の短頸壺を使用して、不正方形の土坑内に正位に埋納していた。埋納にあたっては、土坑の底に大型の炭化材を含む褐色土を充填し、そこに短頸壺の底部を埋め込むようにして立たせ、その後から褐色土を周囲に充填していった様子を理解することが出きる。

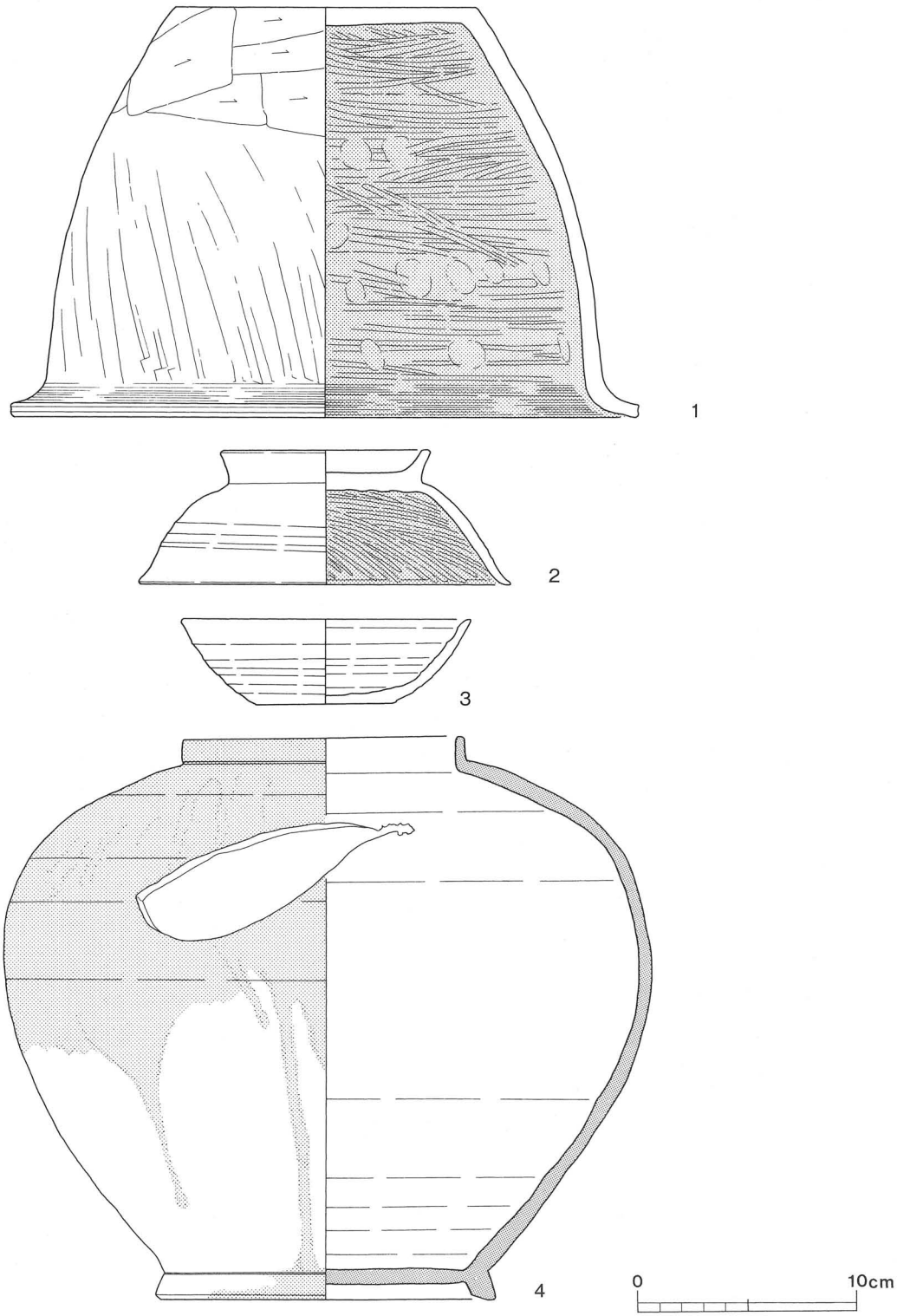
出土遺物　骨蔵器は灰釉陶器の短頸壺、土師器の坏、高台付坏、坏の４点で構成されている。短頸壺を本体とし、その口縁部にはまるように坏を上に向けた状態で第１番目の蓋をしていた。次に口縁部を下にした高台付坏を被せて第２番目の蓋とし、さらに半截した鉢をこれに覆い被せるようにして第３番目の蓋としていた。

短頸壺は、短く直立する口縁部とやや長めで緩やかな曲線を持って立ち上る体部をもつ。最大径は体部中位やや上にある。黒笹14号窯式期のものに比定される。鉢は丸みを帯びた体部に強く外反する口縁部をもち、内面に磨きと黒色処理が施される。口縁部および体部の約半分を欠いている。高台付坏は大型で、丸みを帯びた体部は深く、高台はやや高めである。内面に磨きと黒色処理が見られる。坏は径の小さな底部と丸みを帯びて浅く立ち上がる体部をもつ。

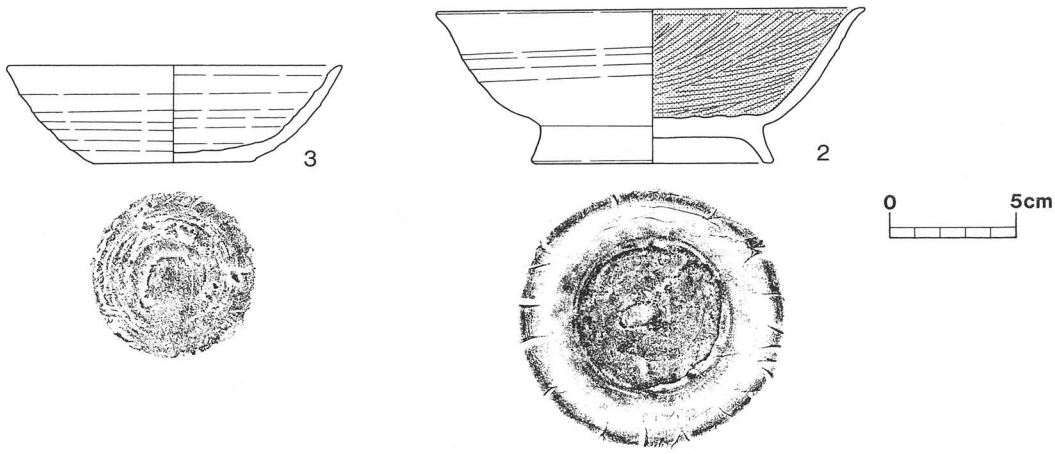
なお、短頸壺は体部上位に大きな破壊孔があり、向かって右側に鋭利な器物による殴打点が見られる。短頸壺の周囲や内面を精査したがこの破壊孔に対応する破片は検出されなかった。従って、骨蔵器としての使用以前にこの孔を開けたものと考えられるが、割れ口は全く磨耗しておらず、破壊後は比較的短期間のうちに骨蔵器に転用されたものと推測される。また、鉢についても同様に、割れ口が新しく、半截にして被せた残りの破片は１、２点を除き周囲に検出されなかった。ちなみにこの鉢は短頸壺に被せるには口径が小さく、完形のままでは短頸壺の肩部に乗っているだけの不安定な状態になる。破壊孔の閉塞も意図しながら効率良く蓋をするには、むしろ半ば破砕して覆い被せるようにした方が都合が良かったのではないかと思われる。

火葬骨の残存状況は、こうした配慮にもかかわらず土の流入によって良好ではない。205ｇが残存し、成人女性と鑑定されている。

所　見　本遺構出土の灰釉陶器短頸壺の製作年代はおよそ９世紀前半頃のものと思われる。しかしながら火葬墓としての年代は出土遺物の土師器から９世紀末葉から10世紀前葉頃のものと考えられる。こうして考えると、灰釉陶器短頸壺が製作されてから一定伝制された後に火葬墓骨蔵器として埋納された様子が窺える。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人女性と鑑定された。



第154図　第７号火葬墓出土遺物（１）



第155図　第７号火葬墓出土遺物（２）

第７号火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	鉢 土師器	A：[28.6] B：13.8 C：18.8	2/3	普通	ごく微細な石英を多量、雲母片を微量	にぶい黄橙色 黒色	体部は丸みを帯びて立ち上がり、直角的に屈曲する口縁部をもつ。口唇部に浅い沈線が入る。外面は斜方向にヘラを押し当てたような叩き跡がみられ、下位には面取りするかのような強いヘラ削りを施している。内面は横方向のミガキと若干の指頭圧痕が見られ、黒色処理を施している。全ての破片を接合しても約1/3の部分が欠失している。	No.354 割れ口は磨耗しておらず、短頸壺に被せるために意図的に破砕したものか。
2	高台付坏 土師器	A：17.0 C：6.2 D：9.4 E：1.0	完形	良好	雲母片を微量	橙色 黒色	大きな口径で深い体部を持ち、碗形を呈する。体部は下位から中位にかけて丸みを帯び、口縁部付近は外反する。高台は比較的高くハの字に開く。体部外面に回転ナデ、内面は横・斜方向のミガキと黒色処理を施す。底部は回転ヘラ削り後軽くナデ調整を行い、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す。	No.355
3	坏 土師器	A：13.2 B：6.4 C：3.9	完形	普通	雲母片を微量	橙色 橙色	径の小さな底部を持ち、体部は全体的に丸みを帯びている。体部内外面に丁寧な回転ナデを施す。底部は回転ヘラ削り後、一方向からごく軽いヘラ削りを行う。体部下位のヘラ削り調整は施されていない。	No.356
4	短頸壺 灰釉陶器	A：12.8 C：25.8 D：15.4 E：0.8	ほぼ完形	堅緻	黒色粒子を中量含む緻密な灰白色土	灰白色 灰白色 釉は明黄緑色	最大径は体部中位やや上にあり、器高よりも大きな数値を測る。なだらかな肩から口縁部が短く直立する。高台は僅かな丸みをもって若干張り出す程度で、踏ん張る感じではない。体部内外面に回転なでを施し、外面下位には回転ヘラ削りもみられる。釉は口縁部から体部下位にかけて流下し、高台の内側の底部面にも付着している。	No.353 体部上位に破砕孔がある。向かって右側に殴打点があり、割れ口は鋭利である。

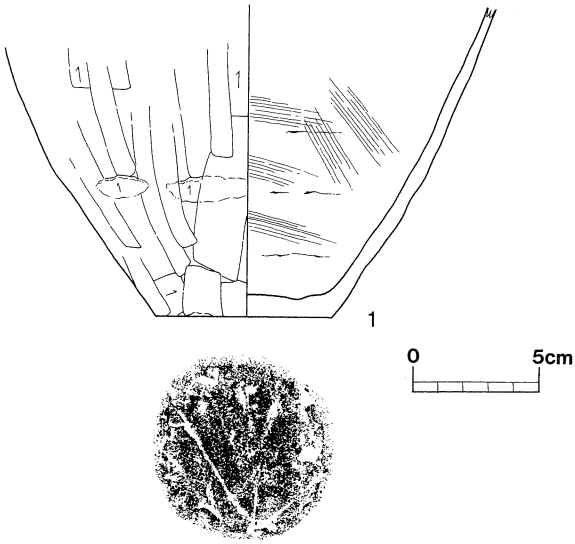
調査区外火葬墓〔CT-調査区外〕（第156図　ＰＬ33）

遺　構　当火葬墓は、八幡脇遺跡西方の谷を挟んだ台地縁辺付近で造成工事中に発見されたものである。調査対象外区域ということもあり、火葬骨の存在によって辛うじて火葬墓と認識され、工事関係者より通達を受けた次第である。発見地は石橋北・石橋南の両遺跡と同一の台地上で、八幡脇遺跡とは北から湾入する浅い谷津を挟んで西側に対峙する地点である。発見当初より当地点には重機による掘削が進んでおり、遺構の検出は不可能な状態であった。従って、骨蔵器と火葬骨のみを報告することにする。

出土遺物　骨蔵器は土師器甕を使用している。甕の上部２／３は重機による削平を受けて欠損しており、蓋などの存在も不明である。甕の体部下位には縦方向のヘラ削りに加え、ヘラナデないし幅の広いミガキが施され、器壁は薄く作られている。体部の立ち上り方は一般的な長胴の甕のものと同じであり、日常使用される土師器甕を骨蔵器に転用したものであろう。

火葬骨は、甕の残部にぎっしり詰まった状態で残存していた。全部で230ｇあり、２～４㎝大の骨片を多く含んでいた。成人男性のものと鑑定されている。

所　見　本遺構は出土遺物から９世紀代のものと考えられる。骨蔵器内の人骨鑑定の結果、火葬された人物は成人男性と鑑定された。



第156図　調査区外火葬墓出土遺物

調査区外火葬墓出土遺物

図版No.	器形	法量(cm)	残存率	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	B: 6.9 C: (12.3)	1/3	やや不良	長石・石英粒を多量、雲母片を微量	にぶい橙色	長胴甕の底部で、器厚は最も薄いところで３㎜程になる。作りは粗く器面の凹凸や輪積痕が目立つ。調整は表面に縦方向の削りを施した後、ナデている。内部はヘラによる斜方向の荒いナデが施される。	No.357 底面に木葉痕あり

３．溝跡（ＳＤ）

第１号溝跡〔SD-１〕（第157図　ＰＬ36・78）

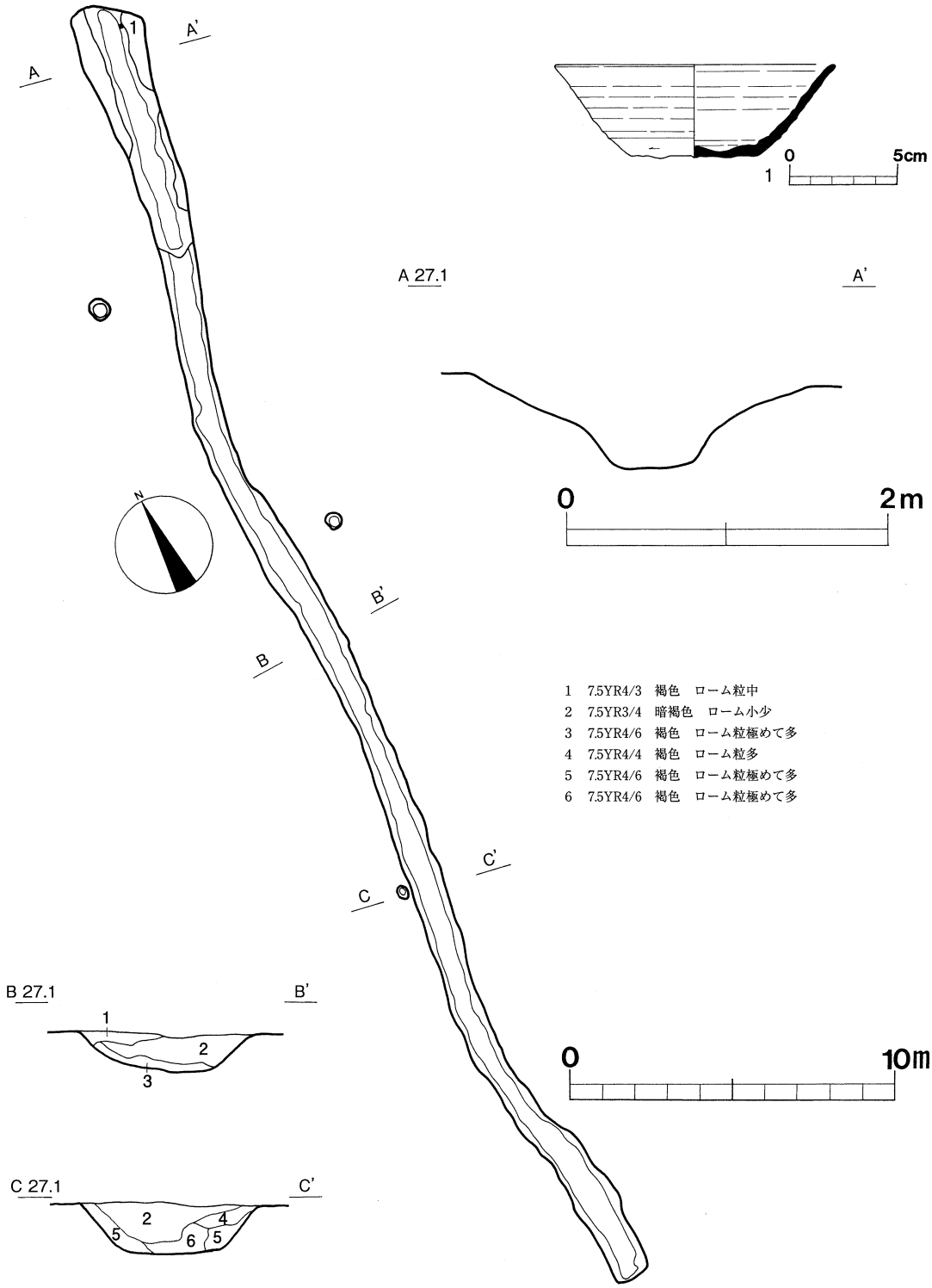
遺　構　調査区の東側で、Ｌ－24区からＫ－33区のおよそ南北に弱く蛇行しながら延びる。北端及び南端はエリア外に延びている。幅はおよそ１ｍであるが、北端では２ｍと幅広くなっている。溝の断面形態は北端部以外では逆台形となり深さはおよそ20～30cmであるが、北端では逆台形の裾部が大きく広がり深さ60cm程度になる。関連する遺構か不明であるが溝跡の周辺に小ピットが３基確認されている。

遺　物　遺物はほとんどが縄文土器片であったが北端で１の須恵器坏が出土している。

所　見　出土遺物から９世紀後半の遺構と考えられる。この溝跡の東側の調査エリアには火葬墓群の中でも最も新しい第７号火葬墓のみが存在し興味深い。

第１号溝跡出土遺物

図版No	器種 種類	法量（cm）	出土位置 残存率 焼成	胎土	色調	器形・法量の特徴	備考
1	坏 須恵器	A：〔13.2〕 B：〔6.0〕 C：4.3	覆土 40% 普通	長石○、石英○、雲母○	灰	ロクロ成形。底部から外傾して口縁部に至る。底面は回転ヘラ切り。底部側縁手持ちヘラ削り。	№264

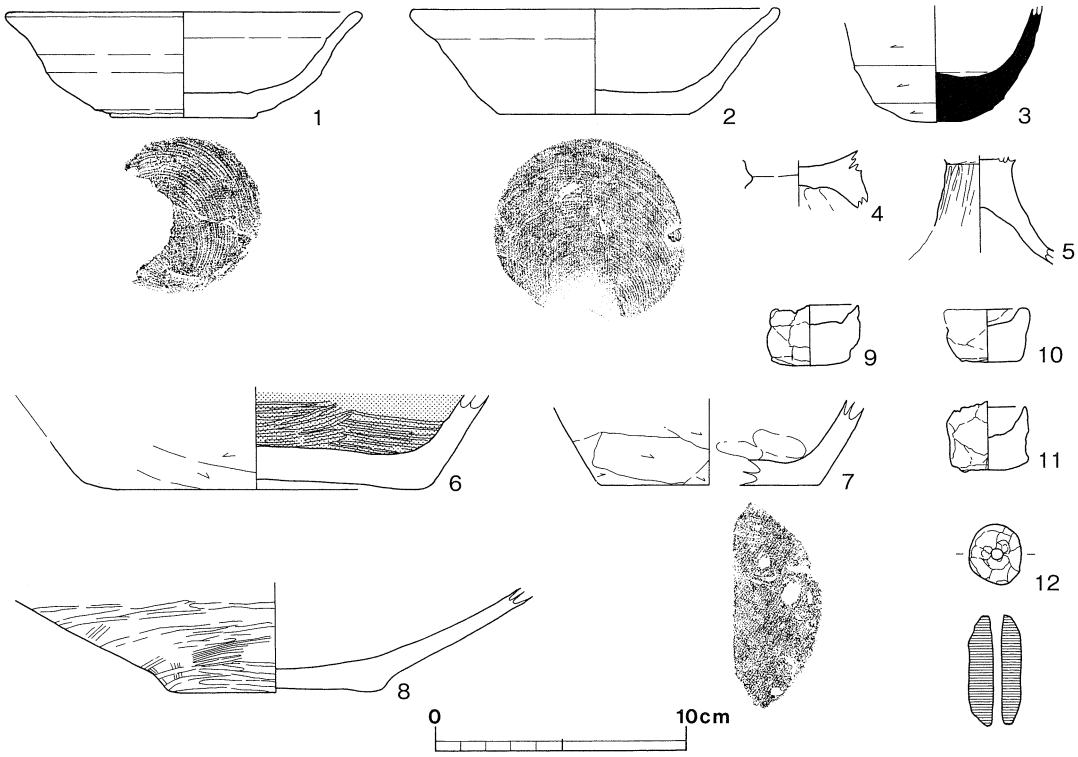


第157図　第１号溝跡・出土遺物

第４節　古墳時代以降の遺構外出土遺物（第158図）

ここでは古墳時代以降の遺構外出土遺物を掲載した。それらはおよそ古墳時代の遺物と古代の遺物に分けられる。この遺跡の時代的な特性を反映したものといえる。

古墳時代の遺物は４・５・８～11で、古代の遺物は１～３・６・７であり、12は古墳時代から古代にまで及ぶものと思われる。４・５は高坏脚部である。８は壺の底部である。９～11は小型の手づくね土器であり、同様な大きさで形態・作りも類似する。１・２は土師器坏であるが、ロクロ成形され底面には回転糸切り痕が残る。両者ともに近接して出土し、類似した胎土を持つ。３は須恵器の壺底部であろうか。胎土の状況は地元産須恵器ではないことが窺える。６は土師器の鉢底部であろう。内面は黒色処理がなされている。もしかすると火葬墓に埋納された骨蔵器の蓋だったのかも知れない。７は土師器甕の底部であるが、６同様に骨蔵器の一部であった可能性があろう。12は管状の土錘で手づくね成形である。



第158図　古墳時代以降の遺構外出土遺物

第4章　総　　括

今回の八幡脇遺跡の発掘調査では、縄文時代・古墳時代そして平安時代の特色ある遺構・遺物が確認された。以下では各時代の特徴的な遺構・遺物について述べ、関連する事例などを取り上げて総括としたい。

1縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居跡（第７・９・12・13・15・16号住居跡）６軒、竪穴遺構１基、土坑38基、土器埋設遺構４基、集石２基などが確認されている。これらの多くは縄文時代中期後半の加曽利Ｅ３式期からＥ４式期にかけてのものであり、市内でもこの時期の集落跡を一定の広がりを持って調査した事例は数少ない。以下は、調査エリア内で確認された遺構や出土遺物の特徴について取り上げる。

A遺構の特徴

本遺跡内で確認された縄文時代の遺構の時期は、細かく見れば前期末葉と中期後半のものに区別できる。前期末葉の遺構で明確なものは第50号土坑１基のみであり、遺構の存在としては希薄さを感じえない。しかしながら、遺構外出土遺物を見れば比較的前期末葉の土器片も出土していることから、遺構としては認識できなかったものの、当時の人々の生活の痕跡と理解すべきものと考えられる。この時期の遺物の出土に反する遺構の希薄さについては、当遺跡のみならず事業地内の他遺跡（土浦市教委1997ａ，土浦市教委1997ｂ）でも認められる特徴といえる。このようなこの時期の明確な遺構として、本遺跡で検出された第50号土坑は貴重であり興味深い。このような土坑については、形態的に当地域で後の中期中葉期に群在して見つかる貯蔵穴との関連性が指摘（塚本2001）され、類例の検討を含め今後注意を要する。

次に、本遺跡の縄文時代の遺構の大半を占める中期後半の時期についてであるが、確認された遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・土器埋設遺構などがある。これらの遺構のうち、竪穴住居跡や竪穴遺構は調査エリアの南側で見られ、調査エリア外に集落跡の中心が存在するものと考えられる。竪穴住居跡は６軒で、竪穴遺構としたものが１基確認されている。これらの遺構の帰属時期については、その出土土器から第７・９号住居跡は加曽利Ｅ４式期、第12・15・16号住居跡・第1号竪穴遺構は加曽利Ｅ３式期、第13号住居跡は加曽利Ｅ３式～加曽利Ｅ４式期とした。ここでいう、加曽利Ｅ３式土器としたものはその多くが同式土器の中でも新しい様相のもので、加曽利Ｅ４式土器としたものは同式土器の中でも古い様相のものと考えられ（註１）、いずれも近接

した時期のものと考えられる。これらの竪穴住居跡等の配置は、調査区内の西側を中心に加曽利Ｅ３式期のものが分布し、東側に加曽利Ｅ４式期や加曽利Ｅ３式期～加曽利Ｅ４式期としたものが分布するという特徴がある。そして、これらの竪穴住居跡や竪穴遺構の土器の接合関係では、第７号住居跡⇔第９号住居跡、第７号住居跡⇔第13号住居跡、第12号住居跡⇔第15号住居跡、第16号住居跡⇔第１号竪穴遺構の関係を導くことができた。これらの遺構間の関係は、第16号住居跡⇔第１号竪穴遺構の関係以外は比較的近場での接合であり興味深い。本来であれば、これらの土器の接合関係の背景にどのような遺構間の関係が存在するのかの検討が必要であるが、現状では未了であり今後の課題としたい。

このほか、調査エリア内では竪穴住居跡等のまとまりから北側に離れて、土器埋設遺構・焼土址・陥し穴と考えられる遺構が確認されている。これらの遺構のうち、土器埋設遺構・焼土址についても竪穴住居跡と同様な時期のものと考えられる。広い意味での集落内の土地利用方法に関わり興味深い検出状況といえる。しかしながら、陥し穴とした第28・31～36号土坑の７基についてはその用途を狩猟用罠とした場合、竪穴住居跡群に近接して同時併存で使用されたかは疑問なところがあり、集落が展開する以前または集落廃絶後の遺構群と考えたほうが妥当かと思われる。

Ｂ出土遺物の特徴

今回の調査で出土した遺物の大半は、中期後半の時期に位置付けられるものである。土器以外の出土遺物の中で特徴的なものに、土器片錘や有孔円盤があげられる。土器片錘については漁労用の網の錘と考えられるもので、本遺跡全体で146点出土している。出土状況は、竪穴住居跡や土坑などの遺構の種別を問わず出土しているが、掘り込み容積が大きく廃棄される遺物の多い竪穴住居跡からの出土が目立つ。その大きさは数センチの小さいものから、10cmを越えるような大きなものまで見られる。これらの土器片錘の大きさや出土量の多寡については、先に述べた竪穴住居跡の時期の違いで目立った変化は認められない。このような土器片錘について、同一事業地内の中期前半の集落跡が確認された前谷遺跡群（土浦市教委1998）との状況と比べると、土器片錘における規格の変化が理解できる。それは、中期前半のものは全体的に規格の大小における幅が小さく、本遺跡の土器片錘を見ると規格の大小の幅が広がり、その差異が明確となる様子が読み取れる。このことからは、一つの可能性として、時期的な漁労対象物の変化を想定できるのと同時に、この変化に対応する縄文人の工夫の様子とも理解できるのではないだろうか。

同じ土器片を利用した有孔円盤については、正円形を基本としているが、中には楕円形のものも見られる。その最大の特徴として中央に孔が開く、または穿孔途中のものも存在する。孔の開け方は土器片の裏面から作業を開始している。その状況は、先端がやや丸みを持ちながら尖る円錐形の物体を、土器片内面に対して垂直に立て、回転運動を加えて摩擦している。その縁辺には

擦られた痕跡が明瞭である。この有孔円盤の出土数は遺跡内全体で10点であり、土器片錘に比べると非常に少ない状況である。（関口　満）

２古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡（第１～６・８・17・18号住居跡）９軒、竪穴遺構１基が確認されている。これらの遺構は、出土土器の組成の特徴からいずれも古墳時代前期中葉から後半の範疇のものと考えられる。これらの竪穴住居跡の中には、第１号住居跡のように鍛冶工房として用いられたものや、第４・６・８号住居跡のように玉作工房として用いられたものがある。このことからすれば、本遺跡の集落跡が、専門技術を持った工人の集落跡であったかの様相を呈しているといえる。

以下は、鍛冶工房跡や玉作工房跡の遺構や出土遺物の特徴を中心に取り上げる。

Ａ鍛冶工房跡と出土遺物

確認された鍛冶工房跡は、第１号住居跡としたもの１軒である。同一事業地内で本遺跡の北東300ｍに位置する、尻替遺跡の第７号住居跡（土浦市教委2007）と同様に前期のものであり、県内でも最も古い時期の鉄器生産の痕跡といえる。尻替遺跡例は遺構や遺物の遺存状況が良くないものであったが、本遺跡の第１号住居跡は良好であるといえる。遺構内の出土土器組成や、両遺跡内の前期の遺構確認状況からすれば、尻替遺跡例よりも本遺跡例の方が時期的に古くなる可能性がある。

鍛冶工房である第１号住居跡の遺構の特徴は、１辺3.9ｍの小型方形で、北側の床面に地床炉が設けられ、一般的な竪穴住居跡に見られる柱穴や貯蔵穴、入り口施設などは確認されず、その構造も全体的に簡易な造りである。このような状況から、長きに渡って鍛冶作業を行った様子は窺えない。このことは、先の尻替遺跡例でも同様である。本鍛冶工房内の施設としては、床面中央には鍛冶炉が設けられ、その50㎝程南には金床石を据え付けたと考えられる鍛冶関連ピットも確認された。鍛冶炉の凹みは５㎝ほどで、その周囲には西側を除き粘土が貼られ焼土化している。この粘土の途切れ具合は、送風装置の一部である鞴の羽口の設置箇所と関連があるものと思われる。鍛冶関連ピットからは、鍛造剥片や砂岩製の金床石小破片がまとまって出土したものの、金床石の本体は検出されなかった。これは、鍛冶作業終了後に調査エリア外に廃棄されたか、次の鍛冶作業を行う場所に持ち出されたものと想定される。

鍛冶関連遺物には、鍛冶作業の道具にあたる鞴の羽口や金床石破片、鍛冶作業の残滓である碗形鉄滓、そして微細な鍛造剥片や粒状滓などが出土している。鍛造剥片や粒状滓などの微細な鍛冶関連遺物の出土状況を見ると、鍛冶炉や鍛冶関連ピットに最も集中し、その周囲からも出土し

ている。鍛冶関連出土遺物で特筆されるものに、鞴の羽口と碗形鉄滓がある。この鞴の羽口については、古墳時代中期に多用される高坏脚部を転用した羽口ではなく、粘土を捏ねて成形した専用羽口であることが重要である。その形態は全体が円柱状となり断面形態がおよそ円形で分厚い造りとなっており、胎土には籾殻が混和されていた。関東地方における同時期の良好な羽口の出土例としては、神奈川県小田原市千代吉添遺跡出土例（小田原市教委2006）があり、形態的に類似したものが出土している。これらに見られる羽口の形態的特徴は、鍛冶技術の中に鞴の羽口が導入される古墳時代前期的な特徴の一つとされる（村上2007）。また、本遺跡でも出土した椀形鉄滓については、鍛冶技術の中において鉄素材の成分調整という高度な技術の産物とされる。本遺跡の鍛冶工房出土の鍛冶関連遺物に関しては、金属学的な分析と放射化分析を実施（註１）している。その結果によれば、今回調査された鍛冶工房跡では、朝鮮半島が起源とされる精製された鉱石系鉄素材が鍛冶原料として遺跡に持ち込まれ、工房内の鍛冶炉での鍛錬鍛冶を経て鉄器製作がなされたと想定されている。同一事業地内の尻替遺跡出土鍛冶関連遺物でも同様のことが想定され、国内の古墳時代前期の鍛冶技術や鉄器生産を考える上で、非常に興味深いものであるといえる。このようなことから、本遺跡で確認された鍛冶工房やそこから出土した鍛冶関連遺物の特徴は、弥生時代に比べ技術革新の進んだ複雑な技術工程を持つと指摘される、古墳時代前期の鍛冶技術（村上1998）の様子を良く伝えているといえる。そして、本遺跡の所在する地理的な位置は、この時期に鍛冶技術が全国的に拡散するといわれる（村上1998）状況を反映している。

八幡脇遺跡の鍛冶工房で生産された鉄器については、それを物語るものがほとんど出土していない。本遺跡で出土した鉄製品は、第３号住居跡出土の棒状の鉄製品（註２）のみであり、ある意味特徴的である。そこで、間接的に鉄製品の製作・使用を想定できる出土品としては、第２・３・４・８号住居跡で凝灰岩や軽石製の刃物を砥いだ痕跡の残る砥石が出土している。同様な状況は尻替遺跡でも見られ、明確な鉄製品は鉄鏃と刀子様の破片が１点ずつ出土しているのみである。このような遺跡内での鉄製品の遺存状況からは、鍛冶工房での鉄器生産の目的を明確にし得ない。しかしながら、八幡脇遺跡内の集落跡では鍛冶工房跡と同時に玉作工房跡も営まれた状況に重きを置けば、玉作作業に必要な鉄製品の製作を行ったという想定が導き出される（註３）。この玉作作業に関わる鉄製品としては、先の棒状の鉄製品を積極的に評価することによる、玉素材の調整剥離用工具などの存在が考えられる。地域や時代は異なるが、遺跡内での玉作技術と鍛冶技術が有機的な関係を保ちつつ共存する事例として、弥生時代の玉作が盛行する北陸地方の奈具岡遺跡や林・藤島遺跡があげられる。両遺跡の比較を通して、鉄器生産技術の普及と玉作における玉作工具の鉄器化する様子が指摘（冨山1997、河野1997）されており、本遺跡を考えるうえでも興味深い。

今回の発掘調査成果では、集落に逗留して鍛冶作業を行う鍛冶工人の姿を明確に理解することができる。しかしながら、この遺跡で鍛冶作業を行った鍛冶工人の性格については不明と言わざ

るを得ない。この時期の鍛冶工人については、弥生時代以来の一般的な生産用具を供給する鍛冶工人と首長に従属する特定の鍛冶工人とが分離し始めることが指摘されている（村上1998）。本遺跡や尻替遺跡で鍛冶作業を行ったのはどのような工人であったのか、自らの意思で能動的に活動したのか、又はある権力のもと受動的に活動していたのかなど、今後の課題となる事柄は多い。先のような課題を考えるうえで、玉作工房群を伴う工人の集落の様相を呈する八幡脇遺跡と、当地域において一般的な集落跡の様相を呈する尻替遺跡という古墳時代前期の性格を異にする二つの集落跡で、鍛冶工房跡が確認された意味は大きいものいえる。

最後に、茨城県内の同様な時期の鉄器生産の痕跡として遺構的に明確ではないものの、茨城町の南小割遺跡第178号住居跡出土遺物（註４）や、近年報告された稲敷郡阿見町の薬師入遺跡第78号住居跡遺物出土状況（註５）があげられる。　（関口　満）

Ｂ玉作工房跡と出土遺物

八幡脇遺跡では、玉作関連遺物が出土する古墳時代の玉作工房跡として、第４号、６号、８号住居跡と呼称した３棟の建物跡が発見されている（以下、便宜的に４、６、８号住と表記する）。ここで、①玉作の内容と時期、②八幡脇遺跡玉作の二、三の特徴、③烏山遺跡玉作との比較、④霞ヶ浦土浦入りにおける古墳時代玉作の特質、の４点にわけて調査成果の要点と若干の考察をまとめ、総括としたい。

①玉作の内容と時期

玉作の内容については、まず玉素材と製作された玉の種類がある。４号住からはメノウ勾玉未成品が出土し、覆土の水洗い選別でもメノウ剥片以外は見つかっていない。６号住からはメノウ勾玉及び滑石勾玉・管玉の未成品と滑石管玉の完成品、ほかメノウ剥片が出土している。また、覆土の水洗い選別では、メノウ、滑石以外に緑色凝灰岩と琥珀の微細剥片も採集されており、緑色凝灰岩管玉や琥珀勾玉の製作も行われていた可能性が考えられる。８号住からはメノウ勾玉と緑色凝灰岩管玉の未成品、およびそれらの剥片が出土している。微細な剥片にはメノウが多く、６号住と同様に琥珀片も見つかっているが、反面、緑色凝灰岩の微細剥片が認められない状況も注意される。

出土未成品の特徴と、そこから想定される玉作技法の問題がある。上記のように、本遺跡ではメノウ勾玉、緑色凝灰岩管玉、滑石勾玉・管玉の製作が確認され、このほか琥珀玉類（勾玉）の製作も想定されるが、微細剥片のみで未成品がなくその実態については不明とせざるを得ない。また、緑色凝灰岩管玉はわずかな未成品と剥片、滑石勾玉・管玉は研磨工程品のみと出土数が少なく、製作技法の特徴や工程については判然としない。わずかに、前者が角柱状の形割品の作出

を基本としていること、後者が長さ1.5cm以下の小型の勾玉と太さ５mm程の細身の管玉であることなどが確認できるのみである。各工房跡から未成品が出土したメノウ勾玉の製作は、厚さ７、８mmから1.5cm程度の扁平板状の礫、おそらく河川の転石と思われる自然石を素材とし加工したものと思われる。製作の基本は、形割や剥離（側面打裂）により表裏に自然面を残した板状半円形品を作出することにあり（第112図60、第127図30）、次いで表裏の自然面と外周部（勾玉の背部）を研磨しているようである（第113図66・70、第127図29）。この後に行われる勾玉腹部の抉りは、打撃や押圧剥離によって成形しており（第113図69）、穿孔前の段階である。穿孔は片面穿孔で、その後に腹部研磨と全体の仕上げ研磨をしたか、腹部研磨後に穿孔し、その後仕上げ研磨をしたかいずれかであるが、破損品の状態（第114図73・76）などを見ると前者の可能性が高いと思われる（註６）。

玉類製作に用いる工具の内容は多彩である。４号住からは内磨き砥石、平砥石、内磨き兼平砥石と敲き石の類や台石が、６号住からは内磨き砥石、平砥石、内磨き兼平砥石など片岩製の砥石のみが、８号住からは内磨き砥石、平砥石、筋砥石などの各種砥石と敲き石が出土し、平砥石兼筋砥石兼敲き石のように複数機能を併用する工具が目立った。以上のように、工房跡内に残された工具はすべて石製の工具で、鉄製工具は出土していない。ただ、ほぼ同時期と思われる鍛冶工房跡（１号住居跡）の調査所見等を考慮すれば、剥離や穿孔における鉄製工具の使用は十分に予測し得るものであり、その背後にある北陸地方玉作との関係もまた一考の余地がある。ところで、工具の石材には、主に片岩、砂岩、凝灰岩などが使用され、とくに片岩製の内磨き砥石（兼平砥石）が特徴的である。使用された片岩には、灰白色や赤褐色の厚手のものと褐色や黄褐色の薄手のものとがあり、前者は大型、後者は小型の内磨き砥石に使用される傾向がある。地質学的には、いずれも石英片岩ないしは紅簾片岩に属するようで、関東近隣に目を向けると、埼玉県長瀞町周辺から群馬県南部にかけて広く分布する奥秩父三波川変成帯産の原石を使用した可能性が高いと想定される（註７）。

玉作遺物の出土状況の最大の特徴は、入口脇の貯蔵穴内及びその周辺から玉素材の微細剥片や、片岩製砥石の微細剥片など玉作関連遺物がとくに集中して出土することにあり、この空間が玉作工程の中心的な作業場であったと考えられる。この状況は３棟の工房跡すべてに共通しており、通有の竪穴住居を玉作工房として利用しつつも、定式化された姿であったと想定される。また、６号住の25cmメッシュサンプリングではメノウ材の頻度がとくに高く、その他の玉素材はごく僅かであった。この大勢は他の２棟の工房跡でも同様であり、本遺跡の玉作の主体がメノウ勾玉生産にあったことは疑いない。

玉作の時期は、各工房跡から出土している土師器が参考になる。３棟の工房跡の中、６、８号住からは甕形土器を中心に比較的まとまった量の土師器が出土している。両工房の土師器の様相

は、平底甕、二重口縁壺、直口壺などの共通した形態から、両者ほぼ併行する時期が想定される。なかでも、年代の指標は「くの字」状口縁を持つ平底甕にあり、上総を中心に千葉県側に多出する甕形土器の影響下にある。本例は「くの字」状に屈曲する典型的な口縁形態と共に真球形を呈する胴部形態が特徴的で、他の小型坩や小型器台、直口壺の特徴なども合わせ鑑みて、古墳時代前期中葉から後半の時期が想定される（註８）。４号住出土の土師器はわずかで平底甕の出土をみないが、全形のわかる小型器台は６号住の出土例と類似しており、時期の隔たりはあまりないと思われる。このように、３棟の工房跡はほぼ同時期に共存していたと考えられ、古墳時代前期中葉から後半の年代が想定される。

②八幡脇遺跡玉作の二、三の特徴

上記玉作の内容から、八幡脇遺跡の特徴を考えると、以下の二、三の点が指摘できる。第一の点は、メノウ勾玉及び滑石管玉･勾玉の生産と、その時期である。どちらも、関東地方のみならず、全国の古墳時代玉作状況に照らしてみて、初期の生産例として注目される。メノウ勾玉及び滑石管玉・勾玉ともに、その製作が古墳時代前期後半以前に遡る事例は数少なく、当地域以外には前者では出雲地域、後者では上野地域（高崎市下佐野遺跡）や畿内大和（橿原市曽我遺跡、桜井市上之庄遺跡）などわずかに認められるにすぎない（河村2006ａ、米田2008）。それぞれの玉類が製作された時期とくにその開始時期は、玉作技術の系譜や伝来とも深く関わっている。片面穿孔のメノウ勾玉は、碧玉・水晶勾玉などと共に出雲系玉の典型と考えられており、八幡脇遺跡など当地域でのその製作には出雲系の技術導入があったと推測されている（河村2006ａ、河村2006ｂ）。ただ、出雲におけるメノウ勾玉製作も古墳時代前期に遡る実例は数少なく、出雲玉作遺跡宮垣地区71CⅡ号工房跡（玉湯町教委1986）がその初例とされるが（米田2005）、古墳時代前期前半以前に遡る確かな事例は認められないように思われる。つまり、メノウ勾玉の製作に関しては、八幡脇遺跡は出雲とほぼ同時期か遅れても大きな時期差はない可能性が高い。前述したように八幡脇遺跡では勾玉腹部の抉りを打撃や押圧剥離によって成形しているが、出雲では研磨による成形が主流のようで（米田2005）、両地域の製作技法が同一ではなかったことも予測される。また、八幡脇遺跡では微細剥片の出土から琥珀勾玉の生産も想定されるが、出雲ではヒスイと共に琥珀は玉素材として全く用いられていないなど、出雲地域と比較すると時期の近接と共に、両地域間の異相と八幡脇遺跡の独自性が浮上してくる。古墳時代前期の滑石玉類に関しては、その系譜関係は判然とせず、畿内と関東でほぼ同時に成立したと考えられているが（河村2006ａ）、八幡脇遺跡のある当地域もこの滑石玉類成立事情の一端を担っていた可能性が考えられる。

二点目は、３棟の工房跡から出土した多様な石製工具のあり方と、内磨き砥石の顕在化の特色である。まず、石製工具のあり方に各工房間での偏在が認められ、４号住では敲き石の類が、６

号住では大型・小型の内磨き砥石が、８号住では筋砥石が目立っている。とくに、６号住出土の工具は内磨き砥石のみで、その偏りは際立っていると言えよう。内磨き砥石は量の多寡はあるが、３棟の工房跡すべてから出土している。石材は１点（角礫凝灰岩）を除き片岩製で、前述のごとく石英片岩や紅簾片岩などほとんどが奥秩父周辺の三波川変成帯産であったと想定される。平砥石としても兼用され、大型と小型とがあり、機能分化や工程による使い分けなども考えられる。メノウ勾玉の製作を主体とする本遺跡の玉作においては、これら内磨き砥石は必要不可欠の工具として定形化し、最も有用な砥石として利用されていた様子が窺われる。

三点目は、玉作遺物の出土状況にみられた工房間相互の関係についてである。各工房跡から出土した玉作遺物の比較から、４号住と６号住との間で大型・小型の内磨き砥石各１点が接合し、また４号住と８号住の間でメノウ勾玉側面打裂未成品１点が接合するのが判明している。工房間の大きな時期差はなく同時併存していたと考えられることから、この接合関係は、工房操業中、工人が工具や玉の未成品を持って工房間を移動していたこと示している。本遺跡では、前述のごとく、工房間で工具の偏在が認められた。これは、特定の工程への専従を想定させ、工房間で作業工程を分担していた可能性を示唆するものとも考えられる。工具のみでなく、出土未成品の内容にも各工房間で偏りが認められる。すべての工房跡から出土したメノウ勾玉未成品を見ると、４号住は形割段階までが多く、６号住では側面打裂工程や研磨工程の未成品が目立ち、８号住では全体量は少数ながら荒割段階から研磨工程までの未成品が揃っているなど、その内容は一様ではない。やはり、先の接合関係は偶発的な移動によると考えるより、工房間分業を想定し、作業工程の分化や工程の進展に伴い工人及び未成品が工房間を移動したと考えたほうが状況を理解しやすいものと思われる（木崎2007）。なお、緑色凝灰岩及び滑石はメノウに比べ出土量が少なく、６号住の滑石は最終研磨段階のわずかな勾玉・管玉未成品のみが出土し、８号住の緑色凝灰岩は一定程度割られた荒割・形割品のみでしかも微細剥片が認められないなど特化した状況を呈している。本遺跡だけでそれらの製作が完結していたのか、工房間分業とあわせて近隣遺跡間との分業の可能性も考慮する必要があろう（註９）。

③烏山遺跡玉作との比較

八幡脇遺跡玉作の特徴を踏まえて、霞ヶ浦土浦入り南岸に近接し、古墳時代前期に遡る烏山遺跡玉作と本遺跡とを比較し、土浦入りにおける古墳時代玉作の特質について考えてみたい。烏山遺跡では、およそ４棟の工房跡からメノウ勾玉、緑色凝灰岩管玉、滑石管玉・勾玉のそれぞれの未成品や玉素材が出土し、その生産が明らかにされている（寺村1988、塩谷1993）。烏山遺跡の玉作は、古墳時代前期後半を中心とし、一部中期初頭に下る時期が想定される。八幡脇遺跡とは操業時期が重なっているが、土器の様相は、八幡脇遺跡の方が前期中葉に近い時期でやや古相を

示している。玉作の内容は、琥珀（勾玉）以外は八幡脇遺跡と同じ品目の玉類が製作されていた。古墳時代前期後半に遡るＡ－57号住は、烏山遺跡では最も多量の玉類未成品を出土した工房跡で、メノウ勾玉、緑色凝灰岩管玉、滑石管玉・勾玉いずれも、荒割段階から研磨・穿孔段階まで各工程の未成品が揃っている。また、工具も、短冊形を呈する大型の内磨き砥石や小型の内磨き砥石（兼平砥石）、敲き石などが各工房から出土しており、中でもＡ－57号住では内磨き砥石が７点とその顕在と盛行ぶりが窺われる。烏山遺跡出土の内磨き砥石もすべて片岩製で、石英片岩、紅簾片岩の他に緑泥片岩を利用したものも認められるなど、その産地は、八幡脇遺跡と同様に奥秩父周辺の三波川変成帯に求められる可能性が高い（註10）。八幡脇遺跡から出土した内磨き砥石を観察すると、小型の砥石は全体に摩耗し利用度が進んでいるが、短冊形を呈する大型の砥石は摩耗が部分的かつわずかであまり利用が進んでいない状況が指摘できる。これに対し、烏山遺跡の内磨き砥石は側面を中心に全体に磨耗が著しく、使用度合いが格段に高く、玉作工房の操業期間の長さをも窺わせるものと推量される。

八幡脇遺跡で第一の特徴としたメノウ勾玉と滑石管玉・勾玉の製作に関しては、烏山遺跡も古墳時代前期に遡る初期の生産例として特筆される。滑石管玉は、八幡脇遺跡同様の太さ５㎜以下の細身の管玉で、滑石勾玉は長さ２㎝弱の断面に丸味のあるものや、扁平で中期初頭に下るものなど大型化、扁平化し、八幡脇遺跡より後出する特徴も認められた。とともに、八幡脇遺跡でその特徴を指摘した、メノウ勾玉腹部の抉りを打撃や剥離によって成形する技法は、烏山遺跡でも同様に確認される。上記の操業期間の長さも含め、烏山遺跡の玉作は、八幡脇遺跡の玉作技術を継承しつつ、安定した生産が盛行したものと考えられる。

④霞ヶ浦土浦入りにおける古墳時代玉作の特質

最後に、八幡脇遺跡や烏山遺跡のある霞ヶ浦土浦入りにおける、古墳時代玉作の特質について触れておきたい。土浦入りの古墳時代玉作は、中間に江戸崎周辺の玉作遺跡を挟んで、成田市大和田玉作遺跡群や八代玉作遺跡群など、下総の古墳時代玉作遺跡と古霞ヶ浦の内海を介して密接な関係にあった（塩谷1996）。両地域の玉作遺跡については、操業時期は土浦入りが古墳時代前期中葉から後半を、下総が前期後半から中期前半を主体とし、玉作の内容は前者がメノウ、碧玉、滑石、琥珀の玉類、後者が碧玉、滑石の玉類と、土浦入りの先行性とメノウ勾玉、琥珀（勾玉）など下総には欠落する玉製作にその独自性が認められる。

土浦入りの玉作に顕在化した片岩製の内磨き砥石は、下総の玉作遺跡にも確認されており、道具の伝播と共に碧玉、滑石玉類の製作技法も土浦入りから下総へと波及したものと思われる。片岩製の内磨き砥石は、古墳時代前期後半における関東地方の玉作遺跡で顕著に使用され、工具として確立したと推測されており（大岡2008）、その後畿内や出雲地方へも波及したものと考えら

れる。土浦入りの玉作は、全国的に見てもメノウ勾玉や琥珀（勾玉）の製作に先行性と独自性があり、片岩製内磨き砥石の顕在化も認められることから、当地域がこの工具の確立と定型化の大きな原動力となったことは想像に難くない。石英片岩や紅簾片岩の産地である埼玉県長瀞町周辺から群馬県南部にかけての三波川変成帯（神無川、鏑川流域）は、他にもメノウや緑色凝灰岩、滑石などの玉素材の関東地方における主たる産地とも考えられている（高橋1992、木崎2007）。土浦入りでは、勾玉素材のメノウに関しては、出土する扁平な礫の特徴と比較して、玉川など茨城県北部久慈川流域の転石を入手し利用していた可能性が高い（寺村1988）。久慈川流域は、当地から直線距離にして約60kmと遠方ではあるが、玉素材の利用に適したメノウ産地としては最も至近な距離にあったと思われる。内磨き砥石の産地に比定する三波川変成帯は、直線距離にしておよそ100～120kmとさらに遠方に位置している。石英片岩や紅簾片岩は、含有物など石材の特徴が研磨に有効であったことから、片岩の中でも内磨き砥石に最も適した石材として選ばれたのであろう。また、片岩だけでなく、同時に緑色凝灰岩や滑石玉類の素材をも入手するねらいがあった可能性も考慮する必要があろう。

土浦入りの古墳時代玉作の特徴は、古霞ヶ浦の内海に面する交通の要衝に位置し、上記のような遠方かつ多方面からの玉材・石材の入手と、さらに関東以北を主たる対象としたであろう東日本への製品流通の最適の地として選ばれたところにある。ここでは、北陸の玉作技術を背景に関東で始まった古墳時代玉作の中で、土浦入り玉作の特色であるメノウ勾玉生産が、出雲系技術の導入ではなく、ほぼ同時期に始まる出現期の独自な生産であること。また、不可欠な工具である内磨き砥石の確立と定型化にも当地が大きな役割を果たしたことなどをあらためて提起し、選地の背景と共にその歴史的意義を強調しておきたい。（塩谷　修）

３平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡（第19号住居跡）１軒と火葬墓７基、そして溝跡が１条確認されている。竪穴住居跡は台地の端部に１軒のみ確認され、出土遺物から９世紀後半の時期の遺構と判断される。台地上に広く展開した火葬墓で構成される墓域を避ける意識を持って構築されているようにも見える。この住居跡は、カマドの遺物出土状況や出土遺物が特徴的である。同住居跡のカマド内からは坏や甕破片が重ねられて出土した。その状況は、カマド使用時の転用支脚とも考えられるが、土器の重なり具合に不安定さが伴い、土師器甕破片を除き明確な被熱の状況が認められない。そして、最上部の坏には底部に穿孔も見られる。その状況には実用的というよりも儀礼的な意味合が強く感じられ、特別な観念の存在が想定される。同様な出土例は、同事業地内の長峯遺跡（土浦市教委1997ｂ）で確認された第10・15号住居跡をあげることができる。第10号住居跡については、その立地も特徴的で、細尾根状の台地上に営まれた集落跡からかけ離れた台

地先端で検出されている。また、第19号住居跡の特徴的な出土遺物には、「豊」と書かれた墨書土器が出土しているが、同様な墨書土器は壱杯清水西遺跡（土浦市教委1997ａ）で「豊」や「案豊」があり、寺畑遺跡でも「案豊」と書かれたものが検出されている（上高津貝塚1998)。長峯遺跡例は９世紀後葉に位置付けられ、壱杯清水西遺跡例も９世紀後葉から末葉に位置付けられている。寺畑遺跡や長峯遺跡では規模は異なるものの、いずれも四面庇付きの仏堂らしい建物跡が見られる。両者の遺跡では仏教関連遺物も見られることから、「案豊」の文字は僧名とみる考え方がある（上高津貝塚1998)。このような状況から、本遺跡事例も上記事例と関連し、同様な思想・規範を共有する集団により営まれた遺跡であることが考えられる。

また、本遺跡における最も重要な土地利用として、葬送に関わる墓域としての性格が色濃い。火葬墓はエリア外のものを除き全部で７基確認され、第７号火葬墓とした１基のみ蔵骨器に灰釉陶器を用い、その他は土師器や須恵器を用いている。ほとんどの火葬墓は９世紀前半から中葉の範疇のものであるが、第７号火葬墓のみ黒笹14号窯式期相当の短頸壺を蔵骨器として用いているものの伴う土師器から９世紀末葉から10世紀前葉のものと位置付けられる。これらの中で、その在り方も特徴が見られ、第７号火葬墓のみ第１号溝跡の東側に存在し、ほかは全て西側に展開している。第７号火葬墓のみを特別視するかのごとくの配置状況である。第１号溝跡の構築時期については、第７号火葬墓構築より早い可能性があり、火葬墓埋納以前に墓域の中のある限定した土地を溝の区画によって確保していたという想定も可能となる。そして、火葬墓内に遺存した火葬骨の鑑定では、いずれも成人の骨で女性が４例、男性が２例、性別不明が１例であった。なかでも灰釉陶器に埋納されたのが成人女性であることは興味深い。

このように墓域の様子を見てくると、先に触れた単独の竪穴住居跡の役割については、墓域に強く関わりを持つことが想定される。それは、カマド内の遺物出土状況から特別な観念が窺われ、墨書土器や燈明転用土器から仏教的な色彩が感じられる。八幡脇遺跡の平安時代の遺構群については葬送儀礼と一体となったものであった可能性が想定される。加えて、同遺跡は事業地内の他の平安時代の遺跡とも有機的な関連を持って存在していたことが窺われる。　　（関口　満）

参考文献

（財）茨城県教育財団 1982『宮部遺跡　鹿の子Ａ遺跡　砂川遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅦ

玉湯町教育委員会編 1986『出雲玉作跡保存管理計画策定報告書Ⅰ－宮垣地区・宮ノ上地区－』

小田原市教育委員会 1987『千代南原遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書22集

齊藤弘道 1987「出土土器について」『南三島遺跡3・4区（Ⅰ)』茨城県教育財団文化財調査報告第44集（財）茨城県教育財団

寺村光晴 1988「烏山遺跡の玉作－その様相と意義－」『茨城県土浦市　烏山遺跡』土浦市教育委員会（大川清編）
高橋直樹 1992「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」『千葉県文化財センター研究紀要』13　財団法人千葉県文化財センター
塩谷　修 1993「土浦市烏山遺跡出土の管玉未成品」『土浦市立博物館紀要』第５号 土浦市立博物館
栃木県立なす風土記の丘資料館 1994『古代東国の産業－那須地方の窯業と製鉄業－』
比田井克仁 1995「下総地域の主体性－東京湾岸との相対的関係から見た弥生～古墳時代の様相－」『法政考古学』第21集　法政大学考古学会
塩谷　修 1996「霞ヶ浦と古代玉作り遺跡」『関東の博物館』第20号　関東地区博物館協会
北橘村教育委員会 1996『北町遺跡　田ノ保遺跡』北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
土浦市教育委員会 1997a『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壱杯水西遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
土浦市教育委員会 1997ｂ『長峯遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第３集
冨山正明 1997「林･藤島遺跡（泉田地区）出土の鉄製品－弥生時代後期の玉作り工具を中心に－」『第4回鉄器文化研究集会　東日本における鉄器文化の受容と展開　発表要旨』鉄器文化研究会
河野一隆 1997「玉作と鉄器文化－京都府奈具岡遺跡の遺構・遺物の検討から－」『第4回鉄器文化研究集会　東日本における鉄器文化の受容と展開　発表要旨』鉄器文化研究会
土浦市教育委員会 1998『前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）東原観音塚』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第４集
村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』シリーズ日本史の中の考古学　青木書店
（財）茨城県教育財団 1998『南小割遺跡　権現堂遺跡　親塚古墳　後原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第129集
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998『第3回特別展　仏のすまう空間－霞ケ浦の仏教信仰－』
上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001『第6回特別展　弥生から古墳へ－時代の終わりと始まり－』
塚本師也 2001「関東地方東北部における縄文時代の大型貯蔵穴出現期の様相（上）」『研究紀要－埋蔵文化財センター創立10周年記念号－』第９号（財）栃木県生涯学習財団埋蔵文化財センター
比田井克仁 2001「第一章第二節　古墳時代前期の土器様相の展開」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
比田井克仁 2002「関東地方・東北南部の土器」『考古資料大観第２巻　弥生・古墳時代土器Ⅱ』小学館

吉澤　悟 2003「茨城県北浦町出土の灰釉短頸壺について」『MUSEUM』586号　東京国立博物館
田中　裕 2003「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　帝京大学山梨文化財研究所
米田克彦 2005「出雲における古墳時代玉生産の展開と独自性」『玉文化』第２号　日本玉文化研究会
吉澤　悟 2006「火葬のひろがりと古代の東国社会」『第11回特別展　火葬と古代社会－死をめぐる文化の受容－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
小田原市教育委員会 2006『千代吉添遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第137集
齊藤弘道 2006『茨城県立歴史館史料叢書９　茨城の縄文土器』茨城県立歴史館
河村好光 2006ａ「倭国の展開と玉つくり集団」『玉文化』第３号　日本玉文化研究会
河村好光 2006ｂ「初期倭政権と玉つくり集団」『考古学研究』50-4　考古学研究会
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
土浦市遺跡調査会 2007『尻替遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
鈴木素行 2007「Ｘ向野Ｅ遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について－君ヶ台貝塚の再検討を添えて－」『向野遺跡群』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
木﨑　悠 2007「関東における古墳時代前期の玉作－「香取海」沿岸地域を中心に－」『日中交流の考古学』　同成社
（財）茨城県教育財団 2008『薬師入遺跡2』茨城県教育財団文化財調査報告書第296集
大岡由記子 2008「結晶片岩製砥石からみた古墳時代の玉作り」『月刊考古学ジャーナル』第567号　ニューサイエンス社
米田克彦 2008「古墳時代玉生産の変革と終焉」『月刊考古学ジャーナル』第567号　ニューサイエンス社

註釈

１縄文時代。

（１）加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器については、（齊藤1987）や（鈴木2007）などの考え方を参考に大枠で時期設定をした。

２古墳時代

（１）大澤正己・鈴木瑞穂「田村沖宿遺跡群（八幡脇・尻替遺跡）出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」九州テクノリサーチ・TACセンター及び、平井昭司「八幡脇遺跡および尻替遺跡から出土の鉄関連遺物の中性子放射化分析」武蔵工業大学原子力研究所（いずれも未公表資料、

今後本事業調査報告書総集編で公表予定）

（2）（小田原市教委2006）の中で、千代南原遺跡（小田原市教委1987）の調査成果にも触れ、鍛冶作業の目的として攻玉具の製作という視点が指摘されている。

（3）図上での判断であるが、八幡脇遺跡第3号住居跡出土の棒状鉄製品については、弥生時代後期後半期の玉作遺跡である林・藤島遺跡（冨山1997）の中で、玉素材の調整剥離に用いた玉作工具と考えられる「先端を尖らせた幅3～5mm、長さ20～30mmの棒状の」鉄製品に類似する。

（4）南小割遺跡の古墳時代前期に位置付けられる第178号住居跡からは、流れ込みとして羽口や凝灰岩製の金床石が出土している。羽口は2個体見られ、いずれも裾広がりの形態で器厚も薄手あり、粗製器台の転用品の可能性もあろうか。

（5）近年報告された、薬師入遺跡の古墳時代前期中葉期の第78号住居跡については、鍛冶工房的な性格を有した遺構として報告されている。住居跡内の1区画で最高149個もの粒状滓の出土や、転用羽口とされる器台が出土している。図面上の多量の粒状滓の出土に反して鍛造剥片などの他の微細な鍛冶関連遺物は全く見られず、実情は不明である。

（6）本遺跡のメノウ勾玉の製作工程については、出土資料の整理途上に、寺村光晴先生よりご教示いただいた経緯がある。

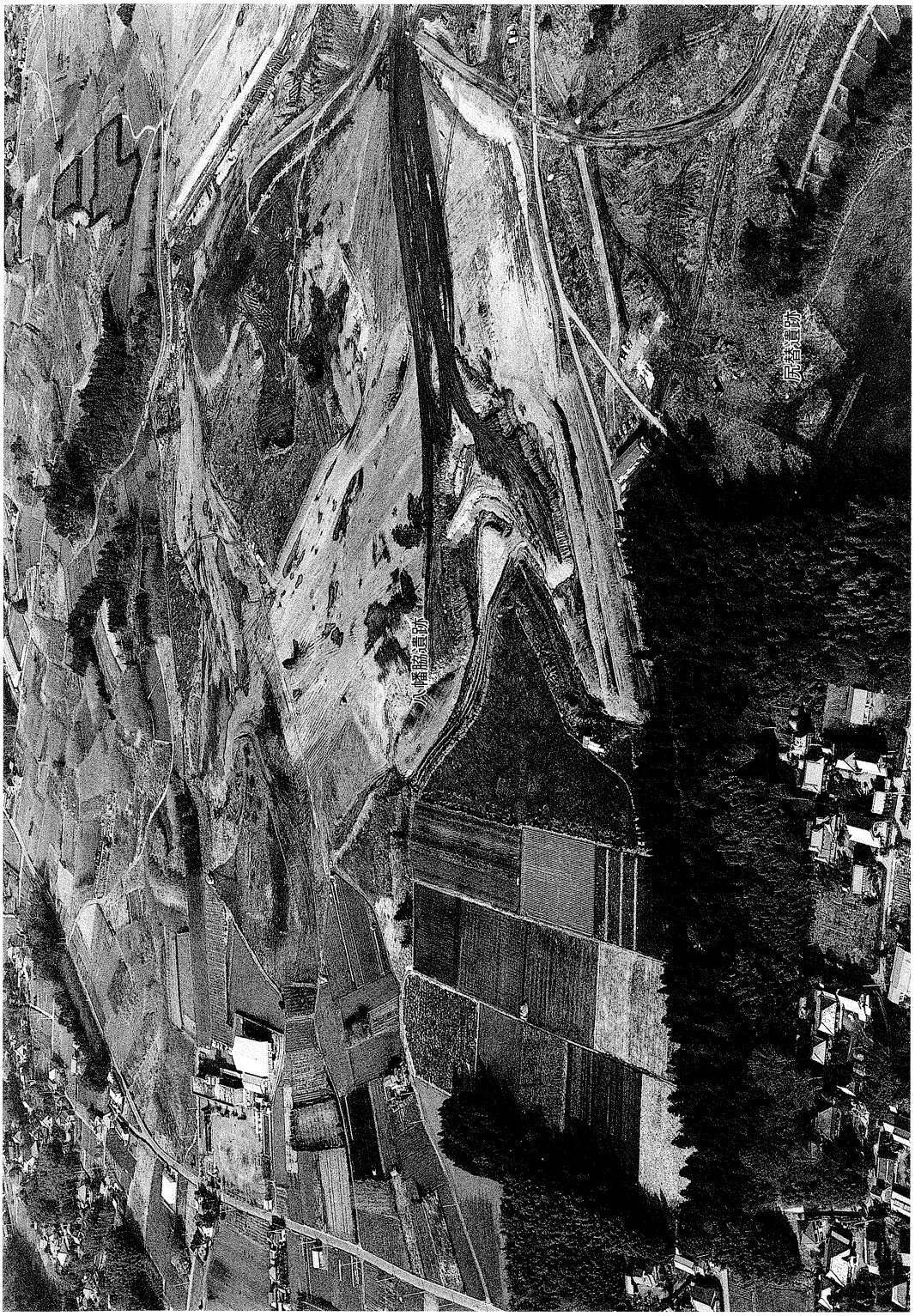
（7）片岩製内磨き砥石の石材産地については、矢野徳也氏にご教示いただいた。

（8）平底甕の年代観を中心に、（比田井1995）、（田中2003）の成果を参照した。

（9）土浦市内を見ても、八幡脇遺跡以外に後述する烏山遺跡及び浅間塚西遺跡から古墳時代前期の玉作工房跡が発見され、また大宮前遺跡、寄居遺跡、うぐいす平遺跡からは未成品や砥石など玉作関連遺物が出土している。

（10）矢野徳也氏にご教示いただいた。

写　真　図　版

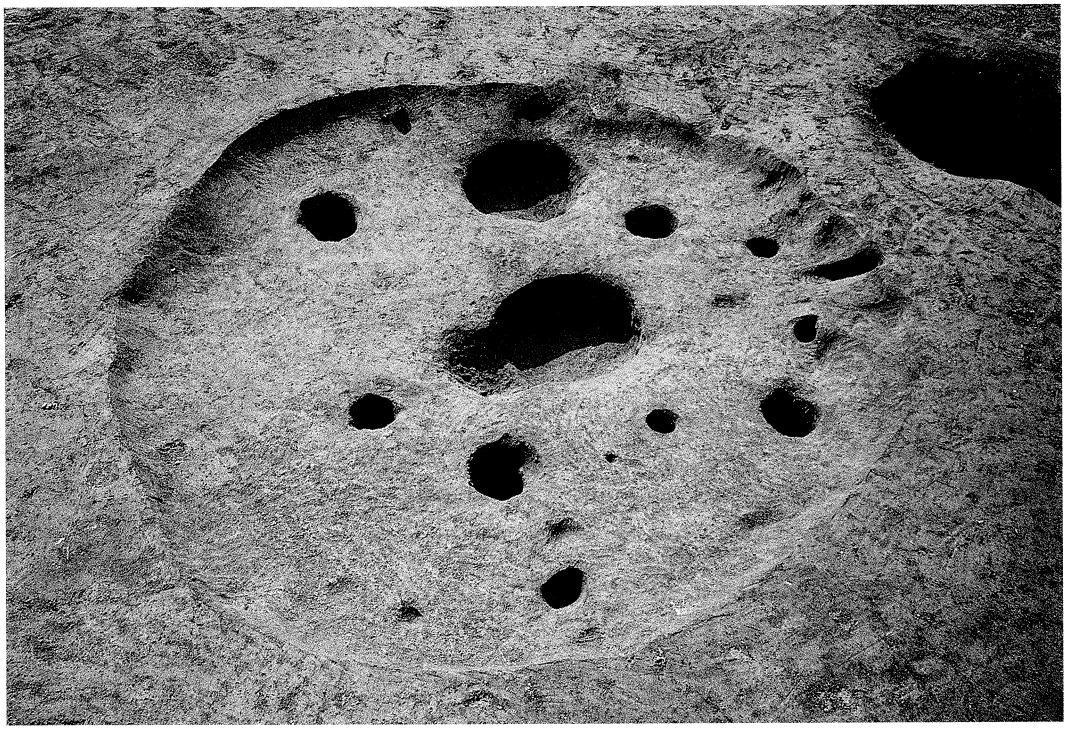


八幡脇遺跡航空写真（１）

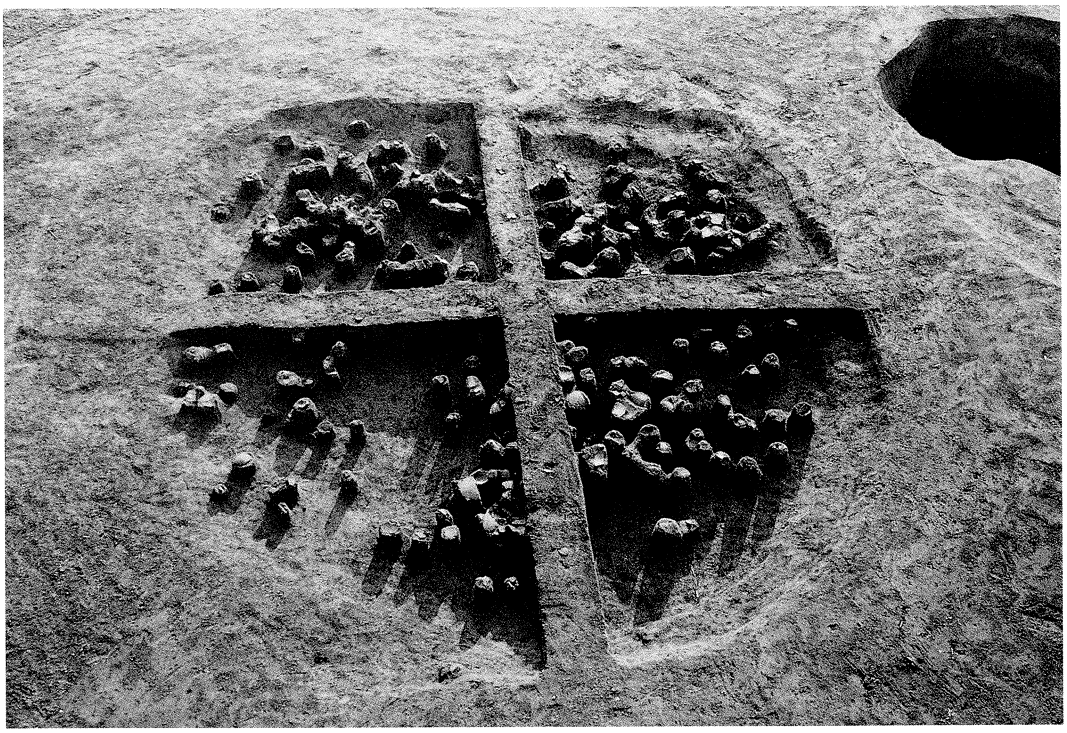
八幡脇遺跡航空写真（２）

試掘調査状況（８Tr）

試掘調査状況（33Tr）

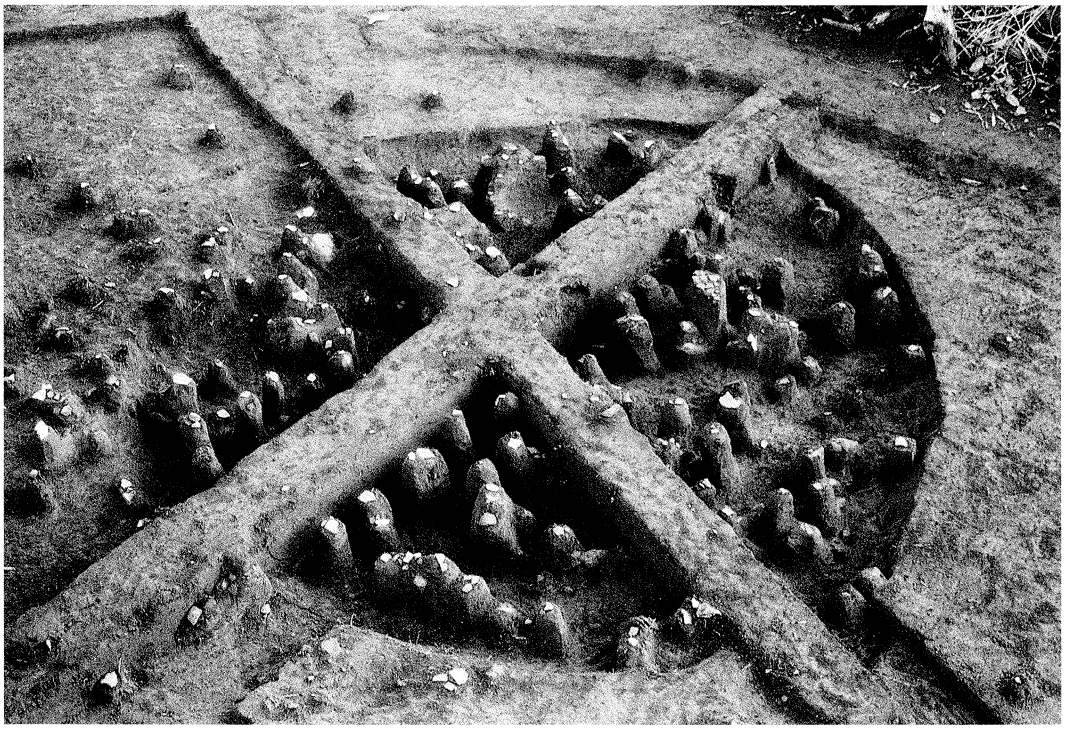


第７号住居跡

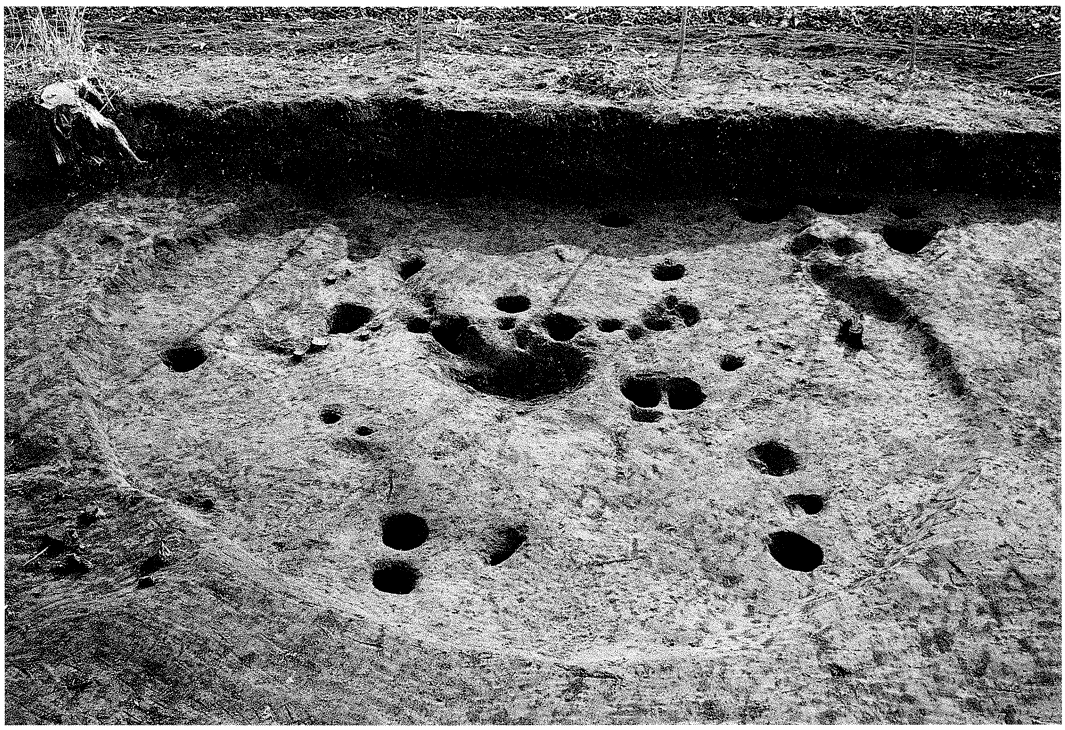


第７号住居跡遺物出土状況

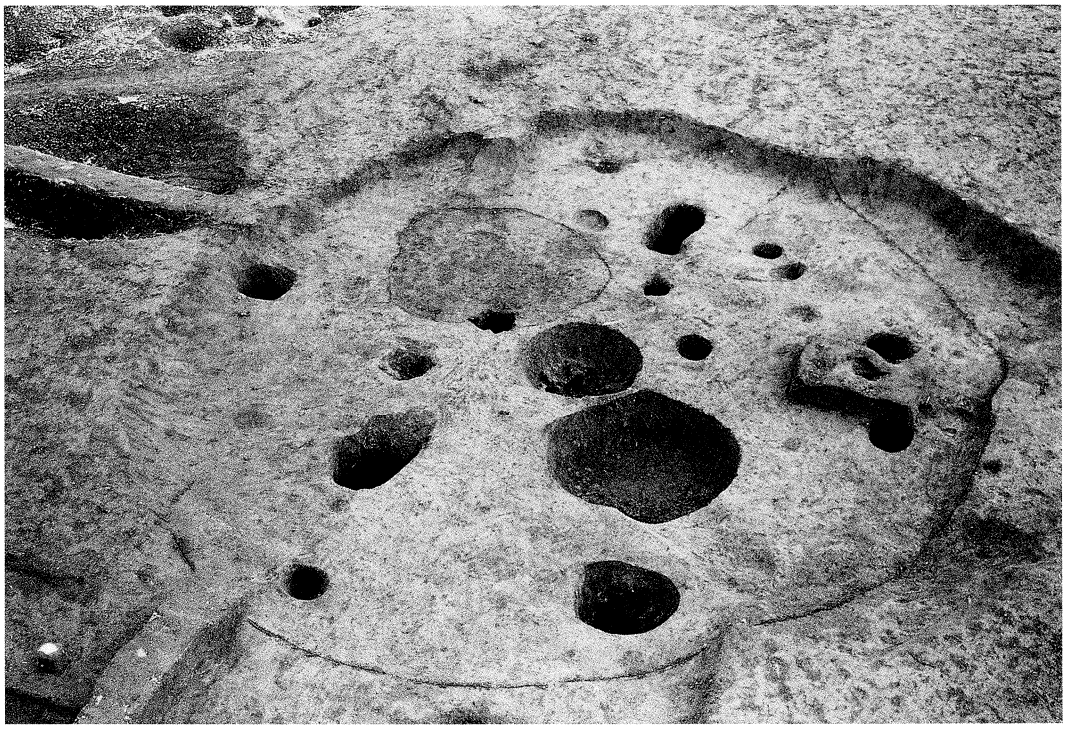
第９号住居跡



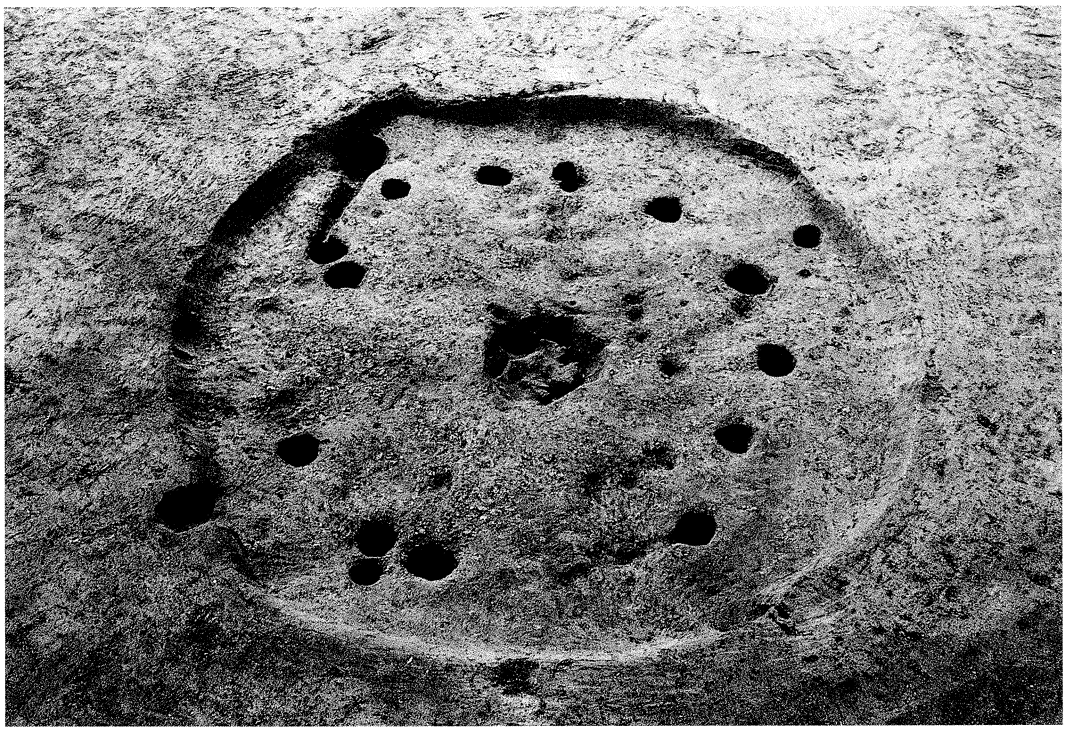
第９号住居跡遺物出土状況



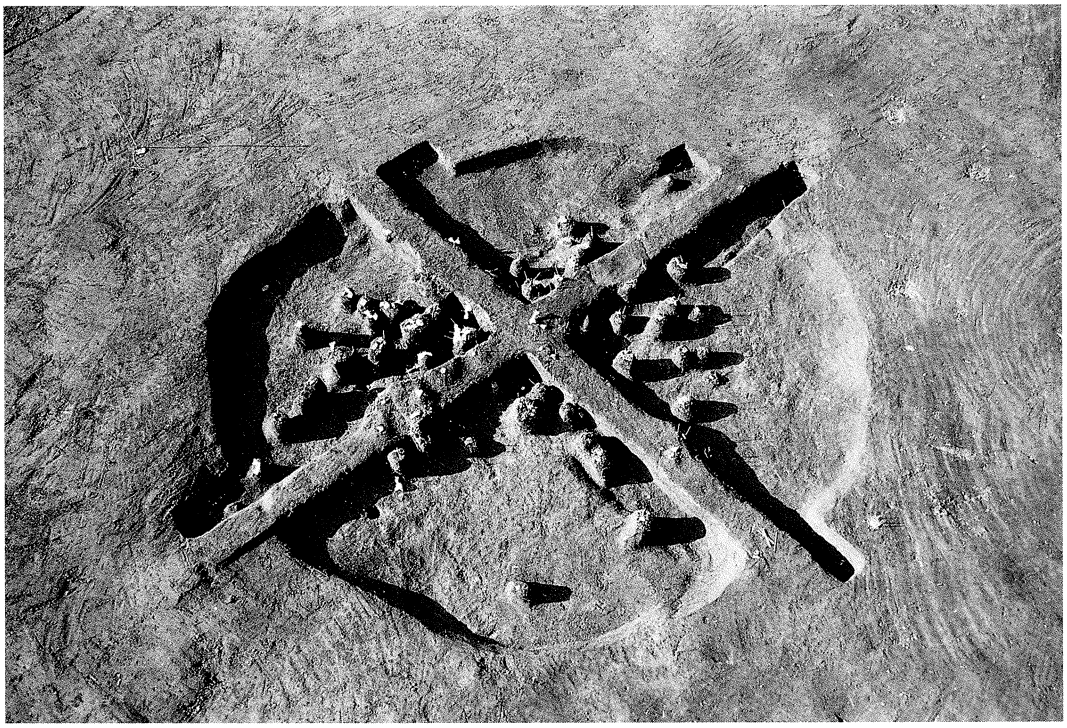
第12号住居跡



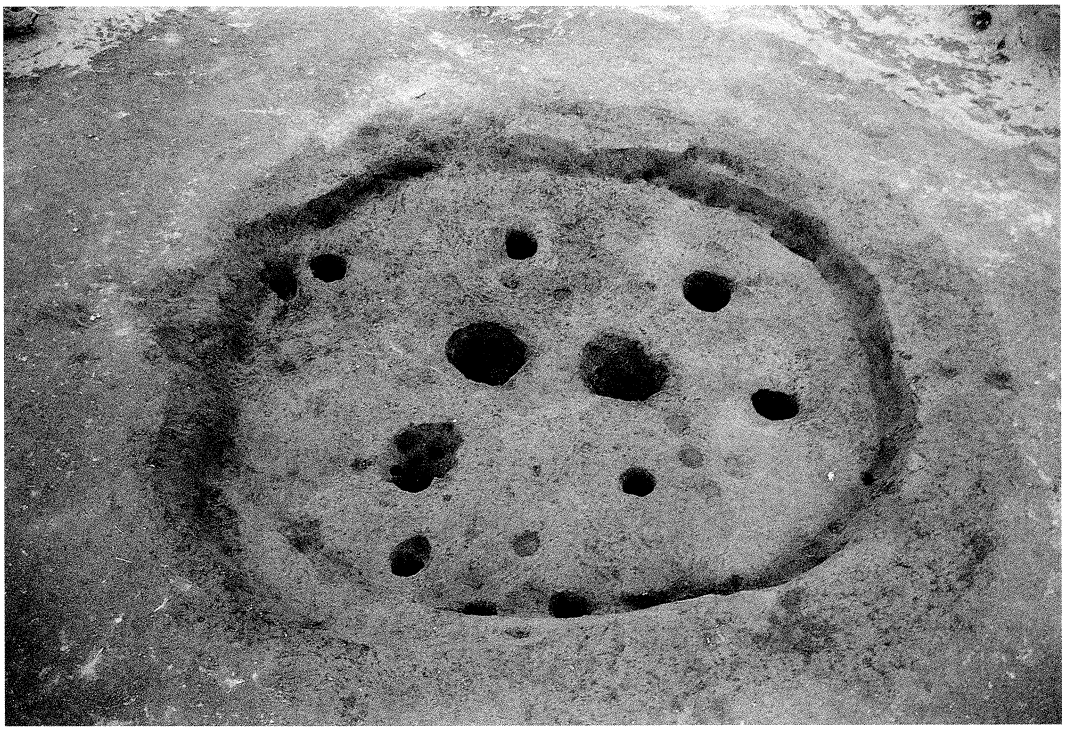
第13号住居跡（島状に残るのは第１号住居跡鍛冶炉）



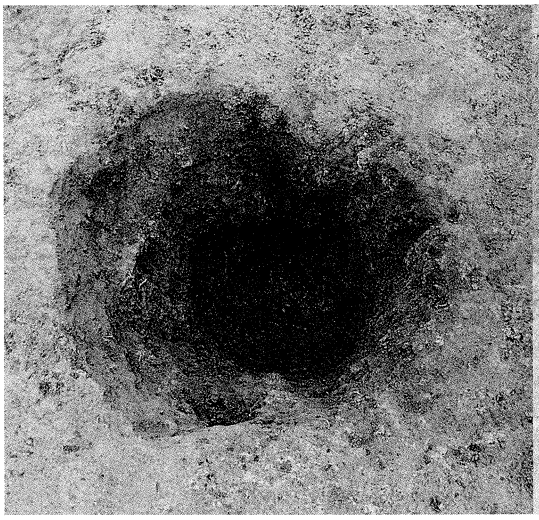
第15号住居跡



第15号住居跡遺物出土状況

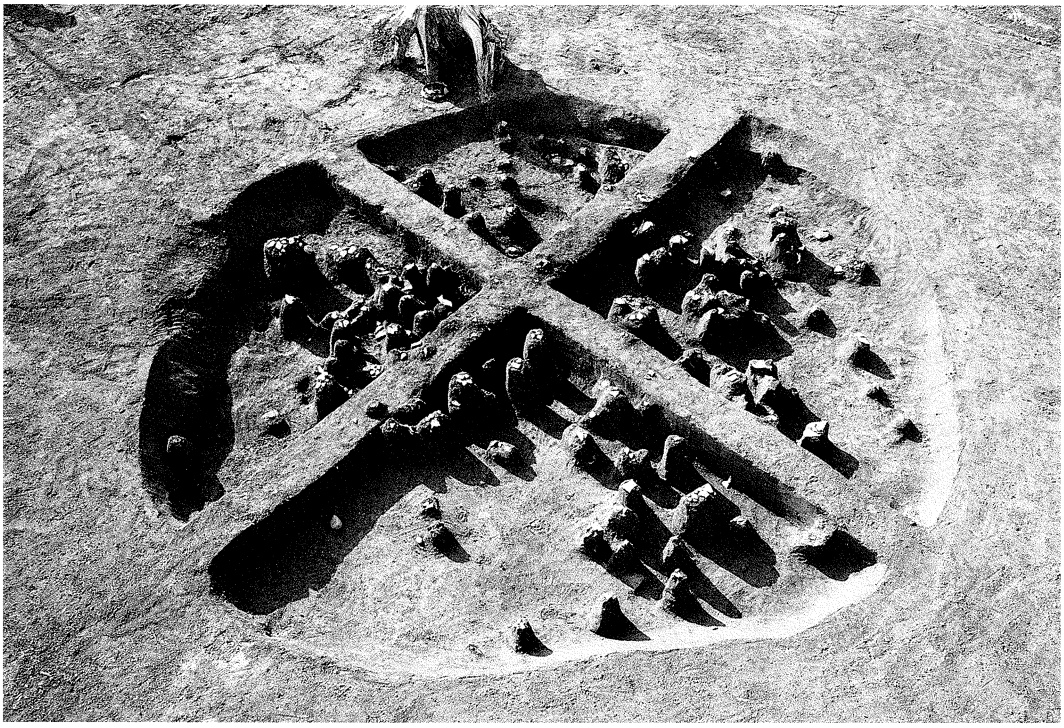


第16号住居跡

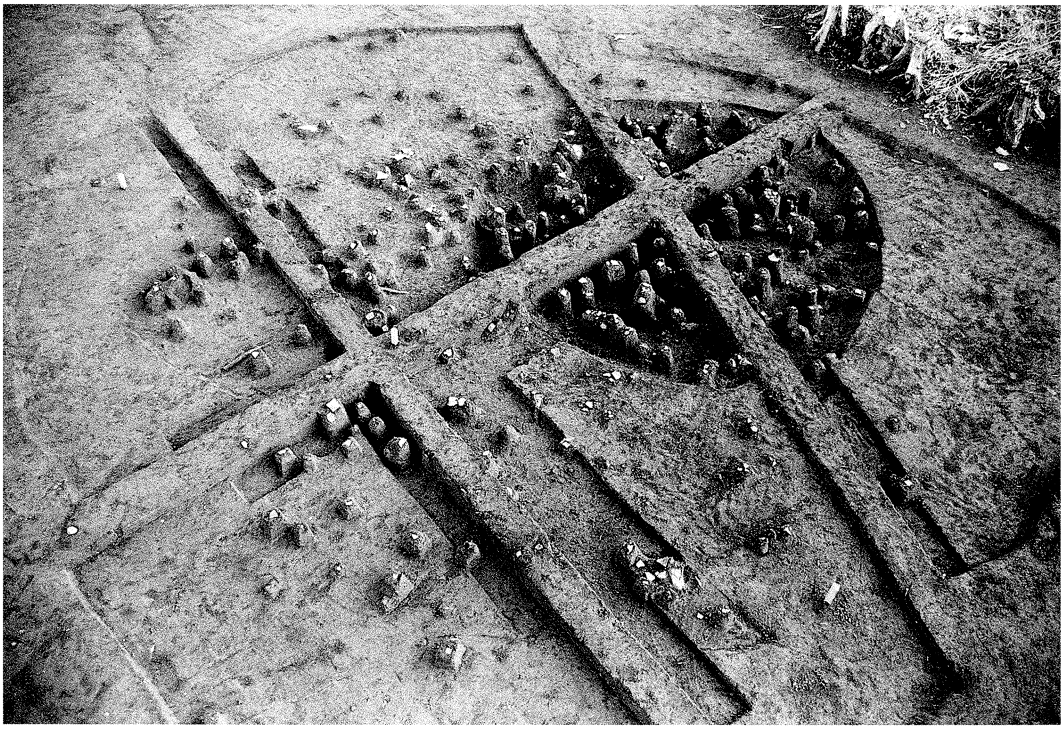


第16号住居跡炉１

第16号住居跡炉２



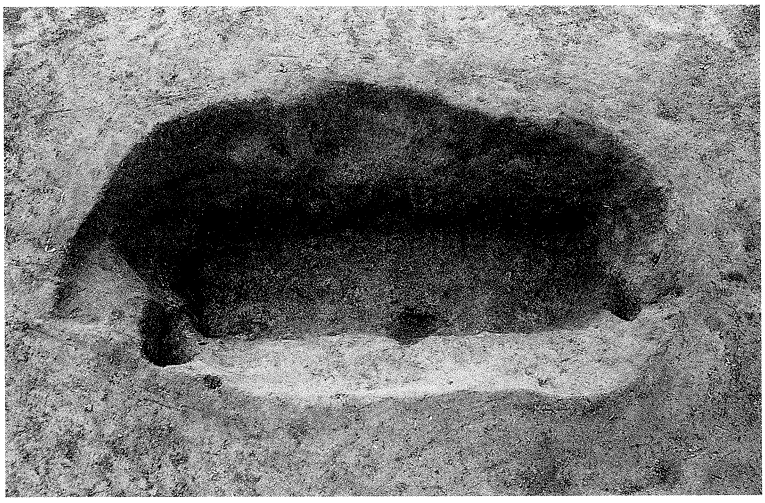
第16号住居跡遺物出土状況



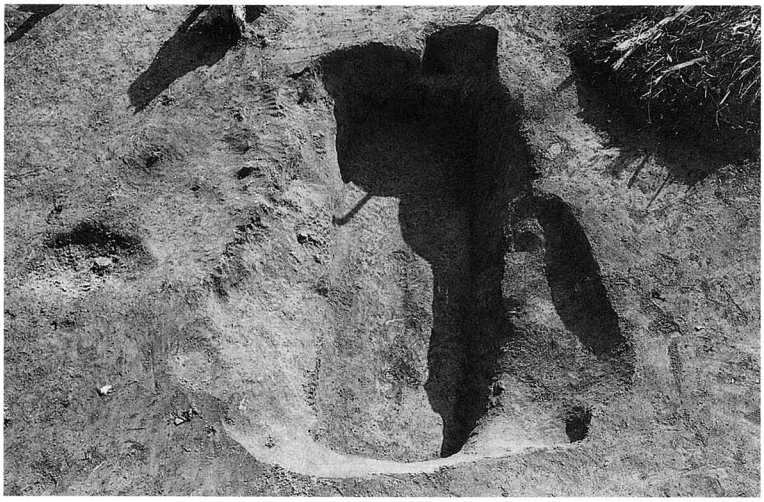
第１号竪穴遺構遺物出土状況

第28号土坑

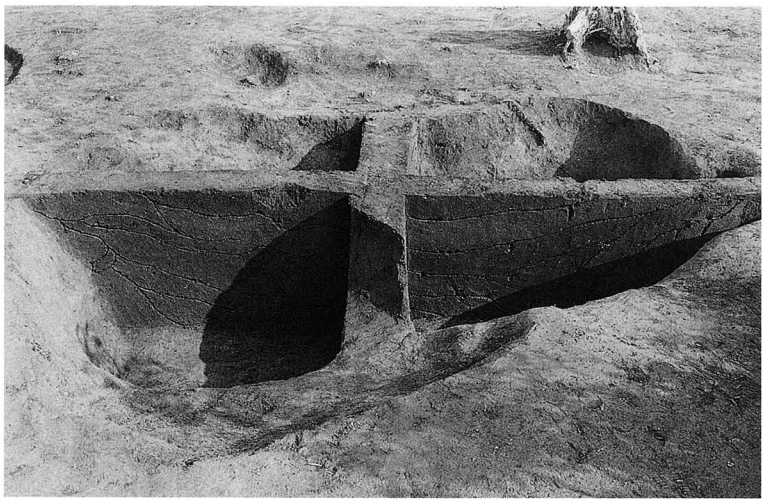
第31号土坑



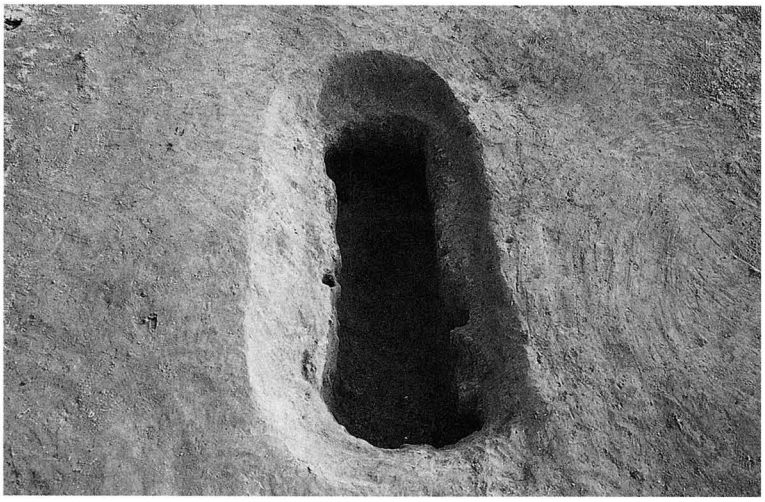
第32号土坑



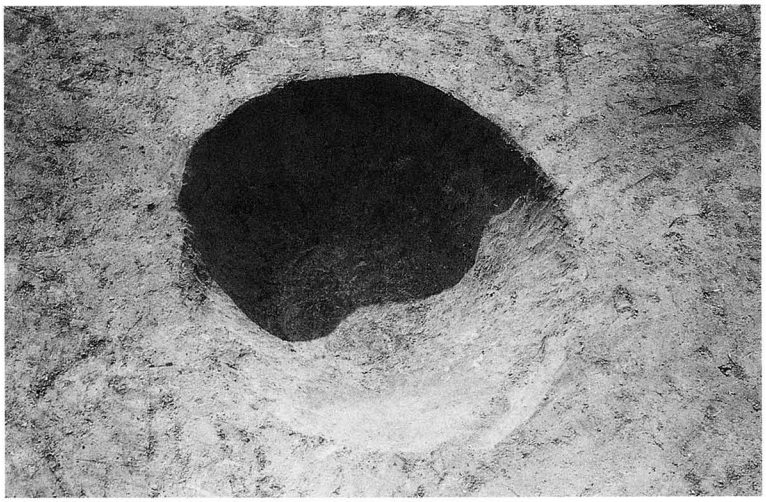
第33号土坑



第33号土坑
土層



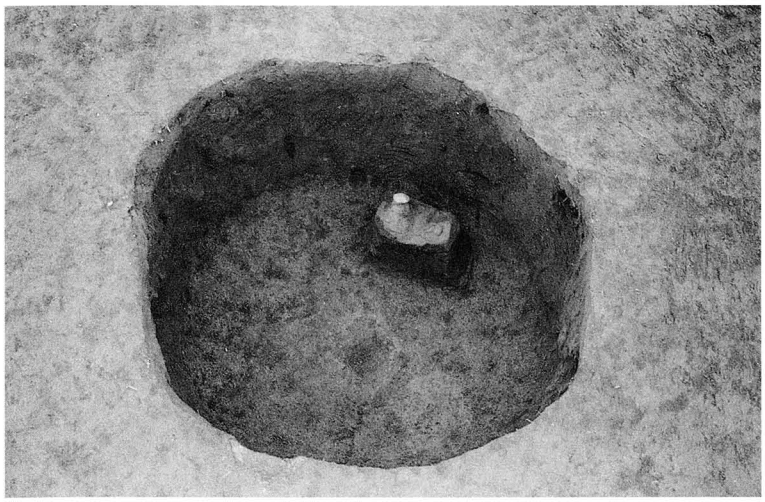
第36号土坑



第16号土坑

第16号土坑
遺物出土状況

第40号土坑

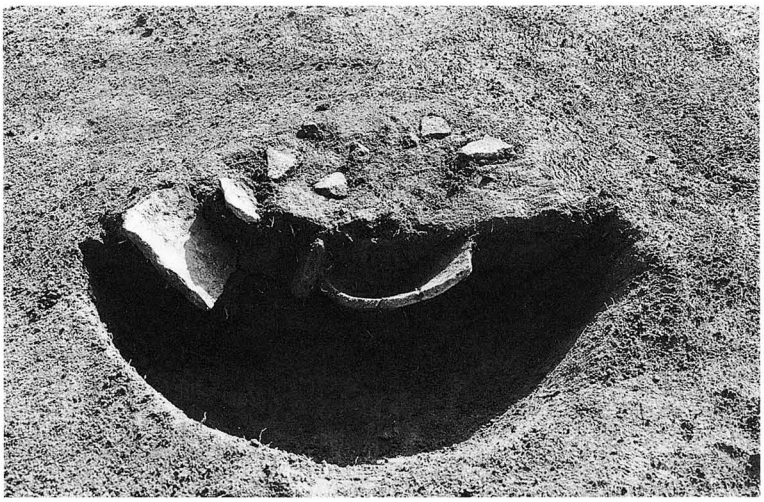


第44号土坑
遺物出土状況

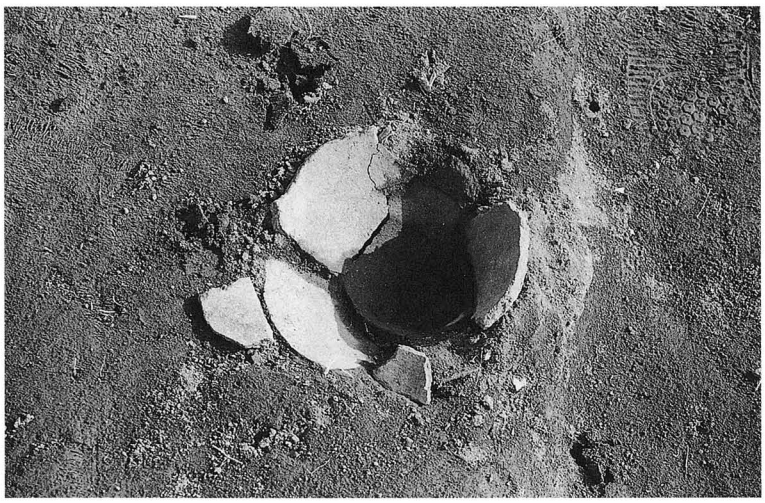
第50号土坑

第50号土坑
遺物出土状況

第51号土坑
遺物出土状況

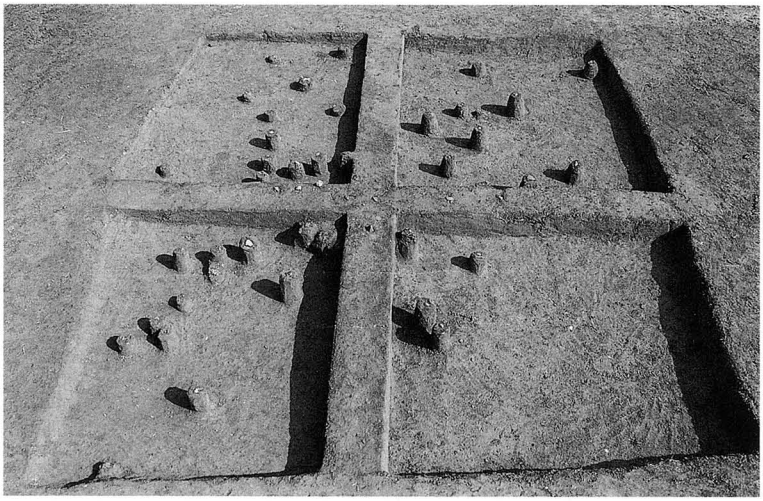


第２号土器埋設遺構



第３号土器埋設遺構

第４号土器埋設遺構



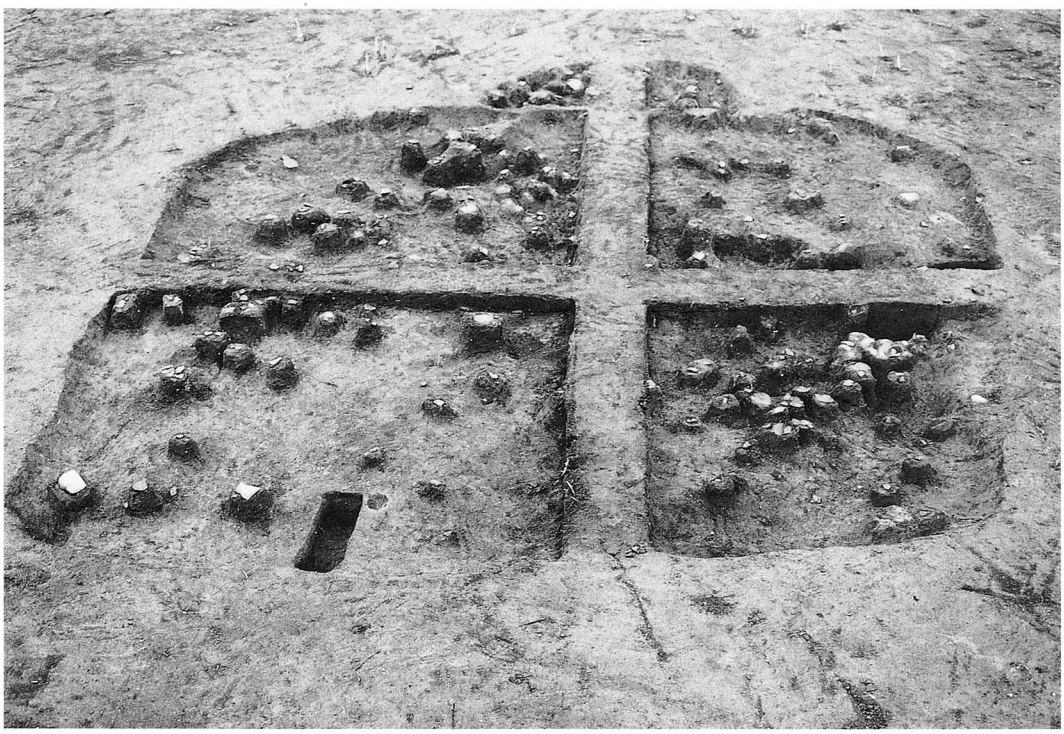
第１号集石

第１号焼土址

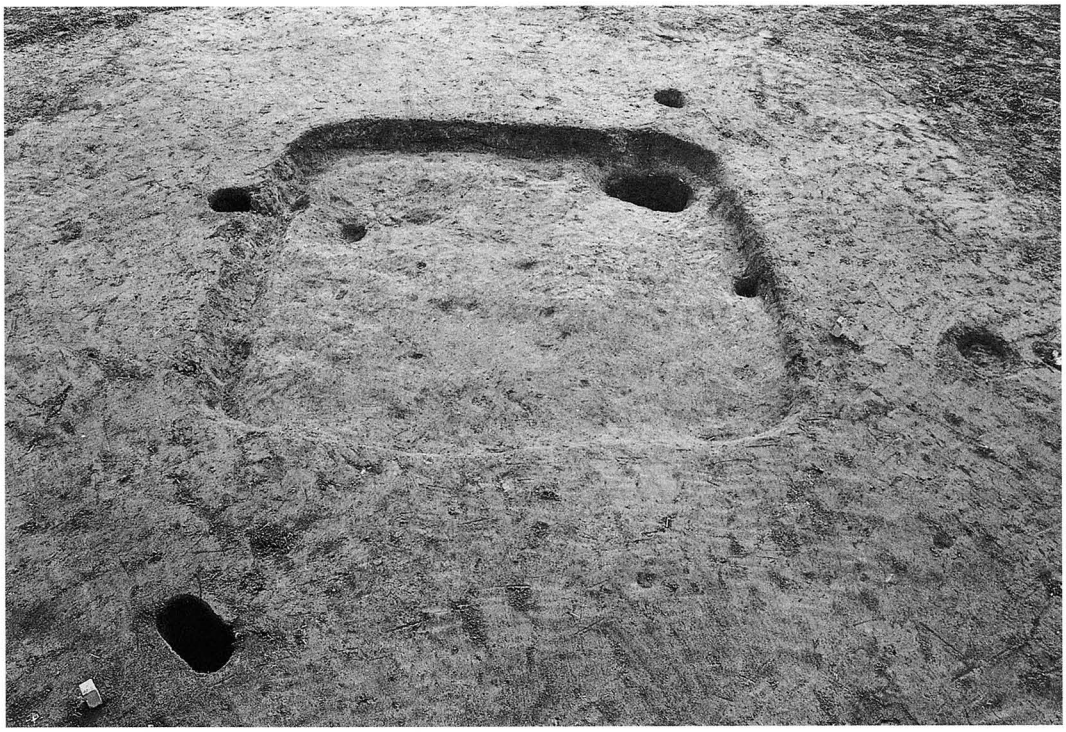
第１号住居跡

第１号住居跡床下溝等完堀状況

第１号住居跡鍛冶炉

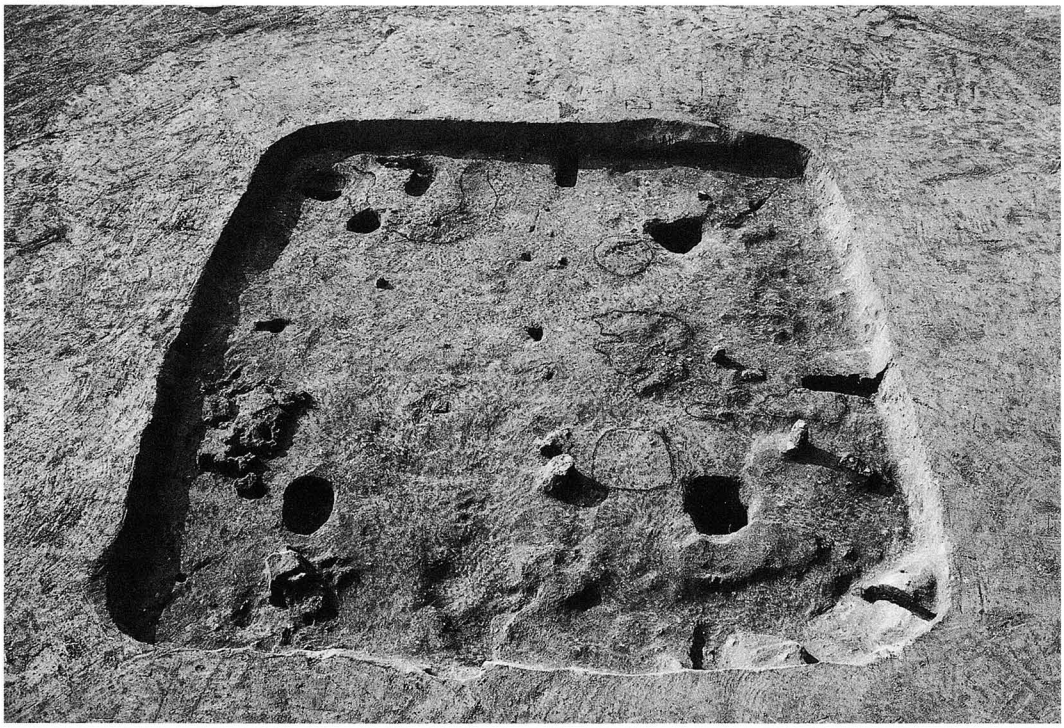


第１号住居跡遺物出土状況

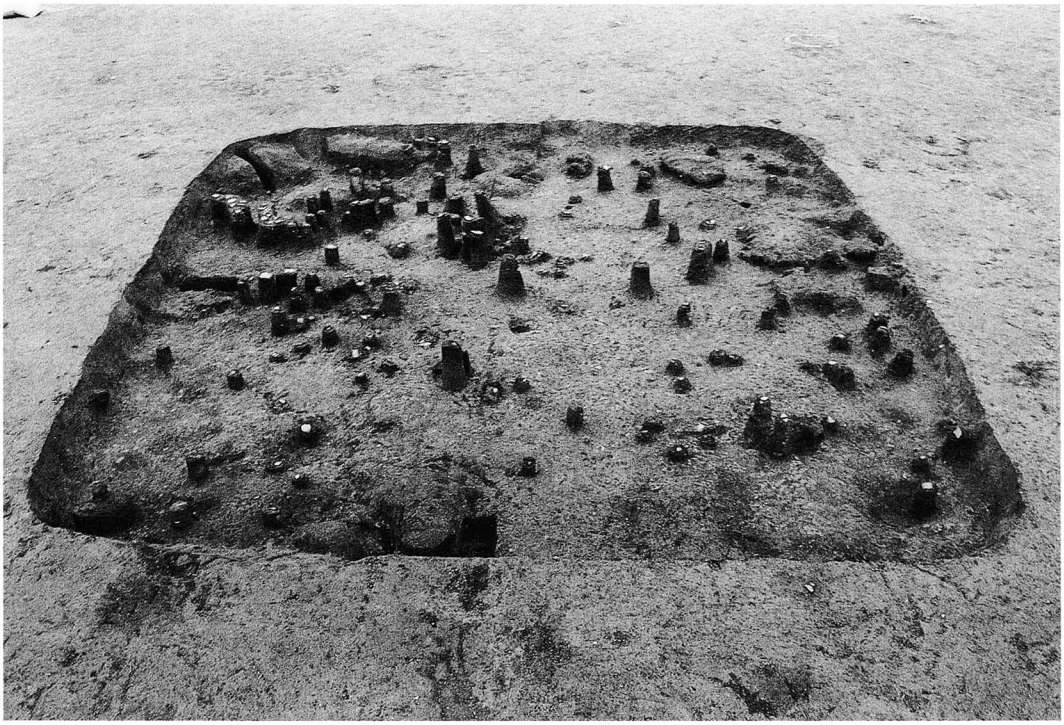


第２号住居跡

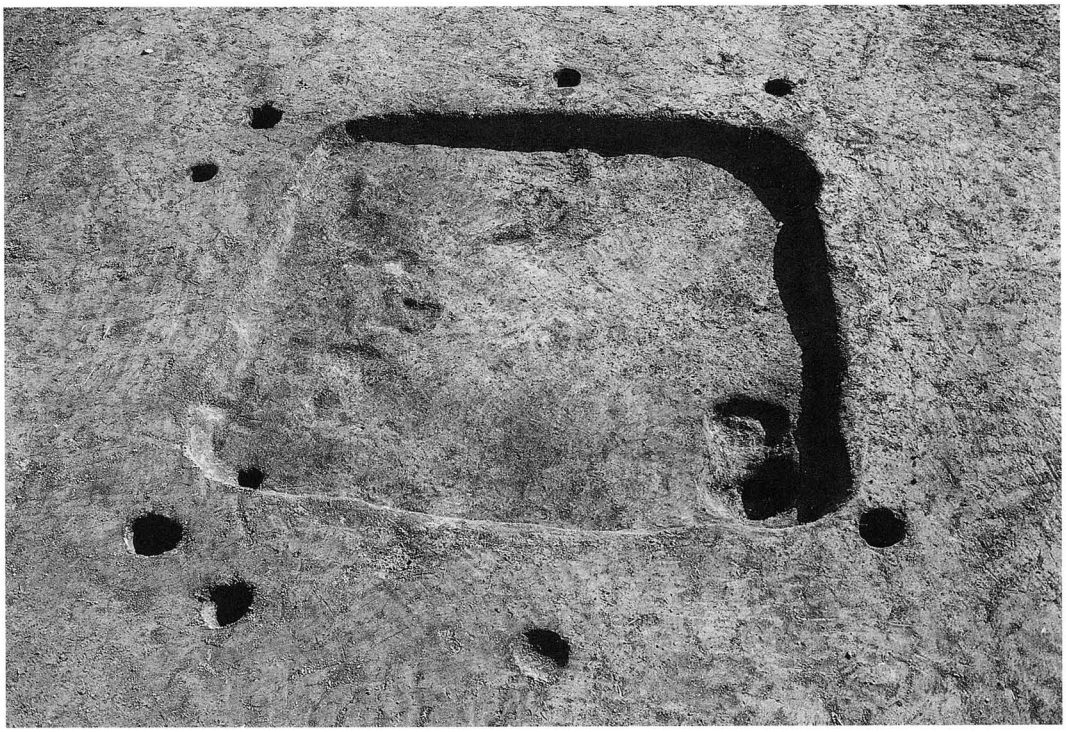
第２号住居跡遺物出土状況



第３号住居跡



第３号住居跡遺物出土状況

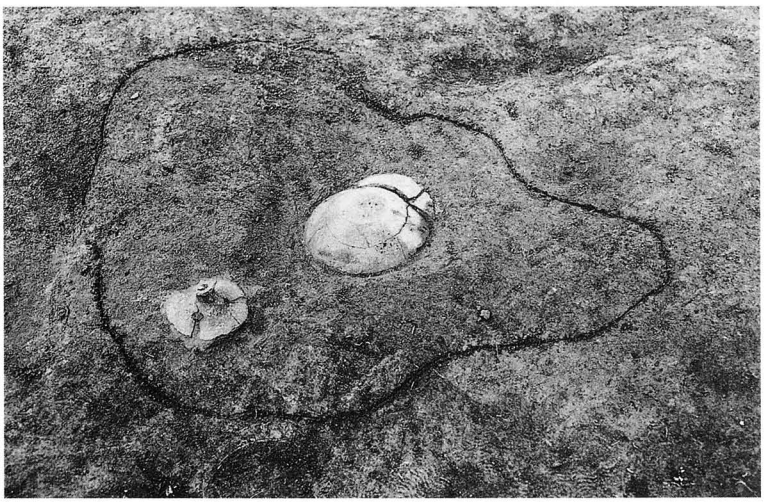


第４号住居跡

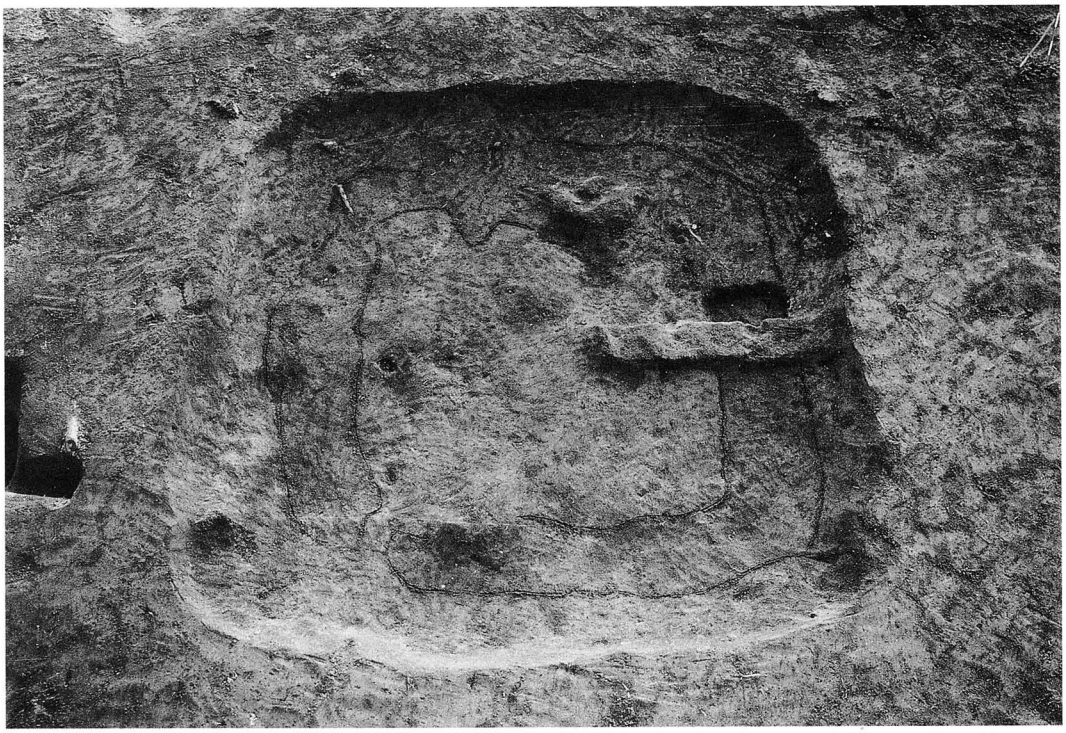
第４号住居跡遺物出土状況

第４号住居跡
貯蔵穴遺物出土状況

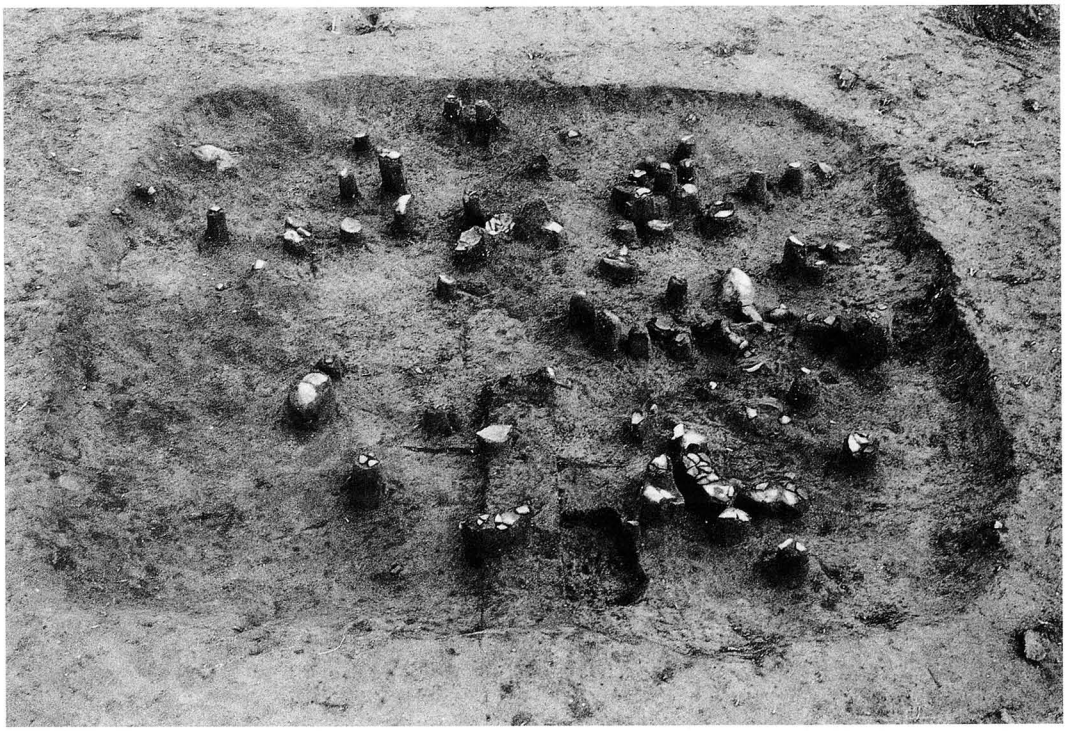
第４号住居跡
遺物出土状況



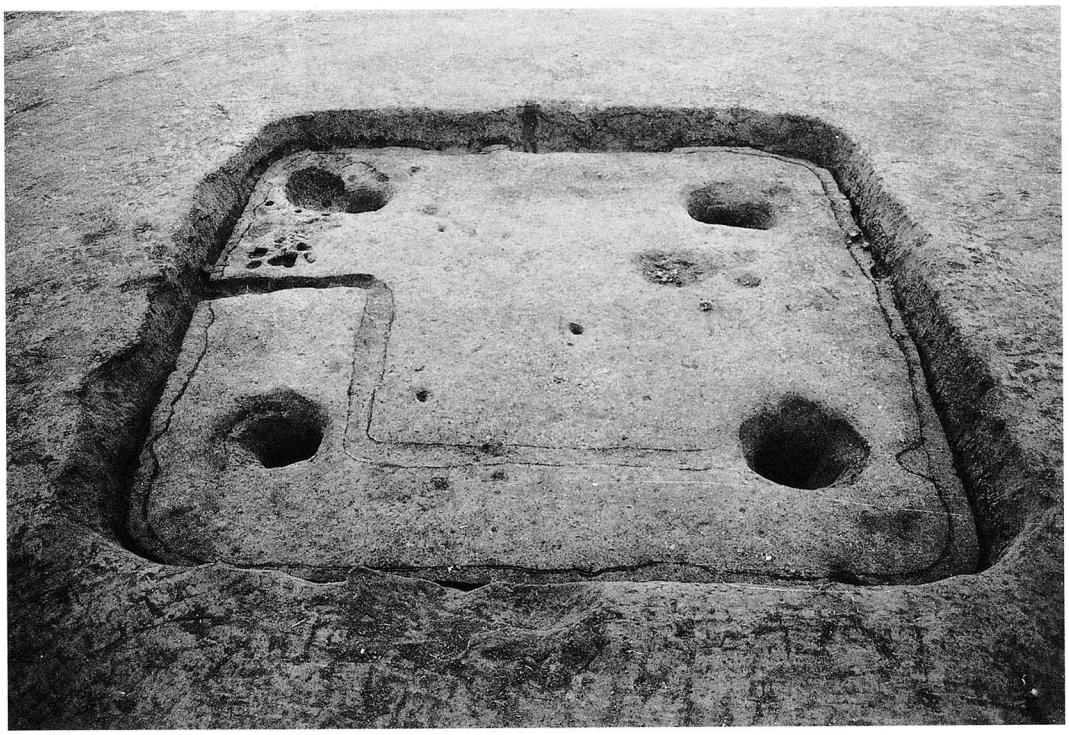
第４号住居跡
炉２上遺物出土状況



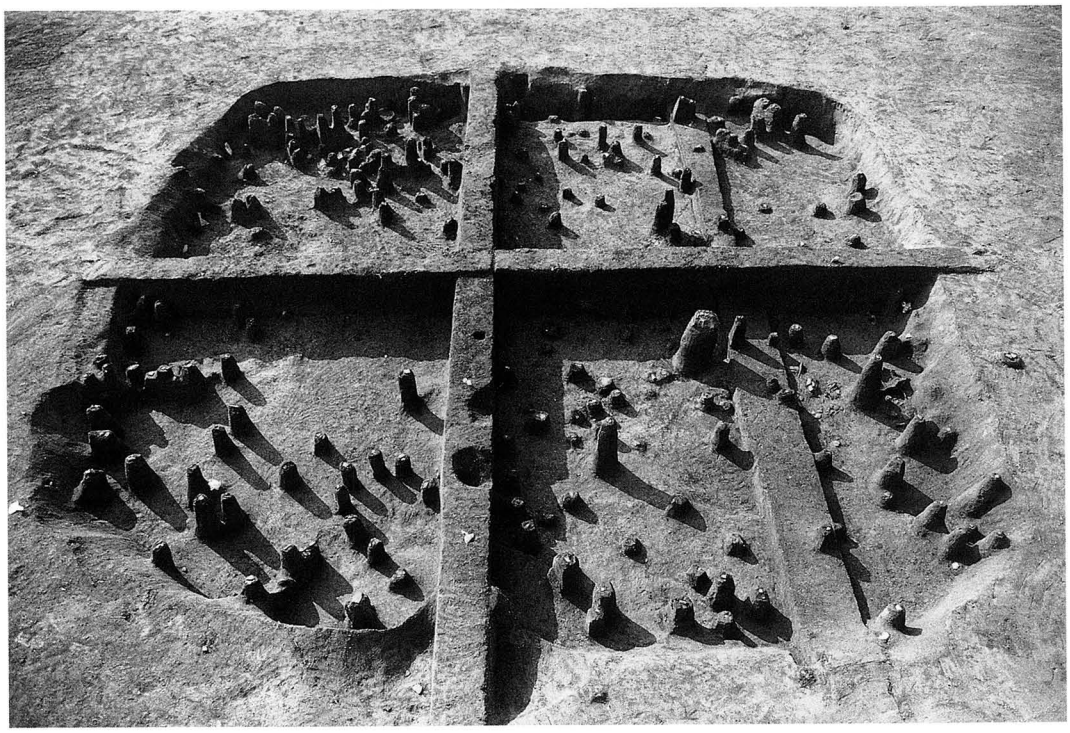
第５号住居跡



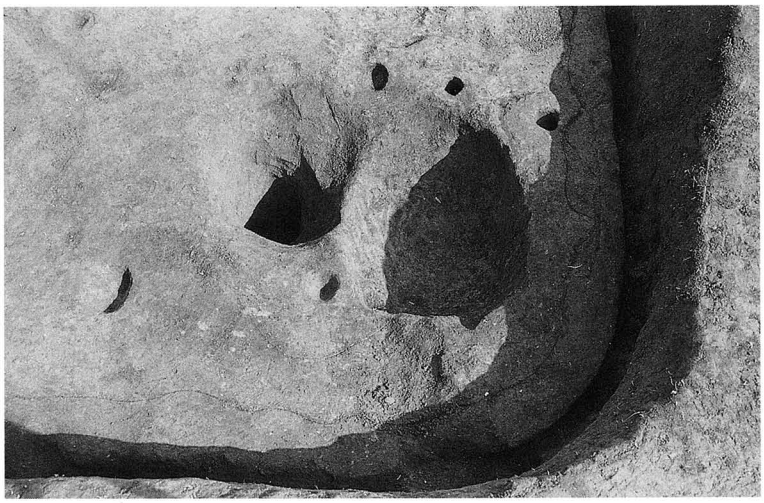
第５号住居跡遺物出土状況



第６号住居跡

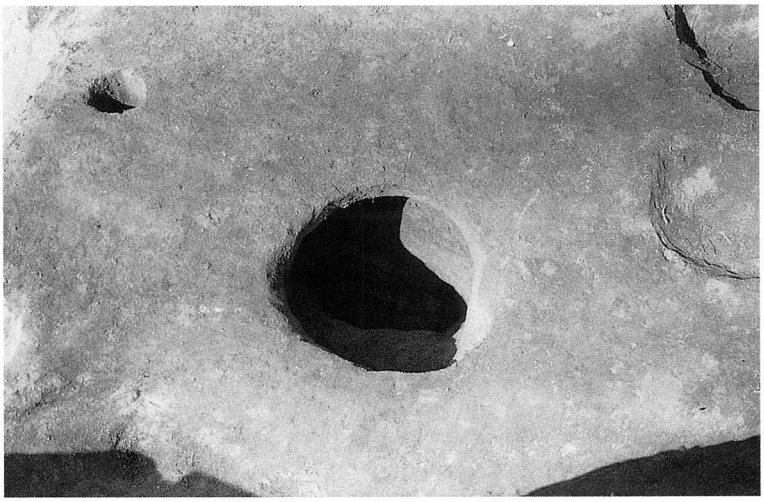


第６号住居跡遺物出土状況



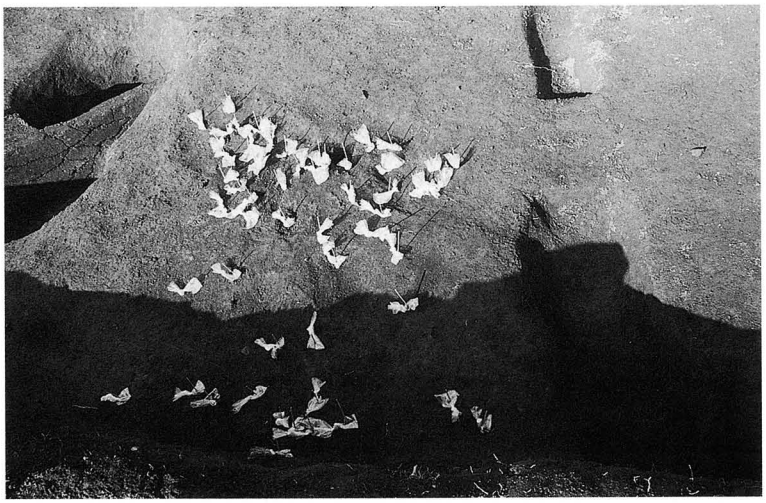
第６号住居跡
貯蔵穴

第６号住居跡炉



第６号住居跡
入口ピット

第６号住居跡
玉作関連遺物出土状況（1）



第６号住居跡
玉作関連遺物出土状況（2）

第６号住居跡
床面土層サンプリング状況

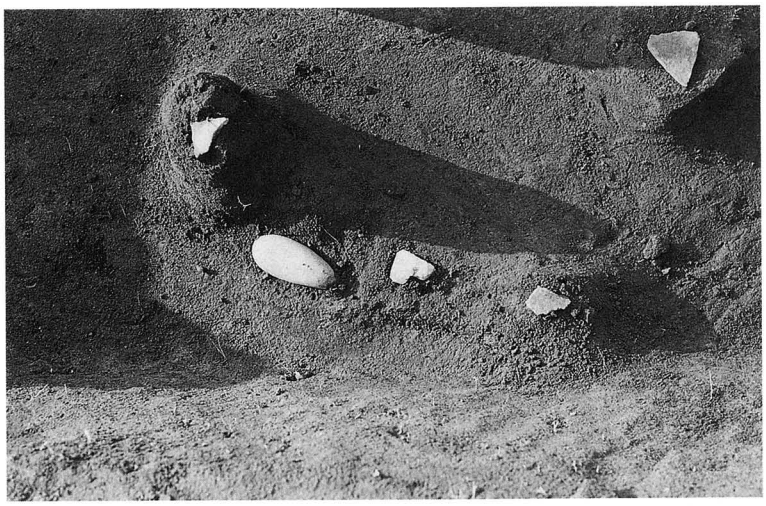
第８号住居跡

第８号住居跡炭化材出土状況

第８号住居跡
貯蔵穴

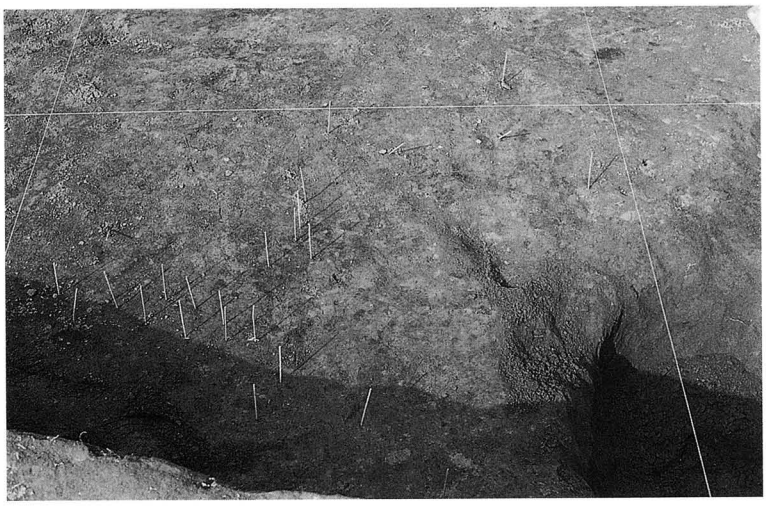
第８号住居跡
遺物出土状況（1）

第８号住居跡
炭化材出土状況

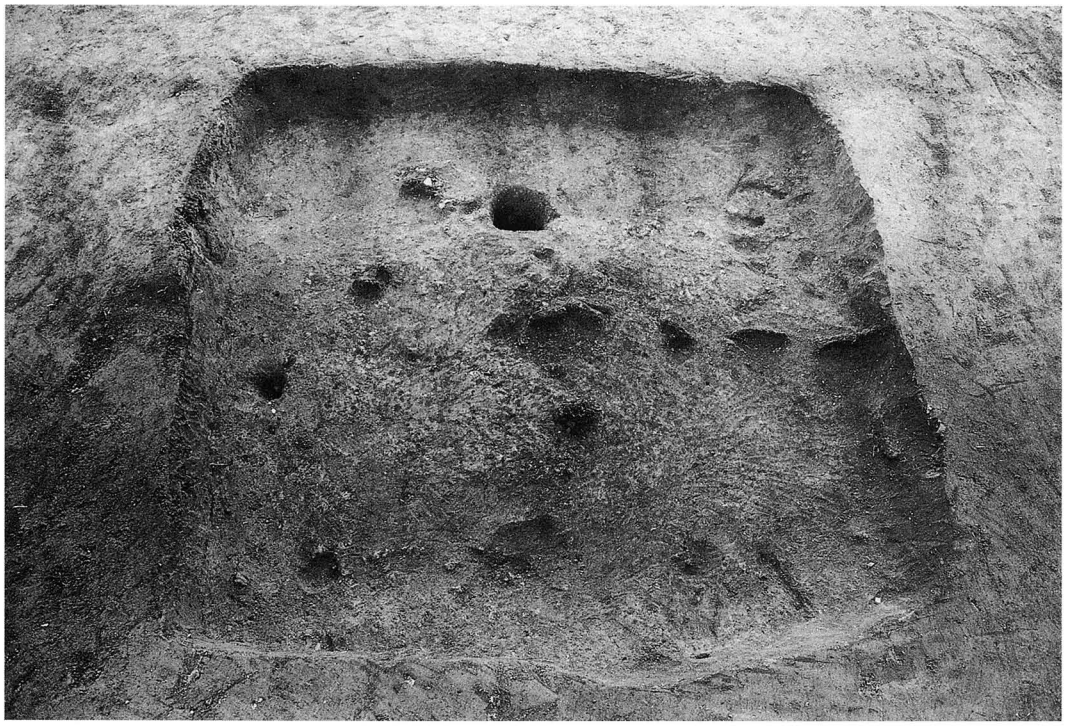


第８号住居跡
遺物出土状況（2）

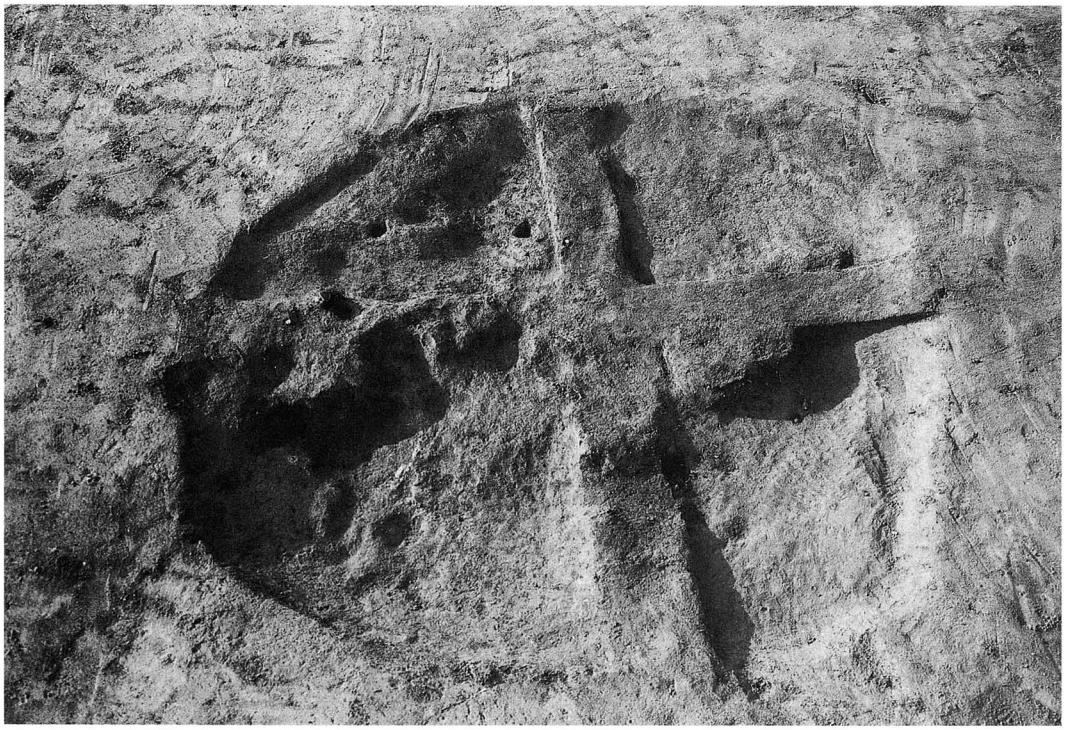
第８号住居跡
遺物出土状況（3）



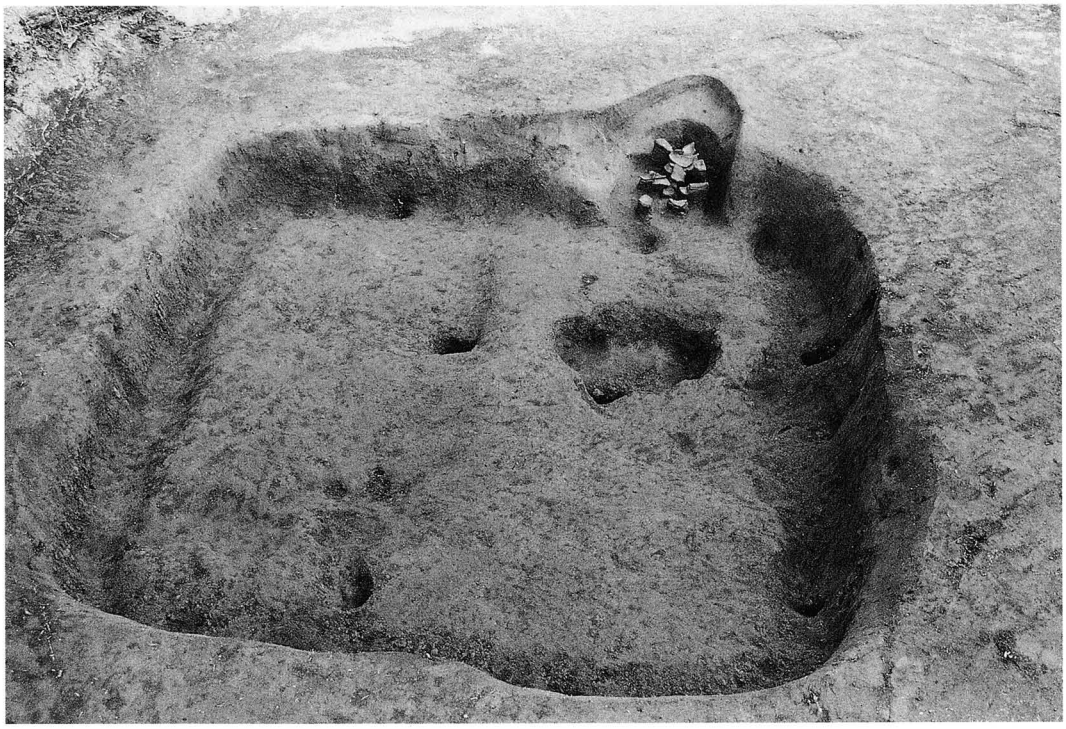
第８号住居跡
玉作関連遺物出土状況



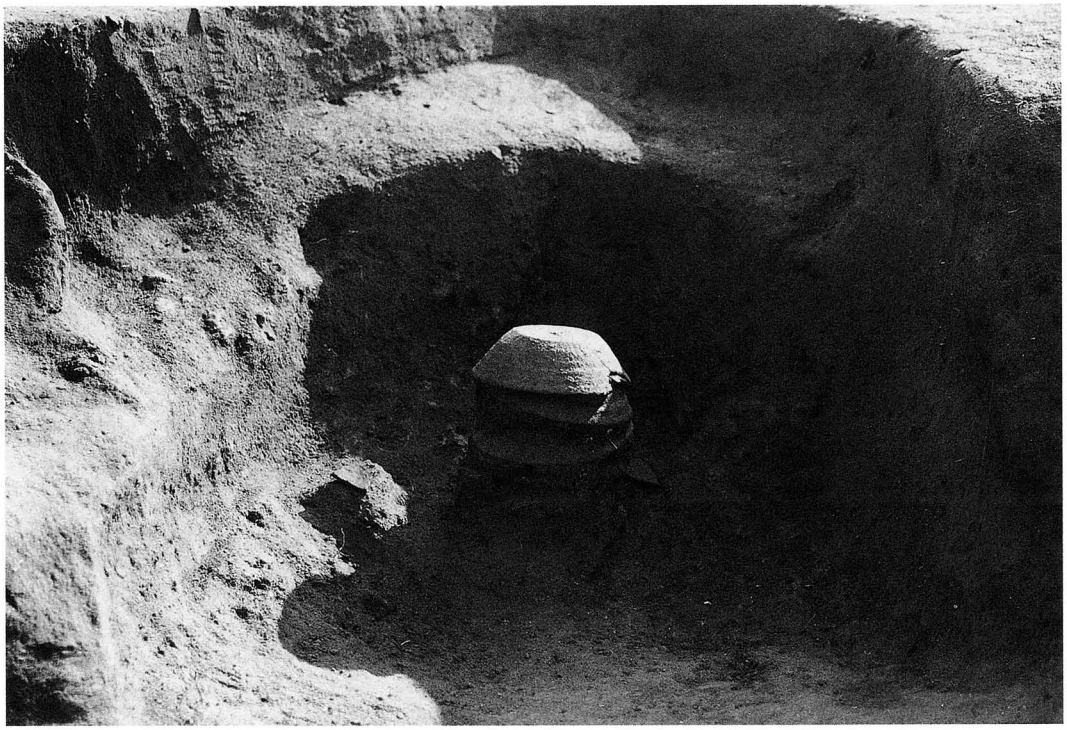
第18号住居跡



第２号竪穴遺構

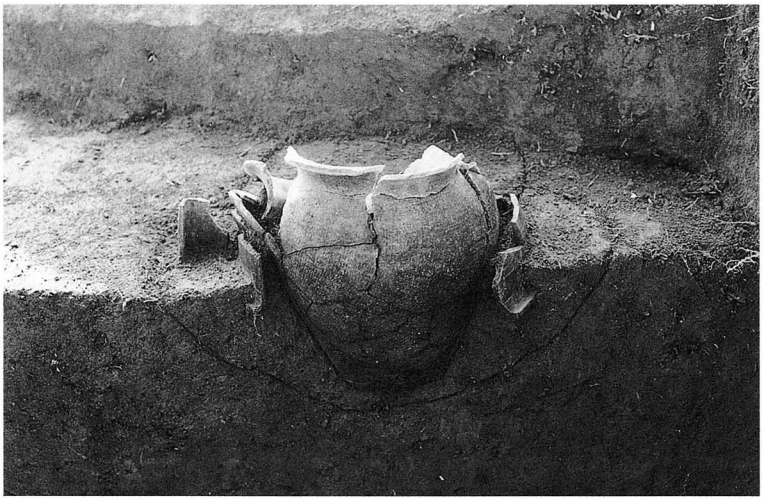


第19号住居跡



第19号住居跡カマド内遺物出土状況

第１号火葬墓（１）

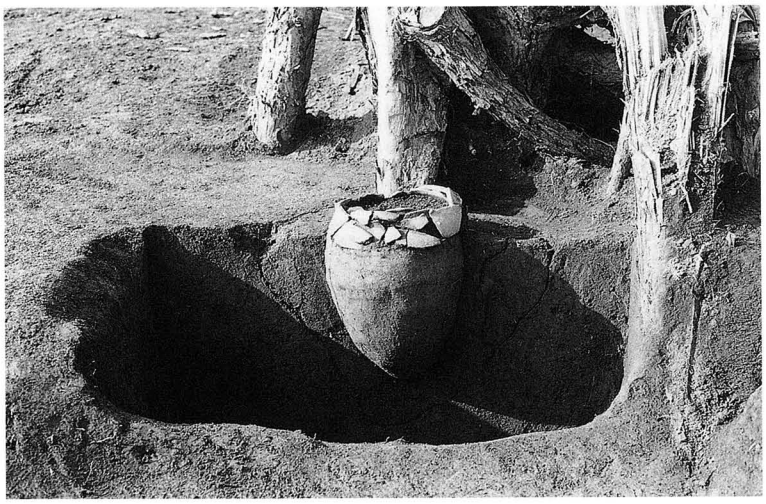


第１号火葬墓（２）

第２号火葬墓

第３号火葬墓

第４号火葬墓（１）



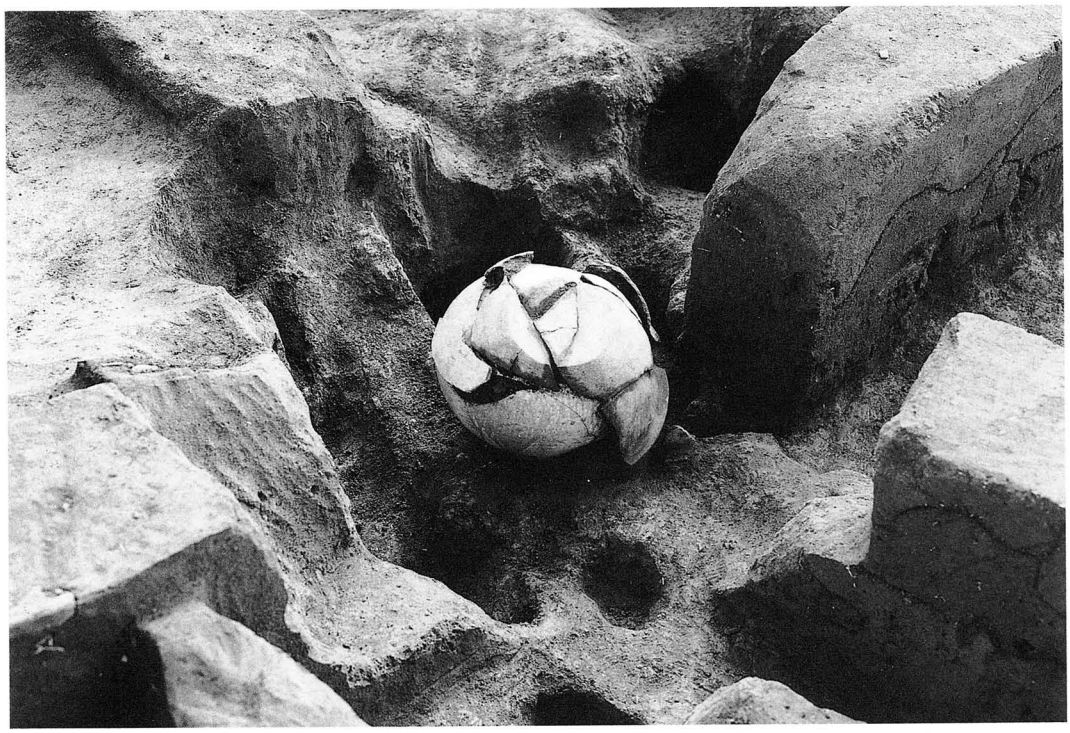
第４号火葬墓（２）

第５号火葬墓（１）

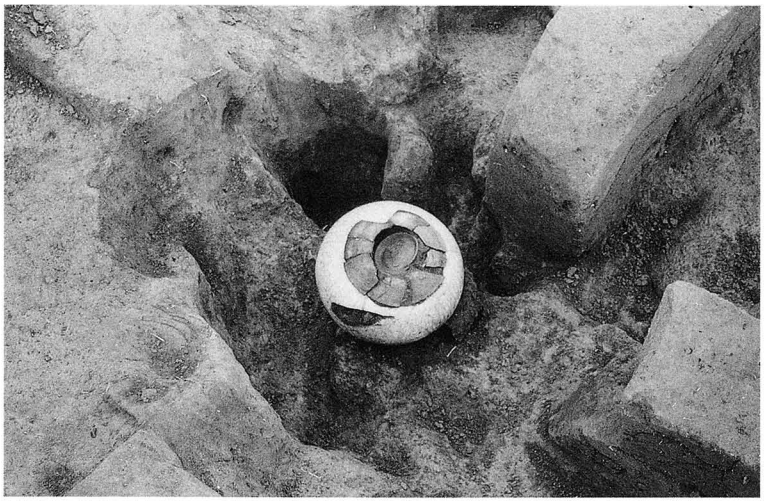
第５号火葬墓（２）

調査区外火葬墓

第７号火葬墓（１）

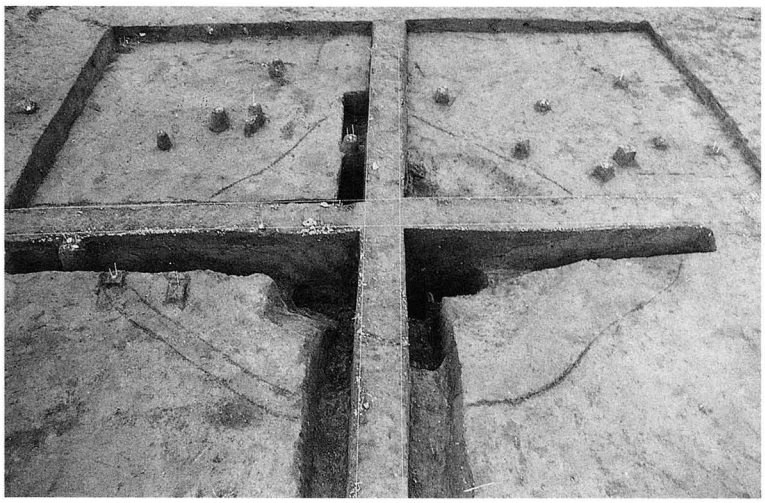


第７号火葬墓（２）

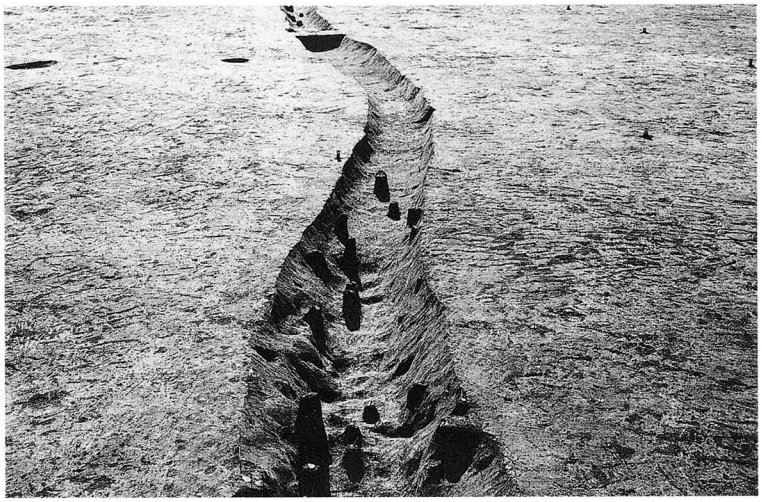


第７号火葬墓（３）

第７号火葬墓（４）



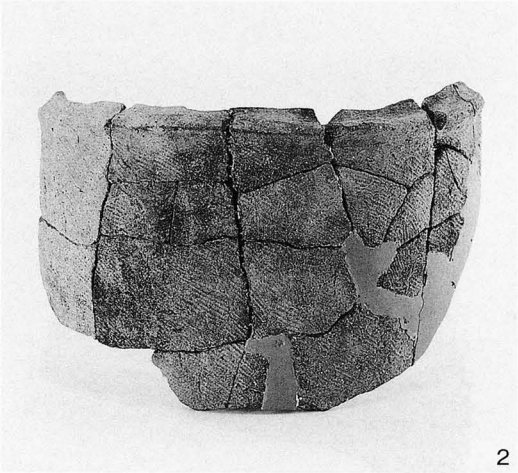
第７号火葬墓（５）

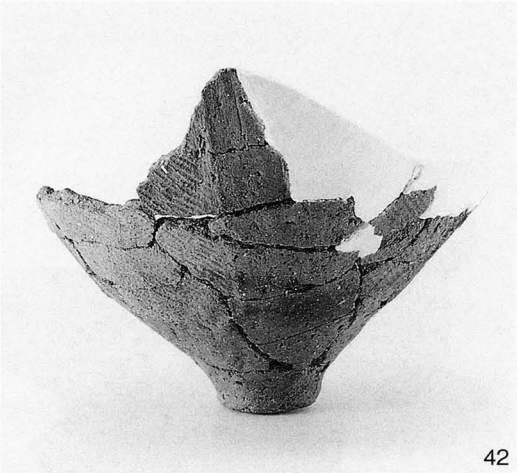


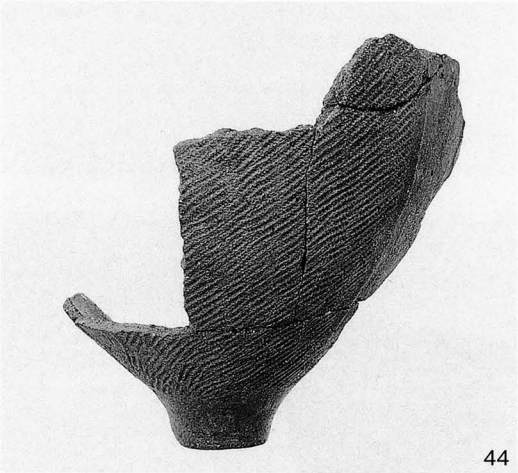
第１号溝跡

作業風景（1）

作業風影（2）


2


42

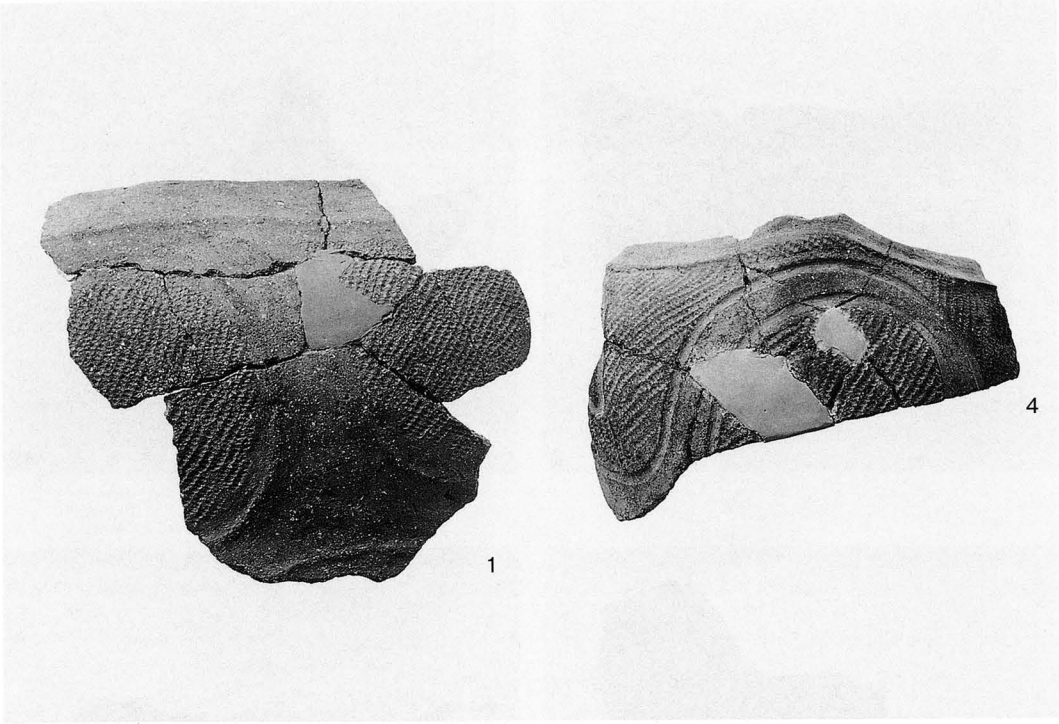

44

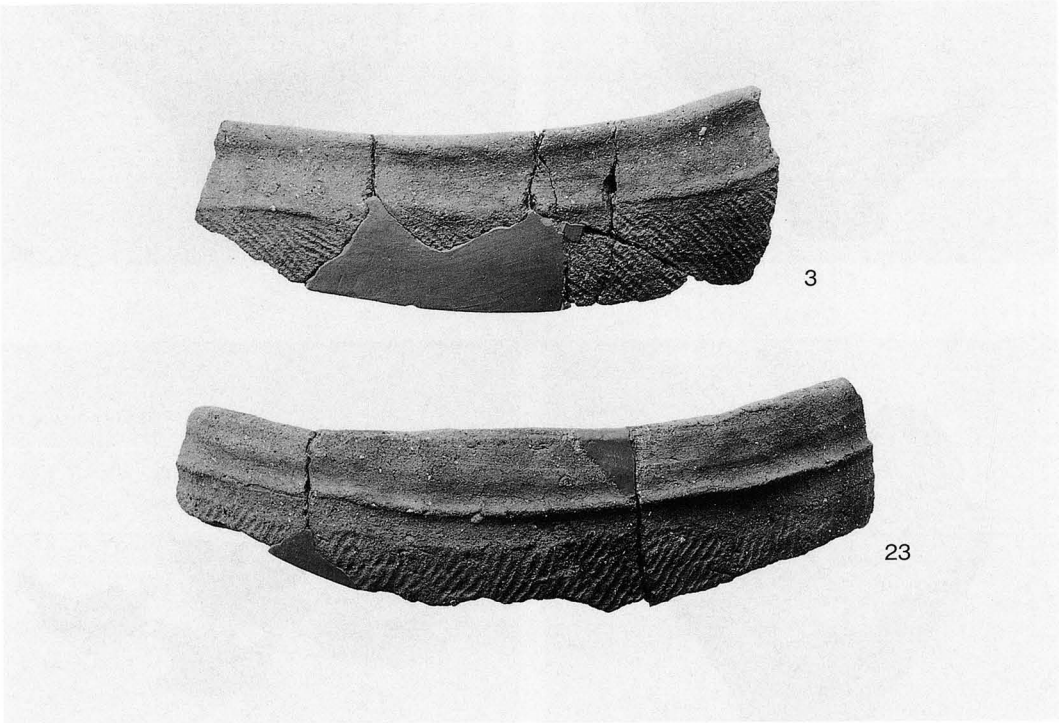
46

50

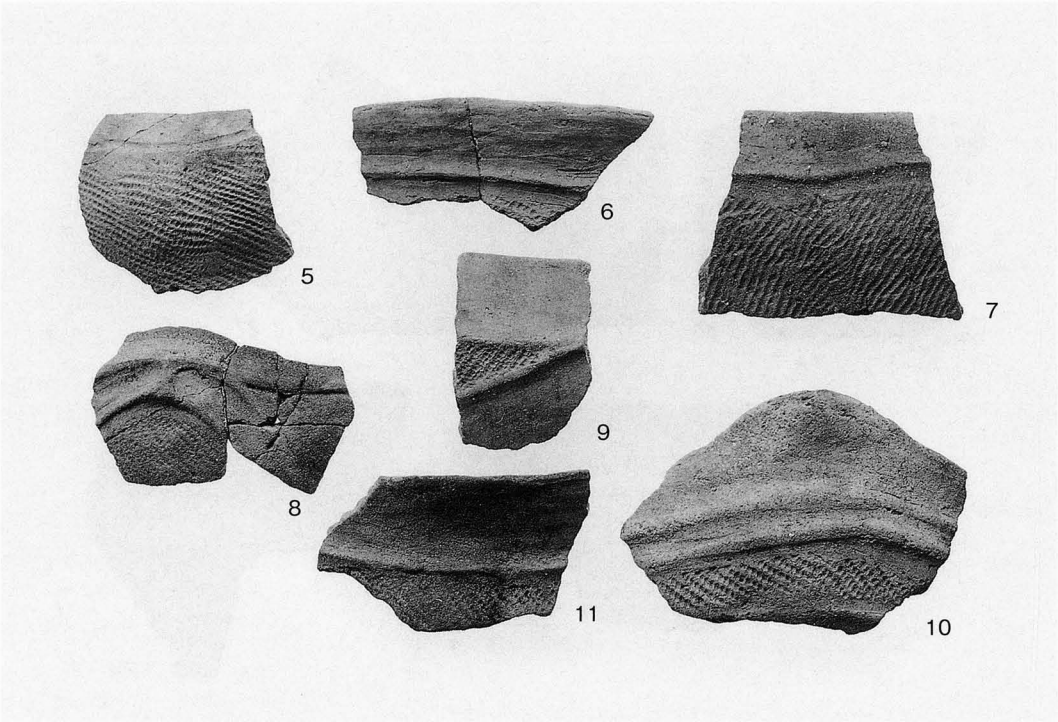
底部

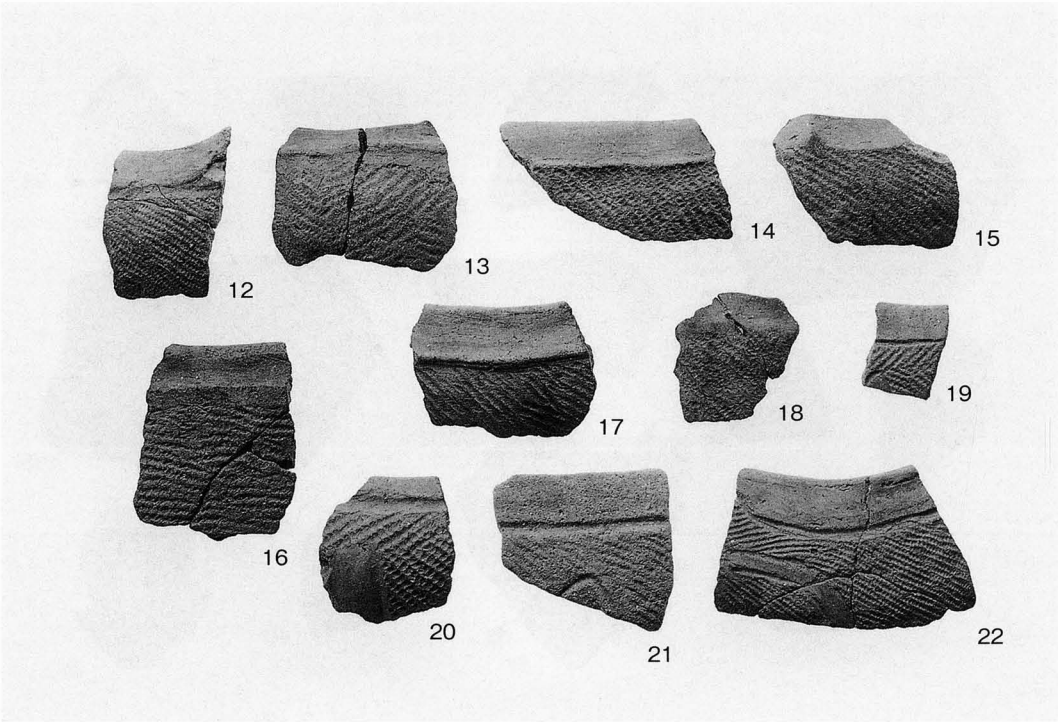
第７号住居跡出土遺物（１）



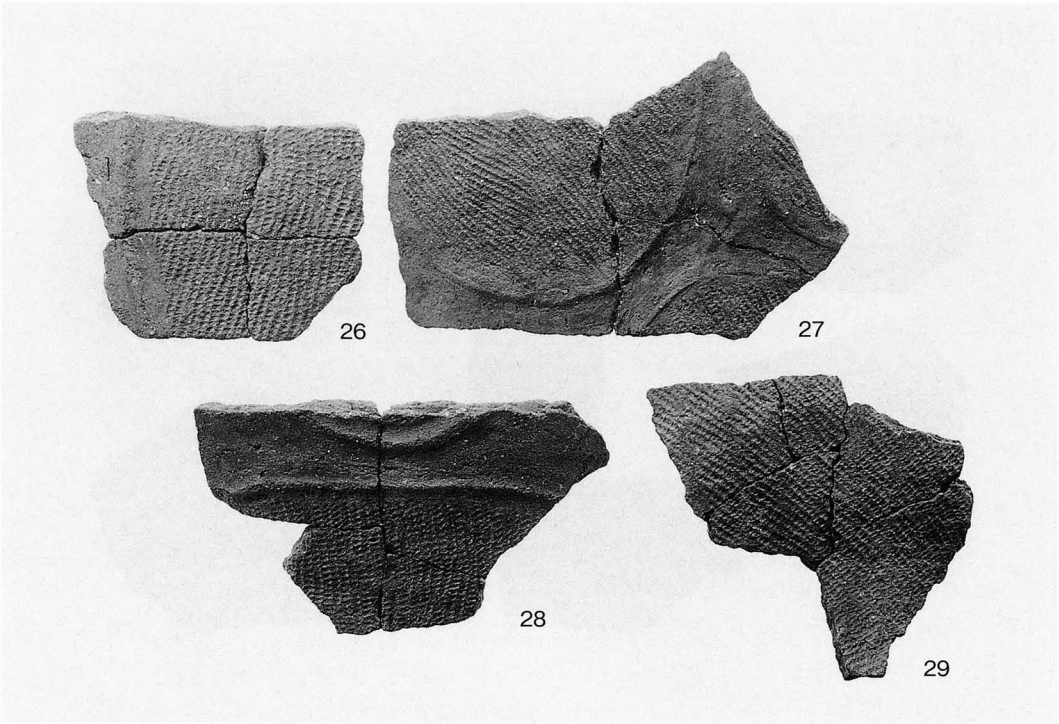


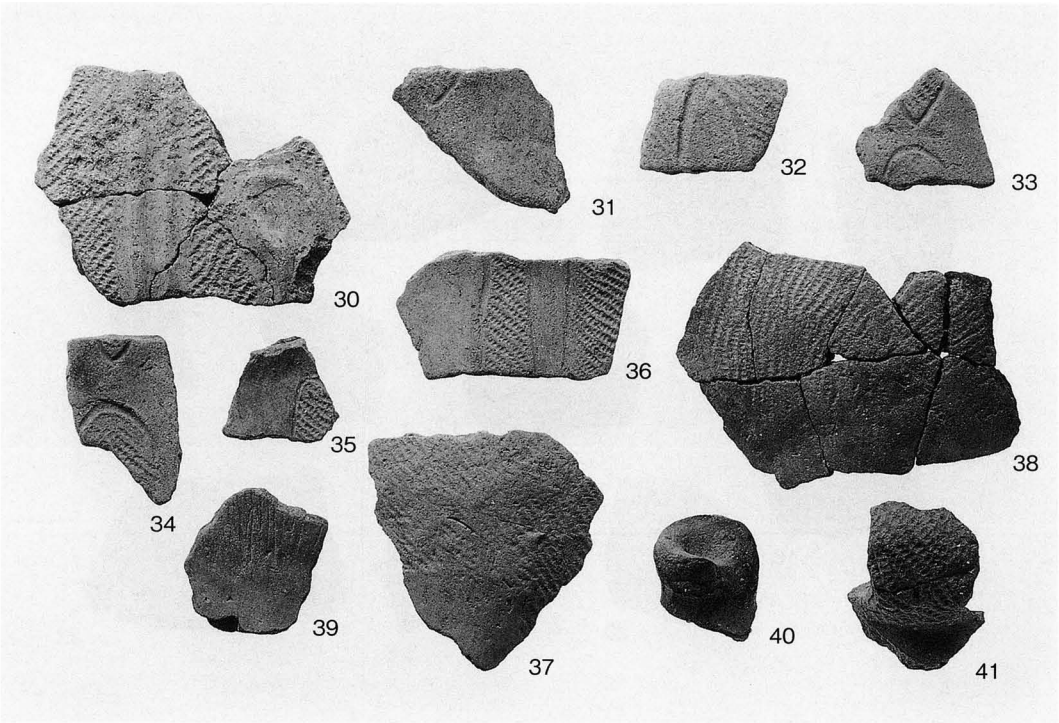
第７号住居跡出土遺物（２）



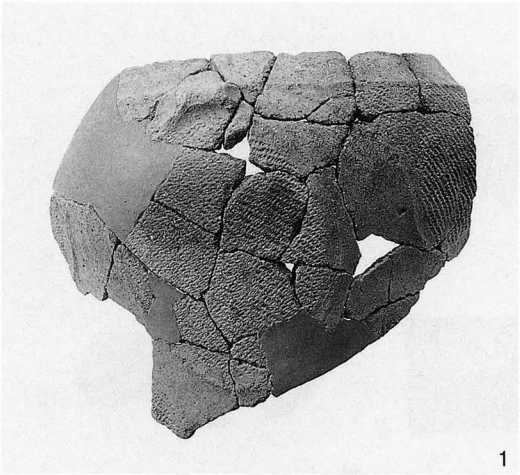


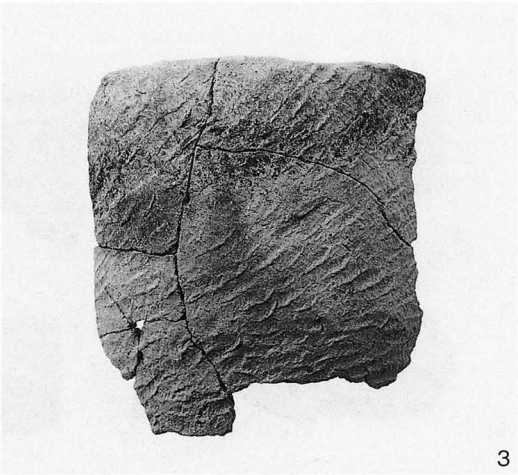
第７号住居跡出土遺物（３）

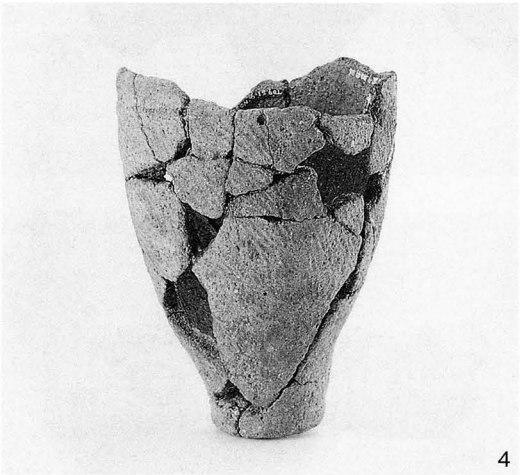


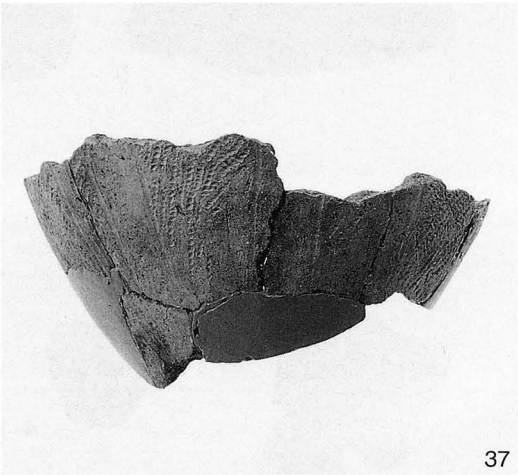


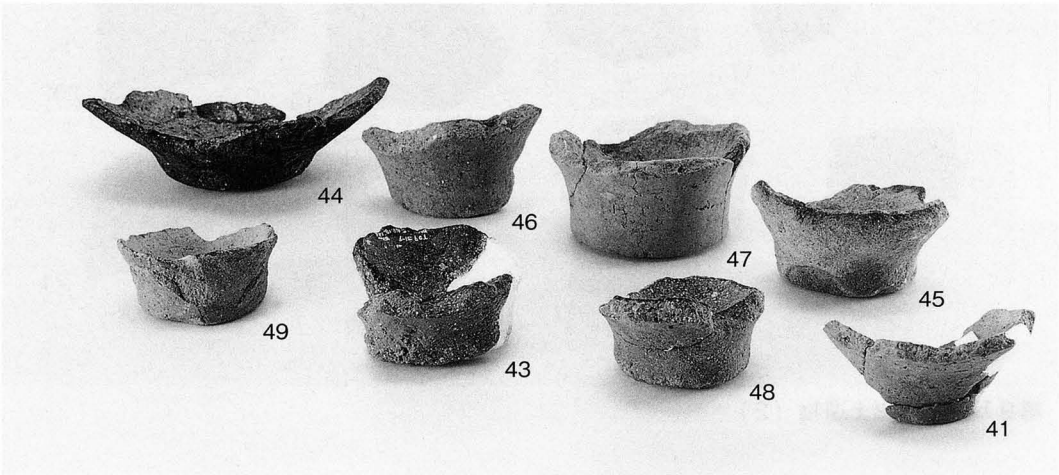
第７号住居跡出土遺物（４）



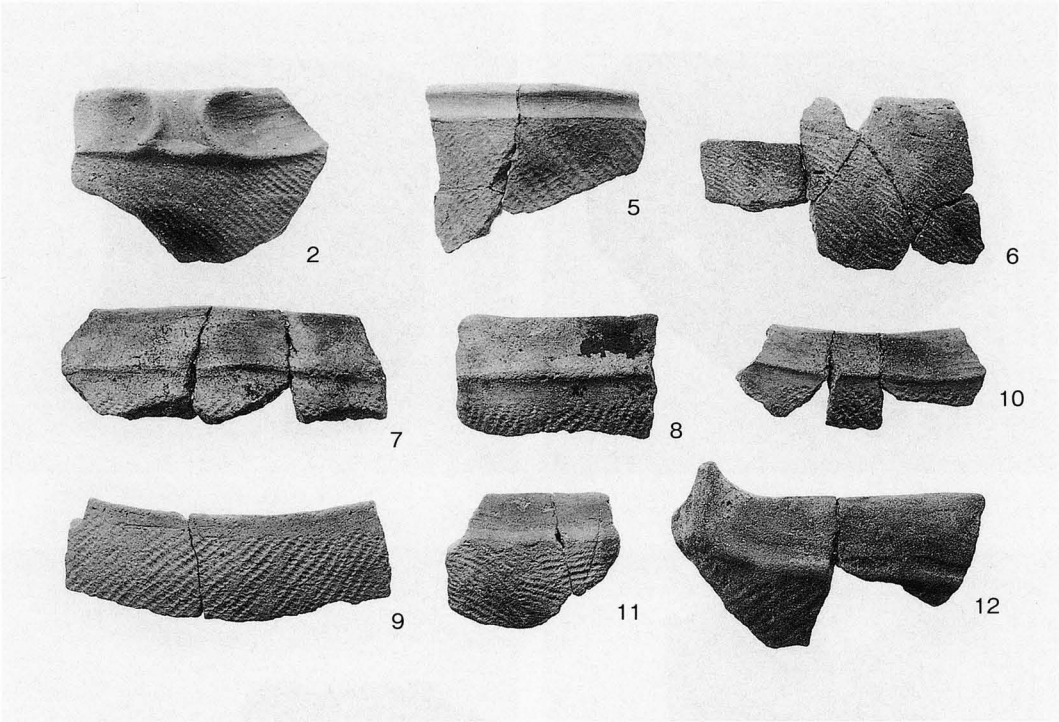


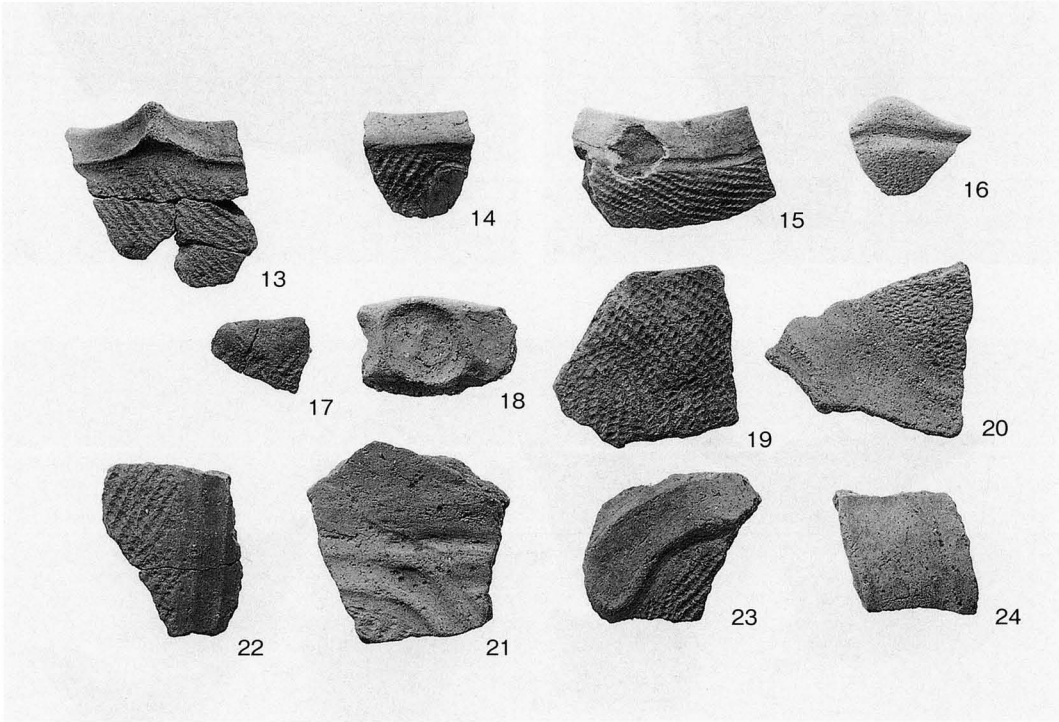




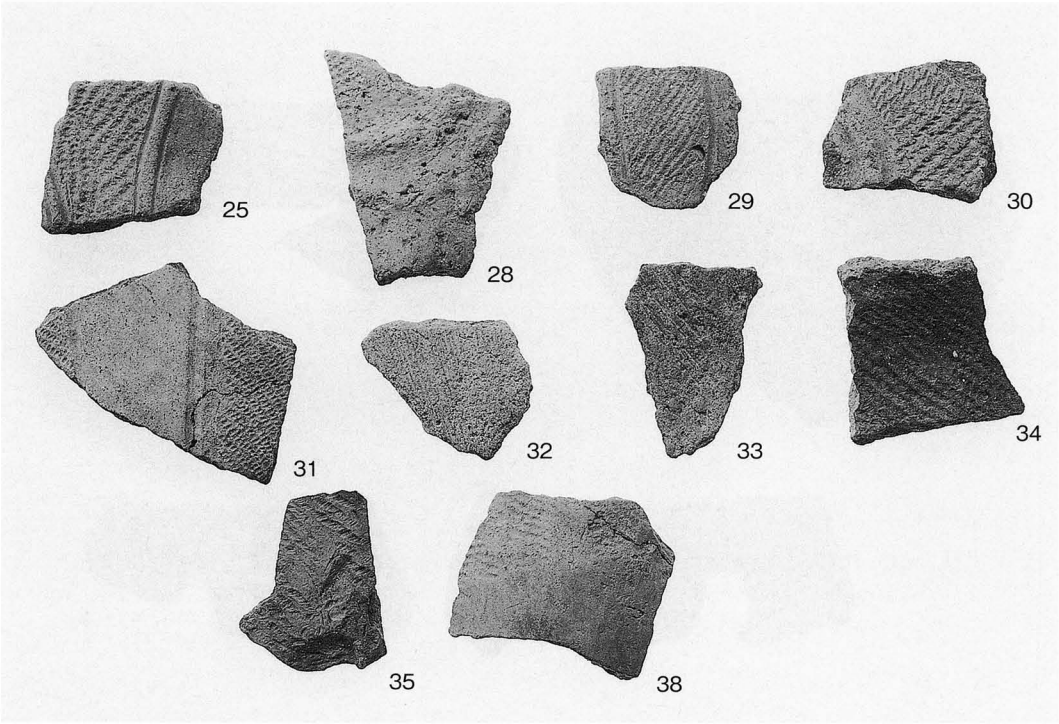


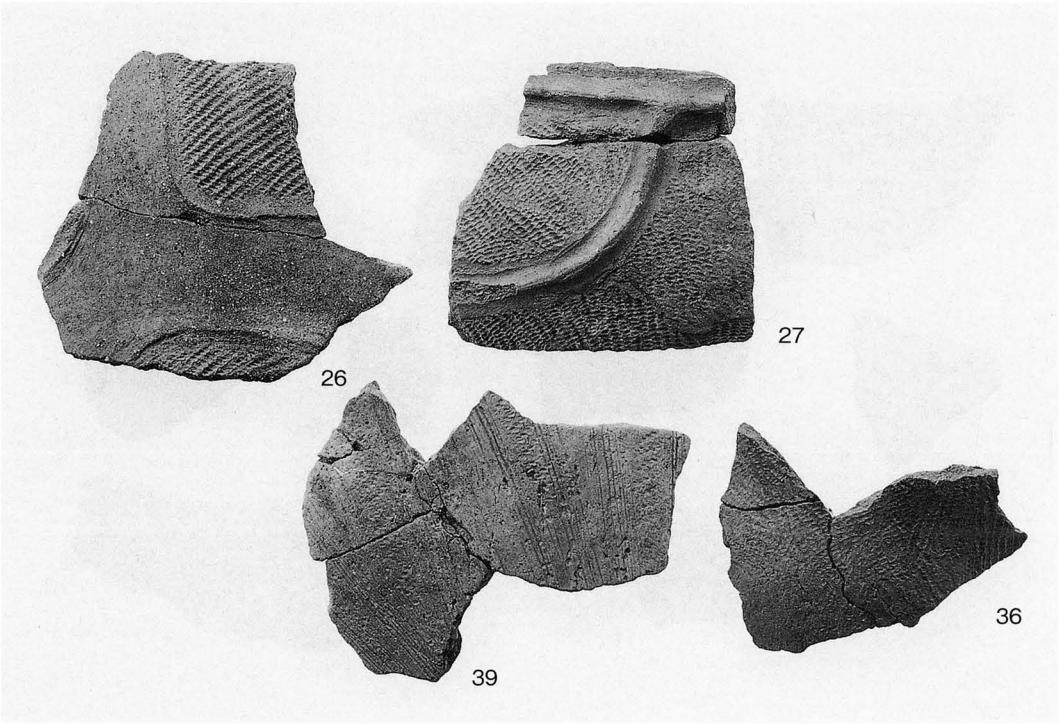
第９号住居跡出土遺物（１）



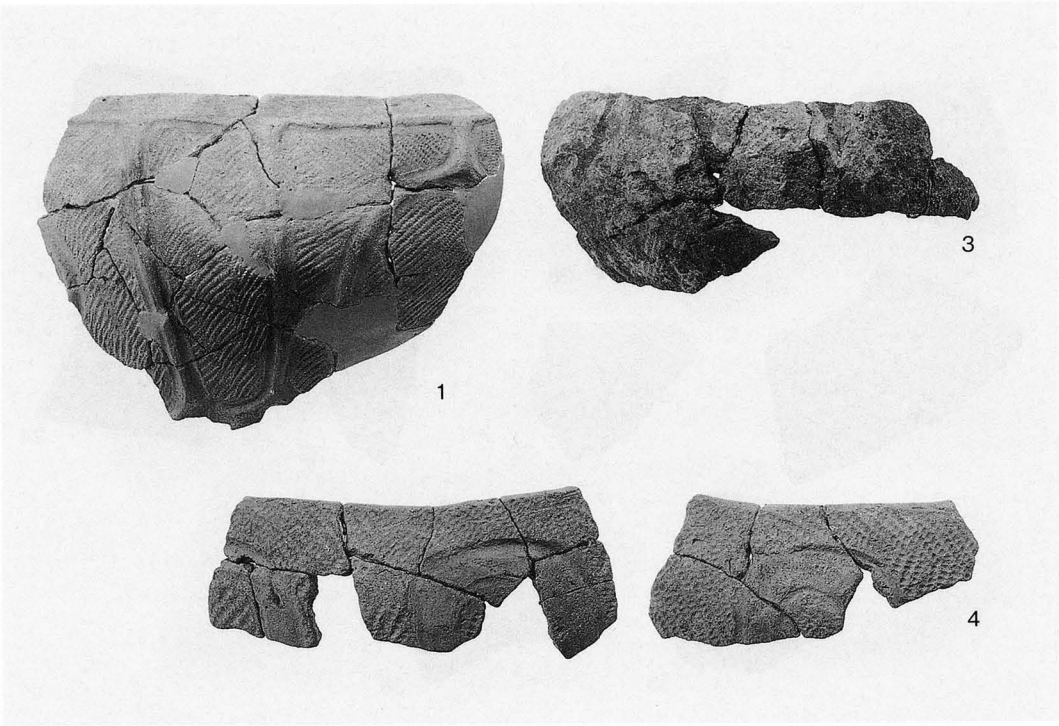


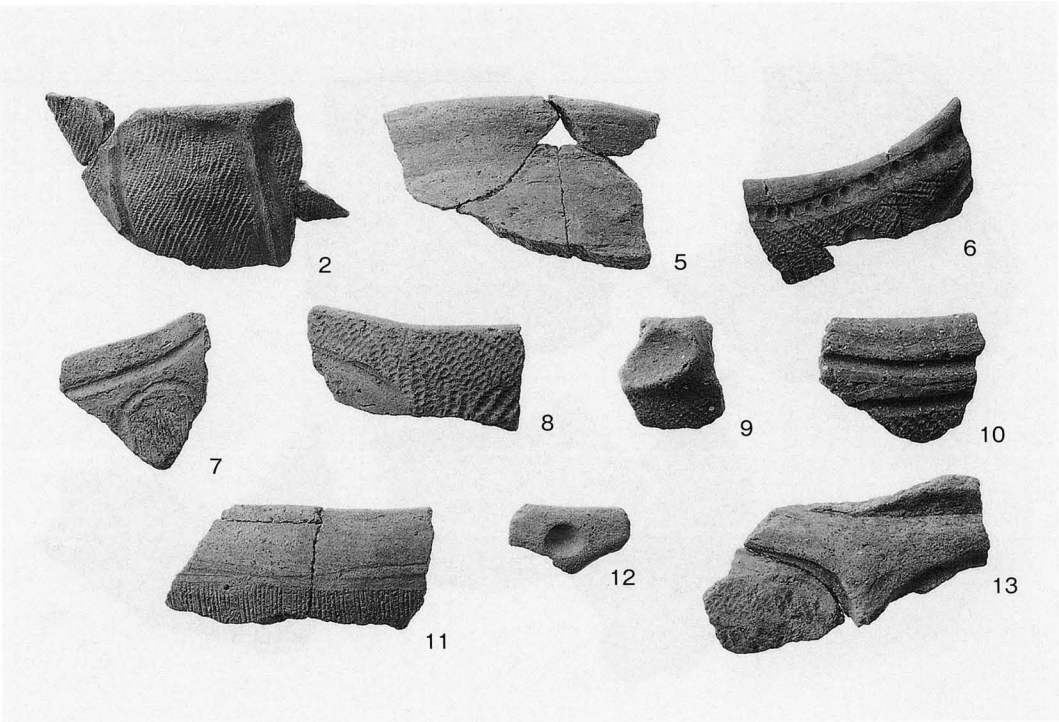
第９号住居跡出土遺物（２）



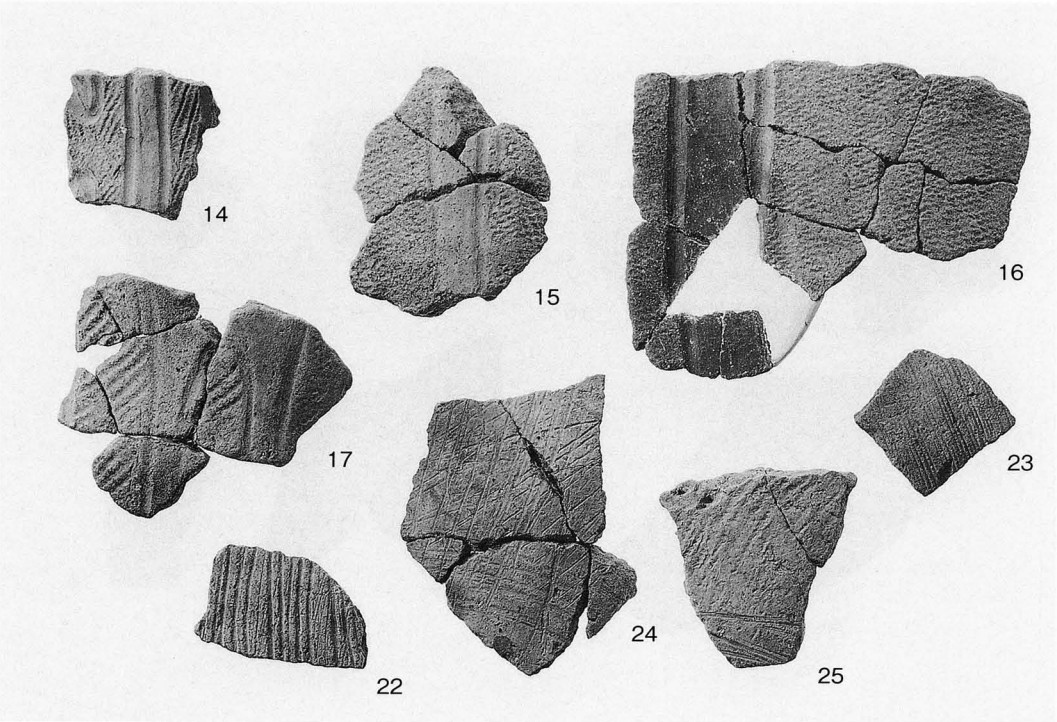


第９号住居跡出土遺物（３）

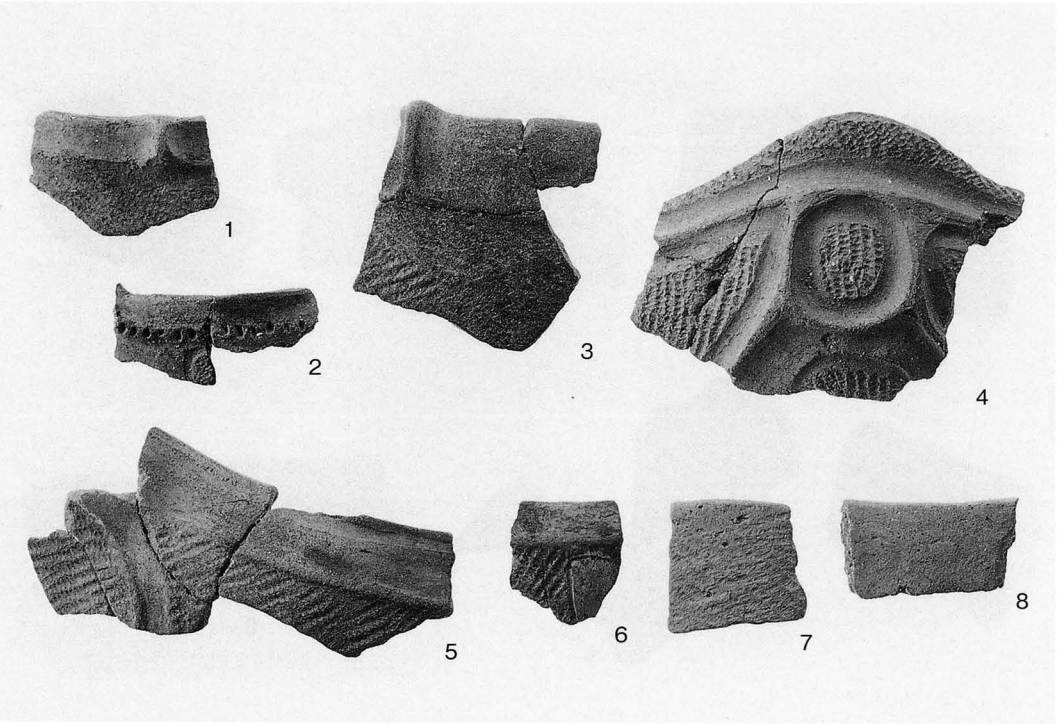




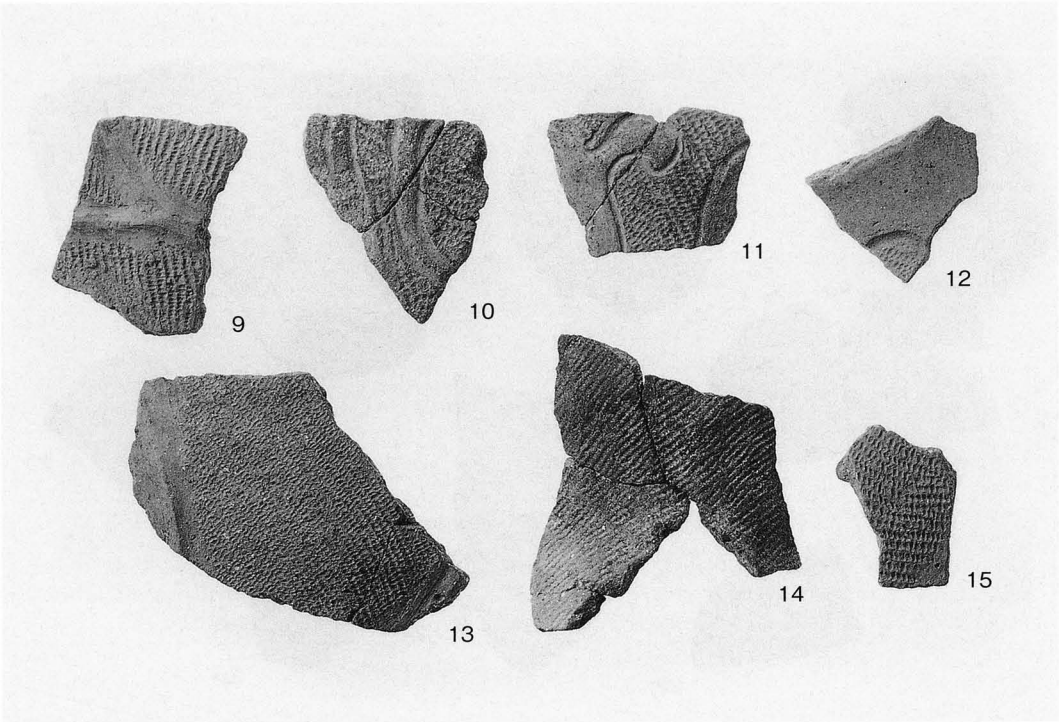
第12号住居跡出土遺物（1）



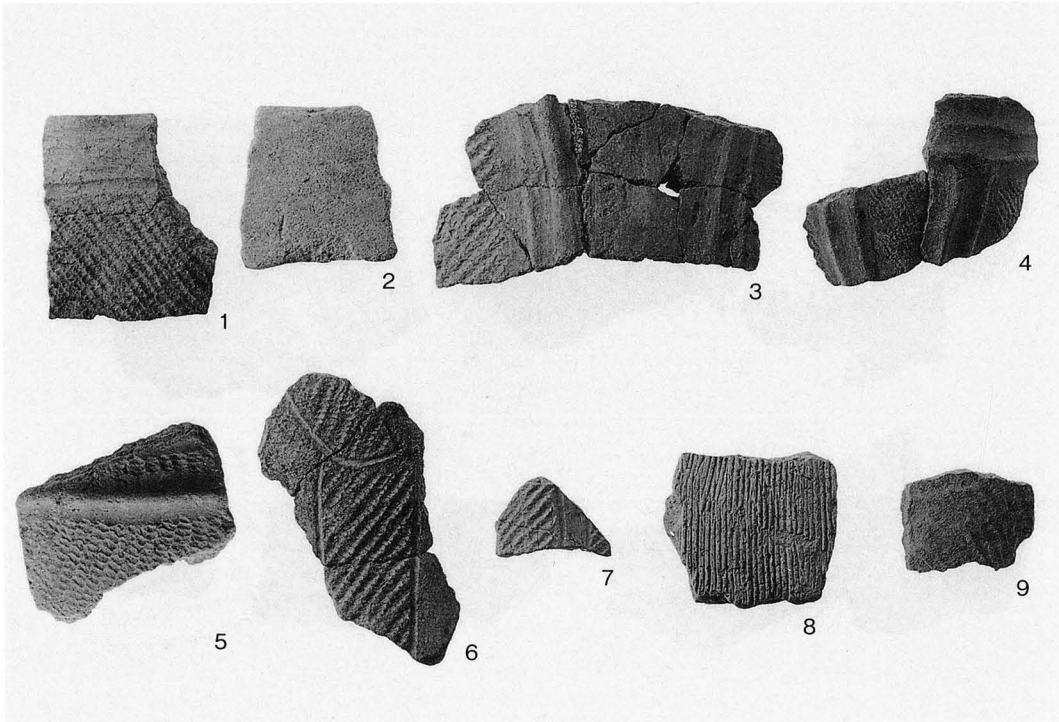
第12号住居跡出土遺物（2）



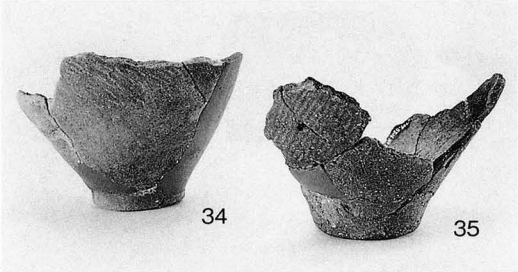
第13号住居跡出土遺物（1）

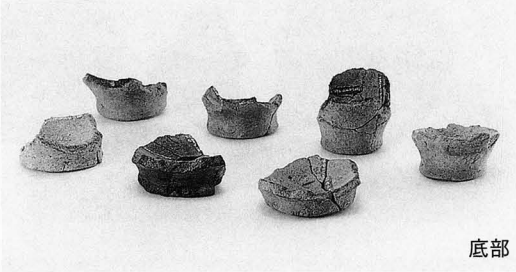


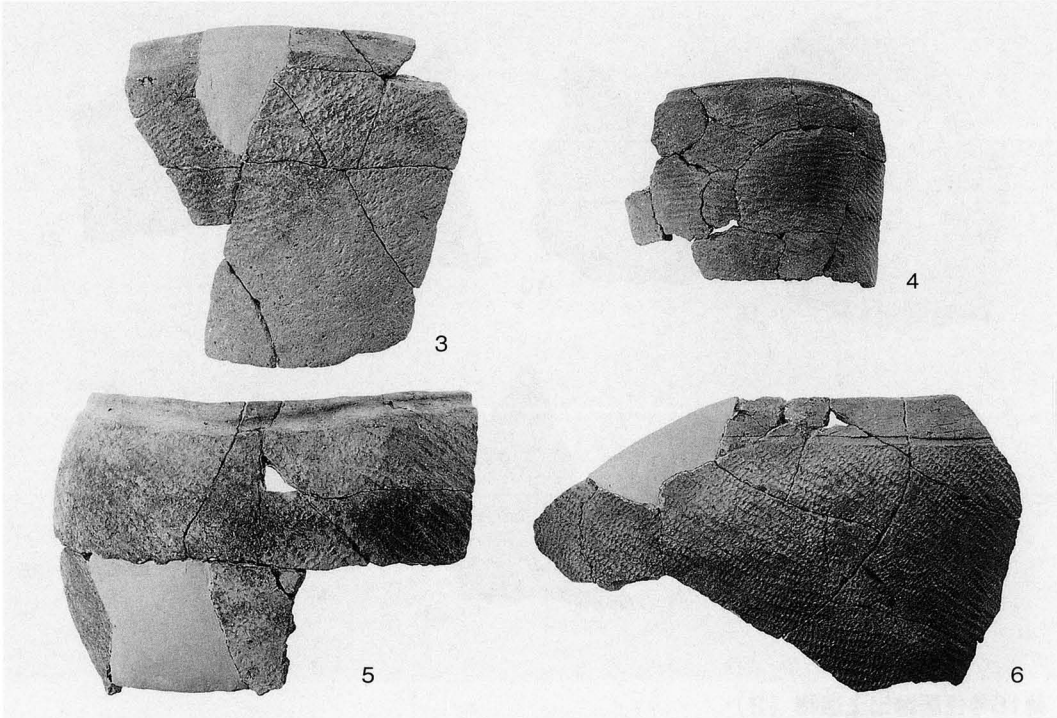
第13号住居跡出土遺物（2）



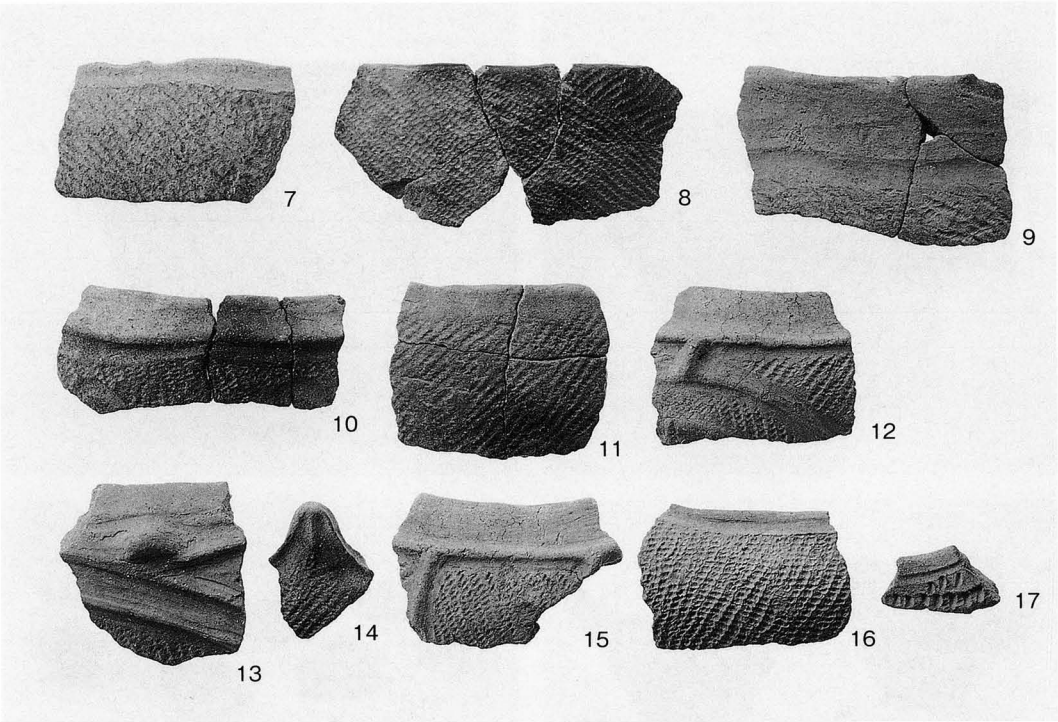
第15号住居跡出土遺物

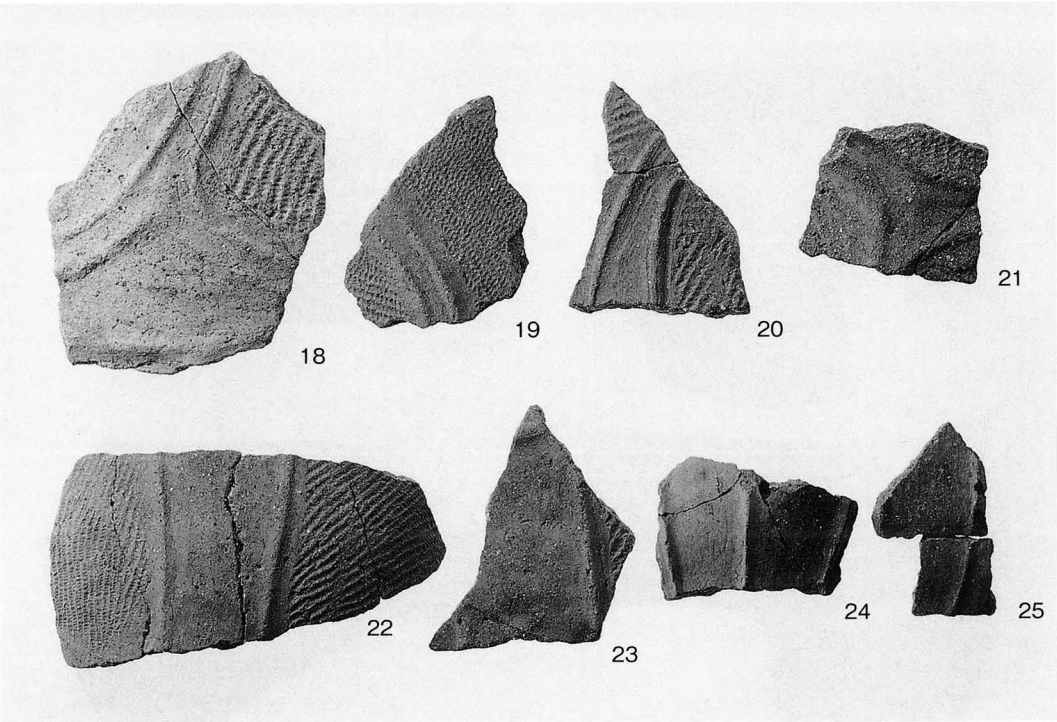




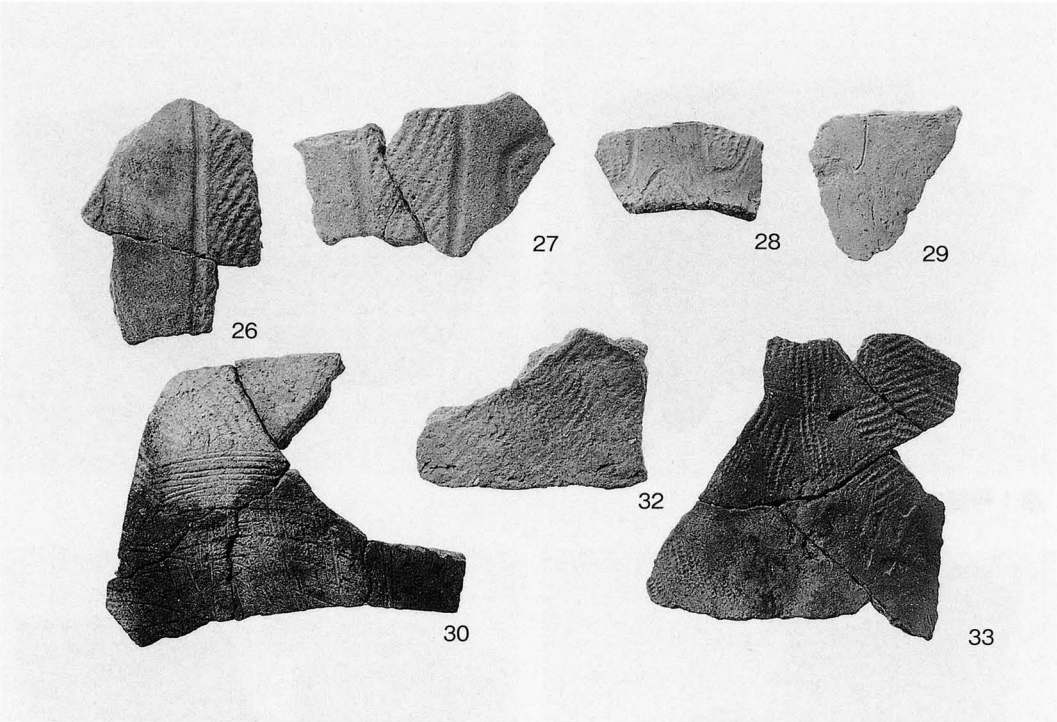


第16号住居跡出土遺物（1）

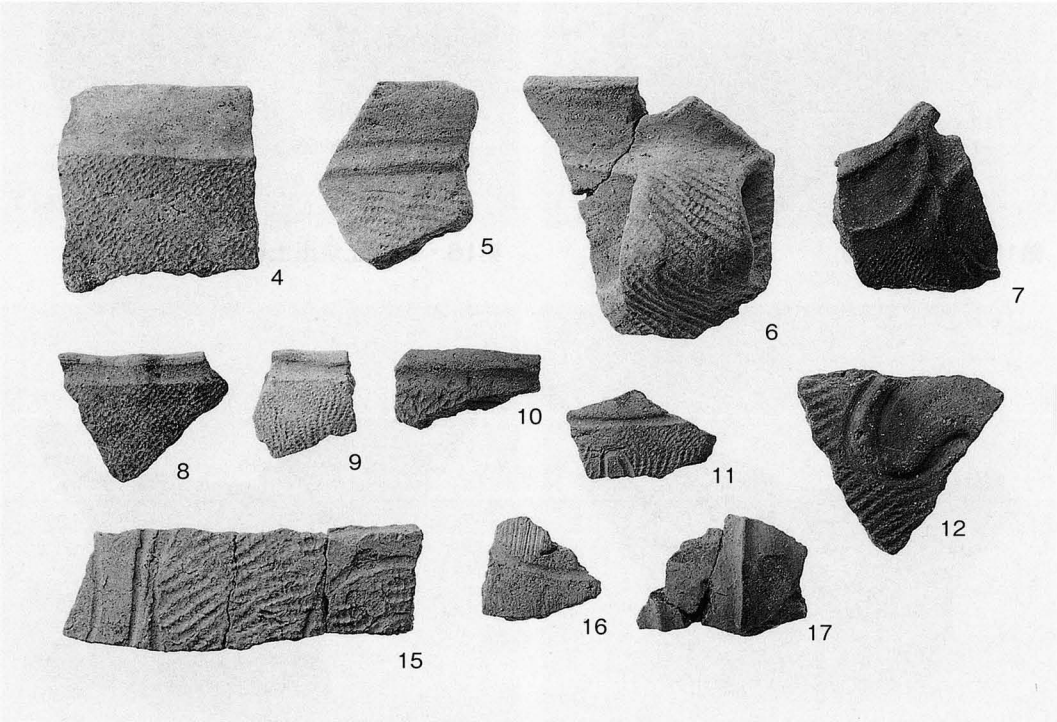




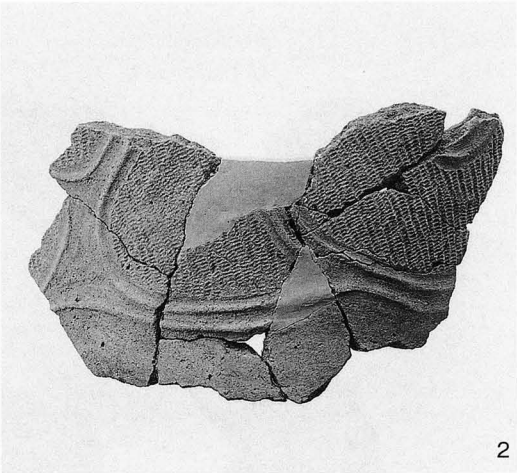
第16号住居跡出土遺物（2）



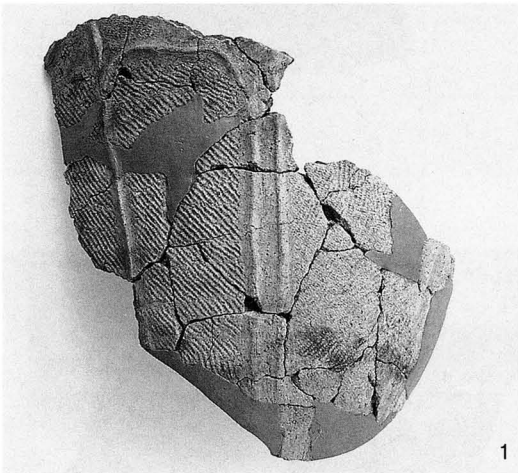
第16号住居跡出土遺物（3）



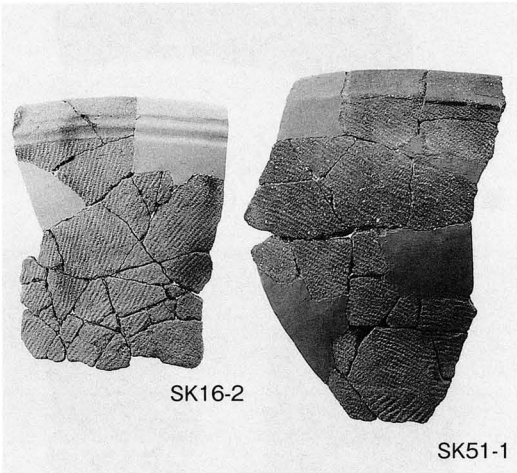
第１号竪穴遺構出土遺物（1）



第１号竪穴遺構出土遺物（２）



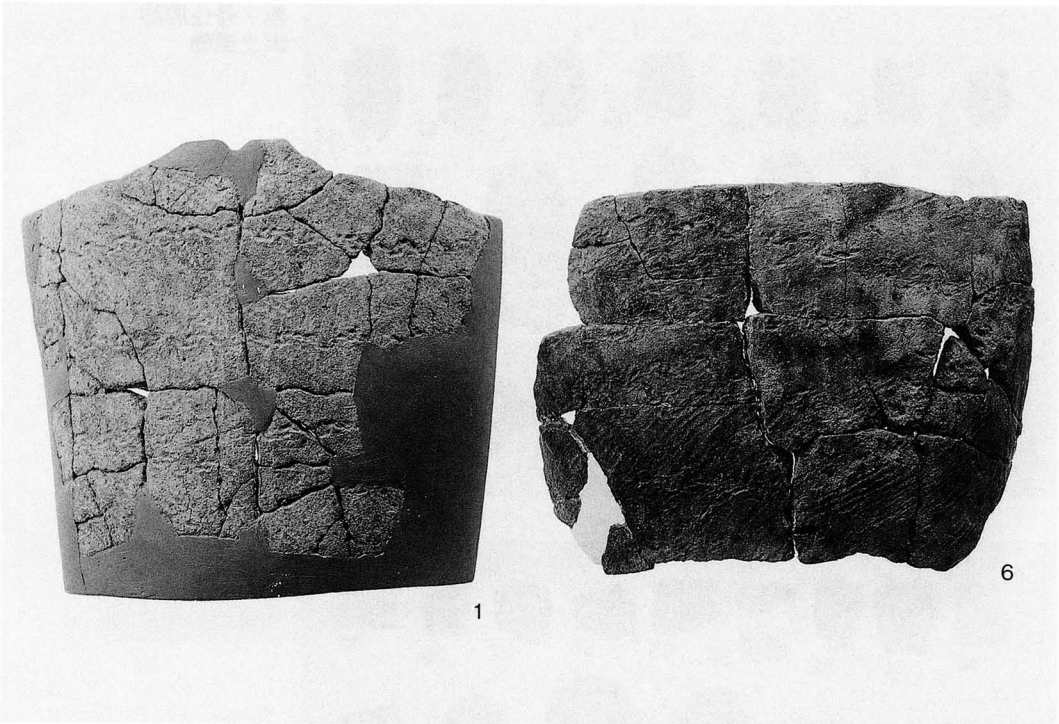
第16土坑出土遺物

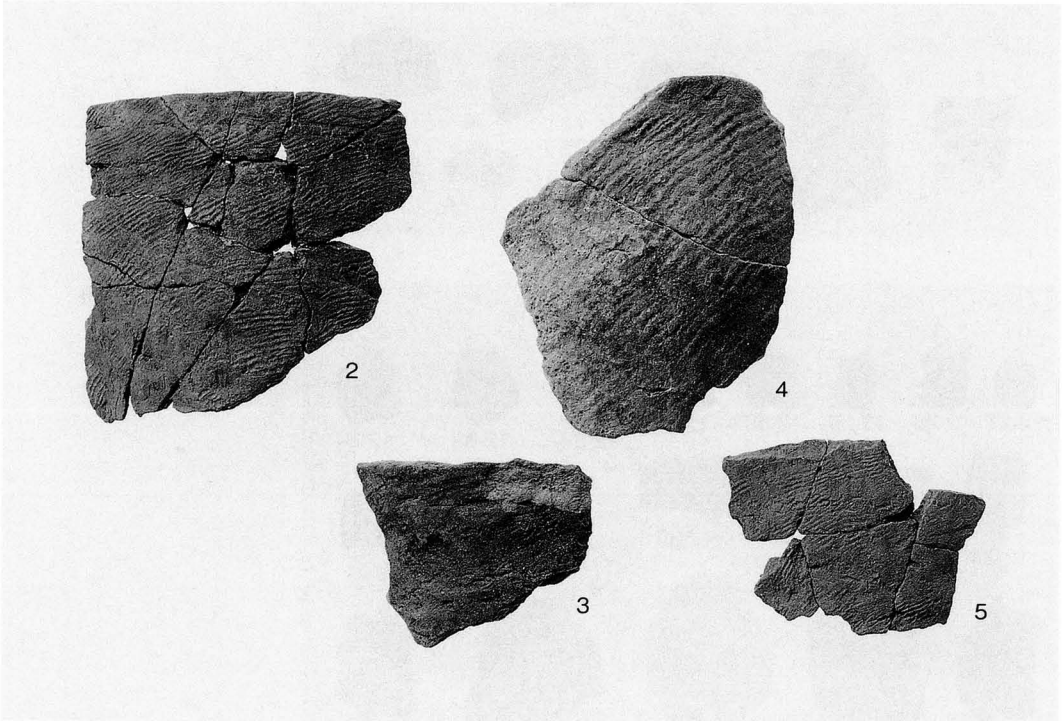


第16・51号土坑出土遺物

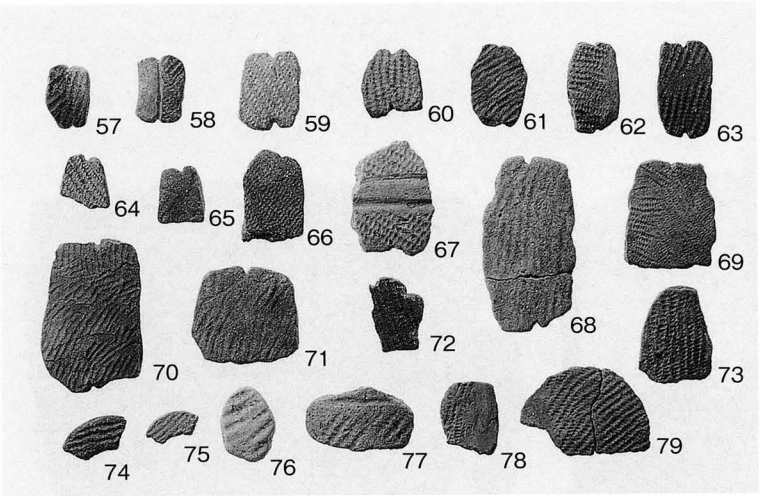
第16号土坑出土遺物

第44号土坑出土遺物

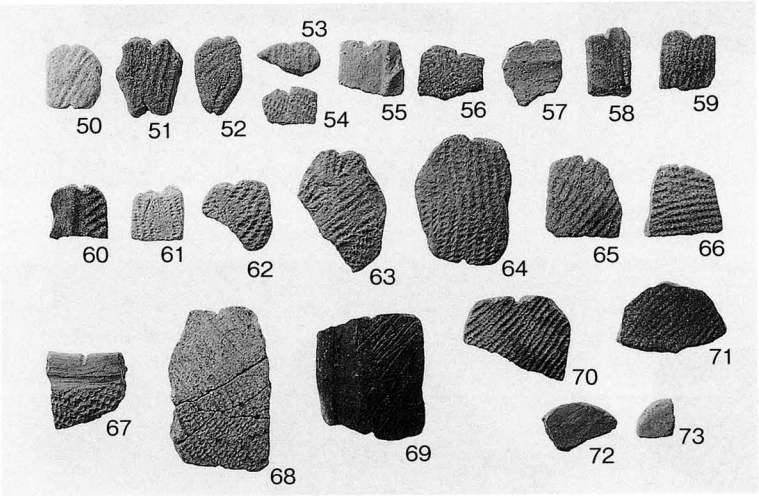




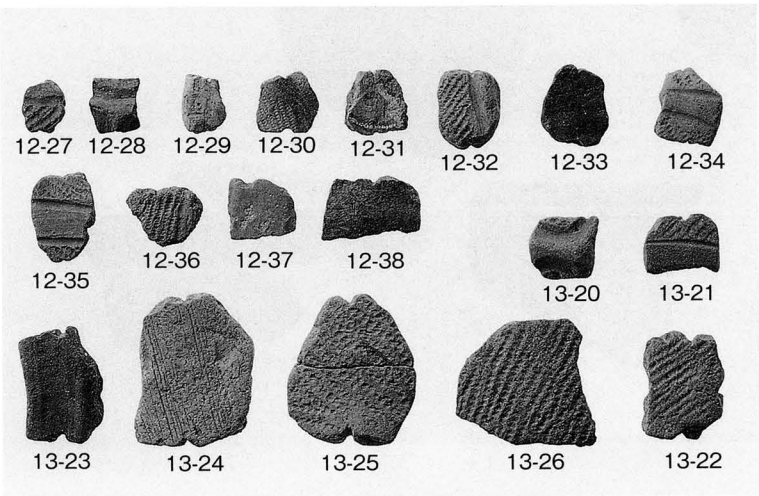
第50号土坑出土遺物



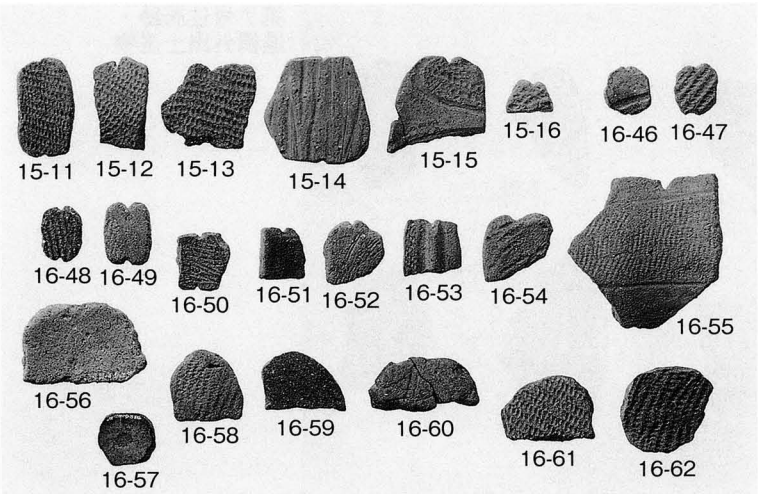
第７号住居跡
出土遺物



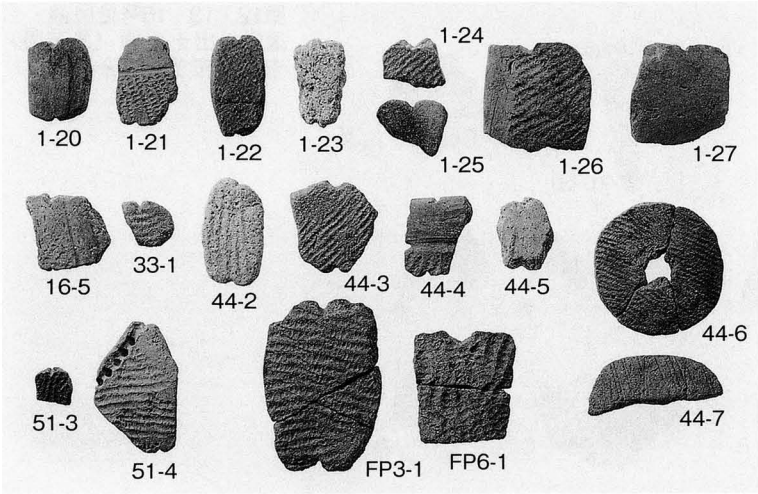
第９号住居跡
出土遺物



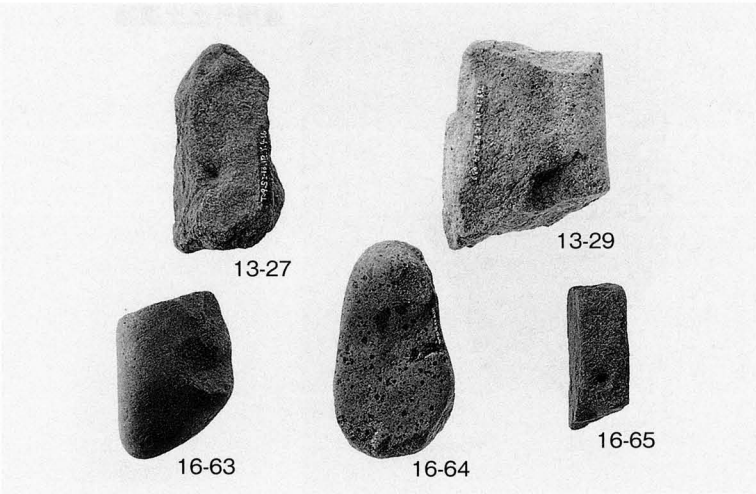
第12・13号住居跡
出土遺物



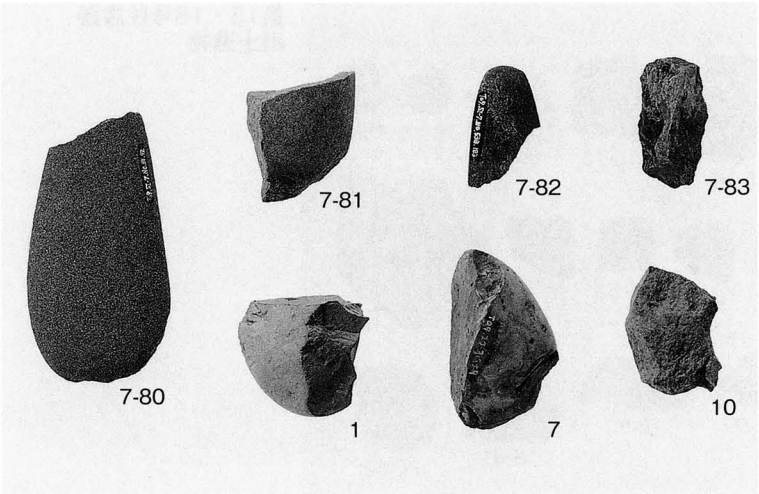
第15・16号住居跡
出土遺物



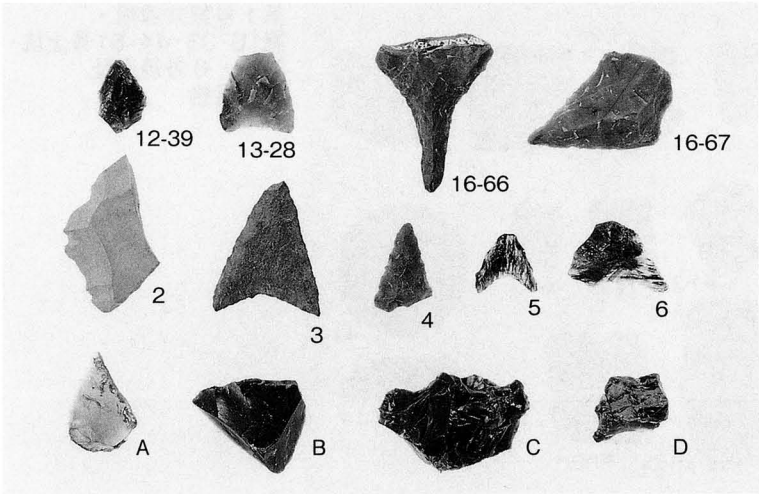
第１号竪穴遺構・
第16・33・44・51号土坑・
第３・６号焼土址
出土遺物



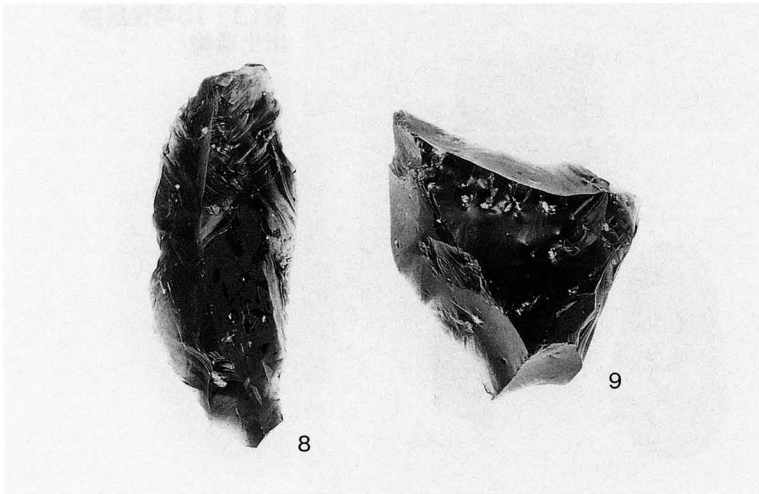
第13・16号住居跡
出土遺物



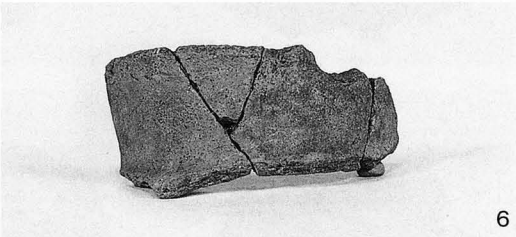
第７号住居跡・
遺構外出土遺物

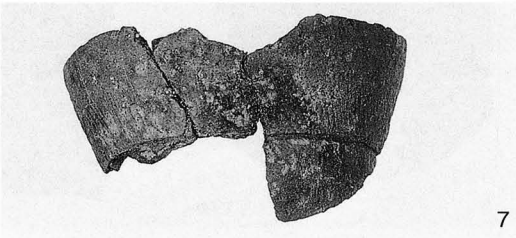


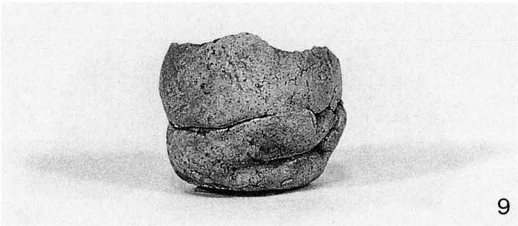
第12・13・16号住居跡・
遺構外出土遺物（最下段・
未実測蛍光X線分析資料）

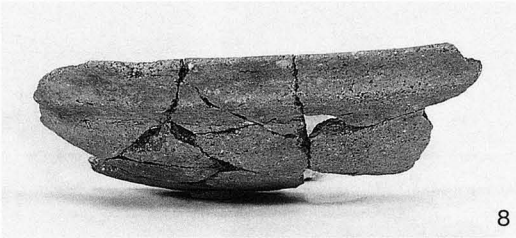


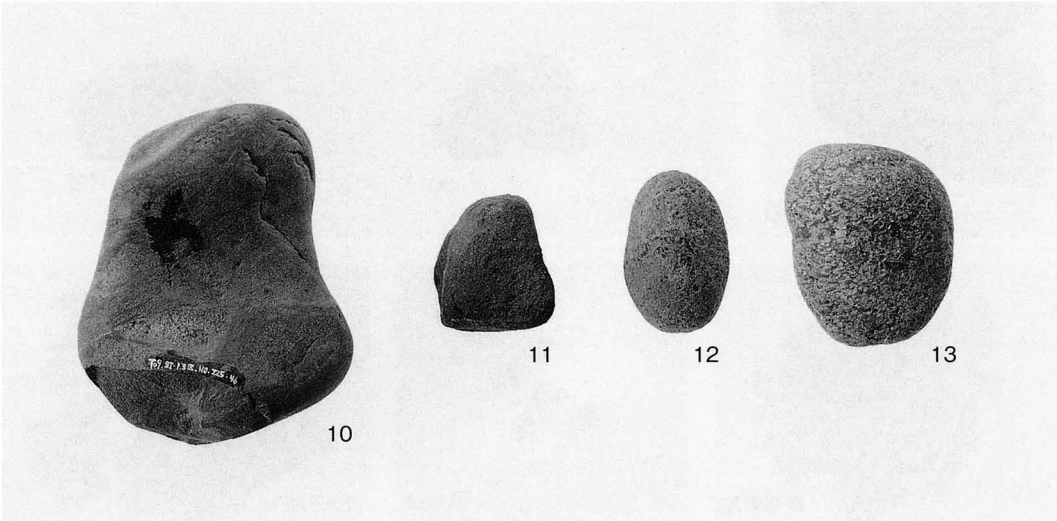
遺構外出土遺物



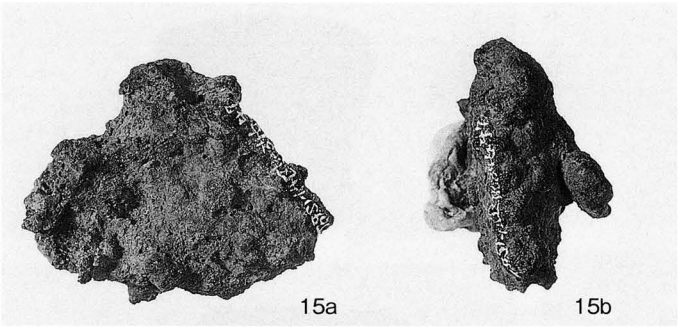


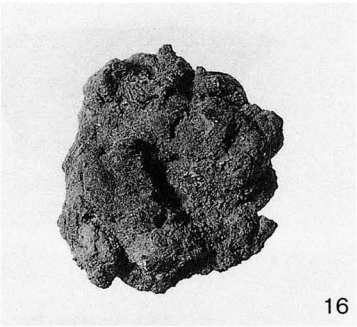


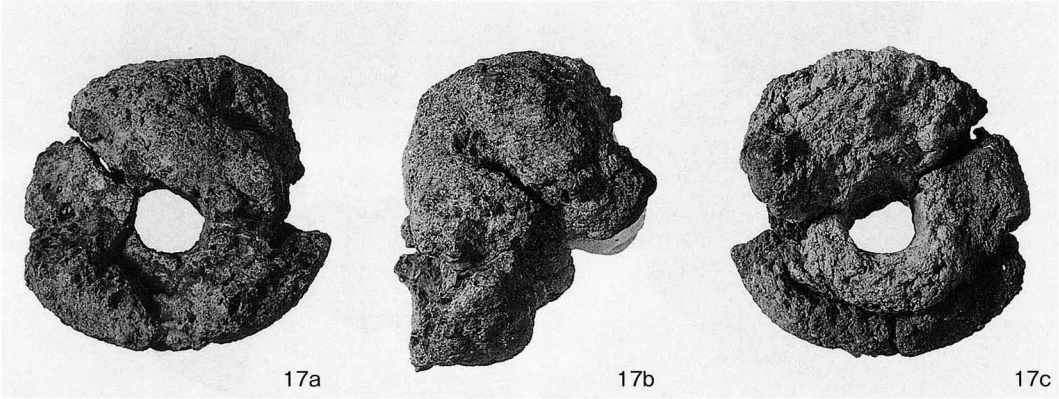


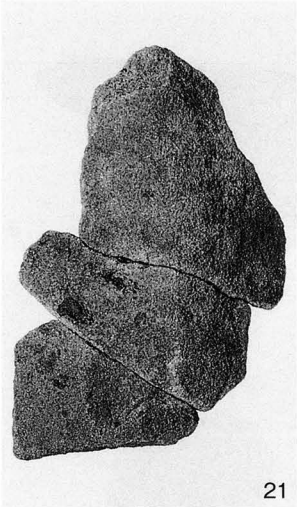


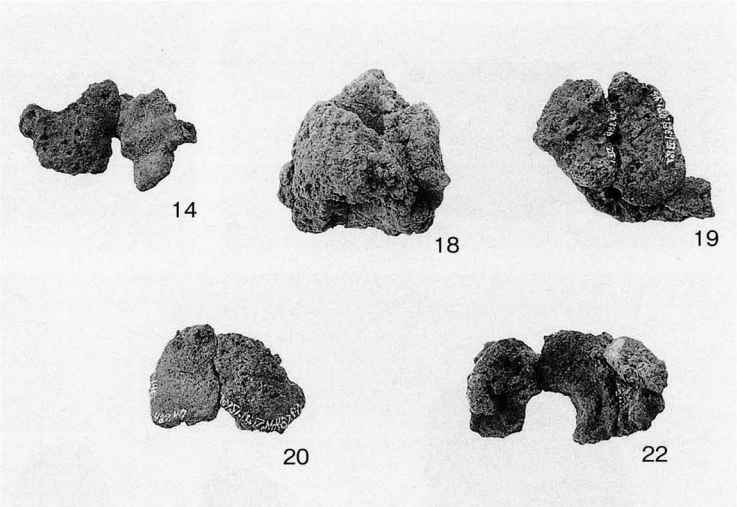
第１号住居跡出土遺物（１）





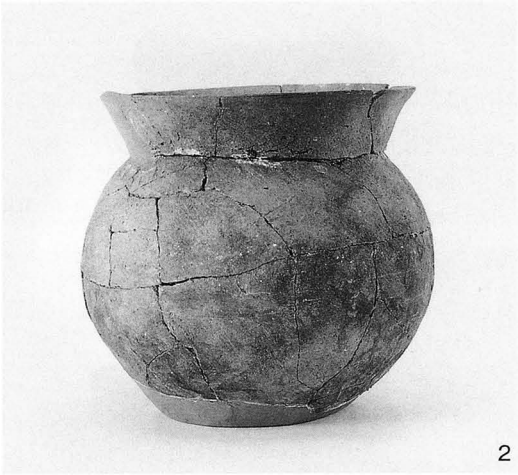






第１号住居跡出土遺物（２）

1


2

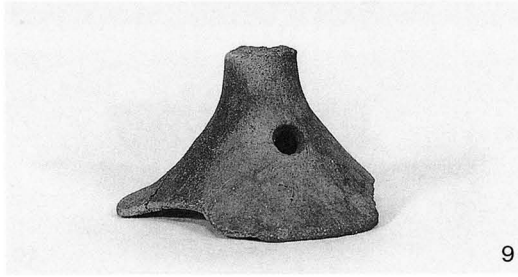
3

4

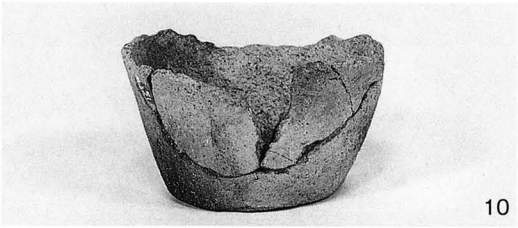
6

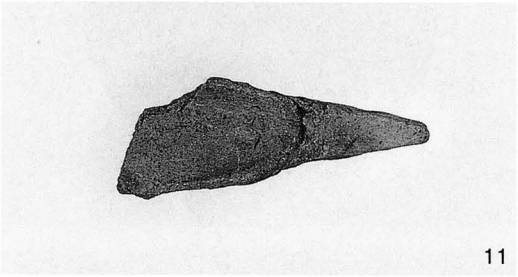
7

8

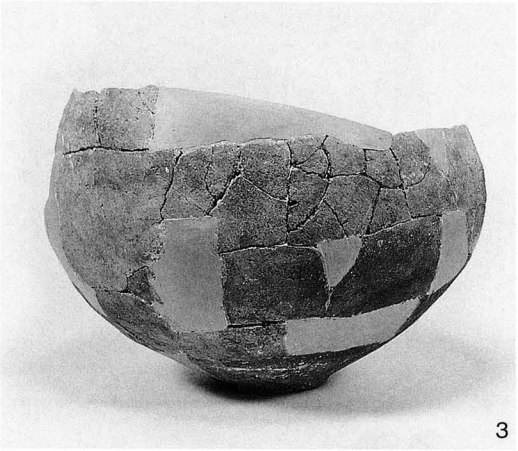

9

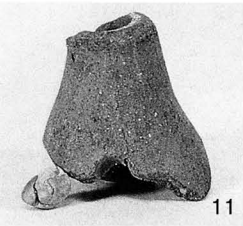
第２号住居跡出土遺物（１）

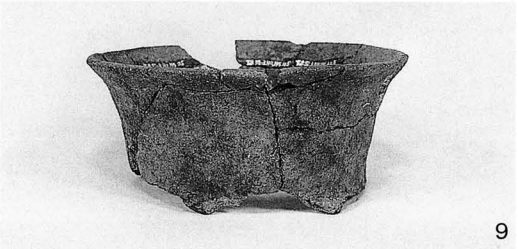


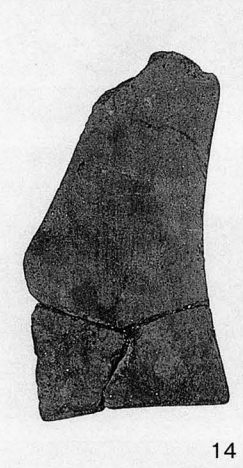


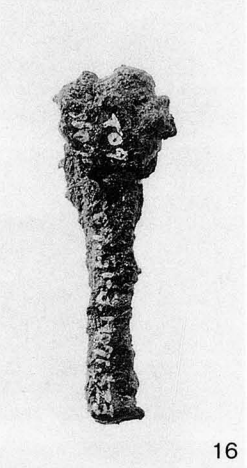
第２号住居跡出土遺物（２）

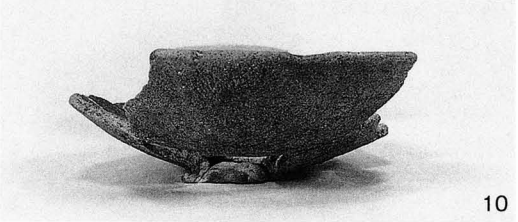


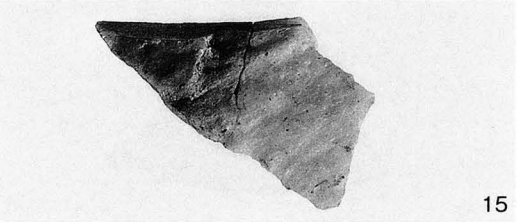




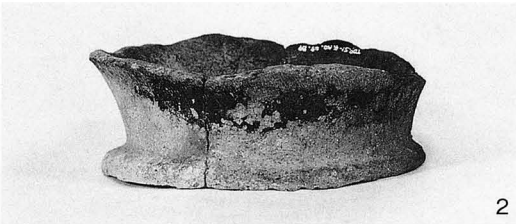


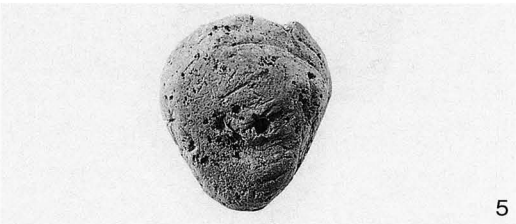


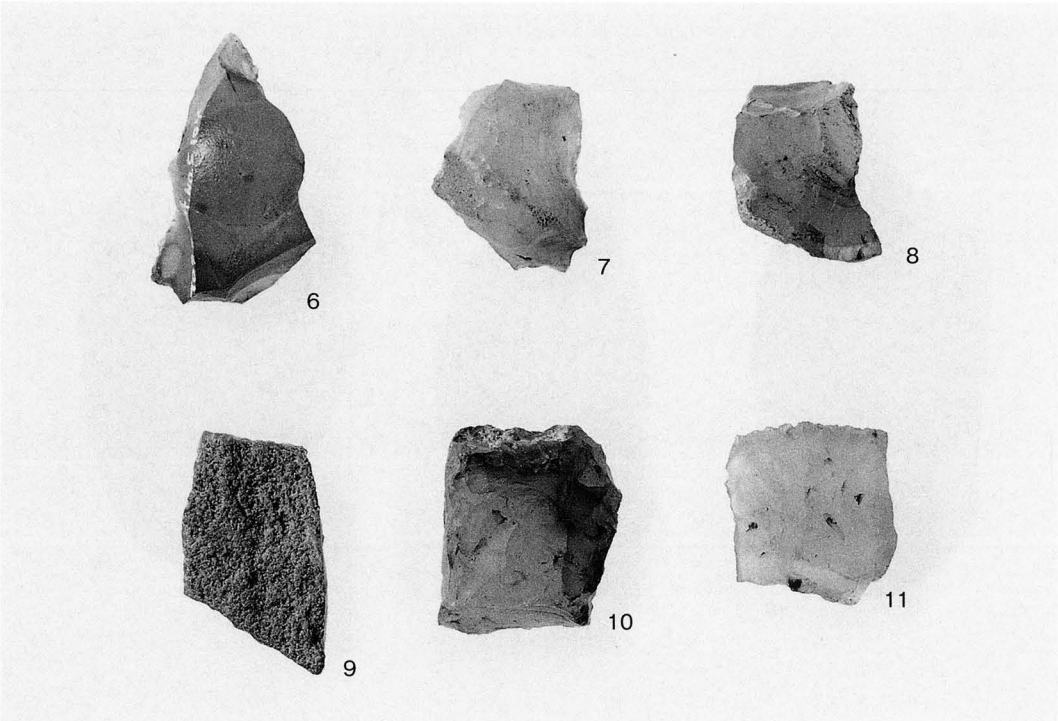




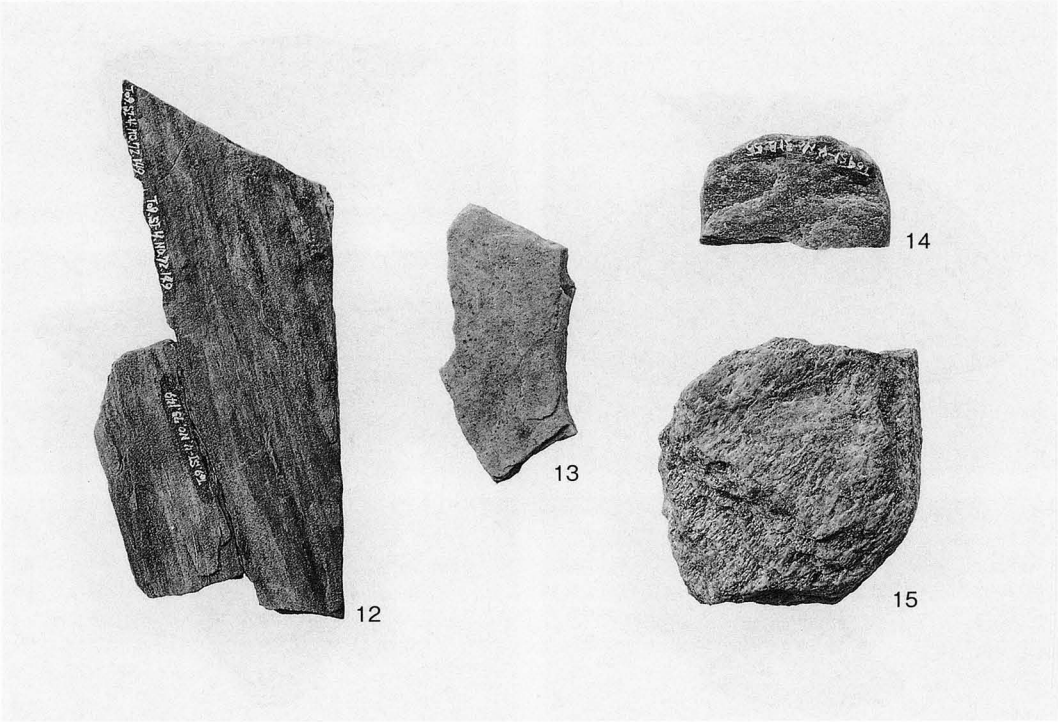
第３号住居跡出土遺物

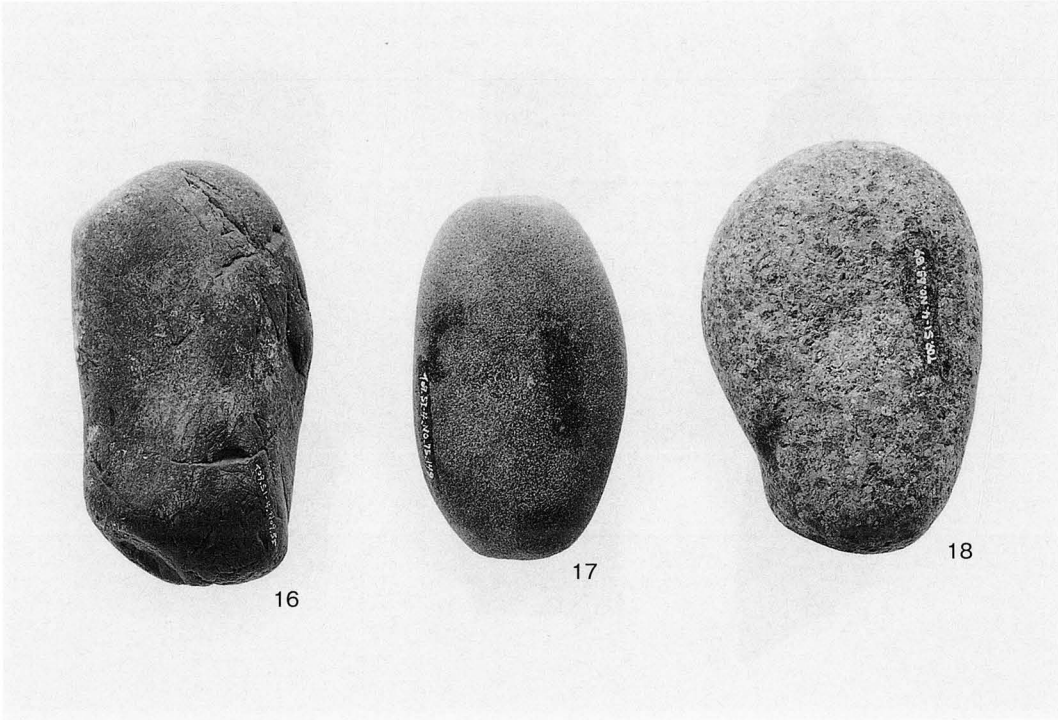






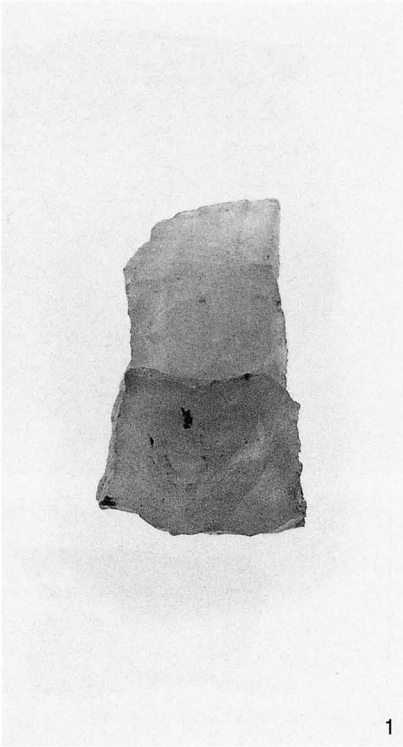
第４号住居跡出土遺物（１）



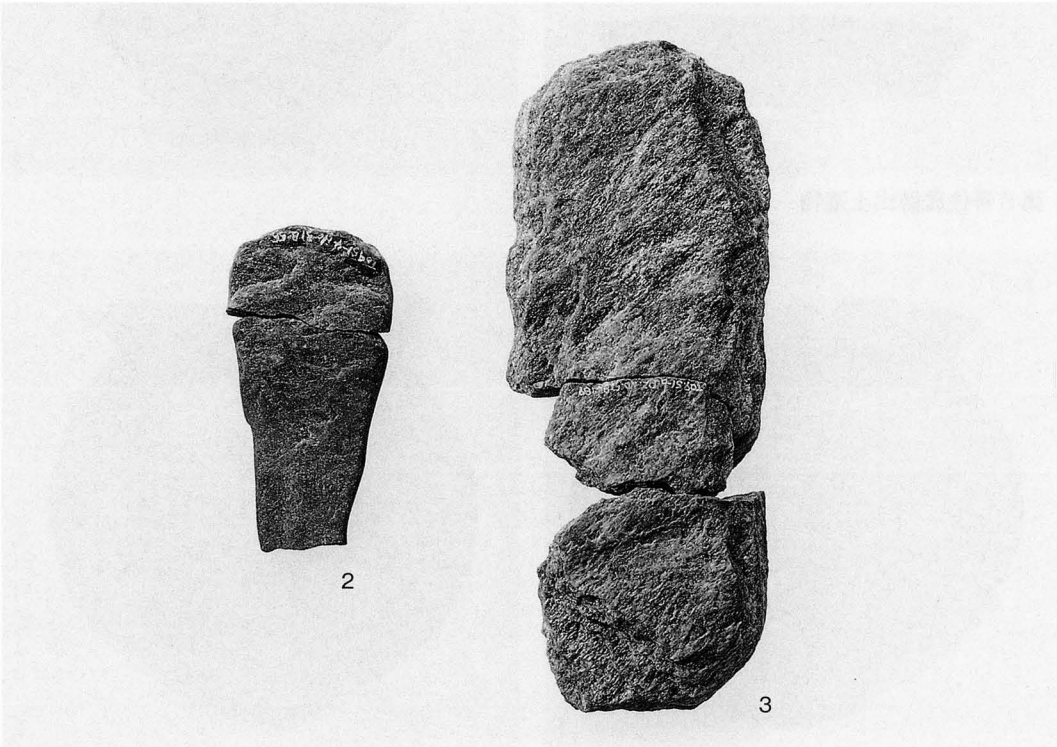


第４号住居跡出土遺物（２）

第４号住居跡出土遺物（３）



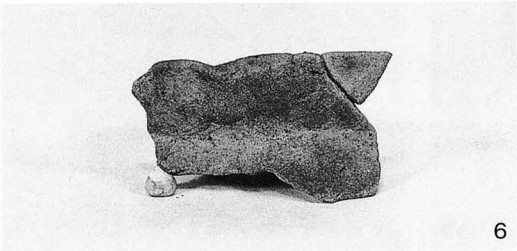
第４・８号住居跡接合資料



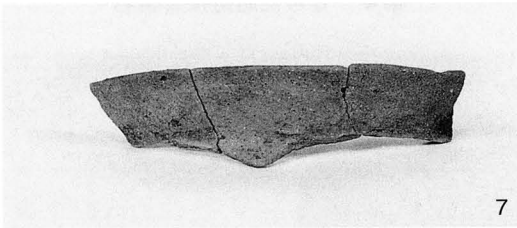
第４・６号住居跡接合資料

1

3


6

4


7

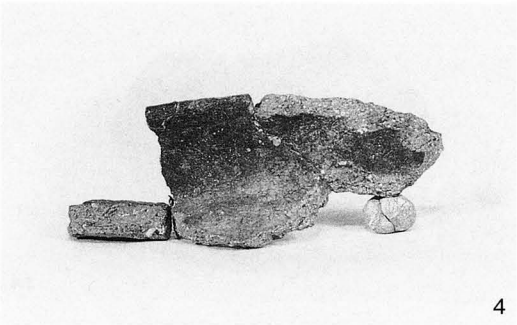
11

第５号住居跡出土遺物

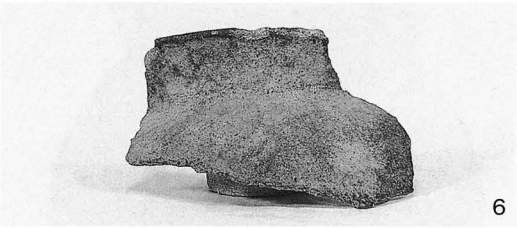
1

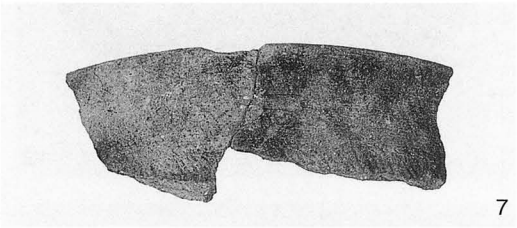
2

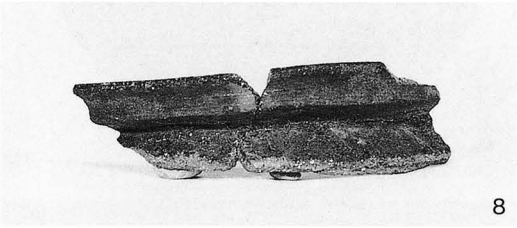
第６号住居跡出土遺物（１）

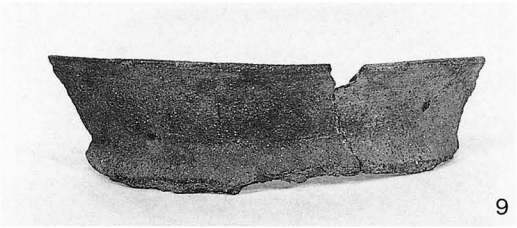

4

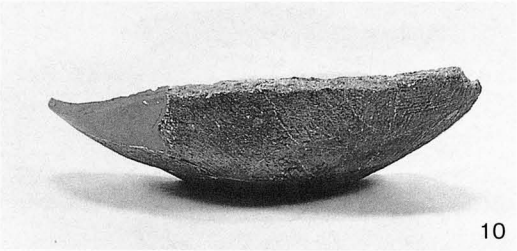
5

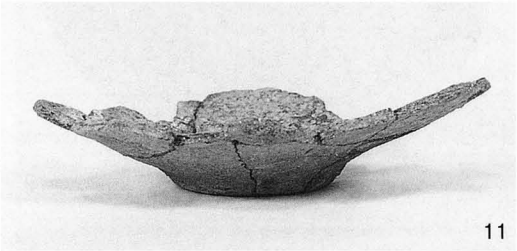

6


7

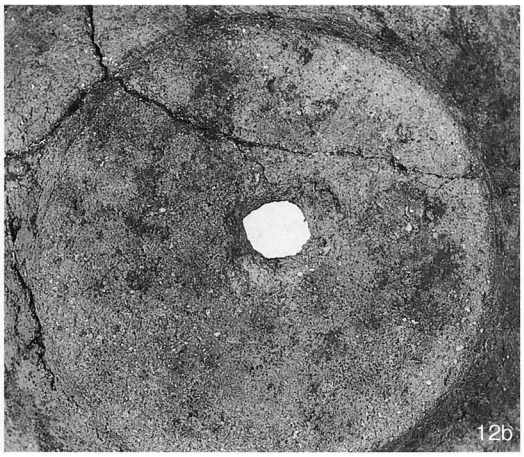

8


9


10


11

12a


12b

第６号住居跡出土遺物（２）

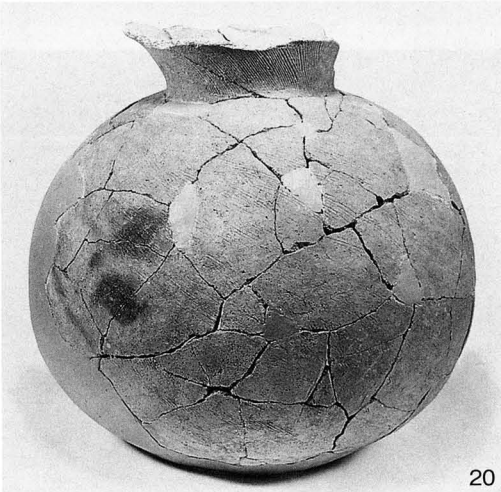
13

14

15

19

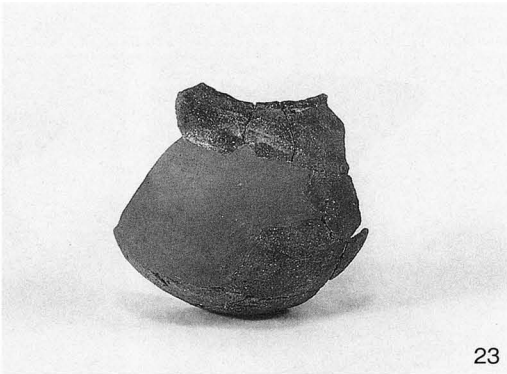
21a

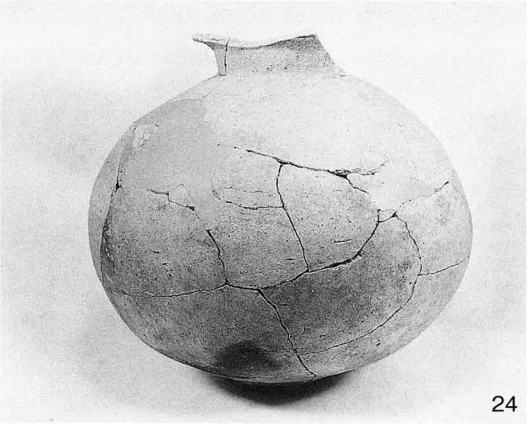

20

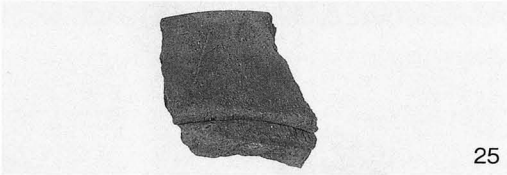
21b

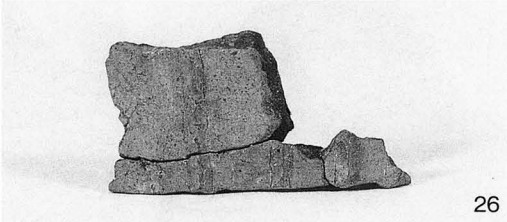
第６号住住居跡出土遺物（３）

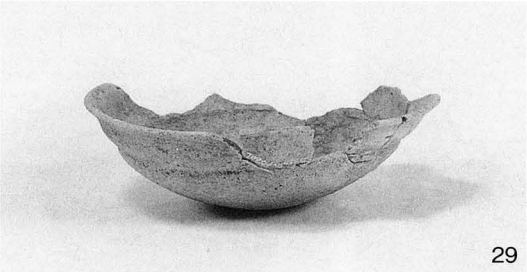
22


23


24


25

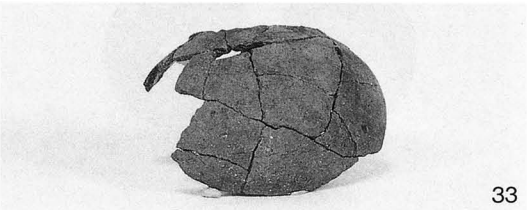

26


29

30

32

34


33

35

第６号住居跡出土遺物（４）

37

38

39

40

42

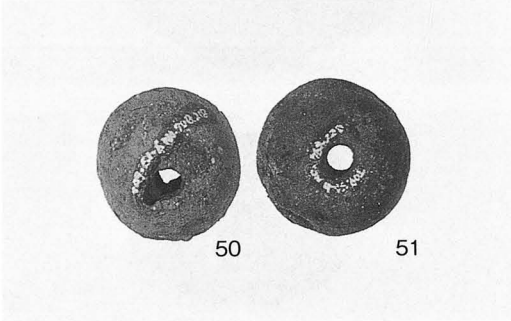
43

45

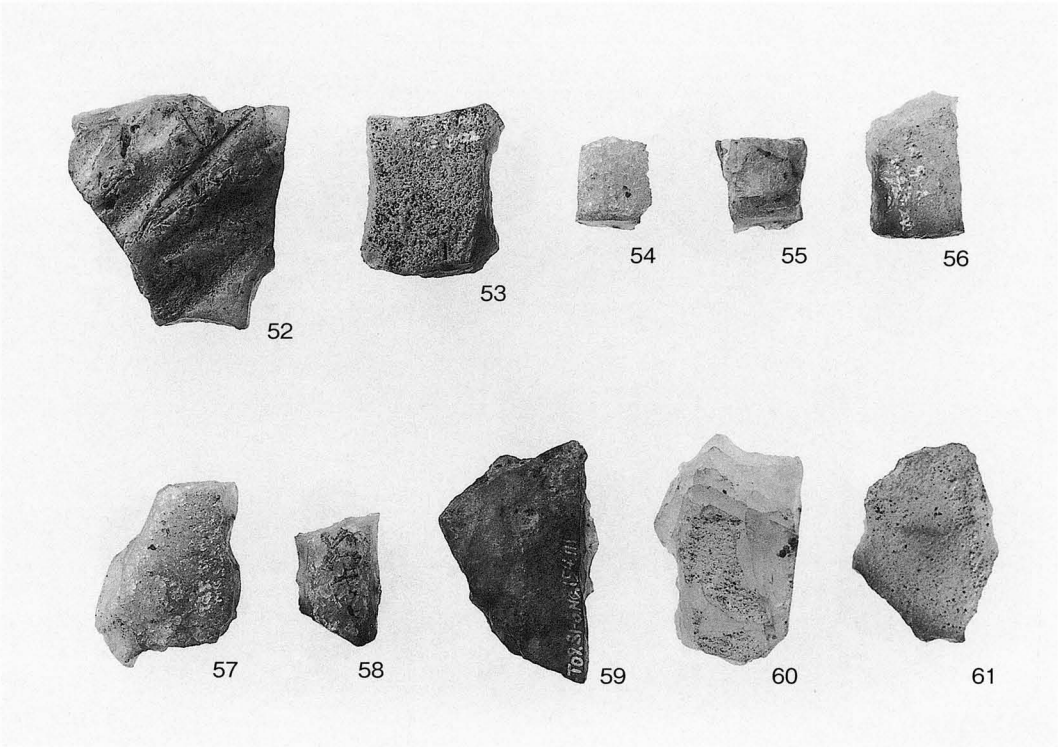
46

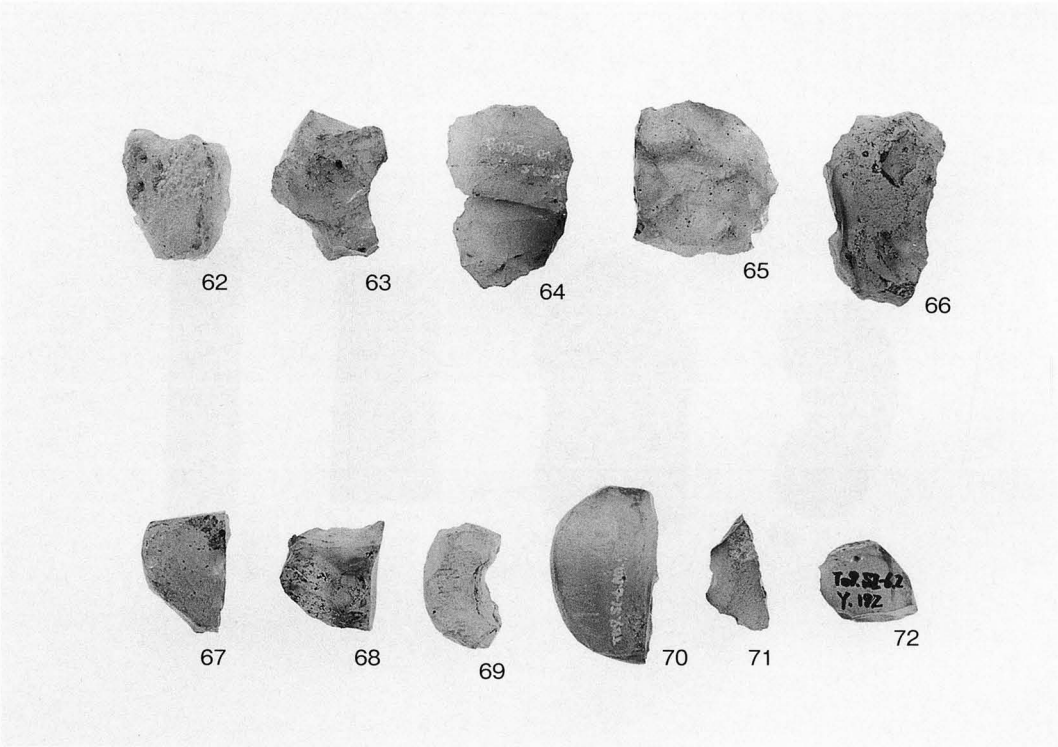
47

49

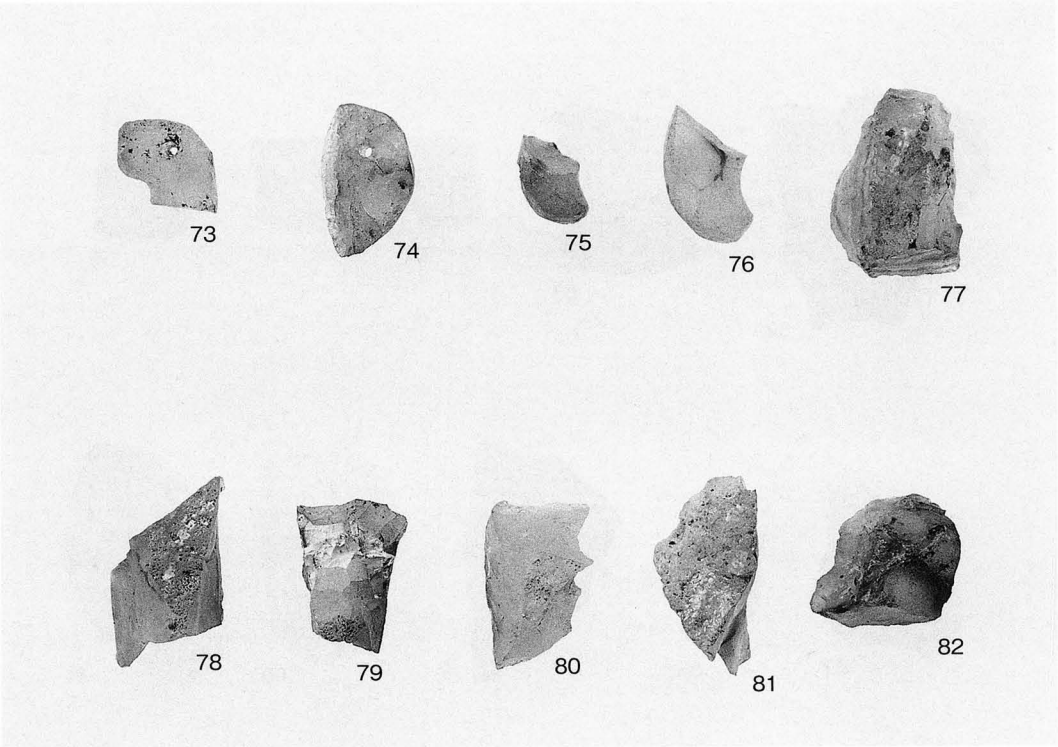

50 51

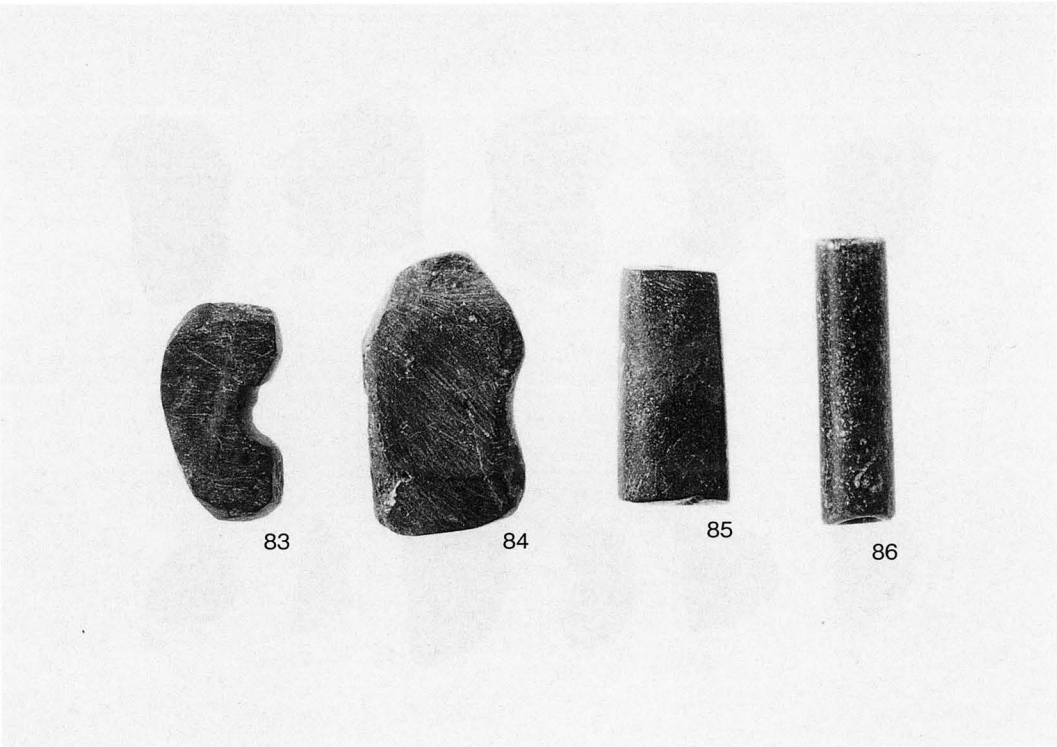
第６号住居跡出土遺物（５）



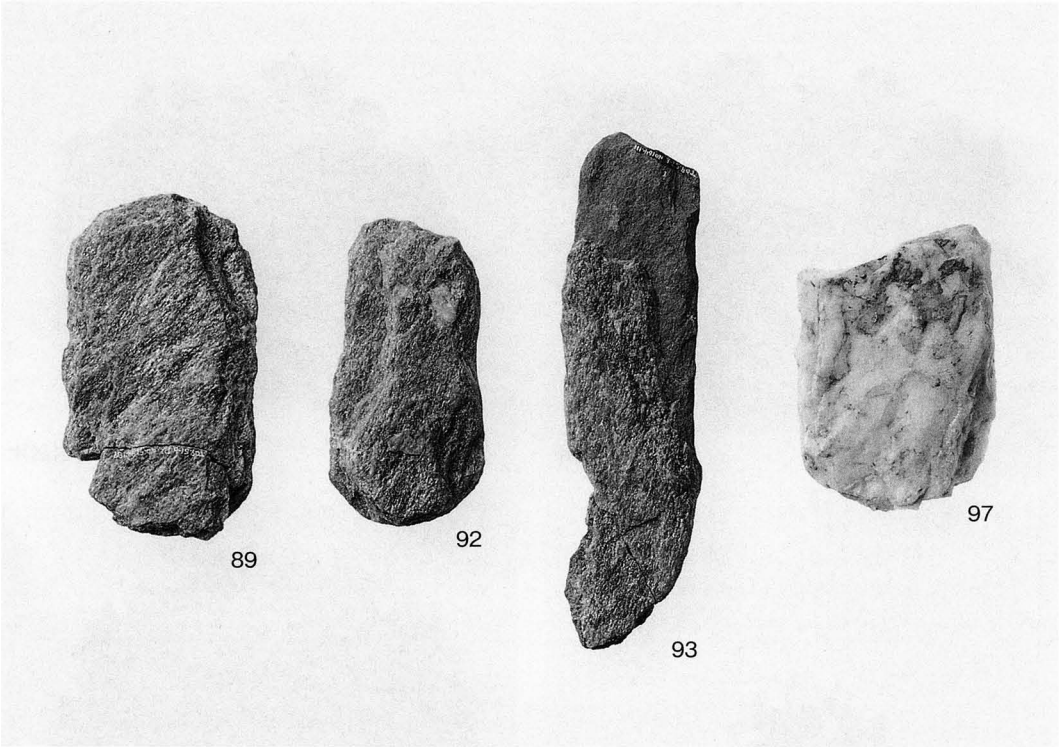


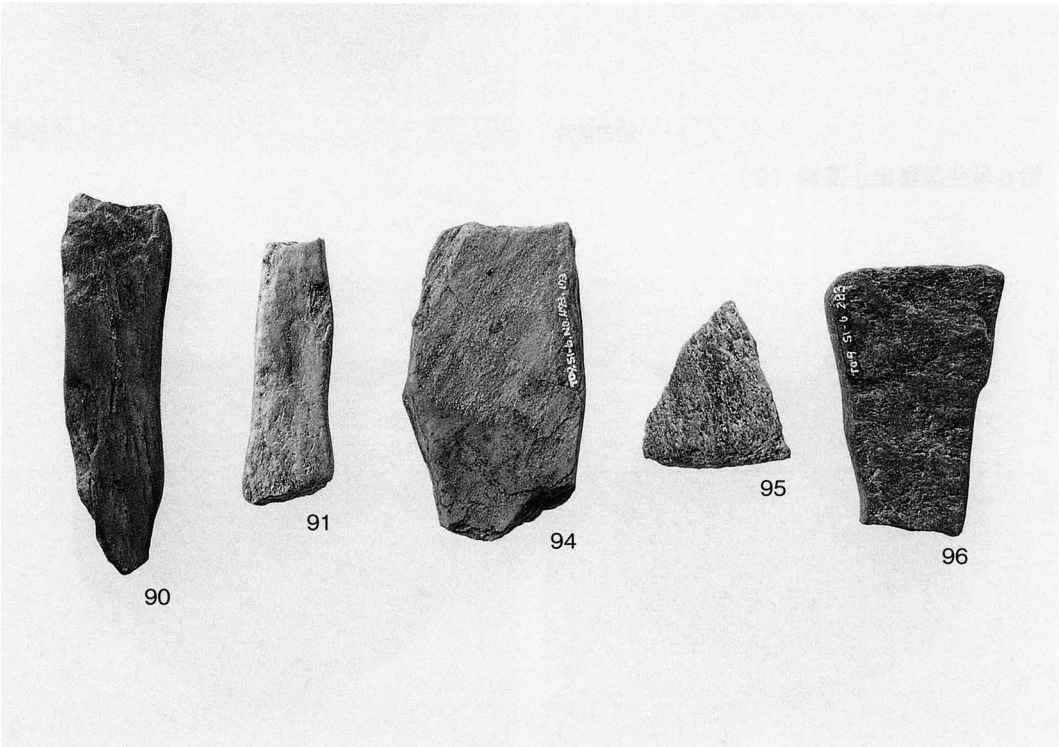
第６号住居跡出土遺物（６）





第６号住居跡出土遺物（７）





第６号住居跡出土遺物（８）

メノウ剥片

片岩剥片

琥珀破片

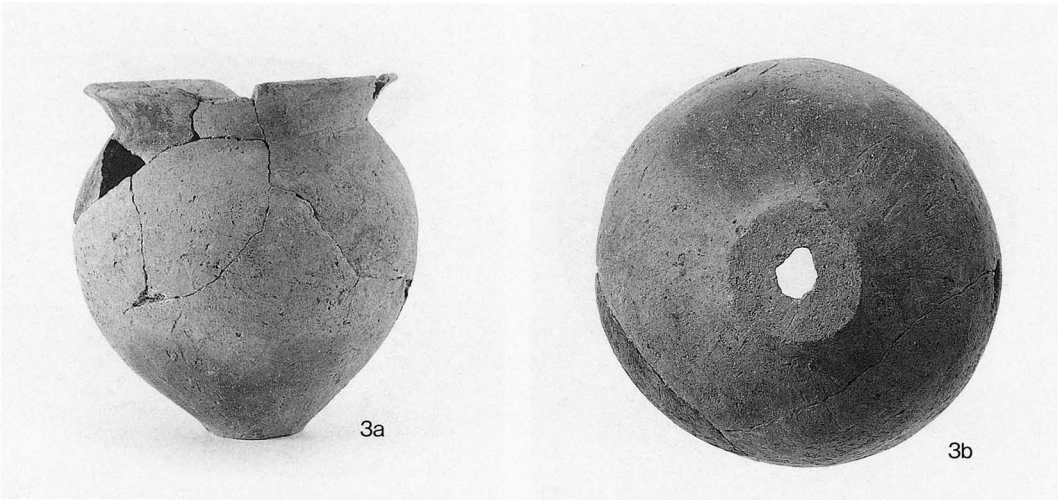
小円礫

第６号住居跡出土遺物（９）

1

2

第８号住居跡出土遺物（１）



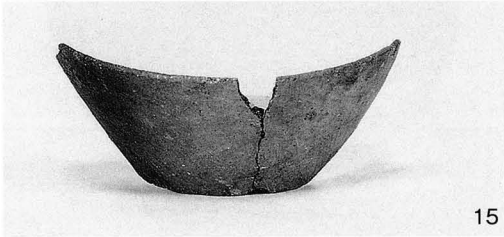
第８号住居跡出土遺物（２）

11

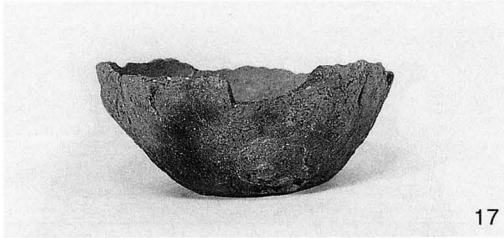
12

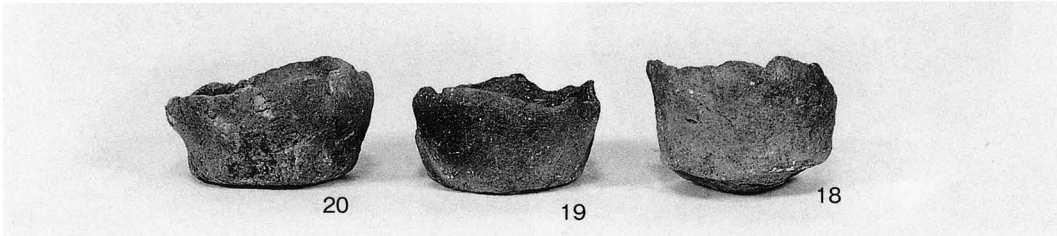
13

14

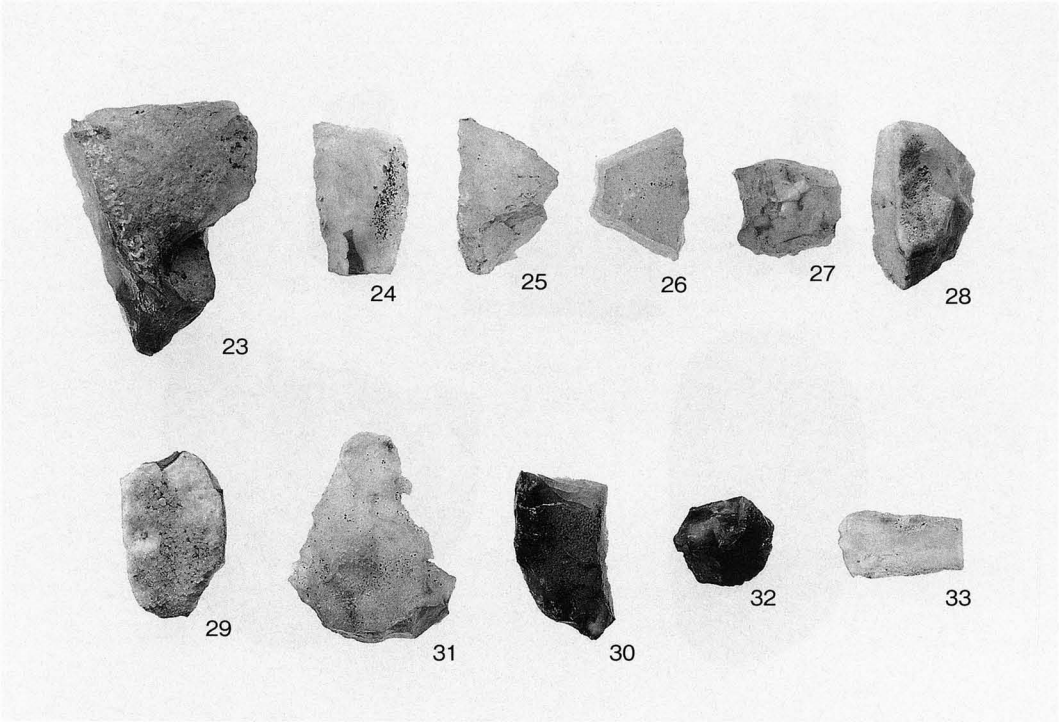

15

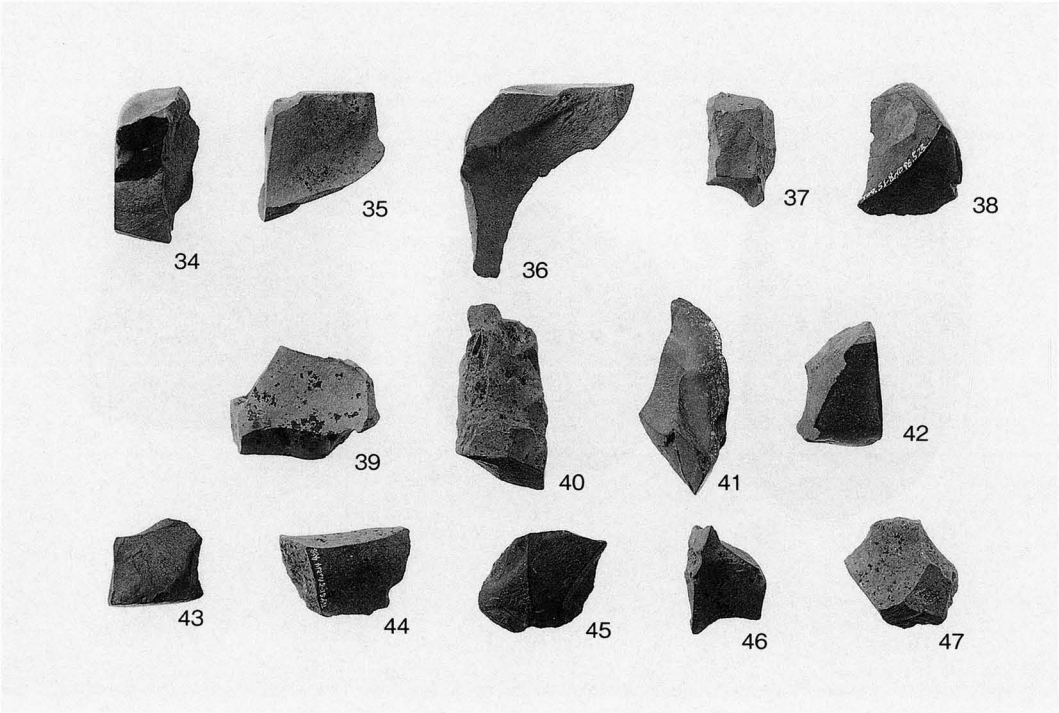
16


17

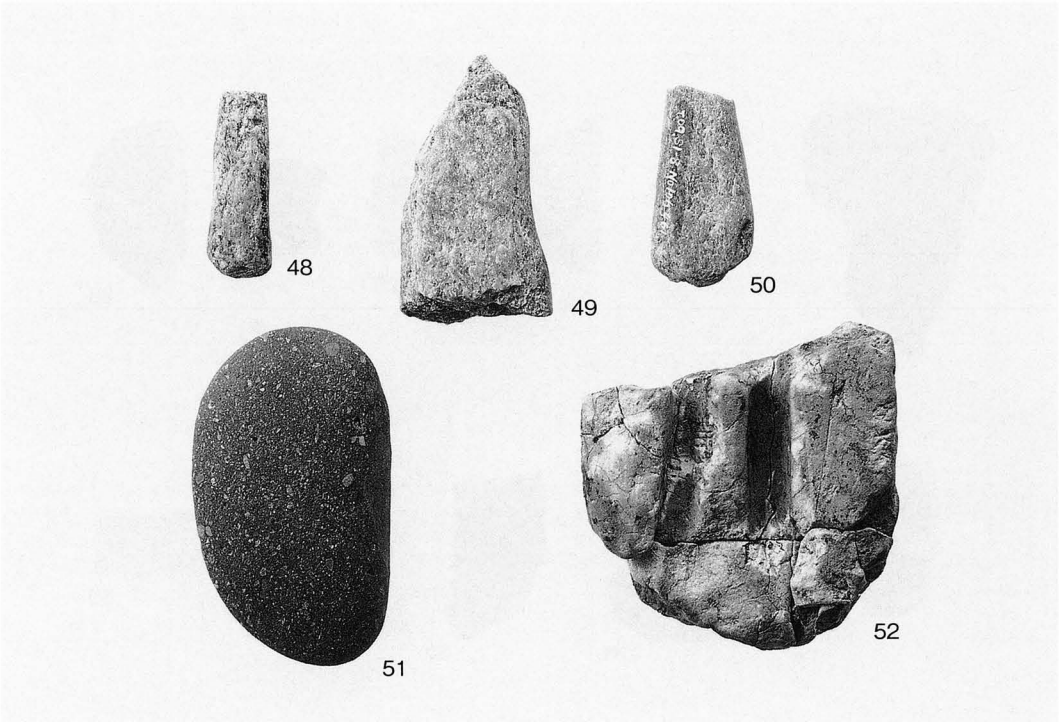


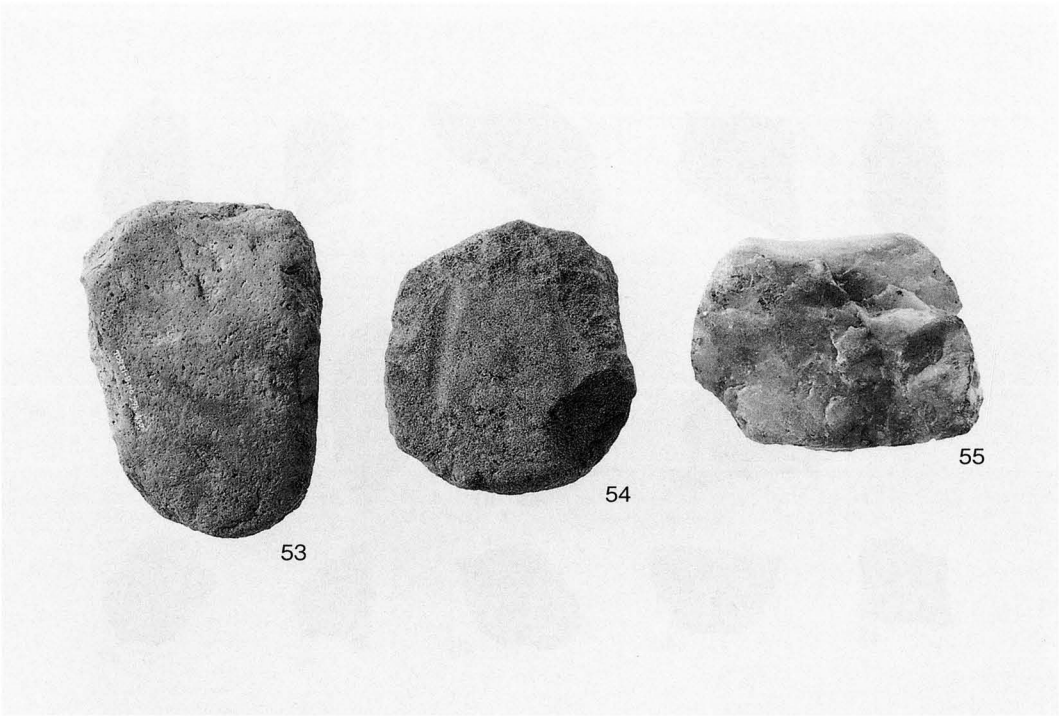
第８号住居跡出土遺物（３）



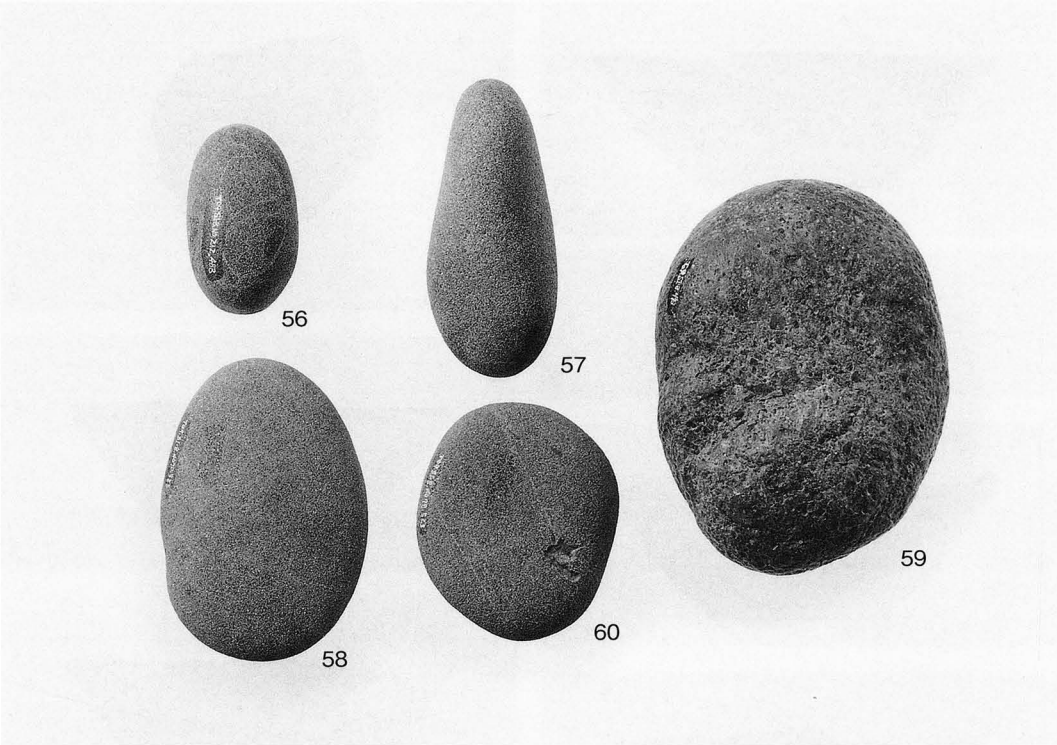


第８号住居跡出土遺物（４）

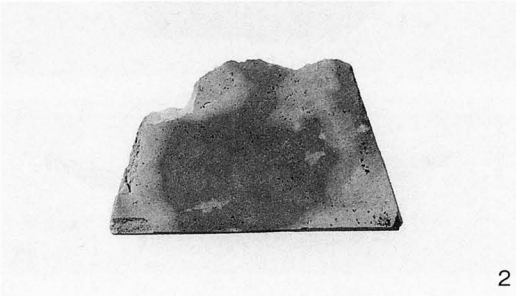




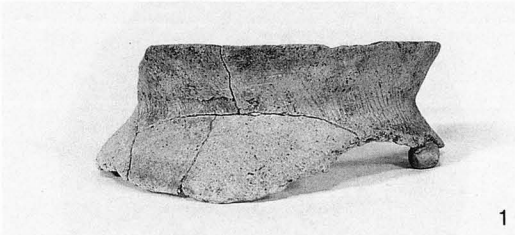
第８号住居跡出土遺物（５）

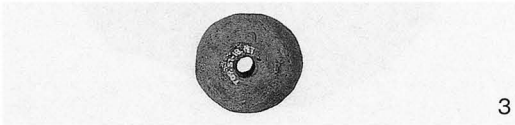


第８号住居跡出土遺物（６）

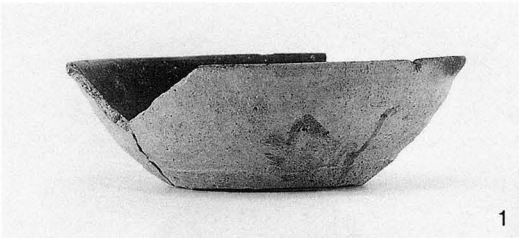


第17号住居跡出土遺物

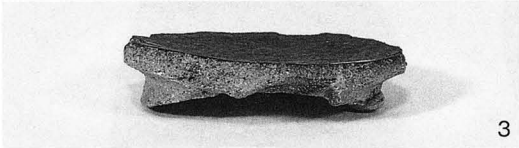




第18号住居跡出土遺物


1

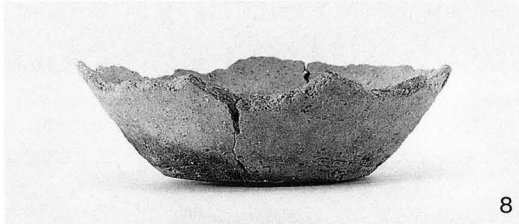
2


3

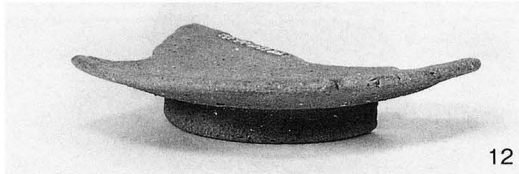
5

6

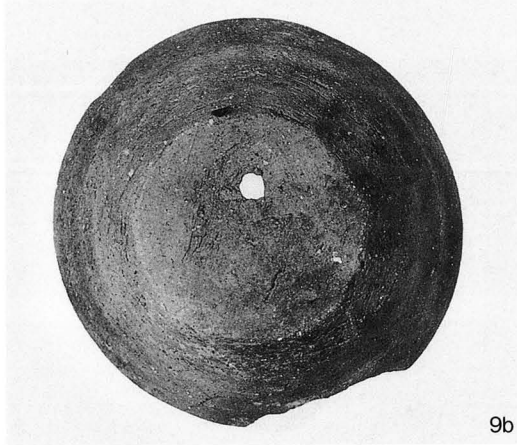
7


8

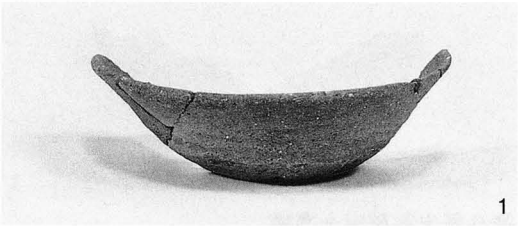
9a


12

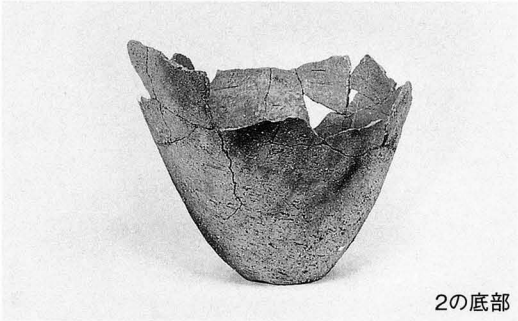
13


9b

第19号住居跡出土遺物



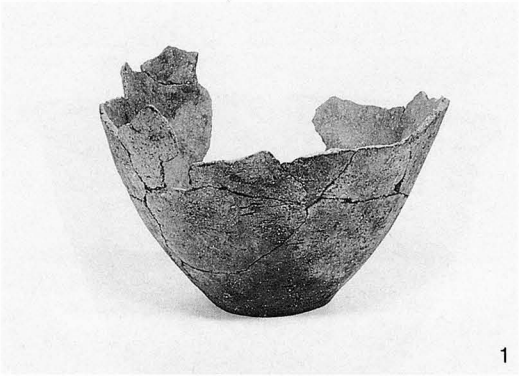
第１号火葬墓出土遺物



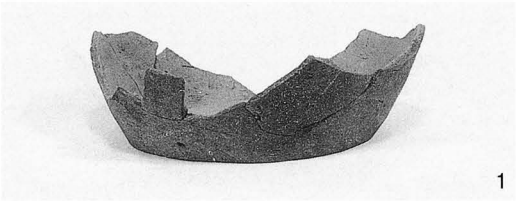
第２号火葬墓出土遺物

第３号火葬墓出土遺物

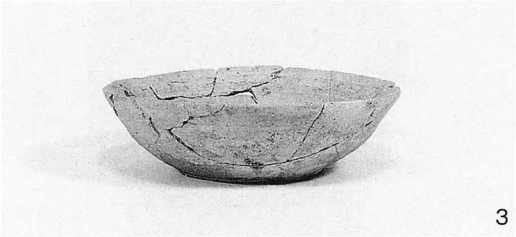
第４号火葬墓出土遺物



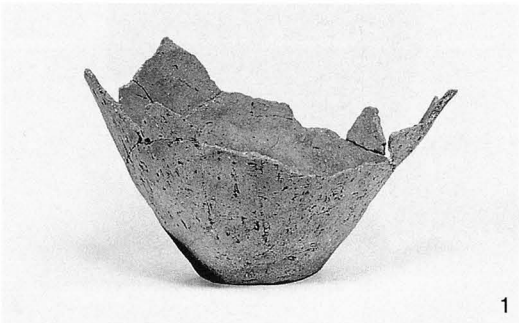
第５号火葬墓出土遺物



第６号火葬墓出土遺物



第７号火葬墓出土遺物



調査区外火葬墓出土遺物

第１号溝出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はちまんわきいせき
書名	八幡脇遺跡
副書名	田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第８集
シリーズ名	
編著者名	塩谷　修　小松葉子　黒澤春彦　吉澤　悟　吉田　匠　関口　満
編集機関	土浦市遺跡調査会
問い合わせ先	〒300-0811　TEL029（826）7111 茨城県土浦市上高津1843番地　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内
発行機関	土浦市教育委員会
発行年月日	西暦2009年（平成21年）３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積	調査原因
八幡脇遺跡（はちまんわきいせき）	土浦市沖宿町（つちうらしおきじゅくまち） 字八幡脇（あざはちまんわき）2696 外	08203	339	36度 4分 42秒	140度 15分 31秒	1991（平成3）年 10月21日～ ２月12日	約8,700㎡	土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡脇遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡６軒、竪穴遺構１基、土坑38基、土器埋設遺構３基、集石２基など	縄文土器、石器、土製品	本遺跡からは縄文時代中期と古墳時代前期の集落跡が確認された。特筆すべきは古墳時代前期の竪穴住居跡のうち１軒は鍛冶工房跡で、３軒は玉作工房跡であった。 平安時代には墓域として土地利用され、火葬墓が７基検出され、このうちの１基は灰釉陶器の短頸壺を骨蔵器にしていた。
		古墳時代	前期の竪穴住居跡９軒（内１軒は鍛冶工房跡、３軒は玉作工房跡）、竪穴遺構１基	土師器、鍛冶関連遺物（鞴の羽口、金床石破片、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓）、玉作関連遺物（メノウ製勾玉等の未製品、砥石、石器）など	
		平安時代	竪穴住居跡１軒、火葬墓７基、溝跡１条	須恵器、土師器、灰釉陶器、墨書土器	

要約

本遺跡から検出された遺構・遺物の中心は、縄文時代と古墳時代そして平安時代である。縄文時代には中期後半の加曽利Ｅ３式期からＥ４式期の集落跡が形成された。古墳時代には前期の集落跡が形成され、集落内には竪穴住居跡を利用した鍛冶工房跡１軒と玉作り工房跡が３軒確認された。この鍛冶工房跡は茨城県内でも最も古い調査事例の一つで、遺構内からは鍛冶炉や鍛冶関連遺物が検出されている。玉作工房跡ではメノウ製勾玉を中心に生産がなされ、破損品や未製品が検出される一方、滑石・緑色凝灰岩・琥珀製玉類の生産も行っていた様子が判明した。そして、玉類の生産には欠かせない道具類も豊富に出土した。古墳時代のメノウ製勾玉生産では、市内烏山遺跡とならび東国において最も古い調査事例といえる。

平安時代には遺跡内が墓域化し火葬墓７基が検出され、このうちの１基は灰釉陶器短頸壺を骨蔵器とするものであった。この骨蔵器は土師器坏・高台付坏・鉢によって三重に蓋がなされており興味深い事例といえる。

八幡脇遺跡

―田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

第８集

発　行　日　2009年３月31日
編　　集　土浦市遺跡調査会
発　　行　土浦市教育委員会
問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300－0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029（826）7111
印　　刷　㈱あけぼの印刷社